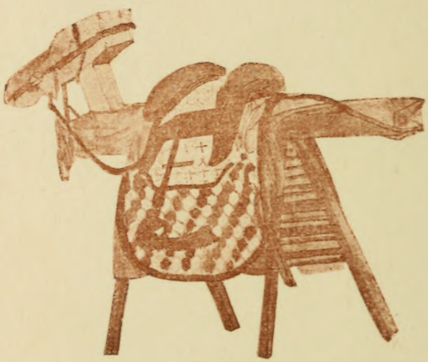




美妙選集

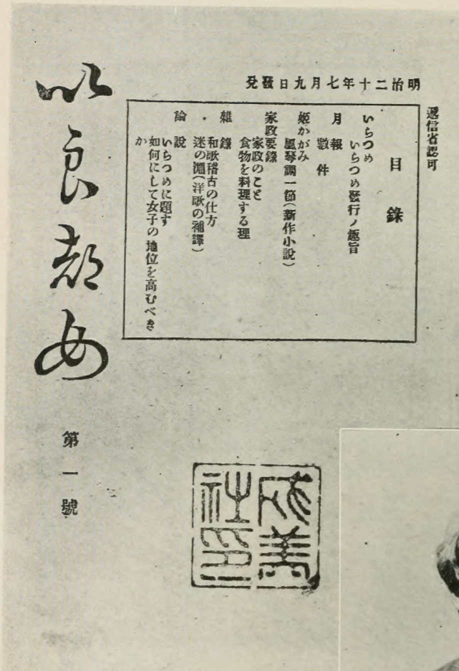
(上巻)

柳田泉
盬田良平 編
小泉苳三



立命館出版部

本文校訂　塩田良平　柳田泉
小泉苳三　仲　賢禮
校正責任　丹羽琢也


いらつめ

第一號

明治二十年七月九日發兌

遞信省認可

目録

いらつめ
いらつめ發行ノ趣旨

月報
數件

姫かがみ
風琴調一節（新作小説）

家政要録
家政のこと
食物を料理する理

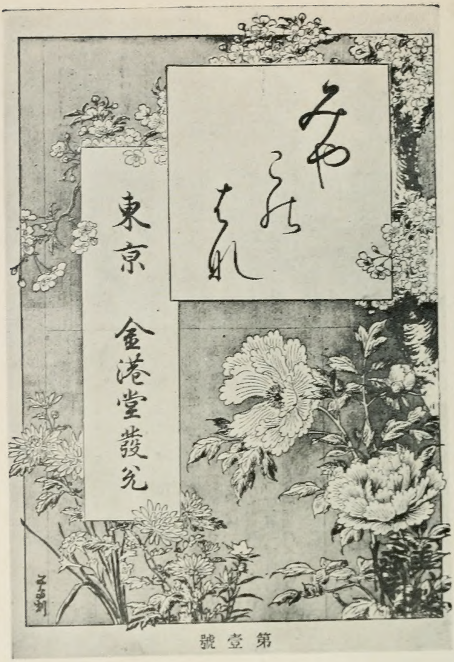
雜録
和歌稽古の仕方
迷の潤（洋歌の補譯）

論説
いらつめに題す
如何にして女子の地位を高むべきか

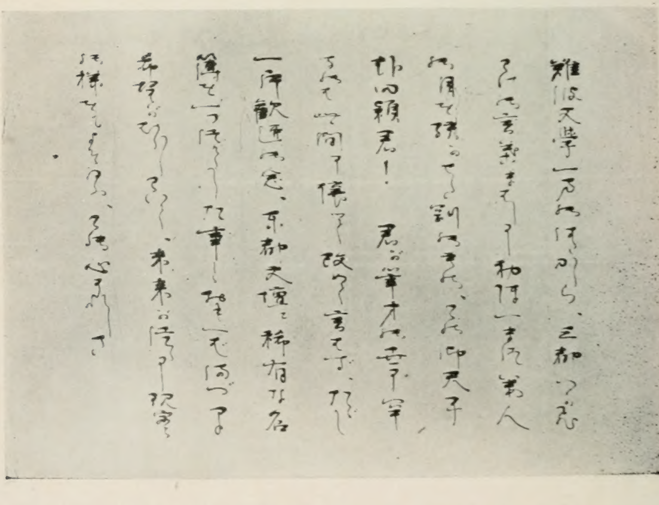
いらつめ第一號
（美妙舊藏 立命館大學藏）



美妙（二十三歳）



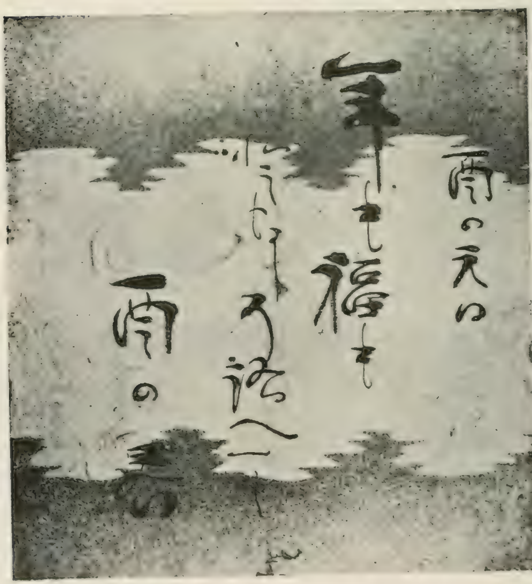
みやこの花第一號
（美妙舊藏
立命館大學藏）



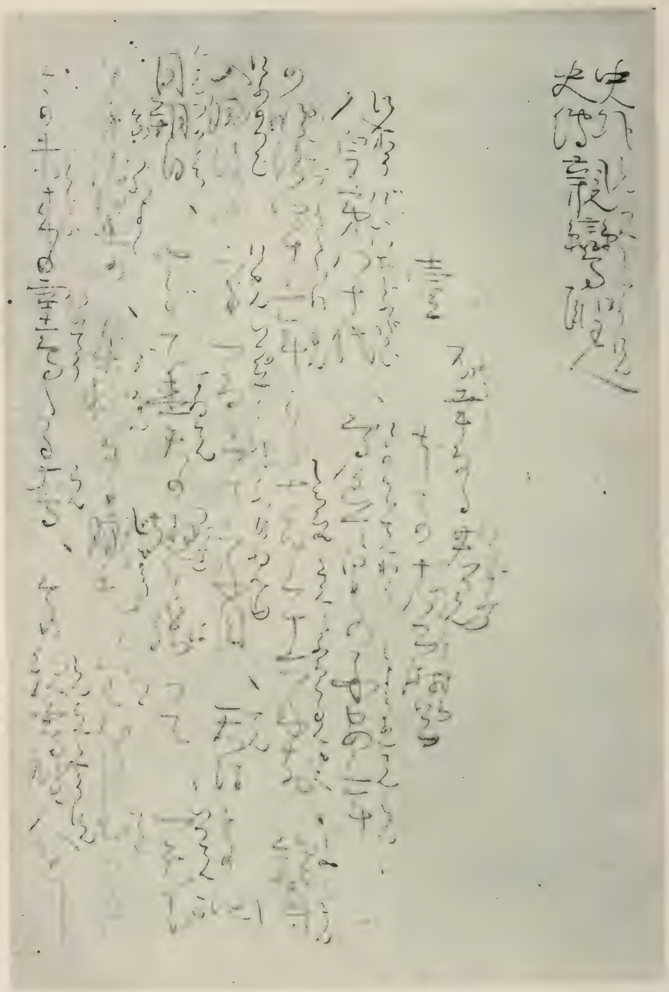
美妙筆蹟
（立命館大學藏）



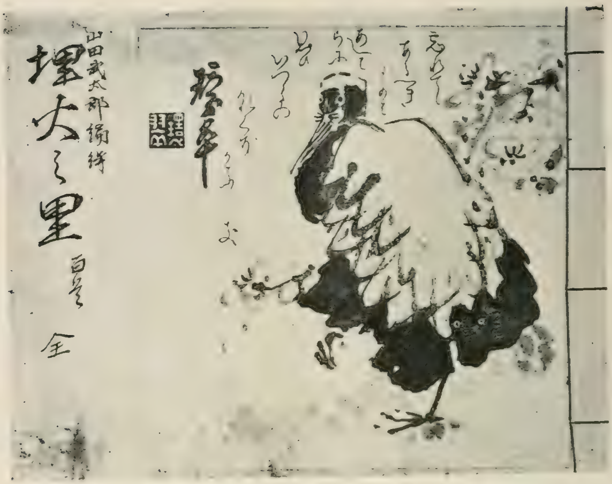
夏木立（立命館大學藏）



美妙筆蹟（立命館大學藏）



[illegible][illegible]寧人（原稿）



埋火之里（美妙自筆本 立命館大學藏）



美妙と其妻

美妙選集

美妙選集總目次

上卷

下卷

美妙選集　上巻

「いらつめ」と言文一致

――序に代へて――

中川小十郎

一　雜誌「いらつめ」の發行

昭和九年一月發行のリーフレット明治文學に雜誌「いらつめ」の文學年報が掲載され可なり委しく說明されて、「元來婦人雜誌として先端を切つたもので、獨り言文一致文獻の上のみならず、雜誌編輯の上からも先驅的のものであつた」と述べられて居る。その「雜誌編輯の上からも先驅的のもの」と云ふ意味は能くは分らないが、明治二十年の七月にその第一號が發行されたのであるから、本年で四十七年、約半世紀も經て來て、その文學年報が新らしく發表されたのを見て、この雜誌の發行についても、亦この雜誌に始めて載せられた山田美妙齋氏の言文一致の小說についても私は最も深い關係を持つ一人であつて、當時の事情を能く承知してゐるのであるから、文壇人諸君の參考になるかも知れないと思うて、玆に私の記憶に存してゐる大要を記述するのである。

雜誌「いらつめ」が始めて發行された當時の同人は、つい近い頃樞密顧問官で亡くなられた岡田良平氏、極最近樞密院議長に就任された一木喜德郎氏、又長い間の東京美術學校長であつた正木直彦氏、「趣味の日本史」の著者として知られてゐる新保磐次氏、美妙齋として世に盛名を遺してゐる山田武太郎氏と、そしてこの一文を書きつゝある所の私

とであつた。元來一婦人雜誌として世に出たのであつたけれども、當時の關係者としての本意は、この頃正にその頂點に達してゐた歐化主義に對して、國民的の是正反省を促さんがために、先づ婦人問題をとらへて、世の注意を喚起せんとするにあつた。蓋し明治二十年と云へば維新以來世の風潮を席卷しつゝあつた歐化主義が獨り天下に横行してゐた時代であつて、その勢ひの赴く所、何によらず日本固有のものは先づ劣等なものとして排斥せられ、歐米のものと云へば何でもかでも優等なものとして尊重されたのであつた。併しかゝる形勢の下には又力强い反動の氣運が起つて來るのは當然であつて、學窓の青年であつた我々も亦この氣運に動かされる所となつて、自分等の力の程も顧るに遑なく相謀つてこの「いらつめ」なる婦人雜誌を發行するに至つたのである。丁度同じやうな思想を以て「日本人」なる社會的の評論雜誌もこの頃に世に出たのであつたが、この「日本人」と私共の「いらつめ」とはその內部の事情に於ては一脈の相通ずるものがあつたのである。それは「いらつめ」の趣意書が出來た時、先づ第一に杉浦重剛先生の許へ持參してその批評を求めたのであつたが、其後六ケ月經て先生門下の諸君の手で「日本人」が生まれ、私共の方で「いらつめ」が出來て、共にこの反動の氣運に乘じて第一線に立つたのである。「いらつめ」に名譽贊助員として杉浦先生の名前のあるのもこんな事情があつたからである。その主義とする所に無論保守的ではあつたが、多少新らしい學問をなしつゝあるものとしての保守主義であつたから、私共は自ら新保守主義を以て自稱してゐたのであつた。

「いらつめ」發行の當時、岡田氏はまだ東大文科の哲學科學生であつて、一木氏は法科の政治科學生であつた。そして正木、山田の兩氏と私は大學豫備門の生徒であつて、獨り新保氏は已に一人前の人であつて、金港堂編輯所の一員であつたと覺えてゐる。そしてこれらの仲間はどう云ふ關係であつたかと云へば、岡田、一木の兩氏と私は中川謙二郎先生の書生をやつてゐたものであり、新保氏は新潟學校の出身者として又中川先生の門下であつたから、六人中の

四人は同じ因縁に結ばれてゐたのであつて、正木氏と山田氏とは私と同窓の關係であり、而も正木氏と私とはその少し前に森文部大臣が大日本教育會を通じて提出された、「男女の文體を一にする方法」なる懸賞文に對して、兩人連名で出した答案が採用されて一等賞を受けた關係があつたのであり、そして私共兩人は答案論文の趣旨であつて言文一致の文體を世に擴めんと欲して夙に文章家を以て我々が認めてゐた山田氏を引き入れて「いらつめ」の同人たらしめたのであつた。だから今日から見れば、「いらつめ」には確に二つの要素があつた。その一は社會的問題の見地から女子教育を論ぜんとする婦人雜誌の本領と、他の一は小說の手段に依りて言文一致の文體を世に擴めんとする希望とであつた。今日「いらつめ」を以て山田美妙齋氏の言文一致體の單なる機關であつたと認むるもの丶あるのも全く誤つてゐると云ふ譯ではないのである。唯我々同人の意見としては前者が眼目の主であつて、言文一致の小說を揭げたのは從であつたのである。世間から言文一致の小說が受けられて、これに依りて我々の意見が又世に受けらるゝことゝなるならば、これに越した仕合せはない位に考へてゐたのであつたが、却つて後には「いらつめ」は山田氏一己の機關の如く思はれ、言文一致の小說を以て知られ、そしてその意味にて約半世紀後の今日に於て、文壇人の間に問題とさるゝに至つたのである。その結果から見れば發行當初の計畫的の意味は顚倒されてしまつたのである。今よりこれを顧みれば無理ならぬことである。實は「いらつめ」は非常な期待をもつて世に出されたのであつたが、事實は案に相違してその販賣部數の如きも一百部を出るか出ない位のものであつたので、元來十分な準備もなしにやつたのである上に、更に賣れないのであつたから、これを持續する方法もなく、止むを得ずこれを山田氏一己の手に委し、六かしい議論は全然しないことにして、單なる小說雜誌として、山田氏が引續き言文一致體の小說をその誌上で發表してゐたのであるから、今日になつて「いらつめ」と山田氏の言文一致とを同一視するに至れるのも實は無理ならぬことゝ云ふべき

である。リーフレット明治文學の記者がその意味は能くは分らぬにしても「言文一致文獻の上のみならず、雜誌編輯の上からも先驅的のもの」であつたと云つて、言文一致關係の外に何か或物があつたやうに說明してゐるのは寧ろ餘程同情のある見方である。

女子教育の機關としての「いらつめ」は、その第一號に社說を掲げて、同人の意見を發表してゐるが、この要點はやはり當時一部の人に依りて考へられてゐた、採長補短の意味を主として、而もこれを爲すには漸進的ならざるべからずと云ふに在つて、實は何等新らし味はなかつたのではあつたけれども、その頃の雜誌として、一個婦人の讀むべきものとしての社說として、少しく分に過ぎたものであつたやうである。この社說の代表する所の分にすぎたものであつた一事は則ち雜誌「いらつめ」が當時世間から受けられなかつた所以であつて、今日になつて私等が再びこれを讀んで見て何等遺憾を感じない位のものである。この社說は一木氏が起草されて、それに岡田氏が加筆せられたやうに記臆して居る。當時私共はこれを讀んで以て世間を惹きつけるに足ると思つたのであつた。これは岡田氏や一木氏が大に出世されたからさう云ふのではない。時代の青年思想の變遷をうかがふに足るの資料と見るべきである。少々長文ではあるが玆にこれを掲載する。

二　雜誌「いらつめ」發行の趣旨

「いらつめ」發行の趣旨

女子教育の程度及びその性質如何は大に一國の文化に關係すること更に疑ひを容れざる所にして、想ふに一人も異論を唱ふるものなかるべし。蓋し女の教育と一國の開化とは互に相影響するものにして、文化の進みたる社會にあらざれば完全なる女子の教育を望むべからず、女子の教育宜しきを得るにあらざれば眞正なる開化を望むべからず。女子は人の母たり、人の師たり、自

己の性質を兒に與へ家庭の教育を兒童に授くるものなれば、女子教育は一國文化に影響することもとより論ずるを待たざるなり。

これを以て歐洲諸國就中英國にては十八世紀の末にあたりてマリーウォンスクロフト女史が婦人論を著してより、ハンナモアー女史がシーレソプスの要索しを著してより、シドニースミス氏が婦人論を著してより、婦人の教育は漸次に人の注意を惹き、ウォンスクロフトの著書世に現はれたるに當ては世人名づけて以て狂人となし、ウォンスクロフトの名を以て狂人の異名とするに至りたるも、その後百年の今日に在ては世人皆その奇才を嘆稱するに至れり。二十年以來女子教育の問題は大に人の注意を惹き、大學にしてその門戸を開て女子を容るゝものあり、或は別に學校を設けて女子の教育に從事するものあり、或は高等教育を女子に授くべしと云ひ、或は授くべからずと論じ、若余儕をしてこれらの論文を集めしめば容易に數大册を充たすを得ん。今日は正に從前女子教育の放棄に對する反動の時期なるを以て、論ずる所爲す所往々極端に失し、大に余儕を滿足せしめざるものありと雖、要するに女子教育の緊要を悟りたる一般の時勢を知るに足れり。

顧て己が國の形勢を見れば數百年の間爭亂相踵ぎ德川氏の天下を定むるに至るまでは嘗て一日の平安なく、德川氏亦此天下の勢を受け武を以て國を立てたるが故に、婦人の位置教育は實に憐むべきの有樣に陷れり。抑武を尚ぶ國に在ては女子の位卑しとは天下一般の定則にして、實例を擧げてこれを證せんとせば容易に數枚を充たすを得べしといへども、こゝにその要なきを以てこれを擧げず。武を尚ぶの國にして武に堪へざるの婦人を卑むること豈怪むに足らんや。加之當時の教育は少數の階級に偏りて普く人民に及ばざりしと雖、その教育中女子に關するの教は如何なる教なりやと云ふに皆これ孔孟の道にあらざるなし。孔孟の女教には勿論取るべき所多く余儕の熱心贊成するものなきにあらずと雖、要するに孔孟もまた戰國の人なり、孔孟の教もまた戰國の教なり、これを以てその說く所往々女子を卑むるに過ぐるもの多し。世は既に武尚の世なり、教へもまた戰國の教なり、女子教育の擧らざりしも豈偶然ならんや。

明治維新の旭日東天に輝きてより萬物皆その面目を新め、政事なり、法律なり、社會なり、教育なり、一として舊きを棄てゝ新しきに就かざるものなし。こゝに於てか女子教育の問題も大に世人の注意を惹き、新聞に、著書に、論文に正々堂々としてこれを論じ、政府もまた夙にこの一點に注意し女子を小學校に入れて教育の初步を授け高等女學校師範學校を設けて高等の教育を施し女子の教育稍その緒に就けり。蓋し女子教育の適切緊要なる未嘗て今日のごときはあらざるべし。今日の日本は孤立の日本に

あらざるなり。今日の世界は孤獨生存を爲し得べき世界にあらざるなり。今日の世界は文明に誇り富强に傲るの邦國肩を並べて並立するの世界なり。今日の日本はこの文明富强の邦國間に周旋して優劣を競はんとするの日本なり。

而してかれは已に一歩を進め、己れは已に一歩を退けり。今日わが國の急務は最少の時日に於て最大の進歩を爲すに在り。もしこれにして爲す能はずんば日本は到底西洋諸國と肩を並ぶるの時なきなり。然れども進歩は一世に望む能はず。天保弘化の人を以て直に西洋人の間に馳騁して一歩をかれに輸することなからしめんとするは恰も三尺の童兒をして八尺の丈夫と競爭せしめんとするが如し。熟々現時の日本を見れば天保安政の人は半老衰死絶して、今日より社會に勢力を有せんとするものは、主として德川氏の末路に生れて明治の敎育に服したるものなり。これらの諸人は或は明治年代に生れ、或は明治の敎育を受けたりと雖、その敎育の基礎たる性質の遺傳及び家庭の敎育に至りては悉く天保弘化の人に受けたるにあらざるはなし。故に日本の爲余儕の最望を屬するものはこれ等の人にあらずして、猶一代を歴、生れて明治の空氣を吸ひ、明治の遺傳を有し、明治の家庭敎育明治の高等敎育を受くるの人なり。而て是等諸人の家庭敎育を負擔する者は誰ぞや。今日より自育に從事するの妙齡淑女なり、余儕豈故なくして女子敎育最今日に必要なりと謂はんや。然らば則ち妙齡淑女の敎育は果して如何なる方向に嚮て進むべきか。

この疑問を解かんとせば先社會に於て婦人の地位は如何なるべきか、如何なる業に婦人の從事すべきものなるかを決することが必要なり。この答を得ずしてまづ女子敎育の方向を定めんとするは猶的なくして鐵砲を放ち羅針盤なくして大洋を航せんとするが如し。婦人の位置に關しては百年來往々世人の注意を惹き、二三の學者の頭腦を苦しめたる一の大誤謬あり。かの所謂男女同權論是なり。抑男女同權の說たる男女の性質を顧みず、分業の大利を知らず、琴瑟和樂の美風を忘却したる一の淺見なる議論にすぎずして、唯往時女子を卑めし弊風に對したる一時の反動と見做して後始めてその理を解すべきものなるを、不幸にして西洋文明の輸入と共にわが國に流れ込み往々これを唱ふるものなしとせず。男女同權の說は實に社會の幸福を害するものなり、社會の圓滑を妨ぐるものなり。婦人の位置を高うせんと欲して却て婦人の愛すべき性質を傷くるものなり。それ男女一體は天の道なり。夫婦共樂は自然の理なり。男女一體にして而して社會を成し、夫婦樂を共にして一家を成す。かれにあらずんば社會の圓滑望むべからず。これにあらずんば一家の幸福求むべからず。男女夫妻の間豈輕重を爭ふべけんや。蓋女子の性質より見るも、社會の便益より見るも、溫雅優容の美德を以て、柔和親切の良性を以て、社會の交際を滑かにし、男女の幸福を增進するに女子の

務なり。家庭の教育を兒童に與へて英雄豪傑たるの基を置くは女子の責なり。一家を齊へ家庭を調理し、男子をして力を外に專にするを得せしむるは女子の職なり。これ余儕が認めて女子職分の主要なるものと爲す所なりと雖、余儕は次號に於て婦人の位置を論ずるにあたり、男女同權説の非なる所以、婦人の地位は如何なるべきか及びその理如何を論ぜんと欲するを以てこゝはこれを詳述せず。假りに女子の職分は右に說く所のごとしとせば現今女子教育の有樣は果して女子をしてこの重任に堪へしむるものなりや如何。

悲いかな余儕を以てこれを見れば猶いまだしと答へざるを得ず。下流の女子は措て問はず上流の婦人は皆能く溫柔の德を以て剛强の性を補ふを得るか、優美の擧動を以て粗暴の行を制するを得るか、己に接する人、己と語るの男子をして恰も「ラフエール」の畫を見たるが如く、「ベートーベン」の樂を聽きたるが如く洋々として幸福和樂を感ぜしむるを得るか。余儕は頗るこれを疑ふなり。世間の婦人にして幼兒に適切緊要なる家庭教育を施し得ざるもの果して寡きか、患者を取扱ふの法食物の料理の方法衞生の注意等これを知らざるもの果して多からざるか、これを行ふ能はざるもの果して稀なるか。余儕は大にその然らざるを恐るなり。これ等の問に對するの答は各人の腦裏に存する所にして敢て余儕の多言を要せざるべし。

然らば卽これを改良するの法如何。悉西洋の風習を輸入せんか、西洋の風習いまだ必らずしも皆美ならざるなり。悉日本の舊慣を廢せんか日本の舊慣いまだ必しも皆陋ならざるなり。然るに世に一種の人あり、政治法律習慣衣食住一切皆西洋に模倣せんことを務め、その美惡に至ては深くこれを問はず、甚しきは假令社會に有害なるものと雖、これまた西洋の風習を輸入するの一方便なればその害物をも輸入すべしと云ふに至れり。かの「ヘーゲル」氏の所謂「暗夜の群牛色皆黑き」ものにして、苟も西洋とさへ云へば何事にても皆高尙の道理あるがごとく考へ、日本とし云へば十把一束野蠻の遺風となし、西洋の二字を聞けば恰もサイレンの音樂を聽きたるがごとく茫然としてその身の禽獸に化せらるゝを知らざるはこの種の論者の常態なり。あゝ西洋の風習は果して皆美なるか、日本の風習は果して皆固陋なるか。

抑西洋の風習は槪その源を封建時代に發したるものにして、その後時の進むに從て變更せしもの多かるべしと雖、その風習を守るはその便益たるを以てにあらず、その道理あるが爲にもあらず、唯特に習慣なる故を以てこれを守るもの多し。素より風習の起るは起るべき道理ありて起ること論を待たずと雖、封建時代に必要なるもの必ずしも今日に必要ならざるが故に歐洲の習慣

にして今日は全くその理なきもの豈少しと云はんや。日本の習慣とても皆起るべきの理ありて起りたるものなるが故に時勢の變遷に由つて今日に適せざるもの少からざるべしと雖、現時の形勢に適切なる良風美俗豈多からずとせんや。假令西洋の風習にして現時西洋の有様に適するものと雖、これを以て直に日本の社會に適用せんとせば方栓を以て圓孔を塞がんとするの誹を免れざるべし。これ人の皆知る所屢云ふ所なりと雖、事の實際に當りては往々この注意を忘却するもの少からず眞に嘆ずべきなり。假令西洋現時に適したる風習にして亦能く日本の狀態に適したるものと雖、遽にこれを入れて舊來の習慣と鬪ひ、社會に軋轢を生ぜしむるが如きは社會改良を謀るもの丶決して爲すべからざる事なり。改良は宜しく改良なるべし、顚覆なるべからず宜しく漸次なるべし、急激なる可からず。「天は眞空を嫌ふ」とは理學のまだ開けざりし往古の謬說なりと雖、余儕も亦將に言はんとす社會は眞空を嫌ふと。凡反對の元素が社會に峙立してこれを調和すべき元素がその間に存するなきときは社會に安寧秩序を害する事歷史の着々余儕に證する所なり。風俗習慣のごときは素より直接にかくの如き大害を社會に與ふるの恐なかるべしと雖、反對の習慣相並立して互に相讓らざるときは自ら社會の圓滑を害することまた勢の止む能はざる所なり。かくのごとく外國の風習を輸入せんとするに當つては能くその美惡を考へ、たとへ美なりとするもなほわが國に適するや否やを檢し、これを輸入するには須らく漸次にし、且多少舊來の習慣を折衷すること風俗の改良の爲最望ましきこと丶す。然れども反動の勢力は實に恐るべきものにして世の婦女子にして間々溫柔を以て卑屈となし、倨傲を誤つて活潑と信じ、日本固有の美位を擯斥し、かの愛すべく尊むべき性質を放却し、甚だしきは貞烈の最大德をさへ失ひたる者なしとせず。かくの如きは素より少數の婦女子にして、且その行は夙に淑女の余儕と共に擯斥する所なるが故に今喋々これを論ずるを要せずと雖、將來望あるの妙齡女子にして或はその方向を誤る者あるを見れば亦全く越人の肥瘠視する能はず。

以上陳述するが如く、余儕は女子教育の必要を感じたる世界の大勢を知るものなり、余儕は女子教育の特に今日わが國に必要なるを感ずるものなり、余儕は婦人の位地に付きて持論を有するものなり、余儕は現時日本婦人の狀態を以て、この重大なる地位を充たすに足らずとし、この狀態を改良するに付大に方案を有するものなり。爰に於てか余儕は微力を顧みず本紙を發行して婦人に關し改良すべき點を示し、その改良の方法を論じ、日本の美風を論じ日本の美風を存し西洋の良俗を取て以て日本婦人の位置教育を進むるの業に從事せんとするに至れり。(以下略す)

雜誌「いらつめ」の發行趣旨はかくの如く堂々たるものであつたが、その販賣部數は頗る少數であつて、數月後の發行資金すらこれを得ることが出來なかつた程であつた。新保氏の如きはその著述にかゝる「日本普通文如何」の原稿料をも提供されたのであつたが、遂に「いらつめ」を存續するためにその主眼たる趣旨をも抛擲して、賣れさうなものたらしむるために一個の小說雜誌とまでなすの止むを得なかつたのである。資金の準備がなかつたために、新聞の廣告の如きも殆んどこれを爲すことの出來なかつたのも原因の一だと思つたが、市內の雜誌販賣機關なるものが今日の如く備つてゐなかつたことも又一原因であつたと思はれる。今日では市內至る所に雜誌類の販賣店があるのだが、「いらつめ」發行の當時ではまだそんなものはなく、繪草紙屋と云つて錦繪の類を店頭にかゝげてゐる店の片隅に雜誌をおいてもらふのであつた。それで表紙の體裁でも目立つやうなものならばよかつたのだが、四六版の小型で頁數も五十頁を限りとして、鼠色の表紙であつたから、人の眼を惹きつける力は全然ない所へ、開いて見るとしても六かしい社說が十頁以上もあると云ふのだから、讀者の前へ出ることすらも出來なかつたのである。讀者の前へ出ることが出來て、一度でも手にされる機會があつたならば、必ずやその多數者は愛讀者となつたであらうと思つたのも負け惜みからばかりではなかつた。兎に角、世間のことは何も知らない學窓裡の青年學者がやつたことである一事が「いらつめ」の運命を說明するに足ると云つてよい。それでも、「いらつめ」が山田氏一己のものとなつてから若干月の期間は言文一致の小說を掲載する婦人雜誌としては幾分世に認められてゐたのであるから、私等から云へばそれだけでも幾分かは當初の希望を實現し得たことになつたのである。蓋し山田氏の言文一致の小說については私共は別に特別なる關係を持つてゐたからである。

三　男女の文體を一にする方法としての言文一致の方針

前述の如く明治二十年頃のこと森有禮氏が文部大臣であつた時、大日本教育會を通じて「男女の文體を一にする方法」と云ふ懸賞文を提出されたことがあつた。この懸賞に對して正木氏と私とが共同で答案を出したのが採用されて而も最高點を占めて一等賞を受けたのであつた。その趣旨は男女の文體を一にする方法としては言と文とを一致させるに若くはなく、言と文とは併行すべきものであつて、過去の歴史を見ても、又國々の例を見ても、必らずさうあるべき筈のものであるから、言文一致の方針を定めて、これに依りて普通教育の範圍に於ける教授の要目を立てねばならぬと云ふのであつた。その論旨たるや元より分り切つたことであるのだが、其方法として述べた點が認められたのであつたか、私共のが採用されたのであつた。尤も教育界の元老であつた大束重善氏もこれと同じやうな趣旨の答案を提出されて二等賞を受けられたのであつた。兎に角言文一致の普及を促進すべき議を唱へたことが認められたものとして私共は急造的に文學士にでもなつたやうに云はれ、自分でもこれがために一つ工夫をして見たい氣分も出て來たのであつた。簡單に云へばそんなことが動機ともなつて、山田美妙齋氏を「いらつめ」同人の一人に加へて、その誌上で言文一致體の小説を書かしめるやうなことにもなつたのである。さうであるから山田氏の言文一致關係は私共の懸賞文が因縁となつたのであつて、その因縁と「いらつめ」發行とが結び付けられて、明治文學の上でも問題とされるやうな結果を生ずる原因が出來たのである。尤も正木氏は法學を志望として居り、私は政治學を志望としてゐたのであつて、將來文壇人となつて何か仕事をするやうな考へは持つてゐなかつたのであるけれども、正木氏は同窓中での文章家であつて、文學上の智識も相當に持つて居られたのであつたが、私に至つては全くの門外漢であつたのだから、自分ながら案外の事としてゐたのであつた。已に意外事としてゐた位であるから、このことはそれ切りですんでゐたのであつたが、四十七年も經來つて、今日改めてこんなことが話の種となるが如きは更に意外事の續篇が出來てきた

やうなものである。假令ひ意外事であつても、事實は事實に相違ないのである。過去の述懐必らずしも今日の閑問題とも限らないのであるから、こんなことをも記述することになつたのである。

私共が大日本教育會へ提出した論文は明治二十一年三月發行の同會雜誌第七十三號とその次號に掲載されたのであるが、爾來相應年數を經過してをるのと、大正十二年の大震火災のために古い雜誌類は大半を燒失したので、今日では一寸得がたいものである。私も一度見たいと思つて長い間尋ねてゐたのであつたが、最近帝國教育會でその一部を取り揃へられたので、これを借覽して寫し取ることが出來たのである。固より改めてこれを披露するに足るほどのものではないが、山田氏の言文一致體の小說が問題となり、その山田氏が言文一致體小說に手を着けるに至つたのは私共の勸誘が動機となつたのであり、又私共が敢へてこんな勸誘を試みるに至つたのは、この懸賞論文が元となつたいであるから、大きく云へば明治文學の一資料として、文壇人の方々に向つて一閲を請ふのも強ち僭上の沙汰でもあるまいと思ふ。茲にその全文を掲載する。

男女ノ文體ヲ一ニスル方法

中川小十郎
正木政吉

本論ハ豫テ本會ニ於テ提出シタル題名ノ懸賞問題ニ對スル答案中最高點ヲ占メ一等賞ヲ得タルモノナリ。

今ソレ名醫ノ病ヲ治スルヤ、ソノ藥ヲ投ズル前マヅ詳ニ患者ノ體ヲ診査シ、脈搏ノ疾徐ハ如何、呼吸ノ度數ハ如何、身體ノ榮養ハ如何、曾テ如何ノ病痾ニ罹リシヤ、同族中ニ或ハ病痾ヲ遺傳セルコトナキヤナドト一々精細ニ問ヒ、ソノ過去ヲ考ヘ、ソノ現在ヲ察シ、スベテソノ病痾ニ關スル一切ノ觀念ヲ精確ナラシメ、然ル後コレニ藥ヲ投ズルガ故ニ、其藥其患フ所ニ的中シ、ヨクソノ疾病ヲ治スルコトヲ得ルナリ。カノ庸醫ガ握手推額ソノ病患ノ在ル處ヲ速了シテ藥ヲ與フルガ如キハ、其病ヲ治スルコト

能ハザルヤ勿論ノコトナリ。

ヒトリ身體ノ病ヲ治スルニ於テノミ然ルニアラズ、社會ノ病ヲ治スルモ亦然リ。先ソノ社會ノ患フル處ハ如何、ソノ病患ヲ生ズルニ至リシ原因ト經歷ハ如何ト仔細ニ繹ネテ、後ソノ策ヲ計畫スルコソ社會ノ病患ヲ治スルノ法ヲ得タルモノトイフベケレ。

今我國ニ於テ男女用フル文章ノ體相同ジカラズ、甚キニ至リテハ男子ノ書スル處ノモノハ女子コレヲ解スルコト能ハズ、女子ノ書スル處ノモノハ男子之ヲ讀ムニ苦ムモノアリ。シカノミナラズ、新教育場裡ニ於テモマタ授クル處ノ文章ハ男女ソノ體ヲ異ニシ、中古ノ和文ヲモテ女子文書ノ模範トスレバ、唐宋八家ノ漢文ヲモテ男子文章ノ至極トセルガ如キ樣ナキニアラズ。特ニ其日用文ノ如キニ至リテハ、男女共ニ模型ニテ鑄込ミタルガ如キ體ヲ株守セルコトニシテ、文辭既ニ模型ノ束縛ヲ受クルガユヱニ之ニヨリテ千差萬別ノ意思ヲ充分ニノブルコト能ハズ。文辭ニシテ意思ヲ充分ニイヒ顯スコトナキガ故ニ、文辭ノ功空キニ幾シトイフベシ。コレヲ要スルニ文學上ノ交通ハ男ハ男ニ限リ、女ハ女ニ限ルノ樣アリ。同キ言葉ヲ通ジナガラ、ヒトリ文書ノ交際ヲナスコト能ハズトイフガゴトキハ頗ル不便ノコトトイフベク、且ハマタ其意思ヲ代表スル能ハザルガ如キ文章ハ言語ヲ代表スルモノナリトイヘル通義ニモタガヘルコトトイフベシ。今コノ病疾ヲ根治セントスルニハマヅソノ病源トソノ經過ヲ吟味スルヲモテ第一著トス。

イヅレノ國ヲ問ハズ、ヒロク世界ノ社會ヲ考ヘテ文字文章ノ起源ヲ尋ヌルニ、社會ノ始ニアタリテハ人々相互ノ交際ハ言語ヲモテ足レリトスルモ、社員ノ增加スルニ從ヒテ、何事ニ就キテモ不便ヲ感ジテ止マズ是ニオイテカ自然ノ必要ニヨリテ、遂ニ物ノ象ニトリテ己ガ他人ニ傳ヘント欲スル意味ヲ表スル埃及ノ畫文字、支那ノ象形文字ノゴトキモノヲ始メトシ、遂ニアラユル音聲ノ符牒ヲアラカジメ規制シ、モテ言語ノ代表者タラシムルニ至ル、コレ則チ社會ニ文字、文章ノ起ル次第ナリ。ユヱニコノ際ニアタリテハ、其文章ハ當時ニ行ハレシ言語ト一致シタリシコト明ニシテ、言語ノ外ニ文章ナキナリ。コノ時ニ於テモシ他ニ其進路ヲ妨ゲルノ原因ナカリセバ、文章ト言語トノ關係ハコノ外ニ走ルコトナカルベキヤ必セリ。カク文章本來ノ性質タル、言語ニ伴フベキモノナルガ故ニ、格段ノ故障アルニアラズンバ、言語ノ變動ハコレヲ文章ニ及ボシ、文章ノ變動ハコレヲ言語ニ傳ヘ二者互ニ相影響シテ並行進化スベキモノナルコトソノ眞理ナルガゴトシ。英語ノ變遷ニ見ルニ、さくそん語ハのるまん語ノ侵入ヲ蒙リタルガ爲ニ非常ノ衝動ヲ受ケテ、一種駁雜ナル語ヲ生ズルニ至リ、純粹ナルさくそん語トハ大ニ其面目ヲ異ニストイヘド

モ、此變動ハマタ同ク文章ニモ其影響ヲ及ボセシヲモテ、言語、文章ハ變遷シナガラ並馳シテ、二者ノ關係ニ於テハ更ニ變動アルコトナク、今日ニ至リテモ言語ハ卽チ文章ニシテ、唯文字ヲ以テスルト音聲ヲ以テスルトノ別アルノミ。

然リトイヘドモ我邦ニ於テ言語ト文章ノ關係非常ニ入込ミタルモノアリテ、前記ノ通義ヲ以テ推スベカラザルモノアルガ如シ。正ニ之ヲ論究シテ果シテコノ通義ニ從ヘルモノナリヤ否ヤヲ判スベシ。抑我邦ハ開國ノ昔ヨリ固有ノ言語アリシコトハ今更疑フベキコトナケレドモ、ソノ文字ノ有無ニ至リテハ、種々議論モアリテ確定セザレドモ、古語拾遺ノ序ニ、「蓋聞上古之世未有文字貴賤老少口相傳前言往行存而不忘」ト云ヘルヲモテ見レバ、我邦固有ノ文字ナシトイヘル議論モ全クソノ據ナシトイフベカラズ。ソハ姑ク措キ、マヅ今日ニ行ハル、文字ノ起源ニツキテコレヲ考フルニ、遠ク應神ノ朝ニ於テ始メテ百濟ヨリ支那ノ文字ヲ傳ヘタルニアルトイフベシ。然レドモ我邦ノ言語ハ西洋諸國ノ語ト同ク、單音ヲ組織シテ語ヲナスモノナレバ、其性質タル音聲ノ符牒アレバアラユル語ヲ代表シ得ルナリ。然ルニ支那文字ハ一事物、一作用ニ就キテ各特別ノ文字アルガ故ニ、幾萬ノ語アレバ茲ニ幾萬ノ文字アリ、又體言ハ其格ノ何タルニ關ラズ、常ニ用言ノ前ニ來ルハ支那ノ語法ト全ク前後ヲ轉倒セルモノナリ。故ニ新ニ輸入シタル文字ハ不充分ナガラ其意ヲ寫スコトヲ得レドモ、ソノ言語ヲ寫スコト能ハズ、コレ則チ我邦ノ言語ト文章ト背馳スルニ至リシ第一原因トイフベキナリ。元來言語ト文章トハ並行進歩スベキ關係ノモノナルニ、此度新ニ輸入シタル文字ハ言語ト其性質ヲ異ニセルコト右ノ次第ナレバ、自然ノ結果(Natural effect)トシテコノ言文一致ノ主義ニ對シテ言ト文トノ間ニ一條ノ競爭(Struggle)ヲ生ズルニ至ルコト免ルベカラザルノ數ナリ。

シカリ、シカシテ文字傳來ノ當時ニ於テ行ハレシ文章ハ何樣ノモノナリシヤ、未ダ學者ノ定說アルヲ聞カズトイヘドモ、余儕ヲ以テコレヲ見ルニ、新事物ニ改良ヲ加フルハ既ニ一段ノ進歩ヲ爲セシ後ノコトナレバ、當時目新キ支那文ノ輸入アルヤ、マヅソノ新奇ニ驚キ、コレヲ應用シテ我邦音聲ノ代表者タラシムルナドイヘル考察ヲ容ル、ノ餘地アラザリシコト明ナリ。故ニ應神ノ朝ニ於テ、支那文傳來セシ當時ニ於テ行ハレシモノハ專ラ純粹ノ支那文ナリシコト、思ハル、ナリ。サレバ小中村清矩先生モ漢文ノ起ヲ考フルニ、日本紀履仲天皇四年秋八月始於諸國置國史記言事トアルハ如何ナリシ歟、今知ル由ナケレド、漢籍渡來シテヨリ、菟道ノ稚郞子ノ能ク悟リ、仁德天皇ノ既ニ漢風ヲ好マセ玉ヒシヲ思ヘバ彼國風ナル文體ナリケンモ計リ難シ……」ト申サレタリ。

蓋支那ノ文字ハ支那ノ言語ヲ寫スニ適スルモノニシテ、自ラ支那人ノ意匠ヲ現スニ都合ヨキモノナリ。故ニ今コノ文字ヲ假ルヤ、一ニハソノ性質ノ我ニ通ゼザルガ爲ニ、マタ一ニハ新奇ニシテ熟シガタキガ爲ニヨリテ、以テ己ガ心ニ思フコトヲ充分ニ書キ顯スコト能ハズ。則チ其文、其言ノ代表者タルニ可ナラザルガ故ニ、自然ノ必要(Natural necessity)ニヨリテ和漢混淆ノ始原ヲナスニ至レリ。古事記ノ序文ニモアルゴトク、「已因訓述者詞不逮心……全以音連者事趣更長……」等ノ故障アルガ爲、遂ニ漢文ニ和語ヲ交フルノ一體ヲ始ムルコト、ナレリ。則チ漢字ノ音ヲ假リテ我言詞ヲ記シ、其訓ヲ假リテ我物ヲ記スモノニシテ、古事記萬葉集ノ類コレナリ。コレ漢文ノ幾分カ我言語ニ近キシニ相違ナケレドモ、當時朝廷ニ於テハ其制度、法令皆漢土ノ制ニ模倣セシコトナレバ、ソノ用文モマタ從ヒテ漢文ヲ以テセシガ如ク、勅文ノゴトキモ時ニ宣命體ノモノモアリタレドモ、多クハ漢文ヲ用ヒタリ。聖武天皇ノ朝ニイタリテハ、學生ヲシテ漢語ヲ學バシムベシナドイヘル奏議ヲナスモノサヘアルニイタレリ。

コレヨリシバラクシテ、吉備公片假名ヲ造ルニ至リテ、我國ノ文字マタ一段ノ進步ヲナセリ。則チ片假名トハサキニ漢字ノ音ヲ假リテ我言語ヲ顯スモノヨリ進化シタルモノニシテ、ソノ文字ノ固有ノ意味ヲ保ツコトナク、單ニ音聲ノ代表者タラシムルコトニシテ、語ヲ換ヘテコレヲイヘバ、サキニハ日本語ヲイヒ顯スニ漢文ヲ假リテ其意味ヲ通ゼシガユヱニ、當時言ト文トノ關係ハ其懸隔頗ル遠カリシトイヘドモ、片假名ノ創造アルヤ、始メテ直ニ言語ヲ代表スルコトヲ得ルガ故ニ、我國ノ言ト文トノ關係大ニ接近スルニ至レリトイフベシ。

降リテ平安ノ朝ニイタリ、僧空海平假名ヲ創造シ、大ニ便益ヲ與ヘタリ。蓋平假名ハ其性質ニ於テハ片假名ト異ナルコトナシトイヘドモ、漢字ノ草體ヨリ變化セルモノナルガ故ニ、コレヲ書スルニ於テ甚ダ迅速ニ書シ得ルノ利アリ。コレヨリコノ二種ノ文字ヲ假名ト稱シ、正シキ漢字ヲ眞字ト稱シテ相區別スルニ至レリ。

此際ニアタリ、モシ妨害ノ原因ナカリセバ、言ト文トノ間柄ハ頗ル親密ニシテ、毫モ背馳スルノ傾ナカリシコトナルベク、又從ヒテ男女其文體ヲ異ニスルニ至ラザリシナラン。シカリトイヘドモ本來尙武ノ風盛ニシテ、人文開ケザル我邦へ、神后征韓ノ結果トシテ、唐土ノ文物ヲ輸入セシヨリ、邦人皆其文物ノ美ナルニ驚キ、一モ支那、二モ支那ト何事トナク皆彼ヲ主トシ、徒ニ模倣ヲ務ムルニ至リ、コレヨリ模唐主義ハ永ク我國ノ人心ヲ主宰スルコト、ナレリ。サレバ政府ノ制度ニ至リテモ、令式典型一トシテ法ヲ彼ニ取ラザルハナク、遣唐使、留學生ノ往復ハ今日ノ洋行ニ髣髴トシテ、龍京ノ春、參牟斯河上ノ淸風ニ棹シ、巴都

ノ秋、綦因河畔ノ明月ニ吟ジテ歸朝セルモノニアラザレバ、世人學士ヲ以テ稱セザルガ如ク、文人、僧侶皆一タビ江河ノ風景ヲ咏メシモノニアラザレバ、當時ノ上流ニ立ツコト能ハザルノ樣アリ。支那主義ノ勢力カクノゴトシ、故ニ自ラ社會ノ上流ニ立タントセバ、經史百家ノ書ヲ渉獵シ、漢魏六朝ノ文ヲ屬シ、詩ヲ善クシ、書ヲ工ニシテ、始メテ志ヲ得ベキナリ。サレバ言ト文ト一致セントスルノ勢力及ビ假名文ノ學ビ易キコト等ハ未ダ以テ當時ノ流行ヲ壓スルニ足ラズ、漢文ノ名家小野篁、都良香等踵ヲ接シテ輩出スルニ至レリ。

今漢字ト假名ト其難易ノ度ヲ比較スルニ、假名ハ僅ニ五十個以下ノ符號ヲ記憶セバ以テ己ガ言ハント欲スル言語ノ意味ヲ代表セシムルコトヲ得レドモ、彼漢字ニ至リテハ、各字皆其意ヲ異ニシ、十種ノ意味ヲイヒ顯ハサントセバ、マヅ十種ノ文字ヲ解セザルベカラズ。マタ假名ヲ以テスレバ、我邦ノ語法ニ從ヒ體言ヲ前ニシ、用言ヲ後ニシテ書キ綴ルコトヲ得レドモ、カノ漢文ニ至リテハ他國ノ語法ニ從ヒテ之ヲ轉倒セザルベカラザルノ難アリ。シカリ、シカシテ當時女子ハ社會ニ立チテ其地位ヲ爭ハントスルガゴトキ必要モナク、常ニ深閨ニ人ト成リ、花月ヲ賞シテ日月ヲ消セシコトナルベク、マタソノ能力モ男子ニ劣リシコトナルベケレバ、ソノ最學ビ易キ假名ニヨリテソノ言葉ヲ寫シ、音信ナドモ通ゼシナラン。則チ男子ノ文體ハ漢文ニ法リ、女子ノ文體ハ我邦ノ語法ニ據ルノ差ヨリシテ、終ニ男女文體ノ背馳ヲ見ルコトヽハナリヌ。故ニ後世ニ至ルマデ、某日記ナドイヘルモノハ多クハ女子ノ手ニ成リ、マタコノ頃ヨリシテ眞字ヲ男文字ト稱シ假名ヲ女文字トイヒテ、二者別チ呼ブニ至リシモ、ソノ專用ヲ異ニセシ證據ニシテ、紀ノ貫之ガ土佐日記ヲ著述セルモ、自ラ婦人ノ趣ヲ以テ書セシガ如キ、マタ以テ當時婦人ガカヽル散體ノ和文ヲ專用セシコト見ルベシ。

降リテ宇多天皇ノ頃ニ至レバ、遣唐使ノ制度モ廢止セラレ、從ヒテ文章モ幾分カ支那主義ヲ離ルヽコトトハナレリ。且ハマタ前代ニ於テ徒ニ官制ノ美ヲ欲シテ、無用ノ官吏ヲ增セシヲ以テ、朝廷ハ閑樂ノ場所トナリ、和歌ナドモ大ニ流行シ、村上天皇ノ頃ニ至リテハ和歌ノ別當ナドイヘル官職サヘアルニ至レリ。

サレバ前ニ述ベタル散文ノ一體ハ次第ニ進歩シテ、竹取、宇津保、伊勢ナドイヘル物語ノ類續々世ニ出デ、就中紫式部ノ源氏物語ハ其尤ニシテ、今日ニ至ルマデ作文ノ模範トセル處ナリ。蓋コノ一體ニ於テハ當時通用ノ言語ヲ以テ文ヲ成シタルモノニシテ、今日世人ガ作レル和文ノ日用ノ言語ト離隔セルガ如キコトナシ。

散體ノ和文ハ斯クノゴトク次第ニ進歩セルニ、却テ漢文ハ延喜ノ朝ニ於テ遣唐使ヲ止メシヨリ、彼土ニ留學スルモノナク、大ニ衰微シ、降リテ白河、堀川天皇ノ頃ヨリ一種ノ文體ヲナスニ至レリ。畢竟ズルニ當時文學ハ菅江等ノ門派ニ歸シ、在朝ノ諸官等ニ至リテモコレヲ學ブモノナク、唯之ヲ模倣セシコトナレバ、動モスレバ文字ヲ倒置シテ事ヲ記セシヨリ、自ラ一種ノ文體ヲナスコト、ハナリヌ。中古以來ノ公衙通用文、民間ノ文書證書類ノ起原コ、ニアリトイフベシ。保元平治以後ニ至リテハ、世モ戰爭ノ時代ト換リ、海内騷然トシテマタ文學ヲ修ムルモノナク、東鑑、將門記等ノ野乘、雜記ハ、記者ハ漢文ヲモテ記シタル心ナルベケレドモ、其文ハ漢ニモアラズ、和ニモアラズ、一種異體ノ文章ナリ。シカシテ此等ノ文章サヘ唯僅々五山ノ僧徒等ガコレヲ傳ヘシノミ。コレヲ要スルニ始メ官府ノ間ニ行ハレタル「令……者也」ナドイヘル文例ヨリ、「仕」、「給」、「將」、「申」、「御座候」ナドノ文字ヲ含メル俗文ノ一體ヲナスニ至レリ。

今ソレ何ガ故ニ漢文ハカクノゴトキ變化ヲ受ケシヤト尋ヌルニ、モト言ト文トハ互ニ一致スベキ性質ノモノナルニ、一時支那主義ノ流行ノ爲ニソノ作用ヲ專ニスルコト能ハズ、マヅ國語ノ意味ヲ取リ、コレヲ支那文ニ移シテ、始メテ文ヲナセシモ、コレ頗困難事ニシテ、到底十分ニ我意味ヲ述ブルコト能ハザルガユヱニ、一朝其妨害ノ原因卽支那主義ノ勢力ヲ失スルヤ、漢文ノ體ハ直ニ壞レテ言語ニ近クノ方向ヲ取ルニ至レリ。サレバ是等ノ變化ハ正ニ以テ文ノ言ニ近カントシテ起リシニ外ナラズ。

德川氏ニ及ビテ打續キタル戰亂モ始メテ平ギ、永ク泰平ノ世トナリケレバ、文事再ソノ勢力ヲ恢復シ林ノ一族出デテ漢學ヲ弘ムレバ、本居ノ一家ハ起リテ和學ヲ唱フ。漢文ニ巧ナルモノアレバ、和文ニ妙ヲ得タルモノアリ、爾來名家、偉人續々踵ヲ接シテ起ル。當時假名交文大ニ行ハレ、就中新井白石、貝原益軒等ノ鴻儒ノ手ニ成ルモノハ自ラ一家ノ體ヲナス。シカリ、シカシテコノ體維新已來上下ノ社會ニ行ハレ、我邦文ハトイヘバ、マヅコノ一體ヲ指スガゴトキ樣トナレリ。シカレドモコレヲ維新前ノモノニ比スレバ、大ニ其趣ヲ異ニシ、漢文ヲ直ニ假名ヲ交ヘテ書キ流シタルモノニ近シ。蓋維新前ニ行ハレタルコノ一派ノ文體ニハ、和文ヲ交フルコト多ク、頗流暢ナルガゴトシ。コレヲ要スルニ本來ノ和文ハ古文(Classic)トナリ、漢文ハ漢學者ノ間ニ行ハレ、漢文ト和文ノコノ假名交文ニ於ケル關係ハ、恰羅甸語ノ英語ニ於ケルガゴトシ。

コノ一體起ルニ及ビテ我邦ノ言ト文章トノ關係ハ大ニ親密ナルニ至レリ。漢字ヲ綴ルニてにをはヲ以テスルコトナレバ漢文ノゴトク文字ノ轉倒ヲ爲スノ必要モナク、マタ言語ノ方ヨリ云ヘバ、德川氏ノ時代ニ於テ、士族ノ社會ニ漢學ノ盛ナリシガ爲ニ、

漢語ノ化シテ邦語トナレルモノ甚多ク、マタ今日ノ人ハ皆童時ニ於テ漢籍主義ノ教育ヲ受ケシト、マタ一ニハ漢語ハ新ニ輸入シタル西洋ノ學問上ノ用語ヲ反譯スルニ適セル等ノ爲ニ、假名ノミヲ用フルヨリモ漢字ヲ交ヘ用フルコト便利トナルニ至レリ。コレ今日男子ガ用フル所ノ新聞體トイヘルモノコレナリ。

今日女子ガ用フル所ノ文體ハ、余儕ガ稱スル古文ニシテ、サキニ略述シタル散體ノ和文ヨリ起由セルモノナリ。ソノ性質ヨリコレヲ考フレバ、專假名ヲ用ヒテ我邦ノ言語ヲ直寫スルコトナレバ、大ニ便利ニシテ以テ我意味ヲ思フ通ニ言ヒ顯スニ足ルモノナリトイヘドモ、前ニ述ベタルガ如ク、當時支那主義大ニ行ハレ、男子ハ皆コノ主義ニ支配セラレテ專漢文ヲ修メ、ヒトリ女子ハソノ學ビ易キノ故ヲ以テコレヲ用ヒテ言語ヲ書セシモ、モト女子ハ深閨ニアルコト常ニシテ、男子ノゴトク社會ノ交際ニ與ルコトナケレバ、其用フル所ノ文章ハ實用ノ爲ニアラズシテ、コレヲ玩弄スルニ過ギズ。マタ一ニハコノ文體ニ秀デタルモノ多ク古昔ニ起リ、伊勢物語、土佐日記、源氏物語等ノ書ハ後世マタ出ヅルコトナク、後進ノモノハ常ニコレヲ模倣スルコトヲ務メタリシガユヱニ、言語ノ進化ト並行スルコト能ハズ。マタ一ニハ後世ニ行ハル、言語ハ漢語ヲ混ジ、直ニコレヲ假名文ニ書スルモ大ニソノ流暢ヲ缺キ、古代ノ純ニシテ雅ナルモノノ比ニアラザレバ、和文ヲ玩ブモノハ務メテ古代ノ言語ヲ用ヒシヲ以テ、今日ノ言語トハ大ニ懸隔スルニ至レリ。サレバ本來頗便利ナル散體ノ和文ハ大ニ柔弱、冗長ノ弊ニ流レ、活潑ナル男子ノ用フルニ適セザルヲ以テ、中等以上ノ者ノ子弟ヲ教訓スルニハ、マヅいろはノ假名ヲ教フルモ、コレヲ以テ實用ニ使用セシメズ、直ニ進ミテ四書、五經ノ素讀ヨリ深ク漢籍ニ入ラシメ、甚ダシキニ至リテハ支那文字ノ暗誦ノ爲ニ終身ヲ消スノ樣ナリキ。

以上略述シタル文章ノ變化ニヨリテコレヲ觀察スレバ、言ト文トハ常ニ相一致セントスルノ傾向ヲ有スルコト明ナル事實ニシテ、タトヘバ假名ノ起リシハ漢字ヲ以テ我邦ノ言語ヲ直寫セント欲スルノ必要ヨリ生ジ、漢文ノ破壞ハ漢語ノ語法ヲ脱シ、國語ノ語法ニ從ハントスル競爭ノ結果ニ外ナラズ。コレヲ要スルニ古來我邦ノ文章ニ於ケル一變一動ハ常ニ言文一致ニ反對セル障碍ニ打勝タントセルコト明ナリ。

ヒトリ文章ノ言語ニ近カントスルノ有樣アリシノミナラズ、言語モ亦文章ニ近カントスルノ傾向アリ。學者書生ノ言語ハ散文ニ近ク、俗吏ノ談話ハ公文ニ近キノ事實ヲ以テ證スベシ。源氏物語中人々ノ種類ニヨリテ其語勢ノ異ナルヲ見ルモ古來コノ傾向アリシコトト明ナリ。

サレバコレヲ西洋ノ有樣ニ考ヘ我邦千有餘年間ノ既往ニ鑑ミルニ、言ト文トノ關係ハ相接近セントスル傾向アルコト明ニシテマタ我邦文章ノ將來ヲトスルニ足ルモノアリ。

今スコシクソノ歩武ヲ進メテ、現時教育場裡ノ有樣ヲ案スルニ、小學校ヨリ中學校ニ至ルノ生徒ヲシテ假名交文ヲ作ラシムルヤ、ソノ期スル所ハ漢文ニアルガ如シ。シカシテ假名交文ハコレヲ直ニ漢文ニ複スベキモノニアラザレバ、ソノ至レルモノニアラズトノ説ハ余儕ガ嘗テ聞キシコトニシテ顧フニ今ノ時ニ於テモナホ此説ハ假名交文ノ教授法ヲ支配スルコトナラン。マタ女子ハ男子ト其趣ヲ異ニスレバ、文章ノ體モマタ一樣ニスベカラズ、假名ノ綴リカタヨリ女子消息文其他ノ平假名ヲ專修セシメ、高等ノ學校ニ至リテハ中古ノ和文ヲモ作ラシムベシト云ヘル教授法ハ、近年ニ至ルマデ專是認セラル丶モノ丶如シ。畢竟カクノゴトクソノ理由ナシニ男女文體ヲ區々ニスルハソノ作文ノ主義確定セザルヲ以テナリ。

嘗聞ク「治療ハ自然ニ逆フコトナカレ」トハ醫家施術ノ格言ナリトコレ豈醫家施術ニ於テノミシカランヤ。教育ニ於テモマタシカリ、近頃教育家ガ曉々トシテ止マザル所ノ開發主義モマタ自然ニ從フノ一主義タルニ外ナラズ。故ニ今コノ男女文體ヲ異ニセル弊ヲ矯メントスルニ於テモ自然ニ逆ヘル苟安ノ方法ヲ以テ一時其文體ヲ一ニスルモ、終ニ其成功ヲ完ウスルコト難キノミナラズ却テ遺ス所ノ害毒尠少ニアラザルベシ。サレバ男女文體ヲ一ニスル方法ヲ畫スルニ於テハマヅ自然ニ逆ハザル作文ノ主義ヲ確定スルヲモテ第一着トナスベキヤ明ゲシ。自然ニ逆ハザル作文ノ主義トハ何ゾヤ、曰ク、言文一致ノ主義コレナリ。文章ノ進化ハ常ニ此主義ニ支配セラル丶コトハ既ニ上文ニ盡シタルガゴトシ。

今正ニソノ詳細ノ方法ヲ研究スルノ前ニ於テ、コノ主義ニ反對スル説ヲ駁シテ本論ヲ鞏固ナラシメントス。コノ主義ニ反對スル説トハ何ゾヤ、曰ク、言文一致ハコレヲ言フベキモ實地ニ行フコト難シトイフコレナリ。コノ議論ノ起ル所ヲ考フルニ、一ハ言文相影響スルノ樣ヲ知ラザルト、一ハ主義トイフコトニ就キテ精確ナル考ヲ有セザルニ在リ。今我國ニ行ハル丶言語ハ種々ナル原因ニヨリテ雜駁極ルモノニシテ、直ニ之ヲ文ニ書シタランニハコレヲ讀ムニ勝ヘザルモノアルベシトイヘドモ、コノ雜駁ナル有樣ハ一時ノ障碍ニヨリテ生ゼシモノニシテ、卽チ詞ヲ直ニ文ニ書クコトナカリシヲモテ、言語ハ文章ノ絆制ヲ離レ頗ル粗野トナリシヲ以テナリ。シカレドモ成ルベク文章ヲシテ言語ト一致セシムルコトヲ務ムルトキハ字ニ寫シテ甚ク風致ヲ失フガ如キモノハ次第ニ其跡ヲ絕ツニ至ルベシ。コレヲ要スルニ、言ト文トハ常ニ相影響シテ進化スルモノナリトイフベシ。次ニ茲ニ一ノ

主義ヲ定ムルトイヘバ、唯ソノ方向ヲ定ムルトイフコトニテ、タトヘバ、教育ノ自由主義トイヒ干渉主義トイフコトト同ク唯ソノ進路ノ方向ヲ示スニ外ナラズ。故ニ言文一致ノ主義トイフハ一時ニ言ト文トヲ正ク同一ニセヨ、如何ニ不十分ナル俗語モ其儘ニ書セヨトイフニハアラザルナリ。唯コノ方向ニ進路ヲ取ルベシトイフコトナリ。世或ハマタ男女文體ヲ一ニスルハ男子ノ文ニモアラズマタ女子ノ文ニモアラザル男女折衷ノ文例ヲ造リ、男女ヲシテコレニヨリテ學習セシムレバ男ノ剛ニ過グルモノハ中道ニ復シ、女ノ柔ニ過グルモノマタ中道ニ復シテ文體一致スルニ至ルベシト論ズルモノアリ、コレ庸醫姑息ノ方案ニ過ギズ。モシソレ社會ノ有樣永久一定不變ノモノナラバカヽル姑息ノ方案モ其效ナキニアラズトイヘドモ奈何セン社會ハ日々進ミテ止マズ言語ノゴトキモ日々ニ變遷シツヽアルモノニシテ、特ニ追々西洋トノ交際モ頻繁ナルニ至リ、從ヒテ言語モ幾分ノ變化ヲ受クベキコト明ナリ。シカルヲヒトリソノ文章ヲ模型ニ入レ、死物タラシメントスルコトコレ社會ノ勢ニ反スル方法ニシテ、能ク其效ヲ見ルコト難ク、却テ大ナル患害ヲ遺スコトナリ。假令ヘバ現今我邦ノ書簡文ハ其體ノ定マレルノミナラズ、其用語サヘ一定セルコトナレバ、十分ニ情意ヲ寫スニ足ラズ「大賀之至奉存候」ナル文句ハ婚禮ヲ祝スルニモ用ヰ、安產ヲ賀スルニモ用ヰ、他人ノ間柄ニモ用ウレバ、マタ親戚ノ間ニモ用ウルトイフカゴトキナレバ、十分ニ意衷ヲ寫シ出スコト能ハザルハ勿論ノコトナリ。

以上ノ論辯ニヨリテ見レバ言文一致ノ主義ハ正ニ此際ニ於テ執ルベキ唯一ノ主義ナルコト明ナリ。故ニ將ニ進ミテソノ實地ノ方法ニ論及セントス。

今ソレ一國ノ弊習ヲ矯メントセバソノ成功ハコレヲ其次世ニ求メザルベカラズ、次世ニ於テ成功ヲ得ント欲セバコレヲ新教育場裏ニ求メザルベカラズ、則其實施ノ方法左ノゴトシ。

一、言文一致ノ主義ニ從ヒテ作文ノ教授ヲナスコト。

一、言文一致ノ主義ヲ口授科ニ應用スルコト。

一、言文一致ノ主義ニ從ヒテ教科書ヲ編纂スルコト。

右第一ニ於テハマヅコノ主義ニ基ケル作文教授法ヲ明示スルニアリ。シカレドモ其詳細ヲ述ベントセバ裒然大册ヲナスニ至ルベケレバ、今コヽニ作文教授法ニ就キ注意スベキ要點ト、順序ノ梗概ヲ述ベントス。

作文教授法ノ注意。

モシ話聲ニシテ消失スルコトナカリセバコレヲ筆述スルノ要ナシ、唯其消失スルガユヱニ筆述アリ過ギシコトハコレヲ現時ニ傳ヘ、現時ノコトヲ未來ニ遺スコト皆筆述ノ力ナリ。サレバ筆述ハ話聲ノ代表ニシテ作文ハ言語ヲ寫シ出スノ術ヲ教ユルモノナリ。已ニ言話ヲ寫シ出スノ術アレバマタ其法ナキ能ハズ、シカレドモマヅ法ヨリ入ルハ宜キモノニアラズ、實例ヨリ入リテ法ニ終ルベシ。文章ノ妙トハ奇字難字ヲ臚列スルノ謂ニアラズ務メテ平易ノ通用語ヲ使フハ修辭ノ第一義ナリ。此事教育者ノ銘記スベキ最要ノ點ナリトス。

言文一致ノ主義ニ從ヒテ作文ヲ教授スルニ於テ最注意スベキコトハ正キ言語ト、正カラザル俗語トノ區別ナリ。要スル處ハ普通ノ言語ヲ以テ書スベキモ特殊ナル俚俗ノ語ヲ用ウベカラズ。コノ主義ニ於テ至極トスル處ハ文章ハ務メテ平易ニシテ、言語ニ近キ樣ニナシ、マタアシキ詞ハ次第ニ之ヲヨキ詞ニ改ムルニアリ。又訛ノ詞ト正キ詞トヲシテ相離レシムベカラズ、務メテ俗語ヲ導キテ正キ詞ニ進ム樣敎ユベシ。コレ目今ニ於テ止ムベカラザル敎授法ナリ。

作文敎授法ノ順序。

言文一致ノ行ハル、西洋諸國ニテハ、小學校ノ作文科ニ散文體ト、書牘文體トヲ別途ニシテ授クルニアラズ、唯作文科トイヘル一科アリテ專ラ記事論說文ニ熟セシム。書牘ノ如キハ作文科中ノ一題目ニ過ギズ、固ヨリ一定ノ樣式アルニアラズ、通常ノ文章ト異ナルコトナキナリ、唯稱謂ノ區別、月日、署名ノ配置等ヲ敎ユルノミ。故ニ西洋ノ書牘ハ眞個ノ散文ニシテ、十分ニ思想ヲ伸ベ、十分ニ情懷ヲ寫シ出スコトヲ得ルナリ。余輩ノ期スル所ハ此ニアリ、作文科ニテハ實況ヲ畫キ出シ、思想ヲ寫シ出スコトヲ自由ナラシメ、別ニ散文ノ外ニ書牘ノ目ヲ立テズ、以テ古來ノ陋習ヲ破ラント欲ス。目今作文科中ノ書牘敎授法ハ、諸學科中最困難ナルモノ、一ナリ。第一、男女共學制ノ今日ニ在リテ、書牘ノミハ男女別途ニ敎授セザルベカラズ。第二、日々目ニ觸レ耳ニ聞ク所ノ極メテ卑近ナル事物ヲ最簡單ナル文字ヲ以テ綴ルコトヲ學ビタル兒童ニ授クルニ、平素說話ニ絕エテ用フルコトナキ文字ヲ授クルコトナレバ、敎授ノ困難ナルハ倘イフニタラズ。敎育ハ兒童ノ心性ヲ開發スベキモノナルニ此科ノ敎授ハ是非トモ心性ノ發達ヲ妨グベキ傾向ナキ能ハズ、是敎育家ノ深ク憂フル所ナリ。今前述シタル方法ニヨルトキハ男女共學制ニ最適スベク、又開發ノ趣意ニ悖ルコトナキノミナラズ、兒童ノ心性ヲ發達スルノ助トナルベキナリ。

作文科ハ他ノ學科ノ如ク易ヨリ難ニ入リ、簡ヨリ繁ニ移ルベシ、決シテ等ヲ躐ユベカラズ。最初ハ假名ノミヲ用ヒテ單語ヲ綴

ラシメ、單語ヨリ短句ニ移リ、短句ヨリ短文ニ入リ、ソレヨリ平易ナル漢字ヲ交ヘテ短文ヲ作ラシメ、次ニ短文ヲ連ネテ記事文論說文ヲ綴ラシムベシ、シカシテ書牘文ノゴトキハコノ應用ニ過ギズ。

今日ノ有樣ニテハ直ニ言語通ニ書クニ適セザルモノアルニ似タレドモ、コレハ唯一時ノコトノミ。我邦文化日猶淺ク、纔ニ二十年前マデハ各藩地ヲ畫シテ相交通セザリシガ故ニ、各地方特殊ノ方言アリテ、各相通セザルニ近キモノアリ、今日ナホコノ餘弊アルガ故ニ、正キ言語ニテ之ヲ書セント欲セバ、格別ノ注意ヲ要スルナリ。マヅナルベク平易ニシテ言語ニ近キ樣ニナサバ、言語モ追々コレニ箝制セラレテ進化センコト疑フベキニアラズ。

次ニ作文科ノ補闕(Supplement)トシテ肝要ナルモノハ口授ノ科ナリ。庶物示敎ノ口授、修身談、理學談等ハ勿論、敎師敎室ニ入リテ生徒ニ對スルトキハ苟モ鄙俚ノ言語ヲ吐クコトナク、務メテ最平易ニシテ正キ言語ヲ用フベシ。今日小學ノ敎師タルモノコノ點ニ意ヲ注グコト頗ル不親切ニシテ、却テ文章ノ義理ヲ講ズルハ正キ言語ヲ不規則ナル俗語ニ代フルコト、考フルモノナキニアラズ。然レドモ敎師ヲシテ能クコノ點ニ注意セシメタランニハ、生徒ヲシテ自ラ正キ言語ニ慣レシメ、今日勢力ヲ專ニセルカノ不規則ナル言語ハ終ニ敎育以下ノ社會ニ放逐セラルヽニ至ルベシ。之ヲ要スルニ、作文科ハ文、言ニ近キ、口授科ハ言、文ニ近ヅキテ、遂ニハ言文一致ノ美域ニ至ルベシ。

以上言文一致ノ主義ヲ以テ小學作文科ヲ敎授スルコト、並ニ口授ノ事ヲ畧述シタリ今正ニコノ主義ヲ以テ敎科書ヲ編ムコトヲ云ハントス。コノ適例ハ近頃發兌ニナリタル新保磐次氏ノ新案ニ係ル日本讀本ナリトス。コノ讀本ハ專此主義ヲ執レルモノナルガゴトシ。ソレ讀本ハ生徒ガヨリテ文字文章ノ知識ヲ得ルノ源ナレバ、コノ讀本ニシテコノ主義ニ據リテ編ミタランニハ徒ニ文字ノ爲ニ苦メラルヽコトナク、常ニ愉快ヲ感ジテ誦讀ノ間自然ニ其思想ヲ造成スルコトヲ得ルナラン、今日ニ至ルマデ小學敎科書ノ弊トスル所ハソノ文書ノ六ケ敷ニ失セルコトナリキ。カノ地理書ノゴトキ、修身書ノ如キ、地理修身ヲ敎ユルガ主ナレドモ其文章ノムツカシキ故ニ、最初ソノ音讀ヲ敎ヘ、次ニ意味ノ講義ヲナセル敎授法ヲトレルモノアリシハ余儕ガ嘗テ實見セシ所ナリ。兎ニ角ニ其文章ノ體宜キヲ得ザリシガ爲ニ、小學ノ敎科ヲシテ索涼(Dry)極ルモノトナセシコトハ蔽フベカラザル事實ナリ。サレバ今モシコノ主義ニ従ヒテ小學校ノ敎科書ヲ編纂シタランニハ、一ハ男女ノ文體ヲ一ニスルコトヲ得べク一ハ以テコノ弊害ヲ鏟去スベキモノナリ。故ニ余儕ハ言文一致ノ勢力ト、男女文體ノ差異トハ反對ノ方向ニ作用セルモノニシテ、言文一致ス

ルノ時ハ正ニコレ男女文體ノ差ノ消滅スル時ナルコトヲ信ズ。但シ余儕ハ今日男女用フル所ノ言語ハ其體ヲ異ニセルモノニアラズトイヘル前提ヲ是認シテコノ歸結ヲコヽニ明言スルモノナリ。

カクノゴトクシテ文能ク言ト一致スルニ至ラバ、男女其文體ヲ異ニセズシテ、ヨク自己ノ意趣ヲ述ブルコトヲ得ルニ至ルヤ必セリ。シカレドモソノ事、茲ニイフ處ノモノハ其文章ノ體ニシテ、男女同一ノ文章ヲ書スルニ至ラシムベシトイフニアラザルナリ、蓋シ男ト女ト元來其性ヲ異ニスルヲ以テ、其言ハトン欲スル意趣モマタ同カラザレバナリ。

以上次世ニ成功ヲ收ムルノ目的ヲ以テ專教育上ヨリ見ヲ起シタリシガ。今我邦文章ノ將來如何ヲ論究シテ、一層論據ヲ固メ、尚此主義ヲ貫カンガ爲、現時ニ行ヒテ效アリト考フルモノヲ述ベントス。

ソレ世界何レノ國ヲ問ハズ、甚キ野蠻國ニアラザル限リハ、自國ノ言語アレバ必ズ自國ノ文學 (Native Literature) アリ、自國言語アリテ自國ノ文學ナキ我邦ノ如キハ未ダ聞カザル處ナリ。英國ノ如キハ第十五世紀ニ至リテチョーサー氏出デテ駁雜極マリタル言語中ヨリ、自國ノ文學ヲ組立テタリ。今我邦ニテハ國人認メテ是コソ我邦文(National Literature)ナレド公言スルニ足ルモノナク、一方ニテハ漢文ノ直譯トモイフベキ文體ヲ用フレバ、又一方ニテハ歷史、金石文等ニ純粹ナル漢文ヲ用フル等ハ奇怪ナル事相ナリトイフベシ。畢竟カクノ如キ有樣アルハ事物ヲ叙シ、思想ヲ寫スニ十分ナル自國文章ナキガ爲ナリ。故ニ今日ノ急務ハ今日ノ如キ駁雜極マレル言語中ヨリ、自國ノ文章ヲ組立ツルニアリ。卷首ニ論究セシ文章變遷ノ歷史ヲ考フルニ下ノ事實ヲ見出スベシ。唐土ノ勢力強カリシコト彼ノ如ク、朝野擧ゲテ唐土ニ心醉セシコト彼ノ如ク、唐土ノ新事物我邦ニ輸入シ、從ヒテ其言語文字ヲ輸入シタリシニモ拘ラズ、唐土ノ語法ヲ輸入セシコトナク、輸入シタルノ言語ハ之ヲ我國樣ニ變ジテ我語法ノ下ニ服從セシメタリ。コノ已然ノ事實ニ觀ルトキハ亦以テ我邦文章ノ將來ヲトスルニ足ル。我邦ノ將來ニハ西洋人ト雜居スルニ至ルコトモアルベク、西洋事物ノ輸入スル今日ヨリ多キニ至ルベク、從ヒテ、西洋ノ言語文字尙一層多ク輸入スルニ至ルベシトイヘドモ、到底其語法ヲ輸入スルコトナカルベク、ソノ輸入シタル言語文字ハ又之ヲ我國樣ニ變ジテ我語法ニ服從セシムルハ前述ノ場合ト同樣ナルベキコト明ナリ。シカラバ自今西洋ノ新事物新思想輸入シ來ルトキ、我固有ノ文字ニシテ十分ニ其意義ヲ顯スニタラザルコトアラバ、西洋ノ字音ヲ取リテ之ヲ國樣ニ變ジ、我邦語トナシテ我文學ノ資本ヲ富マシメテ可ナリ。必ズシモムツカシキ漢字ヲ用ヒテ不十分ナル反譯ヲナスニモ及バヌコトナリ。カクノ如クナストキハ我邦固有ノ語法ハ發達シテ如何ナル思想事

物モ言顯シ能ハザルコトナク、叉我邦ノ語ヲ全廢シテ他國ノ語ヲ納レテ之ガ代用ヲナスノ必要モナク、叉ムツカシキ漢字ヲ用フルノ必要モナカルベシ。カクノ如キ境域ニ至ラバ卽チ我邦文ノ一定シタル時ニ達シタリトイフベシ。ソレ一國ノ文學ハ其國風ニ密接ノ關係ヲ有スルモノナレバ、言語ハ固有ノ語法ニ從ヒナガラ文章ノミ法ヲ外國ニ取ル如キハ之ヲ自國ノ文章ト稱スベカラザルノミナラズ、國風ノ上ニ大害アルモノトイフベシ。故ニ將來定ムベキ邦文ハ言文一致ノモノナラザルベカラズ。シカラバ則チ言文一致ノ主義ヲ執リテ文字教育ノ方針トナスハ我邦將來ノ文學ヲ相立ツルノ第一着トイフベキナリ。

コノ目的ヲ達センガ爲ニハ成功ヲ次世ニ期シテ教育上ニ此主義ヲ施スコト緊要ナルハ勿論ナレドモ、現今此目的ヲ達スルニ是ルノ方法アラバ及ブベキダケ之ヲ用ヒザルベカラズ。此主義ニシテ政府ノ容ル、處トナルトキハ、政府ニ望ムニ宜ク率先シテ其布告公文ヲ書スルニ此主義ニ依ルコトヲ以テセザルベカラズ。我邦ノ如キ國柄ニテハ所謂政府ハ風ニシテ、人民ハ草ナレバ、政府ノ布告公文ニシテ此主義ヲ執ラバ、人民ノ之ニ靡クコト速ナラン。世ノ記者ニシテ此說ニ同意ナラバ記者ニ望ムニ其著書、新聞ノ文章ヲ草スルニ、此主義ニ依ルコトヲ以テセザルベカラズ、朝野ノ學士先生ニシテ此說ニ同意ナラバ、學士先生ニ望ムニ其淵博ノ學識ヲ以チ古ニ考ヘ、今ニ徵シテ完全ナル邦文ノ基礎ヲ置クコトニ盡力セラレンコトヲ以テセザルベカラズ。

然リトイヘドモ教育ノ方針ヲ定ムルコトニマレ、現今ニ用ヒ得ベキ方法ニマレ、一國ノ輿論之ニ傾キテ後之ヲ行ヒ得ベキモノナレバ、マヅ此主義ヲ抱懷セル朝野ノ學士紳士ヲ始メ、現在教務ニ從事スル諸子、コノ主義ノ一團結ヲ組織シテ此主義ノ廣傳ヲ計ルコトハ最初ニ着手スベキコトナリトス。

附言　此論文ヲ草シ了リテ後、我邦文章ノ基礎ナル邦語ノ文典ヲ索メシニ完全ナル成書アルコトナシ。故ニ將來我文章ヲ起サント欲セバ完全ナル邦語ノ文典ヲ編纂スルコト最喫緊ノコト、ス、而シテ此事タル獨力ノ能ク辨ズル處ニアラザレバ、文部省ニテ學識アル大家ニ囑託シ、及ブベキダケ便利ヲ與ヘテ完全ナル文典ヲ編纂スル今日ノ急務ナリト信ズレバ茲ニ附言ス。（完）

（明治二十一年五月發行大日本教育會雜誌第七十三號並第七十四號所載）

四　山田氏の言文一致體に對する當時の文壇人の態度

山田美妙齋氏がその最初の言文一致體の小說を「いらつめ」の初號で發表したことが、同氏の硯友社を離れる原因と

なつたやうに考へてゐる人もあるやうであるが、同氏が「いらつめ」に關係したのも、又その誌上に言文一致體の小說を初めて載せたのも、私が關係したことであつたから、當時の事情は一應は知つてゐるのであるが、私の知つてゐる限りではそんな面倒らしいことは全然なかつたやうであつた。私は硯友社がどんな內容をもつものであるか更に承知せず、山田氏がその硯友社でどんな立場に在つたのかにも關せず、唯私と親しくしてゐて、年の若いのに小說らしいものを書いてゐたことを知つてゐたので、私は同氏ならば私共の希望する言文一致體の小說を書く力があるだらうと思つて、簡單にこれを勸めたのにすぎなかつた。當初同氏自身も深くは氣乘りせず果して面白いものが出來るかどうかぐらゐの輕い意味に考へてゐたらしく思はれてゐた。それを私は同氏の母親に說いて母親からもやつてみてはどうかぐらゐの話があつたので、やつと筆を取るに至つたのだと思つてゐる。それでいよ〳〵その言文一致體の小說なるものを試作されて一部分が脫稿した時、私は同氏の宅へ出かけていつて、母親と私との面前で同氏が一々朗讀するのを聞いたのであつたが、私は同氏のよい聲にきゝとらはれてゐたのであつたけれども、母親からは種々の批評が出て幾度か訂正されたことを記憶してゐる。當時の山田氏は水道橋を入つて左へ駿河臺へ上る阪を上つた所の右手の長家に住つてゐて、何でも祖母の方と母親との三人暮であつた。そして何事も母親の監督の下にやつてゐたのであつて親の許を離れて東京へ來てゐた私どもの眼にはその監督が普通の監督以上のものであつて、なか〳〵嚴しい干涉を受けてゐたやうに見えた。そんな風であつたから、硯友社の尾崎氏等とは家庭關係では丸で異つてゐる立場に在つたので尾崎氏等の如き人々と單に創作上の專門的のことだけならば兎に角、一體同志の友人として深く交つてゆくが如きことは到底望まなかつたのであつたらうと思はれてゐた。「いらつめ」に關係したことの如きは、山田氏本人に於てもそれほど深く考へたことでもなく、又尾崎氏等の人々も決してこれを重くは見てゐなかつたので、それで果して世の人

の注意を喚ぶことの出來るものが作成されるだらうかぐらゐに思つてゐたにすぎなかつたやうに思はれた。「いらつめ」の號を重ぬるに至り、山田氏自身も大に油が乘つてきて、幾分かの自信も出來、又研究も進んで、一個獨立の言文一致體の創作を發表するやうになつて、始めて多少世界からも認められ、文壇人の話題にも上つたのであつて、始めは「いらつめ」の中の一小說をかく山田氏であつたのが、次第に逆になつてきて、山田氏の「いらつめ」であるかの如く、「いらつめ」よりは山田氏の方が大きくなつてきた時には、もはや「いらつめ」としてはその末期に近づきつゝあつたのである。そして言文一致體としては當初に在つては多少反對の意味を表してゐたものも後には自ら進んで言文一致體でかくやうにもなつたのであつて、現に尾崎氏の如きもその一人であつたのである。尾崎氏と山田氏との關係は決して「いらつめ」云々に依りて變化を來したのではなかつたと思つてゐる。尾崎氏自身も或る機會で云つてゐたやうに、「硯友社は文學運動のための團結ではなく社交機關平つたく云へば遊び仲間、進んでは兄弟關係で」有つたのが眞相らしく思はれた。その遊び仲間の遊び方が段々進展してくれば、山田氏のやうな家庭的干渉を受けてゐるものは、いつまでも同一步調を取ることは出來ない筈であつたのである。

「いらつめ」同人の立場から云へば、少々殘念のことではあつたが、私共が世の歐化主義に反對して雜誌「いらつめ」を發行するに至つたことも、又山田氏がその同人の一人となつて、その誌上に新らしい言文一致體の小說を載せたことも、實を云へば殆んど世の注意を喚ぶには至らなかつたのであつた。今日明治文學の研究をやつてゐる人の書物中に、「二十年に出た美妙齋主宰の以良都女も文藝物をのせて一方の權威となつた」など見えるのは聊か大層らしい記述であつて、寧ろ今日になつて色々の研究や說明が加へらるゝので、實際以上の映畫に仕上げられつゝあるやうにも思はれる。山田氏のこの種の小說が世間の注意を惹くやうになつたのは、金港堂の「都の花」に關係するやうになり、「國

民の友」の附錄に「胡蝶」の一篇を載せて、而もその挿繪に裸體美人の少々思ひ切つたものを入れた時から以後のことと云つてよいだらう。言文一致體創始の第一期に於ては甚しく反對するものもなかつたが、さらばと云つて贊成するものも現はれなかつたのであつて、云はゞ有耶無耶の中に、他からよいとか惡いとかの區々の批評も受くるに至らない間に、所謂スローモーションで擴められていつたと云ふべきであらう。言文一致創始の第一期に於けるかゝる有樣は明治文學を研究するものゝ特に注意せねばならぬ所であらうと思ふ。

當時已に一方の旗頭を以て任じて居られた坪内逍遙氏の如きも、新進の山田氏に對してはまだ何等注意もしてゐなかつたらしく、その言文一致體に就いても判然たる意見は容易に發表されなかつたやうである。氏の說では「支那や西歐では言文おほむね一途なるが獨りいかにせむ我國にては言文一途に出でざるから、文章上にて用ふる言葉と平談俗話に用ふる言語とは、さながら氷炭の相違あり」など云つて居られ、俗文體の說明としても、「俗語ははかなきもののやうではあるが、なか〳〵そんなものではなく、作者たらんものは能々こゝらを考へねばならぬ、言は魂であり、俗言には七情がそのまゝ現はれると云ひ、俗言のまゝに詞を寫せば相對して談話するが如き實感味を覺ゆると云ひ、かうした利の外に俗文體には又その不便もあるのであるが、それを除いて新俗文とも云ふべきものを誰か才子が創造して吳れぬか」と云つて居られたと云ふことである。西歐に於ける言文のおほむね一途なることは分るが、支那も亦さうであるやうに云はれたのはどうであらうか。そして新俗文の創造を世の才子に向つて望まれたとしてその新俗文なるものゝ果してどんなものであればよいのか、その邊のことも實は判然しなかつたのであつた。又尾崎氏の如きも、當初は極力言文一致體を排斥し、豆腐と言文一致とは大嫌ひだと云ひ、文章體を否定することは文學そのものを否定するものだと云つて盛に反對して居たのであつたが、その尾崎氏が後には何等前言の取消しをもなさずに、自分も亦

言文一致を用ふるやうになつた事情などは果して何事を語るのであらうか。研究せねばならぬほどの問題であることを知りつゝも、何等の研究もなすに至らず、始めには無暗に反對しつゝあつたものが後には平氣で自らこれをやるやうになつたが如き、言文一致體の創始時代に於ける著名な文壇人の態度なるものは今から考へても殆んど諒解に苦しむものがあつたと云つてよいだらう。併し私は言文一致の創始時代にかゝる事情が現はれてゐたことは面白い事實であつて、明治文學上から見ても頗る興味のあるべき點であらうと思ふ。

五　山田美妙氏と二葉亭四迷氏

雜誌「いらつめ」の同人等が山田美妙齋氏をして言文一致體の小説を書かしめこれを發表した當時に於ては殆んど問題とされなかつた。表面に立つて反對するやうな人もなかつた代りに又これを贊成しその實行を援助せんとするほどのものもなく、至極平穩無事であつた。從つて我々の外に言文一致體の文章を擴めんとして苦心しつゝあるものがあるなどゝは全然思ひもよらず、全く我々の仕事であつて、多少の效果を收めんとするには相應の努力はせねばならぬものと考へてゐた。然るにその後になつて長谷川四迷氏の如きも我々のと殆んど同時に同樣の文體の實行を試みんとして居られたことを聞いたのであつたが、相方とも獨立的にやつてゐたのであつて、この問題に就いての疑問の研究だとか又擴張の方法についても何等の交渉もなかつたやうであつた。單に二者の間に交渉がなかつたと云ふばかりでなく、二者ともに自分が言文一致體の創始者だと思ひつゝやつてゐたものだと推察さるべき節もないではなかつた。山田氏は「いらつめ」第一號の風琴調の一節に序言を附記して居るが、次ぎのやうなことがかいてある。

言文一致は文明の證標と或人も言つた通り是ほど宜い事は無いと言ふ處から、近頃に至つては我國の文に關し、些しは焦慮する人も出て來たは實に忝い事だ。然しながら、何を言ふにも習慣と云ふ大敵が有るので一旦新奇の俗體に改めると、ヤレ語氣が卑

いのヤレ風韻に乏しいのと變に皮相に惑溺した人が喧ましく言つて出て來る。それ故に皆猶豫していまだに俗體の規律を穿ち、それを專用した者もなし。殊に世話物の小説に至つては其詞のみ辛うじて俗體になつて居るもの丶、その地は矢張り雅文體の「ナリ」、「ケリ」、「ベシ」などを用ゐ地と詞とをして觝牾させるとは實に見苦しい事だ。何しても之をば改めなくてはならぬ。が、それが容易でない。容易でない故言文一致は迚も日本の今日に望む事は出來ないと筆を投げた人もある。それもまた氣が短い。なるほど雅文體には俗文體の及ばない樣な處も有るが、また俗文體だとて鹽梅さへ巧に爲れば、中々雅文體に劣る所もなく、而も自然に規律も有つて言ふに言はれぬ妙味も有る。此小説の文などをば、稍此邊に注意して書いたもので、一口に言へば圓朝子の人情噺の筆記に修飾を加へた樣なもの。是亦隨分耳馴れぬ風ゆゑ、小言を言ふ人の有るは知れた事。然しながら、小生とて此體を造り創めるに於ては可なり苦辛をも爲たもので、まんざら定律を立てぬでもなく、定律に從はぬでも無い。それをば此緒で言ひ盡くせる者では無い故。此處には全くそれを省いた。たゞその些斗り細かい事は小生が作つた小説膺金剛石の序に在る。

右の序文中に在る贋金剛石と云ふのは、夏木立の中に收めてある一短篇ものであるが、これに對する美妙齋氏の序文は一寸手に入りかねるので果してどんなことを書いて居るのか分らぬが、夏木立そのものに就いての序分には次のやうなことがかいてある。

夏木立といふ中には栴檀もあり、また荊棘もあらうといふのはやはり手前勝手で、世間の評がさうで無ければ仕方の無いことです。第一の「籠のとりこ」といふのははじめ演劇正本に作つて見たので、それが思ふやうで無かつたため其儘散文にしたのですから、なほ其痕跡も殘つて居ます。それも直せばいゝのですが、もと〳〵是は「しえィくすぴィあ」翁の「れいぷ、おゞ、はうくれしあす」といふ詩がうらやましかつたあまりその眞似をして見たのですから、せめて、似ると似ぬとは格別にして、その他日の思出ばかりに其儘殘して置いたのです。其外ある雜誌や新聞紙へ出たことのあるのも一緒になつてこの中に集まつて居ますが、要するにちと時世後れの物もあつて、實にその作は(文章で見ても)今日の物ではありません。

文章ははじめ下流に對する語法の方が以上のものより簡單ゆゑ、言文一致體の基礎となるだらうと思つたまゝ、此中の文のとほり殘らずそれが地を占めて居ましたが、また此頃になつて考へて見れば些し違つた注意も出て來ましたゆゑ、今は大抵同等に

對する語法をして地を占めさせて居ます。此中の文の性質の仔細は此點にあるのです。どうぞ看客がたもその御心得に願ひます。此中の文を書く頃には先文章の改良の第一着として被動詞を多く用ゐ、また主客の格を明亮にすることに心を傾けて居ましたので、自然その邊りの痕跡もありますが、此頃になつて見ると、いさゝかの不審の件が出來て來ましたので、しばらくその得失をば研究することゝし、今日の文には止むを得ぬ外は敢て豹變の手段を用ゐません。不圖見慣れぬため、いぶかしく思召す方もあらうと考へて、それでから諄々しく述べました。

明治二十一年五月のはじめ　美妙齋主人

右にあげた二つの序文を見れば、美妙齋氏に於て言文一致體の創始者として苦心をし研究もしてゐたらしい事情は明に認められる。そして氏の外に有力な文壇人の中で別に同じやうなことをやつてゐるものがあつたらしい氣配は更に見えず、獨立獨歩、言文一致の文體を押し擴め、以て支那の胡適氏等が云つてゐるやうな言文一致文學革命とも云ふべき運動を一手に引き受けつゝあるやうな氣慨を示してゐたのである。茲に注意すべきは「いらつめ」第一號から掲載された「風琴調一節」が山田氏の試みた言文一致體の最初のものだと思つてゐたのであつたが、氏の序文によるとその前に既に贋金剛石の小篇があつて、而もその序文にこの文體に關して多少詳細な意見が發表されて居ることを見れば、この小篇は「いらつめ」以外の他の雜誌に先んじて掲載されたものであるらしい。然れどもこの一篇は實に小篇であつて、これを以て氏の試みた最初の作品として見るには餘りに短少なものである。或は「我樂多文庫」にでも掲載して當時の同人仲間であつた人々に示したものかとも思はれる。詳細なることはこれを調べる由もない。只今日明治文學を取扱つてゐる人々の書物を見ると、硯友社の我樂多文庫なるものは堂々たる一機關の如く云はれてゐるやうであるが、私どもの知つてゐる所では、硯友社と云つても中學校を卒業し高等學校に進入したばかりの年少の生徒であつて、多少文學の趣味を同じくする連中が、お互の作品を一小冊子にまとめてその仲間限りの回閲に供して互に批判し

互に樂しみつゝあつた程度のものにすぎず、今日ではこんな會でも又こんな筆寫して間に合はす小冊子のやうなものは中學の上級や高等學校などにはいくらもあるのである。只それが後になつて、連中の人々が次第に年齡も長じ學問も進み創作の術も巧者になつて、仲間限り閲覽のものが外部に向つて販賣せらるゝやうになつたのであるから、この後の進步した硯友社と我樂多文庫を以て當初期のそれらを單純に想像するならばそこに必らず一の錯誤があり易きことを忘れてはならぬと思ふ。學術上の進步の筋道をたどる上に於ては逸すべからざるものには相違なきも簡單な原始的のものたるにすぎなかつたのである。だからこの時代の我樂多文庫に何か掲載したと云つてもこれを世間に發表したものと見ることすら出來ないぐらゐのものであつたらう。

長谷川四迷氏は「余が言文一致の由來」なる一篇を遺してゐる。この一篇はきはめて露骨に氏の當時の事情を說明してゐるやうに思ふからこれを茲に掲げる。

言文一致に就いての意見と、そんな大した研究はまだしてないから、寧ろ一つ懺悔話をしよう。それは、自分が初めて言文一致を書いた由來――も凄まじいが、つまり、文章が書けないから始まつたといふ一伍一什の顚末さ。

もう何年ばかりになるか知らん、餘程前のことだ。何か一つ書いて見たいとは思つたが、元來の文章下手で皆目方角が分らぬ。そこで坪内先生の許へ行つて、何うしたらよからうかと話して見ると、君は圓朝の落語を知つてゐよう。あの圓朝の落語通りに書いて見たら何うかといふ。

で、仰せの儘にやつて見た。所が自分は東京者であるからいふ迄もなく東京辯だ。卽ち東京辯の作物が一つ出來た譯だ。早速、先生の許へ持つて行くと、篤と目を通して居られたが、忽ち礑と膝を打つて、これでいゝ、その儘でいゝ、生じつか直したりなんぞせぬ方がいゝ、とから仰有る。

自分は少し氣味が惡かつたが、いゝと云ふのを怒る譯にも行かず、と云ふものゝ、内心少しは嬉しくもあつたさ。それは兎に角圓朝ばかりであるから無論言文一致體にはなつてゐるが、茲にまだ問題がある。それは「私が……で御座居ます」調にしたもの

か、それとも「俺はいやだ」調で行つたものかといふことだ。坪内先生は敬語のない方がいゝといふお說である。自分は不服の點もないではなかつたが、直して貰はうとまで思つてゐる先生の仰有る事ではあり、先づ兎も角もと、敬語なしでやつて見た。これが自分の言文一致を書き初めた抑もである。

暫くすると、山田美妙君の言文一致が發表された。見ると「私は……です」の敬語調で、自分とは別派である。即ち自分は「だ」主義、山田君は「です」主義だ。後で聞いて見ると、山田君は初め敬語なしの「だ」調を試みて見たが、どうも旨く行かぬといふので「です」調に定めたといふ。自分は始め「です」調でやらうかと思つて、遂に「だ」調にした。即ち行き方が全然反對であつたのだ。

けれども、自分には元來文章の素養がないから、動もすれば俗になる、突拍子もねえことを言やあがる的になる。坪内先生はも少し上品にしなくちやいけぬといふ。德富さんは(其頃國民之友に書いたことがあつたから)文章にした方がよいと云ふけれども、自分は兩先輩の說に不服であつた。と云ふのは、自分の規則が、國民語の資格を得てゐない漢語は使はない、例へば、行儀作法といふ語は、もとは漢語であつたらうが、今は日本語だ、これはいゝ。併し擧止閑雅といふ語は、まだ日本語の洗禮を受けてゐないから、これはいけない。磊落といふ語も、さつぱりしたと云ふ意味ならば、日本語だが、石が轉つてゐるといふ意味ならば日本語ではない。日本語にならぬ漢語は、すべて使はないといふのが自分の規則であつた。日本語でも、侍る的のものは已に一生涯の役目を終つたものであるから使はない。どこまでも今の言葉を使つて、自然の發達に任せ、やがて花の咲き、實の結ぶのを待つとする。支那文や和文を強ひてこね合せようとするのは無駄である、人間の私意でどうなるもんかといふ考へであつたから、さあ馬鹿な苦しみをやつた。

成語、熟語、凡て取らない。僅に參考にしたものは、式亭三馬の作中にある所謂深川言葉といふ奴だ。「べらぼうめ、南瓜畑に落こちた凧ぢやあるめえし、乙うひつからんだことを云ひなさんな」とか、「井戸の釣瓶ぢやあるめえし、上げたり下げたりして貰ふめえぜえ」とか、「紙幟の鍾馗といふもめツけへして中揚底で折がわりい」とか、乃至は「腹は北山しぐれ」、の「何で有馬の人形筆」のといつた類で、いかにも下品であるが併しポエチカルだ。俗語の精神は玆に存するのだと信じたので、これだけは多少便りにしたが、外には何にもない。尤も西洋の文法を取りこまうといふ氣はあつたのだが、それは言葉の使ひざまとは違ふ。

當時、坪内先生は少し美文素を取り込めといはれたが、自分はそれが嫌ひであつた。否寧ろ美文素の入つて來るのを排斥しよ

うと力めたといつた方が適切かも知れぬ。そして自分は、有り觸れた言葉をエラボレートしようとかゝつたのだが、併しこれはとう〳〵不成功に終つた。恐らく誰がやつても不成功に終るであらうと思ふ、仲々困難だからね。自分はかうして詰らぬ無駄骨を折つたものだが……。

思へばそれも或る時期以前のことだ。今かい、今はね、坪内先生の主義に降參して、和文にも漢文にも留學中だよ。

更に四迷氏は浮雲の序言に、こんなことを云つてゐる。

薔薇の花は頭に咲て活人は畫となる世の中獨り文章而已は黴の生えた陳奮翰の四角張りたるに頬返しを附けかね又は舌足らずの物言を學びて口に涎を流すは拙し是はどうでも言文一途の事だと思立てば矢も楯もなく文明の風改良の熱一度に寄せ來るどさくさ紛れお先眞闇三寶荒神さまと春のや先生を頼み奉り缺硯に朧の月影を忍び懸なく閉籠て黑白も分かぬ烏夜玉のやみらみつちやな小説が出來しぞやと我ながら肝を潰して此書の卷端に序するものは

明治丁亥初夏　二葉亭四迷

四迹氏が前に掲げた由來の中にも、「暫くすると山田美妙君の言文一致が發表された」と、かいて居る點より見れば、山田氏よりはいくらか以前に既に言文一致體を試みつゝあつたやうにも見えるが、氏は山田氏のは「です」調であつて、自分のは「だ」主義だと云つてゐるが、山田氏は始めはやはり「だ」主義であつたのだが、種々研究の末に敬語調に變つたのであつて、「いらつめ」の初號から掲載したのは「だ」調であつて、都の花時代のものは「です」調になつてゐるのだから、四迷氏が山田氏の言文一致發表のものと認めてゐるのは、最初の第一期のものではなく、第二期のものたることが分る。尤も山田氏が「だ」調から「です」調になつたと云つても、その間一年か一年足らずの時日があるのにすぎない、早くて明治十九年頃、遲いとしても二十年か二十一年頃のこと、必らずしも二者その先後を詮索せねばならぬほどの相異ではない。四迷氏と美妙氏と二人者共に言文一致體の創始に盡力したものであつて、同じ時頃に同じや

うに言文一致體の企てをやつてゐたものとして、もし言文一致體創始云々の功を云ふならば、二人者共に又同じ程度の功があつたとして差支へはないだらう。しかしさう云へばとて、何もかも二者同樣だと云ふわけではない、その出發の動機に於ても餘ほど異つた動機があるやうだ。私どもの見る所では四迷氏のは外國語の直譯から入つたのではあるまいかと思ふが、果してどうであらうか。外國語の直譯から言文一致文のヒントを得たのではなからうか。氏は露國小說を以て小說家の業を始め、又それを以て相應の盛名を博してゐたのであつたやうに記憶してゐる。然るに山田氏の方は前にも云つたやうに、我々の意見に從つて、文は言に隨はざるべからずと云ふ理論から出發してその實行を創作の上に求めたのである。そして山田氏の背後には我々「いらつめ」同人が控へて居り、又その同人の中には新保磐次氏の如き人もあつて、中小學校の教科書や國語の教授の上にまで言文一致の主義を擴めんとしてゐたのであるから、我々の立場から見れば、言文一致の小說を始めんとしたのは、その考への一小部分に限られたことなのであるから、四迷氏と美妙氏と共に同じく言文一致の小說をかき始めたと云つても、二者の間その出發の意義に於ては著しい相異のあることを注意してもらひたい。一つ大衆向きの小說をかいて見ようと云ふ考と、我國の文學革命の意味に於て言文一致を全般に押し廣めたいために先づ小說をもその手段の一に利用して言文一致の小說をかきはじめたと云ふの相異である。これは山田氏の肩を持つと云ふ譯ではなく、當時私どもの考へてゐたことを有りのまゝに說明するのである。後に述べる積りであるが「いらつめ」同人の一人である新保磐次氏が述べられてゐたことや事實やられたことなどを顧みてもらへば能く分る筈である。

四迷氏と美妙氏と、この二人者が言文一致の行文の上にいづれも圓朝氏の講談即ち所謂人情噺しなるものが重要なる材料となつたことは面白い事實である。圓朝氏は一個の講談師であり寄席の高座に上ることを職業とする所の噺し

家なるもの丶一であつたに相異ないが、相應に學問もあり、創作上の技能も持つてゐたのであつて、その講談は新聞上の續き物となつて揭載せられ又は單行本として廣く世に行はれたのであつて、怪談牡丹燈籠の如きはその最も著名なものである。外國語でかいてある小説を直譯すればそれが直に一種の言文一致體の小説であるが如く、圓朝子の講談を速記すればその速記自態が既に一の言文一致體の講談文となつて居るのである。圓朝氏の講談の速記は實に一種の談話體であつて前に聽衆のあることを假定してその聽衆に向つて試みる所のお話に外ならざるを以て、これを文法の上から見れば第二人稱であるのであるから、第三人稱であるべき文章の地としては少しくあてはまらぬ所がないでもないが、當時言文一致體を試みつ丶あつた人には文章の一節の結びが問題となつてゐて、「だ」では野卑であるし「です」では敬語となつて第三人稱であるべき地の結びとしては面白くないと言はれながらも、「です」調は美妙氏等の採用する所となつたのであるから、圓朝氏の講談の速記はそのまゝで言文一致體の文章の一模範ともなつたのである。標準を文章に取つてこれを言葉に直して言文一致體を得るのも、標準を言葉に取つてこれを文章に直して言文一致體を得るのも、行く途は異つてゐても落着く先の結果は同じであるのだから、四迷や美妙氏が共に文の人でありながら言の人たる圓朝氏に學ばんとしたのも寧ろその當を得たものと云ふべきであらう。その上に言葉の標準はどこに取るべきかの問題に於ても東京人で而もその中級者の言葉を取る外はあるまいと云ふのが、當時言文一致の研究をやつてゐた人々の一致する所であつて、圓朝氏のは正しく中流の東京人の言葉を慣用してゐたのであるらしいから、この點でも四迷氏や美妙氏が圓朝氏の講談を手本とせんとしたのは又その當を得てゐたと云つてよい。尤も四迷氏のはこれを美妙氏のに比すれば、やゝ下流社會の言葉を標準としたのではないかと思はるゝ節もないではないが、その東京人の言葉を標準とした點に於ては二者その趣を一にしてゐたことは間違ないのである。

六　明治の初年に於ける言文一致

この一篇に於て私が目的としてゐることは、今から四十七年前に私どもが先輩の人々と共に雜誌「いらつめ」を刊行し、その誌上に山田美妙氏の言文一致體の小說を掲載した當時の顛末を記述するに在るのだけれども、その續き合からして當時殆ど同時に言文一致體の小說を試みつゝあつた所の二葉亭四迷氏の上に及ばざるを得ないことゝなつたのであるが、今又更に進んでその當時の以前に於て言文一致の文體に就いて說を述べてゐる人々のことについて少しく述べてみたいと思ふ。先づ明治十九年の三月頃に物集高見先生が「言文一致」と題する一篇を公にして居らるゝが、一部の人はこれを以て言文一致の始祖となし、恐らく言文一致と云へる語もこの論文が最初であらうと云つてゐるものもある。そしてこの論文が美妙氏や四迷氏の先驅となつたものであると論じてゐるものもある。然れども美妙氏が私ども「いらつめ」同人等の勸誘に動かされて、言文一致の文章のことを考へこれを小說に應用して一種の小說をかき出したのはこの物集先生の論文と殆ど同時であつて、四迷氏が同樣の企を試みたのも亦同時代のことであつて、その間前後の大差はないのであるから、物集先生の言文一致を見て言文一致に關する最初の發表として見ることも如何と思はれるし、又美妙氏や四迷氏の言文一致の先驅だと見るが如きはどうも首肯いたしかねる所である。この論文は「かなのてかゞみ」と云ふ雜誌の第四十號以下に連載されたものであつて、言文一致の聲が喧しくなつてきた當時にその趣旨を贊成してこの一篇を草せられたものであつて、「かなの會」に於て演說する材料として認められたものであると云ふことだ。果してさうだとすれば先生の外にもこの言文一致についての意見を出した人は數名もあつたやうである。日下部重太郎氏の「現代の國語」と題する書中に次の如き記述がある。

明治十五年に矢田部博士が東洋學藝雜誌に載せられた、「羅馬字を以て日本語を綴るの說」には、東京語を以て文章を綴るが宜い

と云ふことに說き及んである。その翌年成立した「かなのくわい」の會員にも言文一致を唱へた人々があり、中にも金田豐太郎氏は俗言と耳近い雅言とを以て文章を書くべきことを說かれ、三宅米吉博士は言文一致には國々の方言を調べて標準語を定める必要があることを唱へられ、島野清一郎氏は日用文は東京の中流語で書くが宜いと述べられ、物集博士は文章は話の如く書くべきことを論ぜられた。又十七年に起つたローマ字會の會員にも、言文一致を唱へた人々がある中に、チャムブレン B. H. Chamberlain 氏はローマ字の難解を除くには、先づ文章を言文一致にせねばならぬと說かれた。

右の記述は大體に於て正鵠を得て居ると思はれる。物集先生の「言文一致」は頗る丁寧に說かれてはあるが、當時に於ける他の論說に比して必らずしも新らしい意見として認むべきものはないやうである。寧ろ當時の人々が唱へてゐた所のものを先生の筆によつて最も平易に分りやすく說示されんとしたことが先生の趣旨であつたらうと思はれる。近代に於ける言文一致を始めて唱へたものとしては文獻の上に載せられて居るものでは、慶應二年に將軍德川慶喜の許へ提出した前島密氏の建白書を擧げねばならぬであらう。その建白書の中に次の如き一ヶ條がある。

國文を定め文典を制するに於いても必ず古文に復し「ハベル」「ケルカナ」を用ゐる儀には無御座今日普通の「ツカマツル」「ゴザル」の言語を用ひ之れに一定則の法を置くとの謂ひに御座候言語は時代に就いて變轉するは中外皆然るかと奉存候但し口舌にすれば談話となり筆書にすれば文章となり口談筆記の兩般の趣を異にせざる樣には仕度事に奉存候。

右の前島氏の建白は要するに言文一致の文體を定むべきことを唱へられたものと云ふべきである。而も間もなく將軍家の政權奉還となつたので、又明治二年に國文教育についての建議を提出せられ、その施行方法として

新撰國語は漢語西洋語を論せず之を容納し文章は古雅を主とせず近體の俗文を主とす

と提示せられたが、實際に於ては國文には漢文直譯體が一般に行はれ、いまだ言文一致體の文章は殆ど行はれなかつたが、一部の學者の間にはこのことが論議せられたらしく、現に加藤弘之先生は明治三年の七月に「眞政大意」と題す

る二冊もの丶一書を發行されたが、その文章はこの前島氏の建議に在る「ゴザル」調で認められて居るのである。この「眞政大意」は色々の點に於て頗る有名な書物であるが、絶板となつて容易に手に入れがたきものであるから、明治の初年に於ける言文一致體文章の實例として、その一節を擧げる。

足下、拙著立憲政體略ヲ讀マレテ、所謂立憲ニ政體ノ大槪ヲ知リ、且ツ其公明正大ニシテ、大ニ他ノ諸政體ニ優ル所以ヲモ承知致サレタガ、併シ夫ハ唯制度上ノミノコト、何故右等ノ國々ニテノ政事ノ施シ方ヲモ、共ニ論ゼナンダトノ疑問、實ニ尤ノ事デゴザル、乍レ去素ト國政ニ治法ト治術トノ二通リガアリテ、治法トハ所謂治安ノ基本タル憲法制度ノコトヲ云ヒ、治術トハ今日施行スル治安ノ術ヲ申ス事デ、元來二樣ノ事故、政體略ニハ此治法ノ事ノミヲ槪論致シタ事ナレド、併此二ツハ國政ノ上ニ於テ、所謂車輪鳥翼ノ如キモノデ、決シテ一ツモ缺ク事ハ出來ヌデゴザル、何故ト申スニ、治法ナル憲法制度ガ全ク備ハラヌ時ハ、治術ノ基本ガ確乎ト定マラヌ故、動モスレバ暴逆ナ政事ヲナス樣ニナリ、又縱令ヒ結構ナ治法ガアリテモ、治術ガ拙クシテ、治安ヲ營ムニ足ラヌ時ハ、折角結構ナ治法モ、遂ニ畫餅トナリテ行ハレヌデゴザル、當時歐羅巴南方ノ各國葡萄牙ヂヤノ西班牙ヂヤノト云フ國々ハ、其治法ガ强チ立ヌト云フ譯デハナケレド、治術ガ甚タ拙クシテ、其精力ガ足ラヌモノヂヤカラ、治法モ殆ド畫餅トナリテ、眞ノ治安ヲ得ルニ足ラズ、又例ノ君主專治ノ國々ニモ、儘其治術全ク拙ナカラヌ國モゴザレドモ、肝心ノ治法ト申スモノガ確乎ト立ツテ居ラヌ故、動モスルト國君ノ威權ガ熾ンニナリスキテ、遂ニ殘虐ノ政ニ陷ル樣ナ事ニナルデゴザル、夫故此二ツハ始終優劣ナク揃ツテ參ラネバ、眞ノ治安ヲ得ルニ足ラヌコトヂヤカラ、先ヅ能ク此理ヲ知ラネバナラヌデゴザル、其上又治術ノ實ニ大切ナト申スハ素ト治法ヲ定制シタリ或ハ變更スルノモ卽チ治術デ殊ニ其第一ノ急務ト申スベキモノデゴザル、夫故治法ノ善イモ惡イモ卽チ治術ノ巧拙ニ拘ルワケデ、善イ治法ヲ定制スルニハ卽チ治術ノ巧ナルモノ、惡イ治法ヲ立ルハ卽チ其拙イモノデ、國家ノ安危存亡ハ全ク治術ノ巧拙ニヨルコトテゴザル。

慶應二年頃に前島密氏が文學關係の人でないのに、國文改革に就いて言文一致の意見を夙に提出されてゐたことは實に驚嘆すべきことであるが、一日以前の德川時代には古典的國文が行はれてゐて當時の日常の言語との間に大なる

懸隔があつて實際上頗る不便利であるから、國文の改革は國家の百政變革と同時に着手すべきであると云ふことに氣がついてのことであつて、我が先覺者が海外の文化に接觸して氣がついた事項の一つであつたのであらう。文は言に伴ふべきものだと言ふ單純なる理論から出發したのではなくて、何もかも御一新であるべき大勢の動きの一つに外ならぬのである。明治維新早々の當時に於ける先覺者の考がこんな點まで及びつつあつたことに我々は敬服せねばならぬ。前島氏の建白には「今日普通のツカマツル、ゴザルの言語を用ひ之れに一定の法則を置く」とあつて、加藤先生の眞政大意の用文は右のツカマツル、ゴザルの語を用ひてある點は注意すべき點であつて、當時各藩から種々の人物が東京へ入り込み來つてゐたがために、東京の言語も亦いまだ今日の如くに洗練さるゝに至らず、實際ゴザル的の言語が一種の階級の人々の間に使用されてゐたのであらうと思ふ。加藤先生の眞政大意は木板の二冊ものであつて、固より大冊子ではないが、谷山樓藏梓とあつて、先生自らその資を投じて刊行せられたものである。尤もこの書は先生の認められた「はしがき」によれば、或人の疑問に對して立憲政體の國々の施政の概則を講述されたのを猶同じ疑を抱く人のために上梓刊行されたのであるから、先生自らの考では單なる講述の筆記文として公にされたものであつて、必らずしも言文一致體の文章の實例として文學上の意見から出發されてのことではなかつたやうに思はれる。併し今日になつてその結果から見れば一種の口語體の過去に於ける實例の一つとして注意すべきものであることを忘れてはならぬ。

かくの如く、明治維新早々の際に於て芽生えんとした言文一致も遂にその發育を見るには至らずして止んだ。それは長い年月の間に練りあげられた普通文の勢力は一朝にしてこれを覆へすことは容易なことでないばかりでなく、言文一致と云つても理窟は立ち易いが、人を滿足せしむるに足るの實例を得がたく、その上に文章の體は在來の普通文そのまゝとして、用語や綴り方を兎めて平易になしつゝ書き易いやうに、分り易いやうに、自ら一種の文章を創始し

て實際の不便利を解消せしめる工夫が尙ばれて、殆ど言文一致と同樣とも見るべく、只文章の結尾が「ナリ」又は「ケリ」となつて居るだけが言文一致體と相異してゐるばかりぐらゐになつて、實際の需要に對する改善としては殆どその目的を達するやうになつたが如きは、他の一方に於て言文一致とするに及ばずとするやうな實情となつたことが僅に芽生えた言文一致の氣運を排斥したのであらう。そしてその最も平易自由な文章の例としては有名なる福澤諭吉先生一流のものを擧げることが出來るであらう。福澤先生の文章は「學問のすゝめ」だとか、「海外事情」だとか、澤山あつて、いづれも當時の時務に緊要なものばかりであつたことは人の知る所である。その文章がいづれも平易で分りやすく、これを一讀すれば同時に意味が直にも分つて、口語體の文章の目的とする所の大半は旣にこれを達成したいも同樣の結果となつたのである。在來の古文的の國文は事實に於て時の口語と餘ほど近いものとなつたのである、却て「ツカマツル」又は「ゴザル」調の言文一致よりも「ナリ」「ナラン」の結尾をもつ普通文の方が一般から歡迎せらるゝに至るのも當然の成行であらう。故に明治維新當初に芽生えた言文一致の氣運は從來からある所の漢文直譯體が平易通俗的なものとなつて、實際の需要を充すことが出來るやうになつたので、自然と世間からも文壇人からも一應は閑却されるやうな運命に逢着したのである。さうなれば新らしい言文一致の必要なるものは何んな事由から起つてきたのであるかゞ殘る問題であるのである。

七　文藝界に於ける言文一致

明治の初年にまさに見えんとしてゐた言文一致の芽生はいつとはなしに消えうせて、遂に本物にならなかつたことは前に述べた通りである。それがほどへて明治十九年頃に至つて再び擡頭してきたのであつた。これにはいろ〳〵の原因もあるだらうが、私は遠い原因としては「かなの會」の主義とローマ字會の主義とがあつて、近い原因としては言

文一致の思想が文藝界に入つたことであり、そしてそれは山田美妙氏の如きものが、進んで言文一致の實行を試みんとしたことであると考へるのである。かなの會が出來たのは明治十六年頃であつたが、その會員中に新に言文一致の必要を唱ふるものが出てきて、こゝに新らしい意味の言文一致が出現してきたのである。かなの會の趣旨とする所は漢字を全廢して一切を假名にて記さんとするに在つて、さうなると難かしい漢語は止めにして、日常に用ひらるゝ平易なるお話則ち口語體の文章となつてゐる所のものをそのまゝに假名文字に直して書くのが一番便利であるのだからかなの會の趣旨を徹底せんとするには、文章を先づ口語體に引き直すことが先決的に必要となつてくるのである。これはかなの會の事業の進展せんとする上に當然起り來るべき問題であるのである。然るにその翌年の十七年にはローマ字會が起つて、その會員中にかなの會の場合と同じ樣に言文一致を主張するものが出てきて、前のかなの會關係と後のローマ字會關係の言文一致論は一所になつて有力に主張せらるゝやうになり、又同時にいろ／＼の研究も進めらるゝこととなつた。言文一致の言葉の標準は東京の中流語が最も適當であらうなど主張するものゝ出て來たのもこの頃のことであつた。併し在來の漢文直譯文から生れてきてゐる漢字假名交り文は、一般社會常用の普通文として、久しい年月の間慣用されてきたために一種の惰力的勢力もあり、その上に前にも云つた如く、普通文の用語を成るべく通俗的のものとなし、文章の構成も亦平易を專らとして普通文の缺點を實際的に除去しつゝ進展しつゝあつたのであるから、まだ十分に研究も出來てゐない言文一致體を以てこれに代へんとすることは容易に行はれさうもなかつたのである。そこで利巧な先生の如きは、文章語體と口語體とを兩用して、學術上の用語用文は文章體を用ふることゝなし、日用俗事の用辨には口語體を以てし、二者兩用の折衷案が最も適切なものであらうと論じた人もあつた。然るに明治十九年頃になつて先づ山田美妙氏が言文一致體の小說である夏木立を發表し、又その翌年には二葉亭四迷氏が同

じく言文一致體の浮雲を出されたので、言文一致は文藝界に大嵐を捲き起すことゝなつたのである。明治文學史を取扱つてゐる人等はこの頃になつて文藝家が言文一致を用ふることになつたと記載してゐる。尤も美妙氏の夏木立は我樂多文庫等に掲載した短篇物數個の合本に成れる小冊子であつたが、引續いて雜誌「いらつめ」の誌上に風琴調の一節なる言文一致ものを掲載し始めたので、山田美妙氏は言文一致の小説家として世間を驚かしたのであつた。併し四迷氏の浮雲は堂々たる創作であつて、殊に最も盛名を博してゐられた坪内逍遙先生との合作として發表されたがために、一層世間の注意を惹くに至つたことは勿論である。而も山田美妙氏の背後には私ども「いらつめ」の同人があつたのであるが、雜誌「いらつめ」と云つても頗る貧弱なものであつて、名譽顧問に杉浦重剛先生の名前を借用したり、女子高等師範學校の先生方を賛成員として、やつと一の雜誌の體裁が出來た位のものであつたから、心細いことはこの上ないものであつた。形式は整つてゐたにしても山田美妙氏側の實力は到底二葉亭四迷氏の浮雲一篇にも及ばないものであつたらしかつた。まあ太鼓はたゝいたがお客は却て一方にとられたと云つてよい狀況であつたらう。しかしこんなことが後になつて言文一致の創始者としては浮雲の四迷氏が當選し、「いらつめ」の美妙氏は案外世間から認められなかつたのかもしれない。山田氏が大に認めらるゝに至つたのは、國民新聞に胡蝶の長篇物を出し世の人氣を喚ぶために裸體の美人を景物にしてからのことゝいつてよいだらう。

それはどうであつたとしても、山田美妙氏の言文一致は氏一己の單獨行爲ではなく、微力ながら私ども「いらつめ」同人の面々がその背後に控えてゐたのであつて、反面に於ては「いらつめ」同人の動きでもあつたのである。尤も私ども同人等はいづれも小説の如き軟文字には緣の遠い連中ばかりであつたので、誰れひとり乘り出して美妙氏の應援をするほどのものもなく、獨り新保磐次氏は教育界方面に向つて進出せんとしてゐたのであつて、この方面では金港堂

を根據として三宅米吉博士の後援の下に活動を續けてゐたのであつた。だから私どものは當初からすべてが計畫的であつて、我國全社會の問題として言文一致の氣運を興し、以て一個の文學革命まで進出せんと欲してゐたのであるが實は私どもの內部に於ける軍資の準備が十分でなかつたので、何等眼新らしい計畫の實行に進むことも出來ず、山田氏は言文一致の小說で奮鬪し、新保氏は教育界方面に烽火を擧げんとしつゝも、いづれもその各自の手許の事情の許す限りの範圍に於て出來るだけのことをして滿足する外なきに至り、牙城の「いらつめ」は社會改良上に一の意見を以て生れたのであつたが、それすら見捨てゝ、これを山田氏一個の言文一體の機關とすることゝなつたのである。故に私ども內部の事情から云へば、山田氏以外のものはいづれも落伍者となつて了つたのである。當時山田氏は大學豫備門を半途退學し自由の身となつてゐたから、相應に久しきに亙つて戰鬪に從事することも出來たが、同人中の岡田、一木の兩氏は卒業が間近であつてその方の準備に忙はしく、正木氏と私とは法律と政治といづれも文藝とは異つた方角に進まねばならなかつたので、遂にそれ〴〵分れ〴〵となつたのである。なさけないやうな氣もするが、私どもの雜誌「いらつめ」はこんな次第で落ちてゆき、大層であつた言文一致は遂に山田氏ひとりのものとなつてしまつたのである。

この頃、金港堂から雜誌「文」が出た、これは金港堂編輯所長であつた三宅米吉博士の主宰する所で新保氏も亦その內部の主なる一人であつた。蓋し「文は」東京大學の連中方が東洋學藝雜誌に力を入れてゐたのに對抗して、主として人類學や文學等三宅氏等の趣味を中心として編輯されてゐた立派な學術雜誌であつたが、その誌上に於て言文一致に關する種々の問題が論議されたのであつて、山田氏の意見等もこの誌上で發表されたものが多かつたやうに記憶してゐる。かくの如く常に言文一致に關する多少の論議は闘はされたには相異ないが、その後かれこれ十年もして、文藝

界に於ける言文一致の位置は確立するに至つたやうであつた。束髪と言文一致は法令を以て禁止されさうなものだなど云つた石橋思案氏の如きも沈黙するに至り、尾崎紅葉氏でも「豆腐と言文一致は大嫌ひだ」と豪語してゐたにかゝはらず、二十五年頃から二十七八年頃に及んで、言文一致の爲に大に盡力され、遂に或る程度の大成まで持つてきたのは尾崎氏であつたと云はれてゐた。面白いことには、氏の「二人女房」であつたか、その上半は在來の普通文式でかゝれたものが、その半途からは言文一文となつてしまつたやうなこともあつた。蓋し何と云はれても、言文一致は議論の上の可否の問題にはあらずして、どんな言詞をどんな風に用ひたならば稍よりよくなるであらうかが問題とされたのであつて、耳障りの調子がとれて書きやすく聴きやすいやうになるに從つて、遂に文藝界を壓倒し去るに至つたのである。論文でも小説でもであるが、長大なる著作は言文一致に依るにあらざれば遂に仕上げることが六かしいことは何人でも苟も文筆に經驗のあるものゝひとしく承認する所となつたのである。この大勢が既に動かすことの出來ないものとなつたのは、十九年二十年頃から二十八九年頃に至る約十年間の推移の結果と云ふべきである。

明治三十年後の言文一致運動に就いては、三十三年の一月には帝國教育會から「國字國語國文の改良に關する請願書」を提出し、その二月には貴衆兩院から國語調査會を開設すべき建議が提出され、又その三月には帝國教育會内に於て言文一致會なるものが開かれ、その九月の言文一致會に於ては、左の二ヶ條の決議をした。

一、行く〳〵は全體の文章を殘らず言文一致にすること、

二、差當り次の事項から着手すること、

イ、普通往復文　ロ、記事論説文　ハ、著書譯書　ニ、教科書　ホ、公用文　ヘ、廣告文

そして三十四年の二月には、帝國教育會の言文一致會が主となつて、貴衆兩院へ請願書を呈出し、國運を隆盛にす

るため、教育を發達させるため、國語調査會を設けて言文一致の實行を國家事業とすべきことを請願し、兩院の採納する所となつた。そして三十五年四月に組織された國語調査委員會はその七月にその調査方針として次の三ヶ條を可決した。

一、文章は言文一致體を採用することゝし是に關する調査を爲すこと

二、國語の音韻組織を調査すること

三、方言を調査し標準語を選定すること

こんなことが動機となつて、一般に於ても言文一致に關する研究が各方面で行はれて、俗語の辭書や俗語の文典等が續々出版せられ、言文一致の種々の文範文例の類も發行せられたが、特に山田美妙氏の言文一致文例は一年も立たぬうちに九板を重ぬるに至り、世間を驚倒せしめたやうなこともあつた。私は茲に言文一致の歴史を詳述せんとしてゐるのではないが、「いらつめ」同人の背景を以て出發した山田美妙氏の言文一致のための運動は、單に同氏の小說を言文一致のものたらしめたばかりでなく、文藝界に言文一致の主義を入れることに力を盡した上、更にその趣旨を一般に及ぼさんがためにも盡力しつゝあつたことを述べて置きたい。蓋しかくの如く私どもの言文一致運動には前もあり後もあつたのである。單一なる動機によつてこれを主張したばかりでなく、終始その擴張に盡力し來つたことはこれを言文一致の上に於ける山田美妙氏の功績として記述しておきたいのである。

八　物集先生の「言文一致」と新保氏の「日本普通文如何」

明治十九年頃に擡頭した言文一致運動の中で、やゝ筋を立てゝ意見を述べたものに、文科大學教授の物集高見先生の「言文一致」と新保磐次氏の「日本普通文如何」とがある。物集先生のは或るかなの會の席上でお話しになる材料とし

て、書かれた原稿そのまゝのものをその雜誌に掲載されたものであつて、後これを一小册子として公にされたこともあるらしい。新らしい意見と見るべきものはないが、說明が頗る平易であつて、それを讀めば話をきくのと同樣に理解される所の、云はゞ言文一致文の一の實例として示されたものである。當時世の人の考を動かす上には相應の效果があつたものには相異ない。併しこれを以て同年頃から起つた文藝界の革新則ち言文一致體の先驅とすることはどんなものであらうか。普通人の說明してゐる所のものを最も分りよいやうに說明された言文一致の一實例としての價値は十分に認めることが出來るが、美妙氏や四迷氏の試みた言文一致のさきがけと見ることは時間の上から云つても少少無理であらう。又「言文一致」なる言葉も先生の發明創定されたものと見ることは出來ないだらう。先生が大學の敎授であつて、當り前ならば古文的の文章を取られる筈であるのに、自ら進んで言文一致を說かれ、そしてその實例までをも示されたので、一部の文壇人は容易に感激したのであらう。この「言文一致」に品川彌二郞氏の序文があつたと云ふことだが、どんなことが書いてあつたかいまだ之を見るの便宜を得ない。しかし明治維新の初に前島密氏が言文一致の建議をされたことに比すれば、品川氏の「言文一致」の序文も敢へて不審議とするには足るまい。文學には全然の門外漢である私が而も四十七年も以前に於ける言文一致運動に關係があつたことを知つて意外としてゐる人もあるのだから、これらも過去の言文一致運動の三不審議として話題とするに足ると言ふべきであらう。

物集先生の「言文一致」は左の數項に分けて一々鄭寧に說明されて居る。

一、文章は話のやうに書かねばならぬわけ、

二、文章が話と別れたわけ、

三、文脈といふわけ、

四、文章は話に劣るわけ、
五、日本語には敬語の多いわけ、
六、話しの通りに書けば全國の語が一樣になるわけ、附、國語がうつくしくなるわけ、
七、話と文章とのちがひどころ、附、古文章を書き直して試みた例

この最後の實例には、伊勢物語、土佐日記、古今集の序、竹取物語、住吉物語、落窪物語、源氏物語、枕草子、狹衣、榮花物語、宇治拾遺物語、宇治大納言物語、大鏡、增鏡、水鏡、承久記、古今著聞集、神皇正統記、徒然草、鳴門中將物語、義經記等の多數に亙つて、その書物の冒頭の一節だけが口語體にかき直して原文と對照されてゐる。そして最後に左の一節が附記されて居る。

「此のはなしはかなの會の演說料にもとていぬる頃一日の間にたゞ書きに書きたりしを同じくば雜誌やうの本にもしたらば却て聞く人多からんとてかれこれすゝめらるゝまゝに直しもあへで上本せしなり。」

物集先生の「言文一致」の最後の一節は私どもが當時言文一致擴張の一方法として、廣く古典的古文を言文一致體に書き直すことをも考へてゐたのであつたが、その事は遂に實行に入ることなくして今日に及んだのである。今後といへどもこんな計畫を實行することが出來たならば難解の古典的文學を一般に紹介することも出來るのであるから、望ましいことだと思つてゐる。難かしい漢籍すらその殆ど全部が國字に解說されてゐるのであるから、古典的の國文も出來ないことはないだらう。今日でもこんなことが出來たならば言文一致體を擴めることの外にも大なる利益があるであらう。

新保磐次氏の「日本普通文如何」は明治二十年六月の出版であるから、物集先生の言文一致の發行が十九年五月であ

つたのに比して、一年後れてゐるが、それは雜誌「いらつめ」發行の資金が缺乏してゐたので、その資金を得る手段として新保氏が一氣呵成的に執筆されて出來たのがこの一書であつた。而もその記述してゐる事項は當時「いらつめ」同人の間で話し會つてゐた所のものであるから、山田美妙氏の後に在つて竊に言文一致運動に參加しつゝあつた所の私ども同人の意見に外ならぬのである。故に新保氏の「日本普通文如何」の發表は美妙氏の言文一致の小說と同樣の意義をもつものであつて、私どもの言文一致運動の一要件であつた。それには少しく新保氏のことに就いて說明せねばならぬことがある。前にも一寸云つたやうに、新保氏は中川謙二郎先生の門下の一人であつて、三宅米吉博士とは恰も兄弟のやうな關係に居つたのである。三宅氏と新保氏とはその經歷上頗る親密な關係があつたばかりでなく、學問並趣味の上に於ても殆ど同じやうな點がいくらもある。共に科學の素養があり、國文に長じ國史に通じ、殊に言文一致に就いては、その意見を同じくし、共に金港堂編輯所員となつて、雜誌「文」の誌上に於て言文一致に關する事項の研究調査を發表する外、小說雜誌「都の花」に美妙氏はじめその他の諸氏の手になれる言文一致の小說を揭載する等、私どもの運動の實行方面に當られたのであつた。その他金港堂から出版された小學校の敎科書や參考書の上に言文一致の方針を適用しつゝあつたのである。言文一致の方針を小學讀本に應用したものとしては、三宅氏や新保氏の共著とも云つてよい金港堂の日本讀本は坪內雄藏氏が富山房から出された讀本と共に稱せられてゐたのである。三宅氏は高等師範學校や博物館の公職について居られて、博士の學位をも得られたほどであつたから、世にも知られて居るが新保氏に至つては金港堂編輯所の一員として全然內部的の地位に甘んじて內部的の仕事のみをやつてゐられたから、殆ど世に知らるゝことはなくて一生を終られたが、唯一つ「趣味の日本史」三卷が遺つて居る。この「趣味の日本史」はその內容とその文章との上で頗る著名の大作であるが、西園寺公爵はこの三卷全部を通讀せられて、批評と贊辭とを與

へられたことがあつた。明治十九年以後の言文一致運動に於て山田美妙氏の努力が頗る貴いものであると同じく美妙氏の如く表面には立たれなかつたが、この新保氏の隱れたる功績は決して閑却することを得ない所のものである。そして表面に於けるその證左として殘つてゐるものが、實にこの「日本普通文如何」の一書である。

「日本普通文如何」は僅に六十頁位の一小冊子であるが、その文章は漢文直譯體の在來普通文ではあるが、その行文は明に一の文範たるべきものである。左にその大要を掲ぐ。

この書の趣意

轍魚は江海の水を待ち難し、醫急なれば則表を治す。その見る所遠大ならざるにあらず、勢止むを得ざればなり。わが日本文古來幾多の鎔合亂打を經て、曾て鍛錬の效を見ず、剩へ漢字の抵抗に由り、今日の普通文として以て文明の導體となるを得ざるに至れり。こゝに於て羅馬字會興り、假名の會始まり、文字文章の論あり、言文一致の説あり、或は公に漢字の數を限らんと云ひ、或は賞を懸けて男女同文の策を求め、或は望みを日本文に絶して英文に屬する者あり。

これ日本文を廢して外國文を用ひんと欲する者は、譬へば日本人種の不良を患ふるが爲に盡くこれを撲滅して白皙人種に代へんと欲する者の如し、これおのづから一種の論者にして日本文の論に預る所なし。而して漢字を放逐するの論及び今の俗語を普通文とするの論は皆日本文改良の正點より發したる者なれども、その方法は果して自然に逆ふ所無きか、その成功は日を指して期すべきかを斷言すること誠に難かるべし、然らばこれを以て今日の教師と教科書を責むるの理由を有せざるならん。論者は論者、教育は教育として、各相應ずること能はずば今日の生徒を如何せん。轍魚は一勺の水に頼て江海の望みを有すべし、急病人は現症を緩めて後全治恢復の日を待つべし、故に余はまづ現時の文に就て行ふべき改良の法を提出して以て現症の幾分を緩めんと欲す。蓋「行ふべき」の淺見は「行ひ得るならば」の卓識より遙に親切なるを信ずるなり。

既に時文を改良せんと云ふからは余は今漢文交りの文に就て論ずべき無論なり。而して如何なる點を改良せんか、目下漢字交りの文が世人の告發を蒙る所は、甲、日常の言語と甚だ相懸隔して學び易からず、隨て了解し易からず、乙、冗長柔弱にして非

重典雅ならず、丙、曖昧たる語法ありて、精密なる説明に適せずの諸點なり。凡世俗の批評は信を措くに足らざる者多しと雖、甲は則ち爭ふべからざるの事實、丙は則學術書法律文に筆を執りし人の皆知る所なり。然らば則甲を醫せんが爲には、一、言文一致の方針如何を定めざるべからず。方針既に定まれば、二、語を選ぶこと、三、文法を正しくすることを講ずべし。語と文法と當を得れば文章の材料基礎備る、而して最後に、四、句讀の法を正しくして以て言語の斷續を表し、文を讀むこと猶語を聽くが如くならしむべし。蓋裁斷ずべきはこれを明白にし、結合すべきはこれを親密にし、而して長短の排置を節制するは文の品位に關すること少からず。もし十分にこの目的を達することを得ば、文章の明晰ならざるを欲するも得べからず、隨て丙の訴へを願ひ下げするに至るべし。獨これのみならず乙に對しても亦十分償却の見込みあり、よし、然らざるも既に甲、丙に對して必要の義務を果さば、趣味上の事には猶示談或は延期の餘裕あるなり。

余は一、以下の事項を逐次に講ずるに先だち世の學者に一言を呈したきことあり。今や漢字放逐に急なるの故か、學者は力を文字上に專にして、文體上には甚節儉せるが如し。然のみならず毫も文體に意を用ひざるものあり、これ余が遺憾とする所なり。よしや文字の改良意の如くなるも、文體の進歩依然として舊の如くならば、日本普通文は唯讀み易く解し難きの文たらんのみ。偶辯論の文體に及ぶあるも、或は文字に精しくして文體に粗く、或は文體の摘發に長じて改良の方案に短く、みづから一二行の文を造り、或は能文者を指名してこれに倣へと云ふに過ぎず。抑手本なる者は方法の例としては甚有力なる者なれども、これを單獨に用ふる時は大に進歩を妨ぐるの道具なり。もし家屋を改良せんとて唯雛形の一二を工人に示すのみならば如何。

第二、字體改良家にして文體には却て腐敗主義なる人あり。この類の人は常に文體の進化を拒で曰ふ「汝等は西洋に心醉して、日本文の趣味を破壞する者なり。文章は世間共有の文章なり、獨みづから異議を立つべからず」と、これ余輩が歎息に堪へざる所なり。古臭き申し條なれど、事物は必要によりて發生す、もし必要を感ずる處より起らずば何れの日か世間共有の運を見るべき。唯試みに精密なる學術の書を著譯せよ、或は學術上の著譯を精密に讀め、學術に感覺なき輩は學術の文體に於て嘴を容るべからず。勿論必要より起れる事物の初期には趣味に乏きを責むべからず、趣味は必有用の後に興る。抑地藏形の石燈籠古雅なりと雖、これを電氣燈に用ふべからず。唯趣味を玩びて實用を問はざる人を古道具屋と云ふ、而して古道具屋は實用上に勸告强賣せざるを以て自ら獨立の職業たるを得るなり。趣味に戀々として日本文の發達を妨げ、剩へこれを以て實用上に强ふるが爲遂に

この文をして世の信用を失はしめ屢訴訟の不幸を蒙らしむ、日本文に不忠なるこれより甚しきはなし。

最後に世の學術家に稟告すべきことあり。今の學術家は皆外國語に由て智識を收得し、嘗て日本文の恩を蒙らざるが爲、大にこれを蔑視し、度外視する者あるが如し。己れが學を愛重する學者はかくの如くなるべからず。苟學術の普及を謀り、一句一行を世に公にせんと欲せばこの文の發達を度外視して可ならんや。謂はゆる必要を感ずる人は學術家にあらずして抑誰ぞや。

余は今本論に進まんとするに、その一、言文一致の方針如何は、二、語を選び、三、文法を正しくし、四、句讀を正しくするの三項に關係して離れざる者なれども、便利の爲各次項を逐て論ずべし。抑この各項に榮養を十分にし、運動を規則だて及び天然にするの術にして余が謂はゆる表を治するの處分なれども却て大に治療の法に稱ふを見るべし。何となれば榮養と運動を充分にして以て自然の癒期に達するは醫家の最貴ぶ所なり、況日本語は言語學に質するに、今猶幼稚の時期に在る者なり、而して榮養の缺乏運動の不足及び不節制に由て久しく發達を害せられ、遂に今日の負擔に堪へざるに至れる者なればなり。既往の不養生は今一一列擧せずと雖、各項の下に於てほゞ大要を見るを得べし。

九　結尾の小言

今日から約半世紀の昔、私どもが雜誌「いらつめ」を發行し、同人の一人であつた山田美妙氏をして、その誌上に言文一致の小說を掲載せしむるに至つた事情は、私の說明で大分は明瞭にすることが出來たと思ふ。固より微力なる私どもの而もまだ若い時分のことであつたから、これを後の世に傳へてその功績を自慢するに足るほどの結果を、私どもだけの力で得たとは思つてゐないが、明治十九年頃を一期として主として文藝界に言文一致主義を入れたことに多少の因緣があつたに相違ないと確信してゐる。前にもいつた如く、當時ローマ字論や假名の說が擡頭して、その先決問題として我國の普通文を口語體になすべきことを寄り〳〵主張しつゝあつたことが一の動機となつた事情もないとは云へないだらうが、私どもは私どものやつたことが、一層明瞭な動機であつたと信じてゐる。明治文學の歷史を研

究してゐる人々は、十九年頃に硯友社が出來て讀み廻はしの筆寫板であつた我樂多文庫が生れたことに重きを措いてこの頃から文藝の方面から言文一致に手をつけた人々が現はれたとして簡單に片付けて居るのである。時代の氣運は必ずしも一人の力で動かすことは出來ないものではあらうが、當時の硯友社そのものにそれほどの實力的原因があつたとは思へないばかりでなく、實はその社友の人々は案外保守主義の連中ばかりであつて、美妙氏がいよ／＼言文一致の小說を發表して以後、尾崎紅葉氏や石橋思案氏などは眞正面から反對したものであつたことは多少でも當時の事情を心得てゐるものゝ能く承知してゐる所なのである。或人は山田氏が突飛な言文一致を社中の仲間にも何の相談もせずにやり始めたために、遂に硯友社から放逐されたなどいつてゐるのである。だから當時の事情を考へて見ても、山田氏がいよ／＼言文一致の小說を出して世間の批判を求めるまでの決心をしたのは實は容易なことではなかつたのである。この點は今から當時の山田氏を批判せんとする人々の先づ考をつけてもらはねばならぬ所であると思ふ。この頃山田氏と殆ど同時に二葉亭四迷氏は全く單獨的に言文一致の小說を試みられたと云ふことは、重要な出來事であつて、それは氏單獨の決意からであつたと云つても、この單獨の決意を促すだけの原因が外に在つたのかも知れない。私はその原因が私どもの言文一致運動の思ひがけない影響によるものだらうとは考へないけれども、そこには必ずや四迷氏をして敢然として起たしむるに至つただけの氣運は溫釀しつゝあつたに相違ない。兎に角、私どもは明治十九年以後の文藝界へ言文一致主義を持ち込んだことに就いて私どものやつたことが一の重要なるものであつたと信じてゐるのである。そしてその私どもの代表者は山田美妙氏であつた。こんな關係で出發した山田氏があれだけのことをやつたのであつて、そのやつたことが嚴然たる一の事實であることが認めらるゝならば、假令四迷氏のやられたことが何ほどのことであつたとしても、山田氏のやつたことは明治文學史上からこれを取り除くことは絶對に出來ないの

である。然るにどうだ、過去の文學史を取扱つてゐる文壇人の中には山田氏の名前を全然取り除くばかりにしてゐるものがあるではないか。敢へて女々しき訴へをするのではないが、歴史を研究して過去の事實を明にすべき使命を以て居る所の文學者であるならば、今少しは公正なる思想を以てすべきではなからうか。或人の說によれば、山田氏がかくも冷酷な取扱ひを受けるは、その時代の文壇人が殆ど皆硯友社出身の緣故者ばかりであつたからだと云つてをるものもある。硯友社の人々に就いては、その大多數者のことは知らないが、尾崎氏だつて、石橋氏だつて又川上氏だつてそれほどの狹量者でもなく又それほどの冷血漢でもなかつた。寧ろ尾崎氏の如きは一種の寬容さを持つてゐたことは世にも知られてゐる所である。その社中の末輩諸君にしてもそんな小人的の考へを持つてゐる人はなかつたし又現にないと信じてゐる。又或る人の說によれば、山田氏の婦人關係云々が世の同情を失つたゝめに外ならないと云つてゐるものもある。私はその閨門內のことは能くは承知しないが、當時のどれかの新聞に何か書かれてゐたことは記憶するもその詳しい內容は知らない。假令ある程度のことがあつたとしても、山田氏が文壇の一公人として堂々とやつた言文一致運動の功績はこれを簡單にキャンセルすることは出來ない筈ではなからうか。不品行は不品行だ、功績は功績だ。もしも不品行を理由としてすべての功績は解消せしむべきものだとするならば、明治大正から昭和の今日までに於ける功績者は一人もないことになるのではないか。世の實際を見れば、事の頗る甚しいものでも寬容されてゐるにもかゝはらず、山田氏だけにそんなに嚴正でなければならぬ理由はどこにあるであらうか。私は今回のこの記述をなすについても、實は山田氏のために轉々同情に堪へないものがあるのである。そして私がこんなことを訴ふるのは、「いらつめ」時代の同人であるからでもなく、又山田氏の功績が私どもの功績ともなるべきものであるからでもない。私は一門外漢として文壇人學壇人に訴へてゐるのである。

かくの如きものは文壇の門外漢である私どもが云ふばかりでなく、堂々たる文壇學壇者流の人でもこれを云つてゐる。現代日本文學全集の山田美妙集に柳田泉氏のかいて居らるゝ序文の後半がそれである。これをこゝに引用してその證左とする。

美妙個人は幾多の缺點をもつた人間であつたらう。或る人は社交性がなかつたといふ、或る人は人好きが惡かつたといふ、又或る人は大家ぶつたといふ、又或る人は淺薄で氣障なお先走りだつたといふ。數へたてると、もつともつと多くの個人的缺點をもつてゐたと思ふ。だが、個人的缺點は個人的缺點だ。これだけ缺點があるから、それだけ仕事の方で差引をつけるといふ論法が、今迄の美妙論に多い。

實際美妙に對する反動的批評は長過ぎた。たまに幾分の功績を認めてやつても、恩惠的に認めてやるといふ口吻があつた。自分の考へだと美妙に對する反動的批評は、明治文壇に於ける硯友社閥勝利の空氣が強すぎたのが原因になつてゐると思ふ。硯友社に對して所謂不義理をした美妙が、硯友社閥の空氣が隅から隅まで通つた文壇では頭をあげられる道理がない。而もその空氣も亂れて頭をあげられさうになつたときには、彼自身がすでに天才のミイラとなつてゐた。これは氣の毒なことだつた。だが然し、反動は反動として清算してしまふべきだ。もう個人的好惡を離れて美妙の天才的先驅者としての功績を正しく認めてやつていゝところではないか。自分は輓近少數の人々によつてかゝる正しい見地から美妙研究がなされつゝあるのを喜ぶものだ。

一〇　美妙選集について

以上は「立命館文學」(第一巻六・七號)(昭和九年六・七月)に「いらつめと言文一致」と題して掲載したものである。輓近にいたつて、文壇學壇者流の山田氏に對する評價が次第に改められようとする機運を見ることは、私の欣快とするところである。臓

目の一二を擧げれば、最近刊行された本間久雄氏の「明治文學史」上卷中の山田氏に關する記述の如き、また同じく本間氏の「中央公論」誌上に於ける言説の如きである。

今や、若き學徒の間に、明治期の文學は學の對象として採上げられようとしてゐる。これら少壯有爲の人士の中にも優れた研究が存することゝ思はれる。たゞ學の研究にいつも附隨する困難は資料の不自由にある。明治期の文學といへども、いつの間にかすでに古典となつてしまつてゐるのである。殊に比較的文壇の片隅に追ひやられてゐた山田氏のものなどのなかには、容易に手に入れ難くなつてゐるものも尠くない。即ち、私どもはまづ美妙齋研究の上に能ふ限りの便宜をはかるべき義務を感じる。

幸に、立命館大學は昨年の春、山田家より山田氏生前の藏書及遺稿書翰等の一切の讓渡をうけたのであるが、このうちにはかず／＼の貴重な資料も存すること故、このたびその一部を版に附して世に提供することゝしたのである。

最後に、本選集の刊行に際し解題並に校訂の事を擔任されたのは柳田泉、鹽田良平、小泉苳三の三氏である。

歴史小説集

明治歴史小説と山田美妙

——解題に代へて——

柳田泉

一　明治歴史小説概觀

大體として、私は山田美妙の明治歴史小説發達史上に於ける位地を可成り高く評價するものである（たとひ歴史的意義からにせよ）。

それで、今此の集の歴史小説を解題する筆を執るに當つて、たゞ所收の分五種をお座なりに解題して能事了れりとするには、何やら止むに止まれぬものがあり、私の氣持に語らずに置けぬ何物かゞあるやうな氣がする。そこで思ひきつて明治歴史小説の發達一般と美妙の歴史小説發達史上に於ける位地を論じて、作品解題に代へることにした。勿論解題者としての立場を全然忘れたのではないから、その邊の用意をしつゝ筆を進めるつもりである。

先づ明治歴史小説を概觀しよう。

歴史小説は、正しい意味でいへば、明治文學界の特産物である。明治以前には歴史小説らしい歴史小説は先づない。これは當然のことであらう。歴史小説とは何ぞと、歴史小説の性質を考へ、これを構成するに必要な一要素、歴史熱

(史的想像)と小說といふことを考へてみると、さもあるべき筈である。歷史の眞實を探求すべき史學の發達も明治に入つてのことであり、所謂ノヴェルの必須條件たる、個人生活の重要さに對する知識と理解がほの見えるやうになるのも、坪內逍遙先生が『小說神髓』を唱へ、『書生氣質』を公にしてから後のことに屬する。

勿論明治の歷史小說の發達には明治の歷史文學の發達と明治新小說の興起が大に關係をもつてゐる。明治の歷史文學は大體として、田口鼎軒の『日本開化小史』(明治十一年)藤田茂吉の『文明東漸史』(明治十七年)島田沼南の『開國始末』(明治二十年)などを先驅とする。これ等の諸著は何れも明治初年から二十年までの間のものであるが、何れも歷史的眞實を世人の心に敎へ、世人をして歷史の事實に對する概念をもたせる基礎として役立つたものである。

歷史文學が眞に隆盛を極めるに至つたのは、明治二十二三年以後のことであらう。明治の歷史文學に造詣の深い高須梅溪氏は、その原因を數へて、(一)國粹主義の提唱によつて過去の日本を新しく眺めやうとする風潮を生じたこと(二)德富蘇峰の『國民の友』などに、每號史論史傳類の歷史文學を掲げた事などにあらうといつてゐる。此の二事は何れも歷史文學の興隆を助けたにちがひない。田口鼎軒の『史海』が發刊されたのも此の頃(明治二十四年)である。此の雜誌は、新しい歷史文學の發達を促す上に大きい貢獻をした、却つて民友社の才人諸氏をさへ動かすところがあつたものであるといふ。

歷史文學の發達は大體右のやうであるが、小說の發達はどうか。事實明治小說史上からいへば、紅葉、露伴が轡を並べて出たのが矢張り此の二十二三年の頃であり、硯友社の勢力の強くなりつゝあつたのも此の頃である。新しい小說の出現はいかに早くとも明治十七八年以前には遡りかねやう。明治の歷史小說が、必然的に二十一二年頃から本式に萌芽を出し始めるのも無理がない。以上の歷史文學と新小說の發達興起の跡を見て、その無理の無さが大抵わかる

と思ふ。たゞ一つ遺憾といへば遺憾なことは、英國の歴史小說は、その創建者としてサァウォータァ・スコットを有しフランスは同じくアレクサンドル・デュマを有してゐるが、明治の歴史小說界には、これに比肩するやうな創建の功ある歴史小說家が見當らない、從つて大作家がゐないだけにその發達の經路なども英國やフランスなどのやうに目覺ましいものではない。

明治二十一二年頃に歴史小說の萠芽が出始めたとし、それまでには萠芽を育む力が何か動いてゐたと見るのが當然であるから、明治十年以後史傳史論などの歴史文學の興起しかけた頃から二十年頃までを前期とし、これを明治歴史小說の準備期とする。それにしても約十年前後のことである、何といふ短い準備期であるか、英國などでは少くとも五十年以上を費してゐる、大なる準備なくば大なる成績もない、これは當然の理である。かゝる準備期の後にあはてたやうに萠芽を出した明治の歴史小說が、概していつて萬事小規模な、氣魄の小さい、めざましさのかけたものであつたのは止むを得まい。

明治二十一二年以後二十七八年後までを明治小說の第一段階とする。此の期は、群作家の割據時代のやうなもので老若それぞれの歴史小說作家が、或は歴史的事實を何等顧慮せず、或は歴史的事實に餘り拘束され過ぎつゝ、自分勝手に好きな作品を提供し合つてゐた時代である。若手では美妙を筆頭に、紅葉、嵯峨の屋、露伴、緑雨、浪六、弦齋、麗水、水蔭などが多少に論なく活動し、老人乃至中老では學海、櫻痴、濡柿、三昧などが、むしろ若手を壓して活動してゐた當時から見たなら、當時の歴史小說界は、此等老人中老の天下であつたかも知れない。また美妙の或るもの、又は露伴の『ひげ男』のやうな、傑作として後世に殘る資格のあるものもあるが、概して此の人たちの作は「外的、ロマンチック、非個性描寫的」といふ萠芽時代、創建時代の特色を帶びてゐる。

明治二十七八年頃より三十七八年頃までは、大體明治歷史小說發達の第二段階とみてよからう。槪していつてさう歷史的事實を無視し、顧慮しない作がなくなり、むしろ正直に時代を描寫し、それに關聯して幼稚ながら個人的情緖生活にも解釋を與へようとした時代である。或る意味で此の期の代表的歷史小說家に塚原澁柿を擧げることが出來る。

第一期の作家中歷史小說界に筆を絕つた人が多いが、依然活動してゐる人も少しはある。新手としては先づ樗牛、風葉、その他、靑軒、奴之助、曉花などを數へるが槪して歷史小說の作品も作者も第一期より遙に少ない。これは一つは歷史的眞實に對して世人の眼が大分開いたので、さうむざむざと歷史小說だと銘打つて自由な空想に成る小說を發表することが出來なくなつて來たせゐもあらう。又時代意識が同じ小說界でも他の點(たとへばこれを前にしては社會小說、これを後にしては自然主義など)に集中され、歷史小說など閑却されてゐた傾向もある。今澁柿の作を以つて此の期を代表させ、これを基調として作風、特色を察すれば、外的出來事に興味がかゝつてゐる點は免れないが、歷史的事實に對する槪念は立派にあり、歷史的精神への愛着も立派に見える、たゞ個人生活の解釋、個人情緖の說明の點で不滿があるのを免れない。

槪していつてかゝる特色は澁柿本來のもち物であり、これが澁柿をして第一期に轡を並べて馳せた群歷史小說家中に頭角を拔ん出させたものである。これをもつて明治の「外的、ロマンチック、非個人描寫的」歷史小說の大成したものといつてさう過言ではあるまい。此の期の末に漱石が數篇の歷史ロマンスを書いてゐるが、歷史小說とまで進展せずに止んだ。

明治四十年前後から四十五年迄の一期はそれだけでは一期を成しはせぬが、歷史小說の發達にとつては重大な過渡期である。美妙が著しい進境を示してゐるので假に美妙をもつて代表させる。作としては天外の『伊豆の賴朝』などが

傑作として殘るべく、新進作家としては潤一郎氏を注目すべきであらう。美妙の歷史小說は此の期に入つて內的の深さを增し、從來彼に缺けてゐた歷史的事實にその作を基礎づけるといふ點も先づ滿足すべきものとなつた。單に基礎づけるに止まらず或る作では、歷史の出來事に對して相應に「想像的解釋」を加へて居り、個人情緒の說明は最も見事に行はれてゐる。大正歷史小說界の先驅として立派なものであると思ふ。かくて明治の歷史小說はつひに最完最全の發達段階にのぼらずに大正歷史小說になるのであるが、これは、如何に遺憾としてみても、文學史上の事實であるから何ともし難い。大正歷史小說に入つて、文壇の長老森鷗外がこの方面に筆をとり始めるや直ちに傑作續出、歷史小說としての最高水準に達し、明治歷史小說の或は到着すべかりし歷史小說の最完最全の發達段階に入つた觀があつた。鷗外と共に(別のタイプにだが)この發達に貢獻した文壇作家としては、先づ龍之介氏、寛氏などに屈指すべきであらう。露伴にも「運命」その他數篇あるが、これは史論、歷史文學としての傑作と見るべきか、歷史小說とすべきか、異論はあるかも知れぬが、人情の分析描寫に立脚してゐるから、先づ歷史小說とすべきであらう。

二　明治の歷史小說家と山田美妙

龍溪。鳴鶴。南翠

歷史小說は、嚴密にいへば、明治二十年以後に發展した文學形式であることは上に說いた通りであるが、それはそれとして、今二十年以前の文學界にほの見える歷史小說の胚種ともいふべき作物を拾つてみると、目につくものが三四ある。矢野龍溪の「齊武名士經國美談」(明治十六年)、藤田鳴鶴の「濟民偉業錄」(明治二十年)、須藤南翠の「照日葵」(明治二十一年)などがそれである。

此等の作物は所謂政治小説であり、歴史の興味を主眼としたものではない、此の頃歴史文學が政治的興味と切つても切れない連契をもつてゐたやうに、いかに歴史小説的の分子を多分にもつても、當時では矢張り政治的理想にあこがれる一種のロマンチシズムを脱することが出來ずにゐる。以上三作のうち、『經國美談』は歴史小説として最も見事な出來榮であり、『濟民偉業錄』はこれにつぐ。

『經國美談』は、古ギリシヤのテーベ(シイブス)の興隆の顚末を叙したもので、史實に根據すること最も確實であり篇中に活躍する諸豪傑も九分通りまでは史上實在の人物をそのまゝ描いたのだから全體として甚だ生々と描き分けられてゐる。趣向が正史を潤色したものであり、この點からいへば支那の演義體を新式に行つたものといつて可い。ただ主眼が經國濟世といふ政治的方面にあるのでエパノミンダスやペロピダスなどの豪傑の個人情緒の説明描寫がやゝともすると概念的に流れ、大きな不滿があるのは止むを得ない。

『濟民偉業錄』は『經國美談』に比して今日讀む人は少からう。此の小説の舞臺は支那である、龍溪の評語をかりると、「事を支那の舊世界に繋け、道を西洋の新社會に取る、篇中の人物議論言語、皆是れ支那史書中の成語にして其精神は悉く西籍に合せざるべからず」云々、これでこの作が純正の歴史小説でないことがわかる。舞臺を支那にかり、これに西洋の道を吹き込んで新興日本の政治に何か諷しようとするところがあるのであらう。明の世宗の嘉靖年間姦臣嚴嵩父子が權威を逞しくし、國家の政治が大に亂れた、この時兵部員外郎楊繼盛の子楊雲字は士龍といふ憂國の青年才子が濟民の大業を志して天下を周遊し、同志の友を結んで大事を計るといふ筋である、楊雲が實は日本倭寇の豪傑某の子だつたり、その右腕とたのむ壯士魯英が實は窈窕たる佳人瓊英とわかつて遂に階老の契を結んだりするところは、傳奇として面白くはあるが、歴史小説としての立場からすればなくもがなである。

『慨世悲歌照日葵』は南翠の作中傑作に屬するものであると思ふが、前二作に較べて見劣りがする、出身が出身だけに讀本式、草双紙式の趣向なり臭味なりがぬけ切らず、作者が時尚を逐ふに敏な人だけに作の中心を貫いて讀者の心を打つ精神氣魄といふものが足らぬ。陸奥の大領名取家の臣大館主税之介忠良なるものが姦人を斬つて主家を安堵させるといふ筋の、矢張り何か寓意ありげな作である。

山田美妙（その一）

附、嵯峨の屋氏の歴史小説

山田美妙を歴史小説家と見るとき、彼について語るべきことは却々多い。これを前後二つに分けて、今前期の彼についてだけ簡單に語る。

美妙は或る意味では處女作の時から歴史小説の分子をもつてゐた、抒情的乃至主情的詩的分子も多分にもち合はしてゐたが、歴史小説的分子も相應にあつた。我樂多文庫に載つた處女作『竪琴草紙』はアルフレッド大王の傳を骨子にした歴史小説めいたものであり（鹽田氏解題參照）、處女小説集『夏木立』の約半分は歴史小説であり、その他初期の作でいゝもの、勝れたもの、世評にのぼつたものは皆歴史小説的作品である。『武藏野』、『蝴蝶』などを例にとつて見るといゝ。

『**武藏野**』（明治二十年十一月讀賣附錄）は今は『夏木立』集の一篇となつてゐる、本來歴史小説などといふ重々しい名でよぶべきでもなく、抒情詩的小品ともいふべきものである。足利、新田が關東の山野に血を流しあつた頃の、武藏野つまり今の東京のある部分を舞臺にして、當時の空氣なり生活なりを想像的に髣髴させたものである。

これは美妙の出世作で、當時の讀書界を文字通り驚倒させたもの。これといふ山のない、淡々とした時代物語だがその自然さ素直さが却つて好い印象を與へる。全篇殆ど感情と空想の所産とで、ロマンチックな幾分夢幻的な美しさをもつ。歴史小說といふよりは寧ろ散文詩に近いものである。出る人物も夢幻的に見える。やゝ現實的に輪廓のあるのは忍藻だけであらう。だが當時の讀書界を第一に魅了したものは新しい言文一致と「おじやる」詞の會話とをないまぜにした文章の新味であつた。殊に皆は叙景の文に感嘆した。造句や措辭の生硬から來る嫌味はあつても、全體に清新な美しさが溢れた作で、今日讀んでも尙ほ佳作として感じられる。當時忍月は「壓卷の傑作、其價値を言ひ現はすに苦む」とまで激賞し、不知庵も亦「非常に驚嘆した」と言つて居り、嵯峨の屋は「武藏野を見て心から動かされ、二葉亭と二人で、かうしてはゐられぬと語合つた」と言つてゐる。

『蝴蝶』（明治二十二年一月國民之友附錄）は美妙の名を宣傳するには大に力があつた作であるが、これは、一つは作そのものゝ爲めといふよりも例の裸體畫が入つてゐたからであらう。有名な割に讀んだ人が少いかも知れない。脚色は壇ノ浦沒落の後日物語で、安德帝のお伴をして落ちたといふ經房卿の書いた古文書により、「一厘一毛も事實を枉げず」ありのまゝ書いたものである。主人公の蝴蝶は「ことし甫めて十七になつた宮女」である。壇ノ浦沒落の時、主上の船を追ふつもりで惡者の手に入らうとし、それを逃れて海へ落ちたのが緣で二郎春風といふ戀人とあふ。同棲三年、落ちた安德帝の居所が二人の所に知れる、元々源氏の間者である二郎は源氏に訴へ出ようといふ、蝴蝶は夜、愛をしのんで夫を殺す。だがその翌朝帝が御隱れになつたのを聞いて、發心して尼になる。興味の中心が外的の事件の運びではなく、蝴蝶が愛と義理にからまれて我と自らたましひの戰ひを續ける內的葛藤にある、これは歴史小說として注目すべき點である。

『蝴蝶』については作者は、自身でこれは精一杯の作だといひ、批評家も概して傑作と賞めた（不知庵は東洋のシェークスピヤなどといふ語をもち出した）。筋に不自然な作爲の痕の露骨なこと、文章に餘韻がなく、調子の浮ついてゐることなど、難は種々あるが、想像の豐富、文字の典麗といふ長所は認めてよい。殊に、戀人を義のために刺した朝帝の崩御を聞くといふ趣向は、當時として稀に見る好着想である。『武藏野』より細工が多く、あれ程の自然さや清新さは無いが、美しい中に哀れがある。『武藏野』と此の作とは、作者美妙をして、春のやについで、明治小說壇のエポックメーカアたらしめたといへば、誇大な語とうけとられやうが、當時の幼稚な新文壇に於ては正にそれだけの作と見えたのである。なほこの小說に於て、作者は地の文を「です」調の言文一致體にし、會話の文だけ『武藏野』と同樣、いかにもその時代らしい古雅な言葉を使つてゐる。

以上の外に注意すべき作としては、『いちご姫』（明治二十二年）、『丸二つ引新太平記』（同二十四年）、『兜菊』（同二十五年）などであらう。

『**いちご姫**』（明治二十二年七月―二十三年五月「都の花」）は、明らかに作そのものとしては不具の作であるが、力作たるを失はない、興味の中心が『蝴蝶』と同じく主として女主人公いちご姫の性格、心理にある點、卽ち外的でなしに內的である點は注意して可い。たゞ肝心の興味の中心となるべきいちご姫の性格描寫の筆が今少し深くふれないだけ讀者の心に不滿を與へる。いちご姫といふのは、さる堂上公卿の愛女で、中々氣がさの、勤王の心をもつた女性だがふとした機會から思ふ人に身を許さんとして思はぬ人に操を失つてから、性格ががらりと一變し、夫婦共々盜賊、殺人の惡事を働き、幾人かの男を轉々と弄んだ揚句、流れて田舍侍の妻となり狂氣して死ぬ。舞臺は足利東山時代である。

作者自身の言葉によれば、この作で、彼は武家萬能、暴力無上の淺ましい世相と、表面勝氣で雄々しく見え、內實不敵で多情な而も勤王心を失はぬといふ女性の性格の變化とを描かうとしたといふ。だが今日讀んで、作者の二つの意向が成功してゐるとはいひ難い。種々な挿話で應仁亂後の淺ましい社會は相當に寫されてゐるが、物語の筋も女主人公の性格も作爲的で支離滅裂な所が多く、描寫も冗長である。これは生來詩人的な作者が强て小說を書かうと試みた結果であらう。たゞこの作についていふべきことは、當時にあつて旣に社會と性格との交渉を描かうとしたその意圖と、これによつて歷史小說の新手法を示したことゝである。なほこの作の言文一致文體が、『武藏野』、『蝴蝶』に比して一寸別樣な、練れたものであることも注意すべきである。

因に、此の作はゾラの『ナヽ』『ムーレ和上の墮罪』から暗示を得たものであると內田魯庵氏から聞いたことがある。恐らく魯庵氏は美妙から直接に聞いたものであらう。一說として擧げて置く。

『九二つ引新太平記』、これは足利尊氏、直義の兄弟を描いた小說で、二人の性格に對して同情ある見方で解釋を下してゐる。尊氏方から見た大塔宮護良親王に對する心持も一寸首肯されるところがある。作者も一番力を入れたのであらうが、何よりも直義が一番よく描かれてゐる、大塔宮をわざと怒らしてじらしてからかつて、先方から事を仕出かさせようとたくむところが裏の裏といふ樣うがつてある。その代り宮がたゞ正直一途勇猛一點張りの人物となつてゐるのは止むを得まい。これに描れた尊氏は傳說上の西鄕隆盛に實によく似てゐる。

『兜菊』、この作は單行本がないので人に最も讀まれないものだが、未完ながら美妙の作中で重きをなすものである。時代は足利の初期か中期、舞臺は武藏の五十皿子近くで、土民上りの美少年金剛次郎が主家横領の大野心から山の內管領に主家をうる所までで終つてゐる、此の作も興味の焦點は金剛次郎の心事の變化にある、その奸智の縱横な點にあ

る。然し筋としては無理が多い、例へば女裝の次郎が武藏野で晝寢して金山主從にあふ、これが發端だが、一體次郎が何の爲めに女裝して野原に晝寢してゐるかわからない類である。

『まことに憂世？』（美妙集）なども、此の期の作として一讀すべきものであらう。

美妙の歴史小說は二種あり、『猿面冠者』、『新太平記』、『雪折竹』のやうに實在の人物又は實際の史實に基いて巧みにこれを敷衍し鋪張して一種の新解釋新批評を加へようとするものと、『武藏野』、『いちご姬』、『まことに憂世？』、『兜菊』などのやうに、實際の人物事蹟ではないが當時の時勢に孕まされて然るべき想像上の歴史的性格をうみ出して上手にこれを活動させるものである。

概して抒情的、主情的傾向が多く、歴史的眞實に對する概念はさまで確乎としてはゐないが、個人性格の尊重はある。外的興味もなくはないが、內的興味に力を入れて外的を之に從はしめてゐる。これが特色である。

美妙と同じ主情的傾向をもつ歴史小說を書いた人に矢崎嵯峨の屋主人がゐる。嵯峨の屋主人も始めは『阪東武者』（明治二十四年）、『黃八幡』（同二十五年）などのやうな史實によつた作を見せてゐたが、次第に進んで『中世武士』（同三十年）、『一劍有響落花村』（同年）などになると、全然史實を何も無視した抒情的詠歎的作品になり、『關東男兒』（同三十年）に至つて眞物の抒情詩になつてゐる。美妙の主情的傾向を徹底さしたやうな感じのするのが嵯峨の屋氏の歴史小說である。『中世武士』をとつて讀むとその調子がよくわかる。活動する人物に何れも姓名がない、例へば『われ』といふ武士が功名を求めて天下に遊ぶ、偶然或る野で何處からの兩軍の戰つてゐるのをみる、一方を助けて敵を破る、恩賞をもらふ。だが敵將の姬と戀仲になり、浮世の無常を感じて何處ともなく去つてしまふといふ風なもので、あくまで詩的なロマンチックな作風である。

紅葉。露伴

美妙といへば少く紅葉が聯想されるが、その才識乃至成功の度の如何はとにかく、歷史小說といふ點からいへば紅葉は美妙の遙か下風に立つ。

出世作『色懺悔』(明治二十二年)は時代物ではあるが、歷史的興味など全然ない、抒情詩ではあるかも知れないが歷史小說ではない。

『關東五郎』(明治二十二年)の方がこれに較べるといくらか歷史小說めく感じがする、然し此の一篇では紅葉の歷史小說の手腕の優秀を立證することにはなりかねる。

露伴はこれと反對に、少數だが美妙に拮抗して遜色のない(或る點では凌ぐ)だけの歷史小說の作がある。代表として『奇男兒』(明治二十二年)、『雪紛々』(同年)、『ひげ男』(同二十三年、後二十九年)などを擧げたい。そのうち『雪紛々』は堀內新泉との合作になるものだから、これは暫くのぞいて、他の二篇について簡單に語つてみる。

『奇男兒』とは問題の烈士村上喜劍のことである、此の作には別に歷史的眞實の考證めいたところなどない。たゞ傳說通りの喜劍を寫したまでであるが、全篇に漲つた作者の氣魄感情の烈しさが讀む者の心をうつて名狀し難い感激を覺えさせる。就中、京都の茶屋で大石內藏助に酒の飮み方を敎へるところなど、讀んで肉顫ひ骨動くやうな氣がする元々喜劍をかりて作者の理想を寫すのが興味の中心であり、從つて嚴密に歷史小說の資格を質し詰めると果して何うなるかは知れないが、『奇男兒』あたりになると、もう問題を超越した理想的歷史小說として立派に通ると思ふ。

『ひげ男』、これは讀んだ人たちも多いと思ふが、武田勝賴の長篠出征を背景にして甲州方の笠井大六郞高英なるひ

げ男のことを書いたものである。現に流布してゐる『ひげ男』は後に書きかへたものであるが、何れにせよ、明治歷史小說の傑作の一たるを失はない。長篠戰の前日、勝賴方の諸老臣が訣別の水酒盃をする場面、酒井忠次が信長家康兩將の前で「蝦すくひ」の舞をまふ場面、捕虜となりし笠井大六郎が、自ら手にかけた柳小太郎の姉の玉枝に述懐の場面皆歷史小說として上乘でないものはない。主人公笠井大六郎の言動をかりて作者が述べる武士的理想の烈々とした意氣、これは單なる歷史小說にはのぞめないものである。露伴は直ちに自分の勁烈な心念を作中の人物に打ち込み、作中の人物と一體となつて動く。それだけに讀者の心を感動させる力も強い、此の點では美妙の作も却つて一籌を輸するところがある。

學海。三昧

學海の小說は歷史小說に終始したものといはれ、當人もさう考へてゐたらしいが、彼の小說の大半が果して眞正の歷史小說といへるか何うか疑ひなきを得ない。私の考によると、彼の數ある作中僅に歷史小說と目されて可さうなものは『竹間善文』(明治二十二年)、『征西將軍』(同二十三年)、『楠木』(同年)などの數篇に過ぎない。

『竹間善文』は鎌倉管領持氏に仕へた武士竹間善文の自叙傳物語體に綴つたもので、學海としてはその比較的乏しい想像を傾けて作つたものであらう、此の人特有の木屑をかむやうな、情感も何もない描寫や記述は少くはないが、兎もかく一讀は出來る。『征西將軍』は後醍醐帝の皇子征西將軍懷良親王のことを叙したもので、未完であるが、恐らく學海の小說中で一番の大作物かも知れない。引證該博、舞臺も相應ひろく取つてあるが、何しろ個人的情緒など些もないので普通の讀者なら幾頁も讀まないうちに參つてしまふ。そこへ行くと流石に『楠木』は短くて割合に變化も

あり、少しだが個人的情緒もあり、人物の個性なども幾分描かれてゐるので、彼の作中で先づ第一に歷史小說らしい感じのする作である。

學海に似て違ふ人に宮崎三昧道人がゐる。漢學に達し漢詩を作る點は似てゐるが、三昧は小說家的分子が學海より多く、世話物の作品も少くない。三昧の方が文章もつやがある。三昧の歷史小說は、『松花錄』(明治二十二年)『塙團右衛門』(同二十六年)で代表させてもよい。

『松花錄』は當時としては文章に新味があるが、筋は平凡で、權臣の子が浪人武士の娘をとらうとする。壯士が義に勇んでそれを助けて禍をかふ。とゞのつまり、浪人父子は山谷に跡を埋める、壯士も浮世を捨てゝ、同じ庵に入る、權臣父子は惡業重つて主家を退轉するといふ物語。時代は足利の初期、鎌倉管領基氏の頃である。明石清虛齋といふ老武人は割によく描かれてゐるが、總は筋の上の興味だから、人物も機械的に動かされてゐるのを免れぬ。

その代り『塙團右衛門』の方は、所謂性格描寫の歷史小說として明治歷史小說界の傑作の一つであると思ふ。歷史上に名高い拗物(ねぢもの)の團右衛門の性格を寫して神に入つたものである。勿論誇張もある、舞文もある、理想化もあるが、何といつても時代の精華ともいふべき、一徹の武士氣質が讀んで行くうちに心をわくわく躍らせる。浪人せぬ頃の團右衛門、浪人後の彼、石田三成の首を盜まうとかゝるところ、乞食の生活に入つてからの義俠、猛將變つて禪僧の鐵牛となること、例の一寢遲到の偈、彼に子を託す遊女左近のことなど、數へ立てゝ胸のすつとすかない場面は一つもない。又副人物ともいふべき男女も僧俗も皆好漢子ばかり好女子ばかり、勿論歷史小說として幾らも缺點はあるが、團右衛門の性格描寫がすば拔けて快いので、他を忘れてしまふ。持つて生れた意地骨を立てゝ立てゝ立てぬいた拗物の一生は浮彫のやうにくつきり描き出されてゐる。

櫻痴。澁柿

櫻痴は澁柿の師匠株であるが、櫻痴にも歷史小說と目すべき作は澤山ある。だが槪していつて、櫻痴の史論に比べて半分も面白くない(但し彼の史劇物には一切ふれてゐるのではない、豫め斷つて置く)。

櫻痴の文章は實に隙間のない老練な文章であり、史實の方の詮議も實によく行きとゞいてゐる、だが、その歷史小說の書き方は、全然歷史の書き方で小說の書き方ではない。種々な描寫がたゞ拙劣平凡な筋につながれてゐるだけで或る中心に一つのまとまつた想像的繪畫を成すやうなことはない。この散亂體の缺點は彼が力を入れたらしい『天竺德兵衞』(明治二十五年)、『練絹新三郎』(同年)、『水野閣老』(同二十八年)などの何れを見ても伺はれる、此の統一のないのが、歷史小說としての根本的致命的缺點である。老熟な筆にも掩せない。たゞ晩年の作『元寇物語』及びその續篇『鎭西對外談』に至つて漸く本格の歷史小說となりかけた味があるが、間もなく歿してしまつた。

澁柿は歷史小說家として終始したので好い作品も澤山あり、批評家によると明治の歷史小說が彼によつて絕頂に達したといはれてゐる。或る意味では絕頂に達したといふのも溢美でもあるまい、それは外的出來事の描寫を趣向とする歷史小說としては明治の文壇で澁柿の上を越す作家は一寸ないからである。

澁柿の作で注目すべき作品は、『山中源左衞門』(明治二十七年)、『北條早雲』(同二十八年)、『由井正雪』(同三十年)、『大鳥逸平』(同三十一年)、『金忠輔』(同三十三年)、『侠足袋』(同三十五年)、『天草一揆』(同三十九年)、『不老術』(同四十一年)、『水戶光圀』(同四十一年)、『水野越前守』(同四十一年)などであらう、澤山の作品であるから選擇に遺漏もあらうが、こゝでは、以上のうち四五について簡單にのべてみる。

『北條早雲』では、從來姦雄一點張りで見られてゐた早雲を人間的に新しい見方で見ようとしたものである。作者の同情のせゐか知れぬが、此の小說では早雲が如何にも濕ひのある、情のある人格に描かれてゐる。作者の目的は或る點まで達成されてゐるといへようか。

『俠足袋(きんたび)』は、お關といふ深川の俠妓のことを書いたもので、足の小指の一本ないので、夏冬白足袋を離さなかつたといふところから此の小說の題名が出る。小說の筋からいへば、之が滸柿の作中での白眉であらうと思ふ。お家騷動に捕物小說の味がからみ、それに義俠勇烈の意氣がこもつてゐる。美濃の八幡の金森家の騷動が、話の中心であるが出て來る人物相互の關係がこれ程入り組んでゐる小說は他にはあるまい。先づ俠足袋のお關は美濃の金森領の相生村名主與次兵衞の娘で俠僧澤禪に助けられて江戶に出、澤禪の妹の深川藝妓お夏の家から藝妓に出る、それに對して親の仇百姓の仇たる郡代萱木五郎兵衞が惚れる、尤も老爺だけに汚い惚れ方だ、お關はこの老爺のために足の指を切られるのである。澤禪の妹の藝妓お夏は惡人と知らず、金森家の成上り用人黑部市部右衞門を旦那にしてゐる、だがお關の身の上を知り、兄から黑部の惡事を聞いてお關の方に同情を表する。お夏はそのために金森家の下屋敷である黑部の妹で金森家の妾お照に殺される。黑部の手先の目明し三吉はお關に戀してゐる、それで改心して百姓方の同情者になる、惡寺社奉行恩田長門守はお照と私通してゐるので金森家をかばふ。そのうち白山騷動(元は神主同志の爭ひ)が大事になつて、澤禪に率ゐられた一隊は八幡の金森家の居城を燒き拂ふ、又お關の叔父杉本左近に率ゐられた義徒の一隊は老中酒井侯に直訴する。酒井侯と旗本の水野十兵衞忠英(澤禪の舊主)が百姓方の同情者として影に動く。一方野犬が衢(ちまた)へ出したお夏の片腕に市(市部右衞門)の入墨があることなどの證據から流石の惡人共も罪に伏して、大騷動が納まる。これにあれがからみ、それがこれに絡むといふ風にして重々層々として事件が大團圓に近づく、息も

つけない面白さである。

『不老術』は『新粧法』と俟つて完結する作で、淀君の心事をうかがつたものとして一寸面白い。稍〻、頽に鬢の見え始めた淀君は、それを心配して叡山の僧豪澤に不老の法を修させた上、豪澤を西班牙にやつて新化粧法用の白粉をもつて來さすといふだけだが、それを望む淀君の心事を織田家恢復の大賭博にしたのは、淀君の性格上或はさうもあらうかと思はれるといふ解釋である。私などには『淀君』(明治三十八年)の長篇よりも、此の短篇の方に棄て難い味がある。

『天草一揆』は、ひとり澁柿の歴史小說といはず、明治の歴史小說中の最大收穫の一つである。先年ロシヤのヨッフェが東京に滯在中、此の小說を手に入れたいといつて新聞廣告までしたことは未だ知る人の記憶には新なものがあらう。此の小說では天草一揆の大將天草四郎と由井正雪との連絡を肯定し、四郎をキリスト教徒で非凡の英雄と見てゐる、正雪が謀反人の首領にするために薩摩へ下つて豐臣秀頼の行方を探すなども面白い。發端は肥後の日奈久で正雪と四郎との出會、四郎はお時といふ馬子娘に化けてゐる。正雪は八代の四郎の姉の家に一泊して四郎と密議する。この密議の結果は舞臺は尾州名古屋にとぶ、尾州家君臣間の內偵に來たのである。大若衆にかへつた四郎は物頭淺川主膳の娘を助けたことから、尾州侯の目通りで惡劍士淵上逸角との試合となる。四郎の勝がもとで、淺川家に禍がかゝり主膳は暗擊になり、子息恭之進、娘お綾は四郎の附添で仇討に出る(お綾は四郎に戀してゐるのだ)。仇の淵上は江戶に出て島原の松倉家に奉公する、一夜恭之進一行、淵上の隱家に踏み込んで四郎の後援で仇をうつ、だが相手が松倉家の家來になつてゐるので、問題は紛糾し、四郎は松倉家に禁錮の身となる。松倉の家老大館權之助大望あり、主の愛妾お紺と通じ主家を橫領しようと計る、權之助は四郎と正雪を此の仲間に入れやうとかゝる。正雪と四郎はそれに

のつた如く見せて松倉家の亂政を利用しようとする。此の間お紺が四郎に戀して殿の怒りをかふ一幕、四郎が踏繪をふまされんとする一幕などあつて、さて一揆の導火線の島原領に百姓騷動が始まる。これに信仰壓迫問題がからんで愈〻旗揚となるのだが、大將とすべき四郎の居所が不明である、それで四郎の姉のお竹が四郎を探しに出る。お竹がふとしたことから松倉の屋敷に四郎のゐることを聞き、四郎をたすけようとして松倉の屋敷に入り、危く松倉の妾にされるところを正雪その他の力で救はれる。かうして四郎は本國に歸つて一揆の大將になる。これ以後は在來の天草物語と大同小異であるが、たゞ異ふのは正雪が天草方として城の內外で大働きをすることである。長崎へ行つてポルトガル人を口說いて城方に味方させやうとしたり、城中の人々に說いて無謀の籠城をやめさせようとしたりする。最後は宗旨弘通のため四郎、お綾その他が落城前に船で落ちのび、お紺が身代りになつて死ぬ、明末臺灣によつた鄭氏を四郎の後身であるらしく暗示してある點も、史實の問題を離れると、小說の趣向としては興味ある見方かと思ふ。

　澁柿はもと武士であり、從つて武士魂といふものが最後まで殘つてゐる。從つて武士道や武士の意氣地などにからむ所謂捌物の性格を解剖描寫するのを喜んでゐるが、たゞその解剖些か皮相的であり、道義的見方一點張りからのみするところが單調に流れて讀者をあきさせることがある。然し史實の詮索も比較的よくやり、歷史的精神を愛着する心も強く、想像的解釋も多少あり、此の點では歷史小說家としての資格を十分備へてゐる。たゞ作品一體に古風といふ趣きがあるのは爭はれない。澁柿の歷史小說の理想は『要するに古文書や歷史は信憑するに足らぬ、歷史小說家は自分の批評眼で勝手に歷史を解說し、利用し、創造したがよい』と云ふにあり、確かに澁柿は此の理論を十分實行したものである。

弦齋。浪六。麗水。水蔭

村井弦齋の歴史小說を代表すべき作品は、『櫻の御所』(明治二十七年)と『沖の小島』(同二十九年)であらう。『櫻の御所』は相州三浦の豪族三浦家が北條早雲に滅亡される物語であり、好丈夫荒次郎義意と敵方の勇婦小櫻姫との組合せが、その悲劇的效果をいやが上にも强める。これは私なども少年時代に同情の涙をもつて讀んだものであるが、今日でも相當に讀める、たゞ全篇センチメンタルな調子の濃過ぎるのは、歴史小說として何ういふものかと思ふ。落城の物語だからいゝかも知れない。

『沖の小島』は明治歴史小說中、稀に見る深刻なもので、主と戀仲の家臣の娘が主と不仲の(同じ家臣)大將に嫁する、主は此の戀を諦めかねてその女房の許を訪ふ、それを大將は嫉妬して、つひに主と大將との刄傷となり、大將は殺される、女房は自分の身からかういふ悲劇が出たのを嘆じて、自ら主の刄に身をすてる。主は無常を感じて國も家も戀ひしたふ女もすてゝ出家する。極めて陰慘なロマンスである。粉本は私が曾つて指摘したが、ルサージュの『ジル・ブラス』のうちの一挿話『致命の結婚』である。

村上浪六の數多い歴史作品を若したゞ一篇で代表させるとしたら何をとるべきか、いろいろ意見もあらうが、わたしは『原田甲斐』(明治三十二年)をもつて最なるものとしたい。此の作には浪六の所謂撥鬢物に見るやうな甚しい誇張や衒氣がなく何となくしつとりとした落着きがある、歴史的事實の概念の有無はいささか問題になるにしても、從來姦物といはれて來た甲斐その人の心事を縱橫に描きぬいて、いかにもさもあつたかも知れぬと首肯させる。此の小說に出る原田甲斐は稗史や傳說上の甲斐とは全く違ふ、伊達家の逆賊ではない、伊達家の家臣の何人よりも優れた大忠

臣なのである。たゞ自分の才智をもて扱ひ氣味なところがあり、好んで割の悪い役をとつて、伊達兵部を討るための彼の味方と見せるといふ反間苦肉の策をやつたので後世に誤られたといふ見方である。さうなると從來の大忠臣伊達安藝などがまるで木偶棒めいて來るのは仕方ない。今日の研究からすれば伊達騒動の眞相といふものは果して何うか知らぬが、原田甲斐の心事を解釋したものとしては、わたしはこれ程面白い歴史小説を知らない。

『原田甲斐』の次にはわたしは『海賊』(明治二十八年)がいゝ作であると思ふ。

遲塚麗水の歴史小説には『蝦夷大王』(明治二十五年)、『半月城』(同二十七年)その他がある。大抵の評家は『半月城』を代表作とするが、わたしはむしろ『蝦夷大王』の方が優れた作品であると思ふ。

水蔭には三十年以前で歴史小説の作が澤山ある。水蔭自身何れをもつて得意の作とするか、それは知らぬが、わたしの讀んだ限りでいへば、『兜の星影』(明治二十六年)を白眉とすべきであらう。水蔭は硯友社派文人のうちでも、眉山と共に詩人と稱されてゐた作家であり、從つてその小説にも(從つて歴史小説にも)詩趣の豐富なのを特色とする。『兜の星影』もそれがあるからで、大體筋も人物も平々凡々の物語といつて可い位ゐのものだが、たゞ一つ他の歴史小説作者には如何にしても描けない一場面がある。それは主人公難波田太郎が敵を逐うて深入りし、入間川の一本柳の青々と枝垂れる下で敵の武者、實は生みの父と戰ひ、敵に組み敷かれて今はの望みを述べるところである。われはあの柳の根方に捨てられし棄子故、せめて死骸はあの柳の下に埋め、誠の親といふに會ひし時はわれはこゝに眠ると告げてくれと云ふ、父はこれを聞いて仰天する、あの一場面は短いものだが、實に畫龍點睛といはうか、此の一語で主人公は紙人形のやうな鎧武者から生きた血のある人間に變る。此の一場面のために、『兜の星影』は實に忘れ難い印象を殘す。

樗牛。天外

樗牛と天外を一緒に並べると、人によつては異樣な感じを與へるかも知れない。然しこれには理由がある、それは二人とも所謂歴史小說作家として立つてゐる人ではないが、歴史小說の佳作を一つ宛殘してゐる、その點からである。但し樗牛の『瀧口入道』(明治二十八年)は甚だ有名なものとされて今でも讀む人(殊に青年には)が可なりあるだらうと思ふが、天外の『伊豆の頼朝』(同四十五年)に至つては明治歴史小說界の傑作の一位を占める價値のある作であるに係はらず、今日これを口にする人は殆どない。さればとて天外その人は別に何とも思はないかも知れないが、私達からいへば大に遺憾なことである。

『瀧口入道』は歴史小說といふよりは、むしろ歴史に託した抒情詩であらう。公平にいつて此の小說の取柄は文章と詩趣にあるので、性格の描寫など殊に拙、個人的情緒の解釋なども極めて皮相的である。横笛が時頼を嵯峨野に訪ふところは人が愛誦して措かない文句であるが、場景としてはむしろ時頼が深草の里に横笛の死をきくところの方が優れてゐる。時頼の心理など今少し深刻な解剖が出來るだらうと思ふが、戀をするにも、無常を悟るにも、維盛に死をすゝむるにも、動機が極めて淺薄で、相當深かつたらうと思はれる煩悶懊惱は描かれてゐない。一言にしていへば若人の春の夢に似た作である、長所も短所もこゝにある。

『伊豆の頼朝』は、頼朝が石橋山の旗揚の血祭として山木判官を屠るところまで書くつもりであつたらしいが、實際の作では赤澤山の狩くらに河津三郎が横死するところで終つてゐる。頼朝を始め、北條父子、政子姫、河津三郎、佐奈田與一、工藤祐經、何れも單に中世の英雄ではなく、さもあつたらうと思はれるやうにいかにも血の通つてゐる人

間、疑ひもあり、煩悶もあり、喜びも怒りも、良心もある人間に書き分けられてをり、土地の風物、家屋敷のたゞずまひ、人々の服裝なども、目の前に見るやうに細かく浮彫のやうに描き出されてゐる、時代の背景、流人としての頼朝の生活、政子との戀、土地の空氣、この小説を讀んでゐると、七百年のその餘も昔のことだとは何うして思へない。河津三郎は阪東第一の豪傑として描かれてゐるが、而かも正史や稗史に傳つてゐるやうな匹夫の勇士でなく、十分時勢を呑ぬくことの出來る大志ある先驅者となつてゐる。奥州、北陸を廻つて平氏に謀反する氣骨のある人物を探した揚句、心を頼朝に付することになつてゐるが、これは作者の創意になるにしても、讀んで些かの無理をも覺えない。北條の長子宗時と佐奈田與一とは早くから義兄弟の如く、同心して頼朝に旗揚させる機會をつくらうとしてゐる。その他、宇佐美の平太といひ、誰といひ、彼といひ、一體の空氣が頼朝の旗揚を餘儀なくさせるやうになつて來る。そこへ政子との戀であり、山木との憎惡が加はる、如何にも頼朝が起つた心事が明瞭に看取される。一體歴史小説の筋には無理が多く、時として取つて付けたやうな場合もあるが、『伊豆の頼朝』はいはゞ目前頼朝その人の生活を見つゝすらすらと書き流してでもゐるやうに極く自然に發展させられてゐる。『伊豆の頼朝』は明治歴史小説の恐らく最終の收穫であらうが(明治四十五年)、然し最大最佳のそれの一つであることは、一讀した人は直にうなづくと思ふ。澁柿などとは又ちがつた世界である。

以上の外に新聞小説方面で歴史小説を書いた人々は、霞亭、蘭溪、桃水、仰天の如き澤山ある。だが以上で先づ代表的作家は盡したと思ふから、一々は及ばないことにして置かう。

山田美妙(その二)

美妙の歴史小說の後期の進境を代表する作品としては、長篇では『平重衡』(明治四十三年)、『平清盛』(同四十三年)があり、短篇としては佐々木兄弟を描いた『四郎高綱』(同三十九年)、『二郎經高』(同四十一年)、『三郎盛綱』(同四十二年)、『太郎定綱』(同四十四年)及び『小宰相局』(同四十二年)等がある。何れも明治歷史小說中の佳作と目すべきものである。主題に何れも不遇の人、又は不遇時代の人を選んでゐるが、これは自分の境遇から、かゝる人々、かゝる境遇に同情したものであらうか。

由來美妙は好んで叙述に現在法の動詞をもちひて、現に眼に見るやうに物語つてゆく、英語にいふヒストリカル・プレゼントである。この戯曲的手法が、美妙の歴史小說の一つの特色であり、同時に讀者にそのうつすところを強く印象させる特技でもある。讀者は作者の人物と同時に合體するからである。後期の諸作では、此の話法が殊に圓熟して來たらしい。

『平重衡』は、重衡が一の谷で捕虜になつてから、奈良で斬られるまでのことを書いた小說であるが、囚人重衡の心事の變遷を明は明、暗は暗と事細かに辿つたものである。重衡にせよ誰にせよ、他の歴史小說家の書くやうな武士道の化物じみた人間ではなしに、矢張り環境や運命と爭ふ靈魂をもつた生きた人間として描かれてゐる。人物では流石に重衡が一番よく出てゐる。男らしくて、而かも優美で、誠に敵方から惜まれるだけの人格はある、最後迄自暴自棄せず平家の運を顧念しつゝも大きな運命の手に抗はず安心の地をもつてゐるところは仲々好い。頼朝は善意だが實際の人物よりは少し規模が小さく解釋されて、義經や時政の傀儡のやうに見なされてゐる。義經の印象は悪い、するどくて、我儘で、横暴で、何ともいへない、眼先のわかる點をのけると義仲と甲乙のない人物に寫されてゐる。忘れ得ない印象を殘す場面としては、重衡と中納言局との別れ、法然房と重衡の對話、鎌倉の狩野介の邸で千手の前と朗詠

するところ、奈良での最後など、しみじみと胸に浸み通る。いつまで經つても搔き消し難い印象をのこす。背景になる歴史的觀念が今少しくつきり出てゐたら猶よろしいと思ふ。たゞそれだけが足りない。

此の小説以下、大體「史外史傳」と銘うたれてゐるが、やまと新聞に始めて出た時の緒言に、何故史外史傳といふかといふ理由と、自分の歴史小説を書く態度を述べてある。

『平清盛』は『重衡』程舞臺が大きくない。出世前の高平太清盛の生活を題材にしたものだが、他日清盛が横暴專恣を極めたのを、此の寒微時代に藤原氏その他からうけた虐待や冷遇や壓抑やの反動だとみる見方は成程面白い。今に見ろといふ一念が清盛を好運の寵兒たらしめるに至ることを清盛の心理描寫に中心を置いて語つてゐる。父忠盛の死ぬ時に、貧乏な上藤原氏ではないので、殆ど醫師もろくに見舞つては來ぬ事、又忠盛の夫人の藤原氏の空威張のことが、筋として些かの無理も無く工夫されてゐる。ここには人間清盛が立派に描かれてゐる、此の小説の清盛を讀むと、同情は起るが、決して正史の清盛、軍記物の清盛のやうに憎惡をそゝりはしない。

三十幾歳まで殆ど青春の快樂も味ひ得ず、藤原氏の專權といふ霜雪に鍛へに鍛はれた清盛がはつきりと出てゐる。こゝまで清盛の心理に抉り入つて、想像の力で再現して來た美妙は偉いと思ふ。清盛が何故後年物的榮華に憧憬したか、女色を漁つたか、權力を欲したか、それは此の『平清盛』の中に描かれてゐる。青春をもたぬ清盛のみじめな微笑を燃えるやうな眼ざしを見れば、誰でも何でもない、かういふ境遇に野心を抱かされた彼では、さうなるのが自然だといふ氣がする。此の『清盛』が矢張り明治歴史小説の一傑作だと思ふ。

佐々木兄弟の短篇は、太郎以下四郎に至るまでの佐々木兄弟が、勇武もあり功名もありながら、いつも運命の寵兒となり得ず、何れもさびしい失敗者として終つてしまふのにいたく同情して、その「追遠の意味」で創作した歴史小説

である。『四郎高綱』は、頼朝と北條から眼の上の瘤にされた高綱が、つひに北條などにそゝくられて出家遁世することを書いたもの。『太郎定綱』は、北條も頼朝も直接定綱をどうにも出來ぬところから、その子太郎定重が父の留守中柏阪の遊君の事から(表面は年貢の問題から)延暦寺の僧徒と悶着を起したのを幸ひに定重に切腹させて定綱を抑へることを書いたもの。『二郎經高』は、經高が北條におべつかせぬために、功ありながら貶下されるので、承久の亂に官軍に加はつたが、戰ひ破れて死ぬ物語を書いたものである。『三郎盛綱』も、ほゞ同樣な盛綱の不過を書いものであるがこれが古武士氣質の性格描寫には一番成功してゐる。何れも主人公の心理描寫性格解剖が興味の中心となつてゐることは他の美妙の歷史小說の共通特色である。此等の諸篇に出て來る頼朝は、『重衡』に出るのとは變つて、いかにも奸雄らしい陰險な面影が見える。

『二郎經高』が、小說として一番優れた出來のやうに思ふ。殊にこれに出る北條泰時がいゝ、經高に自滅させやうとする父と祖父の議に反對して經高を救ふ、こゝが實に美しい一場面である。

『**小宰相局**』は、越前三位通盛と小宰相局の哀れ深い物語である。これは歷史小說としては以上の諸作に多少劣るやうに思ふ。通盛討死の場面、小宰相入水など強い印象を殘すが、通盛は吾等とは大分隔てのある通盛である、重衡や清盛程吾等と接近してゐない。たゞ美しいことは美しいロマンスである。

以上の外、最近の發見にかゝる歷史小說では、『祇王』(四十三年)、『阪東武者』(四十一年)、『親鸞聖人』(四十二年)などがある。何れも史外史傳物である。

『**祇王**』は晚年の清盛と祇王の關係を描いたもの、恐らく未完ではないかと思はるゝ節がある。矢張り清盛の性格が一番よく出來てゐる。多情漢清盛入道の心事を可成りこんもりと描いてみせてゐる。だが小說的趣向は拙の方であら

う。由來美妙は趣向の立て方が長所でない、『いちご姫』以來、何うも大抵それで失敗してゐる。『平重衡』の如きは、美妙としてはその點で上乘の傑作に入るべきものである。

『**親鸞聖人**』は異色のある僧傳小說である。美妙には外に數篇(勢至丸や性空上人等)の僧傳小說があるが、未完ながらこれが一番感銘をうけて、親鸞に於いて、美妙は、親鸞傳の史實討究は試みず、暫らく在來の傳說のまゝの親鸞を素直に受けて、そこに新な想像的解釋を施さうとしてゐる。美妙の眼に寫つた親鸞は、女人濟度を提げて佛教の大改革を試みようといふ大野心に燃えてゐる英雄兒としての親鸞である。このまゝ描いて行つて、法然との對照が果して何うなるか、そこに面白い期待があるのだが、惜しいかな、親鸞が月輪關白の婿君になるところで、中絕してゐる。

概ね、美妙の後期の諸作や、天外の『伊豆の頼朝』などを讀むと、わたしは明治の歴史小說が今や歴史小說として最後の發展段階たる內的描寫、史實への想像的解釋を特色とする第三段階に進みかけてゐたやうに思はれる。それがつひに完全なものを見ずに、大正の歴史小說界に入つてしまふことは、概觀に說く通でりある。美妙の歴史小說は、總體として見れば、明治文壇の何の邊に位置させていゝか疑問かも知れないが、これは彼が妙に文壇的に孤立扱ひされてゐるからである。然し文學史上からいへば、歴史小說家としての山田美妙の名が、明治の歴史小說界を代表する最も高い最も輝しいものゝ一つ(他に若し有りとせば)であることには、何の疑ひもないのである。

武藏野

上

此武藏野は時代物語ゆゑ、まだ例は無いが、その中の人物の言葉をば一種の體で書いた。此風の言葉は慶長頃の俗語に足利頃の俗語とを交ぜたものゆゑ大概其時代には相應して居るだらう。〔註、此ノ項廿一年八月金港堂ヨリ單行ノ「夏木立」所收ノモノニハアルモ、廿年十一月二十日讀賣新聞附錄ニ載セラレタル時ニハ無シ〕

あゝ今の東京。むかしの武藏野。今は錐も立てられぬ程の賑はしさ。昔は關も立てられぬ程の廣さ。今仲の町で浮れ男に睨附けられる鴉も昔は海端四五町の漁師町で僅に活計を立てゝ居た。今柳橋で美人に拜まれる月も昔は「入るべき山もなし」。極の素寒貧であッた。實に今は住む。百萬の蒼生草。實に昔は生えて居た。億萬の生草。北は荒川から南は玉川まで、嘘も無い一面の青舞臺で………、草の樂屋に蟲の下方……。尾花の招きに引かされて寄來る客は狐か、鹿か、又は兎か、野馬であッた。此樣な處にも、世の亂とて是非も無く此頃戰が有ッたと見え、其處此處にはや腐れ始めた。見るも情無い死骸が數多く散ッて居たが。戰鬪のならひ。それを葬ッてやる和尚も無く。たゞ處々にばかり。退陣の時にでも積んだかと見える死骸の塚が出來て居て。それには僅に草や土や又は蔽れて血だらけになッて居る陣幕などが掛かつておッた。其外はすべて雨ざらしで。鳥や獸に食はれるのだらう。手や足が千切れて居たり。また記標に取られたか。首さへも無いのが多かッた。本當に是等の人々には懷かしい親もあらう。可愛らしい妻子もあらう。親しい交りの友もあらう。身を任せた主君もあらう。それであッて

此有樣。刄の串につんざかれ。矢玉の雨に碎かれて異域の鬼となツてしまツた口惜しさはどれ程だらうか。死んでも誰にも祭られず……故鄕では影膳をすゑて待ツて居る人もあらうに……「ふる鄕に今宵ばかりの命とも知らでや人の我をまつらむ」〔註、讀賣所載ノ時ニハナシ〕……露の底の松蟲もろとも空しく怨に咽んで居る。それなら。生きて居た內は榮華をして居たかといふに。なか／＼左樣ばかりでも無かツた。……戰國の世だものを。武士は例外だが。只の百姓や商人など鋤鍬や算盤の外はあまり手に取ツた事の無い者が「サア軍だ」と驅集められては親兄弟に淚の水杯で暇乞。「仕方が無い。これ、忰。死人の首でも取ツて胡麻化して功名する樣に」と腰に弓を張る親父が水鼻を垂らして軍略を略傳すれば。「あぶなかツたら人の後に隱れてなるだけ早く逃げるがいゝよ」と兜の緒を緊めてくれる母親が淚を嚙交ぜて忠告する。テモ。耳の底に殘るやうに懷かしい聲。目の奧に止まるほどな昵しい顏をば「左樣ならば」の一言で聞捨て。さて陣鉦太鼓に急立てられて修羅の街へ出掛ければ山奧の靑苔が褥となツたり。河岸の小砂利が襖となツたり。その內に……敵が……ソラ太鼓が……右左に大將の下知が……そこで命が無くなツて……跡は野原でこの有さまだ。死ぬ時にはさぞ跪いたらう。さぞ死ぬまいと齒をくひしばツたらう。血は流れて草の色を變へて居た。魂も亦身體から居處を變へて居た。切裂かれた疵口からは臟腑が怨めしさうに這出した。其上には。敵の餘類か金づくり、薄がねの鎧をつけた蠅將軍が陣取ツて居た。はや乾いた眼の玉の池の中には蛆大將。勢揃。勢よく吹くのは野分の橫風……。變則の匂囊……臭かつた。

はや七つさがりだらう。日は函根の山端に近寄ツて。儀式どほりあかね色の光線を吐始めた。末野を些しづゝ薄樺の隈を加へて遠山も。……毒でも飮んだのか……段段と紫になり。原の果には夕暮の蒸發氣が切りに逃水をこしらへて居た。頃は秋。其處此處我儘に生えて居る木も旣に綠の上衣を剝がれて仕舞ツた。寒いか。風に慄へ

て居ると。なぐさめがほにも旅歸の椋鳥は澄まし切ッてベチヤクサと囀ッた。處へ大層急足で西の方から行歩て來るのはわづか二人の武者で。いづれも旅行の體であッた。

一人は五十前後だらう。鬼髭が徒黨を組んで左右へ立別かれ。眼の玉が立列んで鉄壺の內ぐるわに楯籠り。眉が八文字に陣を取り。脣が大土堤を厚く築いた體。それに身長が櫓の眞似して。筋骨が暴馬から利足を取ッて居る鹽梅。……どうしても時世に恰好の人物。自然淘汰の網の目をば第一に脫けて生殘る逸物と見えた。その打扮はどんなであッたか。身に着いたのは淺紺に濃茶の入ッた具足で威もよほど古びて見えたが。處ろ／＼に殘ッて居る血痕が。持主の軍馴れたのを證據立てゝ居た。兜は無くて亂髮が藁で括られ。大刀疵が幾許もある臘色の業物が腰へ反返り。そして鎧の双袖は取外して疊まれた儘。腰帶の間に挾ッてゐた。手甲は見馴れぬ手甲だと思へば。馬鹿に濃菊が剝がれて居たのだ。此體で考へればどうしても此金壺とのは軍事に馴れた人に違無い。

今一人は十八九の若武士と見えたけれど。鋼鐵の厚兜が大概顏を匿して居るので十分にはわからなかッた。しかし色の淺黑いのと口に力身のある處でざッと推して見れば是も屹とした面體の者と思はれた。身長は酷く大きくも無かッたのに。具足が非常な太胴ゆゑ。何となく身の横幅が釣合わるく太く見えた。具足の威は濃藍で、魚目は如何にも堅さうだし。そして胴の上縁を離山路であッさり圍まれて。その中には根笹のくづしが打ッてあッた。腰の物は大小ともに中々見事な製作で。鍔はやはり作物であッたらう。活々とした蜂が二匹ほど毛彫になッて居た。古いながら具足も刀も。このとほり上等である處で見ると此人も雜兵では無いに違無い。

此頃のならひとて此二人が步行く內にも日邊へ心を配ッた樣子は中々泰平の世に生まれた人に想像されない程であッて、茅萓の音や狐の聲に耳を側てるは愚なこと。些しでも人が踏んだやうな痕の見える草の間などをば容

易に輕々しくあるかない。生きた兎が飛出せば伏者でも有るかと刀に手を掛け、死んだ兎が途にあれば敵の謀計でゞも有るかと腕をとりしばッた。其頃はまだ純粹正味の武藏野であッて、奥州街道は僅に隅田川の邊を沿ふてあッたので、中々通常の者で以て只今の九段あたりの內地へ足を踏込んだことは無かッたが、その些し前の戰爭の時には此高處へも陣を張ッた者が有ッたことゝ見えて。今此二人が其處へ來掛かッて見回すと千切れた幕や兵粮の包が死骸と共に遠近に飛散ッて居た。この體に旅人も首を傾けて見て居たが。やがて手を取ッた方が靜に幕を取上げて紋處をよく見ると。是は實に間違無い。足利の物であッたので思はずも雀躍した。

「見なされ。是は足利の實紋ぢや。ハテ心地よいヮ」。

と言はれて若いのもうなづいて。

「さうぢや。諧い有樣でおじやるヮ。あの先手の大合戰の跡でおじやらうが。跡を取收める人も無くて……」

「女々しいこと。何でおじやる。思出しても二方（新田義宗と義興）の御手並、……さぞな高氏づらも身ぶるひをしたらうぞ。あの石濱で追詰められた時。いたう見苦しくあッてぢや」。

「ホヽ御主、其時の軍に出なされたか。耳よりな……語りなされよ」。

「語り申さうぞ。但し。物語に紛れて遲れては面目なからう。翌日頃は何も決めて鎌倉へいでましなさらうに……後れては……」

「それも左樣ぢや。左樣でおじやる。さらば物語は後に償されよ。兎に角。この敗軍の體を見ればいとゞ心も引立つヮ」。

「引立つヮ。引立つヮ。絲の樣に引立つヮ。和主（おのし）も是から見參した後。毎度手柄をあらはしなされよ」。

「是からは亦新田の力で宮方も勢を增すでおじやろ。楠や北畠が絕えたは惜しいが、……また二方が世に秀れておじやるから……」

「嬉しいぞや。早う高氏づらの首を斬りかけて世を元

弘の昔に復したや」。

「それは言はんでもの事。如何ばかりぞ。その時の嬉しさは」。

是でわかッた。此二人は新田方であッたに違無い。そして先年高氏が石濱へ追詰められたとも云ひ。また今日は早く鎌倉の方へ向ッて行くと言ふので見ると、二人とも間違無く新田義興の手の者であッて殊に若いのは始めて是から御目通りをする處であッたと見えた。鎧や刀も。だから親の讓物の儘であッたのだらう。應答の內にはいづれも武者氣質の凛々しい處が見えて居たが。どうしても比合はせて見ると若いのは年を取ッたのよりまだ軍には馴れないので血腥氣が薄いやうだ。

それから二人は今の牛ヶ淵あたりから半藏の濠あたりを南に向ッて歩いて行つたが、其頃はまだ、此邊は一面の高臺で、はるかに野原を見通せる處から二人の話も大抵四方の景色から起ッて居る。年を取ッた武者は北東に見えるかたそぎを指さして若いのに向ひ、

「誠に廣いではおじやらぬか。何處を見ても原ばかりぢや。和主などはまだ知りなさるまいが、それ那處のかたそぎ、喃あれが名に聞ゆる明神ぢや。その、また、北東には濱成たちの觀世音があるが、此處からは草で見えぬわ」。

「浮評に聞える御社はあの事でおじやるか。見れば太う小さなものぢや」。

「あの傍ぢや、己が、誰やらん逞ましき、敵の大將の手に衝入ッて騎馬を三人打取ッたのは。その大將も、はるか對方に栗毛の逸物に騎ッて控へてあつたが、己の働を心にくゝ思ひつらう『あの武士、打取れ』と金切聲立てゝをッた」。

「はゝゝ、嘸御感に入りなされたらう、軍が終ッて。身に瑕をば負ひなされたか」。

「四ケ所負ひたが、いづれも薄手であッた。迚もあの樣な亂軍の中では無瑕であらう者はおじやらぬ。勿論原で戰ふのぢやから、敵も味方も其時は大抵騎馬であッた。

が味方の手綱には大殿(義貞)が仰せられたまゝ金鏈が縫込まれてあッたので手綱を敵に切離される掛念は無かッた。其時の二の大將(義興)の打扮は目覺ましい物でおじやッたぞ」。

「一の大將(義宗)もおじやッたらう」。

「おじやッた。この方もおなじ樣な打扮ではおじやッたが、其足の威が些濃かッたゆゑ、二の大將ほど目立ちなさらなかッた」。

折から草木を烈しく搖ッて野分の風が吹いて來た。野原の急な風……それは中々想像の外で、見る間に草の莖や木の小枝が砂と一途にさながら鳥の飛ぶやうに幾萬となく飛立ッた。そこで話もたちまち途切れた。途切れたか、途切れなかッたか、風の音に呑まれて、わからないが、先は確に途切れたらしい。此間の應答の有樣に就いてまたつら/\考へれば年を取ッた方は中々經驗に誇る體が有ッて、若いのはすこし謹深い樣に見えた。左樣でしやう、讀者諸君。

其内に日は名殘無くほとんど暮掛かッて來て雲の色も薄暗く、野末も段々と霞んで仕舞ふ頃、變な雲が富士の裾へ腰を掛けて來た。原の廣さ、天の大きさ、風の强さ、草の高さ、いづれも恐ろしい程に苛めしくて、人家は何處か些しも見えず、時々ははるか對方の方を馳せて行く馬の影がちらつくばかり、夕暮の淋しさは段々と腦を嚙んで來る。「宿るところもおじやらぬ喃」。「今宵は野宿するばかりぢや」。「急がうぞ」。「急ぎやれ」。是だけの應答が幾度も試驗を受けた。

「馬が走るわ。捕へて騎らうわ。和主は好みなさらぬか」。

「それ面白や。騎らうぞや。すはや這方へ近づくよ」。

二人は馬に騎らうと思ッて、近づく群をよく視れば是は野馬の簇では無くて、大變だ、敵、足利の騎馬武者だ。

「ハッシ、ぬかッた。氣が注かなんだ。馬ぢや……敵ぢや……敵の馬ぢや」。「敵は多勢ぢや。世良田どの」。「味方は無勢ぢや。秩父どの」。「さても……」「思はぬ……」

敵は間近く近寄ッた。

「動くな。落武者。知らぬか。新田義興は昨日矢口で殺されてぢや」。

「なに、二の君が」。

「今更知つたか。覺悟せよ」。

跡は降ッたか。劒の雨が。草は貰ッた、赤繪具を。淋しさうに生出た新月の影。くやしさうに吹く野の夕風。

中

「山里は冬ぞさみしさまさりける。人目も草もかれぬと思へば」。秋の山里とてその通り。宵ながら凄いほどにさみしい。衣服を剝がれたので瘦肱に瘤を立てゝ居る柿の梢には冷笑顏の月が掛かり、青白く冴通つた地面には小枝の影が破隙をつくッた。はるかに狼が凄味の遠吠を打込むと谷間の山彦がすかさずそれを送返した。望むかぎりは狹霧が朦朧と立込めてほんの特許に木下闇から照射の影を惜しさうに泄らし、そして山氣は山おろしの合方となつて意地わるく人の肌を噛んだ。さみしさ凄さは是ばかりでは無い、曲りくねッた、さも惡徒らしい古木の洞穴には梟が、あの怖らしい兩眼で月を睨みながら宿鳥を引裂いて生血をぽた／＼……

崖下にある一構の第宅は鄕士の住處と見え、よほど古びては居たが、骨太く粧飾少なく、夕顏の干物を衣服とした小柴垣がその周圍を取卷いて居た。西向の一室、その前は植込で、色々な木がきまりなく、勝手に茂ッて居たが、その一室は此處の家族が常に居る室であッたらう、今も其處には二人の婦人が……

けれど先第一に人の眼に注まッたのは夜目ながらあざやかに若やいて見える一人の方で、言はずと知れた妙齡の乙女。燈火は下等の蜜蠟で作つた一里一寸の松明の小さいのであッたから、四邊どころか、燈火を中心として半徑が二尺ほど隔ッた處には一切「闇」が行通ッて居たが、しかし容貌が水際だッて居ただけに十分若い人とは見えた。年頃はたしかに知れないが眼鼻や口の權衡がま

だよくしまツて居ない處で考へれば左樣長けても居なかツたらう。その辯すわり身長は中々あつて、そして（少女の手弱には似ず）腕首が大層太く、その上に人を見る眼光が……眼は腫目緣を持ッて居ながら……（難を言はゞ）、凄い……でも無い……やさしくなかッた。たゞ肉が肥えて腮に柔い段を立たせ、眉が美事で自然に顏を引立たせたのでやゝ見處が有るやうに見えた。その些し前までは白菊を摺箔にした上衣を着て居たが、今はそれを脫いでたゞ蒲の薄綿が透いて見える葛の衣服ばかりで居た。

之と對合ツて居るのは四十前後の老女で、是も着物は葛であッたが柿染の古ぼけたので、何うしたのか砥粉が澤山附いて居た。顏形。それは老若の違こそはあッたが。ほと／＼前の婦人と瓜二つで……ちと輕卒な判斷だが。だから多分此の二人は母子であッたらう。

二人とも何やら浮かぬ顏色で今迄の話が途切れたやうな體であッたが。暫くして老女の方は屹と思ひ注いたやうな風で傍の匕首を手に取上げ、

「忍藻、和女の物思も道理ぢやが……此母とて太う心には掛かるが……さりとて……こや其樣に。忍藻。太息吐くやうでは……太息のみ吐いて居るやうでは武士……實よ。世良田三郞の刀禰の內君には……聞けよ。此母の言葉を。見よ。この母の衣を。和女はよも忘れは爲まい。和女には實の親。己には實の夫の。あの左衛門の刀禰が這回二の君の軍に加はッて。天晴世を。元弘の昔に復す忠義の中に入らうとて。世良田の刀禰もろとも門出した時。己は。こや忍藻。己は何して何言ふたぞ。己が手づから木賊に磨上げた南部鐵の矢根を五十筋、……各自へ廿五筋……喃。門出の祝と差出して。忍藻。聞けよ。「二方の中の誰方でも前檣で敵を引受けなされたら。この矢根に鼻油引いて。兜の金具の目欲しいを附居るを打止めなされよ。また殿で敵に向ひなさるなら。おなじく此矢根で鹿毛か。葦毛か。月毛か。栗毛か。馬の太く逞しきに騎つた大將を打取りなされよ。婦女の甲斐なさ。それよ忠義の志ばかりでおじやるわ」と此眼から張切れうづる涙

を押へて……おゝ己は今泣いては居ぬぞ。忍藻……己も武士の妻ほどに夫を勵まし聟を急いたぞ。そを。處女。忍藻も見ておどやッたらうぞ喃。武士の妻のこゝろばえは箇樣無うてはならぬわ。さればこそ今日までも休まず。夫と聟とは家には居らぬが。己が矢根を日々磨澄まして。おなじ忠義の刀禰たちに與ふるのぢや。かう衣は砥粉に塗れても中々に嬉しいぞい、然すれば」。

「まことよ。仰は道理におじやる。妾とてなど……」

「心から左樣なら此母もうれしいわ。見よ。喃。この匕首を。門出の時。世良田の刀禰が處女にそを殘して再會の記念と爲されたらうよ。それを見たら。よしない。女々しい心は……刀禰に對して……出されまい。處女とて一通は武藝をも習うたのに……近くは伊賀局なんどを龜鑑となされよ。人の浮評には色々の詐僞も交はるものぢや。輕々しく信ければ後に悔ゆることもあらうぞ」。

言切ッた母は返辭を待顏に忍藻の顏を見詰めるので忍藻も仕方無さ相に、挨拶したが。それもたッた一言であッた。

「さも然うず」で

母も覺束ない挨拶だといふ樣な顏付きをして居たが。流石に強ひてとも言難ね。やがてやゝ傾いた月を見て

「夜も更けた。さらば己は是から看經せうぞ。處女は思ひのまに／＼寢よ」。

忍藻がうなづいて禮を爲たので母もそれから座を立ッて縁側傳に奧の一間へやう／＼行ッた。跡に忍藻はたゞ一人起ッて行く母の後影を眺めて居たが。しばらく／＼して。堪へこらへた溜息の堰が一度に切れた。

話の間だが一寸玆で忍藻の身上や性質がやゝ詳に述べられなくてはならない。實に忍藻は今の老女の實子であッて、父親を秩父民部とて前回武藏野を旅行して居た旅人の中の年を取つた方であッた。而して旅人の若い方はすなはち世良田三郎。今の母親の話でも大抵樣子がわかるが。忍藻には夫であッた。

此三郎の父親は新田義貞の馬の口取で。藤島の合戰の

時。主君とゝもに戰死して仕舞ひ。跡には其時五歳になる孤子の三郎が殘つて居たので。民部もそれを見て不愍に思ひ、引取ッて娘と一途に育てた。處が三郎は成長するに從つて武術にも長けて來たし、中々見處のある若者となッたので養父母も大きに悦び。そこでそれを終に娘の聟にした。其時若夫婦とも同年で十九歳であつた。今から見ればあまりな早婚だけれど。昔は其樣なことには更々かまはなかッた。それで若夫婦は中よく暮して居たところが。不圖聞ば新田義興が足利から呼ばれて鎌倉へ入るとの噂があるので。血氣盛の三郎は家へ引籠もッて軍の話を素聞（すぎき）にして居られず、舅の民部も南朝へは心を傾けて居ることゆゑ。難なく相談が整ッて。それから二人は一途に義興の手に加はらうとて出立したのだ。竟に武藏野で不思議な危難に遇ッたのだ。その危難にあッた事が精密ではないが。それが薄々は忍藻の方にも傳はッたので。さアそれが忍藻の心配の種になり。母親をつかまへて鬱出すので其處で前のとほり母親もそれを諭して勵まして居た。

「門前の小僧は習はぬ經を誦む」。鍛冶屋の嫁は次第に鐵の産地を知る。三郎が武術に骨を折ッて居る有樣を朝夕見て居たのみか、亂世の常とて大抵の者が武藝を攻める常習（ならはし）になッて居るので。忍藻も自然太刀や薙刀の事に手を出して來ると。從ッて心も幾分か雄々しくなッて來た。手首の太いのや眼光のするどいのは全く其爲だらう。けれど今あからさまに其性質を言はうなら。なる程忍藻はかなり武藝に通じて。一度などは死掛かッて居る熊を生捕にしたとて毎度自慢が出る程であッたから心も十分猛々しいかと言ふに。全く左樣ばかりでもなかッた。その雄々しく見えたところは只。時々の身の擧動（こなし）と言葉の有樣にあッたばかりで。その婦人に固有の性質は（殊に心の教育のない婦人に固有の性質は）跡を絶ッては居なかッた。たしかに無くなッては居なかッた。

　母が立去ッた跡で忍藻は例の匕首を手に取上げて拔離し。しばらくは氷の光を瞻詰めて屹とした風情であッた

が。また其下から直に溜息が出た

「匕首。この匕首……向にも母上が仰せられた如く。あの刀禰の記念ぢやが……さても是を見ればいとゞ猶……そも刀禰たちは鎌倉まで行着かれたか。無難に。太う武藝に長けておじやるから思遣るも女々しけれど……心に掛かるは先程の人々の噂よ。狹い胸には持兼ねて母上に言出づれば。あれほどに心強うおじやるよ。看經も時に因るは。この分難い最中に……何事ぞ。心長閑けく。そも此身の夫のみの御身の上では無くて。現在母上の夫さへも同じ樣でおじやるのに……さても扨も。武士の妻は斯程無うてはと仰せられても。此身には爭でか／＼。新田の君は足利に計られて矢口とやらんで殺されて。その手の者は一人も殘らず……あゝ胸ぐるしい噂ぢやは。三郎の刀禰は。然うよ。父上も其處を逃れなされたか。門出の時。この匕首を此身に下されて「喃。忍藻。おことゝ己とは一方ならぬ緣で……やがて己が功名して歸ッて來る日は何時ぞとはよう知れぬが。和女も並々の女に立超えて心ざまも女々しうおじやらぬから由ない物思をば爲さるまい。その時までの記章には己が祕藏のこの匕首（これには己の魂も籠もるは）。匕首を殘せば。和女も是で煩惱の羈をば喃。なみだは無益ぞ」。日頃から此身を我ながら雄々しくして居るに。今日ばかりは如何して斯うも胸が立騷ぐか。別離の時の御言葉は耳に止まッて……拔離せば此の淒い業もの……發矢、なみだの顏が映るは。この涙、あゝら此身の心はまだ左程弱うはなるまいに……涙ばかりが弱て……昨夜見た怖い夢は……あゝ思入ればいとゞ猶胸は……胸は湧起つは。矢口とや。矢口は何處ぞ翼さへあらば簡程には……」

思入ッてはこらへかねて坐に涙をもよほした。無論荒誕の事を信じた世の人だから夢を氣に掛けるのも無理では無かッた。思へば思ふほど考はます／＼違く走ッて。それでなくても中々強い想像力が一入跋扈を極めて判斷力をも殺いた。早く此處でその熱度さへ低くされたなら。別に何のことも無が。中々通常の人には其樣に自由な事

はたやすく出來ない。不思議さ。忍藻の眼の中には三郎の面影が第一に現れて次に父親の姿が見えて來る。青ざめた姿形があらはれて來る。血……血に染みた姿形があらはれて來る。垣根に吹込む山おろし。それも三郎たちの聲に聞えた。ボーン懶と鳴る遠寺の鐘、それも無常の兆かと思はれた。

人に見られて。物思に沈んで居ることを悟られまいと思ッて。それから忍藻は手近にあッた古今集を取ッて宜加減な處を開き。それへ向つて字をば讀まずに、いよいよ胸の中に物思の蟲を養ッた。

「題知らず……躬恒……貫之……つかはしける……女のもとへ……天津かりがね」。おゝ我知らず讀んだか。それにつけても未練らしいかは知らぬが。門出なされた時から今日まではや七日ぢやに……七日にかう胸がさわぐとは打出せば……愚痴めいたと言はれ……おゝ雁よ。雁を見て嘆いたといふ話は眞に……雁。雁は翼あッて……晴」。

だが。身最負で。猶幾分の內心の內心には（このやうな獨語の中でも）「まさか殺されは爲まい」といふ推察が蟲の息で活きて居た。それだのに涙腺は無理に門を開けさせられて熱い水の堰を通はせた。

此儘でやゝしばらくの間は全く無言に支配されて居た。其の內に。何うした事か。破裂した。次の一聲が。

「武藝はそのため……」。

その途端に燈火は弗と消えて。跡へは闇が行亙ッた。燃さしたあとの火皿が暫時は一人できら〳〵。

下

夜は根城を明渡した。竹藪に伏勢を張ッて居た村雀はあらたに軍議を開初め。閨の隙間から斫込んで來る曉の光は次第に四方の闇を追退け。遠山の角には茜の幕がわたり。遠近の溪間からは朝雲の狼烟が立昇ッた。「夜ははや明けたよ。忍藻は疾くに起きつらうに……まだ聲をも出ださぬは」。訝りながら床をはなれて忍藻の母は身繕

し。手早く口を漱いで顏をあらひ、黃楊の小櫛でしばらく髮をくしけづり。それから部屋の隅にかゝッて居る竹筒の中から生蠟を取出して火にあぶり。切りにそれを髮毛に塗りながら。

「忍藻いざ快う來よ。蠟鎔けたぞや。和女も塗らすか」。

けれど一言の返辭も無かッた。

「忍藻よ。忍藻よ。いざたなや。秋の夜長に。……こや忍藻」莞爾わらッて口の裡。「昨夜は太う軍のことに胸なやまして居た體ぢやに。さても此處ぞまだ幼兒ぢや。今はかほど迄に熟睡して。さばれ。いざ呼起さう」。

忍藻の部屋の襖を明けて母はハッとおどろいた。承塵にあッた薙刀も。床にあッた鎖帷子も。無論三郎が吳れた匕首も。四邊には影も無かッた。「スハヤ己がぬかッたよ。常より物に凝る常辭……如何にも怪しい體であッたが。さても己は心注きながら心せなんだ愚さよ。慰言を聞かせたが。猶も猶おもひわびて脫出でたよ。あゝら由由しや。ゆゝしい事ぢや」。

心の水は沸立ッた。ソレ朝餉の竈を跡に見て跡を追ひに出る庖廚の炊婢。サア鋤を手に取ッたまゝ尋ねに飛出す畑の僕。家の中は大騷動。見る間に不動明王の前に燈明が點き。たちまち祈禱の聲が起ッた。雄々しく見たが流石は婦人。母は今更途方にくれた。「なまじひに心せぬ體でなぐさめたのが己の脫落よ。さてもあの儘鎌くらまで。若しは追ふて出行いたか。いかに武藝を一亙りは心得たとて……この血腥い世の中に……たゞの女の一人身で。……たゞの乙女の一人身で。……夜をも厭はず一人身で……」

思へば憎いやうで、可哀さうなやうで。また悲しいやうで。くやしいやうで。今日はまた母が昨夜の忍藻になり。鳥の聲も忍藻の聲で誰の顏も忍藻の顏だ。忍藻の部屋へ入ッて見れば忍藻の身の香がするやうだし、忍藻の手匣へ眼をとめれば忍藻が側に居たやうだ。「胸は騷ぐに……何事ぞ。早く大聖威怒王の御手にたよりて祈らうに……發矢。祈らうと心をばすかしても猶すかし甲斐もな

く。心はいとゞ荒れに荒れて忍藻の事を思出すよ」。心は人の物ではない。母の心は母の物だ。それで制することが出來ない。目をねむッて氣を落付け。一心に陀羅尼經を讀まうとしても(口の上にばかり聲は出るが)、腦の中には感じが無い。「有に非ず。無に非ず。動に非ず。靜に非ず。赤に非ず。白に非ず……」此句も忍藻の身に似て居た。

人の顏さへ傍に見えれば(母はそれと)(原ナシ)相談をしたくなる。(それと)(原ナシ)相談をしたとて先方が神でもなければ陰陽師でも無く。つまり何も分からぬとは知ッて居ながら猶それでも其人と膝を合はせて忍藻の身上を判斷したくなる。それでまた例の身贔負。内心の内心に「多分は無難であらうぞ」と思ひながら。變なもので。またそれを口には出さない。たゞ其處で先方の答が自身の考に似て居れば「實に左樣」とは信じぬながら不完全にもそれで僅に妄想をすかして居る。

世にいぢらしい物は幾許もあるが。愁歎の玉子ほどいぢらしい物は無い。既に愁歎と事がきまればいくらか愁歎に區域が出來るが。まだ眞正のと言ふのも變だが愁歎が立起らぬ其前に。今にそれが起るだらうと想像するときの心ほど否に胸ぐるしいものはない。斯ういふ時には涙などもあながち出るとも決ッて居ず。時には自身の想像で。わざと涙をもよほしながら(決して心でそれを好むのではないが)なほ涙が出ることを愁歎の種として色色に心を苦しめることが有る。

だから母は不動明王と睨めくらで、經文が一句。妄想が一段。經文と妄想とがミドローシャンを爭ッて居た。處へ外からおとづれたのは居殘ッて居た(此母の言葉を借りていへば)懶惰者、不忠者の下男だ。

「誰やらん見知らぬ武士が。たゞ一人從者をもつれず、此家に申すことあるとて來ておじやる。いかに呼入れ候ふか」。

「武士とや。打扮は」。

「道服に一腰ざし。むくつけい暴男で……戰爭を經つ

らう。疵を負ふて」。

「聞くも忌まはしい。この最中に何とて人に逢ふ暇が……」。

一度は言放して見たが、思直せば夫や聟の身上も氣にかゝるのでふたゝび言葉を更めて、

「さばれ、否、……呼入れよ。すこしく問はうことも有れば」。

畏まッて下男は起ッて行くと。入代ッて入ッて來たのは三十前後の武士であッた。

「御目にかゝるは今がはじめて。是は大内平太とて元は北畠の手の者ぢや。

秩父刀禰とはかねてより陣中でしたしうした甲斐に、申殘されたことがあつて……」

「申殘された」の一言が主婦の胸には釘であッた。

「おゝ如何に新田の君は愛でたう鎌倉に入りなされたか」。

「まだ。扨は傳聞きなさらぬか。堯寛にあざむかれなされて。あへなくも底の藻屑と……矢口で」。

「それ。さらば眞でおじやるか。それ僞詐ではおじやらぬか」。

「何を……など詐僞でおじやらうぞ」。

よもや思固めたことが全く違ッてしまッたことゆゑ、今更母も仰天した。

もはや新田の事よりは夫や聟の身上が心配の種になッて來た。

「さては其時に民部たちは……しりなさる民部たちは……しりなさるてふ民部たちは」。

「そのこと。まこと。其時におじやるは。己が是から鎌倉へ行かうぞと馳行く途。武藏野の中ほどで見れば秩父の刀禰たち二方は……」

「さて秩父たち二人は」。

「はしなくも……」

「もどかはしや。いざ。いざ。いざ」。

「はしなくも敵に探られて……左樣ぢや……其儘斬斃

されて……」

「こはそゞろ、……斬斃されて……ハッシ そのまゝ斬斃されて……」

「その驚はことわりでおじやる。己も最初は左様と知らず『何やらん草中に呻いて居る者のあるは熊に噛まれた鹿ぢやらうか』と行いて見たら。おどろいたわ。それが那の二方でおじやッたわ」。

主婦ははや其跡を聞いて居られなくなッた。今まではしばらく堪へて居たが、もはや匿すに匿し切れずたちまち其處へ泣臥して、平太がいふ物語を聞入れるやうな體も無かッた。如何にも昨夜忍藻に教訓して居た處などは天晴剛氣な樣に見えたが。是とて其身は木でも無ければ石でも無い。今朝忍藻が居なくなッた心配の其矢先へこの凶音が傳はッたのには流石心を亂されてしまッた。今は其口から愚痴ばかりが出立した。

「チエイ主を……主たちを……あゝ忍藻が心苦しめたも、蟲…蟲が知らせたか。大聖……威怒王も、チエイ日頃の信心も……おのれ……こはこは平太の刀禰、など其時に馳付いて助…助太刀してはたもらんだぞ」。

怨みがましく言ひながら。猶直に其言葉の下から、いぢらしい、手でさしまねいで涙を啜り、

「聞きなされ。あゝ何の不運ぞや。夫や聟は死果てたに……こや。平太の刀禰。聞きなされ。むす…むすめの忍藻も又……」

身をなげうッて泣倒れ。

「忍藻はまた平太の刀禰……忍藻はまた出たばかり……昨夜……察しなされよ、平太の刀禰」。

平太も流石にしほれはてた。

「昨夜、そも如何に爲された」。

主婦は十分に口が利けなくなッたので仕方なく手眞似で仔細を告知らせた。告知らすると平太の顔はたちまちに色が變はッた。

「さらばあの鎖帷子の……」

云掛けたがハッと思ッて言葉を止めた。けれど這方は聞咎めた。

「和主はそも如何にして忍藻の鎖帷子を……」

平太はほと〳〵困じ果てゝ

「鎖帷子とは何でおじやる」。

「何でおじやるとは平太の刀禰。むすめ。忍藻の打扮ぢや。今も口から仰せられた」。

平太も今は進退究ッた。

「あゝ術無い。いたはしいけれど、さらば仔細を申さうず。歎に枝を添ふるがいたはしさよ。包まうとは力めたれど……何を匿さう。姫御前は鎖帷子を着衣なされたまゝ、手に薙刀を持ちなされたまゝ……母御前。かならず強く歎きなされな……獣に追はれて殺されつらう。脛の邊を噛切られて此の山間に斃れておじやッた」。

母は眼を見張ッたまゝであッた。平太はふたゝび言葉を繼いだ。

「已は此處へ來る途ぢや。はからず今のを見留めたのは。思へば不思議な緣でおじやるわ。其時には姫御前とはつゆ知らず……いたはしい事には觸ッたぞや、些少の間に三人まで」。

母はなほ眼を睜ッたまゝであッた。唇は物言ひたげに動いて居たが、言葉も出なかッた。

折から門にはドヤ〳〵と人の音して「忍藻御は熊に食はれてよ」。

忍藻は何故家を脫出したらう。書置も無かッたから能く知れない。たゞ前後の有樣に比合せて「斯うであッたらう」と判斷するばかりだ。秩父や世良田は何故殺されたらう。體のいゝ小說には大抵是が敵を切脫けるといふのが趣向だ。けれど二人はそれほど強くはなかッた。否さ。強かッたらうけれども。それよりは猶敵の方が強かッたのだ。(筆)

序ながら此頃神田明神は芝崎村といッた村にあッて其

村は今の駿河臺の東の降口の邊であッた。それゆゑ二人の武士が九段から眺めても直に其社の頭が見えた。もし此時其位置が只今の樣であッたなら決して見える譯は無い。〔註、此附節讀賣ニハ無シ〕

蝴蝶

國民の友の附錄にするとて御望みが有つたため歴史的小說のみじかい物を書きました。が、實の處これこそ主人が精一杯に作つた作で決していつもの甘酒では有りません。匆忙の中の作だの何だのと遁辭をば言ひません、只是が今の主人の實の腕で、善惡に關せず世間の批評をば十分に頂戴します。猶この後には春のや、思軒の兩「しんうち」が扣へて居ります。それ「比較は物の價格を定める」、大牢の前の食散らしは或は舌鼓の養生にも爲りませうか。一座早く出た無禮の寓意（も凄(すさま)じい）は實にこゝに在るのです。

御色は壇浦沒落の後日です。安德帝は實に御入水(ごじゆすゐ)にならなかつたといふのがまづ多數の說で、文化十四年三月、攝津國能勢(のせ)郡出野(いづの)村の百姓辻勘兵衛が裁府へ一つの古文書を持出した事が有つて、そして其古文書は經房卿と言つて幼帝に供奉して逃げた人の自筆で書いてあります。是等は白川少將も望んで一覽し、また京都で日野大納言も懸望して見た事さへあつた程で、中々容易ならぬ箇條なのです。今この小說は脚色をその經房の古文書から拔いて一毛一厘も事實を枉げず、ありの儘に書いた物で、その他日向に御逃れなつたの、又は阿波に御逃げに爲つたのといふ方の說は妄で更に取用ゐませんでした。

中の人物の言葉は矢張り武藏野と同樣つとめてその時代の口氣を寫しました。時代物に必ずその時代の言葉を用ゐるといふことは全體たしかに是と言つて褒めるほどの事でも有りません。たゞ目先を變へただけです。

明治二十一年十月　美妙齋主人

其一

勇む源氏、いさむ濱風、無情、何のうらみ、嗚呼今まで白旗と數を競つてゐた赤旗もいつか過半は吹折られたり、斫折られたり、はやその色をば血に讓つて仕舞つて、たゞ御座船の近處の邊に僅に命脈を繫いで居るありさま、氣の故か、既に靡いて居るやうです。海は一面軍船を床として、遠見の果てが浪に搖られて高低さへ爲なければ水が有るとは思はれません。雨のやうに箭が降注いだのは戰爭がやゝ熾に爲つた頃(まだ運命がいくらか頼もしかつた内)だけで、今はその雨も敵の凱歌と共にあがり掛つて、たゞ手近な太刀討と組討と薙倒しがあちこちに始まるばかり、折れて水に陥つた箭の死骸、それも討死した士卒の軀と共に幾百となくむらがつて、浪に弄ばれて居る體たらく、さながら堰か水門に塵芥が集まつたやうです。今少し前でした、能登守(教經)が血眼に爲つて源氏の旗下へ飛込んだのは。蹴散らし、拂ひ倒して見る見る敵の中へ割つて入つたうしろ姿のいさましさ、かなぐり捨てた、鎧の袖の切れ目の絲は微かな波を空中に打つて、亂髮に勢を添へて居て、そして之が亂入するや否や、敵はにはかに噪ぎ立つて、主人九郎(義經)が危いと思つたか、やゝ進んだ兵の内でも、旗下へ引返したものさへありましたが、いつかそれも靜まつて更に立直る反動の力のすさまじさ、瞬く間に敵は早御座船ちかく近寄ります。「能登守だに死にたるよ」。たれ言ふとなく傳へる此聲、こゝろ細さは增すばかりです。新中納言(知盛)の顏を見るさへ涙です。泣立てゝ譯もなく主上(安德帝)に取縋る女房どもの有樣には萬夫不當、平家の柱石と聞えた新中納言の脣もわなゝいて、着馴れた鎧の威毛にやゝ止る露の雫、それを飛沫と言ふだけ哀れ、だれが永別の涙で無いと言ひませう。知盛の今日のむねぐるしさ、わざと從容として無理に笑顏を賣るものの、その笑顏は冬野の寒菊、無情の風を待つのみです。主上に對する眼、女房どもに向ける目眦、いづれ優劣なく無念の露

を宿して、否帶びて、むしろ色は、今まで蒼ざめて居たのが次第に紅く爲つて行き、いつの程にか髮の毛も針を植ゑて居るやうです。

かなはぬまでもと思ふ心は今でも知盛の胸には充ちて居ますから一寸歸つて主上に拜謁するや否や更にまた引返しては敵に近付いて士卒をはげまして居ます。

敵は次第に御座船に近づく、……また矢が雨のやうに爲る、……前後には呻り苦しむ聲。見る目も暮れ、心も消えます。はや其處此處とも亂れ果てました。最前から幾度も心元なさに舷頭へ立出ては戰爭の樣子を見て居た二位尼もこゝで心を決したと云ふ體で竊に御座船の奥の間へ源典侍、侍從經房、原田大輔判官種長、因幡郡司景家、及び右大將基方、大納言典侍、勾當內侍、阿波內侍の八人を呼びました。

それから何を話して居るか元より祕密にしたことと見えて次の間へ行つて聞いてもよくは聞えませんが、たゞ非常に嘆きかなしむ聲がします。蝴蝶と言つてことし甫めて十七になつた宮女、これは京都から此處までも常に源典侍に從つて居る美人ですが、しきりに怪しく思ふのあまり近寄つて心を靜め、よく聞けば其內に門院（建禮門院）の御聲として淚にうるんだ氣はひが洩れて來ます。

「さればとて、喃、二位」、紛れも無い門院の御聲です、「御門（安德帝）のむづからせ給はんを……如何に、是のみにては」。

「御心細くも侍らん。然はあれども源氏あざむかんには二位こそ此上なきものなるを」。

是はたしかに二位の聲で、跡は鼻をすゝる音が聞えるばかりです。聞けば表の方で女ばらも立噪ぐやうです。「すはや源氏」といふ聲に蝴蝶も立聞しては居られません。足を抽いて立歸つて外を見れば、なるほど源氏は旣に間近く寄りました。が、賴母しい、それでも猶名を惜しむ士卒どもは防戰して寄付けまいとして居ます。

「かくては爭でか逃れ果つべき。早く心をするこそ好けれ」。一度蝴蝶も心をば斯う決しましたが、さて又主上や

門院の御身の上が氣に爲つて氣に爲つて堪りません。暫時船の端にたゝずんで（今は矢を恐れもしません）、四方を見回して居ましたが、思付いてまた奥の方へと立歸つて行く出合がしら見れば二位尼は主上の御手を引いて其處に立つて居ます。

「蝴蝶、いくさは如何にぞや」。

問はれては墓々しくも言へません。

「口惜しうこそ。みそなはせ、御船ちかきに源氏も來ぬる」。

「つなぎ止めしも甲斐無かりき。いざさらば我もなどてやたゆたふべき。いでや人々もろともに」……

言掛けてはら／＼と涙を落して蝴蝶をぢつと見詰めたまゝやゝ身繕ひをする體たらく、如何にも合點が行きません。

「人々もろともに、そも如何に爲せたまふ」。

「もろともに水にこそ」。

「今はや入らせたまはんとや。そは勿體無し玉體を」。

「玉體と和女（おこと）も思へるよ、これは如何に」。

言つて尼が主上の被衣（かつぎ）を取退ければ是は主上と思ひの外、知盛の子息です。蝴蝶も之には駭きました。

「こは、そも。そも／＼主上は」。

「今はや落ちさせ給ひけり。かくてぞ敵を欺くべき」。

「はや落ちさせ給ひけり」。あまりの意外に息もせはしく、「女院の君も諸共に」。

「然なり、供奉しまゐらしゝは先き程呼びぬる八人（やたり）になん。和女もいざ疾く……はや事迫りぬ……ためらひ給ひぞ、落延びんほどは落延びて御門を助けまゐらせてよ。爰に心な殘し給ひぞ」。

言ふ内人の叫ぶ聲は既に間近く聞えて來ます。

「源氏入來る、間もあらじ。刄にかゝるはうたてきを……蝴蝶、疾く／＼……いざ疾く／＼」。

二位は切りに急立てて跡の蝴蝶の返事を耳にも入れず、何か錦の嚢に入ッた御劍めいた物を捧げながら、右に主上（假の）の御手を引き、早足に船端にさしかゝれば

……嵐しのためか……敵から來る箭は隙間もなく降注ぎます。

「噫、しばし侍たせたまへ」。蝴蝶は跡から追ッて來ました。が、無殘、及びません。蝴蝶が船端まで來た頃には既にはや水烟が……

「すはや入らせたまひしよ」。呟いたのは是ばかり、流石に生死を厭はぬ身にも又何處やら箭玉の雨は恐ろしく、急にまた踵を返して横の船端から屹と見れば、主上の影は見えませんが、源典侍たちが小船に乘ッてはるか向うへ漕いで行きます。死ぬ氣は蝴蝶も有りません。追付いて供奉が爲たう厶います。

片手は涙、片手は周章、急に一人の雜兵を呼掛けて手を合はさぬばかり、

「逃れん。噫、漕ぎてたべ、小舟にて」。

命ぜられて雜兵も再議に及ばず直に小舟を引寄せて蝴蝶を乘せて漕出しました。櫂は折れてありません。仕方なく薙刀で一心不亂に漕ぎました。

前後左右は皆源氏です。が、わづかの仕合せ、皆御座船を目掛けますから落人も案外平易に遁れます。けれど肝を冷したのは幾度ですか、浪も荒ければ四方に船も多く、思ふやうには進めません。それのみか、わるくすると典侍の居る船を見失ひます。折々は僅の日を偷んで懐かしい今までの御座船を見返れば、その今日まで皇居とした御座船には雜人ばらが早亂入して……きらめく劍戟の影のするどさ。

典侍の方の船に心を注けると同時に身の周圍に敵が來るかと氣を配る混雜の間、ことにあちこちに簇がつて居る敵の眼を掠めることですから自然船も典侍の船のすぐ跡に跟く事が出來ません。或は右へ駈隔てられたり、あるひは左へ迂回させられたり、終に、あゝ、やゝ敵の眼の遠く爲ッた處へ來て、やれ安心と思ふと一途に典侍の方の船の影は……折角の骨折も水の泡……どこへ行ッたか見えません。弱りました、これには蝴蝶も。船はやゝ見れば苫屋の二三軒ある磯の邊の近くへ來て居ます。傍

には漂泊して居る、主の無い兵船も一二艘あります。

「噫、辛く命は助かりつ、されど是より如何に爲ん」。話掛けるといふ風でも無くて蝴蝶は呟きました。

「如何に爲ん。何をか宣ふ。漕もて來ぬる骨折の賃、いざおのれに賜はずや」。

頬髯を撫でながら宛も傲慢な體で而も冷笑といふやうな氣色をあらはして言ひます。

蝴蝶は流石に眞面目です。

「何を」。

「何をなンどと」、傍へすりより、「骨折の賃にこそ。されど玉にも黄金にもあらず、たゞわが妻になりたまへ。こやなどて驚きたまふ、あたりに人の見る目も無きを」。

思ひの外の無禮な言葉、婦人ながらも軍馬の間を經て來た蝴蝶、これには赫となりました。物をも言はず睨付けるを雜兵は更にかまひません、袿衣の袖を取らうとする、今は蝴蝶もこらへかねて、振拂ふや否や、身を躍らせて近い處の船に飛込まうとは爲ましたが、運わるく足が滑りました。滑りました、眞逆さま……跡は水烟と呆れた雜兵の顏ばかりです。

其二

清くて、優美で、そして愛らしいものは六七歳の少女と浦の春景色ででも有りませう。その眉のまだ纖くて薄く、その顏のまだ肥えて固まらず、薄絹の頬に笑靨の泉をたゝへて、こぼさうとは思はずに愛嬌の露をこぼす有樣を見ては誰が一片きはめて高尚な愛情を起さずに居られませう。夕日の紅を解かして揉碎いて居る波の色、その餘光を味ふといふ有樣で反射の綾模樣を浮織にしてゐる苫屋の板びさし、しかも昨夜過ぎた春雨の足跡をば銀象嵌とも見立てられる蝸牛のぬめりに見せて居ながら、それで尚水際立つて見える工合の美しさ、餘情は以心傳心です。

壇の浦つゞきの磯づたひ、白砂の晃きを鏡として翠色の色上げをば生温い浦風にさせながら思ふまゝに悠然と

腹這して居る黒松の根方に裸體のまゝ腰を掛けて居るのは、前回に見えた蝴蝶といふ少女です。實に西の嵐に東の日和、花をたしなめる風雨を見ては誰が實を結ばせる末を思ひませう。わづか離れた處の修羅の巷はこゝに蜃樓の影も留めず、一網の魚に露命を恃む、いはゆる質朴の靜かさばかりが苫屋の春を鎖して居ます。波にもてあそばれて居る鷗。可愛らしい銀色の足でちよろ／＼と磯へ這上がつて來るさゞ浪。血腥いといふ言葉は爰では只魚の料理で僅に悟るといふばかり、すべて景色が、言ふもおろか、さて空氣を汚すべき非理の福原の別莊も、否、別殿も、有難いことゝ、まだ有りません。

　満果てた衣服を半ば身に纏つて、四方には人一人も居ぬながら猶何處やら吾と吾身へ對するとでも言ふべき羞を帶びて、風の囁きにも、鳥の羽音にも耳を側てる蝴蝶の姿の奥床しさ、うつくしさ、五尺の黒髪は舐め亂した浪の手柄を見せ顔に同じく浪打つて多情にも朝櫻の肌を掠め、睛は目蓋と共に重く垂れて其處に薄命の怨みを宿して居ます。水と土とをば「自然」が巧に取合はせた一幅の活きた畫の中にまた美術の神髄とも言ふべき曲線でうまく組立てられた裸體の美人が居るのですものを。あゝ高尚。眞の「美」は即ち眞の「高尚」です。

　見亙せば浦つゞきは潮曇りに掻暮れて、その懷かしい元の御座船の影さへ見えず、幾百かの親しい人の魂をば夕暮のモヤが祕め鎖して居るかと思はれるばかり、すべて目の觸るゝその先の方は茫漠として慘ましく見える後悔、いとど心痛の源です、否、「源」といふのも殘念なり。

　「そも如何にすべき。如何に爲らせ給ひしやらん、事無う御幸まし／＼つるか。覺束無。さるを猶この身だに斯く御ン跡をも失ひつ、いづくに賴りて便りを得ん。苫屋の外は無きものを、もしは敵に見認められなば、逃れ來し心盡しも泡なれや。人目を避けて山路より御幸ますとや聞きぬるに……されば伯耆や過ぎさせ給はん。よし、さらば、如何にもして御跡を慕ひまゐらせん。久しゝ時を移すは甲斐なし。命めでたうてかく縁りつ、疲れは有

るとも何ならん。いでや苫屋に哀れを請ひて蓑の衣だに乞ひ受けてん」。

雄々しくも屹と思案を定めましたが、さて其處が少女のあどけなさ、まだ裸體を人に見られる恥かしさに、何の思慮もなく、更にやゝ暫くは松の根に腰を掛けて居るその處へ聞えるのは豫て幾度も聞馴れた鎧の袖の噛合ふ聲です。

驚いて見返つて更に一入、さて穴へも入りたい程になりました。鎧の音は一人の武者で、武者、しかも其人は豫て蝴蝶が陣中で名を知つて見覺えて居る同じ平家の旗下の二郎春風といふ人で、また而もその人は蝴蝶が常から……おゝ、つれない命……人知れずその爲に戀衣を縫つて居た者です。

驚きましたが逃げられません。逃げたくは有りますが身は縮みます。俄に顏は……はてどうでも宜いのに……潮路の紅を借りて來て……見れば、今日を晴と粧つたその武者ぶりの奥床しさ、村濃の鎧に白の鉢卷、目は涼しく、口は潤つて……

「思掛けぬ……蝴蝶ぬし、御身のみにてましますか」。

あゝ身が慄へます、近寄らずに二郎は尋ねます。

返辭は有りませんので二郎は重ねて、

「見たまへや、此身も落ちて來ぬるを。主上は如何に爲らせたまひし」。

「御幸ますとて爲りしが」、聲は微かに蝴蝶の口を忍び、「恙無う在せしならん」。

「御幸。いづくへ」。

「人無き里、伯耆わたりや過ぎ給はん」。

二郎は勇立ちました。

「さらば、蝴蝶ぬし、やよ心な爲たまひぞ。如何に御跡を尋ねまゐらすべきに、打連れて、君もろともに」。

下を向いて慄へて居る蝴蝶の横顏、さしのぞけば愛と情と嬉しさとに掻亂されて涙は湧返るばかりです。

「あな、いみじき御姿」。思はず出した二郎の聲、さて其聲を見送るのか、怨めしげに光を凝らす蝴蝶の眼、手

弱くも横へ向く二郎の眼。

其三

西山を啣む二十三夜の殘月、今些し前まで降續いた五月雨に洗はれた顏の淸さ、まだ化粧は止めずに雲の布巾を携へて折々はみづから拭つて居ます。夜半、それが此時の「美」の原素で、山里、それがこの處の「美」の源です。消迷ふといふ樣に淡泊な朦朧な光を受けては沐浴したまゝまだ露を滴らせて居る新樹の影も咽ぶやうで、そして僅にかよわい呼吸を吐く風に戲れられては辛く浮世の窩を求めた梢の雫も落ちてまた雨と作ります。形容すれば、秋冬の淋しさは「嘆いて居る淋しさ」で、そして春夏の淋しさは「笑つて居る淋しさ」、その「笑つて居る」夜半の淋しさに忍んで色彩を添へる四邊の寂寞、思へば「自然」の腕も非常なものです。

此處にある貧しい草の屋は手製と思しく、掘立の柱に檜の丸木の棟木を持たせ、そして貧家の常として、籾糠を厚く布いた上に更にまだ乾果てもせぬ蒲の席を不作法に舒べて有ります。今の眼から之を想像して御覽なさい、北海道の土人の家か何かとか思はれませう。それでもまだ感心なのは明るいといふよりは寧ろ暖いといふ方が適當して居るらしく見える殘燈が哀れな浪を打つて居ることです。「裏もかへさぬ」と馬琴なら言ふ荒壁に矢根が幾本も打付けてあつてそれに衣服調度のたぐひが吊されて有るさへも釘の用方がまだ自由で無いと思はれて生計の度の低いのが見えます。時は夜更です。それで何か容易ならぬ事が有ると見えて此家の夫妻は臥しても居ません。男は胡坐、女は片膝立て、二人とも思入つた體です。

男も女も別人では有りません、二郎春風と蝴蝶です。濱邊で二郎と蝴蝶とが遇つた後は作者が述べるにも及びません、是からの二人の會話で知れます。

身の運命と共に薄い光の燈火を見詰めて居るばかり、返答もせぬ蝴蝶の體に二郎は更に語氣に力を入れたやうです。

「君を思ふ志は左もあらん。されど暫時は身をも思ひたまへ。埋木の花咲かで朽つるも一期、時めいて暮すも一期。あたらしや一期を落人と共に墓なく過ぐさんは」。

膝を進めて聲を潛め、

「宿世いかなる縁なりけん、君と假初の濱邊の物語りは斯くも三年がほどまでの契りを持來つ、君の情のこまやかなる、吾もなどて仇にせん。かく言ふも君を憐れみ思へばなり。如何に末長う吾を憐みたまはずや。末長うあはれみ給ひなば……喃、答へたまへ、など泣いたまふ」。

やさしく言はれるだけ胸ぐるしく、

「しか宣はすから猶ぞもの憂き。君のやさしき御こゝなさけの程は言ふまでも非ず、たゞ酌知らせ給はずや、如何にせん、稍知れぬる御門のおんありかを源氏に告げんとは……喃、思ひまゐらするだに慘ましきを、扨も養はれつる平家の惠を忍したまはゞ……いかで左る正無き事は思ひ止まり給ひてよ、喃。霜に臥し、薪に宿り、憂きを經てこゝに住むはそも何のため。御門に盡す眞心ぞ。喃、願ふは涙のみ。思ひ止まりて給へかし」。

して見れば御門の所在が知れたので二郎は心變りしてそれと源氏に訴へようといふのでせう。あゝ人の心の頼み難いこと……二郎は何か得意顏ですこし身を反らせました。

「いまだ知らねば左のたまふ。永く祕むべきにもあらねば打出でん、聞きたまへ、喃、吾は」。

改まつた言葉に蝴蝶は重い目を上げました。二郎は些し笑を寄せ、

「まこと吾は平家の譜代にあらじ。源氏より忍入りし者なるを」。

「源氏より忍入りし者」……忍び……忍びの者！　今はじめて知つて、あゝ殘念、無二の人と頼んだ者は淺ましい敵。

蝴蝶には答が出ません。

「ことわりなり、駭きたまふも。されば、早、かく爲らば」……言掛けて二郎は有無の挨拶を待つて居ます。

胸は喋いで顔は逆上せ、それで身は烈しく顫へて蝴蝶の歯の根は合ひません。わが良人ながら睨付けるばかりです。

「扨は、御身は……あゝ二郎ぬしッ」。

如何にも無念らしく見えます。二郎も（夫婦の愛情はまだ消えません）無念らしく顔色まで變へる妻の體を眺めては居られません。妻の方もまた左様です。愛情の點に於てはまだ度は減らぬいとしい二郎、しかし怨みの點に於ては流石忍兼ねるおのれ二郎。

＊　＊　＊　＊　＊

はや時も曙ちかく爲ると覺しく闇が暫時濃く爲つて星も光を隱して居ます。殘酷な羽音を響かせて血に乾いた咽喉を鳴らす梟。人を嘲るか、冷淡に戸の隙間をすりぬけて肌膚を薄淋しく嘗める山風。其處へ立つて居る蝴蝶、實に花をはづかしめた美人の蝴蝶は殺氣を含んだ目元を屹と見張つたまゝ闇にも晃く短刀を拔離してぢつと眺めて息を一吹（ひき）。寢入つて居る良人二郎の顔をのぞき込みました、極めて冷かに。

しかし目も露を含んで居ます。

兎角急いで出る呼吸を無理に弱く出して居ます。がさつく蒲の筵をば憎いながら竊と踏んで居ます。そんで居る身には吾か人かのやうです。

「口惜しや、あざむかれて。はじめより敵とだに知りつらば、如何に淺ましい煩惱は哮るとも……さりと知らねばこの愛日よ。敵、源氏、さてぞゆゝしき。今日も今日、三年ごしの今日しも初めて御門のいます方の得知れし喜び、言ふ間もあらで、如何にぞや、源……源氏の方に告げうとは。なつかしい、いたいけの君、その君をあはれ氣も無う、その君に憂き思ひ爲せたてまつらんず、おのれ二郎ッ、にッくき春風ッ。そこを積み來しゝはそも何の爲ぞ。たゞ女子の甲斐なきを助けられて諸共に安らけき君を見參らせ、この眞心のせめての一筋聞上げてんとせしばかりなる……うたてくも爲りしよ、痛。猶豫せば御門の御大事、女なりとて武家の片はし、男なりとて

御門の怨敵、夫なりとて君の仇、とても斯くても……悲し……あゝ二郎ぬし……否、二郎……君の心の招くなり、そこの心の爲すことよ。時はこよひを限るべき、つま殺す罪、後世のほどだに恐ろしけれども……念ぜよ、是も君のおんため」。

殺さうと心は決めても猶何とは無しに今すこし物思ひに胸を惱ませたくて更にまた持つた刀を敷き隱して筵にすわり、

「殺されうとも知ろし召さでいぎたなう……宿世あやしき縁かな。縁かなッ！　源氏より忍來し人。さしも吾がその時に床しとも思はずもあらば妹脊の契は結ぶまじきに、あなや、をさな心の女子の淺ましさよ」。

けれど平常からやさしい二郎の情愛を思出せば腸は實に猶切れるやうです。

「ねんごろに情こまやかなる人、その人を殺さうとや、その人のためには袖捲きし、この懷かしき手をもて。なつかしき手、昨日まではぬしの病を撫でし手も、あはれ、今こそはぬしを切る、ぬしの身を裂く手になん。淺ましき妹脊かな。友白髮まで契るべきを……浮世の道こそつれなけれ」。

今は咽ぶばかりです、が、悟られまいと歯をくひしばり、

「夫を殺せし妻ありきと後の人にも歌はれん。罪の程など知らざるべき、知りつゝも爲す心根、喃、ねぶらせ給ふ二郎ぬし、酌知らせて……酌知らせて……喃、二郎ぬしイ」。

首を傾けて考沈み、

「たゞ此身には怨も無き人を塞無くも殺さんは、思へばいとをし。さりとも吾も心をひるがへして……さらば妹脊の契も破れず……夫の心のまゝにせうか。夫の心の儘にして……されどいたいけなる御門の御上、それも扨おゝ慘まし。壇の浦の船にても蝴蝶と宣はせし事さへありき。その御恵の程し思へば……あら、げによ、我ながら空……空恐ろしき。などてさる正なき心」。

雨と降る涙をあら／＼しく拂ひながら屹と戸の外を眺むれば、吾を促し顏です、はや闇は次第に影を潛め始めて居て。

「夜明けなば……こよひは再び得難かり。あゝ心、などて手弱き。あな、手まで、など震ふ」。

たしかに思案を定めて刀を拔持ち、片唾を呑んで近寄る夫の枕もと、はッし、空蟬の命、知らぬが佛の寢顏のやさしさ。「この優しき顏なるを、このやさしき人なるを……せめて此身を愛づるそのやさしき心を御門にまゐらせたらんには」。

立掛ッてはいよ／＼ます／＼瀧を落す無情の涙、それが滴ッて二郎の顏を撲たぬやうにと氣を配ッて片手は目を掩はぬばかり、やゝ刃を下しかけましたが、しかし肉と骨とは溶けて離れるやうです。

「そこの首級を携へて御門にこの身の眞心を切めて一言なりと聞え參らせ、さてしも後は同じ刃、同じ刀に死ぬばかりよ。妹脊の中はかはらじな。浮世の道は扨ていと憂き」。

今にその首から血も出ませうか。今に男の命も絕えませうか。あゝ斯う活きて居るものを。暫時刃は仇にさまよつて晃いて居ます。

その内に、無殘、勇氣！ にはかに始まる泣聲、物音、「た……た……たれ……二郎を斬く」。跡はもろともに唸る聲。

また暫時、物音も絕えました。物音の絕ゆるや否や慌しく戸際へ馳出して人でも居るかと見回した蝴蝶の顏のその凄さ（あゝ殺した）、忍寄る曉の青い朦朧に映っては、顏色は全く土と見紛ふばかり、たゞその代りこッてりとした鮮血の紅を縱横に塗ッて居て……御覽なさい、噛まれて居る亂髮の末一二本。旣に仕留めて仕舞ひました。今更無念なやうでもあり、悲いやうでもあり、くやしいやうでもあり、また情無いやうでもあり、氣は逆上してほとんど知覺も無くなつて只茫然……ですが、猶思詰めた一つの念力、火のやうに熱する身と切れて續かぬ忙し

い息を辛うじて蘇まして終に首をば斬放して仕舞ひました。

が、はや身はほとんど打たれたやうです。何を見ても目は目の役を爲ず、何を聞いても耳は耳のつとめを仕遂げず、それで、妙です、猶何處か神經が鋭敏に過ぎるやうな處もあります。

首を取りましたが抱締めたばかり、聲を惜まず泣出したそのいぢらしさ、實に意地ほど恐ろしいものは有りません。

やゝ昇ッて來る旭日も昨日までは勇ましさうに見えましたのに今日はそれも幽鬱であるやうです。やゝ啼出す鳥も昨日までは猶比翼の情に咽喉を鳴らして夫婦つれだつてゐましたに……哀れと薄命といふ言葉はつまり蝴蝶の又の名です。

人の話し聲、發矢、家の外に聞える人の話し聲。風の音にも忙がはしく耳をそばたてる今日の蝴蝶、蝴蝶も之をよく聞けば(亂れたながらも本性違はず)、これは主上の行宮のある邊の作男どもの話です。それで何と言つて居ました。斯う言つて居ました。「おゝいたはしさよ、若宮の。定業にても在しけん、あへなく爲らせたまひつゝ」。

若宮が……ま、どうです、御崩れなさいましたとか。恥を忘れて蝴蝶も表へ飛出しました。

「物問ひてん、方ざまたち。いな／＼必ずうろたへ給ひぞ、たとひ斯く淺ましき姿せるとて。さて若宮はッ」……

言へません、あとは些しも。里人たちは素氣も無く、

「昨日の朝の程なりき、崩れさせたまひてき」。

其四

さても／＼無常な世の中。花が散ッた跡で風を怨ませるとは何事です。月が入つた後に匿した雲を惡ませるとは、ても、無殘な。風は空の根方と共に冴亙ッてやゝ紅葉に爲ッた山の崖に錦繡の波を打たせて居る秋の頃、薄い衣を身に纒ッて其邊を托鉢して居る尼の樣、面影はや

つれても變りません、前の哀れな蝴蝶です。

羽を伸した事も無くて世にはその名に緣ある夢の間に過ぐしました。實に蝴蝶、それも平家の紋處です。壽永四年の彌生の春風に翼も切れて……そも〳〵之が浮世ですか。思遣れば須磨浦の昔の歌「搔曇る雪氣の空を吹變へて月になり行く須磨の浦風」。その吹變へる風は寧ろ小笹を噪がせたばかりです。

（明治二十一年作）

いちご姫

第一

まことに世の中が回り持であるものなら頼朝このかたの片手落ちは何の譯。まはり持ちと言ッてあきらめるその下から直にその回り持ちさへわからぬまでに思はれるほどの世の情無さ！　禁裡——たゞ名のみの禁裡！

大内と一際あがめてあッた昔は今その面影を古老の涙ながらのくり言に殘すばかり、「いたはしい、この子も昔を知らいで晴」を子供さへ耳に聞き飽きました。右近、左近、兵衛、右馬、左馬、それらは昔し禁裡の官名。が、今は人の勝手次第つけたい放題。義朝は左馬をいたゞいて雀躍したさうな——それで今は「禁裡からもらはいでも己が自恣ぢや」とは——あゝその口を劈いてもやりたい。此頃までは地下、地下どころか、蛆むし、蒼生草。蟲か草か、生きて居るか、死んで居るか、それすらも知れなかッた靑侍や物商人、それが假に名乘まで付けての改名、立賣りの近くを通ッても公卿とさへ見れば——たとひ若徒が主君の代理で一日の衣冠に猿の面して居ても——商人が見世棚を片付けたり、禮したりしたものを、今は見もかへらぬ始末。それを叱られぬ始末。叱るだけの力を持たぬ始末。その力叱るはおろか生殺與奪、賞罰黜陟までも——誰が取ッたか。おのれ、その足…輕同樣で舊はあッた…和のやから。とは言ふものゝ、やッぱり頼朝。

見わたせば百年のむかしの儘な東山、百年の前には被衣着ての寢すがたと短册にさへ書れたものが、百年の後には小具足つけての伏勢かと鯨聲の雜兵に言はれるとは！　山はむかしの儘で皇居を守ッても守られる皇居には

仕立おろしの直垂の影もなし、圓顏で髯の剃跡が疎で濃い、あの憎體な入道の宗全、痩形で、目の細い、妍々とした、意地のわるさうな勝元、それら二人がやうやく死んだばかりで戰爭は無くなツたもの丶、いまだに軍勢殘らずは引き返らず、永陣のうさはらしか、人も家も財も手あたり次第掠め取ツての仕たい三昧、世が世ならばおのれらに何でう〳〵とは蔭辨慶、表向は崇め奉ツて切めてその御機嫌のいゝ時に禁裡の破損でもつくろはせやうとまでに——これで泣かやに居られうかと祟もかけられぬ後室の述懷も又かと珍らしくなくなりました。

應仁このかた都は全く野原となりました。相國寺あたりを究竟の足だまりとして、追ひつかへしつ命の取り遣りをした波は都全體に、及んだといふだけ野暮、兵火にかゝツて幾千の精神と共に幾萬の家はすべて灰、燒跡をとりかたづけるものも無ければ燒けて大變だと言ふものも無く、大變といふより何より夢か現かと心も思ひみだれるばかり。戸籍がたしかであツて諸事に屆をしたものならば、時世を苦に病んで發狂した公卿は幾人あツたか、笹の葉に紫の鉢卷とまでは行かずとも三井寺の謠曲を實地に見せる姫も無くは無かツたとか。

まはりを取り卷く山におとらぬと言ツても宜ささうな燒灰の山、その上に直に陣を取るものさへ有るとは、大内のあれはてた有樣は何と言ふたら宜いもの。築垣はくづれたと言ふよりも無くなツたと言ふ方がまだ好ささうな、むしり取れたやうに缺ツて居るところへは又むしられぬために八重むぐらや忍が心のまゝに生ひ茂ツて居ました。

その間には、書くも無殘、菊桐を金で摺ツた記標の瓦が缺けて散ツてむなしく子供の手遊物になツて拋げられるばかりでした。何處のか、しかし物は物、義母子をうツた高欄の片はしは半面焦げて草の中に横はり、下司の腰掛になツて居ました。

御處は全く無くならず、殘ツては居たものゝ、しかし殘ツたといふだけ、なまじひに昔見せがほの階は白髮の

殿上人と諸ともによろぼひ果てゝほとんど障れば砕けさう、御園の草木も大抵は子供に折り取られて、それでも枯れ果てずに夏の新芽を――誰に見せに――射いて居るさへも哀れを呼ぶ種でした。戸や襖の建て付さへ全く狂ッて開閉にこぼ〳〵音のする、もしも清少納言が居たならば何と之を評したか。音がするのはまだしも、全で動かぬのさへ有れば、風への愛嬌、建て掛けて置くばかりで、煽動を受けては音を立てゝ倒れるのも珍らしくは無いほどでした。「むらしぐれ、音を聞くにも袖はぬれけり」と仰せられたその昔とてよも是ほどではあるまいと思はれたほど、伺候の女の童や女房たちも儀式だけの姿はして居るものゝ、しかし紅梅の衣も卯花衣のやうな色になッて、そして寝よとの鐘の間際になッても局でかしまい聲をさへ立てぬほどでした。

南のやぶれはてた築垣の邊をしづかに歩く二人の武士が有りました。一目見てそれとわかる主從づれ、主人と見えるのは十八九、年が若いだけに鎧もわかく、威毛は裾濃の藤紫、糸薦の太刀拵に三尺二寸の業物を反りかへらせて居ました。大した身分でも無ささうで、それで姿好みは格別なものでした。柄頭は鯨と鮫との取り合はせ、銀と赤銅とで造ッた白鵐鳥の目釘に、それと映らせて、玉蘭を浮彫にした鍔、臙色の鞘の艶やかさ。

従者の身姿は事々しく言ふにも及ばず、たゞ主人の顔容、それがもッとも人の目に立ちました。顔容と言ッて外でもなし、力味のある美くしい出來でした。

あるきながら兎角築垣に目をとめる樣子、まだ中門にも近よらぬに、無作法な世のならはしに似ず禮儀の有る事、兜をば脱いで居ました。それくらゐの打扮をするからにはいづれ馬には騎ッて來た譯、御所内をもかまはず乘り打ちをするものゝ多い時世、それで馬は何處に置いたかそれさへも見せぬ樣子。

「たやすくは」主人が言ひました「つくろへぬわ、この樣では。ほッ、礎までも……」礎のくづれたところを指さしました。

「中々」、從者が小腰をかゞめました、「周圍のこらず——太い大役でおぢやる」。
「大役にしろ、おのが自恣ならば何うとも詮術は有らうずるが辛い世に——覺束ないよ」。
「されば何故でおぢやる?」
「何故てふて、知らぬことぢや、汝なんどは」。
言ひ切られては主家來、かへす言葉もなし、若武者は次第々々に足を移してくはしく壞れた樣子をあらためました。あらためるものゝ從者が不審と思ッたのはその溜息で、一目皇居をながめては溜息、一目築垣を見ては溜息、果はをり／＼あゝと聲をさへ拋げました。
不審を凝らした目で從者は主人を見て居たものゝ、終には忍びかねて口をも開く
「御所がたの御望みでおぢやるか?」
「左樣ぢや、鹿さへ通ふといふから」。
「見る氣にもいたう毒でおぢやる。東山につくす財は有ッても御垣につくす代は無くて……」
「しッおどれッ!」
何かきびしくさしとめた主人、その顏が直に横の方へと向いた、その方を從者もいぶかしながら屹と見れば、果たして一人の姫君が築垣の横に立ッて居ました。
薄色に宇治の螢を亂れ摺りにした被衣をかぶッて卯花衣を着て居ました。と。只言へば如何にも優美。しかし實を言へばその古び加減。螢は既に乾物となり、葦の葉には水氣一滴も殘らず、わづかに薄色が生れからの德でさして古びても目に立たぬものゝ、しかし花底の蛇、ねたくも襄のもよりに昨日の色を殘して居ました。無論清好もの、それでその位の物を持つにも似ず卯花衣とは餘りなこと、今はほとんど夏も末、そのくせに衣も更へぬとは! 裏の萌黄は黄にかはッて——それも駒とめて水かッた山吹の花の露の痕か——乃至は鄙にあくまで怨みを聞かせて餘音を渡殿に漏らしたときの涙の名殘か——兎に角に然るべき方の御愛娘とは知れました。
顏は被衣にかくれてよく見えぬものゝ、わづかに察す

るところでは大凡十六、十七歳か、身長は細く伸びた方でいはゆる嬋娟、焚きこめた留奇の香りは無くとも。風に雲をもてあそばせて心ありげに此方を見て居ました。

築垣を見ながら若武者もその方に近づいて行きました。横さまに一目力を入れて之を見る、その時丁度姫もまたすこし被衣を持ち上げました。

でも艶な！　繊眉に純の肌。口をすこし横に曲げるのが癖と見えて、その時も左樣して居ました。水もしたゝりさうな目のうるほひ、それも倏忽の裡に被衣にかくれて仕舞ッたものゝ、しかし若武者にも強く感動を與へました。

若武者は手持無沙汰、綸響など引張りながら、さても勝手。今までひどく親しく口をも利かなかッた從者と何か樂屋落を言ひ出す仕儀、それも極めて聲細く！

ほとんど行き過ぎる若武者、それを見送る姫君。背後の小者が唯目につくのに、にくらしい從者は身でそれを隱すありさま。

「晴」と姫が呼び掛けました。

糸でぐッと引かれたやうに均しくかへりみた主從二人。しばらくは無言、目で姫を測量して居て、そしてやうやく從者が前かゞみになりました、——

「此方でおぢやるか」。惡々しい錆聲。

姫はうなづき、——

「御渡りやるは誰どの。國方か、東山か……」

「東山でおぢやる」。

「いはれ有りてゞおりやるか、このわたりに？」

「いはれ有りておぢやる。禁裡の仰せでこゝら繕ひのためまゐッておぢやる」。

應答の間、姫はをり／＼目を外らせて若武者を見と、扨もたぐひ稀な美丈夫！

「卒爾ながら御名は何と召されておりやる？」

「名？」

つないて從者は主人を見ました。で、今まで無言であッた主人もやうやく言葉を出し、

「中すも御はづかしいが、名告らいではまた……窺子太郎重高と……」

「窺子？」何故か姫はすこし目を見張ツて、「……の太郎どの？」

「中々」。

「東山の手におりやるよ？」

「なか〳〵」。

「大儀でおりやる。このやうな詫しいところを氣の毒な……」

「何として！」

けれど實情、やゝ涙をもよほす姫の體たらく、一日も皇帝をわすれぬ心づくしこれほどかと悟ツては太郎も哀れをわかちました。

無言で挨拶をしてわかれ去らうとし、やゝ腰を曲げる、それを見ぬふり、姫はすこし太郎に近寄りました。で、直に太郎の從者の方を向き、

「わが身はいちごとて茶山寺の娘でおりやる」。

「すは、辨殿の姫君で？」

「なか〳〵」。

應答は濟みました。待ちかねて居たやうな太郎は直に付穗も無く禮してわかれやうとすると、また變な！　姫は答への禮も爲す、

「お待ちやれ、問ふことがおりやる。御こたへやるか？」屹とあらたまツて。

「身の知るだけは」。

「さらば御聞きやれ、東山どのゝ銀閣とやらん言ふはをさ〳〵三代のに(金閣の事)劣らぬとぞ。まことかや？」

胸に釘！　と見えて太郎は早速に返辭もせず……從者は不思議さうに、また氣づかはしさうに太郎といちご姫との顏を見て居ました。

「なか〳〵」。

「劣らぬとや？」

「されば……御言ひやるとほり」。辛くこたへを付けました。

「まことに？」

「なか〳〵」。

「さて」、人を惱殺する程の笑を含んで、「禁裡もかう爲て置くとは？　東山は……」ますノ〵笑ッて、「さうでおりやる、聞えた、御門にまゐらせうとて御作りやッたのぢや。噺ッで無くて、東山どのも白痴ではおりやるまい、どう心ばし狂ッたればとて御門よりきらびやかな館には住ふまい。さうでおぢやらう？」

太郎は一言もこたへず口は縫はれたか、聲は呑まれたか、かろく點頭くのがまだ切めても。終にたゞ、たッた一言、——

「長戰爭に事のみ繁くて……」

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

海とも山ともつかぬ挨拶を辛い楔子として太郎は無理に姫とわかれたまゝ、是も何かの因縁づくそれからといふものは姫の事が兎角心に掛かりました。

世が世とは言ひながら恐ろしく利かぬ氣の婦人。年はまだ二十の下らしいに！　顔は蠅をも叱れぬらしいに！　たよわいのに！　やさしいのに！　それで、花かとあやまたれて、香りをも吹くかとあやしまれるその口からあの言葉。柳をはづかしめてさはれば靡くかと思もはれるその身からあの理窟。理窟も理窟、眞綿で頸、燈心で縲絏、湯のなかに鹽を持たせた攻めかた。

かねてから浮評に名高い茶山寺の姫御前、賢女との評判すこしも無理では。思へば何より恐ろしい、三軍を身一人に引き受けるにしろ、剛の敵はまた剛で受けられる譯、たゞ柔の敵をどうしてま！

第二

もとより作りは書院、しかしその見ぐるしさ。禁裡に比べて矢張りと悟るものゝ、たゞ聞いて、たゞ見てこれが何うして公卿——公卿も公卿、辨どのとまで言はれる人の——書院と思はれぬむさくろしさ。

木口を見れば檜の糸柾か、亂れ木目、しかし椽も柱も

みな古びてこの頃の世の若者もどきな手跡だらけ、承塵に殘る白い痕はすなはち釘かくしの有ッた昔を今でも記して、そして其釘かくしは――銀にしろ、紫銅にしろ――剝ぎ取られて賣られて仕舞ひました。几帳の絹も手垢ばかり。漆は剝げて、鈍の濃菊に摺金の跡も殘らず、絹は色も褪せて、糸もほつれ、ぼたぼたとなッた樣は丁度葱の枯葉のやう、椽から吹き込む風に搦さうに靡いて居ました――吹き込む風、血腥い香を運ぶ。

その書院で刀の鞘卷をして居る二人の男女が有りました。

その一人は卽ちいちご姫！　今一人は姫の親の右少辨藤原夏代――茶山寺と呼ぶところの。

何のための刀の鞘卷？　發矢、今の世でいふ內職でした。

篠屑やら砥粉やら鮫皮やらで座敷は見る影もなく亂れて居ました。二人が身に附けて居るものを何かと見ればいちご姫のは外出の時のとすこしも變らず、變はッたのは只家に居るため被衣の無いばかり、夏代の姿は――これで右少辨？――掖縫が鼠にかはッたのでした。が、涙！　それでも汚すまいとてか、小簾の緣絹を剝がして縫ぎ合はせた廣布を前垂として居ました。これは親子二人とも。

他目もふらず、口も利かず、一心に二人は卷いて居たものゝ、やがて娘はほッと言ッて手をやめました。

「つかれたらう」。夏代も手を止めて。

「なかなか」。言ッて溜息。

「式部の小君（姫の女朋友）も今日は遊びに來るといふてぢや。やがての內、よい伽あるであらうよ」。

つとめて慰め顏の父を見上げて姫は答へも爲す。

「喃、式部の小君が」。

やはり相手は全く山吹。

「どう爲たぞ。病ばし！　心地例で？……」

「いや、心地は常でおりやる」。

「なに、心地は常？　それでなぜ鬱ぎやるとの」。

いつか姫の目はうるほッて居ました。

「何んぢや、泣く？」持ッて居た巻き掛けの鞘を横へ置きました。

「泣かいで何と……この淺ましい姿ッ！」からくしぼり出した言葉。

「淺ましい姿とは？」

「申すには及びませぬ」。

「このやうなしがない世わたりの事か？」

言ひ中てられるまではまだ嘆きも堰をやぶる力は持たず、が應答の間に意味を荷ッて、わが胸の思ふところまで刺されゝばまた迎へられていとゞ烈しく……

そして全くの無言。たゞ身のふるへ。

「あはゝゝ、女子といふものはあどけない……今はじまッたしがなさかい」。

もはや馴れたといふ様子がいとゞ哀でした。

「もとより。したが、た……たれゆゑと思し召すよ？」

「言ふまでも無い」。

「さればでおりやる」と涙と共に亂髪をかき上げるその麗はしさ。「まだ申し上げいでおりやッた。今日も上からの仰とやらで窟子太郎が御垣見にまゐッておりやッたが、太郎は人も知るとほり東山の内の垣守り、格を云はば禁裏の衛士にも足りぬ身ではおりやらぬか。それが見るからが目眩いばかりの打扮で、有り餘る豐けさも見ゆるではおりやらぬか。妾はまだ銀閣とやら言ふのは知りませぬが、垣守りさへある様な體、主の驕奢は如何ほどか。それもあるに……父上……何と思し召す……上の御有さまはあの體、右小辨の君が武士づらの佩く大刀の鞘巻いてわづかに賃にせうとは／＼！　しイッ！　父上、これが泣かれいで……婦人ながら妾はくやしうて……」

姫蔦の露には松も枝を共にぬらしました。飛鳥井家などゝともに蹴鞠には縁の深い家柄、また香道には指をも折られた格、姫もをさない時から父親からそれらの作法を聞き及え、その聞き及えのかたはら歴朝の様子を知ッたところ、天性の心の雄々しさは終にしばらくも武家を

にくむ情をすてさせぬやうになりました。思ひ出せば初對面から簾子太郎が詰ッたのもまた所以(いはれ)の有ッたこと。

「くやしうても」、父は父だけ、「詮無いことぢや。刄も立たうかい。こないに刀の鞘巻するのも思へばつれない事ぢやけれど、これも時世、御儀式にも事御缺きやる内裏の御いたはしさ思へば何でもないよ」。無駄な辨ながら。

夏代はすこし改まりました。

「その武士、そなた、何日見た？」

「今朝でおりやッた」。

「どこもとで？」

「外の御垣で。咎めましたら東山方で、禁裡の仰で築垣つくろひに参ッたと言ひやツておりやる」。

「ほゝ靖子、あの名高いよい男の？」

けれど姫は横を向いたのみ、やゝ話が横道に入りかけました。が、何故、一旦答へもせずに居て、それでさへ卸ッて話の逃げるのは好まぬ樣子。そらとぼけ、

「そんな浮評がおりやるか？」

「あるとも。好い男で名高いばかりか、學問でも人が褒めるよ」。

「あの壯佼(わかうど)が？」すこし考へ「したが東山ゆゑ何處やら憎う……」微笑を寄せました。

「さう言ふな。小君などはもう慕ふてふことぢや」。

「小君が？」おそろしく駭いて眉を上げました。

「小君。したが思ふても離れゝ戀ぢや、表向(うはべ)は睦ましいが、敵味方ぢや。甲斐ない事よ」。

打ち解けた親子、すこし話しもやはらかく爲ッて來たため、やうやく愁の暗もかすかながら晴れて明るくなりました。と言ふのは親ばかり、同じ流には飲みながら牛は寢ても馬は寢ず。なぜか、闇が姫の心に深くなる、目のはたらきは鈍くなッて日蓋も重さうに、そして、何の仔細、「小……」と聲ひくゝつぶやきました。

夏代は聞き付けた體で、さて別に仔細もたづねず物語りが了ると直に内職にかゝりました。

そして今は二人の間に應答も何もなく鞘を捲きながら

折々夏代は偸んで姫を見ると姫はまだ物思ふにとざゝれて居る體で、鞘は手に持ッて居ながら指の使ひ方が平常では無い體。

あゝ卷鞘、その篠、山に生へて居るときは大木にまとはッて居た篠、切り取られては死物の鞘を卷くはかない身の上。一年の峯の木枯、小鹿や猿を泣かせたのは愚かなこと非情の草木の痩腕をさへ吹き絞ッて、折角の實を雨あられ。落ちた岨道の岩の蔭、したゝる清水が命の綱、掩ふ岩がすなはち屏風、それを親とも兄とも頼んであくる春やうやくに貝破れた二葉の嫩芽、わづかに木らしい木になるやならず、いつか篠にさへ魅入られて——篠、罪な、しつこい篠、しかし篠の心を思ッて見たら。獨立は出來ぬはかない身分、百年の苦樂が他人と共、まつはッた木の情一つが身の命で、生きるも死ぬも勝手次第。君と共に身もたふれる、君と共に身もそだつ、生涯の友だちと魅込まれたのを諦らめたら、うとまずに香の蔭を貸す禝も大方有りさうなもの。はじめに見たのが因果の種、どんな前世の結び合ひか、裾濃の鎧が目先にちらつく。白鵝鳥の目釘に玉蘭の鍔——玉蘭は淸いもの、誰やらの顏とひとしく、白鵝鳥は愛らしいもの、誰やらの物ごしと共に。わか〳〵しい紫裾濃、褪せる日の有無はわからず、しかし壺菫菜の緣が有らば「もろともに摘む」むつましさの契りは有る事。主の身をかためて一分も透かぬ胴締り、花車よりはいッそ固さうな。不意に詰られても大して動じも爲ず、さうかとて禁裡を無いがしろにする無禮の樣も見えず——あゝ谷の中にも鳳麟蘭、濁川にのぼる若鮎、いづれ憎らしくしか見えぬ東山方の塵塚に猶藏れた珠玉も有れば有るもの。敵と思へばにくらしい、しかし人と思へば懐かしい、その苦味を含んだ下ぶくれ、その温厚な君子の風、從者の鬼髯がなか〳〵の比べ合はせ、軍陣の虎狼の中一際目立つ象の優美。敵で無くば、いや、もし味方であるならば、味方でなくとも、唯の下司であッたとて、女子が心を許すのは誰に向ッて、また何のため。小町の國色はかねて耳にも聞く始末、しかし

在五の協はぬ戀にむなしく驅られて戀を知らぬ、それが人か——石か、木か。木にさへ母木といふもある、木ともなか／＼比へられず、石にも子持石は有る、ならば石とも言はれぬ始末。末世の澆季と知るものゝ、澆季はいつもの流行言葉、昨日の殿が今日の下司、淵瀬のかはりを常と思へば人情に何の相違が有らう。鬼は鬼、あはれは哀、花は花、戀がかならず無常でなく、無常が屹度戀でも無い、千者萬別たゞ一つ粧飾のために暮らす世の中。われながら敵をしたふもまた因縁、あきらめる氣、また捨てかねる氣、それに妬くも今聞けば小君がまた其人のため忍んで葉裏に露を持つとか、浮世の義理にはかまはずとも心に鬼も友も住む、その目を避けやうとのみ勉めれば只くるしいのは胸ばかり。

沈む思ひを妨げまいとてか、夏代は更に言葉もかけぬ、それに辛く心も泣けばいつか一途に巻き掛けた籐が半分ほども後れました。平常から負けじだましい、急いで冴えかへッたやうにきり／＼と緊めはじめると夏代はまた偷み見て最もいぶかしさうな様子。その見る氣も邪魔なやうな。

處へ、襞が多く立ッた棕色の椽に人の足音。ふりかへる間も無くて現はれたのは夏代の奥、姫の母の綱手。

「いちご、小君が」。昔のゆかしい、しづかな聲がら。

「小君が？」一寸目をねむッて直に開いて姫は會釋、

「どこもとへ？」

「和御前(おこと)に」。

「妾に？ 西の屋にまゐりませう」。

言ふ内母は立ッて行きました。一人ぐらゐは下司も使ふには違ひ無い、それでも奥がこの有さま、右少辨の君の奥が自身に物を取り次ぐとは！

第三

西の屋といふのを何かと思へば西の離れで、書院と同じく物置とやつされてあるところでした。

小君といふのは式部の司の何某卿の息女で、いちごと

は幼馴染、交情(なか)のわるくない朋友で常に行きかよひして居ました。今來たのも、それ故、たゞ遊びに來たのでした。元より女が多數の朋友をば持たなかッた時世、世が酷く亂れて宮中の交際も少なくなッた折柄、殊にをさな馴染、二人の交情は實に漆といふ古語そのまゝ、すべて隱さずに物を打ち明けて居ました。

挨拶も濟むや濟まず、既に小君は打ち解け掛けました。が、いちごは每(いつ)に無い、かはッた調子。

「御見やッて」きの字形になッて小君がなまめき出しました、「……を」。

「何？」澁い顏で。

「何とて……いちご御にも似合はぬ、何でおりやる、その千年の松」。

「千年の松？」なまぬるく。

「千年の松は鱗にて、ほゝゝゝ」。

「ほゝゝ」、仕方なく釣り出されて、「松は鱗……御見やッたか？」

「此方からたづね上げたものを……御見やッたか？」

すこしいちごは思案して、

「いえ、見ませぬ」。

「御見やらぬ！　妾は見まひた。この度で四度でおりやる」。

「御見やッたのが？」すこし荒く。

「なか〳〵」。

「さぞな——和御前の見申したなら——彼方も心ありましたらうよ」。

にやりと笑ふ得意らしい小君の顏付き、いちごはいよいよ冷かす氣、——

「罪な人よ、誰やらは。聞く身こそ氣の毒でおりやるッ」。

でも小君は深くさとらず、——

「どのやうな月日の下に生れたらあれ程淸うなるでおりやらう。したが、婦女どものひしめく聲に立ち出て見て驚ろきまひた、彼方から言葉かくるので」。

「何とて」。
「和御前が小君どのかと」。
宜い加減な嘘、さとッたか、悟らぬか、乃至心面白くなくてか、返答もせぬいちご。
「あの窩子を」、小君はます／＼膝を進め、「戀ひ慕ふのは吾人（われひと）も同じことと見え、情ひさぐ女の童まで皆のゝしり喋いでおりやる」。
いちごは耳をそばだてました、——
「情ひさぐ女の童とは？　かねて聞きましたが實でおりやるか？」
「ほゝゝゝ、いちご御の空耳つぶして」。
「いえ、空耳ではおりやらぬ。妾はよう知りませぬよ」。
言ッて側にあッた双六の——今は用ゐぬ——盤に肱をかけていちごも身體をすこし横にしました。初から他に人目も無いこと、小君もざれた身態、いちごも今は同じやうに爲りました。
残熱も退かぬまゝ身につけたのは初回にも見えたとほり一重衣でした。幅細帯のしまり緩く、着殺された着物の襞が萎えて片寄りに爲ッて居る儘に、ともすれば知らぬ間に胸も露になッて、乳房さへも見えて居ました。手首から直にぶらりと力無ささうに爲せた手は折々後れ毛をかきはらふばかり。片膝立てにした居住ひの間には膝の曲りが白く、細く透いて居ました。是はいちごの身の有さま。小君のは猶でした。蒸すのにこらへかねたのか、きの字形はいつかしの字とかはッて左の腕を肉のまゝ支へとして足を充分に伸ばして寢轉んで居る、その足は二本ながら肉を見せて、それで坐ッて居て見れば胸はまッたく開け放れて鳩尾の肉の襞が二つ三つ見えるほど。世が世とは言ひながら公卿の息女がこれらの姿！
話しはつゞいて行きました。
「御知りやらぬとは如何な。常から其樣な事には拔けておりやらぬいちご御が御知りやらぬとは受け取れませぬよ」。
「全くでおりやる。つひ聞き損ひました」。

で、小君は前後をふりかへりました。

「かくさずともの事ではおりやるが、女子は是でも掛念がおりやるよ。情ひさぐ女の童とは外の事でもおりやらぬ。内裏方の女房や女の童の中に、喃、辻にたゞずんで露の情賣る者が許多おりやる」。

「まことに？」いちごも目を圓くして。

「まこととも。近衛どのゝ青侍、あれの馴れ染めの女房は御知りやるとほりすこしは美人、あれなど辻に立つものゝ中でも名のあるのでおりやる。そして武士方の一夜妻とさへ爲るのでおりやる。一夜情を賣るからには財なり品なり貴いものを許多得るとか、不思議や、その青侍などこの頃は鮮色の狩衣など着て道あるいておりやる」。

「では浮評ばかりではおりやらぬよ？」すこし逆上せてぽッと爲ッていちごが問ました。

胴ぶるひと笑顔とで受ける小君、足で足の痒いところを掻きながら、

「浮評どころか、妾は見た程……」

「え、見た？」

「ほゝ、築垣の邊で」。

「つ…い…ち？」

「和御前と窟子とを！」

あゝ無殘なゑぐり方、冷かさうとした身が却ッて氷にされました。面を向ける隙もなく、小君が繼いた二の矢の急攻め、——

「御かくしやるとも此のとほり、窟子をしたふのは今の婦人の常、何もをかしい事ではおりやらぬ。内裏の婦人で十五六で男を知らぬものは無いのを、和御前も定めて今までには……」

言ひ掛けたばかり、思い付いた體で懐中をさぐッて取り出したものを何かと見れば美事な抹金縷の印籠でした。

「これは、喃」、聲を低くして小君はいちごの傍へ摺り寄りました。一寸絹の頰を絹の頰に付けて見て、首筋を抱いて耳にさゝやきました。「和御前ゆゑ御はなし申す、

妾が、啼」、いちごを左右に動かしながら「築垣の處で昨夜一人の國方の侍大將から貰ッたの……」

「なにゆゑ?」

「あら悟らぬ――たゞ窟子へ近づかうと思ふばかりで」。

直に跡は笑ひたふれた仰山さ、此一言はいちごを強く感動させました。自分が賞む窟子をば――小君までが、何の美くしくも無い辯に。

からく進んで來た話も今はまた物思ひに封をつけられました。いよ／＼語り進まうとする小君、言葉を出すたび毎に手持不沙汰になる小君。はては無言、折々に低くうたふ小君のざれ歌の聲。その度毎、折角の物思ひを殺して耳をひそかにそれへ貸すいちご。

すねられて露も女郎花によりかねました。でも氣にもせぬ體。快活にわらッて終に暇を告げて去りましたが、さてその後ろ蔭――あれが窟子をねらふとは!

思へば曩刻(さき)の偶然の出遇ひ、かねて聞く窟子にはじめて面をあはせたのに、それで身は、はづかしい、着馴れの衣にやつしはてゝ居てせめて前から知ッたなら取ッて置きの一枚ぐらゐは、被衣もすこしは好いのを掛けたものを。名を聞いて物語らなかッたらまだそれ程でも――しかし、窟子と聞いたからにはその胸の度量もまた試したさに彼是と辯をもまじへた仕儀。それだのに小君はあれ程の熱心をさきな馴染の友だちでも今更――ちッ、死んででも仕舞へばいゝ。

しかし、とは云ふものゝ相手は武士、武士も武士、東山。國の運命を知らぬ身ならば格別、内裏の御いたはしさを御いたはしいと思ふ身が何うして敵に思ひを運ばれやうか。が、倫常は戀の餌食、倫常は全く戀をつなぐ鎖とするものは聖人ばかり。忠義の念も本は愛。愛の隣りは卽ち男女。愛が右と左とへわかれるその追分がつまり倫常と戀との勝負の闘。右が宜からうか、左が至當か。こ、としく兩人を思ふ戀とは歌の題にもある名目、しかし些かはッた須磨明石の双方えらび。「いづれ菖蒲」と引きわ

づらふ歌の德が有る靜な世なら、または「かりの契りは」結ぶまいと決する男子の心が有るなら。それ、さゝやく鐺の牙音！ それ露をたゝへる誰かの目！ 名はいやしい垣守り、しかし氣高い姿のその。しッ、目釘の白鵁鳥雌か、雄か。綿嚙は何處の女が縫つたものか。白鵁鳥もうらやましく、そして綿嚙も妬ましいやうな。無論、無理。しかし煩惱の犬はかならず無理の小屋にやどる――無理の小屋が煩惱の犬には命。煩惱の犬！ 菩提の鹿！ 追へぬもの、招けぬものと聞いて何故とあざわらッた身も今更思へば、ても、をさない。家は茶山寺と讀經くさい名であッても迷ふのが卽ち凡俗！

はげしい戀情は溪河の水、おさへれば押へるほど道を求めて突き進み、狂ひ出しては手綱さばきが却ッて馬を止められぬ仕儀。溪河の水の心の水性、蠶ふッたてる思の駒。「月毛の駒よ」と源氏で戀はれた、それ昔とは反對な。物を飮む咽喉をば窟子が來てつかむやう、物を言ふ口をば太郎が來て縛るやう――極、聳えた絕頂。

思ひ迷ッた茫然の中、橫の廊下をとほる母の姿、見ると先方も側へ來て何か小聲で言ひました。

地震は止んでも津浪は取れず、いちごは聞きそこなひました。猶身を入り込ませました。

「窟子太郎が今まゐッて……」母が。

「えッ！ 何」。

第四

おもひの外に思の中の人が來たとの知らせ、でもまた信けられず、聞直さうとする間に人の氣も知らぬ母親は身をかへしたまゝ端近まで出迎に行ッた樣子、――「こなたへ」。こなたとは何處の事。こゝか、それとも父親のところかと憶はず、あら、顏がぽうッ。われを忘れて立上がり、柱蔭から顏を斜に出して入口の方を一目、まだ其人の影の見えぬため、また引返して、何の爲にもならぬながら、手早い、四邊の取片付。片付けるのか、散らすのか、片付ける――瞬間――其下から亂脈はやはり舊の

まゝになりました。
やがて廊下に人の足音。すはやと刺客でも忍入ツた様な身構へ、帶をしめなほすとも直さぬとも付かず、衣紋を繕ツて僅に小褄をきりゝと引いて、待掛けたものゝ、併しそれは早まツた用意、簾から透かせば客は綱手に案内されて奥の書院へ通りました。「客……何事！」といふ顔色、中腰で足をつまだて、する〳〵ッと簾まで駈寄り、覗く顔で簾にしばらくは高低を起させて、そのまゝ何やらの神に封込められた繪のやうに場所をも去らず坐りました。

聞けば洩れて來る、まぎれも無い今朝の太郎の聲、そして夏代と丁寧な口誼の有る様子。西の屋を出て竊聞したさは山々、透かし見たさは毟りたい程、しかし書院の三方はいづれも簾、さいはいに情知貌の几帳や屏風は有つたにしろ、それまで行く道の無さ——人の家でも無い、わが家に。捩ツた手からこぼれるやうに時々物思はせぶりに主客會話の聲がひゞいて、そして心を籠めれば籠めるほど朧になる親と客、いや、客と親との話聲——もしや鶺鴒石でも有ツたなら。考に食盡された跡の澤の身は輕く、たちまち綾ででも釣られたやうに首を長くして立上るかと思へば、また棒を吞んだやうに姿勢をすこしも頽さずに段々と坐ツてしまつたり。

その胸痛々しい緋縅の鎧の人は何しに來たのか、用が有ツてか、また無くてか、公用か、乃至私用か。用があツたものなら築垣で遇ツた時その様子を見せさうなもの。出來心で尋ねて來たのか。

想像が是だけならそれこそ仙人、しかし、凡夫、ことに凡夫の精といふ十七八歲。

乙女椿を見てはその色にならうと願ひ、白魚を數へてはその肌を貰はうとせがむ此頃の人情、愛や戀は唯自分と自分がなつかしく思ふ人との二人にばかり天から賜はツてあるやうに思ふのが此頃の常の考です。

もよほして居た感情は其人を目前に見て猶熾になりました。第一に心に呼出したのは自身が美か醜かといふ一點！ 自身の醜美いづれかを決めるのがこの場合の空中

樓閣の土臺となるもの。

つら／＼考へれば九歳十歳頃までは誰でも自分が見馴れて居る人の顔ばかりが顔らしく、また美しいやうで、時に鏡にわれとわが面をわかてば却ッて、見馴れぬためか、わが面が人のより醜いやうにも見えたほど美を見る目が無かッたものゝ、併し其頃から世間の人が自分を褒めて美くしいと稱へてくれたのはまだ耳の底にも殘ッて居て、で、猶今でもまだすこし迷ふ氣持もするやうな。咲く花は麗はしく、眠る月は奥床しい、それは今人並にわかるものゝ、しかし猶慾を心に運込めば一寸は美くしく見える自身の顔もよく見て居る內にはわるく見えて來るやうな心持もする。實にこの身はうるはしい顔なのかと一度われを訝かッて更に思を繰れば、一昨年四位の妹御前も「美しのいちご御」と褒めてくれて、去年散位の兼仲も「今小町のいちご御」と言ッてくれた事も有ッて、そして今でも道を行けば人が見て、ふりかへるまで見て、しッ！　見惚れるほど見るところを思へば――其時はいつも澄ます胸に浪を打たせる――やはり何うしても美くしいに違無いのか。

跳ねられたやうに俄に飛立ッて合はせ鏡を一對取出しました。

鏡にむかッて正面から寫し、横から寫し、斜から寫し、下から寫す、その度ごとに氣色のかはる面白さ。で、さすがに醜くも無い、醜くも無いといふのは自我一流の評では美しいの正反對。それで、ことに我ながら氣に入ッたのは横顔の可愛らしさ。

眉の尾がするどく現れて、睫毛が重なッて、そして鼻道のはじまるところが些しくゝれてその顔の美は其處一ケ所に集まッて居るかとも思はれるばかりの處は、「まことに小町でも」。風にもまれる花片に形だけ比へられる唇、その色のすこし薄黄がゝッて、そして薄紅づいた風情は――天地はいかほど廣くても――類似の物もなささうな。同じ色の猶一際薄くなッた頰、薄紅色(ときいろ)の綸子に似たやうな、横に顔がなればなるほど其薄紅の間、色白の

膩が浮いて居るやうにも見えるとは。
「今度窟子に遇ッたなら此横顔を見せてもやりたい」。
直に小君が身側へ來たやうな心持、で、小君の顔がありありともあらはれたやう。あれで何うして窟子などを。一方を斥けて置いて縦横にあばれさせるのは「鏡にうつして醜い」心。
「窟子、あら、何を語る、言葉も洩れぬ。したが、今日を妹背の契りの後と思へば……」
言換へれば斯う考へました、——
「もし今日が窟子と○と縁を結んだ跡で、窟子が勤に出る前、舅と何か如此相談して居るところであッたなら、その嬉しさは何程だらうか」。
良心には聞かせられぬやうな空想、それは空想と知らぬほどでもない、空想をいだいた下からあゝ空想と氣が付きながら、猶多少はその空想をやしなふ樣な工合でした。それを叱るらしい良心の聲も聞えるやうな、しかし、其處もすこし皺枯れて聞取れぬやうでした、たゞ情の深いばかりで。
餘處からこの考に沈んで居るところを見たらそも〳〵何んなか。眸子は何とも無しに只目の中心に坐ッて向ふを向いて居て、そして手は感覺だけ身體から離れたやうな體で輕く、實に竊と——蜘蛛の巣でさへ支へさうに——膝の上に載ッて居ました。何を焚いたのか、餘處から舞込む烟さへこの部屋へ入ッては變に澄まして落付いてさまよひました。
どうしても混入ッた密談と見えて書院の會話中々終らず、今か今かと待つ内に何うか角か主客二人の聲が裂けたやうに高くほとばしッて窟子も立上がつた樣子、鎧の音ががさつきました。
しッ、歸るかと活返ッたやうな身振になッてやゝ身をば廉の陰へ潛めかけたものゝ、素より初對面から窟子を詰ッたほどの處女、胸の考だけは花のやうにかよわく有ッても、さて心は太く、思直して見料らッて居て……
その間も無く、はたして太郎は暇を告げて書院をはな

れて出て來る、其處へ偶然めかしていちごは簾をかゝげて出ました。

が、心は朝の時より充分よわく爲ッて居ました。利かぬ氣では有りましたが、さてつひ言葉がまごつきました、たゞ頭のみすこし低れて。

出たらば大方まづ窩子から禮をして言葉を掛けるだらうといちごは考へて居ましたが、其豫察は違ッて相手はじろりと此方を見たばかり——聲も出さず……

玉と思つて摑んだのは案外な石、氣を拔かれて睨めて居る内に先方は最早背中を見せました。

* * * *

「吾」といふ事は宇宙の命、衣通だつて頬がすこし廣かッたなどと言ひたがる世の中、色々に證據を求めた自身の顏の美くしいところ、それ紛れも無い、そして男子は美人を好む人情、ならば窩子が挨拶ぐらゐ爲ても宜さそうな、と思ふばかり、何か烟にまかれた心持。しかし辯護は疎まれたために容易に無くならず、疎まれまいと思ふ處から多く生まれるもの。窩子が此方を疎んで(?)言葉を掛なかッたのが憎いといふよりはいッそ言葉を掛けられるやうに爲りたいと思入れば、自然辯護は窩子をも掩ふ、「恥ぢたのだらうよ」。

しかし、何の用に窩子は來たのか、その聞きたいのは面胞が出るほど、「恥ぢたのだらうよ」と辯護を自分で付けるのを待兼ねて夏代の部屋へ行きました。

見ると夏代はいちごを上目で見たばかりで差俯向いて居ました。まづ氣には掛かる、が悟らぬ氣色で、

「まゐりました」。

「來ずともの事」。夏代が目を舊のまゝに据ゑて見もかへらず。

「なぜでおりやる」。側へ膝をさしつけて坐りました。

「武家の自恣はあれ程かな。何と、思の外な、和御前まだ知らず?」

「なか〳〵知りませぬ」。

「これ綱手呼びやれ」。

で呼ばれて綱手も來ました、これも不審さうな顔で。揃ッた二人を見るや否や、いつか目をしばたゝく右少辨、いよ／＼合點の行かぬ二人。夏代は終に口を切りました。

「外でもないが、あの窈子が思ひの外を言ッたよ。東山の自恣は何處までつのらうか、東山の自恣は。どうしてこれ程に御所はおとろへたらうよ！　喃」

言ッて溜息、肝心の筋は何處へやら。樣子の意味ありさうなのには聞く二人も無我無中になりました。

「何を御言ひやッた？」母が。言葉を儉約してたゞ默ッて目で同意を見せて居るいちご、その內心には多少この考も有りました「困ッた、わるい事言ッたか」。

「何をとて呆れたよ。かうぢや、よく御聞きやれ、何事の面會かと思ッたら、東山からの旨であの窈子が忍びづかひに來たのぢや。何の忍びづかひかと思ッたら……」目を見張ッていちごを見ました「いちごを妾に上げいと言ふ」。

さすがに聞く二人も化轉して「えッ！」と言ッただけ。

「義政の切な所望ぢやと。茶山寺の姫の容色をかねて聞いたが思の種で、忘られぬまゝに使おこせたと言ふよ。表立ッた使では禁裡にも憚りが有らうとて忍にしたとの事、うけがへば事に不足を爲せぬとか」。

が、混上げるくやしさに跡は言切れぬ、それも無理では無いことゝ言ふにも言へず相手の二人も言葉は無い、それを嘲りがほの夕日の蟬、雀に逐はれてか、飛びながら斷續させる聲が二つ三つ。

第五

坊主が憎ければ袈裟までの比喩に漏れず、親たちは義政をにくむのあまり、その言葉を傳へに來た窈子をも噛砕くほどに貶す、それも人情元より無理でなく、よし貶さうが、貶すまいが、相手は敵、いちごに何の痛さ痒さも無いこと、とは知りながらしかしまた酷く貶すのをば聞苦しい心持もしました。

東山の義政は無禮な男子、驕奢の果は公卿の息女にさへ枕席をはらはせやうと言出た、それは餘りと思はれても、併し望まれたいちごに取ッては多少その間われを慕ッてくれたのかといくらか可愛らしい氣もしました。窈子は成程いやな仰をつたへに來た、しかしそれは主命ゆゑ決して憎むにも當らない、斯う辯護をつけました。

「いちご、そなたの思はくは？」と夏代が聞く問の裏にはかならずいちごも承知しまいとの心を含んで。

東山は怨の積る敵、そこへ何うして行きたいもの？決して行きたくは無い、が、もし行けば始終窈子の顔を見る便宜は有り、人の枕席に侍ること、いちごには左程恥かゞやしいこととも思はれず、むしろ氣樂でいゝかも知れずと考へられた、それにしろ眞逆に義政——昔は地下と言はれたものゝ——ところへは。

曖昧ないちごの返事、親二人も不審と目をば付けたものゝ、なまじひに心の奧底を深くあなぐッたなら、もともと世の雨にいたみ、月にひそむ花とは違ッて、處女とは言ひながら利かぬ氣の、旱にもおとろへぬ質の葉鷄頭、何か我意を言出してどう風向がかわはるか知れず、それではいはゆる蜜を求めて蜂に螫される譯、手を付けぬのが上策とやがて親子の間の相談はわかれ／＼に爲るも同時、さすがにいちごも手持無沙汰庭へ出て行きました。

やゝ些し前までは東山に薄紅の襞をしぼッた夕日も既に消果てゝ、明日の天氣を約束する夕紅が名殘に雲をいろどッて、古代更紗をむしッて居ました。いつか早くさしのぼッた月はまだ光を放つ力も無く、見立てれば中空で休息するやう、漸く十一日の形とゝのはず、缺けたところは情無く折朽ちたやうに淡となッて居ました。木らしい木は見えぬ蓬生の庭、それながら昔の歌合を忍べとか、蜩も四聲五聲鳴きに來て、蟋蟀も澁つた舌打をする樣子、長々曲折なく引張ッて鳴く鴉さへ何やら沈みがちでした。

この庭は內城にわづかしか隔たらず、濠も既に半ば埋まッて、それ故濠づたひで城內へも這入れるところ、そ

れで聞けば蜒づたひの草叢の果に人聲がするやうでした。

草は思ひのまゝに生茂ッてほとんど道をふさぐばかり、しかし物數寄の心に驅られてはいちごも、元々大膽、そこを構はず手でわけ〳〵その聲のする方へと行きました。行ッたのは別の仔細でも無く、小君が話した辻君でも有るか、たゞそれが見たいばかり。まだ熱を冷まさぬ草の息、あ、絹の頬もあらざやうに。

聲のほとりに近づいて、雉子を狙ふやうな身がまへ、屈んで草の莖の間から向ふを覗くと、果して人、二三人。具足掛では有つたものゝ、多分は雜兵、並の鎧を着て居る樣子。で、洩れて聞けば相手は矢張一人の婦人、それで酷く搦擇する體。

「心づよい女、まだ跪くか！」

人殺か、跪くかとは。いちごは猶耳を立て、目を凝らす、が、たゞ草を蹴散らす音。

「丹波、足を」。前の男が相手に心付ける樣子。

「縛は？」丹波が返したらしい聲。

「大事ないぞ。ちよッ、女！ 神…神妙ッ」。

「これ、足、女――おどれ蹴るか」。

揉合ッて居る內、やゝいちごの方へ皆々寄ッて來る、その途端、あら、白い物！ 白い物、かよわさうな女の足！ 蹴らうとひらめく白い足！

下枝の雪を推す松の拳、骨太な雜兵の手が見る間に足をおさへ付けて、やがて手が離れたのを見れば既に足は縛られて居ました。

匂引と初から悟ッたものゝ、いちごは動じもせず見てゐるまゝにやがてこの體。しかも女子の泣聲は猿轡を洩れてかすかに聞えるのもまた無殘。救ッてやりたくは有ッても跪づくでは迚もかなはず、思案をめぐらす間も無く、雜兵は總數三人、女を胴で昇上げて、發矢！ いちごの方へ歩いて來て――瞬く間――いちごと顏びッたり――さすがに驚いて足をも止める。

見れば縛られて居る女はいちごが知合の局、葵典侍！

見れば草叢から出たものは凄いほどに美くしい少女！

しばらくは雙方無言。身は全でしどけなく爲ッて居るその、その、その羞かしさ。葵典侍はいちごを一目、知合の人に恥かしい姿を見られるのは死ぬよりも扨つらい！身をふるッて舁かれる手を抜けて下へ落ちたものの、しかし、あゝ、着物の甲斐も無い事！

胴ぶるひ一つ二つ、尻目にそれを掛けていちごは突と寄りました、先へ立ッた雑兵の手許まで。

「誰どのゝ手か？」すッきりと言放つ。が、直に重ねて、微笑を帶び、

「かよわい女子を何に爲る！」更に一息の間にまた語を繼ぎ、

「局から連出して何處へ行く？」

しかし答へぬ雑兵、互に顏を見合せて、「この獲物は」と言ッてうなづく様子。が、氣高さに恐れて荒く手も付けられず……

「窈子の手でおぢやるが、何と仰せらるゝ。この女子は偸取りまひた」。

「窈子？　太郎か？」

「言ふまでも無く」。

いちごは勢籠んだ體、直に言葉もかへさず、しけ〳〵としばらく葵典侍をながめて居ました。

「その典侍どのを」、前の見幕に似合はず笑を含んで、「御ゆるしあれ。妾が代りに立ちませう」。

ても不思議な空合、通な少女も世には有るもの。たゞ驚いたばかりの雑兵。

「疑がひやるな、これ御覽じろ」。

どう爲るかと今更雑兵も氣を飮まれてすこし逡巡するばかり、胸をおどらせて見て居れば、いちごはたちまちわが上帶に——あら手をかけて、しッ、それを解く——解いて手繰ッて、その時は瞬間、帶を投出して一つ莞爾、

「何處をでも御縛りやれ」。

今は雑兵もきまりわるさ！初心に笑ッて帶を手にも取れず——内心は薄氣味わるく。あら、狸の出さうな、

朧々とした夕暮。變に吹く生ぬるいやうな風。

何を思ツていちごがかう言出したかはいちごより外に知るものも無く、葵典侍さへもがくのを休めてうツかりと爲ツていちごを見詰めました。急立てるいちご、今更雑兵も夢に夢、終に葵典侍をば赦すと決めて、さて、强ひていちごに其代りに來いとも言出せず。

放飼にあツて禮を述べる思案もなく、葵典侍は跡をも見ずに行ツて仕舞ふ、赦しは赦したものゝ、雑兵も今は胸安からず、葵典侍が逃げたからには迚も默ツて居る譯は無く、いちごを今度は助けに男子をつかはすのは必定と思へばいちごの顏が、そのうるはしいのが却ツて凄し、而も冷笑われるかのやう見えました。

「こや」そろ／＼と立去掛ける雑兵を呼駐めたいちご、變に笑ツて、「なぜ逃げやる？」

「いや、逃げは……」

「さらば妾も御つれやれ。こゝ御縛りやらぬか」。言ツて裳をかゝげて足を見せました、片手では着物の前をおさへてしどけなく。

雑兵は聞かぬふり、いちごは跡から續きました。雑兵は早足、いちごもまた早足、折々にふりかへれば風はいちごの着物をひらりひら。

「まだ御續きやるか？」屹となツて一人の雑兵が足を止めました、しかし荒々しくは無く。

「なか／＼。其所たちは窟子の許まで行きやるであらうが」。

「なか／＼」。

「さればこそ、連れてたも」。したしさうに三人の中、見れば帶は旣に緊めて身體はきりゝとして居ました。

いよ／＼雑兵は當惑顏、——

「それは何うあツてもなりませぬ。窟子どのは若いに似ず禪とやらに凝ツて物堅い人でおぢやるから女子をつれてはとても／＼」。

「なに」耳をそばだて、「物堅い？」

「なか／＼」。

「ならば何故先刻には女子を」。

「あれは窟子どのゝ知らぬ君でおぢやる。辻の人と言うても大事おぢやらぬ」。

「其所たち妾を知ッてゝか？」

「知らいで何と、いちご御ぢや、東山どのゝ思かけられた。」

「知るまいと思の外に既に素生を知られたとは！」。

ところへ、不運、横から突然出て來た窟子。

第六

かどわかされた積りで窟子の許まで行ッて見やうとの、いちごの考へは途中で窟子に出遇ッたため料らず破れかゝりました。何を目的に窟子の許まで行かうと思ッたのか。謀がやぶれなかッたら何うしたのか、何を思ッて操を輕々しくしたのかたゞ見てすこぶる奇怪でした。

いちごの親たちの言葉に従へば、姫は年寄りも叶はぬほどの烈女でした。女の子の十三四から上、眉が伸びて色が白けるのは何のため。すでに此等には世界は大きな化粧部屋、靡く柳は身振の師匠、歌ふ鳥は作り聲の師範役と全く變はつて、前の野の摘草、裏の澤の螢狩、すべて百年の友だちを撰み抜く處となる、その肝要の瀬に立つ身がたとひ後世の切火かち／＼備餅三つをあたら荒神に捧げるほどの緣遠い身にはならずとも、旬に食べれば鰯も大牢、賣れ口を早くと求めるからには一般に喜ばれぬのを擇むのは無駄——颶風は舟子に嫌はれる理——つい馬爪の剗輕も鼈甲の温和と見せ掛けるのが世の中の常。それを共邊には頓着を忘れて、男は男、女は女と美事悟ッたあつぱれ娘の見識、親ながらも昔はづかしいとの事で……

いちごは男を男、女を女と悟ッた？　或は左様、併し評し換へればいちごの目に男女の區別は無く、有る事は有ッても、男女によッて動することは無く言はゞ人を人臭いとも思はなかッたのでした。

試に物の哀といふやさしい情の奧底を探ッて、その哀

の催す初心の日を問へば、すべて男は女を氣味わるがる、また女は男を危んだもの。郭公、鳴かなければ斫るとは男の地金。郭公、鳴かなければそれで宜いとは女の本性。男女心の根を違へたからには、たとひ貸した肱枕の夢を檳榔毛の車に載せ合ッた交情にしろ、造化をしのぐ哲學者で無い上は、男女たがひに心をば知り盡くせぬもの。打ち明けてまッこの通りと相手の腕に紫を嚙んでも、しかし約まるところが盲さがしで、蝦蟇をつかんで巾着と心得る類。まして戀の働きに情の手傳ひ、驅られ驅られておづ／＼不案内の暗路にさまよふからには兩方に分かッたやうな、また分からぬやうな心持ちの爲るのは道理の事で、緣が結ばッて夫婦が出來れば、蛇も馴らすと手襷になり、やうやくに親みといふ物が利發顏で出て來るやうなもの、しかし前日の氣味わるさが城を明け渡して仕舞ふのは中々の事、御互に「だらう」鑑定で暗闇の分韻もどき、探ッて中らず、しかし中て、尋ねて逢はず、しかし逢はせて、おのづから雙方が大得意、それを名づければ、すなはち愛情。是が普通、たゞいちごばかり闇は違ッて居ました。いちごには男も氣味わるく思はれず、却ッて珍らしく思はれました。男の眞の性質、それが女と相違して居るのは何の廉だと會得したとか、どうか、それは不分明。しかし、いちごの心では全く分かッたやうでした。

そしていちごの分かッたのは男の中の一部ばかりで無く、男全體に及んで、馬の口を取る下司も、紫の素袍を着る高貴も同じやうにしか見えませんでした。立ち並べて鶴と烏とを比較すれば如何にも鶴の方が烏よりまさッたやう、が、悟ればいづれも、いちごの目には、情の動物でした。烏には烏だけの情もあり、鶴には鶴だけの愛も有り、萬象いづれも公平に出來て居ました。時に不圖思ひ入れば、犬でも、猫でも、草木でも、もし互に許せる境遇ならやはり人と同じやうに思はれました。この邊の考へは只思はれたばかり、自分には何故さう思はれるか悟れず、たゞ有無の中に漠として居ました。飜ッて廬

心に立ち戻ッても、自分が(思ひ切つて)禽獸草木を偕……老の相手にする氣とは自分ながら考へられは爲ずたゞ折々博い愛情(迷?慾?不德?)が心の內を浮き足で、そしてこそ〳〵と亙る心持ちが爲るばかり。世の中の男は、汎く言へば、世界の雄は殘らず自分には分かッて居るやうで、それ程に却ッて同類の雌の方をばまだ解し得ぬやうでした。普通の人がはじめて男女互に批評する時には大抵男は女の劣ッた點、女は男のわるい廉にまづ目を付ける、それといちごは全く反對して、むしろ相手のまさッた處にのみ目をつけました。男は女より思慮が深い、男は女より力が有る、男の中にも美しい人は有る……かういちごが考へた果は一般に男は女より何うしても優ッたやうにも見えて、そして自然に、名の付けやうも無い、妙な理想が湧いても來ました、どことなくいちご自分ばかりが女の髓を集めたと思ふやうな理想が。この考へが起るや否や、更に第二に續いて、不思議な自信の念が有りました。人の評を經とし、更に自身の贔負を緯とすれば終に世の中の男子の目的となる物は自分の外に有るまいと思ッて來ました。

かう考へて心から男を尊ぶ、その極はいちごも自然に男らしい眞似を好んで來るが唯虎を描いて猫にも似せられず、却ッて別の異形の物をこしらへるのが多く有ること。皮相から男を觀察していちごが男を學んだ結果は終に奇激な婦人となりました、一寸見たところだけ男に似て居て。

そして女の男らしい、否、男めかして居るのは却ッて世の、多數の男の眞の愛を減らすとは更に考へませんでした。多少考へました。が、それを打ち消す辯護が有ッて、すなはち女がつゝましくするのは女が男に阿びるので、才と色とに缺けた女なら知らぬこと、自分のやうな、兩方揃ッた天成の美人がそれ位の事に心をくるしめるに及ばない、これがその持論でした。しかし、自分が男らしい眞似をするのは全く見えを離れての事か、或は矢張り普通の女が男に阿びるのと五十步百步の間にあるか、

其處まで些しは考へも仕たいやうでしたが、面倒だとて猶深く究めませんでした。

活潑に身を行へば、人目にも烈女と見えて、またたとひ何のやうな男にも怯めず思ふまゝを言へば、人もおのづからそれに付いて喋々しました。

それは普通の婦人の出來ぬこと、と人も言ひ、自分も思へば、その心が一轉して、何でも人の爲難い事は爲て見たく、爲て人をおどろかせたくなりました。人をおどろかせて、人が物怪な顔をして自分を見詰めたり、また往來で人が自分を見てひそ／＼と何かさゝやいたりするが譬へやうなく本人には嬉しい事でした。

いちごに就いては善惡の評が互角でした。唯概して言へば、女は多くいちごを貶し、男は多く褒めました。いちごの性質も完全では無かッた。しかしそれを女が攻撃したのはむしろいちごが世の男に多く褒められる、それを妬んだためでした。で、男が比較して女より多くいちごを褒めたのは唯いちごがうるはしいのと物語りして話しがはづむのと、この二つ、思ばいちごも幸福のやうな、又でも無いやうな。

つひ、それゆゑ、いちごも女とは交際を厚くせず、わづかに小君くらゐが何處やら男めいて居るといふことで莫逆な友となッて居ました。が、不思議には其割りにいちごの男友だちも又多くは無く、いつでも一人か、二人で、そして其友だちは年々、月々のやうに新陳代謝して行くこと、是が餘程妙でした。

是等がいちごの性質の概略で、すでに是程、それゆゑ敵味方の愛憎は兎に角、自分を望んだ廉に於ては流石は內心義政が酷く憎くもありませんでした。憎く思はぬ、それと同時、妾といふ一事が思ひの種となりました。世の中では多く妾をいやしむ。いちごには何程考へても左程思はれませんでした。妾は女子の操を人界から捨てた人、とは知ッても、操を捨てるのが何故わるいかは不審でした。妻と妾とは名目が違ふだけ、名目に驅られるのは悟りがまだ開けぬのであらうと考へられました。操と

いふこと、言へば左樣言へるものゝ、元々取り留めの無い樣な——常磐の子が(偶然に)英雄に爲ツたため後世でも常磐の操に理窟を付けて兎角褒め立てるものゝ、もし三人の兒が病氣ででも死んで仕舞ツたなら常磐の操は立たなかツたのか、こゝまで言へば旣に判斷の筋も曖昧になツて來る仕末その操とは何を言ふのか、との意味で操といふことを疑ツて。そして疑ツたまゝを道理と假り定めると、終に操を見捨てやうが、見捨てまいが、そこらは人間の勝手にあると思ひ込むやうにも爲ツて、いよいよ妾がいやしくも無く思はれました。

妾はいやしいものでも無い、美福にしろ、欒子にしろ、それだけの名は後世に傳はツて居ると思ふ程ます／＼妾の境界は嘸面白からうと推し測られました。氣に入らぬ相手は否、しかし相手が自分の氣にさへ入ツたなら。もしまた其相手が否になれば別に新奇なのを擇むのも譯の無いこと。どうしても妾は妻より氣樂らしく思はれました。

が、唯今の場合で相手が死ぬまでの敵である事、これが流石に胸に答へました。浮評で聞いたところでは、東山の義政は色が白くて青髯の痕が奇麗に殘ツて、それで白の帷子で銀襖を後にして坐ツたところは中々見萌えが有ツて、繪にでも爲たいと言ふほどとの事、又一方に於て驕奢の病は有るものゝ、人を懐けるには中々得て居るとの事、あるひはそれも左樣であらうその人が自分を妾に……あゝもし敵味方の間で無かツたなら……

それに窟子は中の警固役、あの顔で淺黄の素袍でも着たなら嘸かしそれも見榮は有りさうな。

これや彼や、良いやうな、否いやうな心持ち。兎角はかばかしく親たちには答へず唯分別なしに散歩に出掛けた途端、はからず窟子の手のものが奏典侍をかどわかさうとした始末。

人の意表に出たがるいちご、つひ不圖思ひ付く。雜兵は窟子の手、すなはち是から連れられ行けば窟子の許まで自分も行かれるには決ツて居ました。窟子は何となく

慕はしい。しかし此方から馬鹿に節を折ッて甘口を言ふのも些菱、偶然からして窈子の許まで行くには雑兵の手を借りるのが上策。かう考へました。窈子の許まで行ッて何うするつもりか、それもいさゝか思案が有り。が、その思案は此時第二で、ほとんど心の中では完全の形を爲したやうで、そして取り留めやうとすれば又爲さぬやうでした――すなはち、事に因ッたら義政の望みを容れて――獨斷で――承知して、そして……その跡は目的の郷が雲か山かとなッて居ました。

で、雑兵につれられて窈子の許まで行けばそれで澤山。もし其途中で雑兵が亂暴でもしたら何う爲やうなど、女らしい考へはまづ催しませんでした。

途で亂暴をされたらそれまでのこと、かう高を括ッて居ました。

たゞ得意といふだけ、それゆゑ、いちごが妙な事を言ッて雑兵を威したのは是ぞといふ取り留まッた考へが有ッての事では無くて、むしろ一時の戯れでした。戯れ、年頃の女が戯れと言ッて濟まされぬところの。

そしてまだ窈子の許まで行かぬうち、不圖窈子と出遇ッて仕舞ひました。窈子は合點の行かぬ顔、いちごを一目、しかし雑兵に言葉を向けました。

「何ぢやのゝしり喚いで」。もぢ／＼する雑兵を目瞬もせず見詰て、「誰にゆるされて此邊さまよふ？」

「窈子どの」。無言の雑兵を尻目にかけていちごが窈子を呼び掛けました。

雑兵は手に汗。いちごの無言が賞罰の境目――見れば色もかはらぬ姫百合の姿！

「今朝ほどは」。姫が重ねて、「申入れたい筋有ッて方々につれられて參りました」。

窈子も今は丁寧に！

「左樣でおぢやるか。申し入られる筋とは公のでおぢやるか、それとも私ので。私のならば受けられませぬよ」。でも氣强い、かはりもの！　と言ひたさうないちごの日付。

「私のでおりやるが、また公のでおりやる」。

窈子はすこし思案する體――

「今朝ほどの事の御返事でおりやるか？」

「いえ」、いちごも些し考へて「それでもおりやらぬ兎に角……」言ッて首を低げました。

何か思はくの有りさうな姫、で、いよ／＼思はくが有りさうな窈子、太郎もしばらく默ッて居ました。が、終に承知しました、毎に似ず苦々しい顏付きで。

第七

どうしても窈子の心がいちごには分かりませんでした。

伴なはれて行く内に日は全く暮れ切りました。軍後とて途のわるさは言ひ盡くせぬばかり、燒杭や瓦片が蛭卷だけしか殘らぬ槍柄やひさげ割れた矢と共に途端に横はッて居て、あるけば種々の響きがするやう、途のわるさに折々轉びかゝるいちごを――顏にも似合はぬ――助けやうともせぬ窈子。はかどらぬ女の足、それを知ッてか、それとも知らずにか、早く傾く上弦の月に按内を許したばかりで窈子は後をも更に見ず、いちごの續く續かぬを問はずに。

が、家まで行き着くや否や、窈子の待遇はまた變はりました。跣足の水を酌ませて、椽に上げ、そしてあら妙、いちごの手を取ッてやさしくも按内しました。夢か、現か、でも途中とは反對な。それもあるに、猶不思議は、色々に氣を揉む樣子で窈子がいちごを通す座敷を撰んだ事。

そして終に案内した處は極めて奧まッたところの疊數六枚ばかりの小座敷でした。それで二人さしむかひ、薄暗い蠟燭ばかりがてら／＼として居ました。

此處に至ッていちごは狐につまゝれたやう、流石に敏い婦人ながら兎角の思案も付き兼ねて、いはゆる逆手をつかへば鳩も鷹に克てる譯、はからうとした身が何か料られたやうで、今は付き穗が無くなりました。

「わからぬ、いみじく稀有ぢや。雜兵の手前で如此であツたのか。それかとも思ふが、分からぬのは公か私かと問ふたことぢや。私ならば受けられぬそれまで問ふた人がたゞそれだけの答へで諾ツたのもまた稀有ぢや」。

さとりかねるまゝに不思議を凝らした目で窈子を見れば、なほ意外、手まで引いてくれた親切には似ず、笑顏といふは毛で突いた程もなくやがて姿勢を充分正て——

「申されうずる筋は何でおぢやる？」

虛に乘ずる虛、嫩風は暴風より花がしぼむ。もと〳〵此處まで來るまでは「もし間が好かツたら……」と人には聽かせられぬ內心の秘密が有ツた、その秘密は今でも決して無くはならず、むしろ、言はゞ、ます〳〵熾、が、直おいそれとは口にも載らず、また多く身振りにも出す……

やうやく僅に一言、それも色々前後を爭ツた跡——

「公のではやらぬ」。變にうごめく唇の端。

「公のでは？」直に窈子が。

「ほと〳〵私のでおぢやる」。思ひ切ツて言ツた、それでちと胸も坐ツたやう。

「私のでおぢやるか、まことに？」

「なか〳〵。思ふ子細が有ツて和主を欺きまひた。御氣の毒と思し召すか。腹御立ちやるか」。

すツきりと言ひ放して、中々覺悟、骨もとろけさうな笑顏。が、たゞ不思議は何のため、じツと窈子は目を瞑る。

「氣の毒でもおぢやらぬ。また腹も立ませぬ。たゞ、それならばこのまゝ御歸りやれ」。

「歸れ？」

掛け合ひの一段落、言ツたばかりで雙方無言。たゞ蠟燭が規則立ツた浪を澄まし顏で炎に打たせて居ました。

「他言言ふのは」、窈子が「嫌ひでおぢやる。私の事ならうけたまはる所以おぢやらぬ。とくとく御歸りやれ」。

「事が濟めば歸れと仰やらいでも歸りまする。たゞし公にしろ、私にしろ、申し上げうと思ツただけは聞える

心でおりやる」。

で、覺悟を定めてにじり寄ました、簾子の傍へ。そして樣子を見る、見てもしかし中々に動じもせぬ相手の體。見るからが、おのれやれ、食ひ付きたい程の男振り！

「公の事も申しませう、私の事も申さいで。承はれば敷島の道に暗からずおりやるとの事、それについて御問ひ申しませう。死なず戀わたる心が哀か、戀ひに玉消えるが哀れでおりやるか？」

問はれても捗々しくなく。言葉より先に簾子の目は相手を下に見下しました。

「いづれとも申されますまい」。ても當り前な！

「いづれともとは？　同じと御言ひやるのか？」。

「同じではおぢやるまい。同じなら比べる迄でもおぢやらぬ」。

「ほゝゝ、中々」。

なか／＼取ッて掛かれません。笑ッて見せても先方は平氣、さすがのいちごもくたびれました。

變、妙、頭から尾までが全で不思議の塊り。このくらゐに寄せ掛けられたら些しはその心も察しさうなもの。ぢれッ……本當に小ぢれッたい。羽でむづ／＼くすぐられるやうな。何の因果か、その姿が目について／＼忘れられぬまゝ、敵味方の隔て心も曖昧の中に煩惱に消されたやうに爲ッて、出來ごゝろで切めてその人と只一夜しみじみと話しをして見たく、それでやうやく傍まで近づけば、しッ！、物思はせぶりな、何の事、さしむかひの奥座敷に、しかも泣き入りさうな蠟燭が只一本、それで膝と膝突き合はせても動きもせず、目ばかりが宛もいやしむといふ體で人をぢッて照らして居て！

「これも恥ぢたのだらふか」。しかし、膝の感覺でも分かる、簾子の膝は塵の飛ぶほども震へ動かぬ樣子。そして顔色さへ既に冴えていとゞ白く見えて、見て居れば居るほど顔がきりゝと緊つて行くやうな。

殿上の人たちとは夜深くまで物語りをした經驗も有る身、その手段を應用して、それで些しも甲斐の無さ。か

うして、かうして、それから斯う、行く途は有ツても目的には至れぬ不手際。今さら、迷ひの惡戲か、女は女だけの品格を高く持て自然の、眞の、淸淨な愛情を買ふのが專一との心も、無殘、ほとんど無くなりさうに爲ツて、遊女(うかれめ)か何ぞのやうな心がむら／＼と催して來るやうな心持ち。今までは、それでも、多少女らしい見えといふ思想も有りました。が、今はそれさへも無くなりました。

今となツてもつとも賴もしく思はれたのは風に揉まれる蠟燭でした。橫の襖の間から夜風は中々はげしく吹き込む、その夜風が今すこし烈しくば……あら光は明また滅、意地わるくも不思議に呼吸の根づよさ。

劣情もこゝに至ツて極まりました。身のまはりいづれも唯茫漠となツて唯見ぬ目にも鮮なのは窻子の顏、聞かぬ耳にも明きらかなのは太郎の聲——氣はほと／＼引き入れられるやう。

扨も身の傍には雌浪、大津浪！　今足を奪ツて迷ひの淵に引き入れるか、今身體を浸して煩惱の流に呑み込むか、こゝ窻子のために達不達の境目。さいはひに齒があるのが賴もしい(齒を切ツて)やう、かよわくも心のあるのが口惜しい(心がさわ立つ)やう、大道を照らす眞如の月、それも蠟燭と共に消えさうに爲ツたり、吹き立つたり……

たゞ無言、寂寞、明暗不定、それらがこの場の固有となツたばかり、——そしてやがて、あゝ劍よりも槍より怖し、羞を含んだためか、すこし脹れたやうないちごの目の上、そして粉がふいたやうな其色艷、しかもその人の身はやゝ橫になツてしッ！　衣の婆娑つきが目を呼べばその衣も蟬の羽ごろも——目を瞑れッ！　心を掩へッ！「上皮を剝ぎ盡くすのが悟り」——羽ごろもの薄衣を剝げば全くの裸體、裸體の上皮を剝げば既に茘枝の腸めいた血だらけな肉、その肉を毟り落とせば只一組の白けた骸骨——「達人は其原を樂しむ」といふものを。

唯怨めしいのは蠟燭の火、道念がまだ低いとて嘲るのか、人を意地めて慰み顏、刀を加へる夜風にたまらす

――あら今にも消えさうな！

第八

なぜ！　ひとしく同じ風、ひとしく草木、で、笹はよねいても芋の葉はうなづかず――やはらかく且あたゝかい天地をわざ〳〵鐵ほどひやゝかに僞るとは。「この顔でか」。でも玉の杯子底無ひ、別名は強面（つれな）の太郎。顔――眉の一文字、口の弓形――それも文武に通じたしるしを見せるのか、見るに從つて風采はます〳〵加はるやうな――戀と共に。

弓矢八幡、この月末までは元利とりそろへますからと顔までが秋の紅葉、鹿もどきに膝をりしき、賴んでそれで斷られてさへ心もちは佳くも無いもの。まして――兎に角――言にくいやうな思ひをもし、見せにくい眞似をもし、そして當ツてくだけても、扨膽んだともつぶれたとも付かず――否なものならとく〳〵と追ひかへしさうなもの、追ひかへさぬところを見れば――さてこれが自惚か。

畜生め、物思はせぶりな、風と言ひあはせて人をもてあそび顔の火影！　未練らしい、何のしばらくの時を惜しむ。吹かれたら消えるが潔白――いさぎよく。疲れ顏で片息を吹くのが能か、さて。しかし、なるほど――ああ「もの言へば……秋の風」、御所方もちとそれにかぶれて居るやう。

たゞ、それさへ無かツたら、たとひ胸に淨機は熟するとも大事無い筈。急にまぎらはした振りで燈火に近づきました。

「これは愛でたい器でおりやるよ」。

わづかの氣轉。返事をされなくても物ともおもはず、見るふりをして火を風の方に向けはじめました、風除をば横へ向けながら。

が、氣を付けられました。

「風……あッ……消えまする！」

人よりも火影がたふといのか、今はじめてこの一言。

もとよりと言はぬばかり、しかも恨めしさうにいちごは窺子を見つめてそれで笑をふくみました。

偸む様、進まぬ手で火を向け直す、しかしそれは僅の間、われとわが身がをかしいやう、さも器をながめる體で、右と左とへいろ〳〵ひねりまはして居ました。が、今さら無情、あやにくに、穎みきッた風もすこし弱ッたやう、光はつよくふるへもせず……

術計が盡きたのではなくて術計をつくしました。いまさら考へんは、のこりをしいやう、最前は何うにか角にか言葉をまうけて相手の側には近づいた、それでたゞ火影に心がうつッたため、折角のところを離れて、そして今はまた燈火に穎みが無くなりました。これと知ッたなら立ちはなれなかッたものを。それが未練ながらどうも口惜しい。

相手の側に近づいて身までくづした、その結果はわづかにしろ、それまでの苦辛はいかほど。遠くて近い間中、そして矢張り内心には何處やら極まりわるさと氣味わるさとが有ッて、「澁かろか知らねど柿」、蜜は取りたさ、しかし蜂は否。そこを忍んで、絕えず——絕えず——すこしも絕えず、疊の目一分づゝ、呼吸一つだけ、膝を進ませて次第々々に近寄ッて、可なり矢頃になッて急に大きく取ッてかッたその辛勞、人事なら誰が爲やうか。疊一分。呼吸一つ、それだけ進めるさへ千慮萬考、さとりは爲まいかと危むからには或は蚊に食はれたふりで身をもだえてそして一分すゝみ、咳をするふりで肩を搖ッてそして一分。それが今色も香も無く畫にかいた餅。なまじひの火影、なまじひの夜風、人を……釣りだして冷笑ふ聲ばかり殘したやうな、今となッて舊のとほりの座にはかへられず、また聲も無いのに山彦をつくられず——よし舊の座に立ちかへッたところが、まだ〳〵先は長いこと。さて何したらと思案に思案、苦勞に苦勞——苦勞、親たちに苦勞をさせる苦勞。迫られゝば鳥はついばみ、獸は食むと荀子だか誰だかは言ッた、そのとほり、路が谷まッては谷を飛ぶ勇氣も出ました、小意地のわるい火

影、恨みは唯それ。今ひとたび器を愛でるふりをしてその途端、もし風も來なかツたなら吹き消して仕舞はうと――てもあツぱれ趣向。

その仕度わざと目をば火影にこらしたのがやゝしばらく、で、もう宜い時分、何の意味も無いものを意味ありさうな見せかけ、前こゞみになツて燈火臺をじツと一目――そして一寸かたむけた小首――また立てなほした首――さらに曲げた首――その間始終目をばはなさず、そして出放題の、他にわからぬやうに呟いたが二言、三言、やがてまた近よりました、燈火に――燈火、こればかりは近づきにくゝもないツ。

手をさしのべて――しかもそれにすら猶腕の邊まで肉を見せて――やゝ臺を引きよせました。こゝで一呼吸、咳をするふりで吹き消すのは最早勝手。いざ。いざ。あはや今一刻が闇で四邊は黑白もわかぬ闇。一吸、呼吸をば吸ひこみました。これがやはらかく出るのとつよく出るのとが燈火の命の生死の境。誰が輕く……いざつよく吹かう。その咳！

が一思案、わすれて居ましたが、身をかへりみれば窟子とすこし隔ツて居ました。今さら迚もの事にと完全を求める心が盛り、折角に出かゝツた咳をさしひかへて更にまた附けくはへの手段を用ゐました。

しとやかに頸をすこし横にし、下から窟子をのぞきこむやうにして、

「何と申す塗でおりやる？」

塗をたづねてもまだ／＼冷淡、――

「存じませぬよ」。

「さらば是は何形でおりやる？」臺の蒔繪の雁金を見せました。それが手管。それを持ツてそろ／＼又も／＼相手の側まで近よツて、そして身を横にして臺をさしつけました、左の手で持ツて、右の手をば窟子の膝がしらへ持たせて。

「雁金でおりやる」。

答へは爲ました。が、今まで忍びに忍んで居たこと、

唯ならば腕づくでも逐ひはらふところ、是も外道が來てわが道念をためすことゝ考へては強ひて疎む氣も起さず、一心心をば靜めて居ました。それにつけいる姫のありさま、觀念、たゞ一心の清淨無垢！　惡魔、外面如菩薩の姿をあらはして人を六窓の猴あつかひ……にくさも憎さ、しかし憎むのは一歩あやまてば愛するとなる、すなはち憎む心を兎に角おこすのは矢張り道心のかよわいしるし、目蓮も慈愛を思つて路に蜂にも螫され、蔓草にも縛られたとか、それにくらべれば何の血を盛る嚢ぐらゐ！　方寸の海、煩惱の雲は湧いたにしろ、煩惱の風さへなければ……

主の心しらぬ舌だけは早く動いて主のために惡魔を叱りのけやうとする、その呼吸、からく幾度もとりとゞめられました。見れば、鐵か、石か、これとも馬……馬鹿か(勿體ない)、まだ膚たゆまず、目まじろかぬ、おのれ、もはや此方の地位は充分、それ「闇は佛を外道に爲る」、惠の安心決定も川の嫂には假面をかぶッた始末、今はこの孤燈一つを消して仕舞へ。

嗚呼、この一室の空氣、無殘な獸と聖者とがもろともに吸ッて居ました。霧と共に紫雲がたなびき、鳳凰と共に庭鳥が棲みました。外面の、年たてば朽ちる容色や血肉をとりのけてたゞその心を圖に、もし現せるなら、現したらさて如何。「もろともに一味の雨……松は綠、藤は紫」――たとへればこの一間には泥中の蓮花と玉をあざむく露とをあつめてありました。

いざや孤燈！　そればかりが怨み骨に入る敵。猛惡な豺も松明を見ては小兒にも掛からぬ、まして此處獸心の、なまやさしい、嬋娟の妖獸、それが先程から銷けさうな目を付けた孤燈。あはや命は旦夕。主のために主の夜を守る心づくしもやがては一風――つれなくも光りかよはくて三慾を燒きつくすには足りないのか。今はと覺悟していちごは呼吸を一吸。右の手はます／＼つよく、しかも柔く相手の膝を押したまゝ。氣の毒、さしとめる氣もつかぬ窟子の聖者。

で、かツふ！　咳一聲。無……無殘、ても思ひきツた、燈明は消えくさツて？

で、闇？　驚……あら、膝に加はる妖獸の手の生温い――ちッ？　斫ツぱらつて仕舞はうか。

第九

今がくるしみの極度、くるしいと思ツた今までが却ツて戀ひしくなりました。さて何うしたら宜からうか。方寸の海、そも／＼煩惱の風は？

くるしさは雙方おなじ、たゞ性質がちがふばかり。一方は防ぐくるしさ、一方は進むくるしさ、「どうして目的をとほさずには……」、「どうして目的をとほさせて……」

「こや明りを」。と呼ばうとした窈子の聲にさきだツて誰やら來る足音？　困りました。誰が。二人とも。一方は瓜田の靴の思はくをうれへるため、一方は目的の達せぬのを氣づかふため。

「誰か」。窈子が。しッ、出さずともと姫は胸一刻み。思ひはからぬことゝて來た人は返事もせず、やゝ部屋まで來ると、面妖、そこは眞の闇。

「誰か」。すこし荒くなツた窈子の聲。

では窈子は其處に居る譯、ならば姫は？そして姫も？これは／＼。たぢろいて返事も出さず……

「誰か」。窈子がまた一言。そして程經て「こや明……」「り」と言ひきらぬところ、聞けば婦人の、紛れもないいちごの忍び聲、「し……しづかにッ。明り召さずとも」。

これは僞たり、どうしたこと。平生からさて假面をかぶツて居たのか、窈子。とは知らなくて堅いと思ツて……しッ、殿にさしあげる婦人をおのれが／＼。

と思ひとツて仕舞ツたのはすなはち今來た人。その人は誰。名を聞けばおどろきいる？　義政の昵近漆實左京。左京は出かゝツた返事を急に食ひとめ、やがて拔足差足、――平常から窈子と懇意な中とて――勝手から何氣なく手燭を借りて來て、部屋で出あひがしら、行きあたツたのは卽ち窈子。同時、部屋へさし入る光り、それを

塗る電火の目光、見れば、さてこそいちごも居る體。

「たッ……太郎どの」。左京が火を籠めて、そして睨みつけて。

さすがに意外、

「これは漆實どので？　ようこそ」。

「ようこそ？　なで、ようこそ。さぞ氣の毒でおぢやッたらう」。そして冷笑。

さてはと窈子は察したものゝ、しかし今の場合益なく言ひとくのも何やら付穩なく、何氣ない體で答へました。

「いかで〳〵。いざ此方へ」。言ッていちごと同じ部屋に案內はしたものゝ、左京は仲々挺子でも動かず、

「御かまひやるな。御むつましいところを妨げる事も無い。このまゝに歸らうぞ」。手燭を下に置き、「この手燭消すとも御心まかせぢや。消しやッたが大事おぢやるまい」。

充分にそれと疑の目星をつけて、鼻であしらひながら冷かしました。

「すこし御待ちやれ。御出でやッたは御用でおぢやらう。さゝはりもおぢやらぬ。すこし、すこし」。

「あ、いや、いちご御の返事聞きにまゐッたのぢや。したが、思ひつきませんなんだよ」。

「何をでおぢやるか？」

「知らぬ顏御爲やるな」。

「何を知らぬ顏で？」

「胸に御尋ねやれ」。

思ひついたやう、更にいちごを呼びかけました。

「いちご御前。でもいつも嬋娟な。したが驚きました、和御前の手の內には。これ、窈子どのと……ならば、この左京も推察いたいたぞや、殿へまゐるのは御嫌でおぢやらう――契りこめた人もおぢやるからには」。

きッと詰めよりました。が、いちごは無言。うつくしい眼をぎろりとさせて唯左京をふりかへッたばかり。

「これ、や、いちご御。東山どのにまゐるは御いやでおぢやらう」。

また無言。武者氣質のあらくれ男、左京はすこし急き込み氣味つといちごの側へすわりました。

「これ、返辭を――人にばかり物言はせて――御言ひやらぬか」。

しかしむづ／＼動き出す。何か言ひさう。窈子は手に汗。

しどけなく坐りなほして、顔にかゝる後毛を輕くはらひ、おそろしく粘る樣子の唾液を呑みこんだ樣子。

「和主(おのし)は誰か。名も名唱らずに人に物言ふ作法がおりやるか？」。

灸處の一鍼、左京もつまる。

「これは／＼、輕過ぎまひた。御ゆるしやれや。これは漆賓左京光厚と申しまする」。

知ツて居ながらそらとぼけ、

「何處もとの方でおりやる？」

ぢれツたい、わかツて居るくせに。とは思つても最初の一鍼懲りて左京はおめ／＼と、

「東山どの昵近で」。

「昵近衆？」そして淋しく冷笑ひました。「作法を知らぬ昵近衆を東山どのは召しつかはるゝものでおりやるな」。

「ほゝゝゝ」

苦笑する左京をじッと見詰め、

「今何を御言ひやッたか、聞きそこなひました。御用でおりやるか？」

「御聞きそこなひ？」

今さら話しの道の順も無く言ッた今までの亂暴な言葉が怨めしくなりました。あらくれ武者の習とて、沐猴の冠、鐵漿はつけても、交際には疎く――たゞ胸はごたごた、すこし思案して居たものゝにはかに立ちあがりました。

「いや、用はまた申さうぞ。思ひだいた事がおぢやッた。このまゝに歸らうぞ」。

「何として？」窈子が。

「何として？」いちごもまた。

さながらの夫婦。で、いちごは何やら心うれしいやう、左京は燃えたつた心、穗にあらはれるのを押しかくした振り、とつかはと歸ッて仕舞ひました。

が、歸たのが窟子には少し心配の種でした。漆實左京は義政の昵近、無骨ながら性來が正直との事で義政の氣に入り、土民から這ひあがッて一呼吸に鐵漿をつける身分となりました（足利時代には武家が大抵鐵漿をつけました）。なぜ無骨でいゝかと言へば、紅粉で目を突く中、ちかごろ茶道に凝ッて薄ぎたない茶碗小鉢さへ却ッて珍らしい處、そこで素氣無い田舍漢——其顏の赤黑く、髯だらけな工合が掘りだしたまゝの古代の甕に似て居るとて——たゞそれだけでの御扶持。路傍の草も病によッては藥。打物取れる手練は無いかはり左京は漆細工の鑑定には中々立ちこえて居るといふのが氣に入ッた基、虛か誠かとの下馬評は命二つ有るものが爲ろといふ世の中、「いかさま、それでこそ名が漆實」で持ちきッて、近頃肩で風を切るほどの出頭。生來が嫉妬。今までに嫉妬で妻を三人まで逐ひまくり、それが足らずに隣屋敷の事まで口をよく出してあたら温い夫婦中に水をさすなど、金神の精靈見やうと評さへあッた程でした。

その人が胸をわるくして歸ッたからには口さがなく殿に言ふは必定。

と人知れず思へばさすがに心よくもなくなりました。左京が臆測の棕櫚箒を鬼に見て告口するからには殿が不興をかもすのは知れたこと、すなはち窟子自分をにくむ、そしてつまるところは勘當か、事に因ッたら刀の齒矢（はくそ）。

もとより身に覺のないこと、赤心は氷と共に淸淨潔白、それをあやまッて告口をし、またその誤まッた告口を信じたとてその者どもを疎忽と內心であざわらッてさへ居れば何の手もなし、まちがッて無實がわからなかッたらそれまでのことゝ今までは信じても居た、その念をやぶる氣は無いながら、猶多少は當惑の心持。

左京が歸ッた跡にはいちごが流石に手持無沙汰になッ

て茫然ともして居る體、「おのれが來たばかりで詰らぬ目を……」とその姿見るにつけ、憎む心はこりずまに現れる、その下直に「あゝ瞋恚」と觀ずれば、さても／＼心といふものは偏頗な物、入れかはッて出て來るのは「愛」といふ情――いや、むしろ「敬」といふ心。

窟子自分さへ突然いやな左京に肝をひしがれた時には可なり心もざわ立ッた、そこを、如何に利かぬ氣の女とは言へ、たぢろぎもせず、まじ／＼として居たいちごの風體、恐ろしく度胸のすわッた事と――思ふといふのは即ち感じたので――あの顏でかと見詰め出せば、凡夫さすがに肉の美はまた骨とは格別のやう、殘燈に高低をうつし出す目付や口の邊が見るまゝに怜悧な相をあらはして居ました。

外にもう一つ。窟子自分がしばらく左京に荒肝をぬかれた場合、そこへ姫百合が風あざけり顏にすねて一刻の夏を殘した、その優美なところ、窟子の究厄をば一寸――言はゞ――救ッてくれたやうな譯。これも、思へば有難いやう。

その有難いやうな人、その怜悧な人は五枚冑の首打ッたため千百の加增を賜はる紫紋（足利將軍は白衣紫紋の服を着て居ました）では無くて、紫紋のために側室の難題を言ひかけられた絕世の美人！

渡殿の秋、露にうなだれる芙蓉のかよわい身、で、誰のため、主の威をかぶる翁丸もどきの荒ものに蹴ちらされさうなのを恐れる體も無かッたとは！

窟子どの／＼と天地億萬の男子の中に唯一人を拔いてくれたその、その、その心根！

が、「これ！」と肩を摑むやうな神禮の銳い聲も何處となく聞えました。いちごの顏と、見る間、引きつゞいて心に浮かぶのはすこし似た美少年の勢至菩薩、また大聖威怒王の前立のその一人の面影。「あゝ智慧の火で煩惱を燒きつくせ」。增惡を心に置くのは元々迷、しかしそれに引きかへて愛着をもよほすのもまた迷。おもんみれば心は空、無心が十全の平を得て居るものを、それ、「盈つれ

ば水もこぼれ、盈たなければ瓶もかたむく」とか、前人は經歷を智識として後世に殘してあるものを、何の迷を寄せつけやうか。

で、いちごを憎むのもわるいが、また愛さうとも思ふのは惡い、とみづから戒め、みづから叱る。しかしながら、叱る心と叱られる心とは別なものか、こゝに至ッて人界と禽獸界との區別もなく、而も萬有がすべて尊くもあり、尊くもなし、叱られる心は叱る心を怨みもせずにそれながら叱る心を押しころさうと悸くやうな。「なに惡念をつぶさせやうか」。善心に力付けるのはやはり善心――現の界に彷彿として偈文が神通を得て阿吽の形相をも見せるやう。

その内にまたも摺りよッて來た――さ、何と言はう――惡魔？　尊者？　いや、その美しい陰性の骨と肉との一塊。女性はまたも言葉を開き、

「思の外の事でおりやる。かうなれば兎角詮無し、ぬれぬさきこそ露をも……ねぢけ者の左京が東山どのゝ御氣色をさわがせるのは必定、もう御言ひときやる術はおりやるまい」。

氣の毒とも言はず「言ひとく術も無からう」とは何の事。問はれた言葉には何とも答ず、思ひなほして一入言葉をおだやかにし。「もはや夜更、御かへりやれ」。

第十

雨が地を固めていちごは不圖窟子を試す氣になり、はやり切ッた煩惱をしばらく自身賺しました。なぜ窟子ぐらゐなものが義政などの手について、而もいやしい務をして居るか。それ是聞きたい事は山々、そして特に氣に掛かるのは今左京に疑はれた事を窟子が苦勞する樣子、それにも子細は有りさうな。その疑念を晴らすつもり、「もし」と一聲は言つて索引いては見るもの、又かと言はぬばかり相手は感じもせず、更にそろ／＼前置のやうな事を持ちだすと次第々々に窟子の樣子は變はッて來ました。

いはゆる地藏の顔も三度、忍べるだけは忍んだつもり、が、今は堪へきれず、何かべちや／＼言ふいちごの言葉腰を俄に中途から折りました。

「いちご御」。

聲と共にすさまじく爲つた見幕、いちごも流石にぎよツとしました。見れば窻子の色に蒼味がゝツて來て、幾度も唾を呑みこみ、呑みこむ樣子、目がしきりにしばたたかれて居ました。

「まだ……なぜ……御歸りやらぬ。用がおりやるか？」

さア困つた難問、しかし、思ひきれ！

「用はおりやらぬ」。

おりやらぬ、ぐツと込みあげる肝癪の蟲をじり／＼と押しつけて、それでも言葉の怒りを薄く現したつもり、

――

「おりやらぬなら疾く御歸りやれ」。

「今？」

「もとより」。

あゝ決心。いちごの今までの辛苦は灰。聞かうとの是からの望みも空。けれど恍惚娘（おぼこ）でもなし……「劍術の極秘は風の柳かな」、あらい風をばかるく受け、

「歸れなら歸りましやう。なれど、もすこし」。

「叶ひませぬッ」。

「すこしも？」

「ちッ！　さ、疾く……」

「人ッ」、いちごも些し胸に來ました、「何でおりやる？」

「何が」。

「その言ひざまは！　物に程は有るもの、御心得やるか？」

「心得……無禮な人に何の心得が……」

「無禮とは？」柳眉も逆立つ。

「無禮ではおりやらぬか、人を欺いて？」

「欺いたのが無禮でおりやるか和主を思ふて欺いたのが？」

「他言聞く耳持ちませうか。是でも御歸りやらぬなら詮はおぢやらぬ」。

「どう詮が？」

「腕づくしでも」。

「腕づくしでも？」

「御歸し申す」。

床に何の咎、手が痛むまで床をぴッしやり、

「さ、御歸りやらぬか？」

仲裁の無い喧嘩、意地にもつのるばかりでした。かう爲ると、いちごは挺子でも動かなくなるのが性質、もはやびくとも爲なくなつて、

「これ、御歸りやらぬか？」

「篛子どの」、極めて平氣な調子に立ちかへり、「腕づくしで御歸しやらうとて女子の一念歸らいと思へば、喃、篛子どの……」

變にすこしく冷笑しました。

「篛子どの、な……鱠になッても」。

この美しさは何うだと言はぬばかりの顔付、後毛をわざと鬱陶しさうに口へ噛みこんで、そして目一杯に涙をためて。

「鱠になッても歸りませぬ。歸らせうと思しめすなら歸らせる道を御履みやれ」。

「道を履むいはれおぢやらぬ」。

「おりやらぬなら歸る道もおりやらぬ」。

「全く？」

この上に餘儀無いこと、腕づくで抱へださうが、連れださうが此方の勝手、いざと稍心を決した折も折、取次の扈從があわたゞしく馳けて來ました。そして何を言ふかと思へば、あら、天か、命か、この夜更に東山殿が突然臨御になッたと言ふ事。

油をかけて火に炙られる心持ち、左京が告げたゝめか、どうか其處は分からぬ、しかし分からぬだけ胸の苦勞は一入でした。

扈從に聞けば東山殿は先觸も無くて來たとの事。かへ

りみれば身は小身、一疋の垣守、護衛の時わづかに殿を見る身分、其處へ俄の來臨とは何うしても譯の有ること。

思ひまはせば苦痛は一入、茶山寺のいちごを望むとの殿の命令を簾子に傳へたのは卽ち漆實左京、それが辯解も聞かず、歸つて行ッて、そして其儘殿に言上したものなら、それこそ大變。

矢を射るほどの間にめぐりめぐッて是等の苦勞が起りました。いちごと云ふ考へは心にのみ殘ッて其人は傍に居ながら目にも注まらぬやう。扈從に樣子を尋ねました、せわしく、そしてせわしく。

「御先觸無くてぢやな……」「は」。「直に御入御？」「は」。「御伴は？」「漆實どのと外に二三人」。

無殘な！ 直に御入御とあるからには更衣の用意も出來ず、いちごに言葉を交へる事も出來ず――はッし？その內、既にどや／＼いふ人聲。

具足のまゝ出迎へました。出迎へて殿をたしかに見れば見る程氣味わるさは又一倍、わづかに廣い方の書院に案內したのが關の山。

勝軍の手柄あらために死首にしろ見せられぬのは武士が極りのわるい第一、それと違はなかッたのは此時の簾子の心持でした。恭しく上坐に殿を進めて口誼を述べ、その間わづかに左京の面付に目を配れば果して察しのとほり餅ならば揚げたばかりと言ふくらゐ熱ッて居る鹽梅、そして殿はと氣を付ければ寢起と見えて服は白襲の無紋に髮は亂鬢、常の氣象柄とて深い子細が有りさうにも其顏には見えぬものゝ、兎に角寢起きで、而も小身の家へ、しかも先觸も無く、而も忍びで來たとは余程不思議な譯。隨身は殘らずでやうやく五人、左京の外には小坊主が一人と、帶甲の武士が二人でした。が、いづれも借りた威光に太刀の金物を眼と共に光らせて、廣くも無い肩をわざと猪首に怒らす樣子、一から十まで氣味わるし――たしかに此首最早無い物。

中々に覺悟は定めてすこし頭を低れて言葉を待てば、やがて左京が膝を進めて、

「太郎どの、嘘は申されまい」。
「嘘？　何といたしての」。
「急度？」
「弓矢八幡」。
「さらば……いちご姫は何う御爲やッた？」
事實左樣なら疑はれはいよ/\言譯は出るもの、事實左樣で無くて疑はれてはほとんど言譯をするのも馬鹿馬鹿しく、
「どうと申して」。
「いちご姫とはいつから語らひ初めなされた？」
打つ槌は外れるともこの推察ばかりはと果たして思ひこんだに違無い左京の言葉、聞くだけでも腹は立つ、が、御前と思へば些しひかへて、
「語らひそめたとは？」
「御わかりやらぬか？　それいちご姫と……太郎どの、左京が見たのを御忘れやッたか？」
「わすれませぬ」。
「嘘は申されまい」。
「申さんでもの事」。
「ならば」、殿に御免の目禮をして居丈高になりました、「鼻つまゝれるのも知れぬ闇に和主といちご姫とたゞ二人……」
窈子もすこし急き込んで、「たゞそれで然う御言ひやるのでおぢやるか？」
「もとより、何で。思へば左京が脱かりまひた。殿の仰をうけたまはつて見ん事、いちごを連れて歸るは太郎どのゝ外あるまいと常から思ふたのは欺かれたので、何の横奪……これ、畏い事とは御思ひやらぬか？」
いづれ此樣な事に爲らうとは思はぬでもなかッた、それで知らず/\の中に深い穴にはまッて仕舞ッた忌々しさ。が、それとても、思ひまはせば身から出た銹、李下の冠、潔白を知る者を吾自身より外に持たず、たゞ天にまかせて命を待つ心から言へば今更斯う爲ッたとて氣にするにも當らぬ事。

辨解を爲やうか知らん。爲たにしろ、辨解の力の利くのは相手の心に辨解を迎へる考が萌した時に限る物。殿は何うにしろ、角にしろ、左京の邪推の熱は今のところ火と燃えたつ、其處へすこしばかりの言譯の差水、何で益に立たうか。言譯は決して益に立たぬ、言ふだけが不見識、と思ひ……さだめるのは又一修業。その下から言譯の言葉は理窟といふ假面をかぶッて混みあげても來ました。「言譯ならわるいが、理窟ならいゝ」。「左樣か知らん」。有りの儘を言ふのが理窟で、有りの儘をつくろふのが言譯、しかし、有りの儘を言ふとなれば、多少の心中の汚穢もまた言はなくて爲らぬ物、受けた儘の身體、貰ッたまゝの魂、鳩のやうに温和、天女のやうに潔白な小兒、みどり子ならいざ知らず、既に人間を魔道へ陷さうとひしめく七情の奴隸と爲ッて居るものが何うして天地に恥ちぬと言ふところまで有りのまゝに言へやうか。

前人も既にこの位な苦しみには逢つた事、たゞ自分のみで無い、と思へば聊か勇む心も起るやう。

が、おさへても／＼、こりずまに現れるのはいちごの事、わが心が堅くなければこそ魅込まれもし、試されも爲た事と心で心をすかしても(むしろ)賺甲斐は有るやうで又無いやうで、その花を欺く、そのやさしい聲の出た、その甘えた言葉の湧いた唇が目先にちらついて、その戯れた、なまめかしい、厚かましい、涙含むだ目が至るところに現れて、そして、不思議！　たゞ一つの目、一つの唇と考へれば極めて、極めて愛らしいやうで、またいちごの目、いちごの唇と思へば、最も、最もけがらはしいやうで。何が無し、胸の中は出入の混雜、流れこむ眞水もあれば、注ぎでる鹽水もあり、花もあれば芥もあり、風もあれば雨もあり――で殿の顏、左京の面が殊に深く物思はせぶりな目に浸みるばかり。最初から啞のやうに無言の殿、しかし狙を定めたやうにわが顏を見詰めて居る殿、そしてその見詰める工合が氣の故か、嘲り顏、怒り顏、また嫉み顏を帶びて居るやうな。左京の方、これは言ふにも言はれぬ、何の事は無く、たゞ自分が自分の

女房までも奪られた風、持前の嫉妬は此處から試驗を經るといふばかりの體で後詰が後詰を産んではえい／＼聲して押しだして來るやう。

しかし此儘にぐづ／＼して居れば終に疑を事實とされて——重い罪。で、追放か、死！　どちらが好いものか、その二つの中では。

追放は長く恥辱を嘗めあぢはふ物で、死は一寸嘗める物。三寸息絶えれば萬事休す、討死した正成より死を吝んだ景清の方が忠義に於ては却ッて深い苦勞をしたもの、もし正成が覺悟の上で死んだ事なら、死ぬといふ事は後から考へて、人間の天賦の未練、もッとも傷ましく、惜しく、心の殘る物、で、死ぬ人をも可哀と思ふ、しかし、つら／＼考へれば死んで仕舞へば理窟の無い話。胯をくぐる時に韓信が相手の少年を斫りすてゝ、そして自分も其處で殺されて仕舞ッたなら、俗人はそれを武士は食はねどもの比喩どほりに褒めるかも知れぬ物の、しかし信の身に取ッては此場合には死ほど樂な事は無かッたもの——死んだ後は漂母に食を乞ふ世話も無くて後の人は自身の追想の哀を直に移して死んだ人にかぶらせ、死んだ人の情をば哀と看做して仕舞ッて、勝手次第に泣いたり、笑ッたりする、それ思へば可笑しいやうな。天の命を受けて天の命の儘に、自然もろとも此世を去る、いはゆる夭折。しかし分を盡くして死んだからには五十七十になッて死んだも同じ事、心は平和にたのしんで、長く永眠の里に眠るのが理。

考へれば自分に分を枉げた事も無ければ、天の命を損ふた事も無い、それで是からもし疑はれて殺されたにしろ、吾に何の痛苦も無い譯、たゞ大本の通情、「死を嫌ふ」との迷が何うしてか洗ひおとされずに殘ッて居るものの、夫も刀三寸の走り、紐一分の緊りによッて、目瞬もせぬ間追ひはらはれて仕舞ふもの。廣く「死」と考へれば恐ろしいやうなものゝ、しかし、更に思ひめぐらせば、死んで息が絕えると言ふ間は眞のわづかの時間、それまでは唯其支度ばかり、たゞ、それ故、刀三寸の走り、紐

一分の緊りだけの間。

いッそ追放されるとか、獄に下ッて大赦の命を待つとかで長く恥辱を受けるより、むしろ悟れ！　死んだ方が。何も無理に死にたくも無い。赦されるものなら赦されたい——先方にそれだけの明が有ッて。が、赦されぬものなら、それだけの事、死の方がまだまだしも。

物も言はず、口を封ぜられ、眉は低れて、百尺の松がこゝに根をさした樣子、折々に左京と殿の方に目をきらめかせるばかり、窈子は正しく座ッたまゝ——床も腐れろ。

障へが無いまゝ左京の邪推は募るばかり、推察が事實をたしかめて、そして宛もそれを承諾させやうと思ふ體で一言二言言ッては殿を見て居ました。最初から無言の殿、源氏方か平氏方か更に分からぬ風體、が、わが望んだ女を横奪されたのな凡夫として心よくも無いもの、その心を義政がもし持つものとすればたしかに左京に左袒して窈子をば疎んだに違無い譯。が、大抵の人なら第一不審と目を付けるところ、即ち窈子が別に辯解をも言はず、たゞ冷笑顏で左京のあたりをじろ〱見て居る樣子、それが義政の心に注まッたか、どうか、胸を映す鏡も無いことゝて……

ところへ、なまじひな、へだての蒸襖がすこし明いて其間からいちごの顏が出ました。一同に目を其方へつけた主從五六人。

よく考へればいちごが此處へ顏を出さうが、出すまいが、胸をすゑた窈子には何の痛さ痒さも無いこと、しかし、突然……おやいちごが……何故……見た當座暫時は窈子も五寸釘を胸。

見る目は同じでも、見る思はいづれも違ふもの、殿や左京はどんな氣で今襖からあらはれた紅顏を見たものか。

蒸襖から半ば顏を出していちごは一寸、簡略に禮をしました。で、忍びごゑで窈子を呼びました。「太郎どの」。

さも〱打ちとけた體。ても無情な！　今呼んでくれずとも——見ぬか、左京や殿の顏色、いよいよ先方の邪

推の根は固まツて、肉さへもわなゝく體。
　聞きとれぬ窟子の振にいちごは又いらだつ體、さてそれが貴人の前での禮か、相變はらずのしどけない體で而もする／＼と書院の中へ入ツて窟子の傍まで――己！と睨む殿や左京を尻目にかけたまゝ――さしよりました。
「太郎どの、ほゝゝゝ」。
笑ふとは何事、情無い。そして、あら鎧の袖も美人に取られる運命か、音のするまで引かれました。もはや知らぬふりも出來ぬ、でもなまじひの繕ひ、
「何でおぢやる」。故らに改まツて强顏に。
「何で？　東山どのとは彼方でおりやるか？」
「は」。仕方なく。
見るからが嫉ましく、熱鐵を呑む心持、こらへ……こらへたものゝ今早たまらず左京は鯉口に手を――見て扈從の武士もすはと手に唾。
「いッちごッ！　御前……憚……」
「しッ！」
　今はじめて義政が口を開きました。左京を制して、いちごを見て、そして微笑――何か思慮ありさう、
「いちごか、變はらず嬋娟な」。
言はれても爰ぞといちごは極めて輕く禮しました。嬋娟と言はれたのに答へる微笑、そして何喰はぬ顏、……
「無禮いたしました」。
「何が無禮。さて窟子に所用あツてか？」
「是ぞと申す所用もおりやらぬ、たゞ御末につらなりたう思ひまして」。
「末にとは？」意でむかへて聞きとがめました。
「ほゝ、御末で御物語を承らう心で……」
言ツて左京の方へ向きなほりました。
「左京どの、先程は。これは如何、なぜ御返辭なさらぬ？」
「何ぢや？」左京がするどく。
「何ぢやとは……しッ、また作法の無い」。

「又とは？」馬鹿に手玉に取られました。

「何で」、口をつきだして一際聲を高め、「おりやる」。わざと淩みるやうに嘲ッて。「窟子どの」、また窟子の方を向き、「御心づかひなされな。妾が何より證でおりやる。喃左京どの、さま〴〵の御疑ではおりやッたが、それには確な證が有ッてゞおりやるか？」

「無くッて！　暗闇でさゝやき居ッたらう」。

「さゝやいたばかりが證でおりやるか、殿にも御聞きの事、さゝやいたばかりでそれは言とれまするか？」

「たはけ！　猛々しい、口さかしう言ふても手に乘らうか！」。

もはやいちごは聞かぬ振、

「御前で斯う申すは畏れも入る事。されど眞心でおりやる、眞心では如何にもいちごは窟子どのを戀ひしたひました」。

「そッれ」。左京が。

「待て」。殿が。

「慕ひましたが甲斐はおりやらぬ。今宵も人の無い闇で彼是と言ひましたが、露は尾花の心を思はず……」

舌だるいこと、よく言つた物。よもや是程とは今が今まで殿も左京も思はなかッた、その矢先常の深窓の姫と思ひこんだ目的が外れて、そして呆れてかへす言葉も出ぬほどでした。

姫はます〳〵語りすゝむ――

「禪とやらを修める人とて御意はまた愛づらしいのでおりやる。迫られて動かぬが眞の丈夫、妾も窟子どのをばこよひ始めて丈夫と知りました」。

あまりな言草、義政も口を入れる氣に爲りました。

「さらば窟子の妻となるが望ましいか、東山へ來るは否か？」

こゝぞと云ふ見幕、膝を進る左京を睨める、「東山へ？」いちごが、「東山へも否ではおりやらぬ」。

「さらば窟子を思ひきつて？」

「いえ、窟子どのをも思ひきらずに」。

「二道かけて？」

「二道かけて」。

よし昔は地下にしろ、今は路傍の松も東山殿に向いては寢轉ばぬと言ふ程の權門に對して、あられも無い、かよわい身が傍若無人。何に目的が有ッてか、唯義政をもてあそぶばかりか。酌みわけられぬ人心、聞く者どもには更に分からぬ、窟子さへ同じ樣。年も行かぬ十七八の小娘に髯黑の男が散々に嬲られたには違無い、が、それにして其氣象、常から柔弱とあなどッて居た公卿の中には叉めづらしい事。と思ふだけに義政は急に立ちも去りかね、また其儘居るにも居かねるやう、むしろいちごを妾にと言ひだしたのが一寸氣はづかしくも思はれました。

當つて味を見て得意、義政もこの位な人かと窃にいちごがは心をも休めた樣子あまり口數も利かぬ、多少は持前でもあらう、が、五十男が、それでも、見得をするのにちがひは無い、既に見えをするからには、薪が有ッて火は點く物、下地が有る上は此方で何う爲やうが……

窟子の風向がやゝ緩くなると同時、むら／＼と催して來たのは霹ともなつた勤王の心。これが豫ねて聞く義政かと思ひこめば思ひこむほど——あゝ今夜は得難い夜、おのれ、その警固も手薄な。

*　　*　　*　　*　　*

第十一

かりそめにも將軍、どんな鋭い人かと思へば案外な、それ程でも無い義政、品評が見くびりに傾けば他との比較は直に立つ譯。

この位の人物、如何に先祖の非道の餘光の御蔭は有ると云へ、大内の舍人にさへ此くらゐの人間は有る事、殿上人と比べても何の其處に甲乙が有らう。無い。で、時世とは言ひながら鴉が雉子の皮をかぶり、大鵬が燕雀と共に棲むとは！

綾か無紋の寢衣、禁裡では——申すも勿體ないが——晴れ着にもしさうな、それを着くさッて煕で家人どもを

八郎の弓勢をのがれた鶴でも義政の一睨みには落ちるとまで世の阿諛が言ふ殿が今宵にかぎり四五人の伴――で如何に東山は一足の處とは言へ――忍びあるき爲るとは珍らしい事。もし、萬一、その命を狙はうと思つた事なら今夜などは洵に――春が何――この秋の今夜が實、實千金！

あゝ武藝を修めて居たら好かッたものをわれを愛して望んでくれた處は骨が枯れても有りがたい、公卿の息女を望みくさッた處は七代かはるとも口惜しい、今面會してもわるく高ぶッた――その癖それ程の人物でも無ささうなのに――氣色が忘れられぬほど癪にさはる――それや是や、嗚呼武藝は心得て置きたかッた。

千里の川は唯その源だけを絶ッただけで涸れ盡くせは爲ぬもの、義政一人をころしただけで足利の政府がそもそも何で轉覆するもの！

が、今の處理よりは情の勝ッたいちごの事、一目見て感じただけの心が厚く分別を埋めて怨みをのみ募らせま働らかせる偉大借上、人ッ！　たゞ見て居られやうか。

よく考へて見れば自分は今やゝ蕾の花の年頃、しかし澆季の世に生まれて冠の身が履ともされ果てた始末、この先き優柔な公卿が何で頼みになる事、元弘の昔に盛りかへしてくれる楠のかをりの跡も無ければ削ッた櫻の匂ひも無い世、うか／＼と生き永らへて居るのも是ぞと言ッて目的も無さゝうな事。

指を折ッてをさな馴染、共に竹馬にのりあッた諸卿の姫たちの事を思へば、かどわかされて行き方の知れぬのもあり、犬武士に辱かしめられて死んだのもあり――幸に自分ばかりは何處ぞの幸福で今日が今日まで珍らしい運を保ッた物の、もと是人間、たゞ是婦人、千年の松も風の無い夜に折れる世の中、齒ぎしりしても鳩は鷹に克てぬ物、いつが親子永別の日となるかも知れぬ身分、のみか、俗人が喜ぶ浮き世の榮利――自分もやはりそれを好む――その榮利さへ今のところ得られもせぬ、それ思ッて見ればあぢきない。

した。
たとひ義政を無いものにしてその儘足利がつぶれぬにしろ、直に宮方の勢が出ぬにしろ、猶元弘以来歴代の御鬱憤をいくらか晴らす事も出来る譯、とも思ふ。
義政の側にさじよッて其顔を見ながせば、見惚れて居るといふは僻目か、すこし、さながら獣！ 酒にとろけたやうな顔して居ました。さて天の與へた上首尾。
「まゐらうか？」言つて又義政を見流しました。
「晴、東山へ。窈子どのをば……思ひ切りました」。
しかし誰か直に信ずるもの、左京がまた口を出し、
「狐！ 鈍い事を」。
「何が狐。何が鈍くて？」
不思議にも太郎をみかへッて思ひ切ッた事を言ひました——
「垣守と將軍と……ほゝゝゝ……誰にも慾は おぢやる」。
内心をおしかくして居た義政の表向もこの言葉には堪らず頽され、
「まことか？」
「申さんでも」。
義政と左京とは顔を見合はせました。窈子は唯うつむいたばかり。いちごは更に義政に
「明日とも言はず今宵から直にまゐらうと存じまする、したが折り入ッた願ひがおりやる。申しにくうはおりやるが、一世の思ひ出、御ゆるしやれ鎧着たうおりやる」。
「なに鎧？」一同が。
「鎧が着たうおりやる。生まれてこのかた、婦人のかなしさ、まだ着た事もおりやらぬ程に、今如何に何とて武家方へまゐるのに此素肌では——いかにかねての望み切めて鎧着てまゐりたうおりやる」。
答へよりは一同ふきだす。
「何御わらひ……無禮な方たち。鎧着たが何をかしうおりやらう。御許しやらぬか？」

「鎧着て」、義政がいかにも機嫌のいゝ體でした、

「歩けやうか、そのかよわい身が」。

「歩けませいで。ある武家に聞きました。緊める處を緊めさへしつらば身のこなしも思ふが儘と」。

「何で左樣、望みも有るなら許しもせう。さて鎧はいづく?」

「鎧なんどは持ちませぬ」。

「持たで……」

「窈子どのゝを借りませうぞ」。

第十二

疊數六枚ほどの小座敷き、八幡の間とも言ふべきかまへ。貧しても武士はたくはへる具足金、まして貧もせぬ身分、横の襖を小楯に飾ッてあるのは三領の鎧、すなはちすべて窈子の持ち物でした。

いちごの稀代な我儘、殿からも許しが出たので仕方なく窈子はいちごを此間に案内して鎧を貸す事になりました。三領の中一領は親讓りの紺糸縅、縅し毛のたくましいのみか、胴量も婦人には緩過ぎる處から殘る二領の中の一領、すなはち窈子が着初めの式に用ひた小形のを貸す事に爲りました。

「是でも召せ」。がさつかせて取り下せば、

「ほゝ微妙……小櫻縅し、花小札、重疊でおりやる。太刀と刀は?」

「おぢやる」。

刀櫃から取り出したのは梨子地の細鞘と對の短刀でした。が、いちごが拔いて見やうとしても更に拔けず……

「これ、いかに、拔け……ませぬ」。

「素よりでおぢやる。祝ひ太刀にした物、打ち付けの無刃しでおぢやる」。

「無刃しッ?」氣色をかへて窈子を見ました。

「御あぶなげ無うて却りて怪しうおぢやるまい。短いのも同じ刃無しでおぢやるから鞘ばしる事もおぢやるまいと存ずる」。

恐ろしく失望した體でいちごは刀を兎見角見ひねりまはして居ました。が、何やら付き穗の無い體ことに些したぢろいた風で、

「とてもの事に窟子どの、眞の刄物を御貸しやれ、何、刄があらうとて弄びませうかい。大事おりやらぬ。利れ味のよきを御貸しやれ」。

「何で利れ味……何か御斫りやる氣？」

「なでう斫ッて！　されど飾り太刀では肩幅せまうおりやればぞ。いかで、迚もの事に」。

「刄無しで無いのは重うおぢやる」。

「重うてもこらへまする」。

しふねく纏はられて終にいなみかねて仕込みの物を貸したものゝ、さていちごの方は今中々の熱心、拔きはなしてためつ透しつ、燒刄の匂ひに見惚れて居ました。

面白い、奇妙な女と怪しむばかり、肌衣から着はじめて腰當てから投草摺、胴もつよく緊めさせて、いざ太刀を佩びるといふ時になり、佩び方だけ悉しく敎へて着終つた趣きを言上すると言葉を殘して窟子は座敷を出ましたが、さて不思議、手馴れぬ者が既に佩び終つて其處で待つて居ても窟子は更にふたゝび影も見せず……

變だ、不思議だに封ぜられてしばらくは默然として其場に坐ッて、着ぐるしい處など直して居る其内に部屋へ人の足音、すはや窟子と思ッて屹と見れば、其人では無くて左京でした。

「窟子どのは？」

問はれても答へずに、

「御濟みやつたか。天晴れ着ぶり！」

「何の」、あどけなく笑つて、更に又、

「窟子どのは？」

「窟子は火急の御用で御所へ今まゐりました。追ひつけ御所で御目にかゝるでおぢやらう。もはや御立ち、御着果てやッたら時を移さず……」

「かしこまりました」。

窟子がふたゝび來なかつたのも、それなら當り前。直

に左京の尾に附いて出ると殿は既に近習と共に戸外の薄暗がりに立ッて居ました。

　囂々しく見送る窟子の郎黨、それさへもいよ〳〵肝癪の種でした。が、わづかに押しかくし、家を出離れてそろそろ歩くと、なる程殿は夜目にも見える白綾の寢衣、星ばかり今は輝く闇、しかし從者に前後を取りかこまれて行く體は又一寸立派でもありました。

　何處で打ち果たさうか。是からそろ〳〵傍へ寄つて一太刀刺さうか。でも若し仕損じたら……まだ〳〵多勢に無勢……

　にぎりつめていつか我知らず手で送ッたらしい鯉口、突然鞘ばしッて、そして重みに氣が付き、つと取り止めせば、あゝ意地惡、鞘へかへる鍔音が冴えて鳴りました。

「何事ッ！」戰國の習ひとてさすがに從者どもは早く聞き付けました。で、左京はいちごの鍔へ手をやつて見ました。

「あ、是ぢや、この鍔音ぢや」。

「透かし彫でおぢやるか？」從者が。

「遊びの透かし彫りぢや。鳴ッた筈ぢや。いちご御、太刀御拔きかけやッたか？」

「いかで妾が太刀を……」是ばかりは流石のいちごの胸もどきつく。

「何故。鞘走りでおぢやッた？」

「なか〳〵。驚いて取りとめまして氣疎い音をさせました」。

「あ、左様。怪我ばし御爲やるな」。

　是こそよく言ふ地獄で佛、生死二つとあはや覺悟を定めたところを、不思議に言ひくろめられたとはそも〳〵まだ運の盡きぬ處？

　狙はぬ內には手薄と見えても、さていざとなれば隙も思ふやうには見當たらず、今か〳〵と待つ內に何か義政はさゝやく體、或はわれを疑ふのかと耳を澄ましても聞き取れず無駄の苦勞をして居る處へ、ても優曇華の花、渡りに舟、左京が斯う言ひました。

「いちご御、殿の仰せでおぢやる。忍び行きもわきて面白いものとて是から殿は和女と只御二人で歩かばやとの覺し召しでおぢやる。淋しくて和女御進みやらぬならば詮無い事ながら……」

「殿御一人と？」

「なか／＼。われ／＼近習は一先御先きに御所へ歸れとの仰せゆゑ……」

「たゞ殿御一人と？」

「もとより」。

あゝ天、蟻の思ひも何とやら、たゞ御一人と！　一人と一人、殊に先方は不意……ても何と言ふ、うまい機會。胸が既にとゞろけば口も利けずさしうつむく、それさへも先方には羞ぢたのとも見えるやう。で、終に——夢でも無い——挨拶を述べて左京たち近習のものは殿とわかれて本當に、嘘も無い、行ッて仕舞ッたとは！

何とも角とも言はれぬ心持ち、四邊を徐に見回はせば一面の焼け原。誰の陣か、遠篝が殺氣をかゞやして明るく……暗く、比叡おろしは焼け灰を吹き立てゝ、呼吸も咽ッたい程でした。天地一般ことごとく血腥い香りで充ちて居ました。

「いちご、此方に」。低い聲で義政はすごし後れたいちごを呼びました。さし向かひとなると斯うなるものか、聲も宵よりは餘程低く、すこし嫩々しくなッて居ました。

呼ばれる儘に側へ近づいて相離れる事稍二三尺、しかし又先方は言葉をかけました。

「近う。此方へ」。

で、出した手先き、闇ながら探り中てれば、さて何と無く妙な心持！　白綾の手ざはりのよさ、燻きこめた香りのゆかしさ、如何にも將軍は將軍、何處やら身を侵す氣高いところも有るやうでした。

宙で出合ッた手と手——一方は素肌、一方は小手掛け——その儘素肌の手は小手がけのを執ッて一息あらく禺と身の側まで引き付けました。あら、腰さへも利かぬ程になりさうないちごの胸の動悸！　引き寄せたばかりか、

義政はいちごを鎧のまゝ大抱に脇腹から抱き込みました。で、並んで一途に足をすゝめながら一言すこし聲ふるはせて、

「いちご、抱いたが否か？」

言ッて嚴しく鎧の上から抱き緊める、今は流石のいちごも氣を吞まれて口も殆んど呟んだやう、血ばかり頭へ逆上して前後茫然となりました、たゞ深い息を鼻から爲て。

「かうして」、義政が、「歩くのもまた一入ぢや。人が見つらば何と言はう。都で知らぬ人も無いいちご御と斯うして歩くとは義政も冥加にあまる生まれぢや。はゝ、喃、いちご」。指でいちごの頬を一寸ついて。

あゝ今が時機。惡魔、八樽の慾に潮れて尊の待つのをも知らぬこゝを外して又と折りが。寂しさを繋ぐ遠鳴きの痩せ狐、人はるかに陣も遠い、場處、無二の場處。とても此方は婦人、あざむいて刺すのが上策。欺く、今のところ相手は色道の餓鬼、その方便で欺むいたなら萬に一も拔かりは無いとゝ。と知つたことなら鎧など着て來なかッた物を、まだ〳〵前の素肌一枚の方がよかつた物を。が、言ッても詮無いこと。しかし、このやうな場合ひに世の一般の女性も斯うか知らん、その人は憎くてその志しは憎くも無い、否、此方さへその志しには蕩かされさう。

あつらへ向き、途端に主も無い物見小屋が有りました。まこと此處こそと思へば、義政の耳にわざと直と口を近づけて囁きました。

「御くたびれ、妾はくたびれました。小屋もおりやる」。

「休まうか？」

實上首尾、つれだッて小屋に這入れば腰掛けの椽は埃だらけ、が、氣になる處か、諸共に腰を掛けて互ひに舊のまゝの手をば離さず……

唯互ひに言葉もなくて——身がまへをすれば、いちごは又左で横に義政をしつかり抱く、凡夫の相手、是も好い氣、無理に綿嚙みからいちごの胸に手を入れて囁いた

のはたゞ一二言、

「胸いたく轟きやいて」。

その轟くのは何のためか、あゝ悟らぬ身の淺はか。足でいちごがそれと無く、男の片足を食ひはさむ、まづ是で足を直に拔いては奔り出せぬ譯。

そろ〳〵と短刀に手を掛けました。が、近い處とて其手先がもじ〳〵男の左の脇腹に感じました。

「何。其處」。手を取りはなされました。

更に隙を見て、辛く〳〵——暫時！　それまでは何うでもしろ——手間どッてすこしづゝ短刀を拔き……拔いて……終に半分は拔いたばかりの實夢現、かれ是してゐる内、勢ひ辭む事も出來ず全く身を汚されたならそれこそ殘念、まだ短刀も拔け切らぬ、はや運命は迫る、もはや一髮も容れぬまでの間、いざやいちご姫、わが身の生死、宮方の興廢はこの一時！

＊　＊　＊　＊　＊

すさまじい物音、小屋も破れるばかり。闇にもそれと透かして見える、刺しそこなッたか、小屋から驅け出した男女二人。最早廣場、白綾は逃げもせず、死に物ぐるひ、斫りかゝる鎧仕立て。一心、隙間も無い、危急の間、男は佩刀をさへ拔かず、

「いちご御」。聲するどく。

するどく言ッたその聲は？　不思議、誰か聞き覺えたやうな。

われを忘れて一寸たゝずむ、隙につけいる相手の男、短刀持つ手をねぢ……ねぢ……見る間、取り落した短刀、音をからりと大地にさせました。

仕損じたか。今は半狂亂。喰ひつく……太刀拔く間も無く。

「こ……これ……いちご御、しばし、しばし、某ぢや」。

だきすくめる男の力、叶はず、其まゝ白綾の顏をすかしても更にわからぬ——まゝ、息せはしくたゞこれだけ、

「何を……義政ッ。しッ！　女子の念……」

「これ、某ぢや、太郎でおぢやる！」

とは又？　おのれ欺くか？

「何で太郎！　見覺えのある無紋の白綾……義政生命は……」

また組み打ち。しかし婦人、氣はあせッても終には叶はず、組み布かれて。もがいても、狂ッても動かばこそ。さて天命、助けを呼んでも始まらぬ事。口惜……齒ぎしりをして泣くばかり――隙もあらば喰ひ付てなりと。

「どうしても」、上の男、「分からぬ。子細がおぢやる。それがしは窟子で……」

「いかで窟子！　窟ッ……窟子は物がたい人！　わすれもせまい、今が今、ちえッ、人を……人を……人を、おのれ、弄んだのを！　それで窟子か。人畜、義政」。

「道理ぢやその疑ひは。言ひ解かうほどに、心靜めて」。

「靜められうか。もう此身は無ン……無いもの。くッ……殺せ、怨念あらいで！　よッ……しまさ！　殺さぬか！」

あはや上の男の刀を奪ひさう。

「しふねい……」

「執念い、もとより。殺さぬか、かうして又も辱かしめるか！」

「何の辱かしめる……」

「ならば何故ころさぬ、組み伏せて……女子を……ちエッ……殺……さぬなら斯うして」。

首をふりたッてわれとわが腦を大地にあら〳〵しく打ち付ければ燒け石にあたッて血も多分出た事、捨てゝ置けば死ぬ、兩手を束ねて、動かぬやうに頭をおさへつければ、足は又足で蹴返さう、押しつけやうでからまるばかり、救ひの人も來ぬ事とて更に果てしも有りません。

上の男も工夫に盡きました。白綾の無紋、而も現在窟子の家を立ち出た將軍、それが窟子といふ譯はどう考へても無ささうな事。いちごの怪しむのも更に無理では無い、が、唯上の男は窟子と名乗るのみでした。唯の妄想とも言へぬ、むしろ一理あるいちごの疑ひ、それ解かうにも刀も早無い夜とて仕方も無い仕儀。

「聲に覺えはおぢやらぬか、窟子の聲に」。

「覺えあッて、似て居たとて作り聲かも知れぬものを」。

「さまで疑はるればそれ迄。誰か嘘言言ひませうか」。

「ならば窟子なら何故組み布いた？」

「和御前が哮り狂ふゆゑ？」

「狂はいで。かねての怨みぢや。それに小屋での様を見ろ、窟子の爲業？」

「窟子にはふさはしからぬ爲業でおぢやる。それに子細があッて……」

「子細と言へば、何でもそれまで。聞く耳を持たぬ！窟子を慕ふた望みも叶はぬ身、死んでも何が心憂からう」。

何處までも窟子は怨まぬ、しかも益々戀したふ、それを聞く人、上の人がもし眞の窟子なら果たしてどんな心持ち？

唯義政と思ひ浸みたばかりでの半狂亂、それで其上の人が實に窟子であると決まつてわかつた事ならいちごの心持ちはまたどうか？

組み布いたばかりで手は緩められぬ、此儘で居れば夜明けに爲るまで待たなければ爲らず、何か早く言ひ宥めたいと上の男も混雜の間しきりに工夫して居ましたが。意外、洵に是が窟子でした。

第十三

こゝろ付かぬ人には鰻も蛇と見えるとか、窟子が義政と思はれたのも亦一理あッた事、思ひ込んでは骨が舍利でもといふ勢、いちごは益々たけるばかり。

「よ……よく靜めて御聞きやれ。これ、足！なでう……傷ばし御負ひやるな……蹴るなんどと……」

「蹴りかへせ……ぬか」。目をしわめて猶一心。

「證も見せ申さうず。いちご御、證を」。

「證？」

「しばらく哮らいで。證にそら言ありつらば……しば

らくそれまで」。

證と言はれて、それでもいくらか氣が靜まッた樣子、やゝ耳をかたむけました。

「あかし？　見ん事おりやるか？」

「おぢやる。申さうず。御しづまりやるか？」

狂ッた乳虎もやうやくに些し靜になッて、組み合ッた手足も中裁なしの物わかれ、が、まだ／＼油斷はせぬいちご姫、鍔際には片手をかけたまゝ。

しかし思へば夜目、夜も夜、闇の夜、萬一この男がやはり窟子で無く、まことに義政であッたことなら運の盡き。

覺悟は爲果てゝもまた今更のやうで、椽へふたゝび腰をかけても其すわり心は前と大に違ひました。

「御うたがひやるのも道理でおぢやるが、何いつはりを申しましやう。まこと某が窟子であるか無きか御いぶかりならば夜邊の事を申さうぞ。夜邊のことあらましは人も知りたれ、節々をば知るものもおりやるまい。まこと某が殿でありつらば此處で和女に鎧着せ申した顚末をば語り得ぬことでおぢやらう。したが、語られまする。御心のあるならば申しても大事おぢやらぬが、是でもまだまだ御疑ひやるか？」

聞けば成る程とも思はれる口條、と思ッて來ればまた其聲も間違ひの無い――あッ窟子か？　（むら／＼と萠して來たのは從前の煩惱心！）

「まことかな？」

「何でいつはり……」

「でそのいはれは？」

猶さすがにいはれを聞いただけ氣丈でした。

「申せば長い事、御聞きやれ。申すからには此身を嘸にくゝも思しめされうが、和女が殿の御命をうかゞひやる心底はそれがしが見付けたのでおぢやる。な、御驚きやるのもことわり、いかゞしてそを見付けたかと言ふに和女が鎧御着やる時のけしきでおぢやッた、利れ味のよきを望み、刃無しをいなんだ――それのみか常々聞けば

和女は稀な武家ぎらひてふ事――それで怪しと目を付けまひた」。

一々胸にあたる眼力、いちごは只無言。

「それで殿に――武士の身是非もおぢやらぬ――密にそれと告げまゐらせて、猶和女の御心試んため殿の御物を承りて殿めかして早く外に立ち出でまひたも全く薄くらがりに便りを得て和女をあざむきおほせんため。終に御はかられやつた、さぞ口惜しうはおぢやらうが、武士の道、此方は此方の主のある身、御聞き分けやれ」。

さうも巧みに謀ッたのか、その謀られたのは口惜しいものゝ、しかし相手の度量がます〳〵すさまじく、何やら威にさへも撲たれるやうな心持ち、ほとんど呆れたばかり、

「さう事毎に御見すかしやれば詮無いこと、御身にかかづらッたが妾のぬかりでおりやッた。誰を怨み申さう。したがこの上、太郎刀禰、この上は妾をどうおしやる？縄をかけて義政の手に御さしだしやるでおりやらう」。

「さしだしは爲ますまい」。

「爲ぬ？」

「御ことわり、なれどそれは身に代へて命乞ひしました。それがしが見やぶりた手柄に愛でいちご御を御見ゆるしやるやうとその時申し望んで許されまひた」。

「では妾に咎も無く？」

「おんでも無い事でおぢやる。女性の御身、朝霧もやがて立たうず、はやとく――御身にさはるも掛念――今夜はこれとあきらめて此儘に御かへりやれ。窕子を愛でたまふた御いつくしみは忘れませぬ。煩惱にまよふまいがそれがしのかねての望みで、それでつれなうは仕ふまつッた、その贖ひに御身の御身のため、右ひだりあらはにいたいまひた。聞きわけて御かへりやれ、送り申さう」。

情か、仇か、生けみ殺しみのやさしい言葉、何處となく胸にもしみとほッて今更いちごも涙をもよほす、はかばかしい返事もなし、あはれ！　首だれたまゝの首に物思ひを言はせ、會釋するばかりの體でおづ〳〵、さきに

立つ窟子の跡にしたがひました。

　今になれば精氣もたわんで、それとひとしく身にこたへるのは鎧の重みでした。窟子の宿を立ち出る時には出陣の女將軍、今小屋から出る時には敗軍の吳孃隊の一人。くろがねの齒を惜し氣もなく喰ひ合はせて肉を殺ぐやうな臑當て、横へそがれて足の甲の兒めかす草鞋。何故か片腰にのみつるさがるやうな太刀、あるくたび太刀がらみと共に腰骨を囓いて撲つ意地のわるさ。

　遠かゞりは宵と數もへらず、あちこちに燃えさかッて居ました。更けただけに凄味を加へるのは比叡おろし、櫻を散らした昔の春は陣營の一夜の夢、ところ〴〵にうろつく軍馬はわざ〳〵か人をおどかし好きのやうでした。

　それにしても恐ろしいのは窟子の眼力、兎に角一目の最初の鑑定どほりまことにたぐひ稀な丈夫、それと緣が有るやうでまた緣が有るやうでも無い、世の中は小町業平、駿馬痴漢のたとへどほりか。

　はじめ床しい人と思ッたのはその人品ばかりではなく、應對の落ち付いて鎌倉ざむらひの角のとれたところ、さらに狎れくづれて迫ッてもます〳〵動じぬためいとど思ひは深まさりした、それさへあるにまた人の胸をさとッてそして人を片隅におしつけて仕舞ッた、さて怨んでいゝやら、喜んでいゝやら。そして世の中に緣ほど不思議な物は無く、緣は緣と形をあらはして始めて緣と知れるもの、現在から既往をかへりみて簇めた言葉、そして更に現在からそれを、人自身の妄想煩惱で未來にあてはめて得意顏になるもの、とさだめて考へてもわからぬのは二人の境界。

　つら〳〵現在から過去をかへりみれば窟子にわれを憎むところもない、のみか憐れむところもある、憐れむ、それが一轉すれば愛、愛すなはち之を男女にして夫婦、老幼にして親子、尊卑にして君臣、それだけの情緒はほとんど發動して今にも火を待つ薪もどきとなッて居るところ——あゝ今の場合の窟子は宵にせまッた窟子と違つたか、宵の聖者は俗人となつたか？

それにしても、俗人となツたとも思はれぬには猶きッばり正しく高くかまへて居る様子。あるひはそれは表向をつくろふだけか？

ならば――あゝどうしやう――今此方から仄めかしたなら、美事此方の思ひのまゝになるか？

しかし、まだ〳〵。思ひかへせば組討ちした處で、もしも窈子が聖者で無かツたものなら、いや殊更に深く精神の束縛を信から受けて居なかツたものなら、いはゆる通を失ツた久米の仙人、むかへられた外界を更に內心でむかへてさわぐもの。

極めて言へば至大の至人は至大の放蕩人、俗人がする肉體の放蕩を至大の至人は心でする、その間、迷ツた果てを假りに悟りと名づけて俗眼を欺もの。もしも人間に一點も獸慾といふ物が無かツたものならたとひ身に聖者の能をたくはへたにしろ、俗界を解脱して聖者の域には至れぬ譯。事に馴れて遊君は猥褻を言ツても恥ぢとせぬ、しかしその恥ぢとせぬだけは猥褻に馴れて猥褻の臭氣に氣が付かぬだけの事、之に氣がついて之を臭氣と觀じ、さてその臭氣一點にも染まぬのはつまり臭氣の奥をするどい目でにらめ過ぐした聖者。字と名づけ、宙と名づけたにしろ、醜美二の標準は外に何があらう、このこの一點だけ。

觀じ過ぐせば窈子の心のうごかせぬとは直にも知れる事ながら、さて眼前に肉を見て鼻をうごめかす身になツては生まれかゝる道心をも他の心が(？)消すばかりでした。

歩む毎に一歩は一歩わが家の方へ近づく、その近づくのが何となく殘りをしいやう。朝霧が何！　夜氣が何！　食はれぬものゝ、しかし木犀を齅いで居ればいくらか鼻も承知する――あゝ劣情。

「窈子どの、さぞこの事で出世されるでおりやらう。いちごから運を御得なされた」。

「出世？」意外といふ語氣でした、「何をそれがしが。かねての望みも叶ひまひた」。

「出世が何とは？　さて望みお遂げやッたとは？」

「殺伐するために腰をもう折らいでも」。

「腰を折らいで？　武士にこゝろざしおりやらぬか？」

「御こゝろばえ世にありがたい方ゆゑ思はくのみを申さうず。今夜かぎりそれがしは佛門に入る心でおりやる」。

「佛門？　出家？」いちごも意外。

「世の中は夢でおぢやるよ！」

第十四

今までに言ふ場合ひのなかッた窟子の素生、その子細は卽ち是です。

人界は修羅のちまた、しかし自然は自然のまゝの自然、矢叫びの音はさすがに梅の枝の鳥を醉せず、血色は終に山櫻を染め出し得ず、世のみだれは世の亂れのまゝにして毎と同じやうに一年の都の春も來ました。

「心にかゝる峯のしら雲」、兎に角愛らしいあさぼらけ、蒔繪の書棚に柴舟の趣きをながめただけでは詰らぬ事、いざや是からとの思ひ立ちに俄に近習女どもを召し俱して義政も櫻狩に志しました。

立ち出た道傍にうづくまッて居た一人の行童（ちご）打扮の小童裾濃茜の大振り袖に白の奴袴、唐輪の高髷高く結んで、薄草履を足に添はせ、しかる武士におぢもせず、屹と麾下を望んでたゝずんで居ました。

麾下をのぞんで居たその顔が思はず義政の目にもとまッた、と言ふのは外でも無く、めづらしく麗はしい形でした。色は白いといふ方では無いものゝ此方を佶とにらみこんだ眼光のするどさ、あどけ無い八の字を額によせて何かつぶやいても居た體、あッぱれの骨柄と見えたまゝ、しかる從者をさしまねいで思ふ所存を傳へました。

從者は聞き入れたか、入れぬか、たゞ鋭くしかりつけました。

「すされ、わッぱ、すさらぬか？」

「すさる。すさる途をつくしたなら」。おちついて答へました。

「片はら痛い……東山どのを知らぬか？」

「知らぬ。東山どのは物やさしい事が御好きとやらでこめてのみ在すから」。

「下郎が何で御顔を……御名を知らぬかとのことぢや」。

「御名は知ッた」。

「知ッてなぜ無禮する？」

「無禮かこれが？」

「無禮ぢや、御道をさまたげ申して」。

「妨げはせぬ。詮無いぢや」。

「なぜ詮無い？」

「足がいたむわ！」冷笑して義政を尻目に見ました。

「こやつ公卿のわッぱぢやな」。

しかし幼童は耳にも入れぬ體、

「足がいたんで動かれなければ詮無い事ぢや。病ひは處をきらはぬ物ぢや。今はからず足がいたむに此處が、叱られたればとて、退かれうか。くだ／＼しい！」

「くだ／＼しい？　何をおのれが……おのれこそ！　立て！　立たぬか、立たねば」。

「待て。どうする？」

「切りすてるわ」。

「切る？　切る？　切る？　切られては足には代へられぬ。切るなら退かうわ」。

おちついて如何にも靜に立ちあがり、冷笑に冷笑を加へて從者と義政とを見てやゝ去らうとした體充分に見込んで從者が「しばし」とまた呼びとめた。が、聞かぬふりでした。

「しばし／＼」。重ねて二三度。

「何ぢや？」

「殿の仰せでおぢやる。しばし」。

「殿が何。また手討ちか？」

「手討ではおぢやらぬ」。

「はゝゝ手討ではおぢやらぬか」。あくまでも膽を見せて此方を向きました。

殿の仰せを承ッて出て幼童に挨拶したのは即ち例の左京でした。

「家人どもの無禮御ゆるしあれ。和主の骨がらを切りに殿がめでゝゐらせらる。苦しからずば御名を……」

「恐悦に存じまする」。きッぱりと改まりました「名は鱗丸と申しまする」。

「いづれのわたりで？」

「禪家でおぢやる」。

「くるしからずば御身の上と御年頃を御聞かせ下され」。

「申しあぐる程ではおぢやらぬが、ことし十六歳親も同胞も無い身でおぢやる」。

「そして御身の上は？」

「今申したが身の上でおぢやる。くだ〳〵しい事は噓言申しても同じ事でおぢやる」。

「宮づかへする心はおぢやらぬか、あからさまの申し言ながら。殿にもいたう愛でゝゐらせらるゝ」。

「宮づかへとな？」すこし小首をかたむけて、

「禪家より面白うはおぢやるまいが。何も世の中、して見ても大事おぢやらぬ」。

大抵このくらゐで大方相談が付いて鱗丸は直にそれから義政にしたがッて東山へ行ッた、それが即ち窟子太郎と改名したので、それから二三年過ぐるあひだ猶義政の方にも思はくが有る事とて、垣守りのいやしい處へ置いてその器量をつねに試させて居ました。

これ程に俊秀な少年、それが何故に卒然禪家を跡にして武士になッたかは窟子自身の外に知るものも無かッたのです。

窟子の素生、その機密を明かせば是もやはり眞は宮方の子であッたのです。大内の公卿何某の落とし子、私生といふため表立たされず、終に人にやッた、それからそれへ移り移ッて果ては七歳の頃から禪寺の行童と爲りま

したが、生れ付いて誰に似たか氣象のするどさ、その身の本心、自身の素生は全く知らぬものゝ、何處やら理義を考へて足利をにくむ心が有りました。そしてその心はいつ起ッたかと言ふに十二歳頃の夏、途で見た事でした。

誰か知らず、雲紋に萍ぢらしの古狩り衣を着た一人の公卿が馬士になッて馬を牽いて歩いて居ました。が、その公卿が何か手あやまちをしたとかで二三人の一色組みの雑兵にはげしく打擲され、それで手むかひもせず、額にまで疵をこしらへられて大地に泣き臥して居ました。

師僧のうはさで武家の僭上無禮を聞いて居た胸の現も此實際にあたッて始めて活きかへり、深く心に感じをおこしました。

それからは寢ても覺めても、どうした張り合ひか此仕末が目についたやうで忘れられず、更に更に昔がたりの夜々延喜天暦の過去を知れば知る程武家がいやしくなッて、果ては奇怪な心をさへ起しました。

元々鱗丸が武家の不敬をにくゝ思ひ出したのも唯一時の小兒ごゝろ、こゝに理非を言ふ程でも無い事でした、が、その小兒ごゝろ、それは違ッた目で見てこそ左樣云ふものゝ、その小兒に於ては小兒心がうたがひも無く大人の大人心でした。で、誰におさへられる事も無く、また紛らす物も丁度無かッた、そのため終に小兒は小兒ごゝろを小兒だけに大きく組み立てゝ、やはりいちごが前にいだいたやうな考へ、すなはち義政を暗殺したらこの天下の不平均は救はれやうと思ひこるやうになりました。

義政の從者と應答した口振りの樣子ではそれ程に迷ッたのが亦不思議なやうでしたが、その處一派の偏頗心、すなはち一向の忠と義、大義といふ物のためには流石にさとい眼もわるく眩まされたやうになりました。

それで不圖寺を出たぎり、途に義政にあッて試みて終に伴はれて行きました。伴はれて行ッて中へ入りこみ、樣子を見るにさすがは將軍、いきほひの凄まじさはまた胸にもしみとほりました。元々入り込んだのも折りが有

ッたら暗殺でもの血氣に驅られて居たのでした。が、血氣發動した時には岩をもつんざくばかりで、しづまッた時に紙をも切れぬ程になる物、いよ〳〵實際にのぞんで實際いざ手を下さうとなれば、さて何と無く身で身がかへりみられる心持ちもしました。さま〴〵な躊躇の思案もあらはれたり、さま〴〵な慾も出て來たり、そのまゝで彼是日を過ぐす内、慣れた物とて禪書を手にも取る、取ッて深思熟考すれば自分の今までが妄念らしくも見えて馬鹿々々しくも思はれるやうな心持ちもしました。

年が分別の數を添へて心が心を敎へるやうになれば昨日の是はどうしても今日の非で、暗殺などゝは何處から思ひ付いたらうと我ながら怪しむばかりになりました。暗殺をしたとても足利がどうもなりもせぬもの、そして今こゝで足利をつぶしたにしろその跡を美事繼ぐ勢力を宮方が持つのでも無い事、毛を吹いて疵をもとめ、いたづらに世の騷亂を引き起すのも大人君子の爲べき事で無いのみか、事もあらうに、暗殺などゝいふ、卑劣此上も無いことに大切の身をなげうッて天の命を不具にするのも何うやら淺ましくも思はれて來ました。

さうなると最う武家が嫌で〳〵堪らなくなりました。土臺自分が塵尾をすてゝ劍戟を取ッたのも最初の一念が全く暗殺とか、天下救濟とかいふ處にあッたゝめ、で、その最初の目的もつまらぬ事であッたと悟りが付いた上は一刻も殺伐を旨とする、不仁、殘酷、獸心の境に身を置くのが否になッて、今日去らうか明日去らうかと思ッて居ました。

が、其間昨日は伊賀勢が丹波勢と陣屋の据ゑ方で喧嘩をはじめたとか、今日は誰の手が馬を盜まれて混雜したとか、それら數々の紜々が有る、その場合ひには折り〳〵當番で鎭撫に出掛ける、その度ごといつでも〳〵血を見ぬ事も無い、それがいよ〳〵去りたい〳〵の心を勢付けるばかり、今度出ただけでもう此樣なつまらぬ事をば爲ぬ身になれるか〳〵と思ひ〳〵いつも出て、それで歸ればその都度々々誰よりも立ちこえて懇な殿の御褒め狀、

さすがに人間の慾をば全くまだ斷ち切れぬところから、つひ褒められゝば褒められたで又いやでも無く、うかうかと月日を重ねたのが峯の紅葉も二三度染めかへたぐらゐの永さ、また料らず俗中の俗の使ひ、いちごを妾にとの命をかうむツて出て行ツて終に前々回のとほりの始末にもなりました。

今のところ宗子には別に慾も得も無く、何をでも機會に暇をとらうとばかり思ひつゞけた處、一頃は殿のにはかの來臨でつまらぬ苦勞を一寸した、それが又幸となツて料らずいちごの心を見やぶツて其趣きを殿に知らせ、身がはりになツて充分いちごを欺いた、その一事で言はば殿の恩もかへせたやうなもの、この位の處で身を引くのが上策とまづあらましは思ひ付きは付いた物の、しかし今さら事あたらしく暇を乞つた處がとても直すなほに許されぬのは知れた事、無駄な押し問答でまた志しでもひるがへされるやうではと不性が半分喙を容れたため唯いちごをあづかツたまゝでそれから思ふところへ行かうとした、それが實はまた疑ひを受ける原となつたのです。

兎に角それでいちごとつれだツていちごを送つては居ましたが、しかし婦人の事とて道は更にはかどらず、はかどらぬと言ツて夜更けに婦人を一人で手ばなす譯にも行かず、たゞそれだけ、寔に左京にうたがはれた事も無くは無かツた物のそれより外に仕方はなく、（またいちごを憎くも思はず）燒け瓦をがらめかして途を拾つて行く内に、あまり面白くも無い事、向ふに方つて松明の影があらはれると思ふ間、此方を指して來る樣子、あれは誰かと思つて眸をこらして居る内に、近づくまゝ數も知れる、總數五人ばかりの一むれでした。

第十五

きツと目をすえて、先方の群れの持つ松明の火影にすかせば見覺えは更にない武士どもでした。

打扮はいづれも掃き寄せの鎧や大小、或は鎧のわたりに刀が亂末、或は脛當てと手甲と更に對せぬ、見たとこ

ろ野武士とより外は見えませんでした。が、先方はいちごを透かし見て、直に小腰をかゞめました。

「こや、姫御前では？　おゝ、おぢやッた。いづくを御さまよひやッた事でおぢやる？　奴等は御むかへでおぢやる」。

「むかへ？」姫がもッとも不審さうに。

「なか〳〵。夕ぐれに御出ましの儘御歸りやらぬとて方々の御なげき一方では——近衛どのゝ青侍どもが斯うおん迎へ承ッておぢやる。さても〳〵便のいとよき。方方の御なげき思し召さばとく〳〵此儘奴等と……」

　世の親ごゝろ、思へば無理も無い事、さても打扮の見ぐるしく野武士とまでに見えたもの公卿郎黨であッたためか、二位三位の君さへ衣冠たゞしく着けられもせぬ時世、掃き寄せ打扮もまた尤も。窈子も始めて安心しました。で、ねぎらひの挨拶をも爲ました。

「大儀でおぢやッた、さりとてはそれがしも是から御おくり參らせうとて是まではまゐりました。なれど最早かう御むかへの方々に會ひまゐらせばもう大事おぢやらぬ」。

「なか〳〵仰せでおぢやる。さるから、喃、姫御前、御心しづめて、是より奴輩と……これは如何になぜ御答へを……御かへりやるが御否でおぢやるか？」

「窈子どの」、姫は窈子に謀を、「大事無うおりやるか？」

「大事おぢやる事でも、御内の御むかへと言ふからには——御歸りやッたが然るべきかと……」

「さらば妾も歸りませう」。

とは言ッたものゝ心細し、

「窈子どの、御身は？」

「それがしでおぢやるか、それがしは是で……」

「是で？……」

「御わかれ申さうかと」。

古い詩にも言ふ、蝮に腕を解く壯士、潔白一點の塵を

もゆるさぬ身が見す／＼埃の袋をたづさへて歩くのは氣の進まぬこと、この迎へは今丁度窟子には渡りに船でした。

何か心も進まぬいちご、が、歸らぬとて別に望みの有るでも無い事、丁度さいはひとは言へぬながら先機會として歸る氣になりました。

「窟子どの、御殘りをしうおりやるが、さらば……さて御身は是からどこもとへ？」

「殿に聞えまほしき事もいさゝかおぢやれば、是より漆實どのまで。夜陰なれば御身を御いとひやッて」。

終に袂をわかちました。今更いちごは火の消えたやうな心持ち。武士につれられて無言で五六丁來た頃、思ひつきました、大事の忘れた事を。それ窟子は最前一言出家になるとか言ッた、それを事に紛れて終に譯を聞き落としました。

あはてゝ振りかへる、しかし無情の夜色、すでに其人の影を呑んで、冥朦とした、殘酷な色を引き亙したばかり、殘りをしさが一層壓しを加へた途端、何！ 迎への武士が此言ひ草。

「いちご御、もう身は動かされませぬよ。窟子すら目を抜かれた」。

わからぬ口氣、問ひかへしもせぬいちご。

「いちご窟子、窟子すら目をぬかれた！」

「何を窟子が？」落ちついてやうやく。

「何をとて、和女まだ知らぬ、心付かぬ？ 和女は此儘家へは歸りはなられぬを」。

「などて家に？」

「われ／＼を眞の迎へと思やるか？」

「眞のむかへで無いてふのか？」

「もとより。いつはりであッた」。

あゝら、僞りの迎へ！ さてどうして？ 何にしろ、胸は一をどり。

「いつはり？」とばかり目が圓くなりました。

「乙女心には嘸おどろきやらう。かれ是言ふにも及ば

ぬ事。たゞわれ〳〵の行く方に來やれ。靜にして來やらば知らぬ事。さわぎをらば思はくも有る。いちご御！」

あゝ運のわるさ、てもどうして。思ふ事が食ひちがふだけならばまだしも、爲る事ごとに悪い方へのみ傾く破軍の劍先き、刃物は腰に有るものゝきらめかしたところが多勢に無勢。

知らぬ事とて窩子は居ず、分別をめぐらす暇も無い事。暇も無いと思ふ、思ふだけに氣は迫く、迫けば返辭は途まどひをして……

「否か？　いざ來ませい」。

取る手、直にふりはらふ手。

「何ものぢや、名も名のらいで……無禮な！」

「たは言いはずもあれ！　かう……來ませい」。

猶いちごは從はず。

「筋あきらかならば行かぬでもあるまい」。

「來る？　さらば」。

言ッて名のッた言葉によれば是等は畠山の手につく野武士でした。

「宵の事もれきかれたが最期ぢや。手ごはい窩子を欺きかへして今はもう心やすいわ」。

今更仕様はなし、既に前後を取り卷かれて居ると、鳥の翼でもなければ知らぬと、で無ければこの圍みをぬける術が——無い、といふだけでは澄まされぬ一期の究厄、が、究厄とおめ〳〵考へるのみでした。

とても此儘では逃げられぬ、せめて一寸も延びたらば些しは便宜も。刀の刃糞になるために否と答へるのも氣の無い話し、まづ心を落ち付けろ。

終におめ〳〵引かれて行く、その行く先きに見える小高い砦、其處が、聞けば畠山の持ち場の一つとか、割りに篝も少い樣子。

既に夜更け、荒れ野の物凄い景色は今が盛りと言ふやうな有り樣。

で、餘計な、差し出口の思案のみ首を擡げて肝要の工夫は尻ごみをして更に顏をも見せず——おくる一歩、そ

の一歩がそゞろに惜しいやう。焼け瓦、人は嫌ふ焼け瓦。しかし自分には懐かしいやう。せめて躓くふり、また足をいためた振りで躊躇の時刻を延ばすため。遠里の陣々の篝、人は好まぬ殺氣の色。が、自分には頼もしいやう、あれは誰の陣、それは誰の麾下と一々に問ひたづねてわづかに時刻を移せるため。

しかし、肝要の工夫はその都度またそれら餘計な辛苦に逐ひまくられて一溜まりも無く首を縮めて仕舞ふ、と思ひ付くだけ胸ぐるしさは苦勞の爪にかきむしられる、失望と恨みとを混ぜた溜め息が一つ二つ出る頃は既に陣屋の入り口に來ました。

砦は、よく見れば焼け灰の上にかまへた物。打ちかためたのか、土臺さへしッかりと石で組んでありました。裾から頂上までは一町足らず……

落ち付いたつもりで、

「こないに高いもの築いたのでおりやるか？」

「なか／＼。此方は搦め手で、大手は彼方でおぢやる。搦め手で、昇りにくうもおぢやらぬが、大手はいたい難處でおぢやる」。

「難處とは？」

「切り岸で……谷の深さはいかほど有らうか、人馬も行通はれませぬ。此間の戰ひの時、山名組みの誰やらか土取ッた跡でおぢやる」。

ほとんど耳には止まらぬ應答、それを耳へ拔けさせながらつひに隙をも得ず一室の內へ押し込められました。

押し込めて何うしたことか、武士は戶を閉てたまゝややしばらく經ても出て來ませんでした。

部屋には一點の光りも無く、ことさら勝手も知らぬ事、更にどのやうな造りとも知れず、さて暗ながら手で探り探り樣子を撫まはして見ました。大兵ならば三人とは入らぬくらゐの狹さ、閉ぢた戶にそッと手をかけて明けやうとしたものゝ、支へをかけられたか更にうごかぬ體。

片方にある一つの窓、そこには幸ひ戶も何も無い體、顏だけ出して下をながめて吃驚、如何にも此處は大手に

近い方の岩際と見えて、見下すかぎり果ても知れぬ谷、殊には暗まぎれ、凄まじさは一入。

せめて此方が谷で無かつた事なら逃げ出す便宜も有る事、しかし底の様子も知れぬ處へさて如何に大膽でも——下りる事が出來なければ監禁された儘籠の鳥となり果てるばかり。

それにしろ、武士が自分を部屋へ閉ぢ籠めたまゝ出て行ッたか、察するに、やがて今にもまたふたたび歸ッて來る事、その時には何と言ふだらうか。

われながら自分をばつねぐ\大膽と考へた、それも今思へば全くつまらぬ空想でした。我ながら自分をば平生利發とみとめた、それも今氣がつけば殆ど迷ひでした。いかに何とて欺かれて、そして阿容々々として——その間に逃げる猶豫も事によつたら有つたらしいに、終に、ちッ！　轍の魚となりはてたとは！

ながめれば過去はやさしく、將來は六かしく見える物、過去の合戰ばなし、自分がその時に居たら天晴れ大將の首をば人の刀にわたさなかつた物をと腕は取りしばッてもさて未來の同じ場合ひに對すれば其金鐵の腕も精氣既にどこやら、今さら過去をかんがへれば、慾目！　無ささうな處にまた逃げる手段も有つたらしい、むしろ最初あざむかれぬやう氣もついたらしい。

いちごは快活に育ちました。言はゞむしろ變はッた快活の生活をして來ました。臍の緒切ッてからこゝに十六七年、その間憂苦——一身の望まぬ憂苦——をば雲丹の中の實ほども味はッた事の無かッた身、今こゝで始めて征途のくるしみを知りました。澆季の世の中、しかし自分の闘い心、言ひかへれば其奇を好む情から世の中の支へを突きやぶッて世界の障碍をば物ともしなかッた、その權力は今既に無くなりました。親にもいちごは屈しなかッたしかし、それはいちごを愛する情の親にも有ッたので親もいちごを強く壓さなかッたのでした。義政にもいちごは節も折らなかッたしかし、それは義政が蜜を望んで蜜蜂をやしなッたためでした。その當座はそれとも

心付かず、僥倖を天福と看做して徒に思ひ上がッた身が身で淺ましいやう、聞けば砦の松をわたる風さへあざけり顔でした。いづくにも例は有る事、いちごの幼友だちに何某といふ姫もあッた、その人は和歌に堪能の名が宮庭に名高く上々の筵にも歌合はせの時には必らず出るほどの勢ひ、それがため終に氣を高くしすぎて、出過ぎた歌をさへ作り、誰にか難をさへ入れられた事の有ッたのは眼前自分が見て居た事、それを可笑しいと冷笑した心の有ッた身が何うして是程に思ひあがッたのか知らん。

屈せられぬのが眞の哲人、今自分はこゝ屈せられました。今までに屈せられなかッた非凡の量が實際有るものならどうして今この場合をも抜けられずに居るものか。脱けられる。が、自分には脱ける「ヌ」の字も叶はぬ始末。

平生の意見も全くは死なず、いよ〳〵婦人は男子に劣るとの思ひをば深くしました。で、物ぐさい氣が前に注意を呼ぶのを怠ッて、がッかり主人を究厄に落とした、その氣、それを養ッたのを誰かと問へば扨天をも人をも怨まれぬ事。

今が今までは世界に類は無ささうに思はれた、險奇な幸福の巣にぬくめられた自分の身、が。今は自身で自身を評する處、とても世の女性には及びも付かぬ不幸の身。なぜ？　みづから究厄の種をおろしてそれを高慢の雨で養ひました！

男子が婦人をかどわかす目的は何？　その答へは言ふにも及ばぬ事、やがて辱かしめを受けるに決ッて居る事。辱かしめ、この倫理混亂の世の中にさほど人の後指は恐ろしく無いものゝ、蟲の好かぬ者の處に居るのは如何にも殘念！　それを知るか、知らぬか、いづれにしろ、さぞ兩親も姫の居ぬに苦勞は爲て居る事、今の禍に出過ッて感じやすい、乙女心もさすがに催して來ました。

それにしても野武士と迎への者ぐらゐは窗子にも見わけは付きさうな物、或は窗子がそれと知りながら自分を究厄におとしたのかとも思はれる。

それや是や物思ひは珍らしくこゝにいちごを蝕ひまし

た。秩序をも立てず物思ひがあれまはる間、出没するのは逃げる手段の工夫ばかりでした。

まだ／＼武士がこゝに閉ぢこめたばかりで出て行ッたのが仕合はせ、今逃げなければ――あゝ、胸、胸がさわぐ。

どうしても窓より外には便宜も無い、でも、また外にも有るか。探りまはす手先きに障ッたのは、あら場處は部屋の片隅、何でも人間！

部屋は眞暗、しかしそれと氣が付けば總毛立つ、もしくは死人では、見えもせぬ目を見張つて闇をながめて僅に手を出してさぐると、發矢！　死人でも無ささう、慄へる樣子。で、その者の聲がかすかに洩れました――

「も……もう……御ゆるし……」

聞きさだめれば婦人でした！　いちごは再び竦としました。

「御ゆるし……情ッ！」

何と思ひちがへて哀れを乞ふのか。

「何ぢや」。

「御ゆるし……」引きずるやうな聲。

「其方は何ぢや。怪性めいた――女子か、男子？」先方の弱味にすこし此方に勇氣も付いて。

「御知りやらぬ？」

不思議。また向ふから問ひかけたとは！　何で此方に知る譯が……

「知らぬ、何ぢや？」

「つ……」

「何」。

「つ……じ君でおりやる」。

~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

第十六

熊を逐ッて兎に出られた心持ち、辻君と聞いて又ふたたび驚きは加はりました。が、同時に心も少しは靜まりました。不圖思ひついたのは是から何か便りになる事を
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

聞かうとの考へでした。

「おれは荒びする者でも無い。したが、和女はいつ此處へは來た？」力めて男子の聲をよそほッて。

「昨夜からでおりやる」。

「つばらに今までを語りやれ、力にもならうほどに、喃、つゝます。おれは此の手の頭人ぢや。かゝるべしとは露知らなんだ。侍ひどもの荒びにも術は盡く、かう女性を取りこめて。喃、つゝます語りやれ」。

けれど女はよわッた體――

「恥かしながら聞こしめせ。昨夜、思へば妾の身から出た事、さる武家にたより申したが事のおこり、伴はれて此處へは參つた程に、聞こしめせ……」

「こや、なにを啼く？」

「聞こしめせ、これ、御情、もう身は利きませぬよ、身は」。

「身が利かぬ？　いかにして？」

「御料りやれ、くッ……口では申せませぬ」。で、泣くばかり。

「泣いちや知れぬ。泣かずに……さて？」

「夜は陣の警固とてこゝに妾を閉ぢこめたのでおぢやッたが、さて晝に爲れば許多の／＼あらくれ男が……」

またいちごも舌を捲きました。相手の言葉によッて考へれば、如何にも夜それら武士どもが來ぬのも譯のわかッた事。しかし、もし晝になッたことならば？　どうして自分も逃げ出さずに居られやうか。

「女子、そなた何故逃げぬ？」

「逃げられませうか、切り岸御見やれ」。

「外に道は？」

「などて外に」。

「切り岸は高いか？」

「御知りやらぬか？」

疑はれる筈、頭人と云ッた上は。

「あ、いや、その頃土を運んだとやら言ッたを聞いたれば」。

相手は擢り寄ッて來ました。

「喃、御情、頭人と仰せられるので御願ひまゐらすを——聞こしめして、喃、助けてたべ」。涙にかきくれて、そして、かれた聲をかみしめて。

「哀れぢや。許してもやらう。したが、そなた何處のものぢや、名は？」

「そればかりは」。

「言うたとて我かぎり人には洩らさぬを、大事あるまい」。

「御ゆるしやる事ならば、恥かしき事も、さらば打ち明けまゐらせう、ゆめ、人には」。

「おんでも無い」。

「わらはは內裏がたの……」

いちごも胸にぎツくり。

「……の誰ぢや？」

「小君と申しまする！」

あらこれが？

「式部どのゝ？」と口までは出ても、思ひ直して辛く言葉を食ひとめました。胸はたゞゑぐられるやう、聞く身もふるへ出しました。

第十七

小君が辻にたゝずむと言ふ事は此頃の戯ればなしの時聞いたものゝ、しかし爰で運命を共にしやうとは思ひがけませんでした。驚きは比へる物も無いほど、小君の身の有りさまを且つ見且つ考へれば恐ろしさ、凄さ、また氣味わるさ。

何の、自身さへ逃げ去る手段をも得ずに居る事、小君までを助け出せやうか。助け出してやると言ッたのは元元いつはり、しかし相手は見ず知らずでも無い、竹馬にのりあッた幼なじみと分かッたからには、良心！　あざむいたのが氣の毒でも有り。

と言ッて打ち明けていちご自身の名をつげる事も出來ず、今の處、よし逃げるにしろ、方便をつけて一人で出

るより外仕方の無いこと。
　夜は武士は來ぬとか。まづそれだけは安心。しかし、冷かにきらめく星の光りを半ば失望の色を帶びた目で見上げれば、傾いて旣に丑をば過ぎた體、あかつきにもやがて間の無い事。
　夜さへ明ければ身は飢ゑた鷹の餌になる仕義、それまでが運の定めどころ、しかし千仞の切り岸、どうしたら飛び下りられやう。
　飛び下りたにしろ、いや、這ひ下りたにしろ、下の底の案内はさらに知らぬ、下はそも／＼泥か、水か。水？　身丈は立たぬか。泥？　掛け引き不便。それとも石床？　ならば、下りる時足をあやまてば五體はたちまち粉微塵。
　まづ切り岸から逃げる外に手段は無い事、で、這ひ下りるより外に工夫も無い事、這ひ下りるとしてさア、鎧のまゝがいゝか、それとも脫いだ方が、
　言はずとも知れた、素肌が何より。鎧下に大小ぐらゐが究竟かも知れず、しかし、また思ひ直せば其處此處の草には身體に疵をもつけられる事、肉へ肌のやはらかな肉へ。監禁される事を思へば何でも無いものゝ、猶一つの不便といふのは鎧下は白、闇とは言へ、人の目、まして鵜の目鷹の目の武士の中をぬける事、見咎められ易いは必定――でも甲斐の無い始末。すこしぐらゐは不便でも、一般に行はれる身の固め、着た方がよいかも知れぬ。
　どうしても着た方がよい。が、大刀は邪魔にならう。と言ッて捨てる譯には行かぬ、繪卷き物に大刀を脊負ッた圖のあるのは大方この場合ひ、後ろへまはして脊負ッたがよからう。
　窓へ手はかゝりましたが、さすが氣にかゝるのは小君の事でした。ふりかへる氣はひ、見とめ得たか、しわがれた聲――
　「いづくへ御出で？」
　はッと胸へは來ましが拔からぬ顏――
　「今」、しかし心は上下顚倒「助けうする、そのため。しづかに／＼」。

聞くや否や泣き臥す體、うれしさに。氣の毒さは骨身をもくだくやう、さすがに此方も催す涙、窓にかけた手は弛みました。

が、女々しくては――思ひ切れ！　口のうちであやまツて、そして、窓へやゝ昇りかけると、目はくら／＼。弓矢八幡、あらゆる天地八方の神々、今日ばかりは擁護擁護！

窓の手をはなせば砦の礎、からく下り立ツてさて下を見れば、あゝ／＼谷は呑まうと腮を張る。

岸の向ふには誰の陣か、篝に透かせる紋處は丸に二の字の即ち足利、此方とのへだたりは二町足らず――どうぞ見咎められぬやうに。

幸に畠山の手のものは此處にまだ影も無い、もしぐづぐづして夜まはりに遇ツたら一大事、早く早くすこしも早く――さあ降りる、いきるか、死ぬかの境に。

皇天后土、特別の擁護！

なる程切り岸、しかも燒けた石や灰の山、かたまツたやうでも流石に些し／＼づゝは崩れにくづれて足元の危険は比へやうも無い程――一歩を下して踏み試みては片手をはなし、辛くも五六間は下りたと思ふ頃、耳を貫く聲が上にしました、何かのゝしり噪ぐ體、しばらく足を休めて聞けば果たして察しのとほり、砦の武士の諸聲で見れば松明をかざして切り岸の下をのぞきこみました。

「すは……彼處に……逃げた」。

たしかに聞こえた上のこの聲、さア何うしたらっと思ふや否や思はず手は――石にかけた手ははなれました。離れて、同時、足も、しッ！　烟りを立てゝ辷り落ちました。

*　　*　　*　　*

露に心づいて目を覺まして、扨わかッたのは自身が眠ツて居た事でした、氣を喪ツて居た事でした。既に夜は白々曙、で、身をかへりみれば切り岸の大石に支へられた處を、上からくづれて來る燒け灰におほひかゝられて全く埋められて居ました。鎧着た甲斐も有りました、怪我もせず。

はるかに上を見上れば砦の礎がすこし見えるばかり、向ふ岸の陣で嘶く馬の聲が朝風に駕して聞えました。

今の内逃げなければこの先き夜まではまた間の有る事です。が、暁方は人馬の行き來も繁くなること、却ッて或はみとがめられるか知れぬ、しかしどうも又おめ／＼として靜にして居る譯には行かぬこと、何も運さだめ、進み出して死ぬならまたその方が望ましい。

危急に遇ひ馴れて決斷もすみやかになりました。いざとばかり、身をよくも繕ろはず、更に下へ／＼と降り果てゝ見ると、膝だけの水があるのみでした。之に力を得て力めて人の目にかゝらぬやう、心を盡くして歩いた甲斐も有ッて、やがて只有る廣場に出ました。

道端には千切れた鎧の袖なども散ッて居て、また人の足などさへ飛び散ッて居ました。まだ武士には一人も過はぬ、まづ幸と喜ぶ間もなく、向ふから來る人影、また武士かと——しかし隱れる處も無いまゝ——おづ／＼近寄ッてよく見れば正に是は一人の僧でした。

笠が深くて顔も更にわからぬ、しかし僧とあれば心配にも爲らぬ。むしろ之に身の保護を頼んだ方がよからうと思ひつきました。

僧を見れば猶豫なく窟子の言葉も思ひ出されました。さう思ふ所爲か、僧の樣子、顔は更にわからぬ物の、窟子に似たところも有るやうでした。

「物申さう」。行き過ぎたのを呼びとゞめて。

僧は立ちどまる、いちごは傍へちかづく。

「さしせまッた願ひながら今敵に追はるゝ身のうへ、出家と見てたのみ參らす、いかで連れ立たせて助けてたべ」。

僧はいちごをつく／＼見る樣子、で、譯も無くうなづきました。

「いづくへお行きやる？」

「內裏へ歸らう心で。おくりて給はらば此上なき幸でおりやる」。

「やすい事でおちやる」。

はからず爰に助けを得た嬉しさ、當てにならぬやうな物の、しかし地獄で佛のたとへ、千百の護衛を得た氣になりました。のみか、運よく敵も追はぬ體、それから一群れ、二群れ、道で他の武士どもには遇ッたものゝ、いづれも此方をじろ〳〵見るばかり、咎めもせず、ことさらいちごは道に落ちて居た破れ兜をひろッて顔をさへ深く匿したこと、つゆ程も終にあやしまれんでした。

が、氣になるのは脩の樣子でした。手甲から洩れて見える手の工合、わづかに差しのぞく目にとまッた腮の樣子、充分に若い男には違ひなく、十が九までは窠子かとも思はれました。窠子なら言葉をかけるかも知れぬ、それが左樣でも無いまゝ、或はとの疑ひも出るものゝ、しかし賴んで直に承諾したところを見れば何となく怪しいやうでした。こらへかねて宗門はと索引いて見ると、禪の趣きをこたへました。

第十八

すでに宗門を禪と云ふからには十の七八まではこの沙門は窠子らしい、それにしても身のなりがかう早くもかはるものか知らん。

鼠の栲の常着に輪袈裟をかけ、編み笠を深くして居ました。さしのぞいても顔はよくも見えぬ、まして出家に對して俗人が笠の中を機關（からくり）か何ぞのやうに差し覗くのも無禮のいたりゆゑ、辛く辛じて偸み目でわづかに心をすかさせて斯うかあゝかと思ひ惑ひました。

姿と言ひ、聲がらと云ひどうしても窠子でした。問ひかけても容易に口を利かぬ無口もまたそれと同じでした。ことに推察を固めたのは其出家が小太刀も懐中にして居た事です。

仕込みなら仕込みとして刀物をば持つのが出家沙門の作法。それを、如何に戰亂の世とは言へ、たゞ腰には佩びぬとの言ひ譯だけ、鞘がしらを些し懐中からあらはして利器を携へて居た工合ひ。どうしても武家あがりの出家でした。

が、それにしては又仕度の早さ。しかも連れ立つて歩いたのは昨夜の眞夜中過ぎ、それから、如何に窟子が非凡の人であツたにしろ、殿へ許しを願ツてさて身をやつして出るのに一日とかゝらぬといふ事も無い譯、それとも前からあらかじめ仕度をして置たのか。まさかそれ程でも。

「いづれへ御わたりの御心でおりやる？」せめて行く先きでも聞いたらばとの思案。

「まだ行く先きは定まりませぬ」。

「つねに行脚しやるか？」

「なか／＼」。

「いづれの御うまれでおりやツた？　御名は？」

「名とは俗名でおぢやるか？」

「俗名でおりやる」。

「俗名御聞きやる譯はおぢやるまい」。

木に竹、あぶら氣の少い挨拶は元より忘れもせぬ窟子の固有たゞし取つく處も無くなツたもどかしさは前よりも一人、で、うか／＼と道を拾ツて居る内にいつか我家ちかくまで來ました。それ迄に問ひたゞさなくては——あゝ、しかし其手段は皆無。終に否でも應でも片はつく。

「最早內裏。それがしは此處で」。

言ツてわかちさうにした袂を引きとゞめて。

「忝なう——なれど、上人。こゝろよく救ひたまふた嬉しさを何にたとへましやう。あはれ、しばらく、行く先を定めぬと仰せらるゝからは、喃、妾の家にこよひ一夜」。

僧はいつかな聞き入れぬ。聞き入れぬところを見ればいよ／＼窟子にちがひは無さゝう。そのつれなさの怨めしい！　何の、左樣うとまずとも。まゝよ、婦人の一念、引きとめる手をふり拂ツて後をも見ずに行くその跡を追はうか知らん。

折角家ちかくまで歸ツて來て、それで顏をも見せずに又も兩親に苦勞を重ねさせる事か、もし是で出家の跡を追ツて行けば。昨夜居なくなツてから嘸や嘸、あゝ老の

友とたのしみにして下さッた親を暫時なりともくるしめる身の不孝。われながら不孝とは知る、不孝は子の道で無いとも知る。しかし今こゝでこの出家を取りにがしたなら、相手は雲水の身、跡で山の端の霞をながめて昨日の雲の名殘りと思ふのも鈍ましい。目的は自身でも自身がいやしく思はれる劣情、が、劣情！　自身がむしろ自身をいやしまずに、たゞ劣情といやしんだものならいゝものを。

荒れ野十里、見わたす果には山が限り、朝日影を背負ッて行く出家の後かげもやうやく……やうやく……やうやく纖く――なッたと言ッたばかりで見て居られやうか。

二三歩ふみだして又一思案、それにしても――と思へば父母の姿があらはれて、行くなと言ッて呼び立てるやう、あゝ御尤、嘸、まことに！　常から御心よわい母上の事、蝶よ花よのいとし娘の姿が見えぬといふ上は――あゝ朝夕の御物をよく聞こしめしたらうか、それとも嘆きにかきくれて……

世の中は氣丈で無くては。めゝしい繰り事とは自分ながらも知る、男子ならまさか是ほどでも。男、それにしても窟子。

あゝ遠くの丘が影をやゝ呑

あれから先きは？

しかし、思ひ返せ、もしあれが――窟子ならば勞して甲斐もある――もし推察が間違ッてまた眞の戀人で無かッたものならば、追ひかけた甲斐も無いこと。さあ、どちらか。

と思ひ出して見ると、また打ちこはす樣な考へが邪魔(いちごの言葉を假りて言へば)に出て來るやうな。窟子なら、よも、よし道徳堅固な人にしろ昨夜わが目的をさへ話した程のものが、今日こちから水を向けられて終にをはりまで默ッて居る譯は無さゝう。或は人ちがひでは無かッたか知らん。

人ちがひかも知れぬ、が、それとすれば又尤もうたがはしい事が有る。

われで我を評すれば人もほめてくれる程の美色、それ、いちごと言へば大方名も京洛の間に聞こえわたツて居る樣子、義政さへ、解語花いくらも媚びをたてまつる中に、この自分を一向に懇望して――そればかりか外の下郎下司に至るまで自分をば美人と一般にみとめて居る、その美人にねんごろに消れと勸められてそれでふりきツて逃げるやうに、影だけを打ち棄てゝ付き穗も無く行くといふのは通例の男子の情にありさうも無い事。

小供の中から見覺えた宮中の淫奔な風習、その間わが觀察にとゞまツて、そして世界一般の男子の情は斯うと見とめを付けたのは宮中の男子が美人をねらふ一事、大抵なものがまづ身をへりくだツて女子の歡心を結ばうとのみせる世の中に、あやしい出家袖を拂ツて清淨を身に背負ツて行きくさツたところを見れば、どうしても凡人とは思はれぬ、どうしてもそれが男子の普通の情ではない。あるひはそれが窟子で無いにしろ、一念悟道の外にたづさはらず虎狼といましめられた美色をば命をけづる刃と心から身ぶるひして逃て行ツたかも知れぬものゝ、しかしつら／＼思へば、今この澆季の世の中、倫理のくづれたのは大内の垣よりはげしく、人情の色褪めたのは二位の紫にも負けぬ世界に誰が、よし出家にしろ、十戒で身をかためやうか。葷酒を禁ずる山門の石杭を城の兵が砦行にうばツて持ツて行けば、それなりで結句毒で毒を制したやうな心持ちになるのが今の出家の大抵の有りさま、悟道の目に美色を寫らせぬといふのは覺つかぬこと。

どう思ツても窟子に違ひは無ささうでした。ああ其人は兎角の內すでに影も遠くなツて……いよ／＼こゝが決斷の境、決心しろ！

よし違ツたにしろ、違ツたらそれで思ひあきらめて歸れば宜い、眼前に肉の堆いのを見て猫がどうして手を出さずに居られやう。いざ決心！

終に跡をば追ひかけました。が、相手はすこぶる進んだこと、追ひつけるかどうか、それも分からぬ位でした。

第十九

京洛もかれこれ盡きたらうと思はれる處まで來て見ても男の足には追ひつけず、いつか／＼姿を見うしなツて仕舞ひました。咽喉は燃えるやうにかはく、呼吸は迫るほど急しくなる、で、途端に井戸さへも有りませんでした。

昨日か、一昨日あたり此邊に軍も有ツたのか、道は一面すさまじさに充ちて居ました。右へ五六丁の處にあたつてはるかに民家も有る、その民家には兵火が猶炎々と燃えたツて居ました。途端には死人が算を亂して屍を曝して居て、いづれも其血はまだ鮮か、その顏付きの猶なまなましいところ、其世の中の者も慄とするくらゐでした。

差しちがへて死んだらしい、折り重なツたのも有りました。物めづらしさに差しのぞいて見れば、上からは下の咽喉をゑぐり、下からは上の首を突いた樣子、上の首の横には尖先きが白くあらはれて、そして下の男の眼中には血がたぶ／＼と浸み出した鹽梅、くツきり見開いた目ざしは宛然猶生きて居るやう、その凄さ、目は最期の光りに白く、鮮血とうつり合ツて口に言はれぬ哀れをみせて居ました。

もはや分捕りはすんだと見えて、幾十となく斃れて居る死骸の中すでに目ぼしい太刀や具足を持ツて居るものは無く、中には丸はだかにされたのも有りました。そればかりか、既に物を分捕つたといふ記しにかならず一刀づゝあてゝ有りました、一刀づゝまるはだかにさへ。

主の無いはなれ馬が氣の拔けた顏でうろ／＼して居るのは隨分の數でした。戰ひの濟んだ跡はなる程こんな物かといちごも始めてつく／＼知りましたが、それにしてもこの物すごい體を見ては何か心もちもわるくなりました。

それかと思ツて見ても見わたすかぎり軍兵の影が一つも見えぬ、就いて推すれば遠く陣を收めたのとも思はれ

たものゝ、しかし身をかへりみれば昨夜のまゝの鎧打扮、もし、軍兵に見付けられたなら敵とうたがはれるのは必定、あゝ、わるい處へ來た。かうして、それ故窟子の跡を是から追ふのも亦可否、ても殘念、むなしく立ちかへらなくては爲らぬのか。

心を落ちつけて思へば、どうしても是から先きへ進むのは疑はれに行くやうだ。感心に前窟子を追はうか、家へかへらうかと思ひ煩ツた時よりも思案は早くつきました。怖ろしさが決斷の力を早めてきツぱり思ひを堅め、やゝ後へ引きかへさうとした、その時は最早遲蒔きとなりました。

やゝ踵をかへす途端、むかふに軍勢の影が四つ五つあらはれると思ふ間、あら、馬に一鞭、こちらを指して逐ツて來ました。

蹄の音をば待ちむかへた樣に耳がさとく聞き付けて、ふりかへツて、よせば宜いのに駈け出したいちごの姿、立ちどまツて眺めば狗も吠えぬものを、この思はせぶりは敵にうたがひを增させました。

「すはや、敵ござんなれ。鎧打扮は如何さま名の有る武士めいた。それ、逃がすな」。

言ふ聲の文句は明かにわからぬものゝその邊の意味はこちらも推しました。子供の內からいくらか習ひおぼえた鞍味、はなれ馬に追ひついて美事飛び乘りました。

飛び乘つたまゝまだ驅け出しもせぬ內、追手は是にせきたちました。徒歩なら逐ひ及ぶかとも思ツて居たものが騎馬となつた上は……

「それ逃げる。射たふせ！」

無情、箙から矢を取る手も見せず、追手の四人が一同に弓を滿月に彎きかためました。

時刻はやゝ辰わかい處、いさましさうな旭日が高く登ツて人馬の影をみじかく地上にうつして來ました。冬近さにいきほひは減らぬ風、砂けぶりを噴き立てゝ後ろに馬蹄を白くちらつかせる命の競馬場、鎧の袖と草摺とは言ひ合はせたやうな同じ浪を打ツて、早いことゝて馬の

尾は地面と平行。

「矢頃ぢや、ものども！」

追手の言葉もまだ終らず、日にきらめいて飛ぶ白羽の箭數、が、運のいゝこと四つが四つながら仕損じてむなしく道端に落ちました。

あゝ安心。

が、あら、いつか二の矢！　いちごの兜にあたツてかちいり、見る間兜は飛びました。

氣に撲たれて、思慮も最う無、前後忘却していちごはかツぱと鞍の前輪に臥す——早追ひついた敵。

「いけどれ！」

馬を近づけて大手を廣げて立ちかゝツて見てびツくり。大わらはになツた鬢髮の匂やかさ、柳眉怨みを凝らして人を睨む目の色も半ば血走ツて居ました。

「女子のやうな……」

近づいて馬上ながら突き落とさうとした金鐵の腕ぶしもなまりました。で、勢ひをば言葉に移しました。

「落ち武者」、一呼吸のゝしり飛ばして更に言葉を改めました「御運の末でおぢやる。御名のられよ」。

尋常に勝負をしろと迫りかゝりましたが、いちごは目を閉ぢて物も言はず、まだ追手は之を男子と思ツてのみ居る事、人品の氣高さ、いづれ然るべき、由緒ある人と想像して無下に飛びかゝりもせず。

「御名仰せなければそれ迄、繩目ではづかしめ參らせうず。いかに、御名は？」

「繩目を受けう」。觀念しました、たゞ女子と見られまいが一心で。

「繩目を？」いかにも勇氣の無さに失望した語氣でした。「御望みとあらば、繩目にかゝツて陣へ來ませ」。

第二十

陣につれられて囚人となツて、しらべられても終に名を言はず、たゞ思ふ人が有ることゆゑ許してくれろと乞ひねがふばかり、それでも油斷の出來ぬこと、護衛は日

一日とかたくなッて、こゝにいつか四ヶ月を送りました。しらべられる時の應對辯舌よどまず濁らず、あッぱれ器量のある武者と見えた、それには陣の頭人大幸主水助もつく／＼感心しました。捕はれてからこのかた爰に四ヶ月、その間いちごは鎧を着ず脱がず、湯をすゝめて決して入らず、たゞおだやかにして居ました。敵の武者を、歸順もさせずに久しく養ッて置くのは虎を畜ふのと同じこと。駈け出しの若大將でもその位の道理を知るものを、生まれ落ちてからこゝに五十年、十二歳の初陣から一年宛手創を看板に儲け溜めて今日までも一手をあづかる山名黨の主水助が思ひつかぬ譯も無い、それで猶いちごを圍ッておくのはよく／＼の事でした。

實に今度ばかりは別に思慮もなく男のふりをして却ッて幸ひをも得たやうでした。が、男のふりをしただけ逃げ出す隙も無いことでした。

家を不心得から出て自業自得とは言ひながらやがていつ歸れることやら。そこへ思ひ至ればそゞろにうら悲しくなりました。すでに最も四ヶ月、家を出た頃は葎がまだ青々として居て、今はそれも鴈のなみだに大方染められたこと、陣屋の軒にしばらくの命をむさぼッて生ひ出た草さへも既に黄色になりました。陣營の夢、たゞ聞くさへ無情なもの、まして心なくとらはれて空しく楚歌を聞く身の上に於ては。夜さへて月あきらか、氷りのやうな光りを浴びて大地一面霜にこほるばかりの夜中にも劍戟の音に夢はやすくも結べず。火も無い一間どころには雪氣がものを得顏に骨にめり／＼食ひ入りました。

「山中暦日無し、寒つくれども年を知らず」。陣中でその詩の意味を今味へば、子の日の小松の日も、粥杖の日も思ひ出されるばかりでした。

粥杖の日に、去年宰相の若君がいちごばかりを追ひまはした事も有ッた、その時とわづかに一年、兒の手柏の裏表の運となりました。もとより身でまねいた事千萬悔いても歸らぬこと、また仕方の無いことながら、あゝああ忘れやうとしても忘れられぬのは最初の自分の思慮の

淺かツたこと、窟子にもあへず、親にもあへず、いつ何うなる事やら。

思へば窟子とはよく〳〵の腐れ緣、結べもせず、それでそのために我が身のわざはひが出來るばかりの惡緣、どうしてこんな忘念がわくものか。

自分の身が女といふ事を明かした方が逃がしてくれるだらうか、どうか知らん、もれ聞けば敵の軍兵の中に「あれは名高いいちごぢや」と言ひはやす者さへ。いつの間にか有るとか、まだそれを頭人の主水助は信ぜぬやうな、それだけが仕合はせなものゝやがて其内に信ぜぬとも言はれぬ譯。信ぜられたら化けの皮はあらはれる事。

さうかとて男のふりばかりして居ては何時までも際限は無い事、思ひ料るところ、男のふりをして居れば臣下にでもなツた上で無ければ身は自由になれさうも無い。臣下になるふりを爲るだけなら譯も無いが、神文に血判して盟はなくてはならず、さて神文すれば盟ひを破る譯には行かぬ。いつそ女と明かしてあはれを乞はふか。士卒には褒められて居るものゝ、主水助とて男、あるひはまた女と聞いて仇めいた心を起さぬとも言へず、さうした上は――何、身をまかせるぐらゐの事は何でも無いものゝ（！）……またやがて窟子を此身が慕ふといふ事をも洩れ聞いては窟子に遇ふ邪魔をもするに違ひ無い。

薄茶をたてたから一服呑みに來いとて頭人から使ひが來ました。時服を一領さへ添へて來ましたがそれを着るなどは無論出來ぬこと。それにつけても假り屋ずまひの陣中で猶時服ぐらゐは始終あたらしいのが間にあふ驕奢と見るまゝ大内の衰頽も思ひ出されました。

此頃の流行りもの、茶に事よせて人を刺し殺す風の多いところ、或はこの、今の茶の招待は何か思はくの有るわけで無いものでしやうか。

爐の炭を見る油斷を見てたゞ一刀に斫り殺すとか云ふこと、入り口の狹さ、坐敷きの勝手不自由、兎角茶室は表に優柔を見せて裏に陰險な殺氣を持つところ、そこへ

具足がけで出るのも素より禮で無いこと、しかし、時服にあらためれば婦人とは直に見て取られる譯、さて困ッた事でした。

否だと云ッて辭まうか。卑怯とあざわらはれるのは兎に角、何にしろ、禮を以てむかへた物を素氣なく返すのも智慧の無い到り。さうかとて具足がけでは出られず……

むかへが再度來ました。云ひわけの口實がほとんどなし。折角の時服を着ぬのは親疎に論なく上も無い無禮。さァ使ひに何とこたへやう。

「まだ召されぬ？」

不思議さうにいちごを見る使にも氣の毒でした。

「今まゐらうと思ひまする。しばらく御前よろしく……」

馬鹿が借金取りに云ふ一寸のがれのやう、出まかせの當てなしを云ひまくりましたが、さて跡の手段が胸につかへました。どうして、出ぬわけには行かぬ、と云ふ子細は、實に殺されるものならたとひ茶室へ行ッたにしろ、行かぬにしろ、殺される事、またかよわい身をわざ／＼茶室で殺すに及ばぬこと。それこそ思ひ中てれば前の邪推もいくらか淺はかに見えました、そゞろ微笑まれるくらゐに。

と爲ると工夫もすこし口を開きました、着様によッて時服でも大して見やぶられは爲まいとの工夫が。更に三度の使ひを待ッてはいよ／＼失禮、決斷がつくや否や、その決斷がいゝにしろ惡いにしろ待ちつけたと言ふ體で終にそれに任せました。

三代將軍義滿の時大內義弘が京洛に亂入した俄のさわぎの時から長袴といふものが大きにすたれて今は大抵短袴、今の時服に添へたものまづいくらか穿き宜いそれでした。殺すくらゐなら長袴にしさうなもの、變則な茶會も有ればあるもの、しかしまさか太刀を佩びる事はなるまい。で、太刀をば殘して立ち出ました。手のまゝに一人で髮をうしろに束ねても天成の美色はます／＼匂ひこぼれる斗り、初春には相應の薄縹、紅顏とてり合ッて天

晴れ見る目も飽かぬ程でした。

　扈從にみちびかれて茶室へ行ッて見れば、譯も無いこと、たゞ主水助と年十四五の扈從二人ばかりでした。要するに何か相談の有る事と早くも推察しました。

　思はず出るしとやかな身ぶりに、はッと氣が付いては急に男めかす狂言の切なさ。唯身のこなしは何うにもまぎらはして付く物の、困るのは乳の兎角高くなる事でした。始終氣をもんでは袴の下から手をさし入れて胸をきりきり引きしめるその手數、素ぶりも自然をかしい樣子。

　茶會といふのは唯名のみ、主客分坐の席でした。一服の茶も濟んで、やがて四方山の物語りが始まッたものゝ、話しは、あら、飛んでも無い！

「和君は」、主水助が、「窟子太郎を御知りやるか？」

　婦人と察されたか、しかし「和君」と言はれただけ脈は有る。唯窟子といふ一言、雷のやうに胸にとゞろきました。思はず紅くなる瞼。

「存じませぬ……」

「御知りやらぬ？　いかさま名にも御聞やらでおちやッたか？」

「名は聞きまひた」。

「うるはしい男の子でおぢやる、さながら和君のやうに」。

　あゝ切ない事を云ふ！　思はくが有ッてか。無言で微笑するいちご、その下向きの顏の愛らしさ、恍惚となる程でした。

「されど世には變はッた人も有るものでおぢやる喃。窟子など、和君は御知りやるまいが、名高い茶山寺の姫御前のいちごとやらいふ人に戀はれまひたなれど、戒めに背く言ひ立てそのために遁世したとの事でおぢやる。いちご姫なんどに戀はれて知らず顏なのは男の運を知らぬ人めいた事ながらまた聞けば流石の譯もある事でおぢやる」。

　すこし事實とは違ッたものゝ、猶胸には一々こたへる言葉のはし〳〵、ことに「流石の譯もある」とは面妖な——

「いかな譯でおぢやる？」

「かう言ふ譯でおぢやる。まことを言へば窟子は――是は今日この頃知れた事――公卿の落とし子であッたとの事、その公卿は誰あらう、外でも無い茶山寺……」言葉の中ながら霹靂はいちごの耳！……

「……の落とし子との事で、いちごとは生みの兄弟とやらん云ふ事。それ知ッてゞありつらう、いちごに戀はれても更に其心にしたがはなんだ。禪と云ふは言ひ脱ける言葉でおぢやッたらう」。

〰〰〰〰〰〰

でも、さても、この意外、この驚き、この噓、この眞。兄、妹！　馬……馬……馬……鹿らしい！

噓とより外いちごには思はれませんでした、いちごはまた窟子の素生を前に聞いたことも無いことゝて。せめて今の主水助の言葉に近い事を前に聞いた事が有ッたものなら――しかしさうでも無い事。神ならぬ身の、窟子は、茶山寺ので無いにしろ、公卿の落とし子とはまだ信じませんでした。

しかし、氣にかゝる。どうも默ッて其話しも雲霧と見做してたゞ耳朶を無駄に通らせる譯には行かぬ事でした。

よそはふ氣でも顏色は自分ながら常と違ッたやうに思はれました。目や手や其他一切の遣り場、注ぎ場がほとんど無いやうでした。

「茶山寺の落とし子とはいづれにか證でも？」

わづか五六の句、しかし言ふに骨の折れた事は！

「無いことはおぢやらぬ。窟子はもと鱗丸とて微笑庵――今は燒けました――てふ禪家に居たもので、その師僧が人に物がたッた事がおぢやッた。それがしもそれから聞きまひた。窟子は其處で生ひ立ちまひた」。

なる程、しら／＼しい噓でも無さうでした。が、何うも慾が有ためかまだ腑には落ちませんでした。兎に角、それならそれで窟子に直々面會して、充分に尋ねた上で無くては分からぬ事、この思案はさすがに付きかけたも

のゝ、しかし猶また邪魔する言葉をまた主水助が言ひました。

「なれど、あゝ爲るくらゐならば假令兄弟にしろいちご姫の言葉聞き入れてもようおぢやツた。なに、死んで榮えがおぢやらうか？」

死んで？

「とは？」問く、目が。

「殺されまひた」。

「殺ッ！　いつ？」

「今から」、指を折ッて見ました、「四月ばかりの前、あ、和君が此陣に御出でやツた日の朝でおぢやツた、此處過ぐる賣僧が有ッて……」

あゝ〳〵聞くにも氣が急く。

「賣僧、沙門の身として利器をふところにして……あやしい者と認めて雜兵が射殺しまひた」。

これもまた何うした事。やはり窟子に違ひなかッた！

主水助も愁傷の色を面に泛べ。

「知らぬ事とて見あやまツたのも詮無いこと、雜兵の罪でもおぢやらなんだ。沙門の姿などして斥候するもののある世の習ひが有れば言ふも愚痴ながら、それから屍骸をあらためて見ておどろきまひた見覺えの有る窟子でおぢやツたものを」。

「さては窟子は死にまひたか？」

われとわが聲に氣がつくほど聲は變はツて居ました。

さとツたか、主水助――

「いたい御驚きでおぢやる、喃」。

で、微笑。それも心ない。どうして笑はれるどころか。跳ね木にかけてしめられるやう、肉も血も一同にとろけて流れるやうでした。

第二十一

人は苦痛を受けるために此世に生まれて來たものか、快樂をかせいでは手ばたきにして苦痛を買ひ、快樂を得やうと戀ひこがれてそれだけに無代でもまた苦痛を買

ふ、とんと譯はわかつたやうで、思へばまた分からぬもの、窟子を〳〵との一念それ石にも矢は立つたと言ふに、まさか其石にひゞわれが出來て居たのでも無かつたらうものを、この一念は益に立たぬのか、多分は木の股から生まれた窟子の胸にはどうしても立たず、あいや照覽の天津大御神、八百萬の神々たちの御目にもとまらず、何事か、ても死んだとは。もうそれが嘘で無かッたことならば。

こなながらを樂しみに甕能三片を竹の皮つゞみにして小脇にかゝへて家へ歸つて、見てはじめて狐に取られたやうな心持ち、之を馬鹿と言はふか、阿房と言はうか、こけと言はうか、たわけといはうか、しれ者といはうか、又は愚物と言はうか、和名抄をたづねても見當りさうも無い。

束の快樂を心でむさぼつた果て、死なれて何の甲斐が有らう。まざ〳〵とした言葉、十が九までは嘘とも思はれぬものゝ、しかし贔負心で辯護すればそれにしろ自分が自身で實否をたづねた上でも無いこと、礎松の芽がくの字になるのを神靈の仕業と言ふ下に八重薄を見付ければ化けの皮は剝ぎとられる道理。

兎に角どうかいふ手段で籠の鳥の不運をまぬかれて氣儘の身になつた上で其實否を正した上で思ひあきらめるなら諦めるともしたい、今さとられてはそれこそ大變、どうかして包み果せやう。

躍る胸をこゝぞと一心籠めて靜める、その間どうして居るかと主水助をちらり。

睨めばいつも〳〵その度わが眼も先方の目と鉢合はせ、が、變、どうも悟られたらしい。

鉢合はせする先方の目は戀ひに曇つたいろどりでした。面がまへから骨ふし、戀ひの「こ」の字も知りさうも無い人間ながら目は口よりも物をよく言ふ樣子、こちらを見る瞳が兎角氣になりました。

何にせよ、此方の邪推かは知らぬものゝ、主水助は此方をいちごと悟ッて、そして氣の有る樣子、さて困り入りました。こゝ術計はほとんど盡きました。先方は乘り

地の體、そろ／＼坐をくづして、茶坐敷きに何の事、用も無いのに膝を進めて來ました。さァ何を言ひ出すか知らん。

　さすがに胸もはげしく躍り出しました。さしうつむいて、それで鋭く目をつかッて主水助の樣子に心をつけて居る處へ――何、俄に物さわがしくなりました、陣が。

　武具の響が爲る、と思ふ間もなく茶室へ駈け付けたのは雜兵でした。で、屆彼に言ふやうでした。

　漏れ聞いていちごも仰天、無論頭人も。漏れたその聲――

「敵……畠山！」

「何ぢや、敵？」坐を蹴つて主水助も立ちあがりました。

「敵でおぢやる。寄せまひた」。

「いかほど？」

「千騎ちかく？」

「たれの手か？」

「知れませぬ」。

　その內にばら／＼いくらも駈け付けました。異口同音、

「するどい駒足でおぢやる」。

「す……るどい？」主水助が。「物ども、それッ！」

　手眞似で鎧と知らせる間も無く――ぱッとして猛火の光り――

「すは！　火を掛け居つた」。

　胴を投げ掛けたばかりでした、御免と言ッただけをいちごへの挨拶として飛び出して、直ひとまづ立ち歸る氣。軍の樣子を見に出れば、これはいかに敵は旣に陣幕を斫りやぶッて邪魔な物をば打ちこはす共すさまじさ、まだまだ見たことも無い不覺を取りました。

　「こは……もう」。開いた口だけ。氣が付いたのはいちごの事でした。逃げられるだらう。何と思つて氣にしたのか。

　あわてゝ引く足、見て取る雜兵――

「無益ぢや、もう。頭どのが御引きやるッ！」

今はもう總くづれ、敵はます／＼勢籠みました。既に倒れかゝッた瀾、引きもどす腕は無くなりました。

で、いちごは？

あゝ、この俄さわぎは天の賜でした。誰も忘れて仕舞ひました。はじめ主水助が茶室を出る時、誰彼の區別なく彼其跡からうッかり茶室を立ち出て仕舞ッた、それにいちごも料らず便宜を得ました。今になつて思へば時服に着かへてあッたのが忌はしいやう、むしろ此さわぎ、鎧が望ましかッたです。が、敵は込み入る氣はひ、たゆたふ內には幸福が裏を見せてまたも俘囚のはづかしめを受けるに決ッたこと、で、混雜に紛れて廣庭へ飛び出しました。

こゝには馳せちがふ味方ばかりでまだ敵はかゝらぬ體、直に逃げ路をさがしたものゝ、生憎こゝは土塀のある庭で――しかし似氣ない勇氣も加はりました。足にあたるものを傳手にして辛く土塀を這ひのぼッて、今はもう運だめし、さて血路はと見まはせば、あら嬉しい！人のかゝらぬ小路が向ふへ付いて行きました。が、既に逃げて行くものはちらほら。

火はすでに陣にかゝッたこと、元より板庇の假り屋づくり、瞬く間にひろがッて、嵐にさへ手傳はせて炎の飛ぶのは地獄も斯うかと思はれる計り、何が無し、火の噪ける音と、劍戟の響きと、殺戮の唸き聲が一途になッて只凄まじく聞えるのみでした、戰場の實景と言へばいちごの後の記憶に殘ッたのは唯是だけ。

で、その餘の事は大抵夢中、たゞ運がよかッたと自分ながら不思議な心持ちがするやうな、終に兎に角一里ばかりの遠くから後ろの火の手をふりかへる位な幸福になりました。

けれど不知案內の道、何が何かさらに勝手は知れませんでした。足にまかせて逃げたこと故、何處を經て來たことか、その記憶は皆無、闇は行く先きの目的をさへ封じて便宜を與へてくれるものも無くなりました。

今迄に思ひつかなかつた事、今日に至つて始めて人間

の恐さを覺えました。陣を出たばかりの一本路、もろともに同じ方角を向いて走るものは言ふまでも無い同じ陣のものども、が、それさへ何となく恐いやう、まして敵などは！　なるべく人の無い處とのみ却つて望む氣になりました。今はなかなか禽獸は恐ろしくも無くなりました。

まづ見わたした限り人も走らぬ樣子、心はやゝ落ち付きました。道端の木下闇をたよりに捨て石に腰をかけてつく〳〵と思ふほど身は丸で夢でした。

「逃げてまづ嬉しかつた」。こはい思ひをした丈の甲斐は有ッて、それだけの償ひは有りました。既に悟られた身の上、只事では何うして主水助の手を逃れ得られやう。が、意外にも意外の合戰、あゝ何が仕合はせになるものか。

まだ九仭の功が猶一簣をのこして居ました。今の場合ひは唯逃げただけ、逃げ果せたとはまだ〳〵言へぬ。が、さすがに婦人だけ、逃げおほせただけの滿足をば覺えました。それにしても主水助は生きたらうか、死んだらうかの考へは何を望むともなしに催しました。けれど胸を去らぬのは主水助から聞いた言葉でした。

こゝは何といふところか、聞きたい（今は人が戀ひしくなつたか）にも人はなし、いづれ人家も元有つた處らしいといふ譯は道端にこはれた材木や礎があまた殘て居たことでした。何といふ處か、夜、しかも月さへ無いゆゑ方角も知れず、何にしろ人家をさがして聞いて見やう。

立ちあがッたものゝ、足の重みは俄に、おどろく程加はりました、氣の弛みが加へた重み、張りを強くしたらやがて直る事、われと我を奬まして道をひろふことも、もはや躓くやら、踏みかへすやら埒は無く、で、二岐の追ひわけ路になッて、見れば右の道の方にも、また左にも遠くに各々人家が有るやうでした。人家もう懷しく、どちらと擇ぶといふ氣もなしに左の道へ志し目的の人家の門に立ッて家の樣子をさしのぞけば、この淋しい白屋に十五六の小娘一人居るやうでした。

氣もやゝ落ち付いて戸を叩いて案内を乞ひました。乞ひながら外から内の樣子をうかゞへば矢張り間違ひもなく、娘一人しか居ぬ體、ふいと中では驚いた體で中腰になツて呆れ顏で門の方を見て居ました。

皮厚な田舍むすめとは誰が見ても推察出來る風、深夜人にたゝかれて如何にも仰天した體でした。

外ではまた叩く、内でいよ／＼氣持わるくなる、すかして見ては氣の毒にも覺えました。

「喃、問ひまゐらす、こゝは何といふ處でおりやる？　それに湯一つほしきに無禮いたすのでおりやる」。

聞き定めれば女の聲、しかし疑へばこの深夜に女が何うして。

「誰ぢや？」内から始めて黄ばんだ聲で。

「旅のものでおりやる。こゝは何……」

と言ツて戸に手をかけてゐる内、戸のしまりが意外にも外れました。先方をおどろかすのは氣の毒ながら背に腹は代へられず、偶然に開いたものをいゝしほにしていちごは門の中に入る、見て家の娘も化轉しました。叫び聲も出す、見れば武士、あら氣味のわるい。が、それと共にぞツと身にしみたのは武士の容色でした。そのあでやかさ、元より女子とも疑はれる程でした。

こはさ、氣味わるさ、しかし又見たさも見たさ、娘は家の中で立ちすくみになりました。

「こゝは何處わたりでおりやる？」

しかし直に返事は來ませんでした。もじ／＼して、

「嵯峨野」。

「嵯峨野？」平家で聞いた瀧口の入道の事も思ひ出される。で、窯子の事も。嵯峨野！　昔から青道心の捨てどころ。が、考へは只それだけで眼前の利害のために横へ移りました。

「無禮な願事ではおりやるが、湯をひとつ……水でも大事おりやらぬ」。

また娘からの挨拶は有りませんでした。けれど否みもせぬ體、古ぼけた器にぬるま湯を注いて出しました。

第二十二

白屋の娘とて只人ずれぬだけの子供、待遇の疎末なのは別に深い理由の有ることでも無く、やがて色々いちごに話しかけられて些しは打ち解けても來ました。が、いちごは女といふ事を此處でも隱して居ました。嵯峨野といへば思ひもつかぬ處へ來たこと、身を免れたのを幸ひとして、是から早く家へ歸る工夫も付けたく、そのため地理をいろ／＼聞き合はせもしましたが、その間また不圖耳に止まつた事を聞きました。

かれこれの內、娘の老婆も歸ッて來て、それからまづ泊まれといふ迄のしたしみになり、やがて一寸した話しの內に窟子のやうな人の居る處を聞いた事でした。

昔からこの嵯峨野を靑道心の捨てどころとしたとも偶然にも思ッた。そのいちごの空想も何か眞らしくなりました。前にいちごが思ひ迷つた右の方の途に見えた人家がその人の住家との事でした。

顔付きを聞けば麗はしいとの事、年齢を問へばかれ是廿歲との事、時をたづぬれば四ヶ月ばかり前から庵を結んで居るとの事、どうしても其人でした。召しつかふ僕も童もなく誰一人で行ひすまして居るとの事、折り／＼はこの老婆の家にも來て自由に談笑して夜の更けるまで遊んで居ることも有るとの事で、それは何うやら窟子と違ッて居るやうでした。眞面目でばかり居る人かと問へば、老婆は一も二も無くかぶりを振りました。「さッぢやおりやらん。いたい面白い人や」。どんな話しをするかと言へば、佛くさいところは一切無く、何も角も俗人に違ひないとの事、酒も飲めば肉も食べるとの事でした。老婆も葷酒が出家の方の禁制と知らぬでも無い、それ故に何故道心のくせにそんな穢らはしいものを食べると詰問した事も有つたとの事、さうしたら、貫くには素を養はなければならぬと、何か言ひ脫けめいた事を言ッたとの事でした。

さて窟子か知らん、他人か知らん。いちごは自分で自

分を考へれば充分に窯子の人となりを知つて居る心持、それで思へば窯子はどうしてもそんな得手勝手な事をするものとも思はれませんでした。が、氣にもかゝりました。何にしろ、尋ねて見たが大丈夫で、好い加減に言ひくろめて其夜は其處へとまりました。白屋のことゆゑ家は一間しか無い、老婆と娘といちごと三人枕をならべて雜魚寢をしました。さま〴〵な物思ひでいちごは眠られず、それで聞き付けました、何故か、溜め息のみ多く爲る娘の氣はいを。

第二十三

あくる朝は朝日が匂やかに出ました。初春の景色、どこに何うといふ事は無いものゝ猶零落の身にも心よく思はれました。零落にしろ危なく災難の處をいちごも逃れた、その嬉しさは流石に今までも消え失せず、猶何となく心をいさませました。ことに昨夜聞いた不思議な人、その人を是から尋ねるといふ樂しみも有り口から出まかせにつくろッて白屋の老婆から婦人衣を借り、自分も佛心の有るもの、それ故にしみ〴〵其沙門と話しもして見たく、そのため女姿に打扮つてその庵を尋ね、道心をためしてやらうとの言ひ草でした。

娘の一枚着の晴れ裝束をねだりだして――田舍ものはさて質朴なもの――また貸して、そのかはりいちごは刀と着て居る衣服とをば預けて置きました。手づくりの二葉松の表着に取つて置きの市女笠、兎に角花も禁苑に入れば匂ふとか、打つて付けの粧ひも出來ました。「あツばれ女子でおりやる」と眞面目で言ふ老婆の心の程も我ながらいちごにはをかしいやう、見惚れて口を開く娘の迷ひも可愛らしいやうでした。

白屋を出て、敎へられたまゝの道を過ぎて例の庵室へ行き着いて見ればなるほど物がたりにでも有さうな體でした。

もと住んだ人は誰か、素より是ぞと目を付ける程でも無い家づくりではあるものゝ、猶こゝ庵室かと思へば、

見る物が只何となく俗とは違ッて居ました。行く途すがら何の氣なしに梅を折ッて玩んで手にたづさへて居ました。が、こゝに至ッてふと湧いた思案が出ました。

家の主は誰かわからず、見とほした處、背中だけを見せて頭をば障子の蔭にうづめ、經机に向ッて居るのがすなはち例のその人か？

「喃、たのみまゐらす」。

中の人はふりかへりもせぬ、では今が行の最中か知らん、それとも禪僧がよく爲る俗おどしか知らん。こゝろみやう。

主水助が言つた、竊子が殺されたといふ事も一理あるやうに聞えるものゝ、さてどうやら信けられぬこと、大抵は左樣あるまいと信ずるものゝ、また此處に居るのが竊子かどうかは疑はしい限りでした。音信れてこゝへ來たのはほんの念ばらしのためばかり、白屋の老婆から聞いても何やら人は違ッて居るとしか思はれぬ、萬一さうで無く人違ひで無かッたにしろ、眞の竊子なら並大抵の手段ではおいそれと言ッて逢はぬのは知れた事、むしろ手をかへて此方から名乘る方が荒膽をひしぐかも知れず…

「喃、たのみまゐらす。これは茶山寺のいちごといふ者でおりやる。うけたまはりたい事あッて參りました」。

と言ッて、中のものが竊子なら決してふりかへるまい、竊子で無ければ怪しんでふりかへる譯。如何にも竊子で無いにしろ、行のために動せずに居るかも知れぬものゝ、それならそれで別に試る手段も有ること。

が、竊子か知らん、ふりかへりませんでした。

案の如くふりかへらぬとしてもさて其處で考へが付くと云ふ譯でもなしたゞ義理で責めるのが上策。

「喃、竊子どので在しませう。名をいつはり、形をかへて見參するを知らぬ身ではおりやらねど、さて事々しく名のる心根御さとりやれ。今日勤行の御さまたげならば今日に限りませぬ。幸のこの梅の一枝、この垣に挾み置きまする程に、明日また重ねてまゐりませう。御心あらば其時までこの梅を取り捨てず御置きやれ」。

哀れにも風流にかきくどいて、深くは怨みも述べずに心を抑へて立ちかへりさうにしました。さて思へばよくよくの心底、中のものは誰あらう、やはり紛れも無い窟子ではあツたので、かきくどく言葉の切なさ、今までになく胸に浸みました。で、いちごも空しく立ちかへる思ひ入れば入る程間ちがひも無く、庵の主は窟子との鑑定は付きました。さァ明日、明日がその境、あれ程に言ツたからには些しは聞き入れたらう。多分明日はあのまゝ垣根に梅をさして置くことだらう。との樂しみにおのづから心もいそ／＼しました。が、今のいちごは昨日のいちごで無く、多少昨日のいちごの煩悩をば持ツても居ましたが、猶それより猶重い望みが俄に心に湧いたのでした。昨日主水助から聞いた窟子といちごが兄弟であるとかいふ事、よく問ひ明らめて、そして品によつたらその誼から窟子を味方にして――あゝ他人は他人の心を知らす――あわよくば足利に怨みの刄を一太刀こゝろみたいといふ、その方に日頃の鬱憤が一入またもよほしたからです。

明日の事が早胸につかへて、貧乏が大晦日を待つやう、くるしいやうな處に新年の樂しみも伴ツて來る心持ちでした。口はよく利き得ぬながらいつもいつも恥かしさうにして世話をしてくれる白屋の娘のあたゝかい待遇も更に心には注まらず、明日ばかりが遲くしか思はれませんでした。

待たずとも暮れる日がいちごには待たれてやうやく暮れて、さて明くる朝がゆる／＼來ました。いざ今朝となれば、さながら物馴れぬ田舍女が宮中の歌あはせにでも出るやうな氣もち、思ひ出して胸も躍りました。

何か言ひつくろツてさてまた勢よく白屋を出ました。途は宙に浮いたやう、身には羽でも生へたやう、早く庵に近づきました。

目指すものは例の梅の折り枝、目のあやまりか、不思議無いやう、是はと胸はまた些し躍る、近づいてよくよく見ても、あら無情、何も無し……

もはや失望と怒りとに燃える目、を放ツて四方を見れば、無殘、その梅はなまじひに物思はせ顔、半ばから折れて些し離れた道に落ちて居ました。

　人が心をこめた梅、それを構はず無殘にも——さてわれわれ二人に或は骨肉のよしみが有るといふことをも知らぬのか、忘れたのか、それとも知らず顔するのか。ただ、否なら否で、たゞ捨てたがよからう物を、半分から折ツて捨てるとは！　それが佛につかへる人の心か。

　屹とにらんで立ち寄る扉、力が有つたらむしツてなりと。で、見れば、障子から、己れ半面を現して此方を見たのは窟子——さあ怒りは混み、混み、上げて來ました。

第二十四

　にくらしくなツた物を今はじめていちごも憎らしいと思ひました。これ程の心根を——人！　どこまで聖人めかす？

　はじめ疑ツたものゝ、來て見ればたしかに窟子、その者が葷酒の禁をさへ守れぬくせに、生意氣な、女性を忌みきらふとは。

　でも白屋の老婆の處へは遊びに行くとか、老若その類が殊なツて居るにしろ、矢張女は女、乳を出して子を孕んだことも有ツた人間。いや／＼、孕んだ子、その子、それとて娘、田舎むすめにしろ既に妙齢、それを、馬鹿馬鹿しい——本の聖人なら見向もしまいものを——尋ねて馬鹿ばなしをさへするといふ癖に。

　なぜ左様うとむのだらう。只の女性と思ツて疎むとは何うも思はれずさうかとて兄弟と知ツて居る事なら猶うとみもせまいものを。不思議でした、どう考へても當てはつきませんでした。

　その癖によくもさう人を冷かしたい事、半面をあらはして此方を見てもいゝ氣味と言はぬばかりに眺める、おのれ、何うして呉れやう。

「いちご御？」

　何を、おのれ呼びとめたのか？　此方からこそ呼ばれ

すとも言ひたい恨みは雲山有る。
「聞く耳もたぬいちごでおりやれど、言ふ口はおりやる」。
罪の無い垣根も小にツくらしい、こじれば脆くも開く、つと中へ入る、篠子は出むかへて、
「いざ、こなたへ」。
白々しい、まだ／＼人を愚弄する。
爐のかたはらに荒々しく座を占めました。擧動の荒々しさに何か魂を消したらしい篠子の顔色。
「篠子どの」、口惜しさ一杯の氣をこめて、「篠子どの、最後でおりやる、これが。なッぜ、梅を……御心に染まずば染ますで怪しうおりやらぬ。口で申されても、やよ口で辭まれても大事おりやるまい。さるを、梅を……つらい御心な……」
とぼけた顔の篠子、「何でおぢやる。はじめから某には會得されませぬ」。
「會得！ なに、これを。梅……梅をなにゆゑ折ッて御捨てやッてか？」
「梅を？ 和御前の梅で？ これはいかに某は……」
「御捨てやらぬとか？ 何を……見る前に折り捨てやッたは……」
「はゝ、それでおぢやるか？ それは／＼」。
「それは／＼とは何事でおりやる？」
いよ／＼詰めよる一心、それを冷笑でゆる／＼迎へ、
「全くそれがしではおぢやらぬ」。
「誰でおりやる、和君でなくば？」
「わらべでおぢやる」。すましに、澄まし切ッて、
「こゝらあたりの里の幼童が仕業でおぢやる。今朝此處通りがてに昨日のまゝなる梅を見て、愛でたでおぢやらう、取り行いて玩んで、折り捨てゝ居ました」。
海は暴れても川は靜といふ落ち付き方、突ッかゝッた身が中々烟にまかれました。
「わらべば玩……んで？」
「それを和君は知ろしめして？……」

「もとより、見て居りまひた。見たれど、其儘にして置きまひた、それがしが取り捨てたにもあらぬ物を、疑はれる筋もおぢやらねば」。

あゝ脫俗、どこまで平氣でかまへるのか？　そして笑ひもせず、可笑しくも不思議でも何でも無いと言ふ顏付き。に、呑まれて今は青菜に鹽――そゞろわが身の麁忽(そこつ)が恥かしく、

「さる事でおりやツたか？　とは知らで。さらば和君は、今日……妾がまゐるを御疎みもやらで？」

「なか／＼」。

いよ／＼恥かしく、「あゝ婦人は心のせまいもの」、と思ふ、思ふだけに日頃の男を尙ぶ心もまた熾になりました。

となると不思議なもの、口が何やら利きにくゝ、言ふに言はれぬ威に撲たれるやう、今さら思ひ込んで來たことも差しひかへたくなりました。が、手持ち不沙汰にして居てもまた蔑まれる譯、兎に角言つて飾りたい心もしました。

何用で來たと言はぬばかりに同じく默ッてかまへて居る窈子の體、問はれぬ先きに早く打ち出したいもの。

遠まはしに、先方からも問はれぬものゝ、其以來受けた艱難辛苦をつまびらかに語る、語れば其內に口も馴れてさし支へなく言へるやうになるものゝ、唯氣の無いのは窈子の樣子――挨拶だけをしてよく聞いて居てはくれて居ながら、それでさッぱり氣の乘らぬ樣。

かたり進んでさて窈子の一身にそろ／＼移ッて、こゝに遁世した子細を、思ひ切ッて打ち出して尋ねれば案外、答へはこれでした。

「この方が心やすうおぢやれば」。

何と言ッてもそれより外言はぬ、問へば問ふだけで同じ事より外くりかへさぬ蛇の生ごろし、面にくゝも有る程でした。素生を窈子は自身よく知ッて居る事と思ッて尋ねてもそれも無駄、知りさうも無い體でした。分かり切ッた事を尋ねて主水助を知つて居るかと問へばそれは

知ッて居ると答へました。

事を爲す鳥は多く飛ばぬとか、生仙人に限ッて俗おどしを爲るもの、窟子も事によッたなら左樣かも知れず、何にしろ、折角聞くに、大聖めかして些しも應ぜぬところは或は其邊が有るのでは無いか。いろいろに素引いて、或は遠くから、或は近くから差しつめ、引き詰め、其心を見る、見るに從ッて折角思ひこんだゞけの張り合も無くなりました。

事によッたら窟子を一味にして例の勤王の妄念を實地に行ッても見やうと思ッた、夫も無駄でした。何を言ッても窟子は深く取り合ひもせず、例のいちごが主水助から聞いたこと、或は兄弟か知れぬといふ事まで說き付けて見ても皆無駄目でした。

問ひながら種々に考へて見る。見ても八幡の藪、どうしても迷ふのみでした。兄弟と名のり合ッたことなら何も兎や角の煩惱ばなしは無くなるまい鬱陶しくも無からう。それを、兄弟と名のりもせず、それかと言ッて、何を目的に道心となッたかも知らせずに居るとはかへすがへす不思議のいたり。

あるひは窟子が道心を起したといふのは別に子細の有る事かとも思はれました。道心といふくせに髮をも剃りこぼたず、また袈裟をも纒はず、わづかに胸高の中ぐけ帶にその體を言ひ譯だけとしか見えぬばかりに粧ふ、どうしても變化、並の人間とは思はれぬ程でした。

とても無駄とまでにいちごも思ひ付きました。が、慾がまだ〳〵手傳ひました。無駄と思ひ付きながら、或はとの思案も躊躇させるために折り〳〵ちよい〳〵と首を出し？　さァどちらかとも迷ふ、迷へば迷ふてまた窟子が高く、左樣とまッて居るのが並々ならず思はれました。も一度と心を引いて見ると窟子は矢張り同じ考へでした——考へも考へ、いよ〳〵出れば出るほど憎らしい考へでした。

公卿がおとうへたのは前に榮えたむくひだけの事、さ

かえたのが理でも無ければ衰へたのが理でも無い譯、これを冷淡といふかも知れぬものゝ、是を冷淡と思ふのは其人の心得ちがひ、依怙の熱に心を焦がし、目をくらました其考へで見れば公平はみな冷淡となるといふだけでした。

義政を殺さうかとの言ひ出しも一搏ちにつぶされました。義政が亡びたら天下の勢が必ず公卿のものになるとの見こみがたしかに立つ事かと冷かされました。

しかし世は依怙、偏頗、私慾、得手勝手で出來て居るもの、其局にあたツては勝手に事をするがよし、義政を殺すとも、活かすとも勝手次第、公平な、公私無差別の心からはどうしても嘲るよりほか仕方は無いと言ツて笑はれました。

禪を修めた故かう取りとめの無い處を言ふのではない。禪は學んだ。禪の趣意には服した。が體裁には服さぬ。坐禪も否、悟道めかすのも否、たゞ一理を知ればとのみ思ふ身分、言ふだけは眞實を表にして眞實を裏にもしたい所存、決斷が鈍さうにも見えやうが、作らぬ決斷を自分は望む、決して禪の悟道めかして言ふのでは無いと奇麗に取りなすやうな、又取りなさぬ事を言ひました。

さうかと思ふと、また公卿の方のものにも大偏頗が有ると言ツて冷笑しました。いちごを馬鹿、偏頗と言はぬばかりにこなしました。終に、あら！　この口達者が！

「よしなく男めかすは片はら痛うおりやる」。

何を言ふかと思へば、結局は人を――言葉にさへあらはして、斯うまで！　何の、さう辱かしめられるいはれは無い。ある今までの煩惱を見てあなどられたのか。

我慢に我慢した果ては氣も逆上ました。おのれと摑みかゝりも爲たくなりました。どッ……どうして呉れやう。「男めかすは片はら痛い」と言ひくさツた。

たゞなら腹も立たぬ、公卿と散々くさし果てた揚げ句、地下が物をも知らぬ亂言、もう〳〵戀ひも何も醒め果てた。

人を「男めかすは片はら痛い」と言ひくさツた。「男め

かすが片はら痛い」と痛くないか覺えて居ろ。
不斷から親にも言はれた身の短氣、また利かぬ氣から辱かしめられて默ッて居られやうか。おのれのやうな畜生とは知らず、畜生、大義を知らぬ人非人とも知らず、今が今まで——あゝ女は淺ましい——めづらしい男と思ひこんで居たのが過ちであッたのか！　何も辱かしめずともいゝ、否なら否で不同意を言へばいゝ、思へば／＼梅を折ッたのもやはりこの分からずや——おのれ、窈子の仕業、それを小供にかこつけくさる。それで悟道か、達識か。たとへ千萬人の贓腑を集めても沸えくりかへるこの無念は詰められぬ、ても、何うしたら！

是も何も宮方の零落から來たこと、今はもう鼻も掛けるものか、思ひ込みに思ひ込んだ怨みは掛けやう。どうかして。

相手はしかし落ちついたもの、さかだつ柳眉にあしらひ顏の微笑、微笑で——

「さまでに深く思し立たれて？　御一念はこの胸にも染みました」。

あゝ斯うも女、いや、哲女は男に玩ばれるものか知らん！

第二十五

席を蹴立てゝ庵室を立ち出て、考へれば浮き世の味もはじめて知れました。浮き世の味が知れたといふ、それがそも／＼迷ひで有るか無いかは知れぬものゝ、世の中の男の怖ろしさが始めて分かりました。ひるがへッて我身の昔の空想に思ひ至れば、われと我身で人畜の區別も無くなりました。あゝ／＼煩惱に驅られたッけ。

もう／＼今度といふ今度は思ひ切ッた。それにしても憎くい窈子、思はせぶりな昨日に引きかへた今日の始末、あれ程義政を贔負する(と思ひ込みました)からには打ち明かした今までの事を知らせるに違ひ無い。

あゝ思ひ凝ッてもたしかな分別も無なりました。

むら／＼と萠した出來ごゝろ、根が活氣の婦人、おの

れ、やれ、その寢……寢首を……

殺してやれ！

心が心すべて雷同しました。

むかし大罪人が死刑になる時、「罪を犯したはじめは些細な事であッた」と言ッたさうな、それと同じいちごの境遇でした。一念が一旦偏頗にうごけばます〳〵偏頗に動く、活動する、はたらく、實に奮ッてはたらく、邪念？　妄念？　それとも正理？　罪惡は、あら知らぬ間に人をたぶらかすもの！

目を付けて置いた窟子の守護刀、よく覺えて居る、あの經机の横にあつた――あの刀で一ゑぐりに……もうもう破れかぶれ。

何のために作られた身體とほと〳〵問ひたいやうでした。

今はなか〳〵白屋へ歸るのは氣が進ます、物思ひに蝕れて近邊を徘徊してやうやく夜となりました。

いざやがてとなれば氣も急き立つ、ひとり淋しいところに退いて心を練ッて度胸を据ゑ、夜を更かしました。

星影は美事に冴えて、夜寒の風は肌に染ました。道ばたにある梅は暗香を此世の名殘りと言ふ氣で冷かに送りました。梅津の里の春風にこの香を襲いだ横笛もやはり嵯峨野に現世の運命を悟ッたとか、悟れぬ此身の腑甲斐なさ、それも何も、何が無し、たゞ〳〵口惜しい。

忍び込んで樣子を伺へば、雨戸がすこし明いて居ました。幸と忍び入る、中は闇、そして勝手知ッた爐の邊へ拔き足差し足。

手を伸べてかいさぐる、手先きに觸れた經机、すはと周圍を撫でゝ見ました。が、身に着けたと見えて守護刀は有りませんでした。

更にかいさぐる手先き、おやッ！　人！

おのれ、窟子！　しかし、あゝ殘念、まだ利器を持たず……

覺めたか、先方は此方の手先きを引摑む、ふりほどく、で、悟ッたのか先方、

「こは婦人か？」
肌ざはりで婦人と悟られたのか。しかし不思議先方は盗人とも言はず、無言で組み布かうと鬩き出しました。もう、事は破れたか。

組み布かれました。が、これは如何に相手は無言で人を組み布いたまゝ、揉掻いても、あばれても起こしもせず、組み布いたまゝ、これは意外、煩悩の犬――

何として窟子がそんな劣情！

＊　＊　＊　＊

しばらくして上の男は組み布いたまゝいちごの耳に囁きました。

「和御前は盗人と見たれど、婦人ゆゑに坐ごゝろも起ッた。何を隠さう、それがしも同じ盗びとぢや。隠形と忍術とには巧者の名も取ッたものぢや。如何にもう斯うなれば夫婦でおぢやらう。御身も素生うち明けて是より打ち揃ふて事を御しやれな」。

奇怪な事を、何、盗人？　では窟子はあの盗人か？

ても、まあ！

絶え入るばかりの驚きでした。不覚、盗人に身を汚されたか、この盗人に。さあ夢とも現とも今さら分がなくなりました。

はじめ窟子を戀ひ慕ッた頃には唯一個の美丈夫とのみ思ッて迫ッた、もし盗人と知ッたなら何をどうして仇心を起さうか。で、今日は彈かれた。彈かれて、來て、誰とも知らぬ婦人のふりで入ッて見れば此通りの始末、如何にも〳〵何うやらとの疑ひも殘らず晴れた、窟子の心根も知れた。

奇に走ッて奇を弄されたといふやうな境遇、何が幸不幸か分からぬ程でした。上の男のさゝやきにつれて胸は千萬の思ひに湧きかへりました。

思ひ切ッて心中の心中を言へば、根が婬婦といふだけに身を汚されたのをば深く心に共實くやしがりませんでした、むしろ僥倖で窟子に逢ッたのが切めての念晴らしのやうでした。ことに相手が盗人と現かしたのみならず、

れ、やれ、その寢……寢首を……

殺してやれ！

心が心すべて雷同しました。

むかし大罪人が死刑になる時、「罪を犯したはじめは些細な事であッた」と言ッたさうな、それと同じいちごの境遇でした。一念が一旦偏頗にうごけばます／＼偏頗に動く、活動する、はたらく、實に奮ッてはたらく、邪念？　妄念？　それとも正理？　罪惡は、あら知らぬ間に人をたぶらかすもの！

目を付けて置いた窟子の守護刀、よく覺えて居る、あの經机の横にあつた――あの刀で一ゑぐりに……もうも破れかぶれ。

何のために作られた身體とほと／＼問ひたいやうでした。

今はなか／＼白屋へ歸るのは氣が進ます、物思ひに蝕れて近邊を徘徊してやうやく夜となりました。

いざやがてとなれば氣も急き立つ、ひとり淋しいところに退いて心を練ッて度胸を据ゑ、夜を更かしました。

星影は美事に冴えて、夜寒の風は肌に染ました。道ばたにある梅は暗香を此世の名殘りと言ふ氣で冷かに送りました。梅津の里の春風にこの香を襲いだ横笛もやはり嵯峨野に現世の運命を悟ッたとか、悟れぬ此身の腑甲斐なさ、それも何も、何が無し、たゞ／＼口惜しい。

忍び込んで樣子を伺へば、雨戸がすこし明いて居ました。幸と忍び入る、中は闇、そして勝手知ッた爐の邊へ拔き足差し足。

手を伸べてかいさぐる、手先きに觸れた經机、すはと周圍を撫でゝ見ました。が、身に着けたと見えて守護刀は有りませんでした。

更にかいさぐる手先き、おやッ！　人！

おのれ、窟子！　しかし、あゝ殘念、まだ利器を持たす……

覺めたか、先方は此方の手先きを引攫む、ふりほどくで、悟ッたのか先方、

「こは婦人か？」
肌ざはりで婦人と悟られたのか。しかし不思議先方は盗人とも言はず、無言で組み布かうと鬩き出しました。
もう、事は破れたか。
組み布かれました。が、これは如何に相手は無言で人を組み布いたまゝ、揉掻いても、あばれても起こしもせず、組み布いたまゝ、これは意外、煩惱の犬――
何として窯子がそんな劣情！

* * * * *

しばらくして上の男は組み布いたまゝいちごの耳に囁きました。
「和御前は盗人と見たれど、婦人ゆゑに坐ごゝろも起ッた。何を隱さう、それがしも同じ盜びとぢや。隱形と忍術とには巧者の名も取ッたものぢや。如何にもう斯うなれば夫婦でおぢやらう。御身も素生うち明けて是より打ち揃ふて事を御しやれな」。
奇怪な事を、何、盗人？ では窯子はあの盗人か？
ても、まあ！
絕え入るばかりの驚きでした。不覺、盗人に身を汚されたか、この盗人に。さあ夢とも現とも今さら分がなくなりました。
はじめ窯子を戀ひ慕ッた頃には唯一個の美丈夫とのみ思ッて迫ッた、もし盗人と知ッたなら何をどうして仇心を起さうか。で、今日は彈かれた。彈かれて、來て、誰とも知らぬ婦人のふりで入ッて見れば此通りの始末、如何にも〳〵何うやらとの疑ひも殘らず晴れた、窯子の心根も知れた。
奇に走ッて奇を弄されたといふやうな境遇、何が幸不幸か分からぬ程でした。上の男のさゝやきにつれて胸は千萬の思ひに湧きかへりました。
思ひ切ッて心中の心中を言へば、根が婬婦といふだけに身を汚されたのをば深く心に共實くやしがりませんでした、むしろ僥倖で窯子に逢ッたのが切めての念晴らしのやうでした。ことに相手が盗人と現かしたのみならず、

隠形忍術に巧者と明らかに言ッたのが氣に入りました。盗人と明かしたからには最う理義を言ひ立ても爲まいし、また隠形忍術に長けて居れば足利の寢所へ忍び入ッて其寢首ぐらゐ搔くのも大方譯の無い事と考へました。

唯なら素生の知れぬ盗人に勝手な熱を吹かれてどうして默ッて居られるもの。が、今のいちごの場合ひは反對でした。

一旦は殘念にも思ふ、が、殘念を思ひ返しました。中心に固有の多情と勤王の心とが相集まッて普通に世がみとめる恥辱や不愉快をば屑ともせず實にいちごが魔界に墮落するはじめは此處にありました。

ならば盗人になッて見やうか。始めてこの陋しい考へが萌しました。亂雜の世の中に獨立獨行すこしも不正を行はぬからと言ッて何の利も無い事、佛者でさへ破邪顯正のためには手荒い手段をも爲るといふのに。ぬれぬ先きこそ露をもいとへ、毒を食はゞ皿まで甜れ！ 臍の緒切ッてからこゝに始めて男――はじめ思ッて後思はなくなッた男――に逢ッては善惡無差別に――劣の劣、陋の陋――非理に染められて、むしろ人界のいはゆる恥辱が時に取ッての仕合はせとも思はれました。

やうやくに心を落ち着けて、いちごはわが身は矢張りいちごと明かす、明かして先方は驚いたやう、如何にも驚くのも道理、が、何故か晝間の事を口くされ言ひ出しもしませんでした。

それで思ふ仔細も有り、ゆる／＼とも語りたいゆゑ、一先こゝをば早く落ちやうといふ男の言葉でした。籠絡されては最う自由にされるもので一も二も無くいちごも承知して直に身づくろひして逃げ出しました。何處を目的に？ たゞ男の向くまゝ。

直ばしりに走ッて可なりの道を歩いて來ました。そろそろ高くなッた男の聲、今までは囁きでしたがもう安心と思ッたか、並の調子で物を言ふ男の樣子その聲がらに不圖氣が付けば、をかしい、窃子では無いやうでした。

不審千萬、正に窃子と思つたに。聞き定めれば聞き定

める程如何にも變、こらへかねて、
「御身の名は？」
「名？　いちご、和女も御知りやる」。
「たれどので？」
「大幸ぢや。主水助ぢや！」
あら？　主水助！　さあこの仰天、何のまア重ね〳〵、主人助か、本當に。ま、どうしたら——あら氣が付かなかッた。
それにしても活きて居たのか！
「いちご御、それがしも斯う活きておぢやる。これも何も習ひ覺えた隱形の力で、火の中をぬけて逃げまひた。御身もよう恙なかッた。それがしは知らじと思し召しつらうが、御身が如何にかくしても某しは御身の素生を共頃も知ッてゞあッた。取りにがした無念のまだ消ぬ間、そも〳〵如何な天運、かう妹脊となッたとは！」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

幸か、不幸か、實は窟子は夜中過ぐる頃不圖目を覺まして、外をそゞろあるき爲たくなり、飄然として家を立ち出でた、その留守へ主水助が落人になつて來て、窟子の庵とも知らず潛んで居て、偶然いちごに出逢ッたのでした。神ならぬ身の窟子がどうして留守の間のそれら珍事を知らうもの。星清く、靜な夜色、闇はまだ篝火にやぶられぬ平和な天地、見るまゝに興に入ッてふら〳〵として來る、その道に二人の、夜目にも見える、男女——實はいちごと主水助——とに逢ひました。が、顏も見えぬ事とて、殘念、心もつかず、をかしな男女と思ッたままで、しかも袖をすり合はせて行き過ぎて、無心で家に歸りました。
　燈火をつけて見れば前後狼藉。鑵子もふみつぶされ、爐の灰も蹴揚げられてありました。さすがに化轉して思案皆無、目を見張つて無言で四邊を隈なく見まはす、其處に見當ッたのは一つの刀の目釘でした。
　目釘は梅の實で、あまり世に少い形、見ると思ひ付く事も有りました。一度誰かの持ち物で見た事の有ッた心

持ちでした。誰か彼かと思ひ込んでも中々思ひ付かず、やうやくの事で「たしか主水助の刀に」とだけは分かりました。が、それにしろ主水助が留守に來たとは何うして思ひ付かうもの。目釘の來歴は分からぬ儘猶考へる事として庭口へ立ち出で其邊をよく／＼見回はせば例の市女笠が隅の方にありました。たしかに見覺えのある、いちごの市女笠でした。

第二十六

世の數奇、どこに運や命は有ものか？　思ふに造化は奇を弄して始終世界をなぶるもの、こゝに思ひを徹させずに先方に思ひをとほさせる、それを上から離れて見れば事の成否はたゞ處を變へただけ、右が左となつただけ。が、下から一方に偏頗の目を注げば、おのづからその配劑が怨めしくもまた嬉しくもなる處で思へば、人情の喜憂はまるで造化に關係の無いことか？　血を筆にふくませて伯夷傳に天道をかきくどいた遷の度量もさて思へば小さいもの。

ならばいちごは悟りの奥をつきぬけた達識か？　決して天をも怨みませんでした、また悲しみもしませんでした。一方に於て浮き世の恥辱をとも思はせぬ多情といふ物が扣へて居て、一方に於て類の無い血氣が手綱なしに暴れました。

今のいちごは心に主宰の無いものでした。主宰有りました。が、覇でした。一歩あやまてば魔界に墮落させる多情と勤王とが良心を埋めて居ました。

世の男子を侮みすぐると同時、身の非凡を鼻にかけて終によく泳ぐものが水に溺れました。世の中は狂波暴風の中に實は眞如の光りも消え消えで天地ほとんど晦冥、そこに獲物を待ち望んで情の腮を張り、慾の牙を噛み鳴らして扣へて居る大魚の有るものとも思はず、わが非凡、わが地位の兎に角やすらかな處によツて宇宙を觀じた果ては終に今日の境遇となりました。篤ッた、それで悟れば猶よろしい、が一度藍に落ちた糸はたやすく白には返

らぬ比へ、吐き出されかゝつては川口で船も止められませんでした、實に止まりませんでした。

かよわい、はかない、實はづかしい事ながら人間の妄念は大かた是、鳥究すれば啄むの古哲の言葉どうりになりました。

いちごは主水助と表立ッての夫婦になりました！　陣をうしなつて逃げた事、とても主水助が主君にあはせる面は無い、無いでは食へぬ、つひ人のものを唯取る風も付きました。

心よわい婦人の身ながら流石にいちごもまだ志しの奥をば打ち明けず、いつか折りを見て其隱形の奇特を得やうと思ひ込んで居ました。夜寢ものがたりに掻き口說いて聞く、しかし、主水助は事にかこつけて教へませんでした。

都には殺氣が充滿して居るものゝ猶人の來往も繁くて大方かせぎも出來る事とて二人は都へ移つて厚かましくも家を結びました。此頃兵亂が少なくはなつたものゝ、猶多少は有る事、それながら山里の片田舍より生計が自由なためか、處々の野原へはちらほら家も立ちました。素より陣營の用に供するための商人ばかりが多く集まッて、見世店にさらしたものは重に武具食物の類、それでことに奇怪と思はれたのは其商家の中の大きな家では顏立ちのうるはしい婦人を雇つて――多分はかどわかして――兵士の伽とさせました。あれさびて淋しいながら猶凡そ陣屋の用となるものは一切また集まつて、いづれも廉い命を一錢二錢の代に掛けて居ました。はやりの廢らぬのは太平記よみ、はやり出したのは笛や其他の鳴り物、琵琶法師など每度陣々の贔負になりました。

この處へいちごが舞ひ込んで來たのは人の目のつく種でした。何を商賣ともなしに賤が屋を結んで暮らす處へ、武士も折り〳〵腰など掛ける、粉飾を廢しても流石に花は花のいちごの國色、ことに管絃にも心得があるとの事、見るのがいろ〳〵の評判の基、諸處の陣へも呼ばれるやうになりました。いよ〳〵いちごが魔界に墮落する一歩

一歩が進みました。

　呼ばれて伽に出れば金がまうかる、儲けて歸ッても主水助には共得た金を殘らずはわたさず、何につかふか自分の勝手にしました。はじめは主水助も忍んで默ッて居ましたが、根が嫉妬心にも深い質、いくら稼ぎだからとていちごが諸方の陣へ出入りするのは快くも思はなかッた處へ、いちごのこの振舞ひ、終には夫婦いさかいを爲るやうにもなりました。夫婦いさかい、それも慣れぬ內は珍らしくて、雙方にも感じが深く、したがッて共はじまるのにもいくらか支度が有りましたが、多く有るに從ッて目にも立たず、果ては三日に一度ぐらゐは是非――爲ぬとすこし間が拔けていくぢ無いやうな心持ちもして――言葉だゝかひを爲るやうに爲りました。

　互に否と思はぬからこそ喧嘩もはじまるもの、がそれは初心の內、終にはそれが根になつて愛から生まれぬ喧嘩が終には憎みから起る喧嘩となりました。喧嘩した果ては姫も全くの山の神、近處の內方から柴賣り、相手を擇ますに夫の讒訴、いよ／＼それが主水助の火の手をも強くしました。

　「隱形とやら教へて賜はつたなら」、教へてくれたら中よく暮さうとの律義な問ひでした。術も何もそんな事をば元より更に知らぬ主水助の事、辭を左右に托す托せば托すほどいちごの愛はます／＼褪め行く、面白くない世となりました。

　ある夜また喧嘩がはじまりました。原因は何か、双方とも非常に激した語氣でした。

　「身に應ぜぬ妻を持ちながら……」是はいちごが言ひました。

　「身に應ぜぬ？　何を！　おれとて舊はあつぱれ一手の頭人ぢや。公家の褪め小袖が何ほどの……」是は主水助が言ひました。

　互に負けず劣らず爭ふた末、泣きながらいちごは家を飛び出しました、さも身でも投げて死ぬとでも言ふ體で。が、言葉の進退づく、四本棒なら知らぬ事、二本棒ぐら

ゐでは追ひ駈けて止めも出來ぬわけ、言ひ爭ひながらも流石に主人助も心配、その心配を愚痴にかへてひとり咳くのみ、後を追ッて出られませんでした。

　いちごが出てから小半時も經たぬ間、主水助はどうしても堪らなくなりました。むしやくしやと頭一杯に上る血、目もくらむばかりに爲ッてつゞいて家を飛び出したのは夜の丑過ぐる頃、一面にきらめく星影もすさまじく見えました。

　どうしてくれやう。思へば／＼見かけにも似ぬ膽ふとい婦人、それでこそ鎧打扮ちで男のふりまで爲た。見つけたら何うしてやらう。ぎづ／＼を食はせて、ぶッちめて？　いゝや、それだと又怨まれる。

　それとも女だけに氣が狭く――さあ死にでもされては事だ。五十年來兵馬の間を奔走して定まッた妻をも持たず、行く先き／＼で氣に入ッた女をわが物にしたが、まだまだいちごのやうな美人には遇ッた事も無い。それを打ち捨てゝしまふのも殘念のいたり。見付けたら強面で威して、ところ／＼やさしくして、恩と威とをふたつながら行つてやらう、降参の武士を從へるのもそれが手、いつかもいちごにそれを行ッた、その手で行かう。

　もし晝間見たなら大方血まなこ。其處此處となく尋ねましたが、さらに分からず。分からぬまゝいつか／＼名も知れぬ人里の無い燒け野に來かゝッて聞けばさあ大變、女の泣き聲がしました、しかもくるしむ聲、

　胸どつきり、氣も半亂、耳を引き立てゝ聲の有る方へと進めば、いよ／＼大變、水！　池！　池から聲が來ました。

「身を投げつらう！」

　よもやの疑ひも俄に固まつて、それと同時に無量の心配。

　無情な水はかき立てられてか、じやぶ／＼と音がして、

「あッ苦しむか？」

　星あかりに透かし見ればはたして肌白の婦人、

「やあ主水ぢや。今助ける。待て」。

着物を脱ぐ間もほとんど無く水けぶりを立てゝ飛び込んで、くるしむ婦人を小脇にしつかり抱きこめば、はや弱ッたか、ぐた〳〵としてその重みさへ非常でした。

「心な落としそ。大事無い」。

扶け揚げて見ればまだ氣の絶える程でも無いと見えて、疲れてはゐながら猶しつかりして居ました。

「いちご、これ、主水助ぢや」。

それに應じた聲がらを聞けば、不思議、ちと……

「いちご……ぢや、これ？」すかし眺めて。

「わらはは葵と」。女が。

「葵？」

「葵」。

「いちごで無うて？　葵？」さァ驚いた。狗骨、くたびれ儲け。

推量に過ぎた失策を悔ゆると同時、忌々しさと口惜しさとが一時に混み上げました。一度すくひあげたものながら、慾！　ふたゝび突き落としてもやりたい、

「いちごぢや無い？」わかつた事をまたふたゝび。

「いちご？」むかふも亦驚いた聲がらでした。

「いちご？　いちごとは茶山寺の？」

「なか〳〵。こは、御知りやる？」

「知る……妾の知り人でおりやる」。

主人助も思ひあたりました。——

「さらば御身は宮方で？」

「なか〳〵」。

とは答へましたが、何故か俄にもよほす涙。

「これは御泣きやる？」

「くッ……くッちをしうおりやる。いちご……いちごが仇で、かたきで」。

ます〳〵分からなくなりました。

「かたきとは何でおぢやる。それがしは、今は何を匿さう、いちごに太い怨みがあるに、さても扨も和女もまた」。

「おりやる、怨みが？　怨みが、刀禰？　わらはも、わらはも、御聞きやれ、いちごに此處へ突き落とされました。」

いよ／＼出でゝいよ／＼奇怪な言葉。よく／＼聞き質せば斯うでした。

其夜葵が此邊を歩いて居ると、料らず道端で男女のさざめきが聞えました。ものめづらしさに小蔭に忍んでよく聞けば正に分かりました、女はいちごと。で、何を言ふかと思へば、さあ、主水助には意外の、意外の、意外、いちごが男に頼んで主水助を殺してくれろと言ッて居たとの事でした。

葵の言葉によれば、其男は年若の武士で、應答の模樣、うたがひも無くいちごの情夫、いちごが泣きながら主水助の非情を訴へると、しきりに慰めて居た揚げ句、總に斯う言ッたとの事でした。——

「主水を殺せば日本一、和女とそれがしと誰はゞかる事なく夫婦とはなれう。こよひ曙方に忍び入ッて美ん事それがしが主水の首を揚げうず」。

聞く身のおどろきと言つたら！

ふたゝび葵は語りつぎました。

それから葵がつひこらへ切れず運わるく物かげで咳をした、それがいちごたちの耳に入つたと見えて二人はすはと身がまへして、窺つて、そして葵を見るより早くいちごが飛んで來て池へ突き落としたとの事でした。で、落とされて苦しむ體を二人並んで眺めて居る内に人が來る體を見て何かうなづき合ッて逃げたとの事でした。

嗚呼、嗚呼、して見れば主水助が其處へ來た、その時までも、ても殘念、二人は其處に居たことか？

遠くは行くまひ。追ひかけたら。すでに今夜ころすと言つて狙はれて居るものが、どうして家に歸られやう。が、何處を見當てに追ひ蒐けていゝものか。ことに男が寢首をかきに來る時、いちごは何處に居る事か知らん。

「いちごは何處で待ち設けると？」

聞いても是は葵にも不確でした。手がゝりが無い。と

ころでさア何うしていゝか分からなくなりました。が、流石に戰場をも經て來たもの、大膽に決心しました。

「家へ歸らうず」。

歸ッて物かげに忍んで居て、やがて來たものを待ち付けて狙撃して――その跡はいちごを搜し出すこと。思ふに大抵は男と一途にいちごも來るに違ひ無い。敵の不意に出ればよしや其ものが鬼神をあざむく剛のものにもしろ、何のすこしもこはい事は！

無いと決心すれば氣も引き立つ。あゝいゝ事を聞いた――危なく死ぬところを危難を知らせてくれた恩は有る燚とやら。しかし又その命を救ッてやッただけを償ひとしろ。今優長に人だすけの場合ひで無い。誰もかれも運さへよければ助かる事。

肚の中でこの言ひ譯を言ッて、突然に駈け出してわが家へと急ぎました。呼吸も急く。氣も、氣も揉める、うまく行けばいゝが――あゝ弓矢八幡、擁護々々！。

第二十七

拔き足でそして宙を飛ばせるといふ六つかしい歩きかた、一心これば齒の根さへ働らかせもせぬにくたびれて、そして腰のつがひさへ痛むばかり、またゝく間にわが家に立ち歸りました。

歸りは歸りましたが、氣味わるくもなりました。もはや相手は忍んで來て居るか知らん。と思へば氣で氣が咎められてわが家ながらわが家が恐ろしいやう、氣味わるいやう、身がまへやら何やらで些し躊躇して居ました。が、家が大抵とざされてある處を見れば多分は大丈夫。こゝためらッて居る内に便宜を失ッてはつまらぬ事。

さすがに年來手痍をかせぎ溜めた甲斐に事に臨んでの斷定はすばやく付きました。裏口から這入りかけました。が、戸は明きませんでした。不思議、しまりをして出たつもりでは無かつたが。

しかし出た時の事を、思ひ出せば、隨分夢中で居た事、

あるひは取りしまりよく鎖しをさしかためて出た事かも知れません。更に見回せば一方の戸がすこし明いて居る樣子、そこから出たのかも知れません。

うなづいて戸に手をかけてやをら中へ入りました入りました。入つただけでした。あゝ神ならぬ身の人間、中には待ち設けて居たものがありました。主水が入る、入るや否や、一刀きらりッ！　同時主水の首と胴とは離れ離れになりました。

第二十八

毒婦と充分に成り果てゝ今はいちごも世の中に恐ろしい物を持たなくなつて、例の男の妻とまた爲りました。男ははした武士、誰とかいふものゝ手につく榛有源太遠經といふ者で、人品といひ、腕前といひ、天晴れ一手の頭人だけの價値は有りましたが、玉に瑕、人を人くさく思はぬ處からつひそれで憎まれてのみ居ました。その氣象がいちごの氣に入りました。浮氣といへば云ふものゝ是は浮氣よりはすこし信が固くありました。

既に主水を打ち果たしては誰はゞかる事も無く源太とふざけ回つて居ました。がつね〴〵胸に絶えず氣になるのは窟子の事でした。

今は何も窟子をしたふといふ譯でも無く、むしろ憎む方でした、けぶたく思ふ方でした。嵯峨野このかた主水と共に逃げて來たこのかた絶えず苦勞になッたのは窟子がわが身の義政をねらふ事を密告するかも知れぬといふ事、それでひそかに時々は主水にもそれとなく迫ッて、どうぞ窟子を無い物にしてくれろとかき口說いた事も有りましたが、兎角主水は應ぜず、其内に主水を殺すやうにもなりました。

爲ッて後日を經て思ひ入れば入る程氣にかゝりました。それとなく言ひこしらへてどうか角か終に源太を說き付け、又も主水に行ッた手段の二の舞ひをしやうと、あゝ毒も用ゐ馴れゝば何とも思はず、決心しました。

夜にまぎれて源太は雌雞につかはれる雄雞、美人の脊

愛は命をさゝげて買ふものと一も二も無く承知して立ち出たのはかれこれ三月のはじめ、消え切らぬ菜の花のかをりが夜の間も床しく袖にとまる頃でした。

　地理を充分にいちごから聞き定めて嵯峨野に至りました。夕ぐれに兎角行き着いてどれが庵室かとまづあちこちを見回して居る内に見あたッたのは一かまへの白屋(くさのや)、ちらりと共障子の間から見えたのはいちごが言ッたとほりの顔立ちの男、やつし形をして居ました。

　すはやと胸もとゞろく、相手は直に障子の影に身を潛めてしまッた處で思へば如何にも世を忍ぶものとは推されました。

「もの申」。大膽にも白屋を叩きました。

「たれどの！」可愛らしい聲を先きに立てゝあらはれたのは、こいつ僧家に不相應の年若の女性鄙ながらも田舍酒の人を醉はせるだけは有りました。

「窟子どのは？」

「窟子？」……化轉した體で內を見かへッて、

「窟子どのとやらんおりやらぬ」。

「おりやらぬ」。嘘と考へ付きました。「まことに？」吃と思ひ付きました。「窟子どのは嵯峨野の云々いふところにお出でやるとなん、東山どのゝ仰せ承ッてそれがしが參ッたのでおぢやる。包みかくすは御身のためでおぢやるまい」。

　娘は顏色かへました、見て取る源太、すはと推察固め、

「いかに、是は權利の源太遠經てふ者でおぢやる」。

　娘はいくたびも後をふりむいて內の指揮を一々待つやう――

「おりやらぬと申すに」。

「申すに？　無禮を言ふ奴かな」。目をいからせました。「殿の御諚をそむく心か？　まこと然ならばさだかに答へイ。思はくも有る。目星を付けたからには踏ん込んでも？」

　はや怯えて娘はかくれる、もう是までと門のとざしに源太はやく手を掛ける、その途端、待ち望んだ相手、窟

子と見とめた男が顔をあらはしました。

「御待ちやれ、許しも無くて人の閨……」

「殿の仰せでまゐつたのぢや。さ、御身篇子どので…

…なぜ御逢ひやらぬ」。

「いかさまそれがしは篇子でおぢやる」。

「さてこそ？　先き程から聲かるゝまで問答しつるに

なぜ御諚をないがしろになされた？」

落ち付いたもの、相手ばびくともせず、

「それがしを何と思しめす？」

「事あたらしい、道心でおりやらう」。

「道心と知ろし召しつるか？　知ろしめしてなぜ御諚

を御傳へやる？　世を捨てた身と御知りやらぬか？」

言葉するどく言ひ放たれてすこしたぢろぎました。

「さりとて仰せならば詮おぢやるまい」。

「仰せなりとも聞く耳は持ちませぬ。浮き世を捨てた

すね者に物のたまふべき殿とも覺えませぬ」。

あらたまツて微笑をふくみ——

「御教書御持ちやツたか？」

正に持ツて居ぬと推して言つたこの言葉、が、案外千萬

「御教書持たで武士が何過言申さう。御教書だに持な

ば對面したまうか？」すこし火の手がついて。

「對面しましやう、御教書だに……」

はや源太は門の中に立ち入りました。さすがの篇子も

氣を呑まれてたゆたふ、その間源太は近づくやゝ椽ばな

に……かゝるといふ一瞬間、其間まことに髮をも容れぬ

といふところ、飛びかゝりました、早篇子へ！　もう晃

く短刀！

あはや、残念、終に不意でした、一太刀篇子は脇腹に！

からく身を退いただけ深くも入りませんでした。が、思

はず一聲うなりました！

はや組み打ち。「なッ……何うらまれて、このッ……」

しかし刺客は無言で一心。刀を持つた鐵こぶし、岩もく

だけろと握りつめられた、それ、それ、それをもぎ取れ、

もぎ取られまい、さア鬪。組んだまゝ椽から轉げ落ちま

した。

椽近くにあつた切り石に下になッた源太は腦をくたかれました。すこしぼウッとなる、手は弛む、直に刀はもぎ取られて……

おのれと怨みをつんざく刄、窈子はのしかゝッて源太の胸先きを柄も通れと突きました。ひイッと一聲、ふり切れるばかりに手足をもがく源太、ゑぐる、もがく、踏んづぶせ！

情人は終に仕留められました。元の情人に。

第二十九

あたるが殘らず八卦ならば人に苦勞は微塵もなく、堯舜周孔を無二の恩人と尙んで其忌日にはどんな潔齋でもして差しつかへは無いものゝ、思ひ料る事が思ふまゝにならぬ世の習ひ、さても人間は是だけのもの、わるごすい不精が手をはぶき勞を減らし、一のかはりに十を行はうとの蟲のいゝ心即ち慾から何處でか天機の芽でも見たやうに工夫し、困苦して、既に藥を蓬萊に求めていゝ迷惑な、使ひを偶然島ながしにして仕舞つたり、便の中に黄金を探つて終にたゞその探る。ばかりの試驗に溺れて仕舞ッたりする不幸（？）思ひわびる時には痴情も湧く、今のいちごも世間の慾ばりと同じ心に、科こそ違へ、なりました。

もう樺有源太は歸ッて來さうな物と待てどくらせど音づれも無い、風にあざむかれ、野犬にだまされて來るやうにもなれば殆ど矢も楯もなくなッて待どほしくて堪らず、が、別段の思案も無い事。思ひやれば家を立ち出た時の樣子も物思ひを孕むためまた育てるため胸に泛かぶ、目にも殘る黑皮おどしの凛とした鎧打扮。鎧――刀――小手――また下がさね。下重ね着る時には眞裸に爲ッて戯れながらいちごに着せて貰ッて居た、その時の肌の色のうるはしかッたのは今の記憶にも留ッて横壁の張りこみが只その面影を見せて居ました。鎧を既に着了ッては臙花をふッて身を潔め、やがて首をあげて來うずとにッ

こり、笑つた、その影も最う無くなりました。

したがッて出る考へは或は仕損じたかの苦勞でした。仕損じたか知らん、如何に何とて相手も相手あるひは源太が血氣にはやり過ぎて復り討ちにでも爲りは爲ぬか、爲ッたかも知れぬとも思はれました。無ッたならば無ッてくれなければ一杯が胸に充ちて居る下へ無理に割り込む考へ――さあどうしたらいゝものか。いちごからの回謀と窩子が源太を悟ッた事ならばいよ／＼いちごの隱謀露顯が早くなる次第、胸ぐるしい至りでした。

兎角源太が或は殺されたらばとは考へても萍の心から其殺されたのは重な愁の種でも有りませんでした。主な種は自分にかゝはる事、卽ち隱謀露顯、それが氣づかはしいのみでした。

よし殺されたら殺されたで仕方が無い。なま若くて小奇麗なだけに肌ざはりも惡くないものゝ、さていくら惜んでも事が旣に去れば詮ない事。外に男を見付ければ猶世界にいくらも有る事、それは決して深く殘りをしくも無い。が、たゞ我に及びかねぬ災、それだけが氣にさはる。

あゝ利己、利己！　夫や情人を愛するといふのもみんな利己の影法師、自愛が有ればかう他愛も有る。我身あつての男子。

山は曉の雨に身をきよめて快く朝日に映る、その映るさまを凡俗の人間に見せやうとて映るものか、たゞ山は映るだけを山自身の得意とするだけの事。

釋迦が世俗の惡業に溺れるのを憐んで身を捨てゝ、それを救はうとしたといふのも何の僧家の辯護の外では無い。釋迦はなる程世俗を憐んだ、が、それが恩ではない、釋迦は人を憐む心を多く持ッて居て憐んで人を說得すれば其處に愉快を覺えて、ます／＼其氣になつた譯、すでに身の愉快を得る！　さ、これが利己で無くて何？　わが思ふ處が叶ふのは叶はぬのより心よく、人間だれもそれを望む、卽はちわれを愛する譯で、それを愚物は尙んで置く位な世のなか、釋迦も尊むには及ばず、さりとて

殘醬をすゝる非人もいやしむに及ばず、自愛の念は只平等に行きわたッて居る事を思へば宇宙は無造作に出來て居るものとも知れる。勞を示して快を買ふ、その勞の度が多けれど愚物は其快を問はずにその勞を尙める仕儀、呑破れば世に成功した英雄も豪傑も何のわれと同等な話し。

と思へば何も苦勞は無い、世はますノ\こねて丸めて自由になるやうにも思はれました。思へば男子は勇壯、婦人は優美、いちご自分は優美で、婦人だけの處は正に有る、之に男子の勇壯が加はッたなら天晴完全の人間となる譯、どうぞ左樣なりたい。

外を柔にして內を剛くするよりは外に剛柔兼ね備へて又內にも剛柔をそろへたくなりました。これで以て世界を見れば、あゝ小、小、男子など何でも無い！

淫と笑ふなら笑へ、狂と言ふなら言へ、その能だけに從ふのが不道理か？ 何の人間の仕業に自然の實が有らう、自由に暮らすが一生、牽束を受ける罪はつくらぬ。

極端の論を行はうと志した果ては終に野武士などのあふれものを集めました。一夜ばかりの殆ど一夜づま、野武士の中の一癖有るものをば悉く情夫にして、そして情夫相互にその情實を知り合ッて居て些しも怪しみませんでした。今日は甲と共に柳の堤に手をたづさへ、昨日は乙と一途に紅葉の谷に逍遙する、その事ども互に忌みねたむ景色を現しませんでした、正に遊女と同樣で。

けれど其不道理を蔭から微な聲ながら叱る良心も有りました。が、辯護もまた付きました。むかし小式部內侍とやら宮中でさる公家の兄弟を情人に持ッたとやら云ふ事、聞き馴れば後世だれでも笑ひもせぬ、今この冠と履とが處をかへた世の中にすこしぐらいの不德が有ッたとて誰が目ざして怪しまうか。是がいちごの猛惡な辯護でした。

激變の時代にあらはれた人に見識の固いものは少いこと、穢れた物を運ぶ百姓は麝香を却ッて嘲りました。ああいちごも元は良家の娘、なまじひの卓犖(たくらく)が禍を爲して

人間の中の極めて汚ぐるしい者となり果てゝ、さてそれと悟りが付かなくなりました。

野武士をかたらふ其目的は外でも無く義政を狙ふといふ事に有ッたのです。すべて妄念は雪に凝る雲と同じもの、はじめは雨と降るくらゐな處が望みで後には寒冷の添へ物を得て雪とまでに凝りかたまります。いちごの血氣の勤王心の奴隷となッたのもまづ此類です、すなはち最初の養育と境遇とが盲の妄想を一種の信に象ッた元でした。

人間に與へられた命といふもの、それを捨てるのは何とも思はれませんでした、想像がわるく強く働くだけに。義政に一太刀怨んだなら殺されてもいゝ、と思ひを固め付けるのも實は身で身の薄命を賺すやうなもの、六づかしい境遇に立ち至ッては苦肉の計から生ずる滿足に滿足しようと思ふのが人情の普通です。

で、窟子の事も源太の事も氣には掛かッて其實ほとんど制し切れず、たゞ其あきらめ方や何かについては既に心も定まッて居ましたが、眞を叩けば妙な一念、つれなくされただけに猶いくらの殘りをしい處も窟子にあるやうで、その癖心の表面では其未練をわれから作つてわれから毀しても居ました。言はゞ前後に思ひ迷ふといふ事、まづ埓も無く空中の樓臺にあやなされて居ました。

第三十

叡山の鐘の音だけはさすがに定まり固く今日も入相を告げて茂林にかへる鴉の泣き聲もおのづから騷がしい中に淋しさを含む今日春の暮れ、薄花田の夕霞は金隈の夕紅と出會ッて床しくも野末を艶消しにした風情如何にも奇麗でした。いづれの陣からの脱け馬か、野の果てにそろそろ歩いて居る駒の影も薄黑くなり行いてはや一つ星がきら／＼現れました。燒け殘ッたか、伐られそこなッたか、處々に立つ櫻、夕日に薦色を一刷子掛けて幹を半分てりつかせてほろ／＼と些しづゝ落花して居る其下には瓦の間から咲く菫が褪せぬ紫をかざして居ました。天

うつり地かはツて、それでも自然の春は平等、「いりあひの鐘に何とやら」の古歌そのまゝの景色でした。

前よりは見上げた打扮、櫻色の衣に布垂れの笠をつけて伴を二人ばかりつれていちごは散歩して居ました。其道すがら何物か、いづれの陣にかよふ小法師か右の草叢の横に方ッて吹き鳴らす笛の音が哀れに聞えました。

過ぎた雨の痕がまだ乾きはてぬ道の土、ぬらつく足元に入れる力もほと／＼忘れるばかり聞き惚れる笛の音でした。

「あれは如何？」非常に感じた體、いちごは斯う言ッたまゝ顔を紅らめました。

聞けば、さても意味ありげな音色、はて繰りかへして又吹くか、其しらべ、

「花よ、花、花、君、手折らまし、さくらがりには、いでしかど」

それにしても心にくい奴、生めいた其一曲、誰に思ひを運ぶのか。笛の音をたよりに探ッて行けば道端の石に腰を掛けて居たのは年二十二三、肌目細な顔立ちの若武士、いちごはぎよッと胸に來ました。

末野は紅く、遠山は紫、みがき上げた天地にみがき上げたやうな人、あゝ一幅の活きた繪巻物。

たちまちにあらはれた人の體、若武士は笛を取り直して屹と此方を見て意外と思ふ風情、さすがに照るばかりの美人を見ては手持ち無沙汰にもなッたか拍子に一寸笛の穴など見る眞似をして居ました。

「卒爾ながら」、いちごの地、「今の笛は和君の？……」

男は無言でうなづきました。

「ゆかしき音色かな。仇々しき調べでおりやる」。

はや狎れた言葉。

「これはいかに」。わづかに口を開いて、そして笑靨、

「古曲でおぢやるを」。

「古曲とていみじうおりやる。聞く身がほと／＼心うばはれました。卒爾ながらいづれにおじやる」。

まづ所と場合ひとこそ逢へ、簾子にはじめ築地で逢つ

た時の應答と同じやうでした。其間眞底男をよく見れば見る程惚々する風體、また之に心が動きました。どうにか角にか說き勸めてそれから之をともなふ事となりました。

道々の物がたりから不圖耳に入ッたのは意外の言葉、すなはちこの男がもと竊子を知ッて居たとの事でした。

すなはち此男は夢王と言ッてはじめ矢張り竊子と同じ寺の行童であつたとの事で、其時から竊子とは中わるくも無く交際して居たとの事、竊子の素生のあらましはいちごも前に主水助から聞いて既に竊子をわが兄弟かとまで思ッた、その兄弟であるなしはまだ判然しませんでしたが、旣にこの夢王が共寺に居たとも言からには紛ひもなく竊子を知ッて居た譯と信じました。

さすがに今打ち明けて自分が曾て竊子を戀ひしたッたとも言へず、たゞそれとなく遠まはしに尋ねると夢王はわづかに斯うこたへました。

「一疊丸は死んだとやら人が言ひました」。

たゞなら強く胸にも來ぬ事、しかし今の場合ひのいちごはぎよッとしました。

「死にまひた？」

「殺されたとやら」。

「誰に？」

「誰か知らねど武士との事でおぢやる。されどこれはそれがしも聞いた事、くはしうは知ませぬ」。

思ひあたる事のみでした。そして武士はどう爲ッたかと言へばそれまでは知らぬとの事、やゝ隔靴の心持ちもしました。はたしてたしかに仕留めたものなら、稍未練も有るが猶心もいくらか弛んだやうでした。誰から聞いたかと問ひ正すと嵯峨から來る田舍人からとの事、その田舍人にも猶逢ふたよりも有るとの趣きゆゑ、やがて猶深く探ッてくれろと賴みました。

賴んだものゝいまだいちごはわが名も素性も明かさず、窃に男の氣を引いて或は勤王の心でも有るかと探りました。が、雲か霞かすこしも分からず、分からぬまゝ

いよ〳〵心を籠めて探りながら兎角其人品や擧動を見れば例のくせ、あはれ又之としたしみもしたくなりました。

男はわづかに其名と其手とを明かしました。手は伊賀の烏合の勢で誰を味方にする事も無いとの趣き、その名は舊の名を其儘にして夢王二郎と言ふとの事でした。

一度くづれては終にかうなるもの、また此夜はこの男を泊めました。泊めろとの命にしたがッて周旋をするのは他の手下ども、更に嫉妬の體もありませんでした。

すでに夜は更けて春ながら閨にもれる風がさすがに身にとほりました。あゝら寒、寒いといふのは附け句、肌布子であたゝめる程でも無いものを、何かそは〳〵するいちごの體、夢王の魂はほと〳〵身に添はず、聲ひくゝして徐く何かさゝやきました。床の上に起き上がッて顔見合はせてにッこり、肌あらはな男に小夜着きせかけて下からいちごは其顔を見上げて居ました。「何みそなはす、はづかしやな」。益も無く互にたはむれてそして男が、

「是からは手をはなれてそれがし、御身の許にまゐらうぞ。いかにや、御心御進みやらぬか？」

「和君こそ御心御すゝみやるまじけれ」。兩手の掌でいちごは男の片手を平たく押しつめて、「晴、秋風もやがて立つべき」。

「秋風？　御身の方より」。

平手でしたゝかに男をうつ美人の手、うたれて怒りもせぬとはさて戀ひも曲物、さゝめきの末、あら！　そもそも眞僞は？　いちごが掛けた色々の謎、やうやくに解いて打ち明けた夢王の言葉を聞けば是天晴れな公家方、さすがに嘘とも思はれぬ體。

いよ〳〵慕はしい心地もしました、兎角世の中の男は白無垢でッか、秀句で女をだますもの、この夢王も何を言ふか分からぬものゝ、今聞いただけを眞とすれば兎に角にくゝも有りませんでした。

第三十一

その次の日から夢王はいちごの許に居て手下どもにも

一々對面して挨拶しました。いちごとて猶よりは薫を好む人間、髯黑の野武士どもよりは夢王の方が氣に入りました。

こゝに至ッていちごが手許に引きつけて居る情夫を數へれば夢王をも入れて總計四人、その一人近江藤太と言つて年四十前後の力たくましいもの、その一人は油小路多門とて年は卅二三辯に長けた者、その一人は庵小太夫とて年は卅五六是も力たくましいものでした、之に附け加へたのは夢王、力量の度は何うか分かりませんでしたが、辯と人品に於ては天晴れ三人の外に超えて居ました。すべて互に一ッの目的をあらそふ場合ひに於ては其間相軋るのが常、どうして今までにいちごは其軋轢を起さなかッたかと言ふにすべて各に對する情がいづれにも優り劣りなくあッたからです。過ちが有れば直に譴責し、手柄が有れば忽ち褒めるその恩と威とは常にあやまたずに行はれました、無論業が無くて生計を立てる事この手下どもが綠林の露に命根をつなぐのは言ふまでも無い事でした。

今度新參の夢王が來て俄に事々しくもてなせば衆人の怨みは直に集まる譯、蔭からいちごは好いやうに夢王をすかしこしらへて表面は之を並に只とり扱ひました。で、流石に目立つところ多く有りませんでした。が、兎に角やさ男つひ洩らす濃な睦言も有る、その都度餘の三人はひそ／＼話しを爲る事も亦折り／＼は有りました。

この勢で長く續けばそれこそ世はくるしくも無い事です。が、ことに其實夢王にあついいちごの愛情、それをいくらか笠に着る氣に、爲る氣ではなくて猶、爲ッて時には夢王も慣れてくれればわが思ふまゝを行はうとする、それらこれらは終に餘の三人に充分の怨みを買ひました。

いちごが夢王を愛した其重な處は只夢王の容姿にあッたのです。夢王とて可なり奸智にも長けて居た人間、それこれもいちごの心を見拔いて兎角その心をむかへました、賢しくて牛賣りそこなふといふ昔の言葉をこゝに引くにも及ばず、天晴れいちごは世の中の男を手の內に丸

めるつもりでした、が、其つもりの下から相手はまたいちごを丸めるつもりでした。

兎角婦人の特性としてことに褒められて喜び、また刺(そし)られて怒りやすくなるもの、うはべはいちごも磊落を粧ひに粧ッて喜怒の制裁を容易に受けぬ體にして居るものの、猶他人の口は常に沖々の苦勞を大小つねにつくる源でした、手下にして居る情夫どもは何れもいちごを表向はたつとむ、それでいちごも嬉しがる、嬉しがる體を顔にもあらはす、見て取ッて相手はその方へのみ立ちまはる、自然男をつかふ中から男につかはれて居ました、男をはかる下から男に料られて居ました。

かつていちごは昔ばなしを聞いてさすがにつく〴〵感じた事も有りました。むかしから泉式部といひ、赤染といひ、紫式部といひ、いづれも女として無上な榮譽の名を殘しました、よし其榮譽は女の一分を盡くしたといふ榮譽で無いにしろ兎に角他人が望んで中々いたれぬ名をば受けました、其榮譽は受けた、いくらか當世と後世と尊崇の度はちがふにしろ、猶これら女性が其時代に於て世の人から尊敬をば其長處に得た事、それでどんな生活をしたかと言ふにつまらぬ官人と縁を結んで青侍の一人か二人かつかふが關の山ぐらゐの身分に爲ッて世をおくり果てた始末、さればとて高貴顯門に妃とでも爲るものが必しも美人哲女でも無いところを思へば實にこの世の中はいはゆる運といふものに縛られて居て運をはなれて外に爲やうも無い事かと座ろに嗟嘆されました。是を嗟嘆すると同時に道長の驕奢、清盛の我儘、いづれも聞き覺えが胸に事實と爲つて生れて、兎角男ばかりがますます尊くなる心持ちもして、つひ又自分を男に象ッて男をはかる氣に爲り、それで又其下から男にはかられました、が、はかられたからと言つて決して男が女にまさッた物でも無く、もし料ッたからとて女が男より上々の物でも無い事、料り、料らるるは一陽一陰の卽ち影と日向だけ、雌波が過ぎて雄波が代る、その循環の道をたゞ偏頗に觀たばかりで、虛心になッて之を見ればたゞ兩方に正負が

往來するばかりです、で、或は自分も男にはかられたかといちごも思ひはした。どちらにも口實は付く、つひわが先入の考へがそれを辯護する、既に見れば世に男のため身を失ふ女もある、また女のため身をうしのふ男もある、たゞ何が無し、双方同じ譯と辯じました。

たゞ姫墻の蔭にのみ居た女郎花がにはかに廣野にうつされて淘汰に遇ひ、大人びた考へも彼是いろ〳〵には出ましたが、全く曉り得なかつたのは舊の手下の情夫ども三人が夢王をにくんで居る事でした。これらの中にどんな謀計が熟して居るかは知らず、今のところほと〳〵宿辯の勤王の心を押しのけるまでに物の哀れの花鳥の思ひが極めて切で、夢王の色香にまよふがいちごの主の所存、思ひつかぬときは思ひつかぬ者、怖ろしくも夢王の寢首をねらふ謀が熟したとは更々心づきませんでした。

謀は明夜を限り情夫どもが打ち揃ッて酒宴をし、事に紛らせて殺さうとの事でした。神ならね身のいちごを始め、夢王さへも更に知らぬ體、その前夜は夢王がいちごの側に居て語り明かしてうか〳〵明くれば今夜といふ其日にもなりました、朝起きて眠さうな目をしてしづかに獨り椽端にすわッて外をながめて居る夢王の後から聲をかけたのは小太夫でした。

「夢王」

「小太夫か?」かへりみて不審顔、「昨夜は和主が出る定まりなるに、もう歸つたのか?」

「あいや、財はこの頃多く取りあつめて今五日六日手を動かさで暮らせるぞや」。

「さりとは誰が?」

「一昨日の夜の事、この小太夫が手柄にて」。前後を見まはして、「こよひその祝きに酒ふるまはうぞ。和主も家に居て飲みやれな」。

「何よりな。受けうぞ」。

五六日前までは言葉に針を包んで居た小太夫が昨日今日からは此機嫌がほ、それに餘のものも亦同じやうなのは餘程うれしい事が有るとも見える。やがて夕暮れとも

なりました。あゝ今夜を限りと狙はれた夢王の命、知らぬ身の淺ましさ、同じく夕ぐれを待ちに待つて、すなはち死ぬのを待ちに待ちわびて、

「もう日は暮れた。ことほぎは？」

いくたびもした催促、やうやくに夜の亥ちかくから祝宴もはじまりかけました。厨では小童が酒の用意に急がしいところ、さも見かねた體、しかも早くと急ぐ體で酒を盛る世話など夢王も立ちまじッてしました。目引き、袖引き、夢王の不念を互にあざけり合ふ三人、いよ／＼すこし夜も更けたらばと手ぐすね引いて待ちかけました。夢王はまだ坐に出て來ぬ、それをしきりに呼び立てました。

第三十二

いくたびも呼ばれた上やうやく夢王は厨から出て來て座につらなりました。

「夢王」、小太夫が、「和主いたく待ちわびつらう。宵の間にかごとがましう酒を急がせたに、さりとては情であつた、厨にてまめ／＼しく。いざ、聞こしめせ」。

手をあげて呼んで酒盞をさしつけました。が、直には受け取らず、

「かたじけない。なれど」、夢王は今持つて來た銚子をゆびさし「東山へまゐる御酒を今取つて來たぞや。聞こしめせ、一つぎ」。

「東山？」

「まゐる樽酒それがしがかねて盜み置いたのぢや、氣うといまでの味ぢや。きこしめせ、方々、それがしは其後にて」。

勸められていづれも喜び立ちました。三人が三人たがひに杯を取り上げて、

「わらべ、給仕ッ」。

給仕に注げと言ひつける、その途端すッと出て來たのはいちごでした。さすがに頭、見ていづれもすこし座を改めました、まだ注がぬまゝにして、

「夢王どの」、いちごが微笑を夢王に向けました、「めづらしい御酒とのことに妾も飲みたうなつて、いかに一つぎ妾も、喃」。

「御身が？」と夢王は言つただけ。

「御身がとは？　何いぶかしくて？」

「いぶかしくはおぢやらぬが……」なぜか返答にまごつきました。

まごついた筈、その酒は毒酒であつたからです。

實は朋輩三人が夢王を殺さうとして居る密計をさとくも夢王が察して仕舞ッたのです。はじめは途胸を突きました。三十六計にぐるに如かず、逃亡しやうとは思ひました。が、其足を引きとゞめるものがありました。寶の山に分け入つて既に玉を抱いた末、よし罪を負ふ小人の身にもしろ、その玉を捨てゝ逃げるには忍びず、願ふところは玉を永久の肌守りともしたくなりました。何心なく來てものがたりいちごを見れば、あゝ今更ならぬ事ながら美しい、これを捨てゝ逃げられやうか。と言つてうかうかとして留まるのはやみ／＼相手の謀を成就させる譯、こゝに至つて苦肉の計を案じ出したのです。

酒もりに托して殺さうといふ先方の謀、その裏をかくのは此方から毒を盛るに越した事は無い。やがて毒をも用意してさてまめ／＼しく厨に入つて立ちはたらいたのも何處その張り合ひ、うまく酒に投げ入れやうとの野心、が、目角がしげくてつや／＼志を遂げられず、其内に小太夫たちは早呼び立てる、今さら仕方も無く、叱るやうにして持ち運びの小童から銚子をもぎ取つて、きはどい處で一つかみ、投げ入れた時にはさすがに胸もおどりました。

で、充分うまい早速の出まかせ、ふりかゝる思ひざしを切り脱けて返杯していまや飲ませやう、いまや血を吐せやうといふところで、さても／＼、あゝ運のわるい、いちごが意外に出て來て、そしてその酒を懇望するとは？

どうしたらいゝか、殆ど泣きたくなりました。あゝ悟ればいゝに。何が凡夫にさとれやう。あゝ／＼これを知

ツたならあらかじめ打ちあはせして置いたことなら宜かツたに――それにしろ打ち合はせすれば許されぬかも知れぬ。

だまツて命令のとほりにすればいちごも死ぬ、死ぬいちごか、玉が。玉が無くなツて何が目的？

さても／＼嗚呼身がゑぐられる、

「夢王どの、さかづき」。いちごが手ッ……手をもう出した！

成るならこの一杯だけ毒が消えろ。消えたかはり跡濃くなれ。畜生、小わッぱ、給仕の生意氣づら？　手を出しくさツて銚子を取らうとする。

「待……待て？」こらへ切れずに給仕を叱りとばしました。

これはと不審、不審にかはるいちごの面色、あゝ夢王の背中には打水。

「いちご御、御身、御身、御酒は……」目をしばたゝいてそれと知らせやうとしました。

「御酒は何？　ことをかしい、何御言ひやるか知れもせぬ。何事の怪異がおりやる」。

どうしても通じのわるい、すこしはこの胸の苦勞も知りさうなものを。切迫つまツた此場の仕儀、もう目的は大抵はづれた。それにしろ毒酒の仕末それが付けやうも無い。

突然聞える外の方のさわがしい物音、何事と一同氣を其方へ取られて目を見合はせて居るところへあはたゞしい注進――

「武士が」。

「武士が？　捕りに？」

「なか／＼大勢」。

言ふ間も無く早こみ入る武士、もろ聲に「ぬすびと共？」

すは召し捕られるのか。急にさわぎ立ちましたもう酒どころか。

近江藤太と庵小太夫とはさすがに力量に於てはかねが

ね自慢のもの共、押つ取り刀で敵にわたり合ひました。

「いちご御あぶなし、とく〳〵御のがれ……」

さすがに抜け目の無い夢王、味方三人に聞えぬやう小聲で言つていちごの手を取るや否や燈火を消して裏手へまはりました。

が、早武士は五六人裏手にもまはつて居る體、當惑しました。しかし思へばよく〳〵の鋭い男、暗さにまぎれて斯う言ひました——

「面々いちごをばもう捕りまいた。表口の手に捕りましたが、かしこに敵が必死とかゝつて……疾くとく御救ひ……裏はもう大事おりやらぬ」。

同時、天運、表口での非常な物音、裏口の武士はうま〳〵欺かれました。直に引きかへす、この圖と夢王はいちごを助けて難なく落ちて仕舞ました。

それからは直ばしり、百姓家から馬を盗み出し、二人轡づらを揃へて兎角乘りこうすまでに駈けさせて愛宕の裾まで行き着きました。はや充分に虎口をば免がれました。

今までに見たことも無い夢王の早速の頓智、いちごは眞底舌を捲きました。はや息を入れさせて馬を緩く歩かせながら今夜敵をあざむいた機轉をばほと〳〵涙をこぼさぬばかりしんみりとして禮を言ひました。つねは口達者な女、心が充分うたれたことゝてしほらしく首だれるほどの體でした。

こゝに至つておもへば夢王も中々のもの、ふざけ合ふ中とも見えぬほど眞面目になつて謙遜して、そして眞實を面にあらはす、いよ〳〵いちごも感心する、こゝばかり不德不倫の今までの間に珍らしいほどな清淨な。愛情が、あらはれました。清淨な、愛情。世は不思議なものここに始めていちごは眞の男女の關係の味を知りました。

やうやくの事で白屋を見付け、一夜の宿を頼んで泊りました。妙なもので、何か氣でも改まつたやう、今さら二人夫婦めかして一ッ夜具を被ふのも極りのわるい心もち、考へて見れば何もさうまで思ふほどの理は無いとこ

ろ、しかし「あゝ深切な男」と絶えず／＼思ひ出す、その度ごとに男が可愛くてほとんど下へも置かれぬくらゐ、つひ何とも角とも一種口に言ひつくし得ぬ感情が身をふるはせるばかりに湧き立つて自然つくりかざらぬ嬌羞をさへ漏らしました。

枕についてつら／＼思へば種々な考へが泉のやうに湧きました。今までに自分が經て來た運命がこの一段落に逢つて蘇るやうに胸に浮かみました。

實のところ主水助と夫婦になつてからこのかた二三人の男を情夫にしていちごも情慾にふけつたもの〻更に其間に一片も眞の愛情といふものは無くてあつたのです。もと／＼主水助をばみづから進んで望んだものでも無い、たゞ境遇に壓制されて仕方なく夫婦のやうに爲つた、それだけで、馴染むにしたがひ多少愛情もこくなりましたが、又甚しくも無かつたのです。婬婦の普通としてここに突然愛情を深く寄せるかと思へば忽ち冷めて他に移つて、しかも何の相手にも一度は中々の熱心を示すもの、たゞいちごは所謂婬婦の中でもすこし人形食ひの方、比較を上臺にして選めば玉味噌より、櫻味噌を好む質でした。やがて樺有源太と野合して一時は源太の好意――わがために窟子をさへ殺さうといふ情――に感じもした、それも永久の場合で無くて、やがて其後その源太がいちごに拂つた厚意の報酬を受け取るべき時は無く、行き方も分からなくなつたのがふたゝびいちごをして眞正の情愛を經驗させる折りを失はせました。終に第三番目がすなはちこの夢王二郎、眠り薬で蕩かされるやう、目もくらむ機轉、それで人間最大の目的、自身、むしろ自身の命といふ貴いものまで救はれたと思へばしば／＼心にも感じ入ツて、しかも手に手を取つて逃げたのが猶感謝の情を深くする種、すなはち此處にはじめて男女の間の眞の愛といふものを知りました。

月は無いもの〻闇の戸の透間からも見える空、それも我身に似た境遇、わづかに闇を穿つ月影がかすかながら凜然として、名づければ眞如の光りを輝かして居ました。

風そよ〳〵、浮雲がしづかに追ひ除けられました。

思へば貞節は愛の花、愛の根ざしが固くなつて始めて貞節の花も咲くもの、言はゞ女子に貞節を守れと說き明かすのは愚、むしろ夫婦の間に眞の愛が出來るやう務めるのが智で、愛をはなれて貞節の無いところが分かれば自然人間の貞節は男女双方の平生にある事です、すでに一片この高尙な志が心に根をさしたからには仇めいた他の妄念、劣情、不德、不倫の惡魔は招かうとて來るもので無い、その境界に意外な事からいちごも入りました。

白屋はたゞ一間、その家のものも側に臥すこと、いちごは夢王としみ〴〵物がたりも出來ぬ、たゞ無言で目をねぶればいよ〳〵萬感が其目を冴えさせて改まつていままでの經歷を幻繪(うつしゑ)にしてもあらはす、見聞きした人、つきあツた相手、わが臨んだ境界や運命、それらがいづれも暗くなツたり明るくなツたり濃く見えたり、薄くあらはれたり、われを責めて高足でひよい〳〵歩く人の姿も見えれば、われを嘲ツて鼻をつゝく人の影も見えました。

第三十三

枕に就けば百事しづか、身體の苦痛もやゝ遠ざかれば相手になるのは樣々の妄想ばかり、今までの自身の經歷はほと〳〵夢のやうに爲ツてその何故と言ふ事も分からぬ程でした。

こゝに生れ落ちてから殆ど二十年、肉身以外に眞底の愛情をばまだ一度も見なかツた、その矢先宵の夢王の深切、さすがは男と感ずる下、直に萌すのは世界に唯一の人との評、境遇が不手際に行かず、またいちご自分も男の純粹の愛情を招くやうにもせず、そのために終ぞ眞の愛といふものを覺えなかツた身が生きかへるやうに今は爲りました。

思ひ出せば身の毛もよだつ、おめいて敵が斫り込んだ時庵や近江が大刀を拔きつれてばた〳〵と一人二人斫り捨てたのは確かに見た、それも今の今まで目に殘るほどの凄まじさ、その生死二つの凄まじい處を難なく助けて

くれたとは！

あゝ命の親、その命の親は、見れば命の子と枕をならべて早もう寢入ッて居る、やすらかに、すやすやと。寢入ッた、ても大膽、さても／＼男といふものは大したもの、見た事實は直に褒め言葉と爲りました。今までに終ぞ出さなかッた女氣も催して肌あらはに寢た男を手さぐりで風邪引かせまいとわが上着さへ脱いで被せる始末、被せ了ッてはいゝ世話女房に爲ッたやうで氣も嬉れしく直に涙もろくなッて情の水をもまたほろり。

つかれに魅せられて男は前後正體も無く、すこし觸られても一切夢中、肌近の男の手を取ッてその指を窃と手遊にして折ッて見たり伸ばして見たり、果は堪へず此方から顏を近づけて其指に一接吻、とゞろく胸を憶はず寄せる微笑、はッと思ッて誰か見ぬかと闇を忘れて目を開いて見る埒の無さ。

才子は自身の才を知らず、婬婦は自身の婬を知らず、たゞ才子はわが才を以て世界一般と考へ、婬婦はわが婬を以て一切普通と思ふもの、既に才又婬の見認めが自身につく以上は前に甕の中に居た人が既に外に出たものです。さすがにいちごはまた甕の外に出たものでした。

世の中の娘が男に嫁いで其男をしきりに尊崇するそれら實例を見て前からいちごは冷笑して居ました。男女の間の交際は情交によッて成り立つもので無いとはいちごの平生の意見でした。世は陰と陽、雌と雄、雌と雄とが天然の情慾を滿足さへすれば男女の能は終るもの、男はつまり女の器械、女は男の玩弄としか考へませんでした。たゞそれだけ、自然いちごが男に對して充分の愛を拂はず、また從ッて眞正の愛を買へなかッたのも無理の無いこと、それが實のところ今日はじめて變はりました。

つく／＼と自分の今までの不心得、即ち人生の運命をたゞ咄嗟のもの、自然のものと考へた事の誤謬が明らかに知れました。性質、氣が克ッて居るだけに意地もつよく猜疑も盛に、時が移るほど目は冴えに冴えました。猜に引き釣ッて足の指は針か何かで突かれるやう、時々は

何と感覺もわからず、びくつきました。

眠られぬと思ッたのも朝不圖目を覺ました處で思へばいくらかは目睡んだ事でした。つひ昨日まで京洛もよりで不潔の目を以て見た朝日、今日はや〻清く拭はれた影、何となく氣も晴れやか、過去ッた經歴が影に爲り、日向になり攻め寄せに寄せるもの〻、それながら引き立つ處も有りました。顏を淸めて山風に嘯いて、谷で濡らした手巾を絞りながら椽に腰を掛ける夢王の樣、ても扨も見上るやうなや〻窈子よりいくら宜いか……

朝餉を食べずに行く手を急ぐ男の體、いづれ思はくの有る事と問ひもせず男の言ふま〻早く白屋をば立ち出でました。立ち出でる、其目に殘ッたのは白屋の主人の顏、妻も無く、弟かとも思はれるものとの共住ひ、鋭い目光でした。

やがて男の向ふ處は丹波路、丹波越に差しか〻ッて山猿のさわぐのを珍らしさうに見やりながら是彼七八里も山路を步いては流石にいちごも女、足がよわッても來ました。氣が些し弛んで昨夜のつかれも亦や〻催す、果は足首が幅ッたく爲りました。

段々と木の根岩角が敵になる、これらを避け〳〵て路を拾ふ始末となる、やがて踏み中てれば腦まできり〻、終には一步を移すのもつらく爲りました。つかれたと訴へるやうにして男に言へば只微笑するのみでした。

「さぞ御つかれ。されどしばらく」。取り合ひもせぬ體。

「御身」、こらへかねました、「貞……」が言いにくいです。今さら何の處女めいた仕儀、でもさすがに熱愛はあどけ無さを釀しました。「貞……」と言ッただけでにッこり。

「貞？　貞とは？」

「ほ〻〻」。

「是はいかに、更に解せぬ。何事でおりやる？」

今までに可なり思ひ切ッたことをも言へた身がどうして斯う姑息に爲ッたのか？　が、定まれば早最相手は夫、何の遠慮！

「負ふて……御くりやれ」。精一杯。
「げによ足のつかれて？　さぞ〳〵。されどしばらく忍びやれ。やがて從者も來うするに――程もあるまじ」。
「從者？」聞きとがめました。
「然、從者が」。
「從者とは御身の？　この山路に？」
落人の身が何しに從者を持たう、まして從僕とも爲ッて居た夢王、何の從者を持たうか。
「御身從者がおりやるか？」
不審の體、しかし夢王は思ふ坪と言ふやうな得意の顏付、道傍の木の根の苔をはらひました。
「いぶかしく思ふのは理り〳〵、されど之にはいはれの有る事。さう大事もおりやらぬ、腰など掛けてやすみやれ、いはれ物語らうず」。
半ば分かツて半ば分からず、同じく腰を掛けると男はやがて改まりました。
「いま迄、まことを明かさざりければ嘸いぶかしふ思やるべけれど、今は明けて語るべし。それがしは今夢王と名唱る身でない、まことはこの丹波の與謝の武士與謝小二郎茂房といふものぢや」。
言葉は無くて目を瞬つて此方をみるいちごを微笑の籠ッた尻目に掛け、
「名も傳はらぬ武士ながら今では與謝の一手の主で、頼まれゝば山名にも加擔は爲る。口ひろけれども物事に缺けしこと無き身の上ぢや。たゞ煩惱には勝てもせず、今居る妻を餘處にしてまことは御身にあくがれて斯うまで事は果てしものゝ、思ひ出だせば世は奇しきかぎり、東山の樣子を探らうとて身をやつしてそれがし一人が都へ出でゝ何氣なく草の褥の笛三昧、なまめいたる唱歌を吹きゐしが思はぬ仕合せで料らず御身に出で遇ひしが、戀はまことにそれより燃えた。より〳〵尋ねて御身の素生も聞き知りしが、いちごと言へば匿れぬ美人、いかでと思ひし念も晴れて昨日今日とも爲ッたからには元奪取

ッたこれまでの妻は側室で御身は妻、去りがたき縁つながる口かまびすしき姑は一人有れど外に目ざはりとても無い。與謝へは是より遠くもあらず、こゝらわたりを常にわが家のものもさまよふからには必らず出で遇ふことも有るべし。たゞそれ迄こらへやれ。驚くか知らねども御身を妻としたさばかりに東山の事も忘れて常に御身にかしついたのぢや」。

一伍一什の物がたりは意外ながら流石に思ひ當りもしました。如何にも初から平凡のものとも見えなかッた夢王、この位の經歷も有るであらうとは信ぜもされました。それにしても料らぬ幸、よし小身にしろ、一手の武士の北の方と今爲らうとはさて何處に運が有るか知れぬ。

更に夢王の素生を問へば全く幼い頃は窟子と友だちであッたとの事、その生れを尋ぬれば物心も知らぬ頃に寺へやられたのみならず、樣子を知る先代の師僧が何處へか逃亡して仕舞ッたことゆゑ分からぬとの事、その姑といふのを聞けば今の妻の母とのこと、分かッたのは其くらゐなもので、猶其他の祕密は夢王――こゝに至ッて名もかはッた――與謝小二郎も打ち明けませんでした。が、實を訐けばいちごの山寨に討手を向けさせた、その訴人は實この與謝で、庵や近江が自分を殺さうとの共謀の裏をかく萬一の手段であッたのです。其度量、兎に角戰國には一廉の用になる方でした。

はたして與謝が言ッたとほり道で二三人の手の者に遇ひました。何か一言二言命令する與謝、直に今までのいぶかしさうな目付に引き換へて敬意を含む雜兵、いちごを交代に負ひました。

程も無くて與謝まで、男の足、走り着く、向ふに見ゆるが館とさししめす從者の世辭、見て心も浮き立ちました。が、只一つ氣になる事が有りました。まだ見ぬだけに氣になる的が大きいやうでした。外でも無い、與謝の今までの妻、それが嘸かし怨むであらうといふ事、もし今いちご自分が乘り込んで正室と爲つたからには。

もしやと思つて其心配を與謝にも正して見ました。「そ

も妾がにはかに舊の君の上に立つては姑の刀自もまた舊の君も……」と言ひかける、その下心はやはり上に立つのを望む、ところで、頼もしい、與謝は微笑で指でかるくつッといちごの頬をついて、「この笑靨が有るものを……」と難なくにげて仕舞ふばかりでした。男は既に自分に首つたけ、その保護がたゞ〳〵頼み、根が、しかし勝ち氣、どうなるものか肝を据ゑて乘り込めとは其勝ち氣が絕えず出沒して煽ぎ立てました。

與謝の館に乘り込めば早くも先驅に告げられて出迎へに出た館のものども、主君に禮をした顏で直にこなたをば不審さうに見る、知らぬことゆゑ仕方も無いことながらしかし又いま〳〵しい、「今にわが身が正室になつて見せ付けておのれ」が身をかへりみれば旅に汚れた着物が一枚。はッと思つて見る向ふの書院口、出迎へに出る女どもの體、その綺羅は千紫萬紅、さア大變、肩身がせまい。笑はれぞめも否、かきくどきました、與謝に向つて物あはれに。「この身のさまでは、晴、刀禰、うら恥かしうおりやる」。

第三十四

部屋を一つあてがはれて女の童と侍女とを添へられ、まづ事缺けぬ身にいちごも爲りましたが、胸に絕えずこたへるのは與謝小二郎の正室狹蓬のことでした。小二郎に紹介されて見參すれば相手は肉肥えて身長低く、色が黑んだ醜婦でした。

女性二人の醜美がわかれて居れば互に相忌み、相にくむもの。表立つては言へぬものゝ、たゞさへ夫がいちごとやら素生も知れぬものを引きつれて來たのが癪にさわる、それに、見れば相手は美人、美人、擯斥する目にすら美人、さては此身は二の町とならなくては爲らぬ。

二の町と爲ッても搆はぬとの發心が女性に催ほした事なら天地晦冥、人間に愛も情もなくなるもの。無くならなければこそ其處が夫婦、つまりいまゝで連れそッた男を人手にわたすのが否、つひ狹蓬もいちごをば目に稜で

送迎するやうに爲りました。
「何の正室を鼻に掛けて」。と、今度はいちごの方でまた邪推を運らしました。如何にも正室ぶッた處もありましたらう。が、それより何より第一はいとしく思ふ男を異體の女にわたすのがいやといふ處、その思案も付いたにしろ、初めから快くないところ、更に勝手のいゝ理窟のつけいゝ方に邪推を働らかせました。「何の正室を鼻に掛けて。日本一の醜婦の身が片はら痛い、飽かれたとは知らぬのか？」

何となく憎い。憎いと思へば狭蓬の色の黒さがますます黒く見える、づう／＼しさうに顔も皮厚であるやうに見える、狭蓬の上にある瑕と言ふば分厘の末までも丁度よくいちごの目に止まる。果ては分限をも忘れて狭蓬がまづ禮をしなければ自分も答禮を爲まいかとまでに思ひ上りました。で、顔を見合ッても異(おつ)に澄ます氣になりました。

夜更けて殿は狭蓬の方へ亙ッて、つれ／＼ゆゑ双方(すごろく)でも爲やうから、いちごに來いと使をよこす事もありましたが、狭蓬の部屋へ行く事と言へば一も二も無くいちごは拒みました。「病氣でおりやれば」。

すると殿は劬勞にしていちごの部屋へ來て、様子を見て安神し、今度は此方から狭蓬を呼ばせると、前のかたきうち、また狭蓬もいやだと言ひました。「病氣でおりやれば」。

けれど、殿が狭蓬の方へわたるのはほんの義理、有りやうはいちごの部屋にそれこそ「大とのごもり」して「不早朝」と詩にも謡はれたい程、今こちらに足が向いて、それに口實が付けば、いゝ機會にして直に入りびたり。

見せつけてやらうといふ勝ち氣が元來いちごの疵、殿がかう亙ッたぞと面あて半分聞えよがしに其都度々々琵琶を取ッて高らかに彈ずる、其音〆、音〆は狭よもぎに血を湧かせるのみでした。

一人では狭蓬も口惜しんぼうの蟲を手遊物にし得ず、母の寢室へ泣き込んで彼一句、是一句、母も意見は自分

も妾がにはかに舊の君の上に立つては姑の刀自もまた舊の君も……」と言ひかける、その下心はやはり上に立つのを望む、ところで、賴もしい、與謝は微笑で指でかるくつッといちごの頰をついて、「この笑靨が有るものを……」と難なくにげて仕舞ふばかりでした。男は旣に自分に首つたけ、その保護がたゞ〳〵賴み、根が、しかし勝ち氣、どうなるものか肝を据ゑて乘り込めとは其勝ち氣が絕えず出沒して煽ぎ立てました。

與謝の館に乘り込めば早くも先驅に告げられて出迎へに出た館のものども、主君に禮をした顏で直にこなたをば不審さうに見る、知らぬことゆゑ仕方も無いことながらしかし又いま〳〵しい、「今にわが身が正室になつて見せ付けておのれ」が身をかへりみれば旅に汚れた着物が一枚。はッと思つて見る向ふの書院口、出迎へに出る女どもの體、その綺羅は千紫萬紅、さア大變、肩身がせまい。笑はれぞめも否、かきくどきました、與謝に向つて物あはれに。「この身のさまでは、館、刀禰、うら恥かしうおりやる」。

第三十四

部屋を一つあてがはれて女の童と侍女とを添へられ、まづ事缺けぬ身にいちごも爲りましたが、胸に絕えずこたへるのは與謝小二郎の正室狹蓬のことでした。小二郎に紹介されて見參すれば相手は肉肥えて身長低く、色が黑んだ醜婦でした。

女性二人の醜美がわかれて居れば互に相忌み、相にくむもの。表立つては言へぬもの、、たゞさへ夫がいちごとやら素生も知れぬものを引きつれて來たのが癪にさはる、それに、見れば相手は美人、美人、擯斥する目にすら美人、さては此身は二の町とならなくては爲らぬ。

二の町と爲ッても搆はぬとの發心が女性に催ほした事なら天地晦冥、人間に愛も情もなくなるもの。無くならなければこそ其處が夫婦、つまりいまゝで連れそッた男を人手にわたすのが否、つひ狹蓬もいちごをば目に稜で

途迎するやうに爲りました。

「何の正室を鼻に掛けて」。と、今度はいちごの方でまた邪推を運らしました。如何にも正室ぶッた處もありましたらう。が、それより何より第一はいとしく思ふ男を異體の女にわたすのがいやといふ處、その思案も付いたにしろ、初めから快くないところ、更に勝手のいゝ理窟のつけいゝ方に邪推を働らかせました。「何の正室を鼻に掛けて。日本一の醜婦の身が片はら痛い、飽かれたとは知らぬのか？」

何となく憎い。憎いと思へば狭蓬の色の黒さがますます黒く見える、づう／＼しさうに顔も皮厚であるやうに見える、狭蓬の上にある瑕と言へば分厘の末までも丁度よくいちごの目に止まる。果ては分限をも忘れて狭蓬がまづ禮をしなければ自分も答禮を爲まいかとまでに思ひ上りました。で、顔を見合ッても異に澄ます氣になりました。

夜更けて殿は狭蓬の方へ亙ッて、つれ／＼ゆゑ双六でも爲やうから、いちごに來いと使をよこす事もありましたが、狭蓬の部屋へ行く事と言へば一も二も無くいちごは拒みました。「病氣でおりやれば」。

すると殿は劬勞にしていちごの部屋へ來て、様子を見て安神し、今度は此方から狭蓬を呼ばせると、前のかたきうち、また狭蓬もいやだと言ひました。「病氣でおりやれば」。

けれど、殿が狭蓬の方へわたるのはほんの義理、有りやうはいちごの部屋にそれこそ「大とのごもり」して「不早朝」と詩にも謡はれたい程、今こちらに足が向いて、それに口實が付けば、いゝ機會にして直に入りびたり。

見せつけてやらうといふ勝ち氣が元來いちごの疵、殿がかう亙ッたぞと面あて半分聞えよがしに其都度々々琵琶を取ッて高らかに彈ずる、其音〆、音〆は狭よもぎに血を湧かせるのみでした。

一人では狭蓬も口惜しんぼうの蟲を手遊物にし得ず、母の寢室へ泣き込んで彼一句、是一句、母も意見は自分

と同じこと、書物の金物の草いちごをも敵と見てけうさんでたゝきつぶす仕儀。

しかし母の寢處はいちごのにも遠く、今彈じて居るか、それとも居ぬか、更に聞えず、聞えなければそれだけに苦勞も加はる、忍んで行ッて見たくなりました。

母をさしとめて自分ひとり、侍女に見られまいと面を蔭に向けて廊下を傳ッて彼是いちごの座敷、近づいて耳を寄せれば、おのれやれ！ 舌たるい文句を贈答して、男の身としてまぎ／＼しい、素生も知れぬ女を褒めそやす。

「今日の湯あがりの御身のよそほひは又一入でおぢやッた」。

「これは鈍ましい、いつ見そなはした？」

「牡丹を玩んであの杜若(女の童の名)と何やらむ、物語ッておぢやッた」。

「いかさま然ることもおりやッたなれど、殿が見そなはせしとは毫だにも……」

「知らいで重疊、名のり上げては見ることも出來ぬ風情、いかなる宿世のあッてさ程に麗しく生ひ立ちやッたらうぞ」。

聞くにも胸は湧き立つ、僞らうことなら搔きむしッても！ あゝ殿も薄情な、この身に向ッては露一言もやさしい言葉賜はッたことも無うて、そして化性をばこれ迄に愛でくつがへッて。

婦人と言ふものは男子と妙に違ッたもの、たとひ双方氣に入ッて婚禮してもそれからしばらくの間は深い愛情を男に寄せもせぬもの、やがて馴染が度重なるにつれて忘れがたく爲ッて、終に三千世界の中、わが夫より外に男は無いと思ッて來るもの、はや左樣爲ればわが男が他の婦人と一言半句まじへても餘り快くは無くなるもの、まして正妻の面前に於て化性が千話ぐるひに狂ふそれ見て胸をわるくせぬ女性が何處に有るもの、狹蓬の憤怒も元よりでした。

一時は夫もにくらしい、鼻毛の延びたとしか思はれぬ、

新婚の夜さり、とろけるやうな笑顔を作り、また其後もまだ水入らぬ間は一寸した閑暇にもわが手を彈いたり、鬢の毛を引つ張ッたり、たわむれて……くれた夫小二郎の前日が思ひ出される。

それ程までに可愛らしがッた夫、それが今は何ごと、天魔の所爲か、惡魔の祟りか、正妻の部屋を音信れては義理一徧だけの言葉を述べて、間さへ有ればいちごの事を言ひ出す。

侍女どもに向ッて、表向では何殿が來なくともかまはぬと宣言するものゝ、內實は矢張り來てもらひたい。來て貰ひたくも無いが、來れば心よい。來れば天晴れ此方も手練を盡くして殿をもてなし、いちごの寵を奪はうと思ふ、世辭も言ふ、自然つまらぬ、はかない、小供めいた世辭も吐き出す、はッと思ッて殿の顏を見ればさもさも不興氣な體。いちごの方が恰悧しいと今さもさも思ッて居るらしく見える。

さうかとて生娘が無言の行でも爲るやうにだんまりむッつり、御辭儀ばかりして居てはまた澄ましたと思はれるに違ひ無い。たまには賑れて見せるもいゝが、此方が賑れ過ぎると、自然先方の堪忍ぶくろも裂けて仕舞ふ、賑れるのもまた善惡。

ふくれないで、よくもてなし、そして失策を爲なかッたにしろ、さう此方の氣轉がよければ直に其顏色を見て殿はいちごを呼ばうかとさへ言ひ出す、どうも其處で否だとは言へず、あゝ七去三從のをしへが面倒くさく、

約めて言へば否だの遠まはし、いちごは多分病氣か何かで來は爲まいと言へば、猶さら癪にさはる、殿がいゝ氣に爲つて「名ある醫師(くすし)を呼ばうか」。

なぜ女子と言ふものは斯う男子に凌げられるものであらうか。天晴れ與謝の一手の武士となりすましたればこそ今では心も傲つた、元は行童あがりのさすらへ人、その時に救つて宿してやッた恩を早くわすれて仕舞ふ。

見付けられぬ內とわが座敷に早く立ち戻つての千思萬考、ところへ苦勞にして母も來る「いたう顏色わるいぞ

や」と言はれると、甘たれ半分、涙がぽろぽろ。

しかし母とて何も舊身分のよかッた者でも無く、婿のおかげで今の館ずまひ、で、婿に向ッて充分に怨みも言へぬ。

充分に怨みが言へぬところで、素ぶりで怨みを婿にしめす、折々はきり／＼と針を言葉につゝむ。

小二郎は怒る、仕方なく狹蓬は取りさゝへる。

ひるがへッていちごを見れば此方にも胸のうやもやは前に讓らぬ程有りました。第一が自分が新參であるといふひがみ、それが種々の邪推の種の一つでした。

新まゐりとて人をさげすむ己れは何か、氣に入る梶原の侍女、心得がほに狹蓬たちの前の身分を話す、あゝさうか、それでこの／＼歴々の公卿をいやしむ。

せめて其顏が十人なみであつたなら嫉妬の炎も燃えさせろ、あはや片輪に近い顏色をして何を女めかす！　よしや今までに正妻であつたとて持ち主の氣が變はれば仕方あるまい、あれは馬鹿だと持ち主は言ッた、あれは鈍いと持ち主は言ッた、それ知らぬか、醜婦！

なりあがりの小女郎、薙刀の作法も知らず、天晴與謝の小二郎の內君になりすます心が片はら痛い。陣鉦がたちまち聞えて、武士が城外に馬をそろへる場合ひ內の覺悟をいしくも爲し得る力を持つての上の事か？

たゞ小二郎に飽きられては矢も楯も無いといふ處から粉飾は常に超えました。頰に紅を絕やさず身に空だきの香を無くなさず、朝化粧に夕じまひ、伽羅をそれこそ一度に用ゐ盡くす程でした。

その美色に添へて例の辯舌を以て、よく／＼夫の外交にも喙を容れました。他家から使者でも來ればかならず、接待の指揮を進んでいちごが爲る、いよ／＼小二郎も感心する、果は內幕の密儀にさへ喙を容れると、いつか政子の故事そのまゝ尼將軍との綽名もつきました。が、その綽名にいちごは大得意。付けられた當座は其綽名も樂しみにしてさながら咒文の何かのやうに口ずさみました。

第三十五

きのふ今日杜鵑を待つ夏のはじめ、綟子(もじ)張りの窓に映る青葉の色も翠の鱗を疊んで何となく愛らしく、若藻をわなゝかせる小魚の腹も時々はひらひらと輝いて見えました。小二郎は野を坐あるきして道に一人の老尼に逢ッたとやら、武士二人ばかりと共に出るより早くその老尼を作ッて歸つて來ました。この戰國、脩身をやつして敵情を探るものゝ多い世の中、よしや女にしろ、うかとは信ぜられまいと差し止める武士の言葉を用ひずに連れて來た、其處に子細がやゝ有ッたのです。

はじめ傍道にその老尼が憩ッて居たところを通りかゝると、しばしと袖を止めました、そして小二郎に向つて卒爾ながら問ひまゐらせたい事が有るとの趣き、何事かと聞けばかう言ひました。

「いと面なけれど妾はさる公家の片われにて、家無うなりて、尼となり、失ひし娘を尋ぬるものでおりやる」。と言つて今までに何人と無く、わが娘を知ッて居るかと人に尋ね／＼て來たとの事、その娘の名はと問へば、「いちご」と答へました。

さては是がいちごの母かと胸がつぶれるばかりに小二郎も驚きました。どう答へていゝか、殆ど思案も一時は付きませんでした。が、見れば尼の體の如何にもあはれ、海藻のやうに搔き垂れた古布子を、如何に夏とは言ひながら唯一枚まとふと言ふ名ばかりにして居る體、それに婦人の愚痴の多さ、今までに娘に迷つてから諸國を遍歷して餘命をつないで居るとかき口說くところを見れば、さすがに見捨ても爲りかね、どうにか後に工夫もあらうと思案して、それならば一先わたしの館に來い、心あたりが無いでも無いから搜つてもやらう、それに身のなりも淺ましいからせめて一夜とまらせて、どうにかしてやらうとの旨を說き聞かせ、それから館へ伴つたのでした。

歸るや否や、老尼をば一間に休息させて置き、直にわが居間にいちごを呼んで事云々と說き聞かせる、さアい

ちごの顔色は變はりました。
　半は信じました。むしろ充分に信じました。が、未練なもので猶問ひ正しました。顔つきは？　物ごしは？　しかし何うしても間違ひは無い母でした。
　久しぶりゆゑ懐かしさも懐かしさ、しかし今更おいそれと面會する事も出來ぬ、どうしやうかと意見を小二郎に問ひました。
「どうとて詮無い。御身好まぬならば逢はでも宜からう。されど、伴ひ來つる甲斐には然るべき事無うてはならぬ。こゝろあたりおぢやらぬか？」
「心あたりとて更におりやらぬ。殿、よきに料らせて、妾は術も思ひ出し得ず……」
「さらば詮無い。身が宜きに取り料らはうず」。
　考へて「かう爲やうず、今宵身が人を遠ざけてかの尼と物がたりして斯う言はう、いちごとやらん尋ねしに過る頃まで尼に爲りてこゝらわたりに居たりしが、今は何地へか影をひそめて見えずなりしと。それに付けては何となうなぐさめて得させう。御身もくるしからずば襖の際よりかいまみやれ。いかに？」
　一も二も無くいちごも同じました。やがて夜とも爲りました。さあいよ／＼其刻限でした。
　思へば身も世もあられぬ心もち、いちごは殆んど泣き出したく爲りました。今までに折々は自身わが不孝を思ひ出して影ながら父母に詫言をもした事が有ッたが、淺ましい、母が回國の尼に爲ッたとはつや／＼思ひ掛けなかッた。かはり無く、よしや事足りぬ勝ちにせよ、内裏で舊のまゝくらして居られる事とばかり凡夫の身が思ッて居たところが怨めしかッた。が、今と爲ッて――われながら臆病ながら――どうも面があはされぬ。不斷から父母を凌ぐばかりに廣言を吐きなれた身、その前の廣言に對してどうして人の側室に爲ッておめ／＼と母に見參が出來やう。
　それにしても男と言ふものは氣のつかぬもの、怜悧いけれども小二郎が或は打ち明けていちごが居ると言ひは

爲ぬか、と思へば氣も急く、直に小二郎のところに馳せつけて其注意を與へやうと思ツて行けば、あゝ間のわるい、狹蓬が其處に居くさる。

氣の所爲か、狹蓬がいちごを見て、見ろ乞食の親が尋ねて來たと冷笑するやうに見える、にくらしいと思へば鳳眼にもおのづから角が立ツて、すさまじく尻目でじろりとやツて、さて小二郎に面ツた物のこゝで憎いものゝ聞く前で賴のむも否でたまらぬ。世話を爲す侍女は殿の小袴の裾など拂ツて居る、さあ言ひ出せなく爲りました。

思ひかへして見れば何も小事、その位の目走りの利かぬ小二郎でも有るまいと、われから苦勞に口ふさぎを與へて其儘何も言はぬ、其内心、それを知らぬが佛、小二郎はいちごを顧いで、「喃、來て聞きやれ」で

「わらはも參りて怪しうおりやらぬか？」と、まア呆れた、人の苦痛を玩び顏の狹蓬がいひくさツた。まことに早身は心裏恥かしさの毒刄で寸々にきりさいなまれる。

たまらなくゝ爲ツて差し止めてくれろと殿に目くばせする、その目を快くも見て取つて狹蓬は猶殿に迫りくさる、

「殿、いかに？」

「殿、早う來ませ」、答へぬ内にといちごは急かせる、狹よもぎよ猶つきまとふ。

「これは怪しやいちご……こ…こばみやるか？」

狹蓬も憎らしさに淑德を破りました。

「こは？ 内には何を仰せらるゝ？ 妾がこばみましたか？」早語氣はあらく爲ツて。「こばみやれ」。思ひ切ツて冷笑しました、「こばむ！ さも然うず。乞丐の母君がまゐりしかば……」

聞き捨てられぬ斗りの冷かし、赫としました。しかし狹蓬に取ツてはまた一理屈ある事、今まで殿がいちごを庇ツて一言も此方に許すと言はぬ、それが憎く爲ツたからでした。乞丐の母君と言ふや否や、付き添の侍女は一同に噴き出しました。狹蓬に取ツては其心よさ、いちごに取つては其口をしさ。

聲を呑んで一言も無く、用捨も無くて顏に袖、もう何

うして悠々として居られましやう、隙見などして。「殿、御免さふらへ、しばし妾は」。禮するや否や引きかへしました。廊下へ出るや否やわッと一聲。小二郎も氣は氣でなくなりました。一二言何とか言ッて狭蓬を叱り飛ばす間も無く、後を追つていちごの部屋に來て見れば身もだえをして泣きころげて居ました。

「いちご、心そこねつらう。ゆるせ、身に免じて。身が後にどうとも爲う。他事ならば家隷にて事濟めど御身にかゝはる尼なれば身が直々に對面するのぢや。それも有ればやがて立ちかへる、心な屈しぞ、晴いちご、しばししばしばらく待ちね」。

うつむいた許り、有難さうに手を合はせるいちごの體、見ていよ／＼不憫をもよほしました。家は歴々の公卿と言ふに時世とは言ひながらこの姿か？　如何にも相思の情がこまやかでした、馴染んで知ッて居るいちごの氣性、くやしいあまりには大事をも爲かねぬ風、それも苦勞、武士に心を得させて氣をつけろと命じ、心を殘し／＼て出て例の尼に對面しました。

で、前いちごに打ち合はせた通り好い加減に蛇の生ごろしを傳へました。可愛相にも眞にうける老女、立てつづけの涙を話しが切れては猶多く流しました。何か搔き口說く、其聲はつもり／＼た浮世の苦勞に嗄れて秋の蟬同樣、一言で咳、二言で痰。

一時は部屋に立ち戻ッても流石にいちごも親身の情愛。今頃は小二郎が老尼と話しを爲て居る頃と思ッて見れば亦聞きたくも爲りました。さしとゞむる武士どもに辨解をこま／＼爲てやゝ近寄ッた一間の横、襖の蔭に身をひそめてさて聞いては見ましたが、そればかりでは滿足が出來ず、やをら襖へそッと手を掛けて浮かせて敷居をすこし辷らせました。

のぞいて見れば、でも無殘、如何にも紛はぬ母でした。如何に零落したと言ッて是程とは！　まことに乞食そのまゝでした。昔は色白との評が有ッた人、似氣なく今は雨風に黑みはてました。それで小二郎に向ッて搔き口說

ゝ、其言葉を聞けば一々斷腸の種でした。

親切に甘えて始から末まで話すいぢらしさ、はじめいちごが不圖庭を散步するとて立ち出でたのが此世の名殘り、影も形も無くなつた、それからといふ物は家は闇、父の夏代の元々氣のいゝ人間、自然心も弱い方、苦勞に苦勞を重ねた末は終に思ひ病みに煩ひついた始末、折々風の便りに聞けばいちごは死んだとも言ひまた義政の方に行つたとも言ふ、いちごの不斷の氣質から考へれば義政の方に行つたといふのは眞とも思はれず、多分は死んだのかと座に推察を固めればたゞ淚に搔きくれる斗り。聞けば宮庭の混亂は前日よりも甚しく、小君さへ葵さへ何れへかやはり見えなくなつた抔評浮(うはさ)を傳へるものも有る、それでいくらか味方をも得たやうな心持ち、たゞただ神佛に向つて苦勞に骨と皮とになつた指を打ち合はせて愚痴か願ひか吾もわからずせがむばかり、其内に夏代の病氣は次第に重くなつて、果は賴みも無くなる仕義と爲つた、爲つてそれで、さァ見て居られやうか、いちごゝといふのが口つゞけ、この四十女の妻をさへつかまへて血迷つた目でじつと見て「あゝいちご、よう歸つたぞや」。

終にはかなく爲つて見れば、もう浮世に望みも何も絕え果てゝ、せめてはと思ふ空だのめに家を捨てゝ回國しやうと志したとの事、一伍一什はすなはち是、たゞ其後が聞くに忍びませんでした。

泣いて／＼泣き死ぬ程、尼はいちごが襖一重の向ふに居るとは知らず、

「殿、かう歷めぐつて甲斐あらずば活くる望みも妾は持ちませぬ、御慈悲、御心あたりだにおりやらば一目は逢はせて下されよ。世の中に親の罰不幸な子の上に掛るとか、よしや親に苦勞さする子はにくゝもあれ、妾はいかで罰を中てましやうか、罰あてゝ、親子永劫相見ざらば……喃この胸ぐるしさ御推しはかりやれ、喃……憎くとも罰は中てまじ、大事無いならこの母がいかにとも罪詫びうするに……たゞたゞ一目逢ひしならば此世の望みは足りておりやる」。

さしまねぐ手元を見れば立枯の雌松の一枝、色も無く荒び果てゝ、痺せ果てゝ……ちッ！

襖影で現在見て居る身の苦痛。あゝ可愛相、おいたはしい。此身の心得ちがひから一家が斯うまで離散して……ま、何うしたらこの言譯が。不孝不德の妖舌にそもそも迷はされた身の發端、浮世の門出がすなはち邪路。因果は運る水車の輪廻とはよく言ッた！

許して下さい、母上さま、御目に掛かりたいは元より山々。しかし、身で身を顧れば。襖一重が血肉分離の關の扉、生着に襖は金の水の月形、猿猴が眞如をあやまつその、その辻占。

天晴面目ある身にさへ僞つて居た事ならよしや御叱りを受けやうが、よしや平生の慈眼に引き受けて「おのれいちご、寄せ付けぬ」と仰ッても我から進んで御怒りの解ける迄泣き付き、口説き付き、すがり付き、只一目でも御見には入る、それが出來ぬ身の因果、親の身を——今さら知ッた——汚して、はづかしめて、勝手に放り出して、今までの經歷を思へばよも〳〵影ながらでも親に逢へたもの。それとも逢はうか？ 逢ッて一言なぐさめやうか知ら。この襖一重を一推し推せば、顏を見せたら！

第三十六

襖一重を開けて顏を見せたら、ま、どう、取り付いて、抱きかゝへて、さぞ——憎くも有つてまた——嬉しがられる事、世の中の痛苦の浪風に痩せさらばへた御老體も天晴親身の情熱に血を增して——あゝ、思へばこの側室一つを見限つて、名唱り合つて諸共に讀經三昧、母子つれだッて妓王の昔しを眞似やうか？ つらい、かなしいと言ふ事は今はじめて知ッた。なる程浮世は六かしいもの。

さすがに與謝の小二郎は男だけに、また他人だけに感じも鈍く、見たところいちご自分ほどには血をさわがせぬ體、他人と言ふものは斯う言ふものかとさて憎ますともいゝ物までが一寸小にくらしくなりました。こゝにい

ちごが居るとの事を知らずに居るところがいたはしい。とつおいつ胸は思案に湧き立ちました。

その内に老尼は頻に小二郎の顔をながめて居ましたが、思ひかねたと見えて口を切りました。

「やさしく仰せてたまはるだけに御いたはしうおりやる。つき無き事問ひまゐらするやうなれど、殿には何方の御うまれでおりやる？　産れからこゝに御すまひでおりやるか？」

「うまれから此處のすまひではおりやらぬ。生れは京都とやらん、されど父母を知らねば何も知らぬ」。

「父母もおりやらぬとは？」

問はれて小二郎も膝を進めました。

「いかに尼公、御身も佛門とあればそれがしも打ち明けて亡き人の菩提をも御身に祈らせう。まことを言へばそれがしに父母は無いのぢや。有ツたものゝ、身は知らぬ。いとけない時寺へやられて寺にて育ツたまゝ親は知らず……」

尼は聞き耳そばだてました。

「寺とは？　京の加茂の草の庵ぢや。もと何とか言ふたよし、身が物心覺えた頃には閑蓮庵ととなへた」。

「加茂？　閑蓮庵？」

おどろいた體、不審と小二郎は子細を問ひました。

「何おどろく？　思ひあたる事があるか？」

尼は猶豫なく、

「ことし、打ち付けながら何歳召さる？」

「廿と五」。

「廿と五？　まことでおりやるか？　扨も……」

と言つたぎり後は涙。

「殿！　外れる槌かは知り申さねど、殿は妾の……あな空恐ろしい」。

「そこの何か？」

「子ッ……」

「子？」

ふししづみながらも尼は手で小二郎の顔を指さし「怪

しかる事よと思ひ居りまいた殿の面ざしがいといたう亡き夫の夏代に似たるのみならず、忘れもせぬ、その、その御腮の下の黒子……」

「はてこの黒子が？　まことにか？」

「今そら言申したとて詮はおりやらぬ。何とか寺にて聞こし召された事はおりやらぬか？」

「まことぢや。言ひ傳へて後の師僧から聞いたこともあつた、身はさる公卿の落し子と。親の名までは聞かざツたなれど、公卿の子とはたしかに聞いた。これ尼黒子にたしかに見覺えあるか？」

「まことでおりやる。この、かしこけれど、この妾が產みまゐらせた人でおりやるを……黒子のみかは殿の御ありさまは今妾が尋ね迷ふいちごとようも似通ひたまふ」。

この一言は小二郎の胸には毒箭、他は知らぬ苦惱がむらむら。

では、畜生！　いちごは、嗚呼天地神明、現在肉……肉身の妹か？

つねに動じやすくなかつた身も五體は生熱、倫常の針につゝかれる身のくるしさ。何さま尼の言葉は嘘とも思へぬ。嘘ならそれ程の事は無い、が、一々ひし／＼と思ひ當る事も有る、人もよく言つた殿といちごと面ざし似通ツたと。さても／＼人の道をどうしやうか？

胸がほとんどわるく爲る、身がふるへ出す、見る目がわれからたまらぬ、さうかとて打ち明ける事も出來ず、あゝ夢なら覺めてもくれろ。鳥、獸、犬、畜生！　力も無い一疋の老尼が何か神聖の威を放ツて此方を叱りこなすやうに見える。

返答は無くてとつおいつ、しかし思ひ付けばこの子細を人に知られたらそれこそ恥辱のまた恥辱、次の間あたりから漏れるかも知らぬ。と思ひ付けば工夫もつく、無慈悲ではあるが、今の母の言葉、それを搔き消して仕舞はなくては爲らぬ。

正に思ひあたツたのは血筋の恩愛、それと分からぬ内から猶この老尼に限ツて何となく慕はしく、その慕はし

さの餘りにつれ戻ッて一言半句交へれば交へる程また言ふに言はれぬ親しさ、なつかしさも加はッた、その母、實に天にも地にも只一人の母、生まれ落ちてからやうやう始めて其顔を知つた母、まだ恩には浴せぬものゝ流石に慈愛のところは其顔にもあらはれる母、それがどうして突き放せやう。それも母が人並の世わたりを爲て居ることなら格別頼みとする夫も無い哀れとも墓ないとも何とも角とも言ひやうの無い身、そのかよわい物を見す見す知らず顔にもてなせやうか？　親子だとわかつて熱涙に身をわなゝかせて其下から嬉しくて／＼たまらぬ笑顔を密と洩らした、その、而も年老いた、なつかしい人をたゞ無情に追ひ出して仕舞へやうか？　いちごが見たら何と言ふか、聞いたらそも／＼何と言ふか？

　いでと決心して逐ひ出したその行く末を思つて見れば、あゝ九腸寸斷々々（ずたずた）、母は吾子に逐ひ出されて霜白い秋の夕暮、山風を衣に受けて聲細く鉦をたゝひて人に合力を乞ッて步くこと、その途には病氣でも起つて、そして浮世の何處に眞の子が居るかも知らずに居て、またそしてはかなく草の蟲と泣き死んで仕舞ふこと、その亡骸は誰が拾ふ？　犬の腹、烏の口。

　しかし何うしても亦思ひ直せば、凡夫の心かも知らぬものゝ、身の素生を人に聞かれて大變といふ心持ちもしました。素生、たゞその老尼がわが母と言ふだけなら構ひません。が、いちごと自分とが兄弟であるなどゝ言ふ事、それを人に聞かれて快くもありません。

　それも浮世に望みが盡きてそれから後念佛三昧でもして身を送らうといふ考へならば兎も角、猶成りあがらうとの大望もある身分、とかくまだ世をば思ひ捨てられず、捨てられぬところで醜聲を臣下に傳へるのははなはだ心ぐるしい。

　ひとたび孝心以外に目的を置かずに考へて見れば矢も楯も無く母があはれになるものゝ、更に慾心を土臺として考へれば理が非でも母をつれなくする氣に爲りました。暫時ながら今の小二郎の胸はとの二つの情の爭ひで

した。

まして感動の鋭い女性の身、一重の襖影で一伍一什を立ち聞きしたいちごの心中、さて今日は實に夢また現。はじめ餘處ながら母を見てさへ胸は麻のやうに亂れたものを、今聞けばまた意外と言ふも愚なこと、われとわが顔が冷えて氷のやうに爲つたのに氣がつきました。

どうかと思つて小二郎の顔を見れば是も當惑の體さもこそと推せば推すほど感動もまた深く、はては其座に居たゝまれなくも爲る、爲るものゝさて共後小二郎が何と言ふかも知れぬ、それ聞かずに歸るのも亦殘念。

が、また無念、あゝ折りのわるさ、狹蓬も立聞きをしに來ました。

いろ〳〵に考へ直して見ても浮世の大望は去らずつひに小二郎は素氣なく母を待遇する氣になりました、まこと、根からの不孝の心はさら〳〵無い身、それでいざ虐待しやうといふ場合ひの胸ぐるしさ。虐待の文句は口まで出てまた幾度かためらひました、しかしどうしても思ひ切らなくては！

きッと爲つて眼をいからしました。

「尼ッ……」

是はと駭く母の顔、眼を睜ッてさも〳〵吃驚。あゝいぢらしい、それを叱りつけなければ爲らぬ。

「舌長いぞ！ 最前から何言ふかと空耳つぶせば今何ごと、身をば己が子と言ふとは——證據も無きもの何かせう。白痴言聞くべき小二郎か？ とう〳〵此處を立ち去れェ」

「たは言？」と言ッただけが尼の關の山。

「たは言ぢや。それかと思へば詐りて己が言葉を導いたに、乘りかゝッたが鈍ましい。そら言言はれていで應と從ふものと思ッたか？ 去れ、立ち去れ……」

尼はいよ〳〵ます〳〵意外、涙もやんで當惑顔のその哀れは。油鍋で煮られる心持ち。

「立たぬか？」叱り飛ばして身を起しました。ぐずぐずすれば飛びかゝりさうな見脈。尼もいくらか不審を催

しました。して見れば目違ひか、他人の空似か、別人か？　とは思つたものゝ、それながらまたその他人でも、別人でも吾子に似て居るからは猶戀ひしい……

「殿」「飛びすさッて手を合はせ「斯う……斯うでおりやる。過言かも知らず、その程は、しばし殿、尼が老いさらばへた處と御見やッて……これよ、殿」それだけでわッと泣き落とす悲歎の絶頂。

いぢらしいと言はふか、可哀さうと言はうか、見る身が鏽刃で寸分にためされる。襖ごしのいちご、是も同樣まだ／＼凡俗、飛び出す程の勇氣も無く、忍びに忍んで齒をきり／＼。

泣き落して尼はぢれッたさうに一人で身ぶるひ、碎けるかと思ふ齒ぎしり、

「殿、かしこい言葉ではおりやれど、よしや他人でおはせばとて我……我……我子に似かよひたまふた上は」、あとは涙がすなはち言葉「戀しうて／＼」。

「まだぬかすか？」

とは言ッても流石に恩愛、兵どもを呼ぶ氣力は無い、ところを尼はまた一言、「なさけでおりやる、申し殿、こよひばかりは切めてこの御館にとめさせられて……」

あゝこれがどうして素氣無くされやうか！

第三十七

一間の中でさめ／＼と泣いて居るのは前の尼でした。その部屋には我より外にたれも居ぬところ、目的の無い目を隔ての蒸し襖に抛ッて怨めしさうに其處をながめて居ました。

どう思ひ直しても他人では無いこの館の殿。珠玉が分からずに兎角うたがはれるのも前生の業因か？　空似と言ふことも有るとは聞いた。常夏と河原なでしこ。似ても別とは知る。たゞ何と無い親身の情愛。血筋の緣は魑のやうに手を出して二人の間を導いて居る。のみか、顏から聲から樣子までこの目が現在見た、この腹が現在やどした其人と瓜二つ、何處にそも／＼いつはりが有らう。

無いとわかッて先方もそれ知ッた體。それであゝ無情、あゝ天地神明にも見はなされた。とてもこの世に最う望みは無い。

産み落とした其日は大つごもり、物の怪異が有ッたとやらで陰陽師が邪魔を入れて罪ほろぼしに親知らずで寺へやらうと言ッたその時、忘れもせぬ、まだ初めての男の子を藁の上から人手にわたす心のくるしさ、また再會の日も有らうと些しばかりの記念をあたへてそして黒子をじつと見て、是が何よりの證據だと念じ覺えた現在この身、その身がこゝに四十年、わすれもせぬものを、あまりと言へばつれないいたり。涙にかきくれたにしろ、まだ目は黑い。この黑い目でそれと見ながら、それと思はぬとは何の因果。もとより捨てた子、鄙の男の手にわたしてそれから寺へやられた子、それに向ッて親めかすのも些しはかたはら痛い譯、たゞせめて一言ぐらゐ、多くは入らぬ、たゞ一言うち解けてくれたなら生きながらへた甲斐も有らうに。

それが無いとはよく/\不運。內裏の大亂、一家の零落、やう/\で尋ねあたッた意外のわが子、よしやいちごには逢へずとも、それでも吾子はやはり吾子、やれ嬉しやと思ふ間も無いとはさて/\運のわるい。

かう運のわるい身の何處に有達(うだつ)の瀨が有らう。もう世は是で盡きて仕舞ッた。何たのしみが世に有らう。思ひ切ッた方がいゝ、或は死んだかも知れぬいちご、もしも左樣なら冥道(よみぢ)でまた逢へる、まだ/\それが樂しみ、この世に何がたのしまれやう。

あとより血のなみだ。目をねぶッて合掌觀念、一間の風も死にました。

夜しづかに窓からさしのぞく新月ばかりが物のあはれを知り顏、蒼ざめた色の影も薄く、欞子ばりに目を近づけて外を見れば黑ずんだ木から雲だッた空いづれも死人色をして居ました。

おとなしさうに照らしてくれて居る短檠、溜息に驚いて程經てぶる/\震へる外はじッとして今や一風を待ッ

て消えやうといふ體。あゝ是を見ても未練は起されない。萬事望みが盡きた以上は、いざ短檠、油が盡きた上からは風を待たずと見事に消え行け！

兎に角に一夜の宿を借りたのは恩、その恩を仇にかへす法は無い。思ひのたけを紙にのこらず、筥から取り出す硯に――涙をたゝへても堪へられる――墨をすりながすその墨と共にみじかい命――

「さりとてはつれなき御こゝろかな。わかれまゐらしてより親のこゝろは燒野のきゞすのたとへも引き出でつべくなむ。道にて見ぜしが命にてまことのかよはぬはさきの世の事と思ひ侍りてこれをかぎりに無くなり侍る。たゞせめてもわが子としいふわが子の一人に逢ひまゐらせしが心やりにて、あはれ永劫すくよかに過ぐさせたまへと念じまゐらするばかりに侍る。さりとて名のらせたまはぬにや、さりともいまだ得さとらでおはすかは知らずはべれど何事もさだまる世と思ひなせば誰をうらむるよしもなし。何となうほと〳〵世の中つらうなり侍りしまゝ思ひたちしをそのまゝにいちごにも逢はでなり侍る。あなかしこ。

京尼

君

進上

書き了ッてほッと一息、紙をたゝむ間はよし長かッたにしろ知れたこと、まして手間も無い間、その手間の無いだけみじかい命、血など見せるのは流石に否、聞けば庭の向ふに轟く泉水の音が聞える樣子、そこをと目ざして屹と身をつくろひました。

身をつくろッてまず惡びれぬ方ながら、さすがに涙はやはり湧き起つ、かつ拭ひ、かつ擦ッて鼻をもかみ、もう世には久しくない日をあげて上を一目、そッと襖を明けてしづかに庭に忍び出ました。

かれこれする内新月はすでに傾いて夜はおぼろに爲り、水ばかりは地よりも黑ずんで見えました。

就て見れば形ばかりの泉水、なか／＼死ねさうも無いやうす、死にたさに失望してふら／＼と足を移す内にいつか繁ッた森に來ました。

人影もわからぬばかりの森、兎が居たとて見えもせぬところ、聞けば今死なうと言ふ身にもさすがに氣味のわるい人のうめく聲。

ぞッとして、何いふと、二三歩退きかけてさて更に思ひかへして近よッて見て「何もの」と聲を掛けて見る、と相手は癪に閉ぢられた少女でした。

見捨てもなりかねて介抱し、子細を尋ぬると少女は斷續した言葉のうちからつまびらかに答ました。その答へ、尼には思ひ當りも多く無い方、しかし思ひの外でした。その少女は卽ち窟子の庵室に近くあッた白屋のもの、はじめ男すがたのいちごを見て人知れず戀ひこがれ、やがて窟子とのしか／＼の關係を聞き、はじめて驚く中に、今度は更に窟子を戀ひそめて折りがあッたらばと思ッて居る矢先いちごからのまはし者に窟子は刺されて、その淺猿が終にもとゝなッて墓なく爲ッて仕舞ッたとの事、いちごに怨みが重なッて少女も其儘にして居たところ此頃此近邊にうつり住んで麁朶など賣る道で昨日とか一昨とかたしかに其邊でいちごを見とめて、やがて妙な一心、よく／＼深く窟子を慕ッて居たことゝ見え、いちごに逢ッてその怨みを述べやうと志して居て今日も夜までいちごを尋ねて居たとの事でした。

兎に角に一概にも信ぜられぬ言葉、しかし其處にのぞみの有る尼の心は動きました。

未練なやうながら死ぬのがまた一時をしく爲りました。こゝらにいちごが居る！　こゝらには何處かと無益ながら根ほり葉ほり問ひ正して、さて脆くも自分の素生も明かして諸共にいちごを尋ねやうと決しました。

はやもう其處邊にいちごが見えるやうな心もち、女氣がさへかへりました。さて是から何處へ行かう。方向がつかなく爲りました。

人を伴ッてまさかに人の館へはかへれず、さうかとて

野宿するのも否、書き置きを殘したのも氣にかゝる、一寸思案がつきかねました。凡夫ゆゑ仕方も無いこと、ただしかしせめて風のたよりにも現在自分が書き置きを殘したその館に尋ねる人が居ると知ッたなら。

少女の家を聞くと此頃この近處に移ッたとの事、そこに行く氣になりました。今に爲ッていくらか變なもので與謝小二郎がさして前思ッた程でもなくなッて、よしや書き置きを見たにしろかまはぬと心を決しました。

だが、世の中は兎角意外に行きたがるもの、その書き置きをば小二郎より何よりいちごが見ました。

小二郎が恐懼して老尼を一間におしやッた、その後は自分も一間に籠ッて夢に夢を見るばかり、呆れが半分、耻かしさが半分、つねの大膽もこの時は打ッて變はッてほと／＼とつおいつの思案にくれました。小二郎が何とか言ッて來るかとは思ふものゝ今さらその顏を見るのも耻かしいやう、夜着にうづまッてやゝしばらく泣きに泣きました。癪も起ッたか、胸先きから掛けてきや／＼して來て、頭はほてッて燈火も黄色に見えました。

たまらなく爲ッて母はどうかと隙見をしたく、やがて窃と忍んで母の入れられた一間に近よりましたが、さて此時は前に尼が死なうと覺悟を極めて其部屋を立ち出にその餘程後でした。

何も知らぬ身の罪も無く、どうかうと考へながらも、その襖にさしよッて隙見して見ればこれはいかに尼は居ぬ體。

短檠ばかりがまじ／＼と照ッて居ました。

おや。胸どツきり。それとも用でも有ッて出たかと思ッてやがてそのあちこちに目を配れば直に書き置きが見付かりました。

何とも上書きは無いものゝ、よしありさうな筆の跡、たまらず中へ驅け込んで手に取るより早く短檠の下、封を開いて讀んで仰天。むゥんと口を結んで無言でしばらくは目をみはる、更にまたふたゝび飛び／＼にくりかへして讀み過ぐして、その手紙を懷中へねぢこみました。

口まで出ました、人に言はうかと。しかし恥ぢの上ぬり、それも無念。まゝよ自分一人で……まだ程も無いこと、追ひかけろ！

飛ぶやうにわが部屋へかけもどツて手にあたツた被衣をとるが早いか、ふわりと打ちかけて横庭へ。庭の方より外に出口の無い尼の居た部屋、てつきり行くさきはこの方と暗を恐れず飛び出しました。

われをあざけり顔の泉水の音！

えゝ殘念、遲かつた、もし一足早く來たことならやみゝみ抜け出させは爲なかツたらうに。今ごろはもう死なれたか、いま死なうと爲される處か！　氣は急く。石にはつまづく。木の根は乘り地で足をとめる。赫々と血は頭へのぼりました。

何處！　其處！　此處！　木が有る、あゝこの木でも首はくゝれる、石がある、あゝこの石でも頭はわれる。水が有る、あゝこの水でも溺れられる。水か、石か、木か、刃物か、何をえらむで御覺悟なさツたか？

いつか被衣は風にうばはれて、それもわからず、浮き足で其處此處と無く全く血まなこ、終にはつかれ果てました。何處まで來たかは自分も知らず、何と無く頭の上から化け物が來て自分をおさへつけて是でも歩くかと攻め付けるやうな心持ち。

身のいたさ、かゆさが何だか大抵わからなくなりました。捨て石に腰を掛けてしかも夜半、つかれが恐怖を殺したか、平氣で茫然となりました。

どうも何とも角とも言へぬ心もちでした、肩も張るやう、其肩を打つといくら強くてもいたくも有りませんでした。母の事は忘れたやうに爲りました。いつしか生まれ變はツたやうな氣もしました。たゞ今のところ夢となツて腰を掛けた儘になりました。

第三十八　大團圓

きやきやと鳩尾からかけて石砭(いしはり)をうつやうな癪といふ鬱氣のかたまりは獨り婦人にのみ限ると思つて居た身が

今それを實驗しました。動もすれば胸さへわるく爲ッて居ても立ても居られず、あゝ不德の責苦といふ物は是程に恐ろしい物かと觀ずるに從ッて五體が縮むやうに思はれて、常は大膽が自慢、敵五六人、首十二十、屠りたふし、千切り取ッてもいッそ心よく思ッた身が却ッて柔弱の心の鬼に呵責を受けて、見れば見る物每すべて身を責める敵でした。

短檠の魔風にわなゝいて其眞如とやらいふ光りも薄く、しかもつら〳〵思へば其光りは品こそ違へ、其人との夜半の睦言の折り、二人を照らしたのと同じ物、つひ思ひ至れば夜寒のためでも無くて肌には粟粒が湧きました。

煩惱と言ふものは始め人を樂しませて終りに人を嘲弄するらしい、いちごに迷ッたがそも〳〵煩惱、迷ッた間の其たのしさ、それがさて今と爲ッて見れば身の置き處もなくなる大苦惱、むかし煩惱の誘ひの餌にさそはれて今は其餌を嘗めたばかりで其圏套(わな)で不潔の身體を無駄にもがく、是も何も魔――魔に魅入られた事。

魔に魅入られて魔と爲り下がッて母をさへ虐待した！魔に魅入られて魔と爲り下がつて今さへ其煩惱をにくらしく思ふ、煩惱に負けた身をばにくらしく思はぬ！

悟らぬ內は闇が一層、其闇の濃いだけに悟ッた氣も亦濃く、ひるがへッて日を世界に抛てば兎角われをさいなむ物ばかり、物、それに抵抗する氣になりました。

蒸し襖がする〳〵と開いて侍女が先きをとほして今內君がわたると傳へました。

狹蓬に來られて何がたまらう。と唯思ッただけ、しかし我は知らぬものゝ逆上は爲て居たこと、思ッたゞけでむら〳〵と爲りました。

人の心も知らぬ女郎！　われを嘲けりに來くさるか？きり〳〵と齒をかみ鳴らしてすッくと立ち上がッた其面色、怒髮さかさまに針を突いて血ばしッた眼が烱々と光りを射りました、手燭を持ッてまづ第一、主を案內して來て侍女を見るや否や身がふるへました。其女は年十

六ばかりの可なりな美人、殿に會釋をして微笑した、その微笑が小二郎には全く冷笑としか――おのれ、やれ、無禮な小女郎！　何かこみあげる不滿、不平ちれッたさ！
血色のかはッた殿の樣子、これはと驚く侍女の前はや小二郎は飛びかゝる、さてはと仰天、手燭を捨てゝ引きかへさうとする處を無殘、柳の腰車を横なぐりにたゞ一大刀。
「そも〳〵是な、殿、御狼……」……籍と言ひ切らぬ間、またつゞく侍女が又一大刀、眞向にかぶッて一たまりも無く倒れる上をふみにぢッて襖を倒して
「あのれッ、狹蓬！」
あはや打ち下す一大刀に狹蓬は殆ど眞二つ、からく飛びすさッて轉げながら、
「殿ッ！　殿ッ！」
「何をおのれが！」
理も無く飛びかゝる夫の見幕、あなやとばかり手近にあッた手燭を取ッて早速の目つぶし、相手の怒りはますます燃え立つ、手燭の紙に火もうつッて廊下にひら〳〵金華を噴く其上をふみくだいて大喝一聲、狹蓬の肩から掛けて鐵もくだけろ！　あたりを振りかへればもう人影も無し、聞けばどよめく館の內外、さア一大事！　咄嗟の間考へて見る、何がうらみで狹蓬を斫ッたかはさあ自分ながら分からぬ。取りのぼせたのです。
茫然と立つところへ駈けつけた家臣の面々、押ッ取り刀の仰山らしい。それ見るとまた氣がむら〳〵、おのれら郎黨、主を殺しに推參したか？
疑ひの王、邪推の頭、とりさゝへやうとする家來の體がいよ〳〵ます〳〵小癪にさはる思ひ切れやと二三人掛け聲もろとも斫り捨てました。
すはこそ殿は狂氣した、組めや面々、斫られなと左右から組み付けばいよ〳〵ます〳〵修羅が燃え立つ、おのれら狹蓬の味方よな。
こゝ一期の大切處、あたるをさいはひ薙ぎ立てました。どうしても手には合はず、家臣は空しくしばら〳〵どよ

めく、その內一人が刀を拔きました——

「殿とて非道な狂氣の亂人、もう活けては置かれぬ。覺悟しをれッ!」

後は一度にきらめく劍の電光!

* * * * *

あはれ道も何も無い世とて小二郎は終に朝露をまたずに消えました。早館は上を下、思ひ〳〵に家臣の面々はいちごと尼とを探してもかいくれ見えず、それでは外かと手を分けて尋ねまはッた庭の果て、石に腰を掛けて居るいちごを見付けました。

むら〳〵と走りよるといちごは見て、動きもせずに居る、ところへまた一群が老尼と少女とをつれて來ました。

書くだけが愚痴、いちごを一目見るや否や老尼は飛び立ちました。また言ふだけが無駄、いちごを見るや否や少女も飛びかゝりました。一方は恩愛の情に、そして一方は怨みに飛び立ちました。

この一刻が老尼や少女には洵に夢、老尼はいちごにすがつて泣き出すばかり、少女は氣がまよッて側にうろうろするばかり、しかしいちごの樣子、それが奇妙でした。

母を見ても路傍の人、前にはあれ程に氣をいためたものがさながら知らぬ顏、また少女を見ても同じ體、顏が何より甚しく蒼ざめて亂髮の垂れ下りを拂はうともせず、そして諸人を見て平氣で小歌をくちずさんで居ました。

男どもさへ小氣味がわるくなりました。此間からのかよわさうな光りの月の餘光が猶うつすり西山に殘つてそして館の方から吹く風は薄なまぐさく傳はりました。

寂として一言も無く、暫時こゝに人語が絕えました。今の今亂擊突戰が澄んだばかりのところ、それでまたまた意外の女性のこのありさま、凄味には恐れぬ身も思はずぞつとしました。顏だちはいつものとほりで、たゞ氣のせゐか、すこしは瘦せたかとも思はれるやう、其美色がいとゞ慘澹の色彩を放ちました。

いちご御と聲をかけて見ても猶平氣、けれど構はぬと

一人が肝を据ゑて言葉みじかに今小二郎を殺して仕舞つたと物語りました！

尼は忽ち泣き沈んだ顏を上げて目を見張つて居ました。しかしいちごは猶無感覺、髮の毛を指の先へからんで手遊物にして居ながら其はなしを聞き終つて……にやりと微笑。

取り卷く一同、ふたゝびぞつとしました。思はず互に顏を見合はせる、しかし相手は猶平氣、かまわずわが股など人の前で搔きながら思ひ切つた高わらひ、そして一言「妾は是より大内の女御ぢや」。

氣が拔けて擬勢も去り、手の出しやうに思ひつかず、やがて見れば老尼はいつか氣絕して死んで居ました。又一驚、少女も泣きたふれて居ました。

今夜この一刻が醜陋の大醜陋、主は殺す、尼は死ぬ、そして美人は旣に氣狂ひ、西の餘光も次第に霞んで松明の命もしばらく、あゝ浮世五十年が其松明と共に早終りでした。

すツくと立ち上がツて一度目をすゑ、そしてまた美人は高笑ひを森の木の間に響かせました。物すごい山彥の聲も消え切らぬ間、熱いと言ひさま帶をとくとく、見る間人前で丸裸、雪の肌は闇をも穿つ、その丸裸のまゝたちまち駈け出して、そして何を言ふかと思へば、「女御や女御！」

あくる日は糠雨で天地もまるで闇でした。其日の夕方、泉水の側のところに矢張り丸裸のまゝ疵も無く、瘦せもせず、たゞ蒼ざめて死んで居たのは雲鬢の匂ひ、花顏の色猶昨日のまゝのいちご姬、まだ人の寄らぬ間は二三疋犬が寄ツて其腹などを嘗めて居ました。

あゝ哲女一生の征途も惟れば一度境遇をあやまツて卽ち是れ。つら／＼思へば天の愛は元平等、世の運もまた定理。つゞり了ツて筆のけがれにしばらく茫然として更らに哲婦傾城論を繙いて古先生に接すれば、吁無鹽も決して無駄では無いものです。

（をはり）

丸二つ引新太平記

はしがき

丸二つ引新太平記！　吾ながらつけて扨名の古風なのも亦をかし、力をはからぬ大題目、かねてからの願ひながら當つて見ては碎ける氣もち、さても馬琴は流石であつたと今更舌を捲く計り。

はじめの處すこしばかりはことし春の頃立憲自由新聞に載せたもの、その後はいづれもみな封切りの書き下しでそれ故二度の引眉毛はほんの頭のはしくれだけ。

足利兄弟を書くについてはあの頃の重な人も多少顔を出さぬ譯に行かず、從つてしらべれば調べるほどわからず、頗る弱りはてもしました。

たゞし大體の筋はつくり物、眞逆に正を邪と枉げる不都合はせぬものゝ、こざ／＼した事件に至つては作者一己の腦中からの湧き物です。

此卷だけの處ではまだ／＼發端だけで中に入らず、重函の上の蓋、高蒔繪が有つても人は中身をねらふ世の中、まして高蒔繪とは行かぬほんのうはつら、今の處はたゞ／＼何卒何にしろ完成したいといふだけです。

明治二十四年十月五日　　美妙

第一　味方の影武者

黑白等分に合はせた處で上品な鼠が出來るとの染物師の説明、それにも思へば道理は有り、冷温平等に交ぜ合はせれば怪我人も這入れる程の快い湯が出來るとの三助の口傳、それにも同じ理窟は有り、むづかしく言ひ直せ

ば「中」は兩極の和、足利十何代といふ天下、それでも感心に持ちつゞけた根本、遡ッて見れば尊氏、直義二人有ッて始めて足利といふ天下も有ッたといふ丈の事、足利の天下は尊氏の黑に直義の白を混合して何か鼠らしい物が出來あがり、兄の温湯に弟の冷水を調合して湯加減が出來た丈の斷し、兩極の二人が陰陽相調和してはたらいたのが王家に取つて實は飛んだ災難でした。つら／＼考へると餘程の不思議、覇業は古に短く後に長し、頼朝の天下わづかに一代、折角の水たまりが一朝乾いて、跡を王家の水が占めぬ間、再び第二の覇業が代ッて北條の天下は流石に九代、頼朝のに比べては八代が儲け物でした。泰時の默然嚊然、時頼の行脚三昧、慾は子孫の末をも思へば鎌倉の火攻骨骸の埋ッた上を敵衆に蹈み躙られるのが苦勞と有ッて夢にも稻村が崎からの寶刀獻納をば思はず、營々として後のため北條の天下萬々歳と希ッた末、馬鹿を産んで烏天狗に迄魅込まれ、九代目でぽッくり倒れて覇業の水たまりが又も乾く。それ此圖だと清水濁水、王家の清水も擾亂の餘とて忽ち濁ッて濁水と分別付かず、泥氣の強い方が反旗を取ッて再び其所で足利の十三代、即ち北條に比べて四代、頼朝に比べて十二代の儲け物でした。但し無理こぢつけの十三代、十三代の中の精分は先祖二人の兄弟に集ッて、殘ッたのは何れも出し殼、運の潮に御茶を濁して、出來合ひの打ッ付け普請、根太が拔けたり、天井が落ちたり、やれ大内が暴れるの、やれ赤松が風に鳴るのと其苦勞で日がな一日、果は八方からのむしり取り、根太板を持ッて行ッて細川どの、屋根板をめくり取ッて去ッて山名どの、釜の下の焚付から椽の下の芥垢まで洗ひざらひ手あたり次第持ッて行ッた盜賊どもが濟のいゝ顏した何の何殿、群雄とか諸豪とか形容上手の後世に評されて、何の死んでも殘りをしくは！　それからして織田信長、八分どほり成功して、疳癪玉と諸共に身上までも潰して仕舞ひ、小利口の猿面冠者が横合ひから小股をすくッて威張り過ぎて力負けし、三河萬歳がとぼけて出て來て、濡手で泡の十五代、足利に

比べては叉二代方の德川とは名からして何さま考へたもの。何にしろ餘程の不思議、殘りものに福が有るか、末ッ子だけに智惠が付いたか、霸業は後世に及んで壽命が長く、賴朝の總領順祿、兄は高慢、弟に負けて、足利が兎に角無理算段でも十代以上に漕ぎ付けたこと、感心ともし言へるなら感心なこと、不思議といへば不思議な事實、それも是も大頭の只兩人尊氏兄弟の力とすれば、全く二人も馬鹿でもなし、自然の性質よく分擔して撞着せず、衝動せず、黑白と冷溫相救ひ、しかも時機の彈機にかゝッて、見る間丸二つ引きの旗じるしも遂に東山おろしに吹き靡かせたまで!

　天下やうやく定れば、つねは物哀れな秋も今は引かへて花々しく、故郷へ着る錦の紅葉、萬代の香を吹く黃菊白菊、ことしの京洛は秋に一點のさみしい氣も含ます、恩賞を受ての俄分限。何處の馬骨か知れぬ武者も長陣の束ね髮、わいた儘に爲つてゐた半風を昨日今日は淨衣美食、櫛といふものさへ寄ッて梳ッての高わらひ。飯の上の蠅、蜜に寄る蟻、京洛の繁華に此處ぞ儲け時と諸方から入り込む、出處あやしい美人の群、それに引ッ掛かッて無け無しの分配一夜の夢に客と爲らせ、野太刀で剃ッた髯い剃り痕、阿嬌に見えたなつかしい其夜の記念とばかり殘られて、つる〳〵と撫でゝ氣拔けした顏色なのもをかしく、やゝそれより立ち優ッた部類に至れば、一夜だけの花妻、一夜にしかも四五人おごッて、いたいけな白魚の纖指に、何の生意氣な沙汰、牛の背皮其處のけといふ肩を揉ませて「肩癖でおちやるから」とは野斜張ッた言ひ草。一里さきの敵陣煙塵漠々といふ風の日に眺めるかといふやうな目付き、鼻ばしらの土臺から曲げて掛ッて、目を細くして女をながめて引き攣り笑ひに日を送れば、驕奢もいたづらに早く進んで、浮世の五十年、人間の生命といふもの、其變な、脆いやうな、また脆くもないやうな生命とかいふものが此秋に限ッて夢でした。

　ひとり下人ばらのみで無く、然るべき何の何某、金金物づくめの太刀を佩く位の身分でも同じく柔弱な遊びを

專一として、曾て讀まなかッた歌とかいふもの、それも戀歌から味を覺えて「悲しき」や「戀しき」で頭痛持の配下を惱ませ、血みどろの陣幕にはかに變ッて軟障香帳とも爲れば、血腥い香よりほか鼻の無かッた髯武者が袖の伽羅の可否さへ嗅ぎ覺えて、美人に褒められてのぞくぞく喜び。天下の大半が押しなべて是、それ故に碌な政事は行はれず、哀れ藤房は野暮と名を代へ、正成は吝と呼ばれて、宴席に亂舞の手振り武々しいといふよりは柔かいといふ方が褒められて、恩賞吟味の評定所でも晩夕氣の目蓋重く、吟味最中同役と欠伸を噛みながらの惚氣三昧。百貫の土地、人に遣るよりは自分が取りたし、自分が取ッて思ふ御人に呉れて遣ッて、其ぶり／＼した絹の頰に笑靨を出させても見たし、何の雜兵が何をくど／＼と、死首でも拾はッて居たらうに、まだ恩賞が此方にまはらぬとは蟲の好過ぎる、其手には乘らぬと頑固を徹せば、一時は非理も理となッて、それだけに怨みは皇家に掛かる。下人ばらの情無さ、一圖に此依怙を禁裏からの沙汰とも思へば、敬愛の氣よりは憤怨の情が勝ッて、哀れ風雪を叱咤する大豪傑も現はれろ、機會に乘ッて離反して、此恨みかへして呉れやうものをと密々の共謀議。蚊の聲も集れば雷で、地下のぶつくさも流石殿上によりより聞える、それながら一方は空聾、自尊は堂上の常の癖とて耳にも止めず、耳にとめたがる藤房は苦勞性と冷かされました。

二日三日降りつゞいた物哀れな秋の雨、今日は久しぶりで晴れて、天地まるで活き返ッたやう、打ち惱まされて萎れ顏の村萩も泣き顏ながら首を擡げて、夕日に露の簪をいろどり、塵も取れて一際の紅、紅葉の色目もまばゆく、漫ろ歩きには屈竟といふ日の下晡（なゝつさがり）、夕陽に身の影を長く引かせて、睦しく噺しながら角屋敷の横を過ぎて來た二人の雜兵が有りました。年の頃はいづれも似たり寄ッたり、戰場を經た記號か、一人は跛で、足元が本人より却ッて傍目に危ぶまれる程、さり乍ら血氣の人物、物語る音聲は極めて太く、下知の取り次ぎには錢で雇ッ

ても遺憾はなし、高笑ひをするのが好きで、今一人とは全く反對、一人は小音で稍〻錆び聲、色も小白くて愛敬たッぷり、人形食ひの被衣連にはちやほやと言はれるやうな、何れも年の頃は三十足らず、素はだしで泥を踏んで彼一句是一句、人に聞かれても構はぬ顏付き、聲の太い方がせゝら笑ッて「さもさうず、さも〳〵。天下ふたたび亂したい心でや恩賞も拒むであらうよ。何の、生あをい公家づらが！　生あをい面して片腹いたいわ、評定沙汰、似非評定が何にならうよ。吾儕ににくまれて牛車の妹許がよひの道すがら此刄食はされぬ用心が要ぢやわ」と言ひ訖ッては例の癖、委細かまはぬ高わらひに、一方も笑坪に入ッた鹽梅「足までも傷つけられて、はゝゝ、恩賞も無い哀れさよ。晡和郎の口のしたゝかなるに、思ひ知れ、それも報いと——口は叩くまいものぞ」と隔てぬと見えての冷かし文句、聞けば聞くだけにまた高笑ひして、投げ節にして歌ふ小唄も時節がらとて殺氣滿々——

「血しほ啜りて　　　血しほすゝりて
血しほすゝりて、　醉ふて舞へば、
太刀もいつしか鞘ばしる、　鞘ばしる！
阿修羅王でも　　鱠ぢやえ。
來いよ、つはもの　　一太刀かざせ！
春はあけぼの、　・　眠りざまし！」

口拍子で面白さうに謡ひ澄ませば、おのづから足並も揃ふ小氣味好さ。思はず知らず興に入ッて、吾知らず佩刀をさへ拔き放して、發矢とばかり勇ましい掛け聲、道傍の立木を片手なぐりにした、それ迄の勢ひ、それにさて似ぬ手の內、無殘や刃は幹に食はれて引いても動かず、をかしさに又高笑ひ、やうやくの事でもぎ放して、振りまはして行く埒の無さ、最前からして後ろから同じく歩いて來た四人ばかりの是も雜兵、始終の樣子を見て坐ろにをかしく、一兩人われ知らず同じく高笑ひを合せました。

始めて心付いて、前の二人はたちまち屹と後を見かへり、しげ〳〵と四人を眺めて、笑ひ顏で言葉を掛け、

「御身たちは何處でおちやるの？　評定所の歸さで御ぢやるか？」

打ち解けられて一方も、

「御せやッた／＼、評定所の歸さで御ぢやる。呼ばれた故に出でゝ來れば人を何と、御聞きやれ、鎌倉入りの合戰に一人で首六つ七つ揚げた吾々たちを神妙ぢやと言ふたばかりで追ひまくるとはつれない沙汰ぢや。少なくら黄金いくらか首一つを一枚づゝと定めても、兩、六枚七枚は有るべいものを。世は末ぢや、詮無う御ぢやるわ。」

休戚を共にすれば懷かしゝ、前の雜兵も身を入りこませ、同じ失意の段を喋々すれば、いよ／＼雙方の話しの種は盡きず、とても是では天下も定まるまい、何ごとも世の運命是非も無いと、彼も是も言ふところは異口同音、果は物語りは益々進んで誰か一旗なびかせたらとの下馬評にまで移りました。前の二人の雜兵は北畠から舊出た奥州武士で、後の四人は新田方とか、併しながら銘々の地位については何れも甚しく不滿でした。今こゝで反旗をひるがへして天晴名望も有り略も有り、成功の望みの有りさうなのは誰であらうかと一人がいへば、選定の評論もそれからは喧しく湧き立つ、北畠親房は忠誠で有るが歴々だけ、顯家は才子だけ目方が輕し、義貞は名望もあるが愚闇の方、赤松は遣手だが意地が惡るし、正成は正直で評するほどの地面は無し、さて誰だらうかと流石にまよへば、後の四人の中の一人が冷笑して、さも／＼心得た顏付でした。方々は足利を知らないか。吾々は現在義貞の手、頭人をわるく言ふでは無いが、器量に於ては迚も／＼義貞は尊氏に及ぶもので無し、門閥の同じである丈、大抵名聲も相似てゐるが歸する處は名前ばかり、もしも尊氏にうんと兩足を踏ん張られた日には中黑（新田の紋處）の旗風決して吹き哮ッたもので無いと理を割ッて說かれて見れば、何さま一應の道理はあり、さういふものかとつく／＼考へて、其氣になれば如何にも以て言はれるやうな事實は有り、面白いからもッと評論を聞きたいと強ひて勸めて最早百年も馴染んだ狆兒(ちんころ)、前の雜

兵は後の四人を自分の許に誘ひました。

第二 奥殿の密語（上）

前の二人の雑兵に誘はれて後の四人の雑兵も共宿まで行く道すがら又さま〴〵に足利兄弟の人物を喋々する有り様、正に臓腑を解剖して、蛔虫の所在まで見せるばかり、感に堪へて前の雑兵も志しはほと〴〵動きました。

四人の雑兵の言葉によれば、尊氏兄弟は不世出の人物でした。腕が有るか、能が有るか、其邊は言はぬとしても士に下るといふ事が二人の獨特の長技であッて、此段から言ッた日には恐らく今日義貞だらうが、正成だらうが、とても及ばぬとの事でした。慾が有ればこそ攻城野戰死屍をさらす迄も奔走する身、そこへ持ッて來ての的薬は厚遇優待を受るとの一事、それに優る力は無し、尊氏兄弟の獨特が士を愛するといふ處にあると聞けば、また今が今現在恩賞を朝廷から拒まれて失望して歸ッた矢先き、燒け石に水、油に火、一も二も無く感心しました。

それ是する內やがて宿所、前の二人は自分たちの溜りまでやゝ來たとて疎酒一獻酌みかはしたいからと頻りに勸めたものゝ無駄でした。後の四人は何の仔細か何といッても承け引かず、御志しは忝けないが、もはや彼是日も暮れた事、定めの刻限に歸陣しなければ、また大目玉を頂戴しなければ爲らず、それが否さに早くかへる、重ねてまた來て其時にと一向に辭退しました。刻限といふには强ひられず、猶いろ〴〵伺ひたくて、此儘御別れするのは殘りをしいがそれならば重ねて又貴意を得る事にしやうと懇ろに言葉をつがへ、二人は四人の者に名をさへ名唱り、やうやくの事で右と左り、二歩三歩はなれたと思ふ間に四人は俄に早く、おやと言ふ間に宛然飛ぶやう、夕月の影のまだ薄くほのめく中、忽ちの內に姿を朦朧と遠ざけました。

跡は溜りへかへッて來て聞いたまゝの取り次ぎ、云々との事を說き誇れば一同も亦感じ入る、それにしても足利兄弟、二人の人氣を取る事の上手なのは豫ねてから聞

いても居たが、實際どうかと思ッて居た矢先、誰もかれも萬口一致、さう言ふ處で考へれば、何さま身を寄せても賴み甲斐の有りさうな譯と一人が言へば一人も同ずる、見まはりが來て「騷がしい、何をほざく」と叱るまでは村雀の共さへづり。が、思ひもつかぬ事、何ぞ料らん、前の四人の雜兵その中にも而も現在のその尊氏兄弟が交ッて居たのでした！

　蟻のさゝやき、聞く氣でも一尺上の椽側では聞き取れず、下情を知らなくてはとの注意から近習二人揃へての忍びでした。恩賞の評定所もよりには失意の壯士が群がるとの事に其處を一本槍目ざして來て、案の如く相手を見付けて、それとなく自家製造の引き札、しかも白々しい現在の直義が眞に爲ッて自分たちの器量の好さを喋々し、小計ながら圖に中ッて、慾の餌は早く下郞の胸を燥がせ、疎酒一獻とまですゝめられて、やがて袂を分ちました。すなはち顔を見られるが心配、幸に前の二人には何とも心付かれなかッた物の、溜りへ行けば安心ならず、それ故に見切りました。

　さすがに主從の間から、同業に打扮ッた四人ながら、主人兄弟は先へ立つ、それら二人の人品はさすがたゞ見ただけでも一癖は有りさうでした。尊氏の顔付きは温和な方、直義はしまッた方、尊氏は太り肉、直義は瘦せぎす、目は雙方ともに普通な方で大きくは無いものゝ、一方は並で一方は稍、目尻が兄よりは上ッた方、日に燒けた段に於ては雙方いづれも怨みッこ無し、而も下司下郞と違はぬばかりの色の黑さ、よくも似たもの二人ながら髯は薄くて、其邊に威嚴は些しもなく、唯こゝらからして見た處ではつまらぬ平凡の人物でした。

　前の二人の雜兵と袂を分ッてから姑くは主從一切無言でした。後に立ッた近習がをり〳〵さも心配さうに後を振りかへる位なもの、殆ど走る計りに爲ッて元來た方の道へと急ぎました。兄弟二人は立ち並んで步く、步きながら時々は何かわからぬ片言をせはしい息の中から應答して、御互にはそれでも分かるか、ともすれば忍んでの

くすくす笑ひ、兎角して五六町、前に過ぎた評定所の横手へやがて來かゝるや否やたちまちに四人の足並は舊にかへッて靜かになる、夕月の光りやうやく濃く、まだ乾きはてぬ木の枝草の葉は揃ッて白銀の玉を綴ッて、無情な風の吹かぬことゝて、折角のかよわい玉をもぎ落されず、立ちまよふ夕霧の色は月魄を吸ッて蒼白い絖の帳を張り、虫の聲ばかりして人足も無く、風情といふ事を知らぬ身にも扨こゝろよく見えました。

もはや人目も絶えて安心といふ體、そろそろ变はる言葉もよく、話を成して、それに足並の遲くなッたのもその證據、ゆるやかに尊氏は弟を見かへッて、早くから言ひたかッた胸中今はやうやくといふ氣色。

「胸くるしいばかりの御身のたくみ。聞く身も大方冷汗でおぢやッた。忍びありきとは知りつれど、あれ程の事があらうとは更に夢にも知らなんだ。」

幾分か此方直義は得意な顏付き、冷汗であッたとの言葉に笑ひ出す近習二人、その方を尻目でじろり、同じく自分も微笑して、

「たゞし巧く中りまいた。あの後の評判、それのみ聞きたうはおぢやるが忍びの事とて人多き溜りには參れず聞き落して殘りをしう御ぢやる。さり乍ら雜兵どもの受け答へでも正しく吾々の名聞に焦がれ出いたと見えまいた。」

「はじめ御身が彼等二人の雜兵見とめて、の、云々と計謀を仰せやッたが、その時尊氏は心にもとめなんだ。何の淺々しい、女々しい企圖、小さ刀で首刎ねるやうな企圖で欺いた處が相手は雜兵、さしたることになるべうもあらぬ。と思ッて心とめなんだ。御身が頻りに心進むまにまにさらばと共僞に爲ッて居ッたに、餘所目まばゆいばかりの、喃……且つはしらじらしく聞く身のをかしさ。改まッて御身が餘所事めかいた始終には坐ろ思ひも付かぬ放膽した。」

「はゝ放鷹！　珍事で御ぢやッた。小さ刀で首刎ねるが如き小さな企圖とは仰せやれど、蟻の塔より堤とやら

ん、人を手懐くるは些細からの事で御ぢやる。假面かぶらいでは先程のそれがしのやうな白々しい言葉は扨言へたものでは御ぢやらぬが望みある身はさばかりの事厭ふてはをられませぬよ。」

「はゝゝ例の……例の癖ぢやな、直義の。細かきたくみを御身は好むよ。」

いつか程立たぬ間に第宅(やしき)の裏門、無難で忍び歩きを了ッて流石それでも一安心、まづしばらく寛いて休息して行けと勸められて、直義も同意し、兄弟二人連れ立ッて、わざと人目を避けて犬くゞりから中へ入り、無難に奥へかへりました。奥書院に兄弟只二人、近習をさへ遠ざけて、殘して置いたのは僅に一人の端扈從ぐらゐのもの、子供だけに眠がッてこく〳〵居ねむりをする體、それも見て見ぬふり、むしろ安心といふかの有樣、二人膝をつき合はせて、密話が切りに濃やかでした。

こゝで尊氏兄弟の前の應答に立ちもどれば、正にそれだけの言葉にも二人の性質は現はれました。例の癖で直義は細かい企圖を好きだと言ッた尊氏の言葉、其言葉は一言二言の物ながら直義生まれてから死ぬまでの特色をよく言ひあらはしました。

兄の尊氏とは形を變へて、小刀細工をするのが好きで、即ち直義の生涯は小刀細工で埋まりました。心の綿密に行き渡るのは何と形容していゝか分からず、物の形を知るに方ッては須らく其成分を見ろといふのが直義の持論――と言ふも過大ながら――何しろ平生抱いた考へ。それ故か、何事に當ッても直にそれを碎いて見る、其儘にして置いて見る事は決して出來ず、自然すなはち內面のいろ〳〵、善も惡も損も德も一樣に目には入る、それ乍ら碎いた丈に後で纏め上げると言ふ事がまづ仕惡い方でした。一人の新參の武士が來て始めて見參に入る、すると直義の目に掛ッたが最期、左からも右からも四方からも八方からも色々な糸をあやつり出して、其性質をたしかめやうと樣々に揉みこなされる、右で詐ッたのもいつか奔命に疲れてやがて左りから見やぶられる、それから

して見破ッて直義自身その人間を一まづ自分と比べて見る、此處はどうで、彼處はあゝだ、やれどうだ、やれあゝだと詰る處は其相手を大抵は呑むだけでした。曾て正成の盛名を聞いて竊かに心に畑たくおもひ、面胞の出る程逢ひたがり、一度逢ッただけで其後は忽然としてまた忘れたやうに口くされ正成とさへ言はず、怪んで尊氏に問はれると、せゝら笑ッて太々しくも呑みに呑んだ返答、馬鹿律義の雛形だけに此世へ生れて來た人物に幾度も逢ふには及ばぬとの言葉、さすがの兄も一言の下に呆れ果てゝ笑ひもされず……

第三　奥殿の密語(下)

小刀細工を直義は好む、好むだけ又上手でも有り、失策は大損無からうが、それでもいざと言ふ場合ひ、大刀一斷といふ目ざましい手の内と太刀うちしてそれが勝てるか覺束無い、己れは左樣おもふ、とは尊氏が折り／＼に弟に加へた訓戒でした。併しながら、何にもならず、大刀一斷がいゝといふ其本人その人はどうかと云へば、口さきだけで果斷の實には乏しく、言行が一致し得るといふ處迄は中々遠し、言はゞ行へずに言ふだけでした。それを見るだけ直義もひるまず、兄が鹿爪らしく勿體ぶッた訓戒を言ひ出せば、こらへぬまでに吹き出して、ただ何も無くてのげた／＼笑ひ。つひ今鹿爪らしくした人も釣り込れて笑ひ出す、訓戒はいつも／＼加へたといふ名ばかり立ち消えしました。或は時として直義から逆捻に兄へ取ッてかゝる事もあり――大刀一斷をいひ張ッて、虻蜂取らずになるのが好いか、小刀細工と看破出して虻ぐらゐ兎に角取るのがいゝか、牛後よりは寧ろ鷄口、ただし兄上には、一派かはッて牛後を御好みになる事かと薄い唇をうるほしながら微笑を含んで遣ッて掛れば、兄も其時は笑ッた計りで無言でした。でも生れ付きは仕方なし、天性は一言二言の琢磨に掛ッて、光りを變ずるものでもなし、昨日の兄が一變して今日の弟とはならず、松はやはり綠で、藤はいつも紫、兩端に立ち離れて、一

方が正なら一方が負、事を行ふに當ツていつも議論が無くては濟まず、兄が防げば弟が破ぶる、いつも〳〵それのみでした。これでよくその結果が滿足に出來て、兎に角それら兩極が一味合體も出來る物とは十人が十人ながら常にみとめた事實でした。が、歸する處はそれ丈の原因、卽ち兩極を言ひ張りがら、且右へねぢり、且左りへ傾き、さうかうしてゐる內、雙方から一歩二歩づゝ近寄り合ふことゝ、此一事が不思議にもさも〳〵二人言ひ合はせたやう二人に取ツての特色でした。それ故に茶碗と茶碗、ぶつかり合ツた丈けに事は破れず、むしろそれがため却ツて迷はず、はては好い中和を得てどうか旨く纏まりました。

人を解きほどして見て爪の垢まで見すかすだけ有ツて直義に屬する人氣は尊氏より少ない方で、人氣取りの理には通じた人がいつも働いて自身に之を專有し得ず、狗骨折ツて鷹に取らせ、つまりは尊氏のものとそれを爲てしまふ、實はつまらぬ役目でした。たゞしつまらぬと自身は知らず、皮相からして觀察して天晴自分が集めた人氣は矢張り永劫自分に屬くと心から信じて居れば、いささかも愛憎僭越の心は起さず、一意足利といふ家を興す事に志しは傾くばかり、すなはち知らず〳〵の間に介擔して兄と相對して一方に立ち經營に齷齪してゐました。

兎角する間に夜も稍更けて奧書院に人語も絕えて、木がらしの音のみ聞える最中、宵の間の狂言の引きつゞき、兄弟膝を集めてのひそ〳〵噺し、あら天知らず人まだ知らず、日を貫くばかりの大望、毒龍が目を見張ツてあはれ一雨降れと待つ鹽梅——

兄上は兎角用心ぶかいが、何の恐ろしくも無い世の中。紅粉に眩んで賞罰も正しく無し、一般の人の心が旣に再亂を思ツてゐる矢先、こゝに今一つでも事が起れば、それを界として天下は定まる。赤心から言へば——人には聞かせられぬ筋ながら——此度の北條退治について拔群の手柄の有ツたのは斯くいふ吾々兄弟足利の部類ではなし、吾々は尻馬からお茶を濁して、いはゞ死首で功名を

詐ッたも同じ事、そこの賠償として内裏の雲深い邊、淑房のあたりへ手をまはし、美人の手に太鼓を叩かせて、どうだらうかと結果を待てば、譯も無いもので吾々兄弟が筆頭第一！　多くいたゞいて惡く云ふのは些虫の好過ぎた筋ではあるが、理窟を言へばそんなもの。何の恐ろしくもない當世。今にもあれ然るべき風雲に誘はれたら、それを默ッて看過すところでなし、愚圖の義貞、馬鹿正直の正成、杓子定規の藤房、生人形の親房、どれも守成の任に堪へる大度量の人物で無いものを。

大度量で無いとは言ひ過ぎたらうと兄が横合から口を挾めば、せゝら笑ッて些しも怯まず、まだ小度量ではないか、吾々のこれらの密謀、いくらか樣子でも分りさうなものを知らずに居ればこそ平氣で居る。其くらゐのぼンやりで守成の任がつとまらうか！

けれど、さう言ふな、烟ッたいのが外に一人有るでは無いか、と兄が問題やうの言葉を出して、さも解けと言はぬ計り詰り込めば、それは疾うから承知したといふ顔色、それは此方も知ッてゐる、例の大塔宮が只一人これが些しと云ひ掛ければ、兄もさもこそといふ有りさま、それだ／＼と二聲三聲、熱心が籠ッて來て目もやゝ涙ぐむ、それを片光りにしげ／＼眺めて、いくらかこちらは反身の氣味、仰山な仰やりやう、高が宮一方どうでも爲ると一句の下に叩きつぶして胸をたゝいて「喃、この方寸。」

第四　櫻狩の狼藉

天を刺す大木は一年の雨露で出來る物で無し、山を碎き、海を覆へす大逆亂は五日六日の評定で定まるもので無し、逆亂の若芽は旣に吹きながら、誘ひ出す春風もまだ吹かず、空望の中に一年過ぎて峰の紅葉が櫻とかはれば、浮れ立つ人心今年ばかりは都の春といとゞ優柔の氣が狂ひ立ッて、無殘や風流を知らぬ田舍武士も借着のやうな狩衣打粉、名詮自稱と哂はれながら馬ばかりは稀有の若駒、奧州驪で候ふの、三歳駒で候ふのと櫻狩りの道す

がら鬣を並べ合ッての比較三昧、果ては咲いた櫻にそれをも繋いで、花を散らして大笑放吟、これを泰平のしると言へばいふ、埒も無い春が催しました。「今日見ずば明日は雪とぞ」……花に嫌はれても悟らぬ猿眞似、俄立身に大袖づくめで着飾ッて歩きたさ、同じく無風流黨、若駒にゆッたり騎ッて、黑谷もよりを打たせる一群れ、肩で風を切るとはおろか、花見に來たのか威張りに來たのか、往還を我物顔にして大浪のやうに打たせてゐました。一群れの人數は六人ばかり、主人と見えるもの兩人に之に從ふ家隷が四人、しかも何れも騎馬でした。主人二人、其一人は年の頃廿二三、薄綠りの狩衣に萍草の地紋大きく匂はせ、白銀作りの大刀を佩いて、梨子地の鞍にゆッたり騎り、いくらか刺毛で値を下げた桃花色の馬の鬣のふさ／＼とした立鬣を微風にふは／＼浪うたせて居ました。一人は年の頃卅四五、濃朽葉らしい狩衣に、同じく大刀は白銀づくり、馬が泣きさうなどッしりした螺鈿の黑鞍に日を射ッて栗毛の馬に騎ッて居ました。顔色の黑いところで一目に素生もそれと知れる、いづれ武者から出た人物、鎧の着こなしには馴れても居るが、殿上ぶりの長袖には一向不得手といふ有樣、背筋も曲ッて帶も亂れ、手綱さばきの凛としたには似ても似つかぬ身のみだれ方、しかも酒に醉ひしれて、四邊かまはぬ放言漫吟、つき從ふ家隷どもまで何れも顔は熟柿と爛れて目も口も一處にとろけ、相手なしやといふ體で、右へよろよろ、左へよろ／＼、是ばかりは正氣な馬を醉に托けてのやたら責、今を盛りと咲き垂ッて枝を垂れて居る櫻を見れば、さながら敵でも打つ鹽梅、武者聲するどくやッと叫んで、みり／＼と折るや否や哀れ落花微塵！　其儘を早速の鞭。花びらのあへなく散ッてひら／＼虛空に狂ひ立ち、恨みの精か、蝶か、花か、風にもまれて翩翻となるのを見て、してやッたと高わらひ、取りかへ、引きかへ、枝を折ッて狼藉に狼藉極めました。さすが此日を樂しみにして被衣の奥に花顔を秘め、わざ／＼蓮歩を移して來た麗人たちもはるかに狼藉を見てすはやと警戒、

殊には此日頃武者の亂暴しば〳〵耳にも聞くさなか、出逢ッては面倒と素早くも道を變へて、さすがに亂世には馴れたもの、早く姿をかくして仕舞へば、跡に殘るは男ばかり、雜色の青ざむらひか、取るにも足らぬ人間の、其方に取ッては大仕合せ、相手になりさうな物も無く、さすが獨相撲で狂ひ立ッた武者どもの精氣も稍盡きました。醉は相手を待ッて高ぶる、さて面白くも無くなりかかッて、この度はその忌々しまぎれ、當るに任せ枝を折ッて、駒をひねッて發矢と一うち、駒は痛さに飛び立てば、蹄をから〳〵鳴りひゞかせて廣くもない道を縱横無盡右左りとなく荒れまはッた矢先、曲り角で忽ちぱッたり出逢ッた是亦花を觀る一むれ、はッといふ間に避け損なッて足腰の覺束ない一人の老人がしたゝかに蹴られました。一むれは何れも公家、徒歩だちの忍びあるきで、同伴も青侍二人よりつれず、老人は親と見えて之に從ふ若者が一人有り見るからが氣高い身の樣で、今この親の蹴られたには思はずはッと一聲叫んで、青侍ともゞ立ちかゝッて抱き起す途端、それにろ狼藉者めときッと其相手を見れば、腹も立つ、あやまりもせず、また逃げもせず、ふりかへッて冷笑してゆる〳〵打たせて行く姿に、此方も血氣、くわッと罵る、あれ引きとめよとの烈しい言葉に青侍もかしこまり、追ひすがッて引きとめれば、己れ不作法、老耄の家の子か、小癪なと計り、公家と見受た、當座(詠歌の事)を所望ぢや、此の折枝で咏んで見よと冷笑ひながら枝の鞭で、引きとめる青侍の手を發矢とばかり、理屈も差別も無い狼藉、扨も無念と青侍も血は噪ぐ、怪しからぬ、笞つとは何事！――笞ッたがわるいか、しれものめ！　人の轡づらなぜに引き止めた――引き止めた〳〵、問ひ正すべき事の有る故。などて主君を蹄に掛けた？　と打たれながらも一生懸命、爭ッて離れぬ青侍おのれ物々しいとばかり相手の從者共も四人一同に取り卷く途端、折枝で主人は馬をはたく、たまらず馬も飛び上がれば、無殘そのはづみに青侍も亦胸さきを強く蹴られてうんとも言はず倒れました。如何に規律の無

い世でも人二人まで蹴たふして其儘に濟む所以はなし、すはや面倒に爲り掛けたと心付いたが最期、武者どもは早く逃げろと互に目くばせ、一鞭馬にくらはせれば、馬は蹄を鳴らして飛び立つ、それを此方からはるかに眺める蹴られた方の身の無念。親を蹴られて介抱最中、また靑侍迄蹴られて仕舞ッて今更相手に逃げられては重ね重ねの恥といふもの、何の公家とはいへ、いつまでも優柔にしてゐるものか、おのれら何として逃がさうかと、今親を介抱する手、その手を拂ッて若い公家が立ち上がッて追ひかけ出す、それ追ッて來たと中々に弱身が有れば逃足早く、いよ／＼一方は馬に鞭、無念徒歩だちの足は及ばず、くやしまぎれに大音聲、かにかくと罵ッて彼是二三町の間、無情な事には道行く者もさしとめて遣らうとは言はず、助けてくれるものもなし、果はむざ／＼小路大路、右左へとまがる間次第々々に駈け拔られて――何處へか見失ッて仕舞ひました。骨身がひしげる程のくやしさ、吐く呼吸も朦朧と毒に爲ッても出さうな遺憾、しばらく足を止めた後も拳を握ッてつッ立ッて、前後の思慮にも當惑しました。併しながら氣に掛る親の身の上、脇腹を蹴られて倒れた計りのところ、思ひ出せば苦勞でもあり、恨みを呑んでそゞろ涙、また一散に取ッてかへし、舊の處へ立ち歸ッてふたゝびつら／＼親を見れば、無殘！　呼吸は絕えて居ました。黑山のやうにたかッた見物、さて／＼それらの畜生呑氣な、いま／＼しさに聲あらゝげ罵り飛ばし、親の身體へむしやぶりついて聲かぎりに呼んでも答へず、脈さへすでに絕えたとは！　おのれ、やれ、惡徒武士！　打ち捨てゝある櫻の折枝、それも敵の片われとて、拾ひ取ッては微塵に挫いで――ちッ、この恨みどうしてくれやう！　人手が少なさにおめ／＼逃がして名も素生も知れずに爲ッたものゝ、何の一念徹らぬものか？　人もあらうに宮の昵近、今上の皇子と申し奉れば海人が子迄も御名を仰ぐ大塔の宮の昵近衆、その昵近衆をも憚らず、物も有らうに駒の土足、仇をうたずに誰が置かうか！

すなはち此蹴られた公家は大塔宮附の昵近園重賴といふ人で、さて蹴たものを誰と言へば、卽ち直義の手のはした武士、大多和三郎、寺西造酒介といふ山賊あがりの武者でした。

はした武士にしては過ぎた身形、梨子地の鞍の、同伴ぞろひのと如何にもそれは過分の行列。成り上りの常威張つて見たさ、主人からわたッた恩賞の量のたんまりとして居た證據には借着をしての一日大盡、春を一刻の夢と見て綺羅を飾ッて出たことで、この一つでもそも／＼分かる、足利の手につけば如何な詰らぬ人間でも他よりも優れて用ゐられ、相當の功でも有れば榮利大抵望みの儘との風聞決して嘘でも無かッたもの。

醉も何もさすがに醒め、一目散に邸へかへり、口を縫ッて何とも言はず互ひに彼是いましめて、何食はぬ顏して澄まして居ても可なりの珍事とて京わらべの浮評とりどり傳はり行く體、あはや露顯して直義の耳に入ることかと心もそゞろに心ならず、今更醉中の亂暴身を責めて、それに又前後二人迄たしかに蹴倒した覺えもあり、どの口からか破れが出來て、こゝと突き止められは爲らぬかと思へば思ふ丈けに不安心、肝の無い性質とてその後はこの事にのみ屈托して所謂る同病相憐れみ、より／＼大多和と寺西と兩人が膝を並べてひそ／＼ばなし、かれ是夕方となッた頃、突然として使が有り、殿が召すとの言葉でした。

不時な御召、すはや直義の耳に入ッたと二人は顏を見合はせて胸どッきり、これ何と言開かうかと今更生眞面目な顏して談合しても扨相手は目から鼻へ拔けて生煮の胡麻化しぐらゐでおい夫と爲る人でも無し、襤褸の出さうな嘘は言へても、體裁のいゝ方便は無く、まゝよ諦らめろと時間に急かれて、おづ／＼として御前に出れば、これは如何、小座敷へ伴はれる、其處で見れば直義は唯一人裀にすわッて、白かさねの身粧も體裁よく、やがて恐る／＼平伏する兩人を近くと進めて、はやにこ／＼と淋しく笑へば、なまじひに晒はれて面目もなし、はづか

し〻、白ばくれては澄まされず、身がすくむやうにも覺えて下を向いてゐる處、耳を破る殿の聲、「其許たち生命は惜しいかの？」そら初まッたと思ふもの〻、空漠な問ひでうッかりは返辭も出來ず、冷汗で平伏してゐると、また直義は笑を帶びた聲、重ね〳〵の五分だめし、「どうぢや命は惜しいかの？」

第五　別製の手管

時と場合とに因ッては何の脆い命を惜しみましやうと肝を据ゑて遣りかへせば、聞て直義も微笑を含む、

「今そこたち兩人の命取るが惜しうは無いか？」

「今……今でおぢやるか？　今でも主君の仰とあればさら〳〵未練は申しませぬ。なれども所以も心得ずては。」

「言ふにや及ぶ、おんでも無い。命取られるべき事ぢやと知ッたら必ずともに惜まぬか？　惜まぬと盟ふた喃？　盟ふたらば、所望せうず一人の命をこゝで望まう。命を捨つる覺えは有らうに——所以無いとは言はせぬぞ。」

すはこそ果して珍事の顚末耳さとくも聞き知られた。大抵それらと推察しても、中ッて見て碎けるまでは凡夫の心に未練も有ッたが、もう知られては仕方無い、無念の相手は氣狂水、今更怨んでも甲斐無い仕儀、狗死に同樣に死ぬくやしさ、たゞし詰め寄られてびくつくのは武士の名に對しても後めたし、どうなるものかと決心して二人一樣に口を揃へ、平伏して叩頭して、

「恐ろしき迄の御仰せ、身にしみて一言も申す處は御ぢやらぬ。未練に包みは進らせぬ、よう御聞き取り下され。」

語りかけるのをしッと止めて、「おろか、それを其許に聞かうか。聞くほどならば死ねとは言はぬ。いつはりも無く聞いたが最期、二人とも今日までの命と心から觀念せよ。黑谷もよりの櫻狩、人の命を取るとは何事、しかもしかも其人は誰あらう、上の御おぼえ極めて愛でたい宮方のものでは無いか？　たとへば如何程醉ひしれて目ま

でもくらめばとて、その差別も得見えず、蹄にかけたとは何事か？　さりとて言ひ解く言葉があるか。宮方には手も付けなと示しおいたを忘れたか？　それ程の過ちして此處へ呼ぶまでおめ〳〵として知れじと思ふて居たがをかしい。言ひ解く言葉もあるまいに……餘りの心ざまの幼なさ、弄びてくれうづものをと故さらに此處まで呼びよせた。未練がないならとう〳〵死ね！　さりとも言ふべき筋があるか？」

もはや微笑の色も浮かます、一心籠めてたしなめられて、穴へも入りたい心持ち、姑らくうつむいた儘の無言、思へば返へす言葉も無し、未練では無いが氣が利かぬ、狗死とは情無し、と云つて口には云へず、直義の言ふ言葉に一々道理も有るものを今更どうとも延引ならず、

「心得て候ふ！」

きッぱりと唯一句、すぐに相手はまた切り込む——

「心得たらば處はきらはぬ、とう〳〵こゝで潔う……」

餘りといへば輕卒な？　退きもせずに直死ねとか？

「こゝで御ぢやるか？」と不審を凝せば、

「情けにこゝで死なせてくれる。」

「さらば此儘服もかへず！」

「言ふ迄もない事と知らぬか？　介錯は已れがせうづ。生前の手柄に愛でゝ……こゝの床板其許の血に塗らしてくれうづものを。惡びれずしてとう〳〵死ね！」

さも〳〵勇んで死なせるかの風、罪は有るとは知りながら情無さに恨めしくも爲る、今更未練も手傳ふやうな、まだか〳〵と急き立てられて未練を飲んでいよ〳〵の事、もはや駄目だと胸を据ゑて、心得て候ふと切迫の一句、因緣づくと觀念して、差し添へを二人一途に抜き離せば、たちまち燈光に光りを射ッて、横壁の上に金蛇もはしる、——御前はなはだ恐れ入ると流石神妙に挨拶して、刄をやゝ取り直す、其途端、そも〳〵何事、「待て！」と直義の慌てた聲。待てとは何事とためらへば、身を進めて直義は忽ち側へさし寄ッて、

「心底は見た。死ぬには及ばぬ。其許たち二人の罪咎

は直義の身に引き受けた。」

呆れて二人は言句も無い、それをさこそとつら／＼眺めて、

「二人の罪は引き受けた。引き受けた、大事無い。許す！　刄を納めませい！　刄を鞘に……さうぢや……とう／＼……いぶかしむも道理ぢや。ことわりぢやが、苦しう無い。天晴の二人の心底、直義つく／＼胸に染みた。深くはこれからいふて示すに、まづ／＼刄を納めませい。」

甚だしい抑揚頓挫、死にかゝッた二人の五體もぐづぐづにこづかれて、今更張り合ひも抜けた鹽梅、しばらく躊躇もして、さて強ひられては背くも異なもの、跋のわるさを辛くも忍んでおめ／＼と刄を納めれば、じッと見澄して直義も何か大に安堵した體、さし招いて近うと呼ぶ、呼ばれてする／＼膝で進んで、何ごゝろ無く見上げた目、見ればそも／＼是はいかに、直義の目にはいつの間にか堰きあへぬ涙が一杯。これはと駭く二人を見て、きッと涙を拳でぬぐッて、

「直義、生命も入らずなッた！」と二度ばかりまた言葉を重ねて「其許たち二人の心底見えた。さほどまでに罪を悟り、直義の身に厄難のあらぬやう死なうとは扨見上げた心ぢや。今其許たち二人死ねば、上へ對しての直義の申し譯はそれで事も無う立つものぢや。立つものなれど……喃、これ如何……二人の命を犠にして、一人の申し譯を立たせて天晴な武士に狗死をさせられうか、さて爲せられまいか、思ふて見れば胸も張り裂く。直義この身に德は無い。源家の嫡流とは云ひながら隱淪してあれば龍も蛇、今兎に角兄もろともこの今の身に爲ッたのも其元をと言へば外では無い、天地神明の御加護と其許たち武士どもの精勤ゆゑぢや。」

いよ／＼聲は涙にうるんで、且沮み、且躓き、感が極まッて語が充分にまとまらず「其許たちの精勤ゆゑ、それを何ぞややみ／＼と、其精勤二心ない其許たちを――

如何に進退谷まればとて、いかに此身の難が恐ろしいとて——この、この現在の目前で己が見て居ておめ〳〵と死なせられるものか、これ！」

膝を叩いて說きかけられて、感動は特に聞く方に深し、聲を放つばかりに爲ッて「勿體無い」も口の裡、兩人ひとしく衝き上げて來る淚、その雫には五尺の全身も震へてふるへて、下を向いて只齒を嚙む體、右送り左迎へて直義の方も變はらぬうるみ聲、

「死なせられぬ！　死なせられぬ！　天地くつがへッても死なせられぬ！　直義の身に引き受けて何とでも救ふてやりたい。親王家に狼藉した罪、そこらはいふ迄も無う其許たちの脫落(ぬかり)では有る。たゞし罪ぢやと後悔して、爭はず、辭(いな)まず、狂ひさわがず、一念たゞ其罪に身を中(あ)てゝ直義の身に難なかれかしと差し添へ拔いて斬うよと見えた——うッ、うッ、うい奴！　それ、忝けなく無うて何ぢや、これ！　直義眞實胸にしみて、よしや其許たちと諸共に死ねばとて其許たちのみは死なせられぬ。よッ、これ、二人、心得たか？」

それ程までに情が有るか、それ程にも〳〵深く臣下を愛する事かと、前うらんだ身が恥かしくさへ爲ッて來れば、いとゞ氣の毒がまた加はる。これ程の明主の命令、草一本でも王家の物には狼藉を加へなと言ひつけられたのをうッかり背いて、果は此程に仁慈の君に淚さへ流させる事に爲ッたとは、畜生！　我と我ながら身をかきむしッても遣たい程、申し譯は微塵も無い。ことには奧底の知れぬ迄に臣下を愛される主君の御心、それ士は己れを知るものゝ爲めに死す、「直義、いのちも入らずなッた」の一言は今や死ぬ身の二人に取ッて冥途へのよい土產。御馬前で捨てるのも乃至平和の時に拋つのも主君のために益に立てば士の一分は立ッたといふもの、「其許たちのみ死なせられぬ。天地くつがへッても死なせられぬ」と扨も何たる深い情か！　中々にもう未練はなし、蛆にも均しい二人の命、それ捨てゝ賢明仁慈英俊の主君の難義が無くなるものならば何の惜しんで好いものか？　感淚

に溺れてたやすく利けなかつた口、やうやくに屹と爲ッて、二人そろッて異口同音、――

「身に餘ッた御情――」と只それだけ。涙に大抵かきまぜて、

「かほどまでの御仁愛、承まはれば承まはるほど身の腑甲斐無さが思ひ知られて――發矢！　何たる不肖の身ども――とても／＼此上はおめ／＼と面を曝いて、生き永らへては在られませぬを。御なさけにはほと／＼吾々、御ン酬いの言葉もおぢやらぬ」

言ひかけるのを手眞似で止め、「又しても」とたしなめて直義は頭をふッて、

「又しても女々しい言ひ草、それ聞かうと誰が望まう。」

「仰せをかへすは恐れあれど、女々しいとは心得がたし。御情にいとゞしく身を責め／＼て斯うよと思ふを……」

見上げる處をきッと睨んで「狂ふたか、かばかりの小事に當ッて其許たち二人は心まで？　狂はぬならば、なぜ言ふた？　なぜ死なうとかき口說く？　はか無き事に狗死して、士の一分が立つと思ふか？　女々しいといたがあやまりか？　狗死だにせし上は情を知ッたと思やるか？」

あらく吹いても仁慈な風、いよ／＼胸は情に捧げる、當惑して俯向けば、また一方は聲をうるはせ、

「たゞ死ぬばかりが能では無い。直義一旦口外した、生命に代へても其許たち二人をやみ／＼とは死なせぬと。魚心あれば水心、德とても無いこの直義にさほど迄に盡す忠義そも何として仇に爲らうぞ。」

勿體ないと手を掉るのをしげ／＼と眺めて嘆息し、

「何も／＼時の運ぢや。運が盡くればそれ迄ぢや。觀念して運を待つ。二人とも然思へ、直義は其許たち二人と運を荷ふて立つ心ぢや。」

「運を荷ふて御立ちやるとは？」不審顏して二人が同音。

「運を荷ふて立つといふは……あなそこたちに悟れぬか？　園重頼を蹴殺いたのは其許たち二人と人も知る。さらばやがて程も無く親王家から事の趣き問ひ正しに直義まで御使ひも立つであらう。立つが最期、直義が其許たちの罪のほどを一身に荷ふて立つのぢや。」

聞けば聞くだけどツきりともする、思はず二人は膝を進め、

「さればこそ館の御難儀……」

「難儀とあツても詮は無い。」

「これは仰せとも思はれぬ、詮ない事はおぢやるまい。重ねて諄きやうなれどもさればこそ二人の生命……」

「狗死ぢや。しツ、諄いわ！」

「狗死では全く御ぢやらぬ、館の御難儀無うなれば。」

「又しても繰りかへす！　そないな事を聞きたう無い。」

二人はたゞし力瘤、火炎を吹くまでに哮り立ツて、はげしく頭を左右へふり、

「かうなれば、殿！　館！　よしや如何程御心に背くとも思ふ心を申さいでは！　申さいでは、館！　館！　恐れながら御言葉を吾々は心得ず。」

「何を？　過言ぢや。心得ずと？」

「館の御身とわれ〳〵といづれが大事と館は思す？　館！　この……この涙で御ぢやる。千金の御身をかろがろしう二人の下郎の爲めに捨てゝ、天下で何と申さうか。」

「何といふても怪しうは無い。臣下を愛して死んだとあらば直義こゝろ嬉しいわ！」

たまらなくなツて髯武者が聲忍び切れずに泣き出して、進退きはまツての當惑、どうしたものかと身も世もあられず、有りがたさ、忝けなさは骨身にしみて、且つは分かりの惡い主君とは思ふものゝ、それだけに感佩口にもいへず、千思萬感は麻を亂して、末が本か、本が末か、思ひ迷ひに迷ッた末、わづかに考へついた手段、せめて少しでも主君の身に禍ひをかゝらせまいとばかり、

この心まことに實の實情、やうやくに涙を拂ッて此上はもう是非も無し、死ぬといへば許されず、たゞしおめおめしてはゐられず、兩端を取ッての一思案、御聞き濟みになるかどうかは分からぬもの〻、言ッて見なければ其處も知れず、

「いかにとも詮無う御ぢやれば、此上はせめてもの御願ひ、いかでわれ〳〵兩人に是ばかりは御許しあれ、死なず、活きず、中有の境。」

「とはまた何か？」

「世捨人で御ぢやる。」

第六　腹中の機關(からくり)

斯うでも無い、あゝでも無いと右ひだり相手の言葉をはぐらかして、とう〳〵世捨人とまで煎じ詰めさせて、内心直義は思ふ坪とひそかに喜ぶのを色にも見せず、しばらくは思はせぶり、返答に當惑した體で有無いづれとも煮えきらず、默然として下を向いていつか又ぼろりとなれば、大多和たち兩人も同じく愁ひは殞ちました。

促がすのも異な事ながら、さて默ッても居られぬ仕儀と二人はやう〳〵胸をすゑ、恐る〳〵主君を見上げて

「せめて此御願は御許しあッて、いかで何れにせよ、館の御身に係累(かゝづら)ひ無きやう……下郎どもの一生の、外ならぬ願ひで御ぢやる。」

思ひ込んでいふ面色、何さま熱心もあらはれて、又更らに他念も無い體。つく〳〵と視て直義は坐ろに洩らした溜息の二つ三つ、沈思默考、さて容易には答へもせず、やう〳〵にして目をしば叩いて、是非も無いと思案投げ首——

「忝ないぞ、其許たちの心の程、いよ〳〵直義骨身に染みた。如何とも最う詮無い喃。其許たちの願聞き入れた。」

「これは」、飛び立つばかり、「御ゆるしで御ぢやッて、喃？」

「まことに是非も無いことぢや。」

二度三度目を押しぬぐひ、力無さ／＼と二人を眺め、
「嗚、これ能う聞け。家臣の究迫を見す／＼見ながら知らず顔するは何ぼうか直義に取ッて無念の至りぢや。數ならぬ身を然程までに深う思ふ其許たちの心底、いよいよ運を共にする心にも爲ッたなれど、それとて叶はいで如何ばかり本意無いか知れぬのぢや。天晴望みの有る武士、無残や圓頂黑衣に窶さする事かと思へば、嗚……」

また涙ぐむ二人の體、直義もまた涙の語氣、「それとても浮世の義理、嗚、詮無いと諦らめよ。今は早や其後の事ことごとく直義この身に引き受けたれば必らずともに心を殘さず、勇み立ッて家を出でよ。」

咽びかへッて平伏する二人の傍へさし寄ッて「餞けに言ふ事こそあれ。まだ折も無かッたれば、しみ／＼其許たちを兄の君（尊氏）の見參にも入れなんだが、忠實(まめ)やかに仕へたと直義から兄の御前もかねてから取り做して在るほどに、せめて別れに一度なりと目どほりして後袂を別かて！」

行き亙ッた人氣取り、二人の全身(こうみ)は有りがたさに唯ひしがれて綿ともなる、いざと急き立てられて涙を拭ひ、それにしても高貴への見參、この顔ではと辭退すれば、「諄いことを」と叱り飛ばして、手を取らぬばかりにして自身も立上り、扈從を呼んであらかじめ兄の處へ今直義が行くと知らせ、自身先きに立ッて長廊下、廊下つゞきに右へまはり、左へうねり、やがて尊氏のゐる處まで至りついて、二人とも直に續かせ、用意して近習を遠ざけさせて、事の趣きを言葉みじかに物語るといふ、打ち解けて打ち解け拔いた有樣。何と挨拶をして好いか、其處ら分らぬまでの二人の胸中、かしこまるばかり平伏して見上げられもせず、且は恐れ、且は耻て、坐ろに涙に暮れて居れば、扨も兄弟よく揃ッたもの、尊氏も亦氣は輕く、裲を半分がたすべッて此方へさし寄り、鷹揚に一言二言いたはりを言ッて、それから又、折角の武士を出家沙門にして仕舞ふのは殘念な沙汰との趣き、しんみりとして語りました。

一座しばらくは言葉も無く、濕り切ッて奥殿の夜半のもの淋しさが一入加はり、感慨はいづれも胸を衝く。「運ぢや、詮無い、喃、直義」と思案に餘ッたらしい尊氏の言葉、聞いて「まことに」と同じました。

「心ばかりは惜しめども浮世の道とて甲斐は御ぢやらぬ。いつまでか斯うで御ぢやらうか。いでや二人とも、よしや出家になつたればとて一日も武辨の心がけおろそかにはなるまいぞ。」

「かしこまッて候ふ。」

「やゝ耳に立つ言葉ながら、喃、二人、今世の中は時津風枝を鳴らさぬ太平となつたれど、これいつまでかつづきはせぬな。」

じッとさし止める尊氏を直義は心得顔で見て動ぜず、

「是はしたり天下は安らかと思ふが誤まり。北條の餘類も尚多きに……枕を高うは寐られぬ世ぢや、喃。」

「仰せ洵に御ことわり。」

「今にもあれ、いつ波風が吹き立たうかも知れぬ世ぢや。よしや圓頂黑衣に様をかへても武事は脱からず心掛けよ！　翌日とも言はず、又其許たちに歸參して欲しう思ふ折もあるも知れず……」

兄は傍聽して居て幾度か胸ひや〳〵、たまりかねて、

「直義不吉な言句は言ひな」と睨めるやうに窘なめば、冷笑ッて受け附けず、飛んでも無い、又人をどきりとさせる挨拶、

「水鳥の音に弱腰抜かして平家は富士川で散りまいた！」

「何ぢや」と聞き直す兄をじろりと眺めて、

「なまじ恐れると、肝細うなるで御ぢやる！」

尊氏に勸めて大多和たち兩人に路用の金まで賜はらせ、殘る隈なく心付けて直義はいざとばかり二人に暇を與へた拔目の無さ、唯々として二人は涙を掻き暮れるといふだけ、髯武者男が坐ろに命も入らなくなるほど胸をうたれて、咽びかへッて御前を辷ッて立ち出ました。その夜卽刻人目に掛らぬ内に早く逃げろとの命に二人はた

だ言はれる儘、元よりさしたる身分でも無し、ことには二人とも無妻の身の上、白拍子あがりの伽の女に事のこころをわづか得させて、家を疊むにも譯はなく、其夜時を移さず二人相伴ひ、飄然として出掛けたばかり、やがて行雲流水、行方も知れずなりました。

そも〳〵此直義の細かい慈悲沙汰、散々に髯武者の心を強酢で揉んで仕舞ッた仔細、それも尋ねれば山でした。營々として人望を取れといふのが直義の持論、其處へいつもの細かい處が加はッて何から何まで殘る隈なく心を配りました。乘すべき風雲の機會が有ッたならそろ〳〵手を出してもいゝとは尊氏兄弟の間に既に〳〵成り立ッてゐる計畫、營々として——むしろ婦人の仁ながら——人氣を集めるに苦心してゐた、是等も卽ち其一例でした。

大多和たち二人を送り出して後、さすがに尊氏はいくらか氣に掛る體、直義近うと呼び近づけて、重ねて委細の事を深く尋ね、つく〴〵又弟の細かさに感じもし、從ッて又をり〳〵弟が口走ッた、冷々するやうな言葉をたしなめても見ました。

「壁に耳のある世の中に、さりとては卿にも似ぬ疎忽な言葉、今にもあれ、吾々が謀叛くはだつるかのやうに口走るとは心得ぬ。」

またも例の直義の癖、冷笑して抗論するかと思へば案外、この度に限ッて其やうな體も見せず、輕く笑ッて頭を撫で、

「心いさんだ儘でおぢやッた。まことに端ないことでおぢやッた。さりながら大多和たちに夫となく心得さするは斯程にいはでは叶ひませぬ。」

「斯ほどに言はでとは？　如何に、大多和たちはそれほどの白痴でもあるまいに。」

「いかで〳〵、恐れながら御言葉とも覺えず。何の、彼ら大多和たち、惜しいほどの武士では御ぢやらぬ。彼等の如き武士どもは、礫の眞砂の數々御ぢやるわ。」

人を手遊にする言ひ草、さも大事さうに見參にまで入れさせて路用の金までねだッて取らせ、鄭重に鄭重を加

へて送り出して、そして跡で何をいふかとおもへば、更に惜しい武士でも無いと。いつもの癖とはおもひながら呆れて兄は心を得ず、しげ〴〵と弟を見つめれば、弟は何處を風といふ體、餘りの事にさし寄ッて、

「心得ぬ事をいふ人かな。惜しい武士でも無いものを、などてあれ程に手厚うした？　磯の眞砂と知りたらば益無き事を爲まじきを。」

たしなめ顔で詰り掛ければ、

「その事で御ぢやる。惜しい武士でも有らねばこそ樣樣にもてなして諸國行脚の出家と爲せて、われ〴〵の威德の程語りあるく役にしまいた。また思ふても見そなはせ、惜しいほどの武士ならばあれほどに心さま脆いものでは御ぢやらぬを。こゝに此手につけおいてもさしたる甲斐も無き二人、この度の事を機會として表ばかりの恩を着せ、放し飼ひしたで御ぢやる。雀ならば口も聞けず、雀よりは稍勝つた人間といふものゝ甲斐に美事われ〴〵の恩義の程をそれとなう諸國を回りて語り歩るくことで御ぢやる。」

奥底の知れぬ圖武々々しさ、今更兄も苦わらひ、

「直義、とても角ても卿は、喃、尊氏よりは惡人ぢや。」

とゆるやかに評論すれば、扨褒めるか、惡くいふのか底意のわからぬ言葉には一方も稍たぢろぐ體、これも爲う事なしの苦わらひ、

「何であらうが直義は……」

屹となッて目を据ゑて、意氣日を貫くといふ形相、

「思ッた事は爲とげまするを。」

つッと飛ぶやうに擦り寄ッて、

「さり乍ら、喃、兄上、大塔宮の昵近殺いた一條は近頃大事で御ぢやらぬか。」

大多和たち二人を送り出して後、其夜尊氏兄弟の間に夜更迄もたゞ聲低く、しんみりとした密々話、何ごとか、事の子細は昵近の扈從すら遠ざけられた事とて更に分らず、扈從も竊聞したものゝ、相たがいに耳打ちで應答することとて更に竊聞の甲斐もなく、それこれするうち薄

眠くもなり、うと〳〵としてゐるうちにいつか夜は早や曙けました。おやと思ッて伺へばまだ兩人は舊のまゝ、やがて日がやゝさしのぼるまでは一向同じ體でした。

日が昇ッて後直義はやうやくに辭して去りました。辭して去ッて朝飯をほんの形ばかりに搔き込み、たゞちに禮服に改まッて、伴ぞろへも極めて略し、何處となく飄然と出かけたぎり、夕暮まではかへッて來ず、殘ッてゐる近習同士も何處へ主人が行ッたことやらあらかじめ祕密にされた事とて更に分からず、尊氏との昨夜の閑談を思ひ出して、いづれ何か子細があらうと唯々不思議を抱いてゐました。不思議を感じたのはこれらばかりでもなく、尊氏の昵近や扈從も同じく眉を寄せました。常はさして喜怒を顏色にあらはさぬ質の尊氏が今日に限ッては頗る變ッた體でした。何となく物思ふ風情、ほと〳〵うッとりとする工合ひで、折り〳〵は溜意さへ吐いて、眉は閉ぢ合ッてさらに開かず、目の寄る處へ玉、權略の下につく狡々した若い近習もそれと無く御機嫌取るやうな、吹き出しさうな噺しをして試みても笑ひ顏はあらはれず、何でも大事件だと見當をいたづらにつけるぐらゐ、たゞたゞ不審を凝らしました。其中に晝となり、未となり、申となり、日影はやう〳〵傾いても、いつも好きな後園の散歩を試みる氣色も無、また不斷から好む田樂舞の謠さへ今日に限ッては口に乘らず、そして深殿の一間にひとり籠ッて、何をしてゐるかとつら〳〵見れば、何の用か將士の名簿を取り出し心を潛めて數へてる體。

いよ〳〵不思議だと目ひき袖ひき、口さがない近習の常とてはしたなく囁いてゐる處へ若侍が一人來て直義の訪問を告げました。人の氣も知らぬ夜ふかし好きがまた來たかと口の內に呟いて、其足で廊下ぱた〳〵、尊民の處まで到り着けば、噂いッた人は已でないといふ計りの有樣、改まッて直義の入來の趣きを告げました。

告げるや否や、引きかへて氣色のたちまち變る尊氏、「來た？」と一言ほとんど飄輕に言ひなぐッて俄に直す居三昧、さも〳〵待ッてゐたかの樣子、はゝアなるほど何

か昨夜の引き残り、内相談のある事だなと近習も大方心を得て、席を遠ぬかうかと尋ねれば、如何にもとの果して察した儘、入れ代ッて直義は入ッて來ました。

入ッて來るや否や、尊氏の心配らしい目に早くも止まる直義の滿面の喜色、さては旨く行つたなと一方もまづ安心の小口を開く、とく〳〵と近くへ近づけて、「どうぢや、事の成り行きは？」聲を潛めて、慌しく問ひ掛ければ、いよ〳〵一方は見せる笑顏、「思ふたよりはよう御ぢやッた。」

前後を見かへッて人は居ぬかと手眞似、腮でそれと答へれば、つッと又直義は兄の裀のすぐ側まで其身を辷り近づけて、

「はゝゝ世の中はこないに容易いもので御ぢやるか、喃、兄上。朝とく女御の方へまゐッて、昨日の顚末を詳に述べ、よろしう頼み聞えまいた。」

「頼み聞えて、彼方にも御うなづきやッたか、喃？」

「美ゝ事御うなづきで御ぢやッた。素より女御の御方では宮と御仲よろしからず、このたびの事なんどもそれ故に直義を贔負こそすれ、努にも宮方とは爲らせられねば、こゝらは事無う濟むで御ぢやらう。さり乍らこの事よりいよ〳〵宮は吾々を憎ませらるゝ事なるべければ――たゞし、それ故にこそ此方にも手は有り、女御の方よりの御口ぞへにて是よりより〳〵手をまはし、恐れ多い事ながら今上と宮との御仲を惡しうせでは叶ひますまいに。」

「いかにも。」と尊氏もうなづきました。

第七　雲の上の切諫

それからより〳〵人を忍ばせ、昵近を殺されたに就いての大塔宮の御感觸を探らせれば、果して凄まじいとのことでした。

宮は音に聞えた勇猛の御性質、意氣は坤軸も嚙み碎かれるの御勢、いやしくも一分を枉げられゝば山が崩れても捨て置かぬ御肌合ひだけ、この度の武士の狼藉、而も其の武士は誰有らう、かねてから惡らしく思ふ足利直義

其人の手に付くものと聞くにつけ、鬱憤が積つて骨々も碎ける苦しみ。

おのれ阿曲の小人、人も有らうに僣上至極！　こゝらわだりの昵近蹴殺いて知らず顏する肝ふとさ！　かねてから、一癖有る足利、心許せぬと目は附けても、僣上が是程の處まで高じ至らうとは今が今まで夢の夢にも知らなんだ。何の！　機密魂膽の大惡謀、この黑い目が睨みそこなッたと思ふか？　より〳〵婦人の仁を施こし、敗肉に集まる五月蠅は同じ虫同士、小人が小人を馴らし近づけ、何と無く時を待つかの姿、それすら尤も不思議の至りと既に目は附けて居た矢先も矢先、はたして暴雷のやがて出る證據、一光り大空をつらぬく稻妻のするどい鋒尖。奸といへば奸、曲といへば曲、佞と言へば佞、猾といへば猾、およそ惡魔といふ惡魔の箇條書に一點も洩れぬ足利兄弟、おのれ嫩葉のうちに刈らずば！　君子の利用するは道と德、小人の利用するのは色と慾、椒房の權威のをさ〳〵盛なのを利用して、手を回し、目を配ッての種々の計畫、思ひ知れ、天罰！　護良の目にかゝッたが最期、護良の目の玉のきらめく間、何として非望を遂げさゝうか！　この邊の昵近蹴殺いたのも好機會、これを口實として詰りつめて——詰りつめて、已等兄弟！　已等兄弟の鼻柱引ッこすッて吳れやうづ！

と、一時は火のやうに憤ッて狂ひ立ッて、常の凜然とした御顏に一入の凄味を加へ、どうしてくれやうか胸一杯、身をもだえて居られた折りも折り、何ごとか、忽ち禁裏からの御召し、勅使かと伺へば決してそれ程の際立ッた御召しでは無いものゝ、兎に角入らせられよとの命令に、それならばと計り支度もそこ〳〵深殿に伺候すれば、直に主上の御前まで程近く導かれて、いざ打ち解けて物がたりも爲たい故、禮に及ばず近づけとの仰せ。

この數日前實は國家を思ふあまり閨房や佞臣の害毒を滔々と御前で申し上げ、それがため宮も主上の御勘氣を幾分か蒙ッた氣味合ひ、その揚句に思ひも附かず突然と召されたのみならず、而も天顏うるはしく、打ち解けて

よとさへ仰せられて、殆ど意外の思ひもしました。
仰せの儘に辷り出れば、主上は常より天機すぐれて、寒暖の御挨拶それさへも懇に、やがて段々との咄しの中から――如何にも多分さうとは思ッた――何を仰せられると思へば卽ち例の一條でした。物事は平和が好しとあらかじめ地を付けられて、其上で題へ入り、「こゝろよくも有るまじきが、朕に免じてゆるしてよ」と、扨も勿體ない御言葉。宮は心中いとゞ又燃える計りになりました。
さては女御の口添へか、事々しく萬乘の御身の上に是程御苦勞掛ける事かといとゞ又腹も立ッて思はず宮も御膝を進める、――
「恐れながら事の顚末くはしう聞し召されてや。さきに法印良忠の事さへ有り、今又それと事も同じくやみやみとして家臣を殺させ、一言の言葉さへも無く、面たかくして在らるゝ事心外この上や候ふべき。この儘にやはかおめおめ――道は道、正すが道、護良無念盡きず候ふ。」
吾を忘れるほど、怨みを凝らして叫ばぬ計りに論ぜられるのを聞きはてゝ騷がれず、大方は笑さへ含まれ、
「道を言はゞ然る事ならんと朕も思はざるにあらねども……護良何も堪忍なり。」
「恐れながら堪忍も時と事とにより候ふ。諄きは甚だ憚かり乍らこの程も聞えし如く嫩葉のうちに刈らざれば斧を用ゐる大事有り、怪しと目星のついたるもの無殘や打ち捨てゝ虎を育て、天下萬人の禍招くは末代の聞えも心ぐるし。見そなはせ、此度の狼藉、如何さま小事に似たれども、事のかゝる處は小事ならず、僭上の限り、王家の尊きをも思はざる振舞には候はずや。」
但し心をとめては聞かれず、
「言ふ事一々ことわかりながら、又さほどはしたなう人は疑ひ思はぬものぢや。一言齒より洩れたが最期、駟馬も及ばぬとは常よりして其許も言ふ事なるに、何事ぞ、はしたなく――堪忍！　猶よく考へ見ませ。はした無うは爲ぬ物ぢや。」
幾度言ッて同じ事、無念はいとゞ宮の胸に衝き上がッ

て吾と吾手も掻きむしりたし、巧言や艶色たゞそれ丈で成る世と思へば堪へかねてか男泣き。よしや御勘氣被ッても！

膝を進めて、又くりかへし、兄弟の奸曲を口の儘に述べました。虎の眠るのは鋭氣をやしなふため、今や足利兄弟は乘ずべき機會の無いために止むを得ず我慢するものゝ、兄弟の人物やみ／＼あの儘で居る性質で無し、今にもあれ、雲雨が蒸せば毒龍は池に潛むとも思はれず、こらの叡慮はいかゞと申し上げれば、御耳にも猶とまらぬ體「はした無うは爲ぬものぢや。」

決してはした無うは致しませぬ。護良が斯う狂ひ騷ぐはたゞ一人の家臣のものを殺された怨みばかりの故でも無し、家臣を殺されたのは悲し、たゞしそれより猶悲しいのは是程までの武臣の亂行、斯うも朝威を侮るかとつくづく思ひ浸みた時の胸。

下を叩いてにじり寄り「亂言叡慮をそこなふ恐れは有れども思ひ付た事申さいでは。渠等奸佞が謀叛くはだつる事、よしや打つ箭に外るゝとも護良の是のみは外れず候ふ。賴朝このかた朝威有るか無きかに爲り、武辨の無道に怨みを呑み來れる十何代、やうやく天機こゝに熟し、神風の吹きかへて辛くむかしに立ちかへッて、延喜天曆を復ふたゝびこゝに見やうとする處で、又もや武門に權を奪られて何の甲斐の候ふべき。これを思ひ、彼を憶へば、不肖ながら護良は切めて微力なりとも腕をかためて逆賊の邪魔をせうとも思へば、肌さむき夜半の禁裡に拔節の聲の微になる頃さま〴〵の懊惱胸を衝いて腸も煮えたゞれ、目睡めもせず、哀れ成る事ならば賊臣兄弟の素首を引ッ千切ッてもくれうづ物をと佩劍握りつめた事も度々。

「たゞ此度の事は家臣の一人殺されしのみの事、その方には諦らむる術もあり、いかにしても諦らめられぬは朝威を無みせし事この事。朝威を無みせし大賊臣、天津日に唾吐きかけた逆賊を其儘にさしおく時は天下萬乘の威も無うなりて冠も履も同じになるべき……天津日のふたたび匿れて、浮雲また湧き出でなば口惜しさ抑いかばか

り、今よりして思ふだに心ぐるしうこそ候らへ。あはれこゝらに聖慮の程を。」

赤心にかき暮れて一意に國を思ふ熱心、さすが御親子の間がら、大抵は思ふ存分述べ立てゝ、そこに又一理の無くは無し、御勘氣も一時は有ッた程ながら、胸中を推察あッては逆鱗といふ處にも至らず――たゞ何事も朕(み)に免じて今しばらく待てと計り、其上それでもとは流石に言はれず、仕方無くしぶ〳〵默つて「たゞし努々足利には御心を許させられず……」と最期の念を押しただけ。斷行の出來ぬ無念、鬱々として宮も退出しました。

處がこれが手に取るやう、是等始終一伍一什は、無殘！　直義からの間諜兒に殘る隈無く聞き取られて、則ち足利兄弟の耳へ有りの儘がその儘そッくり。心にくい護良め！　わるごすい惡座主め！　よくも此方に目星つけた眼力は扨しほらし、しほらしいだけに捨てゝは置かぬ。この仇思ひ知れやと計り、大事にかゝる支度として兄弟が心血を絞り出したのは宮を押し片付けて仕舞ふといふ事。

「與ふるの取るたる」といふ古人の言葉を其儘に取り用ゐる足利兄弟、最早大塔宮といふ目の上の大瘤を取り除かうと決したからに、其以後と云ふものは宮に對する二人の擧動が前と打ッて變はりました。

宮が主上に向つて滔々と辯ぜられた時の二日後、突然として宮の館を直義が音信れて、館一同の肝をつぶさせました。しかも正門からして入らず、食を乞ふ狗同樣、わざと差し扣へて小門から入り、人を以て辭を卑くし、窃かに御わびいたしたい筋の有ッて伺候いたしたと云ひ入れました。

時はまだ正午の前、宮は疾くに床を離れられ、一人の扈從を相手にさま〳〵の大刀を取り出させ、手づから夫等の塵を拭ッて、凛然とした光芒、それを御自身の氣象に比べるか、獨りしづかに娯しんで居た處、突然として別當一人が伺候して直義云々と申し上げれば、扨はと宮も點頭(うなづ)かれました。御顏色もすさまじく、何か暫らく思

案して、
「何事の用事で來たと云ふた？」
御答へする身も汗、
「憚りて明々地には申さねど此頃の珍事について親しう御詫び聞えたさに參ッたものと思ひ候ふ。わざと小門よりくゞり入つて……」
「小門よりくゞり入つて？」と宮は冴えかへッたやうに期を押しました。
「さん候ふ。」
奸物め、今と爲ッて頭を低げての小門まはり、其手は食はぬと冷笑ッて、
「其許はそも〳〵何と思ふ？」
些し此方はたぢろいて「さん候ふ。御詫びとは言ひながら心憎き沙汰で御ぢやる。今と爲ッて日數經てやうやう御詫びに參るとは面白からぬ節かと計り臣等は竊かに思ひ候ふ。」
「其許の言葉現にも道理、身に於ても然思ふを――いかで不思議の奸物を門内一歩の中なりと阿容々々許す法や有る。疾く急き立てゝ追ひ候らへ！」
些し激だと、頭を低げ、
「御ことわりの御言葉ながら、追ふといふは如何なるべき。彼も足利の重きもの、身を下りて參り來しからに數ならねど臣等なりと一席の言葉を交へて歸しやる方穩なるかと……」
聞きも終らず宮は大音、
「それをば其許に聞きは爲いで心に染まぬ事も有るを、誰かは護良の門内を狐の足に踏ますべき。穩なるも穩ならぬも時によりては用捨有れ。疾う〳〵彼を追ひ候らへ。護良來意の趣きを聞く耳は持たずと云へ。」
常の御氣象がら、固く執ッて五分も動かず、もはや此上はと諦らめて爭はず、やがて御前を辷り出て、宮の令旨多少の斟酌を附け加へ、直義に傳へれば、道理！ 其一群の同勢は聞くと均しく氣色ばむ、直義自身が進み出て、何と仰せらるゝと改まッて詰め寄りました。

「御來意の趣きも明かならねば。」
常座の楔子を打ち込めば、
「來意明かならば其儘に異儀無う吾等を御通しあるか?」と期を押しました。
「御來意の筋により。」
「必らず異變おぢやらぬか?」
「金打の沙汰でおぢやる。」
「勇ましや。さらば申さう。御詫び言に參ッた直義、恐れながら兄の身にも代り、また己が身は己が身づから、斯うは參ッた事で御ぢやる。」
「その儀ならば御門內へ……」
一期の大事と屹として、「一步も御入り許せませぬ!」
さすが直義も氣色が變はる、佩劍の柄われ知らず碎ける計り握りつめ、
「是は近頃稀有な御言葉、其子細承はらう。」
「宮の令旨に候へば子細の程は知れ申さず。」
「いしくも言はれたるものかな。仰せ無くばそれ迄として直義も御門內土砂一粒も踏むまじけれ。それにて御異存ましまさぬか?」
「素よりの事で御ぢやる。」
と、爭論は極めて手早く、是丈で果と爲ッて、無念をありあり顏に示して直義主從の供揃ひは「行け」と計りに號令一聲、一旦小門から出さうにして、又傳はッた下知と共に一同俄に足を轉じ、此度は肩で風を剪ッてあはや正門、おのれ、そこから出る氣かと手に足握ッて睨みつめ、まだ口を切らずに見て居る老臣、その方をふりかへつて直義は些しく冷笑、又一令を傳へ直して、正に是調戯顏、小門からして出て行きました。
これを蔭から透見して宮も無念に足摺りして目の色も變る勢、事の樣子を傳へに來た當の老臣に向ッて口氣猛火を噴きました。重ね／＼の借上沙汰、詫びに來て受けられず、猶手をまはして詫びやうともせず、あまつさへ調戯三昧、何處まで皇家を見下す事かと流石勇猛な御生質だけ、意氣は一際鋭くなッて、恐れ入ッて平伏する別當

も慰めたてまつる手段に盡きて、是とて怨みを呑む計り。
　あやまッて來た處を一旦荒肝を挫かすばと故さらに強顔した宮の御處存、見事がらりと的を離れて、なまじひの外矢却ッて此方へ飛びかへッて痛憤骨身に入りました。
　今は最う最期、容赦堪忍、そのやうな間だるい事を口にされたものでも無し、頼む處は義貞、正成、親房もあり、長年も有り、此あたりを說き付けて藩屏を造る用意が肝要。おのれ、足利覺えて居ろ！
　思ひは同じ足利。甘言を以て甘たれ込み、體よく詫びて宮を賺かし、充分に御心ゆるさせて、どうか其内に手を回し、陷れて仕舞はうとの策が意外にも眞向から殺竹わりに斫り裂かれて、もう此上はと僞りました。
　右左道は違ふにしろ、歸する處はやはり一つ、宮を押し片付けると目射すからには、破れかぶれ最う闘行くも用行くも道は一つ。料る處、宮の返答木で鼻をくゝる工合ひ、あれ程に愬いからには最早此方足利に對して萬一の用意をぼより〳〵整へ出した譯、油斷すべき處で無い。

第八　碓氷峠の旅僧

　彼も是も睨み合ッて時機を見料らッて居る内に快くも年は改まッて、翌れば改元も出來た建武元年。上部だけは何樣以て「君が代は千代に八千代にさゞれ石」の平和安靜の世界と固まり着いて、春は正月頃から大内の普請もはじまり、金が無いとて楮幣を代用する遣繰算段、何のための見得かと言へば、所以は別に無いとの咄し、それを苦々しゝ睨み付け、天晴流俗に捲き込まれず、一言が一言出る度に警醒の意を含ませる藤房の諫は疎まれて、其說を聞く人も無し、浮薄輕躁の濁水が蕩々と高浪うッて日本全體を呑むかの勢、それ利用する人も有れば唾を吐き掛けぬばかり獨りで氣を揉む人も有り、野心の芽や非望の花、噛ぎしりの胡麻女魚や沼維の吟、是等兩極の異分子が衝き當ッては軋擦しました。
　位だふれと後も言はれた文有ッて兎角は人心の背いた原因その重な處は公家の擧動、この方にもありました。

賴朝以來何十年、美事鎌倉蝦の鬚強くて動もすれば皇家の鋒先を引ッぱたいた反動、北條の零落に生面の長袖が虛名を貪り、年來の怨み思ひ知れと計り、小利口なのが小股をくゞッて武士は蹴押される事も有り、足利とか、新田とか、然るべく時めいた手に屬く者は特別ながら、其餘の無所屬連に取ッては思ふ程の賞も無く、徒らに公家にのみ威張られて無念に腦も煮えました。やがて色々な否な風聞、やれ藤房も萎んで落ちた、やれ殿上に怪鳥が出たのと、極り文句のやうな種々の取り沙汰、ことごとく皆人心をいらだてる計りの矢先も矢先、忽然として又一つ天下公衆の側てた耳を貫いた意外の風聞、兵部卿の宮護良の親王が馬場殿へ監禁の身となられた！

天下既に亂を思ッて、棚に鼠の騷ぐ音も一揆の兆かと思ふ處で、人も有らうに今上の皇子武勳第一の宮が傷ましくも縲紲の耻辱に掛かられた趣き、扨浮評とも言へぬ浮評、聞くよりも噂の傳はりが早い程、瞬く間に人橋掛けて殆ど全國に行き亙ッた、時は建武元年冬の十月。

こゝは上野國碓氷峠の中程、岩にさし掛けて結んだ道端の小家に腰を掛け、休んで居た行脚の法師がありました。笠深くして居た事とて顏は分からず、それ乍ら聲の工合ひや身體つきで料る處廿四五を越えぬ年輩、頗る面を包むと見えてそのためには低い小家に笠の動もすれば塞へる不自由、それさへも我慢して言葉少なにして居ました。落ち合ッて同じ處で休息をして居る別の一群は處のもよりの馬子と見えて、始めの內は馬の噺し、いつは何處に市が立つの、いつは何處で競馬のと、流石又聞く身には物めづらしい應答でした。

馬士の中での鐵中錚々、でッぷりと肥え太ッて鬼髯たくましく頰を埋めた、色の小白い、卅恰好の男が是等會話の焦點で、而も一群の銘々に推尊される體でした。

「おどれら」と一目づらりと見わたして、

「馬のよく賣れるは駭いたよ。仕立つれば仕立つる儘羽生えて飛ぶやうぢや。」

「はゝゝ馬に羽生へるか、ならば鳥は足で翔るべい。」

相槌一人が打ち込めば頭はいとゞ興に入ッて、

「此二月は一入ぢや。何に用ゐる馬かと思へば、これ唯軍の心がまへで、血腥さい風なんどがまだ吹くらしい容と見える。」

言へば一人が進み出て、眉を顰めて身ぶりもをかしく、

「それ、それ、それは何處の果も同じ姿で御ぢやるげな。此程陸奥へ下ッた時馬買ひの多さ駭いた。いづれも武家が買ふばかりで、軍馬べい賣れたげな。」

「軍馬べい？　訝かしよ喃。世は定まッたと云ひながら。買ッたのは誰どのぢや？」

「聞かすあッた故知りもせず、さり乍ら武士の言葉つき腹からの東男では御ぢやッた。武藏下野あたりかの？」

同時旅僧の笠の庇が此方に向いて上りました。が、一方は心も附かず、語り進んで來る親玉、

「こゝらわたりは新田領とて、いづれの馬も／＼新田殿の手に上がるが、念無う怪しい事どもぢや。世は又やがて亂るゝか。」

にはかに心付いた工合ひで、

「おゝ、それ、己等も知らう、皇子の、あの、大塔の宮、何事の在すか知らねど御惨ましやあの御子が閉ぢ籠めの御身と爲ッた噂。」

「それは又」と詰め寄る相手を勿體らしく手眞似で制し、

「鎌倉から來た男がさだかに聞いて來た事ぢや。鎌倉殿の繰りとやら、をさ／＼人の言ふ趣き、思はぬ事の有る世、喃。」

得意に爲ッて語る體、最前から心を潛め、聞かぬふりして聞いて居た旅僧もこゝに至ッて堪りかねてか、つッと計りに立ちあがッて此方の側へ近づきました。

笠の庇に手を掛けて、

「卒爾なれど御ものがたりの面白い儘打ち付けなる事、いかに仰せらるゝやらん、大塔の宮が御幽閉？」

笠の上からしけ／＼眺めて、

「と言ふ噂聞いて御ぢやッた。」

「何時？」と重ねる短兵急。

「程も無い前と言ふ事で……」

法師の顏さし覗き氣味で身を寄せれば、法師はぞッと身を反らせ、

「たしかな筋より御聞きやッたか？」

「たしかとは思ひまする。和僧は旅の人と見ゆるに露も御聞きやらんでか？」

「露ほども聞き知らず——今信濃よりまゐッた計り、心附かねば心も附けず、今し御物語り承ッて坐に駭き入て御ぢやる。」

「駭きは誰も同じ、小可どもまで肝に答へた。法師は何處の人やらん、小可は此近いわたり馬飼といふは名のみなる言はゞ、野武士の群をつくる惡戯ものゝ身で御ぢやる。」

さも愉快らしく高く笑ッて、其處の仲間の馬子を示し、

「是等も小可どもに出入する野武士かた〴〵馬子かたがた、人の面した鬼で御ぢやる。」

思ッよりは面白し、法師も共に笑坪に入ッて呵々と笑ひだせば相手は人を好む性質か、思ひ附いた樣に手を拍ッて、

「法師は是より何方指して御出でやる。此上野を御通りやるか？　急がるゝ旅で御ぢやるかの？」

「急がぬ旅でも御ぢやらねど、上野を經て鎌倉までまゐらんと思ひ候ふ。」

言ッて日脚を仰いで見て「鈍やもう昏近し。」

「秋の日とて名殘も御ぢやらぬ。今宵御宿せまほしう小可は思ひ候へど——心ばかりの回向も有るに——御坊の御心如何で御ぢやる？　御欵待は弗に無けれど、御宿り賜はらば佛も喜ぶ事で御ぢやらう。」

見掛けには似ぬ不思議の快辯、外貌に因らぬものと法師も坐ろ感じました。が、思ふ所も有り、頗る心すると見えてさうかと直に承け引かず、

「忝けない事では御ぢやるが、」言ッて何か一思案。

「差しあたッて俄に又思ひ付いた事もあれば。」

「御泊りやらばか？」

「然よ、喃、今は。」

急ぐと有れば是非も無し、施行善根とかいふ事を身分柄に似ず好む性質(たち)が頗る失望は爲た體ながら流石にそれを無理には言へず、「さらば御泊りは何處にて？」尋ね出した言葉法師は耳にも留めぬ樣子、暫しは忽ち前へ戻ッて、卒然として、

「宮についての世の噂は唯それのみで御ぢやるか、喃？」

よく穿(うが)る事と怪しみながら馬子は言葉に城府を設けず、聞き込んだ儘の洗ひ淺ひ、それでも聲を低くして、

「くはしうは知らねども然るべき方の計らひより斯くは陷されやッた事と覺えて、聞けば無殘の沙汰で御ぢやる。宮の御昵近衆三十人は……」

法師は膝を進めました。息を呑んで詰め寄れば、

「御昵近衆卅人は揃ひも揃ッて押へられて……」

「押へられて、げに揃ッて？」

「揃ッて而も何れも皆」

顏をしかめて屹として、「縛り首の無殘の最期！」

「縛……り首!?」と應じた聲、さも駭いた工合ひでした。此方はいくらか溜息まじり、

「大塔宮御叛反のよし奏上に及ばれて扨こそ宮の手足は切られ、宮は御監禁と爲られた趣き、これ只噂でには御ぢやれど深い違ひも御ぢやるまじけれ。九重の事は雲ふかくて下界で辿り易からねど、馬などの賣れ行く事といひ、今また是等の沙汰と云ひ、安からぬ樣で御ぢやるよの。」

巷談街說とは言ひながら事件が事件とてしんみりして中々に今は輕口も出ず、二人話し込む姿をしげ〳〵と馬鹿な顏して見つめる馬子共共口のぱッくり開いたのも時が時とてをかしくも無し、聞き了ッた儘で法師は無言、笠の傾くに思案投首のしるしも見えて、此方の馬子も多少の不審。其樣子凡で無し、宮の一類か、敵黨か、思ひ入ッて根掘り葉掘り聞く處、如何に踏み倒して見たにしろ、

木魚念佛三昧くだらなく世を渡る旅僧とは思はれず、要するに是當今のはやり物、圓頂黑衣に姿をやつして笈の中に血みどろの連判狀、錫杖のがらめきは仕込んだ錬鐵の音で聞かせて、陣幕を同じ反から切ッた地太麻の墨染の袖、文の裏に武を孕み、生の蔭に死を包むそれらの類と見たは僻目か！　自分身は墓無い馬飼、名は不仁の野武士の巨魁とは言ふもの丶、公明の心事はをさ／＼天地日月に對しても耻かしからぬ處も有り、元弘の亂、血氣は腕に瘤を立たせ、同臭の荒くれ者を寄せ集めて、心ばかりの忠義、義貞の手に從ひ、鎌倉に押し寄せて、覇業が猛火に燃える中、相應の功名もした人間、天下一旦治ッて後、慾を知らぬといふ證據に恩賞を辭して受けず、義貞から貰ッた感狀、それ丈は流石にかへせず承け納めて、自然退隱しても幅が利き、上野國碓氷郡峠の裾に腰を据ゑて動もすれば國の守護の手助けともなる身の上、看板から見せ掛けた俠といふ一文字のためには百年の生命刀の刄糞と消しても可し、所以有りさうな法師を見て坐ろに慕はしい念も起る、泊るのを辭まれて失望して、わづかに仕方無く名を告げました。

「強ひてとも申されねば、此儘袂をわかつて御ぢやらう。なれども和僧も旅の御身、又こ丶らわたり御通りある日の必らずしも無くてやは。さる時々は御心置かず……」

頭を下げる法師に釣られて俄に自分も頭を下げ、

「小可みづから名を申すは甚だ無禮の至りながら。」

「いかで／＼！　望むところ。」

「碓氷の五郎と仰せられなば大方人も知ッた身の上、汚きは申す迄も無けれど雨しのぎの屋根は有り、立ち寄ッて御泊りあれ。法話流石に小可どもには折り／＼の目ざまし藥、御聞かせあるも功德で御ぢやる。」

憎氣の無い言ひ草と法師も幾度か頭を下げ、

「行き亙ッて濃な御言葉を何とて空に思ふべき。又こ丶らわたり過ぎん日に御手數には預るべ。されば御名を承りながら子細有ッて愚衲の名申さぬは無禮の沙汰と思

し召さんが、俗界外のものとして願はしく御見ゆるしあれ。」

一言が一言はじめより改まッて、二人均しく敬ふ氣味合ひ、又いよ／＼心許さぬ工合ひ、それも此處が果と有ッて話しの種も盡きました。最早名も知れて、馬飼では無い碓氷の五郎、名殘をしいが然らばと云ふ體、西の峯に入りかゝる夕日を眺めて塵を拂ッて立ち上がれば、外の馬子も用意する、「いざや御僧」と挨拶すれば、法師に於ても殘り惜しゝ、是もわざ／＼立ち上がッて姿だけの念佛三昧、合掌して見送るを、振りかへり／＼五郎も峯を下ッて行ッて、右左り上下まがりくねる嶮岨の山路、程も無く身も無くなりました。

五郎の後影を見送ッてやがて其影は無く爲ッても法師は茫然と考へ込んで溪底の枯木五分も動かず、小家の男が怪しんで拔き足して傍へ寄る處で屹とふりかへッて氣も附いた樣、茶代いくらか摑み出して投げ附けるやうに置きました。禮を云ふ男の言葉半分ほどで打ち消して、吾知らず獨り言、「返さうか？　扱行かうか？」何か自分に言はれたのか「えッ？」と聞き直す男の聲に舌うちして物をも言はず、彈機が急にかゝッた足付き、やはり五郎の跡に續いて峯を下り出しました。

第九　喜憂の交代

連れ立ッて出掛けた果實の獵が稍濟んで、脹らんだ腹、聲さへ銳く、そよ／＼そよ／＼峯をわたる千疋猿。溪の岩蔭水音のかすかに石を噛むあたり、形は隱して只聲だけ哀れに黃金の鉢を搯る鹿の聲。山は瘦せ、木は細り、乾びついた峯の稜々、今過ぎた雨の痕まだ乾かず、競ひ立つ亂雲の隙間から、やゝ沈む夕陽の光りを摧いて五色に雲を彩る壯觀、風は冴え、氣は澄んで塵一つ飛ばぬ秋の山路の淸らかさ。十重二十重屛風をめぐらし、襖を累ねた山又山、寶物の爐や紅葉、眩い計りの錦の色を造化の筆で描き出させて碓氷峠三里が間は何んな山媛仙女が住むかと計り怪しまれる程錦繡の天地でした。たま／＼

聞える名も知れぬ鳥の聲、一坪かそこら根の中へ抱へ込んだ土を命として崩れかけた絶壁と共に岸から宙づるしに爲ッた木の下蔭の何處に其身を潛める事か、太古の見本此とほりと苑も詣ひ試みて而も自身その歌の調子を味ッて居るかのやうな工合で丁度引きずるやう、呼吸を殺すやうに聞き做される鳥の聲。峯かと思へば澤、澤かと思へば峯、今でこそ平な途、馬車が何うの角のと贅澤熱を吹くものゝ、其むかしの笛吹の難所は山の神に生命を奪られぬが幸のくらゐ、兎もすれば切れたがる蔦蘿に千金か一萬金むしろ値も知れぬ尊い身體を托する計りの勢でした。上信二ヶ國の道ながら、通るといふ程人は通らず、吾儘に生ひ茂ッた草木、おの／＼さま／＼の贅澤を盡くし、張るだけの根を張り、出すだけの枝を出し、上下共に一致してどんよりと暗闇を造り、仰げば僅に葉の隙から的皪と輝いて見える一點の空、晝の星かと思はれました。梢から一筋の薄烟を引く工合ひでぼんやり垂れ下がる猿尾草に絶えず凝りたがる露の白玉は孱弱く見えても中々こぼれず、其四邊の暗いだけにいとゞ際立ッて靑か紫言ふ言はれぬ光りを射るのは、宛然月宮殿の碧瑠璃、山媛が忘れた首かざりか。

目に見える風物の見れば見る程面白いのも物思ひの身にはなまじひの感慨の種、あたりの景色に目も止まらず、思案に重る頭を下げ、途を拾ッて歩きながら、魂中有に迷ふ工合ひ、果は遂に思ひかねて苔だらけな岩角にどッかり腰を掛けたのは前に碓氷の五郎と話しをした旅僧でした。

そも／＼此旅僧の素生は何？　凡庸の雲水修行か？　それとも武士の忍び歩行きか？　忍び歩行きならば或は前に直義の手から追ひ出された大多和、寺西の中の一人か？　大多和と寺西兩人ながら追ひ出された儘生死は兎も角行方は知れず、而も再生の恩に感じてをさ／＼舊主の程を披露して歩くらしい境界、前後の擧動から推しても此旅の若法師は寺西らしく見えました。

が、何ぞ料らん全で反對、若法師は寺西で無し、かと

言ッて大多和でも無し、さうかと言ッて凡庸の雲水修行の身でも無し、是即ち國重頼の子、大塔宮の昵近でした。櫻狩りの時、大多和寺西二人の狼藉、重頼は蹴殺された、而も其時相伴ッて同じ處に居合はせた其息子が無念の切齒すさまじく當の相手に取ッて掛かり、力の足らぬに怨を呑んでやみ／＼相手を逃がして仕舞ッた、其時の男といふが即ちこゝの旅僧でした。

其時の事は思ふも言ふも渾べて涙、國の一家は殘酷な暗闇の中に封じ込められ、見るにつけ物事が切齒の種、宮からして勿體無い御言葉、崩折れな、仇はかへして得させうと承はるだけ、肝にしみ込む仁慈の程にいとゞ歎きの森も繁ッて、われと芟り下す斧も無し、家には三人、重頼の妻の樽式部、其子が二人で總領が即ち此法師で俗名は重道、次は女で名は飛鳥香（あすか）、兄は青年廿一歳、妹は妙齡十六歳の何れも唯是部居住みでした。人にも奬ませられ、人間一生に一度の烟を鳥部山の峯に眺めて、形のとほり喪に籠らうとした處へ仁慈優握な宮からの御言葉が有り、治世とは言はれぬ世に安閑としても居られず、身が許すから亡父の格式其儘に重道が繼ぎ、二七日の喪を了ッた上は昵近として仕へろとの御沙汰。謹しんで承はり、いよ／＼出仕した處で、嘗膽の思ひも切なだけ、人より立ち超えた精勤を宮も哀れに思し召され、末頼もしい若者と疎かには扱はれず、やがて日も過ぎ、月も重なり、四月五月と過ぐす内に世はいよ／＼油斷ならぬ姿と爲ッて宮もより／＼不虞の御用意、重道の器量可なりの大役を背負ッて立ッて腰はつぶれぬと認められて而も數有る昵近卅何人といふ中から撰み上げ、關東の形勢忍んで探ッてまゐれとの御命令。一期の大役と辭退しても御承知なく、見込んで命じたとの仰せを聞けば流石言ふに言はれぬ嬉しさ、歸する處は畏まッて、家に歸ッて之を語れば、其大役を喜ぶにつけ、無殘や婦人氣母も妹も笑顏の下から涙を見せて、くど／＼して武士の出陣でも送るやうな言葉。もとよりそれも無理で無し、一歩踏み出して旅草鞋を關山何里の泥に塗れ初めさせたが最期、生

か死か實以てあらかじめ知れず、血腥い世の中、厨で鯉を屠るより人間を殺すを物ともせぬ習ひとて、何處でどう曉られて刀の刄糞となるかも知れずと、未練ながら愛着の情、つまらぬ末を考へれば斷ちにくいは袖でした。

やうやくにして心を奬まし、母が氣を付ける言葉を守ッて名ばかりの菩提三昧緣の黑髮惜しげも無く情緣と共に剃り捨てれば一夜で見ちがへる青道心、いざと脫ぎかへらる墨染に其人の面影もつら／＼見れば氣の所爲か、半分は冥途に入ッて此世には半足だけ唯々とゞめて居るかの樣、うれしいやうな、悲しいやうな、情無いやうな、つらいやうな、而も死別れのやうな生別れに親子の六つの袖又も再度の雨を降らせて、行路難の味ひ愈したしく味ひました。恙も在さでと祝ひ合ッていよ／＼袂をわかつ上り端、瞬きする間の一刻に大丈夫一人十年づゝの命〆めての卅年の壽命を縮めて漸の事で振り切ッた、それも後に爲ッて思ひ知れば、虫が知らせたやうでした。

重道が門出して程も無く、振りかゝる災厄たちまち宮に掩ひ掛かッて憎ましくも宮は馬場どのに幽閉の御境界、昵近の卅人は謀反大逆の罪に中てられて首を駢べて屠られて——思ひ知れば重道ばかり勿怪の幸ひ、たゞただ旅に出た計りで其究厄を逃がれました。

實は鎌倉まで一先行ッてそれから引ッかへす重道の所存、美濃からして信濃を經、直に其儘上野に入らうとて笛吹峠に掛かッた處で忽ち例の五郎に逢ひ、始めて主君の事を聞いて是はと肝を潰しました。

鎌倉は武家の城、毒蟲の巢、此度の旅行の目ざす處は第一其處、京洛からして百里の雲水はる／＼と辿つて來て、今は忽ち凶聞に撲たれて、行かうか故郷が心配、歸らうか土産は無し、前に一步後に一步、進退こゝに谷まりました。

根無し事の風聞か、風聞か鶴唳かとはじめ心も附いた儘五郎にかにかくと問ひ正して遂に虛聞とは思はれず、思ひ迷へば胸も裂ける、鐵棍を以てきり／＼と肋骨を扱かれる鹽梅。怪しまれまいと思ふ儘に形ばかり立ち上が

ッて形計り足を移し、立ち迷ふ身を南に進めて終に動けず、腰の掛けよささうな岩を見れば、開いた口牡丹餅、もはや前後に人も無し、どッかりと身を落ち付けて、くりかへしては千思萬考。

が、決斷！　何れにしても焦眉の急。探りも何も時に因る。こゝに故郷のたよりを聞いて、もし實ならば一大事、轍鮒を枯魚の市に訪ふのも時過ぎては及ばぬ事。

猶（また）まださし出る未練、それを一心叱り懲らして、目を閉ぢてじッと故郷を思へば、嵩の知れぬ計りの苦勞。馬場殿へ御幽閉！　昵近の皆ごろし！　大事といふも愚かな大事、明けて見たよりはたしかな、是皆奸賊どもの策（はかりごと）に大方相場はきまッた物の、扨も何たる無殘の仕義、英明人に俊れられた主君の宮が毒に觸れて、無念を配所の月に訴へられる成り行きとは！　翼が有るなら翔りもしたし、何の疲れも――この一心！

一刻も早くと急けば昏れかゝる山路も厭はず、數へて見れば此日は霜月十九日、宵だけの闇、月もやがて出る物を、何の路に蹈み迷はう。高端折りして身も輕く、草鞋の紐をメめ直して立ち上がッた處へ吹きあたる山風も吾を勵ますかのやうに吼えて意氣は火のやうに昂ぶりました。誠心を握り詰めた手の裏、岩角に衝き鳴らす錫杖の音も冴えて、更ければ峯も月を吐く、朧ながら道も見えて、狂ひ立つ澗川（たにがは）に揉みほごす金砂の色も鮮かに、急ぎかへる身を勇ましく送るかの體。

夕暮れの頃一日の長途に稍もよほした疲れも今は何處へか影を潛めて、嶺の上に雲を馭す意氣込み、凡その處は蹈み超え、飛び越し、成るべくは道を直に索め、難所を避けて遠くをまはらず、やがて彼是して一呼吸に一里足らず、さすがに切れる呼吸に石を見付け、月影のよゝ照す處で休息しました。

山氣みり／＼と骨に應へて、仰いで見れば鋭い星影、數は稀ながらも寒さうな色、月は痩せていよ／＼白く、而も其面を手荒く擦ッて、擦り減らさうとする樣な雲の足搔きに、骨限り限も取れた姿。

思ひ出せば是から先は山又山、關山雲はるかに故郷を包んで、そも〳〵何時は歸れる事か？　十日？　いや、七日でも！　七日？　いや、五日でも！　ならう事ならば魔王を頼んで、それ三日にも、今すぐにも！　と思へば休むも氣が無し、全身が忽ち彈かれて膝を叩いて立上がる其途端、珍事！　何處とも無く人の足音！

粟粒の浪が首の邊から忽ち全身。立ちすくんで耳を澄ませばいよ〳〵たしかに人の足音、而も亦急ぐ足！　鵜目鷹の目、たまらず笠をかなぐり退け、音のする方に凝らした眸子にやがて映ッた人影は是亦旅の修行者でした。

忍びのものとは一目で知れる、夜陰にも似ず笠をかぶッて、而も此方に彳む人を見て凄ましく驚いた有り樣、忽ち姑らくは足を駐めて此方をしけ〳〵透かし見て、思ひ切ッてか進んで來ました。

凄味は加はる風の音。殺氣を孕む月の色。

二人ひとしく擦れ違ふ――擦れ違ふ瞬間が御互ひに鋭い睨み。幸にして冴えた月、不圖顏をあげて相手の修行者、おのれと笠の下から覗いて一目見て驚く重道、しッ！　と一聲。行き過ぎる修行者の跡、踵をかへして引きつゞいて、

「旅の御僧。」

けれど答へず、此方は急き立つ、――

「最期ぢや、おのれ、大多和三郎！」

肩をむんづり引ッ摑めば、身を捻ッて逃れぬ處と覺悟して、かッぷと計り俟ち手に唾、錫杖を取り直すと見る間も無く、前後たゞ一切無言、仕込みの業物二寸ばかり、引き拔いた咄嗟の瞬間、早拔き撃ちに曳也と一聲重道が先手に立ッて閃めかした怨みの一太刀、美事に笠を斫ッ發いて顳顬に深く切り込ば、魂消る絶叫たぢろく大多和、絶叫の一聲その尾につゞいて蹴し飛んでまだ落ち付かぬ錫杖の鞐がさや〳〵と草を擦り行く聲。

はや血戰！　彼も是も掛け聲だけ、言句も出ず、斫り裂かれた顳顬迸る血の黑潮雨を降らせて大方は目も眩んだ死物ぐるひ、縱橫に振りまはす仕込みの刀が、重道に

は是好運、無駄力の儘木の幹に喰ひ入ッたを天の助けと跟け入ッて、思ひ知れや父の仇と精一杯の咽喉の中、二度ばかり畳み掛けて刄先するどく拜み撃ち。

仕留めた嬉しさは言句の外、割り裂かれた疵の大口、そこから身體が二つに離れて、二度三度の最期の苦痛、鋭い眼で月を睨み、鮮血の粘液を手の中に爪の食ひ入る程握りつめてやうやくにして引き着ければ、もはや頭はぐたりと傷ッて垂れ下がる儘引き釣られて疵口もいとゞ大きく、膿んだ荔枝か柘榴の裂口、混々と噴く血の泉。

生まれてから人殺しは今が始めて、親の仇とは言ひながら仕留める迄は流石に心配。心配の記念は殘る呼吸の切れ方、仕留めて纔に胸を休め、輕く鳩尾のあたりを撫で擦ッて――それながら嬉しさに身も浮き上がる。人目を恐れる刄傷でも無し、まして山路の夜更といふに氣も落ち付く、獸ならば暴虎が鹿を摑みたふした姿、屍を其處へ擲げ出して自分は二三歩の此方に腰かけ、しばらくは身動きもせず、しけ〴〵と其屍を見詰める眼には千萬無量の思ひの色。陰晴は定まらぬ眼中、今目尻を切ッて睜ると思へば忽ち涙にかき暮れて、曇らぬ月の影も曇る、さし寄ッて見ても紛ふ方無い當の仇、おのれが〳〵本年の春、櫻狩りの歸さの途！　したゝか吾々に中てた土足はおのれやれ此骨か？　したゝか吾々罵ッた口はおのれやれ此穴か？　蹈み躙ればみりつく足ン骨、ゐぐれば縣碎げる齦杭齒。嗚呼有りがたい天の冥助、思はぬ處で出會して刄に血を塗ッた幸先好さ。此上の運命も此樣ならば頴もしと兩腕を取り扼ッてのにた〳〵笑ひ、見るも總毛立つ笑顔で月を睥睨し、一氣呼吸を吹いた處は魔も神も跡を潛めさうな體たらく、切めての甲斐と屍に立ち寄り、戒刀の鞘を拂ッて押し戴き、仇敵の上にのしかゝッて切尖當めてづぶりと一と突き、耳元から止めを刺し、一抉り抉ッて拔き出して刄を其儘死骸の着物で拭ひ、いざと立ち上がり掛けて一思案、――

「どんな曲事有るか知れぬ。」

刄は一先鞘に納め、探る屍の內懷中襟先の縫ひ合はせ

に綴ぢ込んだ手紙の手ざはり、すはと轟く胸を押し鎭め、縫ひ目をみり〳〵引ッ捌き、取り出して月に透かし見て礑と仰天、見覺えの有る宮の御手蹟！

何故か裂けて前後は無し、形ばかり殘る二三行にも御憤懣は顯然知れる、涙で磨ッた墨の跡、

「良忠之事以來時機徒過而痛憤無限也逆賊二子之頭骨設非至護良之目前護良之頭顱庶幾至渠目前」

紙の皺だらけな處で思へば何れ容易には得られなかッたらしい品、それにしろ此樣なものを懷中にして居る子細、おのれ、此奴も忍びの曲者。花見がへりの珍事から公然とも付かず祕密ともつかず直義は之に暇を與へて僣としたとは聞いたもの丶、扨は此類の魂膽いつそ人目を晦ます手段、今猶手足に役ッて居るか？

宮の御手書を押しいたゞき、しかと內懷中へ疊み込んでいよ〳〵風說の虛でも無い事を思へば心配は一時に混み上げました。隈無く死骸を搔き探り、其外には是ぞといふ照驗の無いのを見て斷念し、いざと立ち上がりかけたところで不圖心付けば早曉方。峯の後に棚り付く横雲は各金色の覆輪し天華が香を噴きさうな體。氣も急ぐ、笠を目深にして身を固め、足をあげて大多和の死骸をはたと計りに蹴た途端、無殘！　その蹴下した谷底で三五人の人の聲！

流石に驚として、叢生の草いちごを靜に分けて底の方、一目見てはッと計り、何者の群か道も無いはるかの下に松明の光りを三つ四つ晃めかして何事か罵る體。溪川の雷は吼え峯の松の嵐は嘯いで、人聲と聞くだけ言句は分からず、設しや落ちた死骸を見たかと苦勞は胸を銜きました。兎ても角ても永居は無用、苦勞を半分そこへ殘し、進むやうな進まぬやうな浮き足で一目散に北の方、間道に入ッた事とて處の名も知らぬ只ばしりに思ッたよりは早く來てやがて朝日が上ッた頃輕井澤の東の方、淺間山の裾へは出ました。

道ばたの藁屋を叩けば物馴れて呑み込んで温湯を酌んで出す賤女、今も昔も變はらぬ愛想、言ひ馴れた天氣の

世辭を言ふ下からしけ〴〵と重道の姿を眺め、「御坊は如何に！ 血に塗れて！」と思ひがけぬ大雷一つ。

如何さま脚半に血の滴り。肝を定めて、

「谷へ辷ッた時の疵。」

「すり剝きの傷で御ぢやるか？」

「岩角の。」

眞と思へば田舍氣質、何か得知れぬ藥を出して、「召せ」と勸められて些し困る。――

「さしたる疵でも無いに何の藥りを。」

早く歸らうと立ち上がッて報謝代りの一口念佛、

「御前！十念！」

手を合はさせて向ひ合ひ、蔭はさわぐ胸から十念一段、ほく〴〵と悅ぶ女に輕く禮して立ち去ッた後程も無くばら〴〵と同じ道を便ッて白屋を音信れた三五人、子供なら目も回す胴間聲、

「物を聞く」と權柄づけ。

のろ〴〵と立ち出る賤女を引き据ゑるやうに睨め付けて、

「先頃法師姿のものが此處で休んで北へ行ッた。有りの儘を打ち明かせ！」

姿は何れも小具足打扮、見るからが恐ろしい相手に齒の根も合はず血の付いて居た事までも包み匿さず譚れば、

「扨こそそれぢや」と異口同音。

聞いた計りで禮をも述べず、飛ぶやうにして跡を追へば兎角して四五町ばかりの一本道たやすく鳩に追ひすがッて熊鷹の羽襖。

「法師！ 逃がさぬ。」

身がまへする間も無く組み付かれて、憤怒に吼える呻きごえ、――

「こはそも出家を――無禮至極。」

「唔いたり惡魔外道。人ごろしした破戒無殘。」

多勢に無勢とても叶はず、折り重なッて組み布かれて、骨身に食ひ入る繩目の恥辱。身をふるはせて罵れば、冷

笑ッて、
「女々しいわッ！　知らぬか吾々は鎌倉方、四方へ散ッた探りのものぢや。惡いことは出來ぬものぢや、人を殺して投げ込めば下には吾々が行き逢ッて、見れば見覺えの有る吾等の知り人、而も昨日袂をわかち、新田領を通る事とて怪しまれぬため先に立ち、一人さしぬけて來たからに事の顚末隈も無い。見とめられたがそも〳〵最期、人ごろしも事によれ、吾等の味方を殺したからには最う早身動きとても爲せぬ。都からの忍びと見たがそも〳〵僻目か、驚ろくな！」
　もう斯う爲れば嚢の鼠、活けるも殺すも勝手次第、思へば好い土産を得たと口々にのゝしられて扨はと今更思ひ當る。言はれるとほり嚢の鼠、企望も無殘、終に空！　さり乍ら無分別、無駄に命を捨てるも口惜し、隙を得たらば逃げる決心。わるびれず、
「疑はるれば詮方なし、益無くは爭はぬ。さり乍ら方々は貧僧を斯う縛めて何う御爲やる御心か？」
知れた事をと言ふ顔で、「言んでも無い事、鎌倉へ？」
「倶して行かれてどう御しやる？　御殺しやるか、情無や。」
　思はず相手は吹き出して、「此奴が〳〵情無やと。人をすら殺すものが情無やとは何れの口？　都の忍びと見たからには問ひ正す事も多なるに誰かはやみ〳〵殺すべき。そこらには掛念無う、泣面見せでまゐらうぞ。吾等が君は無雙の仁君、いたづらに人の命を取るを喜びは爲たまはぬ。」
　例の披露がはじまれば、扨は噂に聞いたとほりといよ〳〵無念に業の煮えるを押しかくして萎れかへり、其儘に復物を言はぬに腹の中が些しも知れず、相手も頗る氣味は惡し、
「よう愼しんで行かば可し、ひしめき喚がば……」、鍔をたゝいて「是ぢやぞよ。」
　威せばじッと目を瞑ッて、口の裡で、「南無阿彌陀佛。」
「出家と言ふは殊勝よ喃。」

一人が無駄を言ひ出せば、下人の常とて口善悪なく此場合ひでも舌は研ぎたし、
「大塔の宮なんどは、されど爭でか稱名なんど。」
忽ちに思ひ付き「もう鎌倉へ送られたか？」
冴えかへッた耳は重道、胸は高浪、相手は深くも祕しかくさず、
「もう送られる日數よ喃。」
指を折ッて考へて、「今日か明日の中なるべい。」
縛められても堪りかね、重道は吾を忘れ、
「鎌倉へ？」と目を睜れば、
冷笑ッて、「知らぬ振りか！」と高笑ひ。
無殘や宮は送られるかと胸がつぶれて涙も出ず、同じ事なら鎌倉へ餘所ながら自分も勿怪の幸ひ差し送られて構はぬものゝ、繩目に在ッては何ともならず……
聞けば聞くだけ思へば思ふ程狂ひ立ち、昂ぶり騰がる血氣の炎々。縛しめで犯れぬ兩腕、瞑目の肚の中でぐッと摑んで、

「叱！ 御先途に立たうわい！」

（終）

史外史傳 平清盛

門閥を壞すとて出來る
一門を又第二の門閥と言ふ

一

秋やうやく王瓜の色にも老けた薄寒い夕まぐれ、京都室町今出川をふらふら來る男が有つた。

小作りな柄である。年頃は三十から三十四五までと見られる見當、而もからからまでと云ふ丈の範圍にしか何樣な人相見でも確とは言ひ得ないやうな柄で、三十頃かと思へば三十頃らしく、三十二三位かと思へば三十二三位らしく、更に競り上げて三十四五邊かと思へば三十四五邊にも見えるといふ、若し夫れ年齡で評價入札でもするものならば、僕を更へても果の無さゝうな樣子である。是が此儘で老體となッたらば、いはゆる童顏鶴髮の仙骨とでもなつて、曆改まッても年を知らずといふ、即ち不老不死的の性質となる類か。兎に角普通とは是だけの點でも一寸違ふ。

而も美男子である。

丹鳳の眼、臥蠶の眉、此語はひとり關羽の容貌にのみ許すべきではない。此人にも許すべきである。頰肥えて顎の邊までむッくりして顏全體の色光澤は潤むばかり艶々しい。あはれ是だけの木地が有ッて、相應の服裝でもさせたならば、隨分命婦や典侍の輩に人知れぬ思ひの種とも爲るであらうかと、餘所目にさへ思ひ做される其人の、その服裝はと言ふと何うであらう。

布直垂とは恐れ入ッた。

それも新らしいのならば未しもである、染め色の朽葉が更に〱月日に色を奪はれて、朽ちあへずに褪め葉となる。糊も落ちて仕舞ッたおのづからの「萎え裝束」で、

正に恰かも葱の枯れッ葉を綴ぢ合はせたかとさへ怪しまれる。

是が清盛その人である。

彼は三十一二歳の壯年の時は此の如き服裝で市中をとぼ〳〵歩いて居た。後の西八條殿や六波羅殿は三十一二歳の淸盛からは拜んでも目が潰れさうな懸絕した身分なのである。後に西八條殿や六波羅殿は飛ぶ鳥を落とし日を煽いだ。三十一二歳の布直垂は京都市中を喪家の狗で歩いて居た。

「あゝ寒い」と身震ひして、肩を抗げて頸を縮め、ぴゆッと口笛のやうな音をさせて、それなり笛を聯想した。

「笛の美い音も久しく聞かぬよ。蘭陵王も舞へぬかな。是からまた中御門殿へ參る事は參ッても、面白くもないお談義を聞くのぢやろ。足も流石進まぬわ。されど參らずにも居られぬ。斯うなると、一人でなうても、同行でも欲しいがな。」

足の進まぬやうな所へゆゑ、同行が欲しい抔とは仇氣無い所が有る。仇氣無い所が有る其人だけに、また其不好な所へも行かうとする其足取りまでが一尺廣がるのが五寸になる。よぢり〳〵と只歩く。

見ると路傍に法師が居た。

おやと見る、はッと驚く。

淸盛は馳せ寄ッた、馳せ寄ッて一寸禮して更に二歩ばかり退いて、恭々しく敬禮した。

「これは〳〵大阿闍梨で在されたか。さりとては遠目に早くそれとお見受け申しもせず、お傍近くへ意外な無禮何とぞお宥し願ひたい。」

「はてな。然ういふ和殿は？」と阿闍梨は淸盛をぢッと見て、「はてな、見た樣な記臆も有る。何所の殿でござッたか。」

「さればお記臆などゝ勿體無い。是は伊勢の嫡男で。」

「ふむ、伊勢殿の御嫡男？　思ひ出した。おゝそれそれ中御門殿の御許でいつぞや一二度和殿をお見受け申したわい。」

「恐れ入ります」と頭を低げる。

伊勢殿といふのは伊勢平氏の忠盛殿の略語で、即ち清盛から然う名乘られて、阿闍梨にもやう／＼思ひ出したのである。阿闍梨はと言へば是は乞食姿こそ爲て居るものゝ、大納言藤原家からの出身で、そのまゝを大納言阿闍梨祐眞と名乘る卓絶した眞言師なのである。

「大阿闍梨には」と清盛は慇懃に、「何れへお渡りで在される？　沙彌をさへ召し連れられず、而も此肌寒い夕間暮れを……」

「ふうむ」と阿闍梨はまづ笑ッた。「伊勢の小殿がお若いぞ／＼。そのやうな事問ふのは長者たる愚僧の役ぢや。長者たる愚僧から伊勢の小殿は何所へ行くぞと問はれた後、然る上更に和殿から愚僧に問ひ尋ねるべきものぢや。」

清盛は語が塞がる。

「伊勢の小殿は何所へ行く？」と阿闍梨は開き直ッて聞く。

今更機先をば制されたが、清盛も何と爲べくもない。是非無さゝうな苦笑ひで、

「中御門殿へでござる。」

「ふむ、又合力を頼みにか？」と高飛車に極め付ける。

清盛又も語が塞がる。

「違ふまい？」

「はッ、はい。」

「養由基の柳葉ぢやろ。」

「はッ、はい／＼。」

何を言ッても神妙に只下を向く清盛を流石可憐にも思ふ。

「どうしたのぢやな、伊勢の小殿！　あまり大人し過ぎるぞよ。世渡りがそれで出來るかな。勿論松の下陰に蒲公英も咲く世の中ぢや。蒲公英で一生暮らす氣なら、松を氣取らぬのも可いか知れぬが――知れぬが――知れぬが――知れぬがな。」と甚だ意味有りげに言ふのである。

清盛は感じ易い。胸が疼く氣持ちである。

「中御門殿へ参るなら、愚僧も同行いたさうよ。はルれ同行欲しさうな顔つきぢや。はて何故ぢやろ。分かッた、今言ふた通り何か合力の筋が有ッてゝぢやな。何事も他生の縁ぢや。まして和殿と愚僧とは知らぬ間柄でもないものを、さらば一所に参らうわ。愚僧は老體、手を曳いてな。」

「はッ」とます／＼畏まる。

手を曳いてやるのにさへまづ一禮からして掛かる。或ひは王以上の權力有る阿闍梨、而も藤原家の出たる其人、その殆ど人間以上の光りの有る人に會ッては、桓武天皇の後胤も清和天皇の後胤も有ッたものでない。靴の紐結べとなら敢て結ぶ。差し出される阿闍梨の手を、否、お手を謹しんで執り奉ッて、天晴な三十男が按摩の手引きのやうな境遇で、氣の利かぬこと夥しい。

「伊勢の小殿はお幾歳かな？　もう然るべき男ぢやな」と歩きながら阿闍梨は聞く。

しがない身の上に取ッて見ると、年齢を問はれてさへ肩身の窄まる思ひもする。ましてや例の通り感じ易い清盛その人である。舌も硬ばる思ひである。

「はい」とばかりで下を向く。

「はいとはな？　お幾何ぢや？」

「いや、何うも／＼年齢は幾歳と仰せられると、眞にお恥かしい次第で……」

「ふむ、何故ぢや？」

「年齢をのみ取り申して、立身も出世も出來ず、いつ迄も／＼御覽の如き此姿で……」

「なぜ立身出世遊ばさぬ？」

なぜとは無情な事を云ふ。三十を越さうが四十を越さうが、容易には立身出世する事の叶はぬ障壁の有る世であると言ふ事を、そも／＼阿闍梨は知らぬのか！

「是は爲たり、默り召さる。これさ、伊勢の小殿と言へば伊勢の小殿、さりとは和殿も無口過ぎる。なぜ立身出世遊ばさぬ？　見受けたところ、もう三十をお越しぢやろ？　三十をお越しならば、もう人間の壽命の半分を

通り過ぎたのではござらぬか。朝と思ふ間に晝は來る、と、思ふ間に夜は來る。人間として此世に生まれて、それ、其樣な萎え裝束の垢直垂で、それで桓武天皇の後胤とは餘りと言へば腑甲斐無い。なぜ立身出世遊ばさぬよ」と、喝するが如き語氣である。

涙のうるむ心持ちで、淸盛舌は猶吊ッた。敢て言ひ譯したくもない。ないが、しかし、斯くまで扱いて言はれて見ると、些しは返答も酬いたい。

「立身出世も爲たうはござる。さりながら路といふものが塞がッて居り申す。」

「何ぢや。路が塞がッたとな？」

「路が塞がッて居り申す。」

「ふむ、路が何うして塞がッてな？　なるほど、解せた。雲居に登るべき路は藤原家の藤蔓で塞がッたと言ふのかな。」

それである。しかし、然う言ふ其阿闍梨は藤原氏の人でもある。

又も淸盛返事に困る。

「やはり和殿も俗人ぢやな。愚僧が藤原家ぢやと言ふので前後しきりに顧慮するか。さりとては男らしくもない。藤原の蔓から出た身でも、斯く世捨て人と爲ッた上は、愚僧は虛空の一浮塵ぢや。雲に生まれて雲に終る、一期悠々たる淨身ぢや。藤原でもなし、橘でもなし、佛菩薩の一弟子ぢや。何を愚僧に遠慮する。されば、重ねて又愚僧は言ふがな、藤蔓が路塞いだと見たならば、なぜ其藤蔓を切り開かうとの心の利劍を和殿は磨がぬ？」

淸盛ぞッと寒氣がした。

阿闍梨は續けて「水久しくなれば濁りが來る。藤蔓もはびこれば妖怪の棲み所になる。時々は利劍を揮ッて刈り込むのが情ぢやわ。和殿知らぬか、一念で何でも出來る。和殿々々、又知らぬか、心頭を滅却すれば火もおのづから涼しといふ文句を。」

淸盛の眼には光りが有る。

光りの有るその眼の樣子を橫さまに阿闍梨は差し覗い

て、

「面白い。さらば、中御門殿の持佛堂でまた話して聞かせうわ。」

二　表から見へる愼重を　裏から見ての不決斷と言ふ

實は清盛冗談や慰みに中御門殿へと志して來たのではない。腹の中を割ッて言へば洗ふが如き赤貧極はまる今日此頃の己れ清盛の身の上を隱さず中御門殿へ訴へて多少の肝煎りに預からうとの底意なのであッた。

ところを阿闍梨に捉まッた。

と言ふもの丶考へて見ると、その初めは此方から阿闍梨へ言葉を掛けたのである。言葉も言葉、むしろお世辭を好くし過ぎた程の追從の言葉を阿闍梨へ此方から掛けた、その時の內心には、例の通りの落魄した現在の己れが何をでも榮進立身の手蔓に爲やうとばかりの一念が只充ち/\て居たのである。捉まらうとは思はなかッた。

しかし、捉まッた以上、何うも爲らぬ。何、それは強く言ひ切れば何うでも爲る。が、若しや又との未練も有る。假令路傍の捨て石でも何樣な役に立つかと思ふ。假令街上の泥草鞋でも何樣な藥になるかと思ふ。ましてや路傍のその阿闍梨は捨て石や泥草鞋どころか、石ならば顯榮の玉の缺片、草鞋ならば錦で編んだ果である。

邪魔になるやうでもある。又邪魔にならぬやうでもある。ぐづ/\に手をお執り申して共に行く——行く共身は阿闍梨を案內するのが、同時に阿闍梨に案內されるのでもある。人間としての、男一人の貫目といふものは抑も何所にある事やら。

そして中御門殿の邸へ着いた。

素より阿闍梨は取り次ぎをも要せぬ。つッと正面から立ち入る。入りながら清盛を顧みた。

「やッ御苦勞ぢやッた。禮申す。愚僧は俗の身でもない故、此所の殿も御承知ぢや、直持佛堂へ打ち通る。程の好い頃を見て、和殿を招く心算ぢや。」

と言はれた只それ丈では清盛も腑には落ちぬ。

「持佛堂へ、然樣ならば、某をお招き下さるとな？すると夫迄某は？」

「子供のやうな事を聞く人ぢやな。持佛堂へ招かれる夫迄は石であらうとも瓦であらうとも、其邊に轉びて居さつしやい。そのやうな不決斷で戰爭の時は何とする？元來和殿は不決斷ぢや。それからしてまづ直さなければ得道は難かしい」と、一句に重い教訓が有る。

はツと思ツて叉頭を低げて、やがてやうやく擡げる頃は阿闍梨の影は最う見えぬ。

影見えぬと言ふ只それ丈で、今而も言はれた一言が胸の中に躍り立つ。

「不決斷と言はれたぞ」と焦燥るが如く呟いた。「やれ不決斷と言はれたぞ。不決斷か知ら、此清盛は。何の何の、何所が何として不決斷なのぢやろ。物事の度毎に用意を周密にする丈ぢや。豫ねてから匹夫の勇をば忌み嫌ふ。冒險の無法をば避けるとする。されば、それ故不決斷と言はれたのぢや。可し、やがては法話も有るぢやらう。その席で思ふさま阿闍梨と辯論して見やうわい。はてな、然うするのは若氣の至りかな。謹しんで節を屈して、扣へ目にして置くのが、やはり可からうかな。」

と、迷ふ、それからしてが先不決斷なので、あると、本人は悟りもせぬ。

而も阿闍梨に打ち捨てられたまゝ、身は依然、入り口の外に立ツて居る。

勿論阿闍梨のお伴をして來た自分清盛ではないのである。而も同道の阿闍梨だけは先へ入ツて仕舞つて、己れ清盛のみ只一人が其後に取り遺されて仕舞ツたといふのが何うでもお伴といふやうな格である。叉而も而も、然うお伴といふやう者に爲ツた所で、偖やはり阿闍梨に一針打たれた通り、不決斷で何やら斯やら迷ツて居る。

橫の戸がすツと開く。

柿色の布直垂の若侍が清盛の前に現れた。見ると勿論知ツた顔、中御門家の家人である。

「伊勢の小殿」と清盛を呼び掛けて「阿闍梨がお待ちでござるがな。」

ござるがなとは些嚴しい。既に詰責の意味が有る。清盛は多少狼狽した。

「阿闍梨が某をお待ちとな？　さらば持佛堂でお待ちとな？　某にも來いと仰やるとな？」

「早言に妙な伊勢の小殿で在はすよな」と柿直垂は吹き出した。「それ程承知でありながら、なぜ只立ッて在すのかな？」

「つひ決着せんのでな。」

不決着を白狀して、みづから何の氣も附かぬ。若侍も相手に爲らぬ。

「早々共方へお渡りあれ。」

「畏ッた〳〵。いや、まことに承知した。さりながら此方の殿にまづ以てお目に掛からずして、御持佛堂へと通る段、惡しからず思し召さるゝ様和殿からも宜しくな。」

「仰せには及ばぬこと。心得てござるとも」と言ひ切ッたまゝ退り去る。

清盛いそ〳〵まご〳〵した。勿論邸內の勝手は知る。庭傳ひに外から回ッて、やがて持佛堂へと行けば、平床に早既に圓座を敷いて阿闍梨は胡坐かいて居た。

「伊勢の小殿は又しても大分迷ッて手間取られたな。可し、只今は愚僧が殊に〳〵和殿のために此お持佛堂を拜借した。膝突き合はして物語らう。大體は承知しても居るが、伊勢の小殿は此お邸と如何ほどの關係がござるのかな、まづ夫を伺ひたい。」

「されば關係と申すと、はなはだ深うござるのぢや。お尋ねとあらばお答へ申す。願はくは阿闍梨からその箇條お授け願ひたい。」

「なるほど、是は如何にもな。承知した。父御伊勢の大殿(忠盛)と此中御門殿とは格別の御入魂なのでござるのか。」

「御入魂と申しては甚だ恐れ入るのでござる。事毎に此殿から父忠盛はお世話をのみ蒙り申して。御承知の如

き伊勢平氏の見すぼらしい體裁、父の如きも系圖こそ桓武天皇から受け申す。殿上に於いての有様は是また御承知の體でござる。而も武辨に傾いた家柄とて、清盛の如きも家に在ッては中々文事に染まり得ず、卽ち讀み書きの事をも習ふためとてまづ幼少の頃から父からの願ひに由ッて、此お邸に局住みと爲り申して、字も讀み得るやうに爲り申した。」

「思ひ當たる〳〵。まだ稚兒立ちの頃和殿が此お邸に居られたのを此祐眞も覺えてぢや。而もまた然う思へば思ふほど、和殿のお顏立ちが彼のお方に生き寫しなのぢやもの。」

彼のお方とは誰であらう。而も意味有りげな言葉である。又而も其言葉附きは何うでも聽く方を促がして、反問を要求させるやうな、底深い樣子である。

清盛は顏を赧らめた。

赧らめて、そして俯向いた。

「な、な、彼のお方に其儘ぢや。」

「……………………」

「人種まことに爭へぬ。」

「……………………」

「己れの事は己れが知る。和殿も定めて知つてござろ? はてな、面妖な！ 何とも言はぬ。これ、何とか言はれぬか、御承知無くはござるまい。」

つと顏から差し寄せて、清盛を覗き込み、溜め息一つ強く吹く。

「御承知無くはござるまい。御承知無くはござるまいとは和殿の樣子で愚僧とても見て取ッた。不運なるお生まれ立ち、天晴萬乘の君のお胤を受けて、お腹がお腹、綺羅びやかには世に立ち得ず、伊勢の殿の嫡子といふ丈の御身分で斯うしてお出で遊ばすもの。さ、さ、是までに愚僧が申した上は、お包み隠しもござるまい。萬乘の君のお胤といふ事そも〳〵御承知なら御承知とまづ打ち明かし下されたい。その上で愚僧がまたお話し申す所存も有る。さ、さ、本心を仰やッてな。」

如何にも他事無い樣子である。眞心で言ふらしい。但し、若しまた眞心でないものならば、淸盛たる己れの身は一大事の探りに遇ッて、或ひは命が無いか知れぬ。

本心を何う言はう。

何の事、本心ならば何う言はうも斯う言はうも無い。明白に打ち明かす。而も其明白に打ち明すと言ふのが安からぬ大事なのでもある。

愼重か、それとも例の通りの不決斷か、いよ／＼淸盛當惑した。

「尤もぢや、察し申す」と案外阿闍梨は捌けて居る。「突然の大難問、お答へも苦しかろ。さりながら緇衣の徒の我等には包み隱されるのは御無用ぢや。察するに、和殿からして和殿がまづ御身の眞の御素生が判つたやうでもござらうし、又判つたやうでなくもござらうの。されば／＼確と／＼聞き召されよ。祇園女御のお腹から勿論和殿は生まれられたが、さりながらお胤に宿つたお胤と申すは畏くも彼の帝の……」と卒然として語を切ッて一つか二つ低頭して、「白河の天皇が實は和殿の父君ぢや。祇園女御が如何にして、今の和殿の現の父上の御息所と爲られたかは今愚僧などが申さずとも公然やがて何時の程にか和殿も御承知遊ばすわ――また御承知遊ばしてでもござらうか。兎も角も和殿といふ人臣の淸盛殿は一天萬乘の落胤と、是だけは爭へぬと愚僧が此所で誓言する。下豐なるお顏立ち、紅味うるはしい色白のお顏色、そも／＼白河の帝にその儘ぢや。されば／＼然程の御身、天か運か何たる不幸か、人臣に落ち下ッて、樣も有らうに薄汚れた其布直垂、さりとては淺ましい。如何に、どうする御心ぢや？」と末の一句に重味が有る。

天皇のお胤だ位の事は淸盛己れも聞いては居た。思ひ當たる節々も勿論また無くも無い。而も今旣に人臣の身と成り下がッて、何う出來る術がある？

「どうする心と仰やるのは？」と珍らしく眼に異光を含んで阿闍梨を屹と仰視した。

三

平凡の別名を圓滿と言ひ
非凡の別名を狂顛と言ふ

「されば何うする心ぢやと愚僧が和殿に問ふのはな」と阿闍梨は凄い顏である。「それ程の御身分たる御身が御身すら口に出して言はれるほどの貧極はまる境遇に在ッて、斯くの如き肌寒の木枯らしの前にさへ古ぼけた其樣な布直垂でうろ／＼と彷徨ふこと、馬鹿か利口か分からぬわ。人臣と爲ッた以上、帝王にこそ爲りも得まい。一天の權を手に握る、其所までには行かれぬか？」

差し俯向いてやゝ姑らく清盛は唇を嚙んで居た。

「申すとなれば口幅廣く、申さぬとなれば腑甲斐無し、清盛當惑してござる。」

「當惑するとは？」

「何れを何んと言ふべきかと……」

「それ、又しても不決斷！」と阿闍梨は烈しく一喝した。「不決斷、不決斷！　どうしても和殿は不決斷な男ぢやわい。前裁に下りる小鳥より猶まだ／＼不決斷ぢやぞい。愚僧は何を今爲てぞ！　竹割ッて捌けた話しをするではないか。此舌の鉈一擊ち、節から掛けてさッくりと割ッて、腹の中の空をも見せて、されば何うぢやと聞くのでござる。なぜ返答に迷はれる？」

此位に奬ましたらば、如何な事でも些しは激して、捗々しい返辭位は爲るであらうかと阿闍梨も高を見積もッたのが、偖も／＼また案外猶まだ外れて居たのである。

「敢て理窟を申すまい。さりながら本心は何所までも本心なのでござるわい。清盛平家の嫡流に生まれて桓武天皇の御末を汚して、譬へば今仰せられる白河の天皇の御胤でないとしても、何時までも腑甲斐無く、此薄汚れた泥直垂を比叡颪に吹かせる氣はござらぬ。しかし、何事にも時がござる。慌てゝ事が成るものならば、蟷螂も蜈蚣の眞似して、駈け出すか知れ申さぬ……」

「ぷッ」と阿闍梨は吹き出した。

「是は／＼馬鹿に出來ぬ。禪味の有る事言はれるの。

何さま慌てゝ事が成るものならば、蛞蝓も蜈蚣の眞似するか。好い事を仰やるわ。さらば、今和殿は蛞蝓か？」

「まづ御意の通りでござる。」

「すると後には？」

「蜈蚣には爲り申さぬ。」

「蜈蚣に爲らぬ？　いやさ、何日までも蛞蝓か？」

「さればでござる。蛞蝓に生まれ付いた以上、蜈蚣に爲らうとは思ひ申さぬ。いつ迄も蛞蝓は蛞蝓だけで居て、その代はり只肥え太るやうにとする。粘り着いたら放れぬとする。觸ッたら痕を附け遺して與るとする。必らずしも他の毒には爲り申さぬが、それで粘液に人を避易させる。縋り附いたが卒や最期、行き至らうと思ひ込んだが最期、凌霄花の蔓の限りは星までも天までも行き至る心でござる」と些しも急き込む樣子は無い。

「ふうむ、よく／＼考へて居られるの。お言葉の樣子に由ッて考へても、今然う口の儘に言はれるお言葉ではなくて、前以て深く／＼考へ貯へて居て、そこで言ひ出されたお言葉ぢやな」と是も鋭い言葉である。

清盛胸はどきりとした。

「但し、創業の間だけは何さま堅忍を腹に畳んで、蛞蝓も可いか知れぬが、蛞蝓だけで間に合はぬ事も有るだらうが。ゆるやかに己れを守ッてゆるやかに己れを進めると言ふ丈ならば、蛞蝓でも宜しかろ。急劇な手際と言ふては蛞蝓には出來まいが。」

「その時は蜈蚣に爲り申す。」

「蜈蚣に何うして變はれるか。」

「變はり申さぬ。」

「變はらいで何として？」

「蛞蝓は依然たる蛞蝓で蜈蚣の脊中へ乘り申す。」

「何ぢやとな？」

「三上山を卷く蜈蚣ならば蛞蝓も大きく爲る……」

「うむ、それで？」

「その蜈蚣をわが馬として蛞蝓は蜈蚣の上に乘る。されば粘り着く事も出來る。走せまはる事も出來る。粘ッ

てそして早からば、天下無敵でござらうが。」

悟り抜いた言葉である。さりながら其語氣はと言へば、その些し前の落ち着いて居たのとは反對に、段々急き込んで來ても居る。風に由ツて雨を占ひ、呼吸に由ツて腹を占ふといふ阿闍梨その人の主義である。語氣の然う迫ツて來たのを聞き逃がすやうな人でない。

「待て！」と漸く一喝した。「べら〳〵とよく饒舌る。和殿の本質を而も而もよく饒舌り示したよの。負け惜しみの強い性質といふ事をよく饒舌り示したよの。なるほど蛞蝓の考へは面白い。蜈蚣の脊中に乘らうといふのは負け惜しみの口から出任せの、卑怯な言ひ草に過ぎぬわやい。卑怯な言ひ草と分かツたか。但しまだ〳〵爭ふか？」

又も此語は肝に浸みた。只默る。

「それ見よ、確かな所が無い。人前を欺く丈の口だけは持ツて居て、まだ夫だけの腹は無い。さりとて蛞蝓の覺悟は可い。强ちに疎むにも及ばぬ。只、しかし、和殿のやうな、第一が口の達者な人、第二が負け惜しみの强い人、第三が動かされ易い人、第四が一途に凝りたがる人、凡そ是だけの失の有る人に取ツても、何よりも斯よりも肝を据ゑ腹を固めるといふ事、この修行が第一ぢや。口の達者なと言ふ事、非を理に言ひ曲げる罪は犯すが、舌一枚で隨分々々人を懾伏し得られもする。負け惜しみの强いと言ふ事、他の諫めを肯かぬ失は有るが、隨分々々意地で通して難關を脫けもする。動かされ易いと言ふ事、是が兎に角大難ぢや。宜しいか、つら〳〵觀相するところ、和殿は脂肪が多くて血が多い。身長もそれ故高く伸びず、中肉に頗る肥えた。髮の毛も柔らかに、或いは縮れる氣味も有る、これ動かされ易い人の證據ぢや。動かされ易い故、隨分淚にも鎔ける。動かされ易い故、隨分怒氣に役はれる。是が和殿の大難ぢや。その代はり又それ丈の大難の有る埋め合はせには、常人の出來ぬといふ破天荒がよく出來る、また其破天荒を爲したがる。猛烈に突き進まば攝關以上の人物で、なまじひに悟りめ

かして萎縮すれば衛士か雜色ぐらゐが關ぢや。何うぢや、心に領かれるか。否と言ふべき所がござるか。愚僧の此目を凡眼ぞと說破する所がござるか。答へられるならば答へなさい」と一語々々と刻み込む。

思ひ當たる所が有る。

否、悉く一から十までが思ひ當たる節のみである。天眼通とは此聖か。仰ぎ見るさへ只眩しい。胸騷ぐ、湧き返る。而も其所に何と無く、只口で言ふに言はれぬ嬉しい〳〵氣持ちが有る。

淸盛は手を支へた。我は知らぬが一滴ほろり、淚が床へ滴ッた。

「忝い御說教、一切肝に銘じてござる。然樣ならば又申すが、淸盛は何ういふものか、二六時中の何物でも何事でもが一切氣になるやうでござる。階前の葉が戰ぐ。その葉が時には羅刹に見える。襖障子に破れ目が有る。その孔が時には惡鬼に見える。方位も氣になる、日も氣になる、甚しく氣になる時には枕して寢るその枕の音までが魔王の響きに聞こえ申す。」

「狂人の支度ぢやよ。」

「狂人のッ？」

「驚くか。當然ぢや。狂人と言はれるのは仕合はせぢや――仕合はせぢやと合點めされ。非凡といふのは旣に狂ぢや。前人の轍を踏みたがらず、何事かを新たに拵へやう〳〵とばかりで一生を悶えるのが卑しめて言ッての狂人、褒めて言ッての非凡でござる。大威德の法御存知か。」

「五大明王のでござるか。」

「然うでござる。」

「さらば些しは存知申す。」

「和殿には何うでも彼ぢや。彼で信心遊ばされい。宜しいか、磐石不動を目的として、猛火を絕やさず、利劍を捨てず、縛の繩をも常に具へて、八方を睥睨する氣で、一天下を呑み召され。さすれば和殿の生まれ附きの、その動かされ易い心も堅くなる、大業も成就する。」

聞いて一々愉快でならぬ。わが思ふ豫ねての坪へ全で篏ッた言葉である。忝い。仇には聞かぬ。さらば進んで猶問ひたい。

「さすれば其修行には如何やうな事が宜しいか、迚もの事に夫をも一つ…………」

「と、來なければ爲らぬ順ぢや」と阿闍梨は肩を搖がせた。「その修行が第一ぢや。但し和殿に出來るか何うか………」

「口幅廣いか存知ませぬが………」

「慌て召さるな。大精進ぢや。」

「大精進とな？」

「さればくく大精進ぢや。少なくも是れから五七年間、大精進が通せるか。さればよ、和殿は血が多い。女人禁制は迚も出來ぬ。是は愚僧の名言ぢやろ。」

清盛、しかし、笑ひもせぬ。

「和殿のやうな血の多い人は女人禁制が大毒ぢや。」

清盛さすがぎよッとする。

「和殿のやうな血の多い人は思ふ樣女人近づけるのが熱冷ましで極妙ぢや。」

清盛の眼は爛となる。

「それから又和殿のやうな血の多い人は香氣の强い物を好む。葷酒必らず好物ぢやろ。鼻血の出るまで聞こし召せ。」

清盛胴から震へが來る。

息が迫つて耳が鳴る。玩ばれたやうにも思はれる。また訓へられたやうにも思はれる。而も阿闍梨とも言はれる人の口からとは何うしても何うしても出し得さうにも思はれぬ。凡ならぬ言葉である。

目瞬もせず清盛は心さながら醉へるが如く嚴重に阿闍梨を凝視した。

四

思つた程の陰を貸さぬを
笠宿りの木陰と言ふ

凝視する其清盛を阿闍梨は冷笑するらしい。

「あッはゝ、何を見詰めるぞ。愚僧のやうな入道が辨財天にも見えまいが。見詰めると言ふからには解せぬ所がござるのか。」
ござるのか所の事かいと清盛は又も急く。
「解せて解せぬのでござる。大精進といふお口の下から思ふさま女犯を爲よ、思ふさま葷酒を執れと、斯う仰せではござらぬか。されば解せぬと申すのぢや。」
「なぜ解せぬ。總じて人間は愚なものぢや。迷ッて見なければ悟らぬわ。火傷してこそ火は熱いものぢやと知る。女犯を飽くまで爲し遂げて、臭穢を思ふさま味はふので、女犯の淺ましいのをも知る。葷酒とてもその通りぢや。今只血の多い、而も血氣の盛なる和殿に向かッて女犯するな葷酒を執るなと杓子定規に言ふたとて、其訓戒が何に爲る。睡らぬ人は覺めはせぬ。迷はぬ人は悟りはせぬ。覺後禪とは、それ其所ぢや。」
「さらば睡ッた事が無くて、初めから覺めたなら、上乘でござらうが……」
「斷じて女犯を禁ずるか。」
「出來難い事だけ猶更々々禁制し得るのを樂しんで。」
「樂しんでとは天晴れぢやな。葷酒も然うでござるかな。」
「勿論でござるとも。」
「必らずぢやな。」
「どのやうな誓ひでも……」
「あッはゝゝ、誓ひか、そんな事！　誓ひなど何になる。」
「誓ひは無用と仰やるか。」
「凡心をもすこし〳〵退治するやう致されよ。總じて誓ひといふ事は詐りの外被ぢやわ。」
些しは清盛苦笑する。
「さらば己れに只己れが祕かに誓ふ事として……」
「それぢや〳〵、其所だけぢや。兎も角も愚僧はな、和殿に深く望みを掛ける。それ丈和殿の疵をも言ふた。愚僧も今は塵外の身ぢや。さりながら心は婆娑を離れぬ

よ。身は而も藤原出ぢや。その藤原の專横を滅ぼしたくて耐らぬわ。身は而も佛門ぢや。その佛徒の專横を滅ぼしたくて耐らぬは。九鼎も藤蔓に縛られた。王法も佛法に囚はれた。藤原家の外たる和殿、桑門の外たる和殿が其所を如何とも料理すべき大任を持たれうがな。可し法話は充分ぢや。二度言ふは愚の沙汰ぢや。是からは默想されよ。默想の閉ぢた目の中に鬼神が必ず現れて、何事か教へるわ。只暫し婦人を遠ざけて只々葷酒を近づけず、續く限りの是から數年を自我の所信で貫かれよ。宜しいか、さらば可し、愚僧は此儘立ち歸るわ。」

　ひたと驚く。

「あッ、もし阿闍梨！　御歸りとな？」

「歸る。」

「中御門の此殿には？」

「今日は逢はずとも宜しわ。和殿から宜しく言へ。」

　すはや一も二も在りは爲ぬ。度外れの非常識、そも〳〵是が常人ならば狂氣の沙汰としか思へぬ。何のために餘所の人の中御門殿の持佛堂へ勝手次第に人を容れたか、それさへ殆ど解し得られぬ。

　勿論清盛分別出來ぬ。引き留めもしたい。留めもならぬ。殘り惜しいやうな所も有る。氣になるやうな所も有る。どうして可いか狼狽る。

　慌てゝ法衣の袖に手を。

「委細は畏ッてござる。お引きとゞめも致すまい。さりながら只一つ承りたい事が猶一つ………」

「又しても不決斷！　何でござるの。」

「此上ながら、また御教訓も仰ぎたし、若し然ういふ事の場合ひには甚だ無禮の至りながら御幽棲をも騷がしたく、何處の庵へ御尋ね申して宜しいか………」

「あいや！」と半で押し潰して、「又しても俗臭い。教訓は一度を限る。二度をと言ふ愚物には重ねて口利く用は無い。」

　又も呆れて「さりながら〳〵、とてもかくても凡夫の身、又迷ふ事も有るか知れず、其時は又伺ッて………」

「戯けた事を言はれるぞ。又迷ふかもとは何事ぢや。釋迦如來入滅後、二度も三度も口利くか。」

なるほど、返す言葉は無い。

さりながら〳〵、何所までもまだ「さりながら」が頭の中でもや〳〵する。

「さり乍ら萬一もと末の末までを思ふ儘、又或ひは御示教をと……」

「諄いわ。もう〳〵廢止に爲され。いやさ、是から其事で同じ繰り返しに來られても、愚僧は斷じて受け附けぬ。」

とばかりで鋭い舌打ち一つ。身は早堂の外へと出る。

清盛はまた茫然。

何うにも斯うにも仕樣が無い。考へて見ると已ればかりが何時までも早其儘で堂に居られるものでもない。

「何から何まで皆妙ぢや」と獨言に呟いた。

「物語るにも間は拔けるが、さりとて默ッても居られぬ。兎に角も中御門殿へ宜しく詫びも言はねば爲らぬ。面妖な！　夢を見るやうぢや。變な阿闍梨も有るものぢやな。」

やゝ立ち上がる折も折、「伊勢の小殿はまだ居るかな」と、おや、中御門殿の聲がして、何さま主人の中御門殿が、つと堂へと入ッて來た。

「何うぢや、何が何うしたのぢや。今見れば阿闍梨が歸る。はてな妙ぢやとつや〳〵解せず、來て見ると和殿は居る。そも〳〵何が何うしたのぢや」と是も頗る慌てゝ居る。

「是は〳〵、されば殿！　いゝや御挨拶は略き申す。實のところは今日清盛が殿にお目通りを願はうとて、つひ其邊まで參ッた所で、端無く阿闍梨に遇うたのでござる。聞けば阿闍梨も此方に御用が有るとやら、其儘連れ立ッて參ッたところ、法話する故御持佛堂へと、斯う早急なのでござる。何と言ふても長者の言葉、況んや桑門の人の言葉、無下にも爭ひもなりかねて、されば〳〵一應その旨を殿にお斷りも爲べきかを夫さへ叶はずその儘

で……」

「宜しいわ、もう宜しい」と中御門殿は笑ッて居る。「阿闍梨の事ぢや、その位のこと怪しうはない。他の所もわが所も眼中に置かぬ脫俗ぢや。その位のこと有りうちぢや。さりながら夫はそれで分かッたとして、偖阿闍梨が如何なる法話を遊ばした？」

と言はれると偖困る。

藤原家を罵倒したと打ち明かしたら珍事である。

「されば其法話を一寸申せば、されば此清盛に思ふさまの訓戒を……」

「何と言ふてぢや？」

「されば〳〵、その、斯樣なのでござる。清盛和殿は血が多いと……」

「血が多い？」と眉寄せる。「血をいつ和殿が滴らしたのぢや？」

「あいや、然ういふ筋ではござらぬ。清盛和殿は狂人めいたと……」

「ふうむ。和殿が狂人めいた？　はてな、何うして然う見えたろ。そのやうな眞似したか？」

「あいや〳〵、然うではござらぬ。清盛和殿は物事に凝り易いと……」

「分かッた。何さま、是は妙ぢや。凝り易いは全くぢや。その代はり凝り易い丈に、また飽き易い所も有る。」

驚いた！　人は變はッて口は變はらず、言ふ筋が形を變へた丈で相變はらずの栁おろしかと些しは胸に勃然と來る。

「その代はり夫だけの失の有る代はりに……」

「可し！　もう聞かずとも宜しいわ。」

「さりながら夫からまだ……」

「可しと言へば可いのぢやい。夫からの阿闍梨の口上は取り倣し口に違い無い。散々惡く貶して置いて、末に至ッて繕ひに幾らかの取り倣し口を利く、其邊は誰にも有る事ぢや。和殿は今年幾歲になる？　まだ〳〵その樣な駈け引きに操られて居るのかの。」

苦味有る忠告かと思はれなくもないもの丶、さりながら如何に何でも斯う色も艶も無く言はれると勿論不快に爲ッて來る。

されど不快には爲るもの丶、然う不快を味はせて呉れる其中御門殿の所へ己れ共清盛はそも／＼何爲に來たのか知らと、みづから腹で今日己れが來た用事の事を考へ出して、つく／＼と思ひ回すと、また急に情無くなッて來る。

合力を願ひに來たのである。

もと／＼感じ易い己れである。些しの事でも氣に掛かる。毒口を斯う利かれて、勿論胸は既に躍る。その躍る胸をさへ、されば、無理にも壓し附けて、氣振りにも其樣な不快らしい樣子を見せぬ樣に爲なければ爲らぬ身の上かとしみ／″＼無念に爲るにつけて、金ぢや力ぢや腕骨ぢやと、つく／″＼思ひ入ッても來る。六十餘年の清盛は實は是等其貧なる逆境が產み出した物欲の權化である。

「今日は何うした、饒舌らぬの？」と中御門殿は又しても冷かし口のやうである。「何か情懷を蝕はるよの。されば己の許へ斯う來た、其用事は何ぢやろな。」

と言はれる丈早強面い。言ひ出さぬ前からして、お中て爲さッても居るらしい。

「いや、別に大した程の事でもござらず……」

と、つひ吾知らず言ッて仕舞ふ。

「大した程の事でもない？」と中御門殿は打ち返して

「只遊びにでも來られたのか？」

「はい」と流石に烹え切れぬ。

大した程の事でもないと、なぜ言ッて仕舞ッたのかと、自分で言ッた其自分が實に自分にさへ分からぬ。用有ればこそ來もしたのを、いざと引き据ゑられると爲ると、何うも只氣後れがして敢て合力をさへ願はうとした其人が怖ろしいかに思はれる。

五

恩與へるのは知らず恩賣る
のを知るのを長者と言ふ

「なるほど己は腑甲斐無い。己は心が弱いぞよ」と清盛は腹で呟いた。「しかし心が弱いと言ふて、何時までも斯うしては居られぬ。言ひ難いが仕方無い」と、續けて下を向いた儘で殆ど獨語に呟いた。

そして、其儘下向き續けに「又も〳〵毎ものやうなお願ひに上がッたのでござる。御承知の通り父忠盛の此頃の不幸續き、まだ日陰者の某など、父の苦海の浪を被ッて只當惑するのみで。實はお恥かしい次第ながら、去年奥州から買ふ約束をした黑馬一疋、その代料の支拂ひが去年から其儘になッて居る次第、この五六日といふものは全く弱り果て申した。水損で取り上がりの無かッた去年去々年の時のお助けをも其儘にしてある今日の今、又ぞろお願ひと申しては甚だ心無い樣でもござるが、何分にも活きた馬の借錢、今更馬を返す譯にも行かず、窮し切ッて實は〳〵御合力を願はうとて、厚かましく參ッた譯でござる。」

言ひ難いのも無理は無い。馬の代にさへ困るといふ桓武天皇九代の後胤が縱令雲上の君の前にもせよ、膝折ッて願ふ次第である。而も毎度の事でもある。

「困ッたな」と相手は苦り切ッて居る。「情無い事をばかり和殿達は言ふて來られる。去年は去年で節會の時、晴れ裝束が無いとやらで和殿の父御が己の許から服一領を持て行ッた儘、着續けで返しもせぬ。子息はと言へば和殿がそれぢや。己なればこそ幼い時から壯年になる迄の間、和殿を寄食させて置いたのぢやぞ。京都の商人に聞いても見なされ。平氏と聞くが最期、また品物のお拂ひが下るまいと寄り〳〵の噂ぢやわ。運が否いとは言ひながら、情無い貧乏ぢやな。しかし外ならぬ物の借錢ぢや。武辨の家たる和殿が馬の代料に困ると言ふのはまだ〳〵頼もしい所が有る。己とても有り餘る身ではないが、折角の事ぢや、用立てる。馬主に然う言ひ附けて、代料をば己が方へ受け取りに參るやう然るべく處置されい。此後は斷るぞ」と苦り切ッて居るのである。

苦り切られずとも實に苦しい。同じ貸すといふ筋なら

ば、勿體を附けずともと、つひ淺ましいとも思ひながら、
手前勝手のやうな心持ちもする。

もと〳〵太々しい腹の清盛なのではない。口さへ重くなる丈に、それ丈の心中は只強面(つら)く、汗までびッしより掻いて居る。

聲柄までがやゝ變はッて、「忝う存知申す。御恩は仇に思ひ申さぬ、全くの全くの事、お話しに爲らぬ迄の赤貧、父忠盛さへ常に繰り言、なまじひ昇殿を許されるほどの立身を爲(さ)なんだなら只の一人の伊勢平氏で蛆蟲のやうに只ぐづ〳〵、世を過ぐして行けやうのにと………」

「聞かぬ〳〵」と手で制して、「貧乏の繰り言を何時まで聞いても冴えぬわよ。それよりも伊勢の小殿、是は其事に就いての、麿からの相談ぢやが、いやさ、相談と言ふと事々しい、何、それほどの事でもない。いづれ和殿は是からして邸へはお歸りぢやろ?」

「仰せ迄でもござらぬ。馬主が待ッて居るほどゆゑ…
……」

「宜しい。さらば歸ると均しく、麿の許に和殿が來て、云々と麿に賴んだ事、および麿が其趣きを承知したと言ふ事を宜しく父御にも傳へてな。」

立ち入ッた事を言へば言ふ。父御に知らせやうが知らせまいが、そんな事何うでも可さゝうなものである。而も改まッて然う言ひ附けられずとも、何も是が親に隱した內證事といふのでもなし、自分清盛の了簡では邸へ歸り次第、事の趣き勿論父忠盛へ話さうとは思ッて居る。恩を斯うまで着せるのかと、又もや癪に障ッて來る。貧は強面(つら)いと又思ふ。

さりながら是非に及ばぬ。不快な顏は無論出來ぬ。

「畏まッてござる」とは言ッたが、まだ夫だけの挨拶では中御門殿の顏色に快ささうな樣子も見えぬ。

「畏まッてござる」と又重ねて、「それは勿論の儀でござる。殿の御志しの忝さを父にも宜しく傳へ申して、改めてやがては又父からもお禮を申し述べるやうに致すので」と、流石言ふのもやゝ苦しい。

「そりや言はんでもの事ぢやとも」と中御門殿は稍反ッた。

すると猶何か有るのか知ら。

「父親がわが子のため恩有る方へ禮言ふのは巾すまでの事でも無いのぢやとも」と、いよ〳〵露骨になッて來る。「但し父親に禮言はせうとばかりで麿が和殿に和殿が邸へ歸ッたなら此所の始末を物語れと言ひ附けるのではないからな」と奥齒に何かまだ挿まる。

「はい？」と不思議な顔をする。

「分からぬか？」

「お言葉ではござるが、何事でござらうかな。」

やゝ冷笑して、「武辨の人は餘り心が廣過ぎて、推察を逞ましくするといふ樣に、邪推深くはないよ喃。母御前へも云々と傳へ召されと言ふ事ぢや」と聲に儼たる調子が有る。

なるほど、其所を裏に含んで訝しく只囘り諄く奥齒に物を挿まれたかと清盛もやゝ心附く丈に、またも不快は加はッた。

母御前と言ふのは誰でもない、父忠盛の妻たる人で、卽ちまた清盛たる己れに取ッては勿論母たる人に當たる、以前待賢門院の侍女、その頃の名は兵衞佐局、そしてやがて父忠盛の北の方と爲ッてからは白河殿と通稱されるその實にお方なのである。

それは夫でも管はぬが、なぜ其白河殿へまで際立たせて今日の始末を知らせるやうにと殆ど刻印打たぬばかりにして中御門殿が念入れて清盛たる己れに言ひ附けるかと言ふ事をつひ不圖其所で考へると、すはや其譯もまた分かる。分かる、それ丈が又も〳〵不快の種となるのである。

外でもない、其白河殿といふ清盛の現の母御前は中御門殿その人の實に血緣なのでもある。されば卽ち中御門殿が清盛に恩被せたといふ始末をば、只忠盛一人にのみ知らせる丈では飽き足らぬ所が有ッて、そこで殊更念押して、母御前へも知らせよかしと命令を下したかと、勿

論推察し得られもする。

無念や平家は是までに藤原家に下目に見られて、而も既に藤原家を離れて、平家の人と爲ッて仕舞ッたわが母白河殿へまで恩の子細を響かせられて、從ッてわが母の事ではあるが、十の物を九つまでは父忠盛をして妻の前には頭が重くもなるに至らせるやうな、其無念な境遇にまた立ち行かせられるのであらうかと腸もまた烹え返る。

「しがない身は何から何まで、嗚呼情無いものぢやぞい」と腹の中ではまた獨語、それを勿論上には包む――涙も足らぬ思ひである。

「母へもとな？」と怨みの潛む言葉である。

母御前と敬稱で言ひ倣すのが此場合ひ白河殿その人の緣續きたる中御門殿へ對する禮儀である位の事を心付かぬ身でもない。さりながら蟲が有る。

母その人は憎くはない。只中御門殿が忌々しい。と言ッて、忌々しいとの旨を現はされぬ場合ひである。氣が短いとでもいふ性質ならば、また何の樣にでも言ッて退ける。しかし、それ程の短氣でない。前後を顧慮する性質でもある。

それ丈中御門殿に食ッて掛かると迄は爲なかッたが、されば卽ち其所が蟲で、そのやうに一方が塞がれゝば、更に何所かの他の一方で、それ丈の慰藉を得も爲たい。母御前と其所で口まで出た、それを故意々々嚙み潰して、單に母と言ひ捨てた。

恩は、なるほど、受けも爲たが、もう〳〵長くは座に耐へぬ。

もう一刻も早く辭し去りたい。辭し去ッてそして戶外へ出て、思ふさま思ふさま鬱憤の自慰自問を獨の胸で扱きたい。

それにしても世辭が要る。他に助けて貰ふとなると、何所まで一分廢ることか。

「然樣ならば、その趣きに心得て、是から邸へ立ち戾り、父母に委細申し述べて、喜ばせる事と致し申す。嘸

や嘸忝がるでござらうわ」と些し眼を潤ませる。

「うむ」と頷くのみである。

立ち去ると爲ッても、最う斯うなると躊躇するかの思ひである。脊もおのづから曲がり腐る。足も自然と上ずり腐る。砂利を踏む其砂利までが冷笑ふ聲か何かのやうに、ざくり〳〵と妙に鳴る。

ぴいんと頭痛を感じて來た。

「あッあ、貧は強面いわ、な」と屹と後を振りかへッて、中御門殿の館を見る、その目に電火が跳ねて居る。中御門殿の屋根の檜皮葺の生新らしいのが振り回り有る眼に直注まる。

「あんな立派な檜皮葺を仕つらへて、その下に住む豪奢は知ッて居られても、時を得ぬ武道の身が馬一匹に困るといふ、その代料にさへ大恩を掛けるといふ事の酷たらしいといふ事は知ッて居られぬわ」と、また口惜し涙は差し含んだ。

「夫につけても世の中は何事も金ぢや、腕ぢや。思ふ樣の事を爲て、思ふ樣の榮華を食ッて、それでも一生は一生ぢや。藤原が恪何ぢやい？　大職冠の手柄は有る。その末は伸び茂ッた先祖の巨木の蔭を力に只枝を差し交はして、天日をさへ遮るのぢや。可し、大精進せいと阿閣梨は言ふた。その大精進を心として、されど〳〵又阿閣梨の言ふた通り、藤原刈りを目的としてぢや」と虹のやうな氣を噴いた。

人知れぬ未來の大野心はそろ〳〵此邊で催した。

六

身分の勝つ妻を持ッた夫を
其妻の頼もしい傅役と言ふ

邸へ歸ると、青侍ながらも出迎へたが、樣子が何と無く淋しい。

さもなくても中御門殿の冷酷に面白くなくて〳〵耐らなかッた歸りである。切めて邸へ歸ッたところで、出迎へでも威勢よく爲れたならば、幾らか心も引ッ立つものを、それが全で火が消えたやうである。

而も派手好きな清盛なのである。見送りや出迎へなどよく考へて見れば何でもない様な事、それをも仰山な事に思ッて居る性質である。

まづ是で不快で堪らぬ。

出迎へた夫々に言葉を交はすでもなくて、直とわが父忠盛のいつもの居間へと打ち通る。

忠盛は椽に腰掛けて居た。身嗜みの元來嚴重な人が、何事ぞ、烏帽子をさへやゝ曲げて冠ッて居る。

「清盛でござる。只今。」

と是だけで、素より親子の間柄、何の遠慮する所も無い儘に、つか／＼と清盛も椽際まで行ッて、その邊に蹲る。

「清盛か？」是だけである。

はてな、頗る妙だぞと清盛はます／＼解し難ねた。

中御門殿へ行ッた用事の子細は父忠盛とても知ッて居る。知ッて居るどころか、むしろ自分清盛と相談の結果然らば中御門殿へ行ッて無心して見ろとさへ命令して呉れた程の譯である。當たり前ならば、それからの今の清盛の歸邸であるものを、椽に掛けた腰をも上に擧げて、先方の都合は何うであッたか位すぐ問ひ尋ねて呉れさうな所である。

「只今！」と、もう一つ重ねた。些焦燥た氣味でもある。

默ッて居る。

「中御門殿へ參り申した」と、いひし清盛までも焦燥込んで來る調子になる。

「參り申した事は參り申した。その無心もし申した。そして肯かれた事は肯かれ申したが、肯かせ料として散々に針束を飮ませられ申したわい」と、なるほど眼もまた潤む。

忠盛は瞑目した。

只それだけで、ぐッとも言はぬ。

「どう遊ばされた、父上は？　今申した事お分かりか？　清盛實は無念でござる。今申した事お分かりか？」

「分かり過ぎて〳〵、其沖を越したわい」と、千切ッて捨てる樣に言ふ。

「沖を越した？」と眉寄せれば、

舌鼓一つぴしやりと利かせて「和郎が中御門殿へ行た後で、白河殿と此忠盛と話しにも爲らぬ爭論ぢや。」

はッとしたのみで、譯が分からぬ。

「父上と母上と？」

「うンむ、毎もの通りぢやわ。」

毎ものとほりか？　嗚呼、なるほど！　されば又、中御門殿では何うかと言へば、雌鷄に目方の附くやうな否味を散々聞かせられもしたのに、今又邸へ戻ッて來れば其目方をまだ附けもせぬ內から、旣に目方が勝ッたと見えて毎もの通りの爭論とは！

「何たる今日は不祥の日でござらうか。清盛は清盛で中御門殿で思ふさまの不快を頂戴する、そして邸へ斯うして歸れば又母上が毎もの調子で何事か爭論になられたと言ふ、はて偖不好な世でござる。」

情のみが只迫る。譯を聞くのは捨てゝ置いて愚痴のみが先に立つ。

「繰り言を何ぢや、男の癖に！　斯うなのぢや。」

窘めて掛かる其忠盛はわが子清盛をば繰り言言ふなと極め付けながら、斯うぢやと子細を物語らうとする、それがやはり繰り言だとは思ひ詰め〳〵切ッた場合ひ、我ながら氣も注かぬ。

「中御門殿へ無心に和郎が行たらうの、その事が因でぢやわ。」

「母御前がそれを何とか斯とか………」

「おゝさ、頻りに呟くのぢや。」

然う言はれゝば又然う言はれるで、思ひ當たる所は勿論有る。さて、しかし、夫にしても母御前が姿を見せぬ、それもまた氣に掛かる、

「母御前は？」

「居らぬわい！」

「又しても〳〵、嗚呼聞くも不好でござるよの。又し

ても何かかむが立ッて、さらば、母御前は毎ものやうに禁裏へでも……」

「それぢや〳〵」と大息した。

「早く承はりたうござるがな。某が中御門殿へ參ッた事に就いて、母御前は何と仰せられたのでござるかな。中御門殿へ行かいでも宜さうなものぢやがと、斯う仰せられたのでござるかな。」

「まづ然うぢや。嗚呼、是につけても〳〵忘れても禁裏などから女房なんどを拜領して妻とするものではないよ喃。禁裏に居る時の宮女どもは大方は艶な藤の花ぢや。邸へ連れて戻ッて來ても、どうしても蔓は禁裏と切れぬ。何ごと言ふと、成り下がッて其美色を階下の庭へ移されたと、雲居の昔を種に出す。ましてや、系圖も藤ぢや〳〵、宜しいか、藤原の藤ぢや〳〵。あちこちに枝やら蔓やらが引いて居る。今日も斯うぢや」と膝搖ッて、懷かしげに稍乘り出す。

口惜しげに咳一つ。

「和郎が中御門殿へ行ッたのを安からぬ事のやうに我妻白河殿は哮(たけ)るのぢや。」

「なぜでござる?」と赫となる。

「斯う言ふのぢや。中御門殿に此平家は一通りならぬ世話に爲ッて、その恩返しもまだ叶はぬに、又しても〳〵清盛が馬を買ふ位の贅澤沙汰で、中御門殿に御無心申し上げるのは恥知らずと言ふものぢや、と、是ぢや。」

「恥知らずとな?」と顏熱(ほて)る。

「うん、其口上が憎くはないか。されば、何が恥ぢやと、此己も哮ッたわ。平家は武辨の家柄ぢや、武家が馬を買はうと言ふに、何の不思議な事が有る、而も名馬は授かり物、いつ買ひたいと思ッても毎でも思ふやうな馬が買へるものとは言はれぬわと、此邊が爭ひの基ぢやッた。さりながら白河殿は肯き入れぬ。それは時と場合ひとに由る、差し迫る戰爭なんどの有るでもなし、一年早く買ひ置けば一年先は老馬となる、今その馬を買ふよりも其買ふ金の無心を言ふ中御門殿へ濟すべき筋の負債さ

へ有るではないか、と、己の恥を言ひ出すのぢや。白河殿の身に爲ッたらば、忠盛のやうな貧な武家へ嫁づいて昔馴染みの雲居の人々には面は合はされぬやうな心持ちに爲りも爲やう。それ、しかし、是非無いぢや。ましてや家に取ッては嫡流、その和郎清盛が外ならぬ馬を買ひたいと言ふ、その心根も不愍ぢやを、それをさへ何とも思はぬのぢや。委しく言ふも己も不好ぢや。結局は爭ひに花が咲く。何人も止めもせぬ。勝手にせよ、勝手にする、と其儘でとう〳〵白河殿は禁裏へと出て行ッた。」

さりとては又意外である。而も其意外である丈に、折角中御門殿と約束して來た事、即ち馬の代金を用立てゝ吳れるといふ趣きを白河殿へも告げ知らせると言ふ一條が是また出來ぬ事に爲ッて來た。

わが母ながら怨めしい。

と思ふものゝ、また時も有らうに、今日に限ッて蟷螂が瘦せ肱張るやうな勢ひを示して母御前を怒らせて仕舞ッた、現のわが父忠盛がまた怨めしいやうにも思はれる。

「當惑いたしましたわい」と清盛は投げ頸した。「まだ委しくはお話しも致さぬが、面白くない事聞かせられるのを我慢し〳〵やう〳〵の事で馬の代料を用立てゝ貰ふ事に爲ッた、其苦辛が泡に爲り申した。何の事、馬鹿々々しい。斯う爲る事と分かッたならば、口を窄めて丈夫が一分曲げて、中御門殿に腰折らいでも、吁宜しかつたものを。」

「はてな、訝しな事を言ふ。中御門殿に腰折ッたのが何で白河殿の上に……」

「あいや、關係がござるのぢや。無念、無念、吁無念！　それでなくても中御門殿に白河殿へも話しせよと恩がましい事言はれ申して、胸惡く爲ッて歸ッて參ッた次第、よしや、此所に母御前が在されても、その通りを致すさへ快くはござらぬわ。それを況んや、母御前は母御前で今仰せの如き御考へ、清盛馬は買へませぬわい。」

口惜し涙が潤んで居る、そのわが子清盛の顏見れば、まだ〳〵委しくは分からぬものゝ、忠盛の身に爲ッても

胸たゞ痛い思ひである。
それから話しの順序として、中御門殿の言ッた委細の事を清盛は父に告げ知らせた。告げ知らせたと言ふ夫が取り做し口と爲るならば可い。然うは爲らぬ。火に添へる薪となる。
忠盛の身は顫いた。
「可し、委細分かッたぞ。和郎の無念も嘸かしぢや。己も思ひは同じ事ぢや。藤原家の白河殿をわが妻にしたのが今から思ふと忠盛の不覺ぢやッた。あはれ忠盛に今些しの力が有ッて見よ、白河殿ぢやらうが何ぢやらうが髻つかんで投げ捨てゝ呉れる。力の無いのは是非も無い。御所でも勤めに心を盡くせば、寄り集ッて此忠盛をば嘲ッたり笑ッたり、而もその子の和郎清盛をさへ眇の子の一寸法師と笑ひ囃すといふ事ぢや。清盛、是も時節ぢやわ」と、男泣きにほろりと爲ッて、ぢッと清盛の手を握る。
握られた右の手をば其握らせた儘にして、左の手で清盛は腰刀の柄口を我知らず碎けるほど握り詰めて、歯を食ひしばり目を見張ッた。火も燃えるかの顔である。
「父上委細畏ッた。清盛是から所存ござる。母御前は毎もの傳で、やがては御歸り遊ばすぢやろ。清盛は是からして大魔王の決心で、まづ心から練り申す。馬も何も要り申さぬ」と、そこで、執られた手を拂ッて、平床を強く打つ。意味凄い一打ちなのである。

七　案外に嬉しいのを同じく度の知れぬ嬉しいと言ふ

「馬も要らぬ？」と忠盛は流石聲まで嶮々しい。
「諦め申す」と舌鼓して、清盛は且反ッた。
「要らぬと心を決めたからには金輪際要り申さぬ。吁、よし無い馬好みをしたばかりで、人には恥ぢしめられる、家の中には波風を起こす、清盛凝り〳〵致したわ。それ故にぢや、父上、馬は諦め申した。その代はり是から此足で清盛は一散走り、中御門殿へ走せ参ッて、代料の無

一切を取り消し申すと、斯う中御門殿へ申したならば、また如何に毎もながらの殿にもせよ、默ッてのみは在されまい。」

「默ッて居ぬとは？」

「白河殿へ何とかお言葉もござらうが。」

「と、また和郎は又も〳〵中御門殿の世話になるのを譽まれぢやと思ふかな？」

なるほど其所も道理である。

「大きにな。」

「捨てゝ置け。」

「なるほどな。」

腕を組んで考へた。しかし、夫にしても金の一條、は何としたものか。

「さりながら無心した馬の代料、是を人傳で頼んだのでもなし、自身親しく頼んだほどのものを、只斷るといふも變なもの。と言ふて要りもせぬ物を用立てゝ貰ふといふ譯にも！　されば即ち、斷ッて、そして母御前の事心の事をも取り消して、そして其所で幾らかは氣を吐きつけて呉れたうござる」

「何ぢやとな？　氣を吐き付ける？」

「されば溜飲下げたうござる。」

「是は爲たり、やい淸盛！　和郎また一圖心起こしたか？　父は常々何と言ふ。和郎兎角一圖心になりたがる。忽ちにして火と燃える。そして忽ち消えたがる。中御門殿へ馳せ付けて、氣を吐いて何か言ふて、溜飲を下げたところで、白河殿へそれが利くか？」

「利き申す。何と言ふても母御前でござらうが。淸盛が如何ほどまで口惜しがるかと言ふ事をしッかりとお目に掛け申したなら、如何に毎もが毎もでも、わが良人にのみ刄向かふが女子の能事でもあるまいと、是非思し召されうが。」

忠盛は頸垂れた。

「それには中御門殿へ參ッて、折角お願ひは致したが、邸では是々の風波が起こッて馬どころではござらぬ故、

に就いて些しは怨みも申さうかと……」

　と、獨言のやうではあるが、其實相談なのである。忠盛、しかし、もう答へぬ。子の事は寧ろ第二で、それよりは我身の上に係る白河殿の事ばかりが胸一杯に蔽ッて居る。

　若侍が現れた。

「若殿！」

　清盛は振りかへる。

「已にか？　何か用事でか？」

「されば、若殿にお渡し申すべき馬とやら申して、馬牽いて參ッた男が。」

「何……何ぢやァ？」と、聲は無漸や尻上がりに。

「はて、御承知はござらぬのか？」

「いゝや、承知はして居るわい。」

「されば、御承知ござるのか？」

　何の事だと言ふ安排、若侍は興覺め顔で多少の笑みをも含んで居る。

「馬牽いて來たのぢやな？　馬を、あの、馬主がぢやな？」

「されば、御意にござる。馬を牽いて參ッたゆゑ、いづれ馬主でもござらう。馬も立派で……」

「立派でも何でも宜しいが、顔はどんなぢやの。」

「長うござる。」

「黒いか赤いか。」

「赤黒で。」

「幾歳ぐらゐぢや？」

「さればな年齢は、大方二歳か三歳で……」

「馬の事かい？」

「御意にござる。」

「此奴が〳〵、何を白痴が！　馬の年齢(とし)を誰が聞く？　馬主の事聞くのぢやい。馬主の顔は長いか短いか、色は黒いか赤いかと、その事を聞いたのぢやい。面倒ぢや、斯うぢやろが。顔は長くて色は赤黒くて……」

「ふッぷ、馬とそッくりで……」

「何を笑ふ白痴めが。年頃は五十四五。」
「御意にござる。にこ〳〵して……」
「何ぢやとな？」
「にこ〳〵笑ッて居り申す。」
頭を抑へて、「な、な、父上！　如何に馬で駿足でも、あまり早く來てござる。斷りが度を失ふ。」
「困ッたの。」
父子二人の大の男、而も平家の主なる人が二人までも寄ッたところで、馬の代料が胸に支へた丈で、困ッたを比べ合ふ。
「馬主に何と申すでござらうか」と若侍は催促する。
「些し待て！」と腕を組む。
馬は何の子細も知らぬ。門外か何所か其邊で聲勇ましく嘶いた。
「はォれ、馬がお返事を宛も〳〵催促するやうな」と若侍は呑氣である。
「些し待て！　待て、些し！　父上何と致さうかな。馬主を待たして置いて、今更中御門殿へも駈け付けられず……と言ふて代料を又此次ぎにとは申し得ず……額が巨きいならば知らぬこと……えゝと、はてな、困ッたな、これ、玄蕃、やい、玄蕃……」
「はい」と若侍は畏る。
「何かな、その馬主は、その、何とか言ふたかな、御約束の馬を牽いて参ッたと申したかな。」
「はい。」
「それ丈か？」
「はい。それで、是非殿に御目通り願ひたうござると……」
「是非とな？」
「はい。」
「己が居ると言ふたかな？」
「はい〳〵。」
「そしてどのやうな顏をして居た？」
又しても奇妙な事をと若侍も妙な顏。

「どのやうな顔と申したところで、別段の不思議も無く……」

「あいや、飲み込みの惡い和郎ぢやわい。代料の事申したか？」

「申してござる。」

「やれ、やれ、やれ！　その、實は、代料の所ぢやがな……」

「お言葉お妨げ申すやうではござるが、一寸お聞き下さいませ。馬の代料は既に頂戴してござると、斯う申して居ッてござる」

「何……何ぢやい？」

「代料はもう既に……」

「代料とは馬の値ぢやろ？」

「はい。それが最う既に……」

「はてな、是は」と、又しても頸曲げる。

忠盛は一句も出せず、默ッてまじ〳〵聞いて居る。

「何を和郎は寢惚けるぞ」と清盛は猶眞向である。「代料をまだ已拂ひもせぬ。その代料を拂ッたとは、はて妙な。それで、にこ〳〵して居ッたとな。はて妙な。奇怪な、人冷かすのぢやなからうか」と一寸邪推のやうな口もある。此類の人の固有の癖で。

「しかし、清盛！」とやうやく忠盛が挿まッた。「とは言ふたとて、如何に何でも馬主がその樣な無禮も無からうが。代料受け取ッたと申すならば申す儘で可いとして、さらば兎に角會ふて見い。會はねば事も分からぬわ。」

如何にもと其氣になる。然らばと氣も輕く、清盛は勿論自身馬主の待つ方へと行く。行きながら腹の中は夢に夢見るやうである。正直な人である。あまり駈け引きなどを爲ぬだけあッて、却ッて又馬主が何を言ふのかと其邊の當たりが些しも附かぬ。もしも顔を見合はせた所で、また或ひは意外な事でも聞かせられは爲まいか抔、苦勞にならぬやうな事までが苦勞になるやうでもある。

見ると、馬主如何にも顔から笑みくづれて、腰までが最う甚だ低い。物を言ふ前、早く既に折れる腰である。

「御門外まで馬は牽かせてござる。小者二人を添へ申した。お乗り馴らしになる迄は幾日でも御遠慮無くその小者二人を御手許にお留め置き下さるやう、格別に御意申す」と、又腰を折る、頭を低げる。

放し飼ひの牧場を巡覧して、一年なり二年なりの飼ひ料やら心附けやらを多分に與へて置いた上、やがて牽いて來させてさへ、隨分見識有る馬主となると、尊大に構へて居るのが普通なのを、是はまた天が地に顚倒したかは知らぬが、腰の折り方から尋常でない上に、猶小者二人をまで附き添はせて置かうと言ふなど〻、是もいよいよ意外である。

清盛もや〻煙に卷かれる。

「忝い〳〵。」

まづ只是だけである。買ひ手の方からも負けず劣らずお世辭を言ッて何が何やら胸ばかりが只どき〳〵。

「馬は然らば宜しいか、此儘で受け取ッても。」

「何うぞ宜しく願ひ申す。然樣ならば、只今お馬を御庭先まで……」

「宜しい。宜しいが、しかし、その……」

一寸閊へた。

「代料を」と言ひ掛けた、其「代」だけが口へ出て「料」は咽喉で消えて仕舞ふ。

「はい〳〵〳〵。」馬主もよくは聞かぬ。飲み込んだやうな挨拶ばかり、而も「はいはい〳〵〳〵」など〻、人に向かッて言ふのやら、馬に向かッて言ふのやら、言ふ當人にも解せぬらしい。

清盛の方になッてもまた代料の事は言へなくなる。困ッたわいと胸またどきり。汗が額に浸潤み出す。

八

由來の知れぬ好運を
咀嚼む味の好運と言ふ

其儘で馬主は門の外へと一寸出る。すぐ夫も知らせたと見えて、小者二人に口を取らせて黑一疋を牽いて來る。若侍も出て來て居る。

清盛熱るやうな氣持ちがした。さりながら今更何にも爲らぬ。代料を取ッたと本人が言ふ以上、それを疑ふ餘地も無い。餘地は無いが猶分からぬ。されどまた決斷のあまり早からぬ性質でもある。只躊躇逡巡する。

馬主は委細管はぬ。ぼんやりと立つ若侍を小手招ぎして近づけて、

「御苦勞恐れ入り申すが、殿も既に御覽なされた。馬をお引き渡し申したい。お厩は何れかな？　恐れ入り申すがお厩へ和殿宜しく御案内！　小者達それ、和郎達は御案内に從ッてお厩まで馬を宜しくな。」

「畏ッた。さらば斯う。」

若侍も早飲み込みではあッたか知らぬが、しかし其身になッて見れば、主君が珍らしい駿馬を貰ッた、それが最う只嬉しくて氣ばかりが急いて居る。主君の命を聞くでもない。委細只心得て、厩の方へと馬主達を忠實だッて連れて行く。

「是も全での夢ぢやわい」と只清盛は呟いた。「奇怪ぢや、不思議ぢや、變妙ぢや」と腕を組み／＼頸曲げる。

「しッ！」と後ろに鋭い聲。

振り回ると父忠盛が杉戸の陰から手招ぎする。

近づく清盛引き附けて、

「面妖な馬主ぢや。委細飲み込んだ樣子ぢやが、和郎にも心當りが無ささうな」と聲忍ばせた疾口で。

「されば」と清盛も顏寄せて、「只解せぬのでござるわい。代料をと聞き申した。すると、受け取ッたやうな事言ひ申す。勿論此方は與りもせぬ。只、しかし、斯うなると、何やらん、心當たりと申すのは中御門殿が或は若しや……」

「それぢや。其所へ和郎も氣が附いたか。己も今只然う思ふ。如何やうなる掛かり合ひや繫がりが有るか知らぬが、どう思ッても代料をば中御門殿が拂ッたとしか此己にも思へぬわい。」

「それ、それでござるわい。某も然うかと思ふ、而もまた中御門殿が如何やうなる事言ふて代料拂ッたか知れ

申さぬ………」

「其所ぢや／＼………」

「御自身のお手許からお拂ひに爲る旨に言はれたか、それとも此方からの賴みに由る旨に言はれたか其邊も一寸まだ………」

「其所ぢや／＼。己の考へもまた其所ぢや。此推察は違ふまい。中御門殿が何れかならず代料を拂ッたぢや。可し、此所は己に任せて和郎は今直中御門殿へ………」

「參ッて、なにさま問ひ申さうか。」

「それに限る。」

「御尤も。」

親子直もう打ち合はせが附いた。それならばと言ふので再びまた清盛は勿論伴一人連れるでもなくて、慌てゝ中御門殿へと行かうとして、そこで又はたとばかり思ひ出した事が有る。

「あいや、父上、中御門殿へ參るは容易いやうな事ながら、偖またよく考へて見ると、參るのも何うやらな………」

「うむ、なるほど。話しの行き掛かりが行き掛かりゆゑ、參り難いと申すのか。」

「御意にござる／＼。それよりは寧その事、馬主へ直々に確と尋ねた方が可いかと考へ直してござるがな」

「されば、工合ひが旨く行くか？」

「行かせる樣に致さうわ。のみならず實は／＼………されば／＼重ね／＼で嘸お驚きかとも存知申すが、實は清盛斯う急に馬を牽いて來られやうとは露思はず、昨日今日あたり狐の生き皮なり其代料なりを小鍛冶が許へ遣はさうと約束もして置いたやうな譯合ひで………」

「何と申す？」と稍呆れて、「小鍛冶へとな？」

「あの鎧師の。」

「うん、小鍛冶へ？　小鍛冶へ何を？」

「狐の生き皮を。」

「是は爲たり、狐の生き皮を、何のために小鍛冶へは？」

「鐙に縫ひ附けさせうために。」
猶忠盛は呆れ〳〵た。
「はゝら、いつもの和郎の病まひ、又も見得張りはじめたか？　やれ狐の生き皮の、やれ珍らしい駿馬のと、和郎は氣でも狂つたか？　しがない貧の境遇で物好みも有るか、これ。さすれば馬の注文して、また鐙注文したのかな。」
呼吸まで切ッて顏色變へる父親の顏ぢッと見上げて、
「お驚きもござらうよ。さりながら斯う後手に事が參らうとは存知無く……」
「存知無くとて物に因る。たとひ貧なる身の程でも、伊勢平氏の嫡流ぢやろ。濡れ手で粟を掴むやうな商人か何かならば率知らず、拂ふ見込みも無い代料を何う工夫する心得ぢや。」
「あいや、然う〳〵お騷ぎでは清盛口を開け申さぬ。只小鍛冶が許で好い鐙を見、馬主から良い馬を沙汰されて、闇雲に欲しうなり申したので……」
「それが和郎の病まひぢやい！」
「……」
「是等の始末何と爲る？」
「お騷ぎ遊ばすな〳〵。さればこそ中御門殿へ參るのは止めて、ともかく馬主の話しを聞き、更にまた或ひは今日參るか知れぬ小鍛冶を待ち受け申さうわ。」
落ち着く迄は間が有るが、その代はりいよ〳〵落ち着くとなると、又凄まじく落ち着くのが實に清盛の性質(たち)である。
「瘦せても枯れても武門の身で、鐙師に下から出る樣な口惜しい事でござるものゝ仕儀に由ッては是非がござらぬ。父上に御苦勞を掛けますつもりで、お話し申した譯でござらぬ。隱しだてするのも如何と考へ、お打ち明け申す丈お打ち明け申したのでござる。兎も角も馬主に聞いて見て、察しの通り中御門殿が馬の代料支拂ッたと言ふものならば、其方はまづ一安心ゆゑ、小鍛冶の方も其勢で如何やうなりとも埒明け申す。さればもう父上に

はお引き取り遊ばれい。馬主に聞いた工合ひに由ッては中御門殿の御所存も分かれば、また母上の御模様も或ひは分かるか知れ申さぬ。どうぞお任せ下されい」と、また他事も無く頼むと爲る。

しかし、淸盛とても最う子供でもない。其位な埓明ける事ぐらゐ必らずしも自分で出來ぬでもあるまいと、忠盛の方でも思ふまゝ、まして其事柄たる、馬といひ、鐙といひ、父の身が干渉すればするほど、何よりも不好な代料沙汰を聞かせられなければ爲らぬ事でもあると、又推し及ぼして考へるまゝ、其上深く言ふ氣も無い。

「宜いやうに、然らば爲い！」

不好な事は逃がれたい。忠盛も最う逃げ支度で、言葉も簡なものである。そして其儘足を返して、奥の方へと行ッて仕舞ふ。

見送ッて淸盛は又も涙の氣持ちがして。家が貧とは言ひながら父上とてもあのとほり、母君には侮られる代料の事一寸聞くだけでも只そは〳〵となられもする、殿上へ出ればとて、眇の伊勢平氏のと嘲られる、あゝ貧が敵ぢやぞと、ひとり切齒の思ひである。

厩へと行ッて見る。

途端、若侍とはたと遇ふ。

「馬主の口上でござるがな、小者まで伴れては參ッたが、案外馬も大人しく、檻嫌ひも爲ぬ樣子、是ならば小者達を附き添はせるにも及ぶまいかと、斯ういふのでござるがな。」

「如何にもな。」

吁、それでもまれ嬉しい。小者二人を添へられたのは實は有難迷惑で、有り餘りもせぬ邸の內幕を、よし五日でも十日でも泊まり込んで居て見取られ知られるのも是また(見得をしたいと思ふ自分淸盛の腹で言ふと)好い心持ちは爲ぬのである。

「如何にもな〳〵」と重ね〳〵て言ふ樣子にさも嬉しいとの狀が見える。

馬主は厩の入り口へ早もう現れた。

「お侍からお聞きでもござらうが、案外馬は神妙で、是はまッたくお邸へ宿世からの御縁もや有る馬でござらうの。些しも〳〵場所變はりに悸えるやうな樣子も無く、百年も居馴れた小屋に宛も居るかの樣でござる。然候へば甚だ勝手のやうながら、吾々は此儘でお暇を頂戴いたさうかと……」

「不思議ぢやな」と我を忘れて言葉半へ清盛は挿まッた。「何さま宿緣有る馬か。然うぢやらう〳〵、宿緣の有ると言ふ事は馬のみではなく、蟲などに至る迄も爭はれぬもの故な」と殿さまの方が反對に商人に調子を合はせ出す。

「然樣ならば失禮ながら、まだ此通り日も高し、此儘われ〳〵はお暇を……」

「はて、御苦勞でござッたぞ。しかしぢや馬主、最前からもう些し委しく聞きたいと思ふたが、此馬の代料の事ぢやがな、旣に和郞は受け取ッたと言ふたよな。」

「あいや御念には決して〳〵。」

「受け取ッたな？」

「はい、過分に」と莞爾となる。

「過分に？」と眉が寄る。「何方からぢや、何程ぢや。」

「面妖な！」と共莞爾が急に見る〳〵褪めて行く。「殿御存知はござらぬか。」

「されば存知したやうでもあり……。」

「なるほど、お人任せに遊ばしたか。」

是は好い智慧附けて呉れた。

「うむ、人任せにして置いた。」

「なにさま、御尤もでござる。お使ひのお方も、その樣な事仰やッてな。」

清盛は只茫然。

九　魂を煮詰めた細工を藝術の神品と言ふ

「どうも〳〵解せぬ。最初から早く問へば可かッたな。しかし、今でもまだ宜しい。よく話して呉れ、馬主！

「うむ、何所へ？」と清盛は最う呼吸切れる。

「中御門殿のお館へ！」

すはやと胸は高鳴りした。

「中御門殿の、そんなら、その使者と言ふは家人かな？」

「でござるには相違ござらぬ。私めも商ひの事、御同道申して代料勿論頂戴した時、然るべく宜しくして馬をば殿のお手許へお引き渡せ申せとの、斯ういふ御諚なのでござる。」

「それから？」

「それからと？　それ丈で。」

「代料は？」

「頂戴してござる。それ故、馬も斯くの如く。」

偖こそな〳〵！　或ひは然うかと推したやうなものゝ只それは推したと云ふ丈で、自分ながら十の九までは確に然うとのみも定め難ねたやうなのが矢張り然うであッたとは！

すると馬の代料は使者が和郎の許へ持參したかな」と殆ど清盛は詰め寄ッた。

「あいや、然様ではござらぬ。初めお使ひがござッて、代料をお諒ねで……。」

「何所から來たと申したか。」

「初めは何所からとも仰せられず……」

「すると和郎が是々と代料を申したか。」

「御意にござる。勿論只今ゆゑ、お聞きにも入れ申すが、その以來手の掛かり方の一通りでござらぬ馬で、代料もそれ故初めの時の見込みより不廉く申し上げてござる。絹百疋、綿百屯、是ざけの代料と申し上げて……。」

「なるほど不廉い。」

「不廉いとは申しながら、快く御承知遊ばした。」

「その使者が承知した？　ふンむ、奇妙ぢや、不思議ぢやな。そして其約束の代料をば其使者が届けたか。」

「あいや、己と同道せいとの仰せなのでござッてな……」

「宜しい。然らば馬主、和郎達には最う用は濟んだ。勝手次第立ち歸れ。あつ、御苦勞！」と捨て臺詞、既に其所に無い。

上部に頗る强面くするやうで、蔭で斯く迄我此清盛に中御門殿は盡くし下さるのかと胸只々騷立つところで、直また其下から、其中や其間に挿まッて立つ、此母白河殿の慈愛の程がしんみり思ひ浸みられる。

「父君に寸時も早くお知らせ爲いでは濟まされぬ。然うぢや、早くぢや！」

蹶られるやうに足を揚げる、途端、これは又如何な事、若侍がすッと來た。

「小鍛冶が參ッてござる。」

又、敵か！

不意打ちの敵ではない、しかし馬で辛くも安心した矢先へ、又新手の敵である。

やうやく乾いた冷汗が又も湧くかの氣持ちになる。

「小鍛冶がとな？」と顏蹙めた。

馬主が來た時も顏蹙めた若殿が小鍛冶が來ても顏蹙めるとは偖も〳〵よく〳〵顏を蹙めなさるのが今日はお好きな殿であると、肚で若侍も不審がる。氣の拔けた頭で畏る。

「椽端の室へ通して置け！」

若侍は敬承して、其儘づッと引きさがる。

後影見送ッて今度は清盛嗟嘆した。

「又しても馬を逐ッたら今度は鎧の狐の皮で此清盛は攻められるか。何とした厄日ぢやか。いつも〳〵日の吉凶は人よりも氣にして〳〵、獨占ひといふ獨占ひは缺かした事もなかッたのを、何うして斯う迄仕損るかな。」

全く迷信深いと言ッて、恐らくは清盛ぐらゐの人は殆ど少ない程であッた、その迷信に由ッての卜占などの自分極めでの達人が今日一日は一から十まで悉く後手に爲ッたとなると、只それ丈で頭からして、落とさずともの氣を落とす。

悄げて椽端の室へと行く。

鎧師その名は若狹掾、まだ大掾とは名乘り得ぬが、技に掛けては老手の者もをさ／＼舌を卷くといふ若手である。而も一見識有る技術家だけ愛嬌の無いのも夥しい。輕く禮して苦り切ッて、

「殿、鎧はお入り用がござらぬのか？」と頭からして極め附ける。

偖こそ狐の皮の催促と、其意味は推察する。此方に何さま、脫落（ぬかり）が有る。無禮な口上を言はれたとて咎め立てをも敢て爲（せ）ぬ。然り、斯ういふ場合に於ける此年頃の清盛その人としては咎め立てなど敢て爲（せ）ぬどころか、むしろ敢て爲し得ぬので。

「氣の毒ぢや」と、まづ謝まる。

せゝら笑ッて、「氣の毒を御承知か？　情無い桓武天皇の後胤でござるよな。天下の鎧師に嘘吐いて、弓矢の罰が當たらぬかな。此若狹掾の拵へた鎧召される時んば、お身體からして鹽磨きにして、含嗽までよく／＼爲されなければ鎧罰が當たり申すべい。餘りな物ぢやわい」と高胡座に鯱張り出す。

平手で上から下へと伏せ／＼、「もッともぢや。何しろ己が悪かッた。實は疎かにする氣ではなかッたが……。」

「宣ふな／＼。疎かにする氣でござらなんだとな？　それ、其口から僞りぢや。疎かと爲さらいで、何で天下の若狹掾に手を明けことやるやうな事遊ばした？　これ聞こし召せ。晴れの鎧として着る故、若狹掾どうか宜く賴むと殿は現在仰やッたろ？」

「……………………………」

「默ッて在されずと御返辭召され。」

「そりや言ふた。」

「その時、此若狹掾は殿に何と申したか。御忘れか。」

「忘れぬわ。」

「忘れぬならば、うむ宜しい、其時殿が宣ふた口上を今一度仰やれよ。」

「今一度とは？」

「お忘れか？　それ、忘れぬと仰せられる其口で問ひ

直すとは何事かな。自慢ではござらぬが若狭掾は天下一ぢや。天下唯一人の鎧師ぢや。氣に入らぬ注文ならば、たとへば金攻めに攻められても、いッかな肯かぬ骨節ぢや。御承知ぢやろ？　若狭掾が何と申した？　お鎧もお造り申さうが、さてお造り申すとならば新らしい一工夫を致して見たい、それには狐の生き皮をぢや、それを二三枚是非欲しい、綿嚙の裏打ちに半枚だけ、胴裏の裾回りに一枚半、それから双の脇當てに一枚、と斯う某は申したろ。」

清盛は只頷いた。しんみりとした樣子である。睫に露も有るやうな。

「その時、殿は何とお言葉お番へか？　心得たと仰せたろ？　心得たと仰せたのは約束履まぬとの譯でかな？　十日の間に調達して屹度使はせるやうにすると、斯う迄仰せたろ？　今日はそれから幾日かな？　それとは已は知らなんだ。一圖者の此已めが殿の出任せに欺された。祕傳の膠をも煮はじめた。煮はじめてから頓て十日目、今日こそは殿の許から狐の生き皮寄越すぢやろうと、されば夫が待ち惚けぢや。殿は御承知無いか知らぬが、祕傳の膠の煮方でござる。それ丈の日切りに由ッて、炭の入れ方から炭の焚き方までに加減の要る譯なのぢや。」

驚いた！　始めて聞く。

清盛又も胸轟く。

驚くも驚く、やゝ呆れもして、殆ど片唾を飲むばかり、つひ挨拶も出來なくなッて、全での無言で縮み切る。

「何遊ばした！　お返辭無い？　ちやらうとも〳〵、一言もござるまい。然ういふ喧ましい煮方の膠ぢやと言ふ事を前から知ッてござッたか、それとも今始めて聞くのでござるのか。どうでござる。」

聞けば穴へも入りたくなる。

「されば、甚だ恥かしながら、今始めて聞き申す」と言葉からして悸けて來る。「嗜みの悪い武士ぢや」と一喝の退引させぬ。「狐の生き皮綿嚙や何かの利き所に使ふ位を小耳に狭んで、その膠の如何やうな喧ましい物か位を

露ほども御存知無いといふ、それこそ往く丈の道を知ッて歸りを知らぬ阿呆ぢやい。阿呆と言はれてお腹が立つか。立つまいが。いやさ、立て得られぬでござらうが」とそろ〳〵聲まで震へて來る。

一寸默ッた。

「名門のお胤と思ッて、つひ己が和殿をば買ひ被り申したよ。狐の生き皮を鎧に注文召さる程の殿、嘸かしな鎧師が製作に如何ほどの千苦萬辛を味はふであらうぞとお察しもござらうと、つひ乘り地に爲ッて引き受けた、此己はじめ阿呆ぢやわ。淚が出る」と目を擦る。

清盛は句も返せぬ。

「やれ〳〵、一言もまだござらぬ。情無い桓武天皇の御末ぢや。今更某も繰り言ぢやが、切めては物不識への敎訓かた〴〵膠の事を申して置こ。狐の生き皮すなはちまだ〳〵脂の有る皮、それをば只の膠では旨く貼れぬものなのぢや。偈を誦して神氣を打ち込み、斷食不動の苦痛を忍んで、精根煮るか膠煮るか、膠の中に精根煮込むか、精根に膠煮交ぜるか、と、斯ういふ心の骨一つに、潔齋して日を限ッて段々に煮るのぢやわ。その日取りを偖何うぢや。殿は音沙汰無しではないか。膠は無駄に爲ッたのぢや。」

「膠が無駄に？」と我知らずに。

「勿論でござるとも。」

「煮直す事も？」

「味噌ではござらぬ。」

「さらば〳〵、吁、然らば、掾殿は夫迄にして皮を待ッて、遂に膠を只空しく………」

「捨てる事と爲ッたのぢや。」

全く始めて聞くのである。それほどの一大事であッたのか。痛々しい、氣の毒な！

十

一寸の餘裕も無い契約を
眞の眞の契約と言ふ

清盛は眞實困ッた。

「決して惡氣で爲たのではない」と、まづ手を合はせぬばかり、聲柄をさへ掠ませた。

「聞けば聞く程何と言はれても文句は無い。只實に謝ッた。さりながら約束をつひ後れたといふ事、それに實は子細も有る。それ言ふは譯も無いが、さりながら〳〵、また言ひ譯めくのでな……」

「何を煮え切れぬ事仰やるぞ。言ひ譯がましい故言ふまいと仰やるのは實は言ひ譯がましい言ひ譯を何うか聞いて貰ひたいと、裏から捏ねられるお心ぢやろ。お若いわ〳〵。若狹掾といふ鐵の神にそんな祈願は駄目でござる。えッへゝゝゝゝ」と空々しい。

くわッとなる。

待て暫し、此所が分別の爲所ぞと、その躍る胸を窃かに撫ッて、

「さうぢや。言ひ譯申すまい。さりながら若狹掾、淸盛も謝る丈は謝る。和先生も男ぢやろ。謝る者を土足に掛けて、いつ迄も窘めまい？」

「あはゝ、そろ〳〵逆襲ちか？　一寸巧いな。」

「いやさ、これ！　淸盛はまづ謝まる。」

「宜しい。和殿もまづ男ぢや。」

「和先生もまた男。」

「よし、若狹掾もまた男。そこで若狹掾といふ男に和殿が何と遊ばすのぢや？」

「もう一日待ッて賜。」

言葉が何うも妙に凄い。

「待てとは？」

「破談を。」

「ふむ妙ぢやぞ。破談を待てと仰やるからには、今日なら今日明日なら明日まで……。」

「されば」と早もう妨げて、「明日一杯まで待ッて賜。明日中に狐の生き皮かならず數だけ取り揃へる。」

「ふゝむ！」と些し冷笑した。

「伊勢の小殿！」と開き直ッて言ひ方から改まる。「念押すが、屹度和殿は男ぢやと仰やるか。」

「弓矢に掛けてぢや。」

「屹度ぢやな。可し！　さすれば屹度明日中に狐の生き皮かならずお屆け遊ばすとな？　屹度ぢやな。」

「受け合ッた。」

「ふむ、なるほど。些しは骨がお有りぢやの。二度三度押し問答して、鐵聾でも聞こえるぢやろ。しかと若狹掾の言ふた事がしかとお耳に刻印を打ち込んだろ。可しさらば若狹掾も最う一日だけ我慢する。」

頑固がやッとの事で折れて呉れたかと思ふと、清盛はまづ嬉しい。

嬉しいが、されば〳〵、又しても大きな苦勞も有る。日を切ッた！　而も一日だけしか無い。その間に狐の生き皮が果たして手に入るか何うか。

「さらば、小殿、言葉は番へ申したぞ。捨てやうかと思ふた膠を今一日だけ火に掛けて又一日だけ練ッて置く。膠鍋に火が入るか、和殿の顏から火が出るかは明日一日が限りぢやぞ。罷り歸る」と、づんと立つ。

憎い！　偉い！　凄味が有る。忌々しくもある。また氣高い。思はずも頭が低がる。さりとては禮にも篤い。若狹掾を沓脱ぎまで慇懃に送り出す。

父忠盛に事の子細を打ち明けたものか知ら。また御心配の種でもあらう。そればかりか場合ひが場合ひ、或ひは叱り飛ばされて、手も足も出なく爲せられるか知らぬ。言ふまいと決心した。

狐の皮をば何と爲やう！

買ッて間に合ふものならば、まだ何とか工夫も有る。買ッては迚も間に合はぬ。生き皮である。生血の滴れるのを其儘でなければ爲らぬ皮である。間に合はせ物では何うにも爲らぬ。

狩りに出るより外は無い。

勿論京地に狐は多い。狐所は諸方に有る。狩り場に事は缺かぬ。而もいよ〳〵捕らうとした所で、時の運といふものも有る、たしかに二疋捕れるか何うか。

弱い音は吹くまいぞと更にみづから氣を勇ませた。

何所が可からう。

「蓮臺野ぢや／＼」と我知らず呟いた。「此程も雨の降る夕間暮れ、あの野で狐を見受けた。幾匹も居るらしい。捕り樣に由ッては二疋が三疋でも……可し、決心した以上早いが可い。わが鏃呑む運命の狐めもそれこそ狐疑する間には逃亡して了ふわい。」

一圖心！　一圖心！　果然、いつもの一圖心が火のやうに燃え出した。盗人を捕まへて置いて繩を綯ふやうなと、みづから冷笑ふやうな氣もしたが、更にまた其上から掩ひかぶさる一圖心が闇雲にその冷笑を押し伏せて了いもする。

わが邸ながら身を竊ませて忍び仕事のやうな忙しさ、狩り裝束に改まる。手任せに箭を五六本抜き取ッて身に着けて、

「はてな、箭を吟味して置かうかな。」

一本の箭を擇り出して、日に翳して反りを見たが、急にまた舌鼓し、

「馬鹿な！　今更慌てゝ箭を見たとて運命が何う變はる。吟味は日頃にある事ぢや。一大事の際となッて、呑氣三昧、あゝ馬鹿な！　廢止ぢや」と其箭を本へ戻す。

しかし、又も氣が變はる。

「然うでない。吟味するのが可いか知ら。萬一不覺を取ッては爲らぬ。吟味、吟味、吟味に限る。」

又箭を抜き出した。それならで又も／＼又しても氣が變はる。

「駄目な！　今更何狼狽る。嗜みは日頃にありぢや。また而も運命ぢや。運命が好かッたら、梵天の加護が有る。曲がッた箭でもよく當たる。よし運ぢや、神佛ぢや。」

とう／＼運へと運び附けて、更に神佛へと押し付けた。大梵天、帝釋天、八百萬の神々たち、いづれでも宜しい故、どうぞ御加護を賜はれよと、萬屋向きの落着となる。

裏門から出さうにする。若侍にはたと遇ふ。

「おッ、然うぢや、和郎に言ひ置くのを忘れた。己は

急に思ひ附いて今蓮臺野まで行くのぢやわ。父上がお尋ねなら、宜しくと申してな。」

「蓮臺野へとな？」

「うむ、狩りに。」

「狩りに？」

「狐を！」

「これは〳〵。さらばお伴は？」

「一人で宜しい。いやさ、伴は要らぬわよ。」

「お糧は？」

「要らぬ。やがて歸る。夕方までに歸らなんだら干飯を少々持ッて來い。行くぞ。可しか、心得たか。」

つッと外へと飛び出した。

直走りに息も吐かぬ。

「神佛々々、日本國の清盛にお慈悲賜はる御心ならば、野狐をどうぞ〳〵矢面に立ち現れさせて賜はれよ。伊勢平氏の嫡流が鎧師に口を割られて、茹でられるやうな苦しみなのを何うぞお助け下されてな。」

只是だけを繰り返す。蓮臺野々々、どうぞ野の神、山の神、土の神、水の神、どうぞ祈願を聽き入れて、清盛を助け下されよと、口でも刻む、足でも刻む、脂汗をも搾り出す。

野は早朧に暮れかゝる。

風は雜草を吹き煽ッて、雜草も意味有りげな亂舞のやうな袖を振る。後れ迷ッた小鳥が五六羽高低の線を描いて對向の方へと逃げて行く。

すは！　狐！

目の迷ひでは無いか知ら。

さうでない。狐である。草の茂所の切れ合ひに狐が果して一疋居る體

清盛胸は只躍ッた。されば狐と見た以上、もう此方から進まれぬ。進めば狐は逃げて仕舞ふ。

立ち縮みに足を駐めて、又しても口の内で神佛を繰り返す。

狐は此方を見詰めて居る。

灰色の毛のやゝ交ッた老狐である。牝の腹が下がッて頸筋が瘦せて居る。

と見る間、一疋と思ッたのは二疋に殖えた。同じやうな大きさなるが又一疋牡か知ら。否、否、否、またその上に一疋出た。子狐である。

天の與へか、吁、三疋！　偖こそな神佛の御加護か。

清盛は夢心地に爲ッた。どうしたら可いか知ら。三疋は一箭で射れぬ。一箭ならば一疋は仕留められはする。二疋は逃げる。あたら三疋一度に縫ふ調法な箭は無いか知ら。切ッて放す途端弓をでも捻ッたなら、一疋から二疋、二疋から三疋と、順々に箭が旨く曲がッて飛んで、三疋を一つに縫ひ透して吳れるか知らと、出來ない相談までも考へる。

狐も、しかし、逃げもせぬ。一齊に清盛を凝視する、その目付きの凄さ恐ろしさ、火の燃えるかの色である。

そろ〳〵弓に箭を番へた。

親狐は音を揃へて異様な呻り聲出した。

きりゝ〳〵と弓絞ッた。

親狐は——親のその牝狐はわが腹の下へと子狐を搔き入れた。

親のその牡狐は前屈みになッて、兩手を揃へて、牙を張り目を怒らして、射らば射よ、射拔かれたら射拔かれたで、射拔かれた儘の血の身體で汝清盛めに喰ひ附いて咽喉笛に孔開けて吳れるぞよと、宛も言ふかとの氣色である。

何の狐の二疋や三疋、怖ろしい所は無い。但し、見す〳〵共三疋の、死に瀕した末期の憂苦に絕望の意氣を閃めかすかと思ふと、すはや容易ならぬ氣持ちがする。

十一　同情に欲も捨てる弓をば、又射ぬ箭で獲物得る利益と言ふ

「うんむ、無理も無いわよ、な」と清盛腹から搾り出した。

腹から搾り出すと均しく、何と無い淚が又眼からも潤

み出る。

「無慚ぢやな。射れぬわよ！」と弓持つ拳震はせた。

狐は一歩も退かぬ。眼光いよ／＼照りきらめく。

「射らうかな？ 譯も無い。此構へで切ッて放たば、牝の肋を突き抜いて子狐のを縫ひ透して、而も牡へと矢は及ぶ。天の命か、佛神の御指示か、三疋斯くて巧く射よとの默々たる御暗示か。」

弓はきり／＼鳴つて居る。

此所で／＼此狙ひで、いざ／＼射て下されよと箭の尖も微動する。

あはれ、三狐の命の根は矢筈捻ッて只押さへた清盛の右の手の指の力に既に押さへられて居る。切ッて放すか。鏃三寸、篦一筋で三疋の命は無い。

牝はぢり／＼身を進める。

牡は悲痛の音に呻る。

牝は飛び附かうとの必死である。牡は哀れをまだ／＼乞ふ。

「無慚や、牝が強いぞよ」と清盛も只悶えた。「弓は鳴る。矢は顫く、射た以上、己の若衆掾へ番へた言葉が活き返ッて男としての顏が立つ。しかし、憐れな三疋を親子揃へて呼吸無からしめて、拭へぬ罪を己は犯す。武士としての一分が尊いか。人間としての道が尊いか。」

末の一句は神である。靈活動する神語である。森嚴の氣が五體に湧いて身は武者震へに顫へ出す。

暫時、狐と相睨む。

矢筈押さへる手の指はやうやく痛みを感じて來る。

「やをれ、天王伊賀尊女！」と言葉から改めて「清盛、鎧を諦めたッ！ 斯うぢや！」

弓を空へと仰向けて、兵弗と射て放せば、箭は中空へ一直線に雲雀上りに衝き上つて、やゝ姑らくして本と末とが向き直ッて、光りの如く地に落ちて、あはれ狐の腹潛るべき其鏃は土に縦に突き立ッた。

狐はいつか逃げて仕舞ッた。

逃げたとなると殘り惜しい。いや／＼、然うではない

と思ふ。箭を天に射上げたのが自分現在が爲た事やら、それとも他が爲た事やら分からぬ樣な氣さへする。弓からりと投げ捨てゝ、草の上えとぐたりとなる。

「諦めた、もう／＼鎧は諦めた。是からの清盛は若狹掾に思ふさま扱き下し罵られる。しかし、狐を庇ふがための、甘んじて受ける恥しめぢや。此所の我慢が男ぢやぞ。見ぬ昔ならば知らぬこと、眼前に親子揃ふ三疋を見て夫婦親子の情に動かされて、鬼が佛に爲つたのぢや。何よりも快い。若狹掾に唾吐き掛けられても、何の／＼腹は立たぬ。」

決然として意を定める。胸も何うやら落ち着いた。

野風が急に殺到する。

面に當たる其冷たさに始めて面の熱を知ツた。もう一刻も留まり得ぬ。さらば邸へと足元をやゝ立て直し掛けた所で、捨て矢の事を思ひ出す。

「箭を拾ツて歸らうわ。」

獨言ながらはツきり言ツて、箭の立ツて居る場所へ戻れば、その無心の箭にさへも無限の心が有りげである。

「捨てられぬよ、汝箭も！ 拔くぞ、そして持ち歸るぞ。あゝ汝わが箭もまた妙極はまる運命ぢや。狐の腹へ入らうとして、天へ登ツて地に入ツた。而も己れは土に潛ツて、いゝ慈悲を爲た汝ぢやぞ。己れは泥土に身を落として、外を助けた汝ぢやぞ。是から己も汝をば仇に射飛ばしては仕舞はぬわ。宜しいか、拔き取るぞ。さ、さ、邸へ伴れ歸る。」

箭にさへ頰摺りして呉れる。天眞の只の無垢、淨さながら水のやうな、何さま名の清盛の只清い心が伊勢の小殿に結晶した。

その代はり足も身も落ち着かぬ。

目的の狐の皮が手に入ツて、足も身も落ち着かぬと言ふのではなくて、眼前手に入るべき目的の物を故意と捨てゝ、それで足も手も落ち着かぬと云ふのである。

狐の顏が目に殘る。

手でも合はせて居るらしい狐の樣子が引き續いて、想

像からの目に浮き出す。
幻像も目には浮く。いよ〳〵足も宙には浮く。魂も何所へか浮く。浮いて〳〵、むしろ泳いで、日の暮れ切ッた闇の中を若狭掾の門へと來た。
胸まだどき〳〵とした。
「はッ！　入り難いがの。」
今が今まで浮いて居た足が俄に下へと吸ひ着いた。と言ッて逢はずには濟まぬ。
酒飲むと上議嫌な若狭掾とも聞く。願はくば酒飲んだその上議嫌な時でゝもあッて呉れよかしと、雲を目的のやうな事を考へる。
「いやッ、お待ち申してぢや」と若狭掾の銅鑼聲が奥の方から響いて來る。何所からか覗いても居たのか、聲は爲るが姿は無い。
是只實に夫だけの事實である。さり乍ら夫だけが清盛には夫だけどころには思はれぬ。やれ〳〵若狭掾も待ッて居たか、即ち待ッて居たといふ夫程のが、はい皮を持参しなかッたと聞かされるに及んでは其失望や如何ほどか、そして又其失望の餘りの立腹は如何ほどか、と、もう耐らぬ思ひである。氣の毒と思ふ故でもある。但し、又毒口を利かれるかと夫も苦勞なのである。注文したお客樣が注文された職人に對して、地位の顚倒したほどの氣兼三昧、心配三昧、要するに當時の武人が鎧師に對するとなると、殆ど頭の上がらぬ程の變妙な地位となるのが有ると言ふ事が如何に後世とは異なるか！
若狭掾は自身手を執らぬばかりにして、清盛を室へと請じた。好都合、酒臭い。
「お伴人は？」と若狭掾の目が光る。
狐の皮を持ッて來たなら何れお伴人の有る譯と若狭掾は思つて居る。
「あいや、某只一人。」
「なるほど」と妙な顏。何所に狐の皮を持て居るのか・と勿論訝る顏である。
暫時は清盛口が利けぬ。

やう〳〵にして「暮れ申したな。」
「はい？」と解せぬらしい樣子、「何がでござる。」
「いや日が暮れ申した。」
「なるほど、日の事でござのか。如何さま日は暮れ申した。」
「外もすこぶる暗くてな。」
「なるほど」と呆れ顏。
それなり。又も語は絕えた。
掾はそろ〳〵焦燥ッたい。
「今しがたお出でを待ッて前祝ひに一獻頂いた所でな、やう〳〵又骨折り甲斐の有る鎧を拵へる一道樂が出來るぞと甚だ心嬉しくてな、つひお出でを待ち焦がれて………」と、とろんこの目を据ゑる。
「されば、其事でな………」
「いかにも〳〵、其事で、なるほど………」
「其事で淸盛がな、今斯うして野からの歸りでな……
…」
「野？ なるほど、野狩り遊ばしたか。」
「如何にも野狩りを試みた。それからの今が歸りで、其儘、和先生の所へと斯う………」
「珍重々々、忝い時を移さずなどと忝い。某とても樂しみにして居ッた次第、いや、お行屆きの事でござる。」
「されば其事でな淸盛がな………」
「なるほど、美事三疋お捕りでか。」
「されば其事でな淸盛がな………」
「なるほど〳〵〳〵。運がお惡いと一疋も捕れ申さぬな。その代はり運がお宜しいと三疋が四疋でもな。勿論何事も心一つでな。某どもの鎧とても精血を膠に煮込んでこそ突き入れる鎗透しの切尖を食ひ緊めて仕舞ふやうな粘着の力が出るのでな。」
どうも〳〵返事が爲らぬ。一技一能有る人の一種の偏屈、自分極はめの事ばかり一人で承知し切ッて、了つて、淸盛に口開かせぬ。
「されば其事でな淸盛がな………」

「…………………」

掾も流石に返辭が出せなく爲つて來た。落ち窪んだ日を怪しくしよぼしよぼさせ始めた。

「奇妙ぢやな、今日小殿は？　何う遊ばされたのぢやぞい。其事でな〳〵を幾個仰やるつもりかの？」

「いや、其事で………あいや、其………實は今日野狩りに參ッた事は參ッた。參ッて今が歸りでな………」

掾は斯うなると氣が短い。

「參られたのも聞き申した。些ぐらゐ耳が聾でも、それはよく耳に注まッて居る。それからの歸り路、此所へ斯う立ち寄られたと言ふ事も疾くに〳〵聞き申した。それから何が何うでござる」と語末に旣に火氣が有る。

「いや然う言はれると、何とも痛み入るのぢやが、何か知ら、狐の皮は最う是非とも今日貼るばかりに爲ッてかな？」

「怪しからん。狐の皮が今日に限ればこそ若し小殿、日限まで爲たではござらぬか、驚いた。何事ぢや。して見ると小殿は狐の皮を今持參なされぬな？」

「さればそのこと………」

「又！　又！　又！　その事も此箇も有りはせぬ。持參せぬ物なら持參せぬと何故早く仰やらぬ。わかッた。狩りに行かれぬのぢやな？」

「滅相な！　決して〳〵！」

「行かれしとか？」

「蓮臺野へ參ッたわ」と清盛の顏も紅くなる。

十二　空想の結晶したのを神祕實在の夢幻と言ふ

「蓮臺野へ狩りに參られて」と若狹掾の言葉附きは旣に冷笑となッて居る。

「なるほど行かれたかも知れぬ。しかし、素手で歸られた。狐は何所へか置いて來た。掾に言ひ譯しに來られた。まづは是丈でござるのぢやろ。ても偉い」と舌を出す。

「とツくり聞かれよ。徐かに申す。蓮臺野へは參ツたとも。其つもりなればこそ實は一所懸命ぢや。只一人件をも具せず……」

「あはゝ、支度が仰山ぢや。但し支度は宜しいわ。肝心の狐は何うでござる。蓮臺野ぐる〳〵巡られても、狐は影も見せなんだと、斯ういふ落着でござらうが！　腹が立つ」と舌打ちする。

「よく聞かれよ。」

「…………」

「幸ひにして狐は居た。」

「居た？　そして、逃げられた！」

「いや、逃がした。」

「怪しからん。捕りに行ツて捕りはせず、逃げられたのでなくて逃がしたのぢやと？　あはゝ、調法なものぢやよな」と、口を突いて舌を出す。

「狐は三疋たしかに居た。」

「その狐なぜ捕られぬ？」

「矢頃も好い。弓引き固めた。切ッて放つとした所で、不圖心付けば親子の狐ぢや。絕體絕命の難場に迫ッたその親狐どもの、その見るに忍びぬいぢらしさや。一箭に縫へる腕は鳴る。三疋を捕る弓も鳴る。腕も弓も鳴りは鳴るが、己の頭の中も鳴る。嗚呼射て捕るは譯も無い、而も掾への面目も立つ、さりながら見す〳〵血の涙溢させる其三疋と知ッて〳〵そして切り放す箭は持たぬと、己はきッぱり思ひ切ッた。」

膝震はして若狹掾はぢり〳〵乘り出した。

「清盛卑怯と言はれても、乃至虛言と言はれても、今日は管はぬとの氣になッた。番へたその箭は空へ射た。」

「空へ？」と掾は只一言、目を据ゑて舌を吊り上ぐる。

「射たとも〳〵空へ射た。無理な祈願を掛け申した天に向かッて謝るつもりで、箭をば空へ射上げたわ。」

「狐は？」

「逃げる。」

「箭は？」

「地に立つ。」

「その箭は？」

「拾ッた。」

「持て來られた？」

「持て參ッた。」

「掾には其所で何と仰やる？」

「存分にして貰を。」

「ふむ。洒落た事仰やるの？」

「血の膠釜に煮させた、其膠だけの脂汗を清盛が是から掾、可しか、和先生の杖なり笞なりの下に立ッて、和先生の滿足する丈、絞り出して返さうわ。」

眞心で屹と言ふ、それだけは掾にも感ずる。附き穗こそ素氣無いが、情には脆い男である、やうやく涙をさへ浮かめて、

「あッあ、聞こえた、聞こえ申した。よく打ち明けて仰やッた。武士ぢや〳〵嗚呼武夫ぢや。鬼には刄、赤子には涙、是が武夫の本懷ぢや。出來ぬ事をよくも〳〵和殿はお忍び遊ばされた。宜しい、掾はもう怒らぬ。」

「怒らぬと？」

「見上げ申した。褒め申す。慈悲も情も我欲のためには蹂み躙ッて厭かうともせぬ世の中に、見す〳〵眼前に狐を見て、見す〳〵射るばかりに爲ッて、見す〳〵又約束を守らぬ以上此掾に不好な事爲れるのを御承知で、こゝへ來て謝るだけの優しいお心をその時狐に示された、其所がほと〳〵神佛ぢや。掾は天下の鎧師ぢや。掾が造ッた鎧一つで着る人のお生命まで保證して掾がお守り申す、獨極めの掾は神ぢや。その神が今は泣く。されば和殿の勇に泣く。心得た。」

「心得たとは？」

「心得た。煮掛けた膠は捨てゝも宜しい。和殿の魂は捨てられぬ。是から掾が和殿に代はる。」

「己に代はる？」

「掾が狐を取りに參る。」

「己のためにか。」

「御意にござる。」

「そりや斷る。」

その聲は凜とした。凜として而も底の底に太い響きが籠もツて居る。

「斷る？」と眉が寄る。

「諦めた以上、何もかも諦めた。已と和先生と共人は變はるとも殺生の罪は同一ぢや。氣の附かぬ昔ならば是非も無い。今斯う氣が附いた後になツて、人を變へて欲を變へず、無慈悲を人に指嗾して、已れが陰で綱を引くことゝ同じく罪の限りぢやい。」

「驚いた。」

「分かツたか。當たり前の鎧で可い。」

「當たり前ので宜しいとな？　さらば、生き皮などは使はず……」

「管はぬよ。」

「召して軍にお出やるか？」

「慈悲の化身として出るわ。地藏の權化として出るわ。

段々思へば思ふほど、已が狐を助けたこと、その時は偶然ぢや。しかしつら〳〵考へれば狐は妙音の一體ぢや。妙音天の一部ぢやわ。慈悲の神、溫和の神、愛情の神、幽婉の神たる、あの辨財天の一體ぢや。今やゝ已も海の果に遠山を認めたわ。宜しいわ、狐を助けたのを緣に、然うぢや、是からは陀天の法を已の渡りの綱とする。」

「陀天の法とは？」

「いやさ、何でも只已は狐助けた丈の心得で是からは軍もする。諸天の感應かならずおや。返す〴〵呉々も、若狹掾、折角の好意は忝いが、鎧は並ので宜しいわ。暇申す」と、突と立つ。

斯うなツては氣が短い。稻妻のやうな人である。一圖心、火の元氣、斯うと思ひ附くとなると、又矢も楯も有りはせぬ。急に强い意氣となる。容易には端倪すべからぬ矛盾のやうに一性格、呆氣に取られる若狹掾に禮のみは恭しくして、身は早外へと出て仕舞ふ。

十日の月が空にある。

濃縹の空冴えて、星の影の燦々と盛り上がッたやうな光輝である。東山の寢姿は只何と無く天の偉人が皇城を横目で見て長々しく寢そべッたやうである。

冷たい風が吹いて來る。熱冷まし遊ばせと吹いて呉れるやうである。胸只騷ぐが落ち着いた。胸落ち着いたやうで又騷ぐ。

「嗚呼、桓武天皇の後胤か！」と、つと涙が差し含んだ。

不圖見ると右は築地塀、此所も京都に有り餘るほどの藤原のやはり一家で、中には何の酒宴が有るか、笑ひさゞめく聲と共に琵琶の遠音が薄霞む。

「藤原め！」とはッたと睨む。「鎌足の御末が悉くあの樣ぢや。逆臣入鹿を滅ぼした人の末葉はこと〴〵く入鹿の二代目ぢや。橘が茂ると邪魔になる。そこで橘を刈りおうす。源が殖ゑると己れが浸る。そこで源を涸れさせる。平が廣がると己れが狹まる。そこで平を押し壞つ。」

琵琶は高音に爲ッて來た。いはゆる帛を裂く響きが外で聞く身にも浸みとほる。

「はてな、琵琶とは辻占かな。狐をも助けた先程からの今、而も辨財天を是からは心の綱と爲うと思ひ立ッた現の今、琵琶を聽くとは不思議ぢやな。うむ、斷腸の聲ぢやぞよ。」

築地の陰に足を駐めて、心耳をすまッたく虛無を浮かんで、やゝ姑らくは恍とした。

朧の夜氣が靡いて流れて、何の花かの香が漂ふ。それも天女の衣香か知ら。月の色もやゝ茫として病まひの窶れでも有るかの如く、小溝を下る小水は婀娜氣無く、いたいけな、罪の無ささうな舌音でひそ〳〵忍んで囁いて居る。

「此水が大海になるのぢやな」と詩的想像に囚はれた。「此水は何として鳴るのぢやろ。礫石の上を奔ればこそぢや。礫石の上を奔ッて身を裂かれ身を碎かれ、動くばかりで靜まり樣も無く、それでぶつ〳〵呟くのか。あッは、清盛見た樣ぢや」と肩を窄めて身ぶるひした。

ふと仰いで月を見た。

「いつもながらお麗はしい御姿ぢやな。下界にお降り遊ばしたら可からうな。嫦娥とやらいふ美婦人があの廣寒殿の中に居るとやら。ちと下界へ舞ひ下がッて、下界の闇を蹴散らかして、人も木も山も家も氷でこしらへた物のやうに透きとほらせては下さらぬかな。面白いな、然う爲ッたら」とまるで詩人の夢である。

薄朧の横の築地の陰に何やら眞白い人が立つ。

ぎよッとした。

足を駐めて目を凝らす。

距離實に幾何も無い。よく見える。蟬の羽織りの薄い〳〵被衣を只被り掛けたと言ふ丈で裾回りは生温い夜風に弄ばせて、白に近い潤み色の袷らしいのを着て居る。

ぎよッとしたとは言ふものゝ、女性と見た心持ちは惡くない。今も今しがた天女の事を思ッて居た。天女たる其神が今や下界に天降りして、夜露に濡れるのかしらと思ふ。

「いづれのお方さまでござるかな？」と肝一つで聲掛ければ、

被衣揚げてにこりとして、やうやく月の影を浴びる。蒼白い痩せ顔の、眼細く凄く吊り上がッて、鼻高く口尖ッて、手は殆ど肉が有るか無いかに、全で骨ばかりといふ細さである。

清盛は又ぞッとした。

「妾の事をお尋ねか？」と甲高いのを沈ませたやうな、底響きのする聲で言ふ。

「はい」と水打たれるやうな寒氣が爲た。

十三　人間が非凡になる動機を其人が旨になッた刹那と言ふ

「妾の事をお尋ねに爲ッたとて、何お答へ申す筋も無い」と上﨟の言葉は只氣高い。「心願の筋が有ッて清水寺へ參るのぢや。夜陰こゝらを彷徨はれる和殿も何かの心願か。心願は何でも立て召されよ。掛けても外れたがるの

は願ひぢや。飽くまでも心願は堅く強く立て召されよ。」言ひ〳〵顔を差し出して清盛の顔覗き込む。覗かれて却ッてぞッとした。我知らず一二歩後へ下がる途端、婦人は急に電光石火、一散に駈け出して、見る〳〵姿は朧に消えた。

遺された清盛は何が何やら亦分からぬ。是がそも〳〵空想や神祕觀に心を捉へられて居なかッた時ならば、この變妙な上﨟を然ふ深くは怪しみもせず、狂女ぐらゐのものか何かに見て仕舞ふ事でもあッたらう。

然るに、場合ひが場合ひである。

迚も然う平氣には見られぬ。

どうしても其上﨟が尋常人とは思はれぬ。尋常人とは思はれぬとして、然らば何と思はれたか。

狐としか思はれぬ。

「貴狐天王伊賀尊女は」と又改まッて清盛は狐を尊稱で言ふ以外、普通の言葉では言へなくなッた。「通力の有る靈獸ぢや。思ふに晝のあの狐が權に姿を現はして、已に謝恩の意味を以ての教訓を呉れたのぢやぞ。」

一圖に然うと思ひ詰めると、また然う思ひ附いたのが決して〳〵決して〳〵所以（いはれ）無い事とは思はれぬ。

「心願は何でも立て召されよと言ふたよな。全くぢや、それに違ひ無い。掛けても外れたがるのは願ひぢやと言ふたよな。全くぢや、是もそれに違ひ無い。飽くまでも心願は堅く強く立て召されよと言ふたよな。全くぢや、是もそれに違ひ無い。はて凡庸の言葉でない。超凡の言葉ぢやぞ。出世間と言ふても可さゝうな言葉ぢやぞ。嗚呼、晝助けたあの狐の、實に〳〵教訓ぢやぞ。忝い、畏いわい」と思はず涙も浮かみ出す。

狂と言へば狂でもあらう、愚と言へば愚でもあらう。但し、人間をして他力以上の自力を信仰させ、唯我の操を張り立たせ、火水をも敢て辭せぬといふ迄の、或る意味に於ての盲の勇氣、汎く言ッての強い元氣、卽ちそれを起こさせるといふ微妙の起因は實に斯くの如き刹那に在る。

身も超凡と思はれる。

月は依然として大虚に懸かる。但し、月のその面上にも嫣たる微笑が浮いて居る。

雲も緩やかに流れて居る。但し、雲のその歩みにも浮き足の舞ひが見えて居る。

森羅萬象皆動く――皆嬉しげにゆら〳〵する。天語も何所からか風に乘ッてそよ〳〵と傳はり來る。

「忝い辨財天！ 思ひ出す事も有る。辨財天妙音陀天、此姫神を信仰すれば福德圓滿富貴自在、人間の望みは一つとして遂げられぬと言ふ事も無く、一生を酒池肉林、紅粉綺羅の間に埋めて、身は乳で養はれ、肉裀で暖まッて、必らずしも徐福を求める迄でもなくて不老不死の妙を得て、老骨いつも若返ッて紅顏百年に及ぶと言ふ。さりながら、其福德を己れの一生に吸ひ取ッて仕舞ふ丈に子孫末代の榮華の根をも同じく吸ひ枯らして仕舞ふとか、されば是が何うしたものか。」

心はすこし躊躇する。躊躇、しかし、迷ひは矢張り迷ひである。而も〳〵物欲に渇して居る貧苦沈倫の場合ひである。理想は快樂と落ち着く。

「何の〳〵子孫の事が何となる。身の一生が大事ぢやわ。陀天の法を修行して、己れに子孫の福分を吸ひ取ッて仕舞ふといふものならば、子孫は子孫で又も又も同じ樣に陀天の法を修行して、順おくりに又の子孫のその又子孫の福分を吸ひ上げろ。天地は無窮といふものを、斯うしたとて難有るまい。思ひ附いた決心ぢや。拾ひ取るより束で取れ！ 南無辨財天、妙の姫神！」

いつか双手は合掌した。後の嚴島の大工事までを創め立てる默契が此時に既に催したとも其身さへまだ氣も付かぬ。

茫然として歸邸した。

おや、白河殿の聲が爲る。

偖はいつの間にか母御前はお歸りに爲られたのか、誰が中へ立ッて口を利いたのでも無かつたらしいのに、只もう御機嫌が直られたのかと、急に情無いやうな思ひがする。

されば、是が毎々の事、いつも極まつたやうな事である、それ丈それが情無い。

　いつも母白河殿は父忠盛殿と喧嘩する。三十以上の清盛といふ大きな兒の前も管はぬやうな毒口を吐いて父を扱く。それで毎でも中御門家や或ひは御所などへ出て行ッて、やがて又歸ッて來る。今日もそれなのか。お歸りは毎もより早い。天氣でも變はらぬか。否、否、天氣などは何うでも可いとして、さう我儘に妻風情に捏ね回されて居る父君かと思ふと、即ち又伊勢平氏々々々々と世の中から見縊られるわが平家が無念に思はれて、結局それでも亦情無くなるのである。

　此頃の清盛には見る物聞く物悉く悲觀の種である。何事も情無い。母にさへ隔てが有る。自然、迷ひが出ずには居ぬ。何事にも只迷ふ。神佛を心の綱にいよ／＼又爲たくなる。

　「南無陀天！」と合掌して、父の居間へ行くつもりで、小廊下を行く途中で、ぱッたりと出遇つたのは、嗚呼、白河殿なのである。

「清盛か？　待ッて居た。和郎が歸ッて來たならば、早う／＼相談せうと思ふてな。さ、さ、ともかくも此方へ、よ。」

　いつも喧嘩の揚げ句は斯うでない。當の相手でもない者にさへ隨分怒りを移される。今日は全で然うでない。而もあはれや、是だけの瑣細な事、それ丈でもう三十男の武士の身が又一方ならず心嬉しいやうである。

いそ／＼として座に就けば、白河殿はぴたりと寄る。目に險しい色が有る。

はてな、心得難いお顏である。清盛に向かふ御樣子はいそ／＼とした樣で、お顏付きはと言ふと只凄い。

「父君の御樣子は、和郎少しも心付かなんだか。」

どうも分からぬ言葉である。

「父君が何う爲された？」

「妾としたことが好い機に歸り合はせたわよ。妾の一時一寸此邸に居なかッた事を、和郎御存知は無かッた

か。」

「存知して居り申す。」

「父君が言はれたか？」と些しその眼に露が有る。

「父君に委細聞き申した。その事に就いては清盛からも母君へ何か申し上げうとも考へて居り申したが、今案外早くお歸りに爲られた以上、それは夫で後でも宜しい。どうも只御樣子が何やら尋常では在されず……」

「さればぢや」と乘り込んで挿まッた。

「父君が御惱氣ぢや。」

はッと爲ッて息詰まる。

「されば／＼、其やうな御樣子は和郎がお見申した時、無かッたが？」

「一向に！　但し、その御惱氣とは如何やうな……」

言ひ掛けて、それなり答へをも待たず、急に立ッて行かうとする。

「待ちや」と制めて、「お熱ぢやよ。」

「なるほど、御風氣はござッた。」

「譫言を仰やるわ。妾を見れば、清盛かと仰やるし、女童を見れば白河殿かと仰やるし……」と漸く涙含んで居る。

「熱病で在すよな。」

「ぢやらう、喃。加茂の阿闍梨迎へ申さうか。」

「さればな。阿闍梨も勿論でござらうが、典藥も迎へ申さんでは……」

「叶ふまいか知ら。」

「とにかく拜見致さうわ。」

父の許へと行ッて見る。白河殿も跟いて來た。

なるほど、父は蒼冷めた。熱が外へ現れぬ。半開きに眼を開いて、うつらうつらとした樣子、清盛の顔見たやうで、それで何とも口は利かぬ。

「父上！　もし父上！　清盛でござる。もし父上、清盛でござるわよ。」

答へは無い。言ふ丈の此方の言葉に反響の無いほど物淋しいものは無い。のみならず、室は闃とした。次ぎの

間に女童か侍女かは居る。それも只閑とした。一切が閑とした丈、閑たる其寂寞が却て或る意味の音響らしく耳底に徹るやうである。

熱の臭氣がぷんとする。

手を執ッて、「もし父上！　清盛でござるがな、お分かりはござらぬか。もし父上！　清盛でござるがなア………」と、末の「なア」には怨みが有る。

白河殿は聲潛めた。

「只眺めて居ッたのみでも詮無かろ。」

「さればな、御重態でござるよな。人々は何れにか………」

「先程までは詰めて居ッたが、餘り人數のみの多いのも御病氣に障ることゆゑ、遠ざけて皆退かせた。」

「經盛や教盛は？」

「驗者の許へ赴いた。」

「その他は？」

「家盛と賴盛とは交代の今日の番で、禁裏の方に詰めて居る。忠重と忠教とはたしか邸に居ッたがな。しかし清盛一同の事を然う聞き正して、和郎何とする心ぢやな？」

「何とする心といふ程でもござらぬが、どうでも此御病體では典藥の手煩はすより外はござるまい。」

「それで？」

「經盛なり誰々なり二人か三人を使者として典藥呼ばせやうかと存知てな……」

「その事ぢやが」と眉寄せた。

十四

病んで藥も服めぬのを
貧の苦痛の極と言ふ

寄せた眉を白河殿は容易には解きもせぬ。

「典藥を呼ばうとは妾とて思はぬ事も無かッたなれど、和郎とても知ッての通り、此平家の今の有り樣ぢやろ。祿の物は手に入れぬ前から商人の手に渡る。典藥は其邊を知る。たとひ急病ぢやからとて、火の使ひを差し立てたところが、動いて來るとは思はれぬ。和郎はじめ

知ッてぢやろが、子孫達が斯う多い此邸でも、大抵の病氣には典薬などを呼びもせず、加持の祈禱で濟ますぢやろ。典薬呼びに誰かを行ッて、旨くと思ふかの？」と思ひ入ッての様子である。

あゝ又切無い事を聞く。典薬を呼びたくても、身の貧に肩身が狭くて、それさへ控へ目にされると言ふ、それが抑も何の家か？ 殿上の身でこそない。但し、全での土民でもない、八九代は離れたところが、桓武の帝の御末である。

「如何にもな。母上の今の仰せは如何にも御無理ではござらぬ。是につけても家より名より世の中は力と金と、只是のみでござるよな。」

「と、口丈で言ふのみぢや。」

冷かす意味で母は言はぬが、冷かされるやうな意味にさへ、清盛の身になると僻んで聞かれる言葉である。

「情無い。いかにも〳〵只今は口だけぢや。但し人間いつが何時まで必らずしも貧苦の沼で泥試合ひしてのみは………」

「と誰も思ふわよ。」

「思ふ、それ故何うなのぢやと母上は仰やるか。」

「怖い顏を爲るよ、喃。さりながら世の中には家柄といふ物が有る。生まれ附きの運といふ物が有る。蒲公英は幾ら育ッても雲衝き破る杉には爲れぬ。」

「爲れぬとな？」と又しても腹は煮えて來る。

「如何さま母上のやうな藤原家ならで、三槐をお實家の庭には植ゑる。蒲公英など踏みこくッても、何の事と思し召すまい。」

思はず血氣に驅られた儘、胸中の何が何うとも分からぬ有耶無耶を我を忘れて吐き出した。當たり前ならば賣り言葉に買ひ言葉、而もわが良人と喧嘩さへして一旦家を出て今歸ッたばかりの白河殿が、にくひ我子が言ッたとしても聞き逃がすべき言葉でない。

さりながら、其所は夫婦でもあり、また母子でもある、白河殿の胸の中は良人の病氣に對する苦勞、只それで鉢

切れた上、また外ならぬ子と差し向かひなのである。負けじ魂の毎もの人が言ひ爭はうとの樣子も無い。

涙を浮かめて聲震はせて、「又しても共樣な憎體口、ともすれば和郞は父上の味方ばかりを爲したがるわ。」

「母上、しかし………」

「いや、宜しい。父の味方をする我子を母は些しも憎まぬよ。」

淸盛は涙含む。

「そこで典藥を何とする？」

「さればな」と考へた。

經盛にせよ、敎盛にせよ、どの弟が居合はせたとしても、倖今のやうな火急な場合ひに、弟を行るのも心元無い。

「淸盛が參り申す。弟を行ればと言ふたとて、是が當たり前の掛かり合ひで、典藥がすぐ承知して吳れて、駈け着けて來るといふ事ならば、それで難もござるまい。」

「何さま、素直には來ぬか。」

「と、確かにも申せぬが、欲張りの典藥でござる。」

「四の五のと又言ふか知ら。」

「必らず言ふかと存知申す」と、言ふのも甚だ口惜しげに、「伊勢平氏々々々々と口にさへ出して言ふ彼の典藥でござるものを、正面から只賴み申すと言ひ入れても、四の五の言ふに相違ござらぬ。勿論欲張りでもござるが、淸盛がひそかに承知して居る彼奴の弱味もござるのぢや。淸盛が參る以上、その弱味を種として、宜しく操らうかと存知て。」

「はて妙ぢやな」と稍莞爾、「面白い事を和郞は言ふ。何かその弱味とやらが有ッて、巧く言へば參るのか？」

「中御門殿の側室のお方、な………」

「枯野局か？」

「御意にござる。その枯野局のお妹、な………」

「桔梗局か？」

「それ、それ、それ！　あの局が上の御愛を蒙る前から典藥は心を寄せて居つたのが、いつやらの花の御宴後

の朧夜に、渡殿の或る所でお袖引いたのを……」

「それか。聞くは始めてぢや。」

「でござろ。所をまた機も機、某の此目に駐まツてなあはや有司の耳に入れうと共趣きを示したところ、平謝りに謝ツて、どうぞ／＼宥してよ、その代はりには機も有らば必らず恩を返しもする、と斯う神掛けて誓言ぢや。」

「しかし、清盛、その樣な事も有ツたらうが、その桔梗局ではないか、今の典藥の北の方は？」

「御意にござる。」

白河殿は言ふに言はれぬ、極まり惡氣な顏である。

「清盛、和郎ゆゑ何も知る。妾はじめ隱しもならぬ。他の事言ふとすれば、まづ現の己れの身から他に言はれぬ樣にして置いてゞなければ、口を割られるではないか。典藥が桔梗局を北の方と爲されたのも、恥かしながら和郎の父君が此妾を妻と爲されたのも同じ筋道ではないか。」

如何にもわが母白河殿は御所の官女の身であツた。そして餘り芳ばしくもない所行で、父忠盛の室とは爲ツた。一圖に思ひ揣る身の特質とて、つひむら／＼と爲ツた餘りに、典藥の陰事など言ひ出したが、結局わが親夫婦の若い頃の、是また褒められぬ陰事を明からさまならしめる樣な藪蛇と爲ツて見ると、些しは悄氣て來なくもない。急に話頭を逸らす丈がいかにも大人しい所である。

「餘事は何うでも宜しうござる。何に致せ、右の次第、卽ちまづ一切は腹に包んで置いて、兎に角賴む心は宜しく／＼典藥に賴んで見ると致し申そ。もとより御壯健の父君ぢや。大熱に浮かされ遊ばすと言ふ丈で、手當てさへ然るべく行かば、何の掛念もござるまい、只手後れが怖うござる。清盛すぐと參り申す。」

二の足は踏みながら白河殿も心は嬉しい。假令典藥が何と言ツたにもせよ、清盛が何うにか纏める事であらうと、浮き立つやうな心になる。

「父上！」と清盛は父忠盛の枕邊にする／＼と差し寄ッた。「父上！　父上！　清盛でござるがな、是から典藥

を迎へて參る。暫らくお待ち願ひ申す。父上！　な、な、父上！」

　返事は無い。

「宜しいわ、清盛、お暇乞ひはもう宜しい。早く行け！」

「はい。さりながら、一言だけ。父上！　是は爲たり、まだお熱は其儘か。」

「清盛！　早い方が可い。」

「はい〳〵〳〵。さりながら若し父上！　うむ、お目開けられた。父上！。」

「清盛！　急げと言へば清盛！　妾が代はる〳〵。一刻も早いが可い。一刻も〳〵〳〵。早く〳〵〳〵。」

　急き〳〵立てる母の心根、思ひやれば亦慘ましい。

「はい」と漸く身を引き下げれば、

「作人は？」と細かい所に、流石は其所が母である。

「要り申さぬ。」

「さらば早く、な、うん、可し〳〵、藤原殿は祈禱のため清水へ參られた。歸りやッたら此母から宜しく〳〵申して置く。」

　藤原殿は清盛の北の方、重盛の母である。

心得たり承知したり、宜しくまた飲み込んだり、傍から見ては可笑しい、當人は烹られるやうな苦しみの八人藝で、とつかはとして清盛は母の前を退出した。

　小廊下を傳はッて奥へと行けば、まだ子供の重盛は快げに睡ッて居る。

　寢顏見てにこりとして、また安心したやうな心持ち、如何なる時でも叶ふかぎりは夜一度づゝわが兒の寢顏を見なければ安心が爲らぬといふ、特別の親心が毎も渝ッた事も無い。

　まだ儀式張るほどの家格でない。すッと裏門から誰にも送られず只一人で邸を出て、直垂姿の只見すぼらしく、砂勝ちの道をざくり〳〵、高辻の北の果なる典藥加茂家を音づれた。

　小座敷に案内されて待つ。

典藥の威は強い。出迎へに出るでもない。やがて若侍が命を卿んで、此方へと更に清盛を導ひて、主人加茂殿の常の居間へとやうやくにして連れて行く、

「さ、さ、御遠慮無く、すぐ此方へ」と典藥の挨拶は其若侍などの待遇とは大分違ッて、頗る慇懃な所もある。前に粗食を味はゝせて後の美味を猶々美く感ぜしめうとのいつもの傳、お客扱ひは慣れて居る。

「早速勝手を申すやうでござるが、何うぞ火急の場合ひとて、悪しからず思し召し願ひたい。實は父の病氣でござるがな、大熱で人事を辨ぜず、只當惑いたしたのぢや。突然で恐れ入るが、願はくば典藥の御骨折りをと、即ち斯くは突然に……」と重言をさへ繰り返す。

にたりとして、「困ッたな。」

それ丈で何を考へるか言葉はふッりと切れて仕舞ふ。困ッたなとは何ういふ意味か？　忠盛の病氣は嘸お困りであらうとの意味か？　それとも自分を呼びには來られたが、何か差し支へでも有ッて、それで困ッたとの意味か？」

十五　憎んで呉れる人の强面さを　勵まして呉れる人の情と言ふ

何と返事の爲樣も無い儘に、清盛は只無意味に「はい」と一言受けたばかりで、その後は扣へて居る。

清盛の顔見おろして典藥は稍苦い顔。

「御嫡男の和殿ならば、大抵の事御存知ぢやろ。地藏の顔も三度と申す。まして此典藥など猶更のこと、人間ぢや。まア凡夫ぢやな。胸によく手を當てゝお考へに爲ッて欲しいがな。」

言外の餘意は如何にも分かる。言はれぬとて正直者の身には强面い。それを松葉いぶしに燻されるのである。

「御尤もでござる」と頭を低げた。「其邊の事も存知せぬではござらぬが、何を言ふても急な病まひ……」

「病まひは何れ急でござる。前もッて何日何日發り申すと斷ッて發る病まひは先無いものでござるわい。人間

として世に立つ以上、御自分達のお身體が病氣の畠ぢやと言ふ事をあらかじめ覺悟して置かれるのが當然の道でござらうが。」

それ式の事知ッては居る。お說教聞きに來たのではない。さり乍ら、猾い鷹には餌を飼へとやら、一寸低げるべき頭も二三寸低げねば爲らぬ。

「御尤もで。」

「でござろ？」

「御尤もで〳〵。」

「勿論病まひに罹られたら罹られたで宜しい。然る時には當然の、要る物が要るといふ事をお考へでござらぬか？」

「されば、其所が……」

「あいや、待たれい。いつ何時病まひに爲るか知れぬと思ッたら、典藥ならば典藥へ夫だけの附け屆けを怠らぬやうに遊ばすのが當然の道ぢやのが。でござろ？　和殿は兎も角もぢや、大殿は倩何うでござる。和殿の御嫡子名は何とか仰せられたかな？」

「重盛。」

「それ〳〵、重盛殿か。其重盛殿がお子供の時、重體の痲疹になッたのを夜徹しで拙老が療治した。和殿の父御大殿は懇ろに禮言はれて、馬とかを一疋報謝に賜はるとさへ男が口外して此拙老に申された。」

清盛は下を向いて點頭いた。但し、べん〳〵と其樣な事を聞いて居る空は無い。腸が煮え返る。

「何と仰せられても言葉はござらぬ。必らずしも此方を疎略にする所存でもござらなんだが……」

「あいや、其やうな言ひ譯は誰でも言ふ、可し、しかし、承らう。今日は前分の御報謝の滯りを何程か目鼻明けて頂いて、それから參ると致さうわ」ときッぱりした言葉である。

清盛は途胸突いた。

目鼻明けるのが困難といふのみではない。餘りなる淒い侮辱に一分が立つか立たぬか、それさへ我身で我身の

事が判らなく爲ッた程である。

くわッと爲ッた日は凄い。

「さすれば清盛が何とお願ひ申しても、目鼻とかを明けぬ上は……」

「體裁を飾りたまふなよ。」

「體裁をとな？」

「目鼻とかをと仰やるぢやろ。とかをは凄いお言葉ぢや。下様のそのやうな文句は殆ど御存知無いといふお口ぢや。それぢやものを猶憎い」と言ひ方も如何にも憎さうに。

暫時は共に語が絶えた。

「さりとては典薬殿、怨みがましう申すのではござらぬが、言葉尻などお捉り遊ばされず、今些しお手柔かに願ひたい。是迄の不義理は不義理として謝る事は謝ッて……」

「口のみでござるかな？」

「……………」

「口のみでは不好でござる。」

「さすれば何を？」

「馬を賜。」

「馬ア？」と殆ど呆れもする。「馬と仰せられたとて、今日直間に合ふものでもなし、假令馬を參らせるとしても、今日は今日だけ只のお約束より外は……」

「お厩に乘馬がござらうが。」

又も呆れて「是は／＼。なるほど厩に二疋や三疋はござる。さりながら。他の物と違ひ、われ／＼武辨の家に取ッては何うも如何にも馬だけは……」

「生命と比べたら？」

「さアそれは！」

「此典薬は和殿たちのお心に怠りの有るのが失禮ながら貧困にもお爲り遊ばされる、その基ぢやと考へる。何故と言ふて御覽なされ。和殿の御父君の事ぢやが、お服裝がいつも綺羅びやかぢや。どうぢや？」

「はい。」

「和殿もぢや。」

「いや、しかし、汚れたのを……」

「着おろすからぢや。新らしく仕立てると、それのみを着飾ッて、汚れ切る迄に爲るからぢや。汚れたのを今着て居ると仰やるぢやろ。召し物はおのづと汚れはせぬ。可し、それは夫で可い。注文して置いて牽いて來られた馬がござろ。」

「是は爲たり御存知で！　さりとては驚き申した。是は〳〵、いや何うも、但し、さらば委しく申すが、その馬の代料も……」

「拂はれぬ？　驚いた？　この典藥も驚いた。」

「實は鐙を注文して置いて、その方へ代料を向け申したので、馬代に一寸差し支へた譯合ひで……」

目を圓くして、

「やれ〳〵〳〵。馬で足らずに鐙をとえ？　鐙代も不足で馬をとえ？　はアて、無茶苦茶ぢや。平家のお方、何うして然う見得のみ爲さるのかな。見得のみ爲さるが武士の道か。」

「……………………」

「默らるゝか。男らしくもない。但し聞けば聞く丈で只驚かれる事ばかりぢやぞ。命を預かる醫師の方へは無沙汰で置いて、馬をさへ誂へる。その馬の方へも不首尾にして置いて鐙をさへ誂へる。その鐙の方へも不始末にして置いて馬に向ける代料を鐙へと向ける。一つへ手を一寸附けて、また二つへも一寸觸る、三方四方を食ひ散らかして、一つも腹には納まらぬ。それで武士が立ち申すか。此門を攻め掛けた、廢してあの門へと向かふ、此方を撃ち掛けた、止めてあの方へと矢を向ける、と、斯ういふ戰爭の遣り口で、何の勝利が得られるぞ。聞く丈でも胸が惡い。典藥は何も不好ぢや。もし、伊勢の小殿、物事は初めが有ッて終りが有るものでござる、頭が有ッて足が無ければ、妖怪變化化け物ぢや。化け物に爲り召さるか。典藥は最う不好ぢや。歸り召されよ。疾く〳〵〳〵！」

手で床を叩かぬばかり、立て遂ひにする語氣となる。吁、それも無理は無かろ。しかし、無理とも思はれる。馬も鎧も弓矢の手前、武士は寒苦に或ひは泣いても、忽がせにせぬ本文である。と言ツた所で夫丈の理窟を突き透す丈の力は無い。どうしたら斯うも/\貧が身體に附き纏ツて、今日といふ今日ほど殊更烈しく右左から身を攻めるのか。

さりとて父は病氣である。

「御尤も/\。さりながら今日の所は清盛の身に取ツては、わが父の一大事、七重の膝を八重に折る。どうぞ、典薬殿、格別の思し召しで………」

「爲り申さぬわ。」と聲の暴い。

むンむツと込み上げる、その胸をまだ/\/\、嗚呼、それも親のためである。

「七重の膝を八重に折る………」

「何とでも仰やれよ。」

「人一人の命と思ツて、どうぞ/\、もし典薬殿、御恩を返す時も有る。典薬殿と清盛とは外ならぬ間柄、關係も全で無いとは言ひ切れぬが………」と共がに凄い意味が有る。

せゝら笑つて「結局はそのやうな所ぢやと考へた。朧夜の時の此典薬の艶なる事を何うの斯うのと仰やらうとのお心ぢやろ。仰やるならば仰やれな。何を何う仰やらうが、今の所は宿の妻ぢや。」

と、繩張りを爲れるとなると、何さま強く言ひ得ぬか。些したぢろぐ。

「されば何も典薬殿の何事かを言ひ立てう抔といふ、その樣な心はござらぬわ。只並ならぬ間と思ツて、人一人の命なり、七重の膝を八重に折るなり、大方其邊を察せられて、宜しく父の病ひをば………」

「喧ましいわ」と聲凄い。

「うむ!」と清盛息逼る。

「喧ましいわい。叶はぬわ。と言ふたら腕節で仇を復すと思ふか知らぬ。さりながら、畏くも雲深いお奥のお

命をも匙先で預かり奉る此典藥の身の上ぢや。地下同様の野侍、階(きざはし)の下で犬吠えして、曲者でも有ッた時には命を賭けて飛び附くといふ、されば〳〵番犬ぐらゐな和殿達武辨の輩に、長袖の端汚す典藥が脅かされたと言はれては、大職冠以後光りの消えぬ藤原氏の大恥ぢや。箭で來るか。理で受ける。刀で來るか。字で受ける。鎧で來るか。筆で受ける。いづれとも御勝手ぢや。眇々と言はれた忠盛殿が前例の無い御立身、立身罰がまづ當たッたといふやうなもの、典藥は高所から只見物する丈ぢや。」

言ひ樣も他に有らうのを、何うしたら斯う烈しく！清盛泣いても泣き足らぬ。

心は揺る。腕は鳴る。さりながら、吁、父は今や邸に人事不省！　この典藥を斫ッたところが、父の病まひが治るのでもなし、無念殘念心外ながら、口惜し涙を呑めとばかり、もう〳〵顏を上には上げず、

「よッく分かり申したぞ！。」

只一句、頷く身！　蒼ざめた顏色に、唇の引き釣る筋びく〳〵！

十六　人を生み、金を生み、また權力を生むものを女と言ふ

憤懣に蒸される思ひで清盛は邸へ歸る、其途々も何うも只胸が騒ぐ。何か考へたいやうである。それで、何を落ち着いて考へ得られるのでもない。何と無く何事かを思ひ出すといふ樣な心持ちに爲ッて、それで偖何事を思ひ出すのでもない。只氣がそは〳〵して落ち着かぬ。

「斯う胸の騒ぐのは只でないぞ」と、ひとり最う氣を痛め出した。「どうも胸が只轟く。」と言ふて、何も胸の轟くやうな事譯が有りもせぬ、どうしても當たり前の事ではない。父君の御身の上に變事でも有りはせぬか知ら。あのお熱、あのお譫言、一刻を爭ふほどの御容體ぢやッたものを、それにしても畜生めが……」と、むら〳〵と典藥を思ひ出す。

本來が多血質の感情的の清盛その人である。而も典藥

に散々な目に遇はされた。散々な目に遇はされたにもせよ、腹の蟲の納まる丈の竹篦返しを先方へ喰れてやれたならば、それ丈胸も空いたであらう。ところが、中々然うは行かぬ。

感情的の人であつて、そして、また〳〵逆境を經續けの、むしろ悴けた人である。思ッた事も洗ひ浚ひさッぱりとは言ひ切れぬ。それ丈癇が内で烹える。烹えて〳〵、それこそ烹え立つ。どれを何うと纏まッた考への附くでもなくて、只肚の中でむしやくしやする。卽ち、それを然うと迄は流石我身の事とて、了解し得ぬ丈に、其そは〳〵心の落ち着かぬのを胸騷ぎが爲るのだと思ふ。

胸騷ぎがすると思ふと、もう毎もの迷信が縱横に蔓延り出す。胸騷ぎは碌な事でないと思ふ。而も矢先の矢先である。今の場合ひの碌な事でないといふ其事柄は勢ひ父の大病の其或ひは忌むべき悲しむべき結局であるかと思ふ。要するに多血、すなはち感情的、感情的すなはち迷信的、とゞの詰まりは夢中になる。

さりながら、其胸騷ぎが偶然とは言ひながらも的中したやうな結果と爲ッたのが實は〳〵情無い。

歸ッて見ると邸の中は只ごた〳〵して居る。偖はと旣に途胸を突く。なるほど父は蓐に埋ッて、白河殿をはじめとして、一門が旣に大方集まッて、いづれも眉を顰めて居る。

その些し前頃から忠盛の樣子は變はッて來て、甚しい苦痛も無いやうではあるが、尋常の事でも無いらしいと思はれるまゝ、清盛も最う歸るであらうとは思ひながらも、第一典藥の來ぬ事でもあり、急ぎの迎への人を已れ清盛の許へも走らせ、同時に近所の何某とか言ふ醫者をも兎も角招いたのであると言ふ。

偖も〳〵と只呆れる。呆れるに附けても、いとゞ典藥の仕向けの強面さが無念で〳〵耐らぬ。火のやうな呼吸を吹く〳〵、父の枕邊へ躪り寄ッたが、父は旣に片息で此世の人とは思はれぬ。

何も斯も「ぬ」の字盡くしのすべてが「不」すくめなので

ある。

「清盛遅かツた。いかほど待ツて〳〵居たか」と精の餘りを鋭く吐く母白河殿の言葉さへ癪に障るかの思ひである。

「遅かツたと仰やるが、どうせ〳〵〳〵歎見る樣な奴們を相手にして居ツたのでござるものを。無念や、己れ典藥めが！　嗚呼父上が惜こそな。」

母に向かツて言ふのでもある。不平を誰管はずに吐くのでもある。そのまゝで父へと躙り寄る。

「父上！　清盛でござる。」

返事は勿論有りはせぬ。目を開いたまゝの高鼾、なるほど末期が迫ツたか！

形容し盡くされぬやうな八當たりに、賴盛から敎盛から經盛から並び居る弟どもを十把一絡げにして怒鳴り散らして聲を放ツて慟哭して、父の手むんづり取り締めて、ゆすぶツて、

「藥も服めぬ桓武天皇の後胤！　父上、此世は諦めなされ」と一言がまづ凄い。

一泣き再び泣き入ツて「伊勢平氏が昇殿許されたと藤原どもに妬まれて、それで御末期が此樣ぢや。藤原蔓先は伊勢平氏を殿上から絡み落とさうとしてまだ足らず、命をさへ奪はうとして醫者さへ二の足踏んで、死人の咽喉を絡み締める。父上、この世は諦めなされ」と重ねて扱くやうに言ふ。

「父上、戰場で擊ち死に遊ばしたと宜しく此世は諦めなされ」と、又も重ねて泣き聲絞ツて「清盛は典藥と一喧嘩して歸ツてござる、假令無理に連れて參ツたところが、あのやうな典藥、毒を盛るか知れ申さぬ。桓武天皇の後胤が末期に醫者も間に合はず藥もお服みなさらなかツたと斯う怨みをお飮みなされて此世をば諦めなされよや。その代はりには畜生め、この清盛が只は置かぬ。父上わお聞き下されよ。いやさ、賴盛、敎盛達、和郎等弟どもゝ篤と聞け！　是からの清盛は力と金との權化になる。百代の福分を一代に吸ひ寄せる。天子も院も仙洞も、乃

至藤原も橘も引ッ千切ッて蹂み躙る。父上の御末期を是からの覺悟の誓言の刻印に、清盛は誓ふたわ。和郎達も共氣になれ。宜しいか、平家を天晴守り立てゝ一天下を手の內に引ッ攫む氣になッて、宜しいか、金と力と此只二つを己と共に强請み取れ！」

父の今はの際に臨んで、その方への屈托をば飛び越して、未來の野心の妄執へと稀有の狂的言語となる。眼は煩惱に爛とした。父思ふ、家思ふ、身を思ふ、一族を思ふ餘りの熱淚に煩惱が味を加へた鋭い毒が瀰蔓する。

死に掛かッた人は何うでもない。一座その只正氣である丈の弟どもから白河殿まで、殆ど肝を消されて仕舞つて、殆ど最う呼吸も吐けぬ。

見る／＼忠盛は絕命した。

「吁、父子一期の別離かな」と清盛は只呻る。「己は子ぢや、嫡男ぢや。それだけに眞先の血を分けて賜はッた肉親の父の御最期見て氣が狂はずには居られぬわ。何も斯も出來ぬわい。父上の御亡骸の是からの送りや何やら皆和郎弟達に任せたわ。己はもう／＼何も出來ぬ。」

何所まで普通と違ふ調子か知ら。弟達もまた呆れた。只賴盛が屹と爲る。

「何も出來ぬと仰やるのは、兄上、それは何ういふ事ぢや。」

「何も出來ぬは何も出來ぬぢや。父上の是からの御野邊送りの事ならば一切己には出來ぬのぢや。」

「出來ぬ？　然らば誰に爲よと？」

「おゝさ。和郎達爲て賜よ。」

「兄上は？」

「出來ぬと言ふのが聞こえぬか。」

「それは聞こえた、それは聞こえたとも。出來ぬとして、然らば爲ぬ遊ばさぬとして、さて其上兄上は只何も爲ずに居られるか。」

「持佛堂へと籠もるわやい！」

「そして、何と遊ばすのぢや。」

「思ふさま泣くのぢやい！」と其末の「泣くのぢやい」

から最う既に泣き出した。

一同は腸を斷つ思ひ、その一句に籠もる無量の意を同じくまた至當の所と思ふ儘、敢て制めも爲り兼ねる。茫然として只無言。

その儘で清盛は持佛堂へと一人入る。煮え立つばかりの邸中の混雜に最う耳を貸すでもない。心を澄ますか澄まさぬか持佛堂の眞中へどッかりと胡座を掻いて、其所に整列する諸佛像を見わたして、更に瞑目した所で合掌の體となる。

天晴や、清盛その人の夫から一生を芽ぐませた此時の持佛堂なのである。狂に近づく心の動搖に最う既に其一念は權化と爲ッたまゝ、見る而して念ずる夫等持佛のどれも是もが眼の低に活躍して、橫行し濶步する中で、殊に／＼際立つ迄に著しい一體がその瞑ッた眼の低に髣髴とし蹁躚する。卽ち妙音辨財天のその艷極はまる樣子である。

父といふ死人を扣へて、默想するその父の兒は持佛堂へひとり籠もッて、人間の性欲の粋たるべき妙音辨天を觀想する。物欲の窮乏に驅逐された煩惱の一個身は艷さながら花の如き辨財天女を心に描いて、心の腕の血を刺して其天女に甞めさせた、其唇を更に己れも甞め舐ッて、人間の物欲を滿足し拔かうとの意氣になる。

涙は既に乾びて居る。出ぬのではない、出囘らぬばかり心の炎に乾かされた。

「南無妙音陀天、妙音陀天！　つく／＼と觀ずれば、現世は只の色欲世界、百萬の妙音陀天が婆娑し搖曳し舞踏して、世界を笑靨の中に烹て鎔かす。淸盛は美男子ぢや。是からは一向專念美婦人を啗ひ捕る。啗ひ捕ッて生き血を吸ッて、其腹から美い兒を生ませて、兒の數を殖ゑ／＼させ、娘ならば女御更衣は勿論のこと、后の宮とも成り立たせ、男ならば其緣から武家全統の權掴ませて一代の次ぎから二代三代の後までも楔子利かせて仕舞はうわ。思へば思ふほど力は人ぢや。藤原があれ迄に爲つたのも人の力が多いからぢや。更にそれと亦共に思へば

思ふほど力は金ぢや。藤原があれ迄に蔓延るのも金の力が多いからぢや。その人の本は何ぢや。女ぢやろ。その金の本は何ぢや。女ぢやろ。女ぢや！　女ぢや！　何うでも女ぢや！　劍で天下取らうとするには血を流さねば埒が明かぬ。女で天下取らうとするには涙を流した丈で埒が明く。劍では人に涙滴らさせる。女では人に涎滴らさせる。劍では人に目を瞋らさせる。女では人に目尻下げさせる。劍では人に取り返らせる。金では人に蹲はせる。劍では人に跳ね上がらせる。金では人に痲痺れさせる。女ぢやぞ！　金ぢやぞ！　人ぢやぞ！　一門一族ぢやぞ！　可し、是からは一向專念、亡き父のお心をも慰める孝の一つ、陀天の法に志して、辨財天を心に描く！」

息も或ひは腥い。涙の眼でにこりとした。父の死骸は呼、まだ蓐の上に在る。

十七　佛堂での情欲觀を覺後禪の般若と言ふ

「經盛、よく聞いて賜」と白河殿はわが前に殆ど膝と膝と突き合はせるばかり二男經盛を近寄せて、聲からして忍ばせた。「外でもない、和郞には兄ぢやが、清盛の此頃の樣子と言ふたら、まるで妖魔か惡鬼ぢやよ。見る間に五升の酒を乾す。醉ふと高足駄穿いて强裝束で仰々しく烏丸や祇園あたりの艶なる君へと憧がれ寄る。今し方も走り童の沙汰に由れば、烏丸の何とか言ふた白拍子の家で溺れ倒れて、外聞も有る事か、白拍子どもと興じ狂ッて父親がいつお死亡になッたやら全で知らぬ顏して居るとぢやよ。どうしたら、如彼變はりも變はるぢやろ。元の殿(忠盛)がお死去に爲ッてから今年で足掛け漸やく四年、その間一日でも清盛が殊勝らしくして居たか。そして幾度、經盛、和郞と爭ふたか、殆ど覺えても居られぬ喃。魔が差したとでも言ふのかな。平家といふお家のためを思ふと、妾は只苦勞で耐らぬ。どうしたら可からうか。清盛には弟とは言ひながら、清盛の弟の中での年嵩たる和郞、また常から物堅い和郞、清盛も一目置いて

掛かる和郎、その和郎より外は此白河の力には爲らぬ。どうしたら可いか知ら。」

如何にも思ひに暮れた樣子で、聲潛めるその聲の中にも火は燃える熱は炎る、涙こそ零れぬが、零れるよりもの強面さとは聲の顫へにも知れる。

經盛は只下向いた。

清盛の次ぎの弟として忠盛の血を受けた人ではあるが、生まれ附きから落ち着いて、容易には急迫らぬ所に格段の目方の見える經盛その人なのである。清盛は何うかすると、大事を誤るかも知れぬが、經盛に至ッては其邊は確かなものであるとは忠盛存生中の言葉であッた、それを今更力草として、白河殿は心に思ひ餘るまゝ、經盛を呼び寄せて親しく相談するのである。

「されば〳〵、母御前のお言葉ゆゑ、經盛もまた申し上げるが、全く〳〵仰せの如く此頃の兄上は尋常ではござらぬよ。父君がお死去になつたとならば、それ迄が不行跡であッたのも生まれ變はッたといふ樣に爲られるのが順の道なのを、それが些しも然うでござらぬ。面妖な」

と腕拱く。

「面妖なとな！　和郎にも其所が解せぬか知ら。」

「解せ申さぬ。」

「和郎には物事をも常日頃からよく打ち明ける清盛ぢやが……」

「勿論平常は然うでござる。」

「此度は打ち明けぬか！」

「あいや、打ち明けぬも打ち明けるもござらぬ。まるで變はッた御樣子で好きの儘に振る舞はれる。御承知の如きあの大酒、其所への色漁り、まるで打ッて變はッた人と爲られた。」

「やはり精進潔齋も最う爲ぬか。」

「爲るどころでござらうか。」

「あの、あれ程のが！」

「さればこそ全で別人なのでござる。」

「和郎はそれ見て何とか言ふたか。」

「言ふたかとは！」

「清盛に向かッて異見し異見とまで行かずとも、幾らか戒めになるやうな事を言ふたやうな事は無かッたか。」

「お言葉までゞもござらぬわ。言はうか／＼と口先までは幾度か異見のやうな言葉も出たのではござるが、何と言ッても毎もが毎もの兄上なのでござるものを、異見らしい異見したとて肯く譯もござるまいと……」

それ聞く丈でも歎息して、

「いつもが毎もとは？」分かッて居ながら矢張り問へば、

「お分かりがござらうに！」と今更らしい顔にもなる。

「邪が非でも已れの事は透さいでは濟まさぬ兄上ぢや」。

白河殿は太息した。

「清盛とて最う何歳ぢや。三十五歳の時に父君に別かれ申して、早是までの年が經つ。いつも／＼言ふやうぢやが、和氣清麿があれ丈の肝冷やすやうな事を言ふて道鏡を蹴落とした年齢を思へ！　やう／＼三十七歳ぢや。三十七の清麿は一天の怪しの雲を切り拂ふ丈の力が有ッた。三十五、六、七、八歳、その清盛は偖何うぢや」と見る／＼涙含んで仕舞ふ。

「母御前、それも餘りでござる」と經盛は氣の毒らしい顔。「清麿の年齢で一大事爲る人もござらうが、五十、六十に爲ッてやうやくにして目覺ましい事爲る人もござらうよ。經盛は其樣な事で兄上を何うの斯のとは申さぬ。」

「さらば兄を好いといふか。」

「さ、さ、只今の兄上の御行跡では好いとは決して申されぬ。」

「和郎から異見は出來ぬのか。」

「さればな。」

「家のためぢやと思やらぬか。」

慨然として、「その事は如何にこの樣な經盛でも存知した積もりでござる。只兄上の口前の鋭さ、二言目には毎も／＼攻める方が負ける慣ひ……」

白河殿は莞爾とした。

「武士で口前の鋭いのは公卿で戰爭が上手なのと同じやうなものぢやとさへ世の諺でも言ふではないか、武士で口前の鋭いのは夫だけ戰爭が下手なのぢや。決して自慢には爲らぬ。」

「そりや自慢には爲り申すまい。さりながら某なんどは屢〻兄上と爭論して、いつもわが方に理が有るやうに思ひながら遂に負けるのでござるものを。」

「そこが武人の氣高い所ぢや。」

苦笑ひして、「お人の悪い母御前ぢや。氣高くても低くても負けるは何うでも勝つのではござらぬ。但し冗談は偖置いて、全くは〳〵お言葉もお道理ぢや。さもなくても伊勢平氏々々々々と一口交ぜに嘲られて居るのを、今また伊勢平氏の總領たる兄上が不行跡であられたと言ふ日には、殿上のお出入りも或ひは差し制められるか知れ申さぬ。」

「されば其所が苦勞でな。經盛！　清盛に異見するのは和郎より外に人は無い。敦盛や頼盛は彼のとほり清盛とは交情悪い。この母の心根を思ひやッて、どうぞ〳〵出來る丈、異見して見て賜らぬか、頼む〳〵な、經盛。」

理無く口説き立てられて見ると、素氣無くも言ひ難ねる。また口爭ひとなりでもして、とゞの結局は自分經盛が言ひ負けでもして、引き去がる事かとも思ふが、流石然うとのみ苦勞して、避けてのみも濟まされぬ。

母の許を退いて、清盛の居間へと行ッて見ると、女の童が其邊に居て、殿は御持佛堂に在らせられるとの答へである。

「持佛堂とは殊勝ぢやな」と口の內で獨り言して、更に經盛は持佛堂へと行ッて見ると、なるほど清盛は居たは居た。

居たが、いよ〳〵珍事である。

鱠も丸燒きを大折敷きの上に蟠らせて、身の傍には大瓶子を据ゑ、三合入りの大土器に酒波々と湛へさせて、とろんこの眼を据ゑて、胡座姿も危いほどにふら〳〵身體を搖ッて居る。

經盛はまた呆れた。

「ほんむ、經盛か！　あはゝゝゝ、感心に和郎は鼻がよく利くぞ。是等珍味の芳ばしい香りを嗅ぎ附けて、よく辿り着いたぞよ。話せるわ。己の味方ぢや。邸中みな己を度外にして目を側てる其中で只一人經盛和郎のみは粹な弟と己は褒める。粹ぢや〳〵、その鼻が利けばこそ、照射に寄る鹿もどきに、此所へは憧がれ寄ツたのぢや。さ、さ、一つ受けい。振る舞ふぞ。」

例の大土器をぐッと乾して、更に「えいやッ」と仰山な掛け聲までして經盛の面前へ其土器を突き附けたが、土器に酒が無くてこそ幸ひ、もし八分目ほどでも有ツたなら、其酒は如何な事しても溢れて仕舞ふだけの運命を何うしても免かれ得ぬとしか思はれぬ程の、その危い手元の顫へ方なのである。

餘りの〳〵淺ましさに經盛は多少期しては居たものゝ猶氣を呑まれた氣味も有る。眉根を寄せて苦り切る。

「何ぢや。凄ましい顏爲るの。これ、經盛さりとては憧れ寄ツたにも似合はぬ事、酒の香嗅いで鎔けやうとは爲さらいで……分かツた、頭痛でもするのか。」

「兄上！」と屹となる。「魔が差したかとも思はれる。經盛は酒の香に憧れて來たのぢやない。その酒の惡臭い毒の香を吹き拂はうとて參ツたのぢや。」

扣へては居るつもりだが、つひ我知らず喧嘩腰に頭から毒を吐く。その喧嘩買はれぬので實は仕合はせなのである。買はれたと爲ツたが最期、一方は生醉ひの事、双傷ぐらゐには爲り難ねぬ。

「毒の香吹き拂ツて賜るとな？　聞き事ぢや、面白い。清盛是でも悟道した。悟道の禪味を、それ故〳〵、持佛堂で味はふぢや。阿闍梨の說法聞いた時、生小乘を聞きかじッて人間は何でもかんでも勇猛精進に限るぞとお經を正面から會得した。今はその樣に凡夫ぢやない。精進をして痩せ衰へて、何の大事が出來るかい。それで地獄へでも行ツて見い！　鬼と一相撲取ツて見い！　一投げに投げられるわ。潔齋に凝ツて女人を遠ざけ、二人出來

る子を一人にして何の家が榮えるかい。源氏の六條判官(爲義)を見たか。六十何人といふ子を拵へて、やがて二代か三代かの末には源氏を其所此所に蔓延させて、天下押さへやうとの腹ぢやぞい。亡くなられた父刀禰の追善には身を丈夫にして子を拵へ、一門の枝から葉と茂らせるのが何よりぢや。破戒と言ふか。言ふなら言へ。清盛はそれ故〳〵持佛堂での般若湯ぢや。大悟といふのは此所なのぢや」と目はとろんこに爲ッて居る。

十八

新を逐ッて舊を破壞するのを平家の祖先來、殊に清盛の理想と言ふ

又しても經盛は温順な人だけに清盛の鼻息に中てられて、譯も無く只もう烟に卷かれて來た時の勢ひは何所へやら、言ひ爭ふべき張りも無い。些しは涙含みさへする。

「兎角言ふと兄上は法師臭い事を言ふて己たちを紛らすがな、只何が何うでも宜しい故、些しは平家といふ家の事を思ふやうに遊ばされいと、己はじめ心配するのぢやわ。何ういふものか、平家は人に憎がられる、同じやうな家柄で、源氏は人に好かれるが、平家は人に疎まれる。是が第一口惜しいぢや。」

「平家は人に疎まれる?」と清盛の息はやゝ揣む「全くぢや。經盛、和郎としても然う思ふぢやろが、これ。清盛、業もそれ故湧く。何の〳〵一天下が藤原や源のためにのみ出來て居るものでも無からうわ。」

「されば、それ故、猶の事〳〵兄上からして身持ちをよく……」

「身持ちをよく?」と目は瞋る。

「おゝさ、言はれゝば快くはござるまい。さりながら苟しくも將來の大事と思ふからには身持ちからして改めて、人の心を攬らいでは……」

せゝら笑ッて、「身持ちを良くとは何うするのぢや。酒飮むなと言ふ事か。」

「酒も然うぢや。」

「もと言ふか。あはゝ、數が大分多さうぢやな。酒飮

んで心が亂れるから惡いと言ふのかな。」
「勿論ぢや。」
「修行が未足らぬ故、飮んで心が亂れるのぢや。己は酒飮んで何さま〳〵心が亂れるかも知れぬ。但し今日五合飮んで心が亂れたから、明日は六合でなければ、亂れぬとまで進まうし、今日一升飮んで調子が亂れたなら、明日は二升で無ければ亂れぬとまで到らうと斯う勇猛に志す。佛道の本義はな、何事も貫くのを要目とするのぢやぞよ」と顎を撫で〳〵咳となる。
「理窟を附ければ然うぢやろ」と經盛は舌打ちした。
「但し、それは是非無い餘りの、後から附ける理窟ぢやわ。それ程の痩せ我慢を酒と比べ合ッて、酒に負けたら何とする？」
「あはゝ、愚かな事を言ふ。戰爭を爲るとなッて、今度は勝たう〳〵と肝膽を碎く武士に向かッて、それ程の苦辛を爲盡くして、敵に負けたら何とすると和郎經盛は言ふ氣かな？　腹が撚れる！」と笑ひ出す。
「駄目ぢや。惡魔が宿ッて居る。」
「惡魔が宿ッて居るとな？　忝い〳〵。惡魔でも宿らぬ石瓦が世界にはごろ〳〵する。惡魔が己を見込んでの己の身をその宿とのお心ならば、己も惡魔に勿論爲る。見ろ、鎌足は入鹿から見ての大惡魔ぢやらうがな。」
「女弄りは然らば、何うぢや？」
「ほルれ、話しが女に飛んだ。己が女を弄るとな？」
「嘘ではござるまい。」
「うむ、宜しい。それが何うした？」
「女弄りは良い事か。」
「良い事ぢや。」
杲れて、ほッと息を吐いて、經盛しばらく默ッて居た。
「また理窟附けるのかな？」
「理窟は附けぬ。有りの儘ぢや。旣に和郎達にも言ふたろが、人多ければ天に勝つぢや。己は何百何千、手に當たる女を薙ぎ倒して子を多く產ませたい。」
「その薙ぎ倒すが良い事か！」

「是は爲たり、どの女にも掛かり合ひを附けると言ふのが惡事ぢやと和郎は言ふか？」

「世尊は何と言はれたか。十戒のその一つに邪婬戒はござらぬか。」

「女犯戒とは言ふてないぞ。」

「然らば惡事でござらぬか。」

「清盛だけには惡事でない。」

又、はたと呆れたばかりで、經盛も二の句が無い。

「清盛の女漁りはな、平家の總領の株として天からお許しを受けてぢやわ。」

そろ／＼氣違ひじみて來たと經盛は只情無い。苦り返ッて切齒する、その顔をにやりと見て、

「御先祖の眞似ぢやわよ。」

「何と仰やる？」

「御先祖の眞似ぢやわい。」

「御先祖とは？　桓武の帝を仰やるか。」

「今更問ふでもあるまいが。申し立てた所が何も帝のお恥には爲るまいが、桓武の帝は比儔罕なる女漁りの帝ぢやろ。但し非凡の大君ぢや。お腕の儘に遊ばされた。奈良の都を踏み捨てゝ新京を定められるなどの英斷を敢て遊ばした。壞して建てるのがお好きぢや。清盛それを繼ぎ申す。」

道理か不道理か、兎に角思ふ樣に言ふ。果たして無慚や期した通り經盛はまた烟に卷かれて呆れるのみで言句も無い。

若侍が現はれた。

「御所から直とのお召しでござる。」

組み合ッて勝負の附かぬ相撲の間に水の入ッたやうな此場合ひの若侍の割り込みなのである。息り立ッた二人ながら、流石御所と聞かされては爭ひも何も有ッたものではない。

「御所とな？　禁裏か、仙洞か。」

「禁裏でござる。」

「面妖な。今時分、はて、何事？　そして直との勅諚

ちやな？」
「御意にござる。」
「畏ッたと然う申せ。脫落るなよ、お使ひ御太議との挨拶を。」
　若侍を退かせて、
「經盛、稀有なお召しぢやな。素より勅諚とは言ひながら、端使ひを遣はされただけの事、身の上に關はるといふ樣な一大事ではないと思はれる。が、しかし御用の御筋が何事やらん些しも分からぬ。和郎に分かるか。」
「分からぬな。さりながらお召しでもあり、直急いで參るぢやろ。心許無い事でもなからうな。經盛も伴せうかな。」
　爭ツて居た舌の根も乾かぬ間、兄思ひの情溢れるばかり、幾らか苦勞を浮かべもする。清盛も只快く、但しそれにも及ぶまい故、和郎は宜しく留守して吳れと、はや最う何の爭ひも一切が烟になる。
　北の方にも心を得させ、若殿達にも飲み込ませて、禮服に着代へる間も只そは〳〵、一鞭馬で走らせた。
　二更の鐘が鳴り渡る。
　怖ろしげに毒々しい空の色、星も見えぬ墨一面、風さへ呼吸を潛めて居る。氣味惡いやうな夜ではある。其所へ火急のお召しとは何か知ら。勿論自分清盛の、その今の身分は左衞門佐である。左衞門の陣の者に火急のお召しの下るといふ事、曲者か妖怪變化か恐らくは十が九までは其邊を外れぬ事でも有ツた、それでの御沙汰であらうとばかり、その以外には判じも附かぬ。
　左衞門の陣に到着した。
　篝は毎もより淋しい。陣も殆ど無人の如く靜寂として只靜まる。只何も聞かぬ前から薄淋しい氣持ちもする。
「清盛候ふ」と言ひ入れると、「おゝ」と言ふ聲と共に立ち現れた人が有る。
「清盛か？」
「はッ」と、そろ〳〵蹲る。
　遠くに續く御廊下の燈火の照り映る反射の中から浮き

出したやうな黒い影になッて、やをら清盛の方への人影は確かに侍從の一人である。

「清盛か？」と又確かめた。

「はい」と挨拶すると共に、先方の聲柄によッて清盛にも其人の誰かといふのが分かッた。

侍從藤原秀方である。

「早速の參上神妙の至りと存知する。火急にお召しの下ッたのは余の儀でもござらぬが、南殿に怪しい物音が聞こえるのぢや」と、頭から氣味惡い。

清盛は息も吐かぬ。

「お分かりか、宜しいか。南殿に怪しい物音が聞こえるのぢや。何かの怪鳥か妖獸かも知れぬ。畏くも其物音は南殿の端廂の邊にも聞こえる事とて夜御殿（清涼殿内の御寢所）にさへ響く。上には御惱氣にさへ在すのぢや。和殿召したのは此故ぢや。右の旨を心得有ッて、よく御奉公仕れ！」

まづ嚴かに言ひわたして、更に改まッて又碎けて、

「某もその音を聞き申した。そして聞き定めやうとした。さりながら些しも分からぬ。端廂の上の方から天井の裏へと潛ッて、踏み碎くやうな音なのぢや。」

只それ丈でも氣味惡い。清盛もやゝ急き込む。

「お言葉の中ながら、その音は何時頃から」と、まづ見當を聞かうとする。

十九　極端の迷信を或ひは極端の確信と言ふ

「音は今夜が始めてゞな、されば初更の些し前頃まづ初めのが聞こえたかと覺え申すので」と秀方の挨拶も段々要を得なくなる。

「幾度も／＼同じやうな物音が引き續くのでござるかな。」

「されば、驚くほど長くさへ。何しろ餘りの怖ろしさに、吾々をはじめ侍從共耳を押さへて蹲ッた。初めのは天井を踏み碎くやうな一音で、それが忽ち天井中に何所

とも無く廣がッて、天井が一面にぐわら/\と響くのちや。」

「さりながら今は？」

「今不思議にも一寸絶えた。和殿の參る些し前まで、いや怖ろしい騷ぎでな。鵺といふのも如彼か知ら。」

「存知申さぬ。」

「蟇目の弓でも？」

「持て參ッた。さりながら兎に角その音を篤と聞き申した上。但し高は知れた物でござらうよ。」

秀方侍從の怖え方が如何に何でも其餘りに/\意氣地が無さ過ぎたのが流石弓矢執る身分の清盛から見ると、淺ましくて/\耐らぬ。と言ッて如何なる妖魔變化が其處天井の陰などに居るものか、それを全く否定して仕舞ッて、只一概に飲んで仕舞ッて、己れのみ度胸を据ゑた・といふのでもない。只比べ合はせた所で、同じ迷信には捕へられては居るものゝ、全で繊弱で男子か婦人かとしか思はれぬ公卿よりは何と言ッても清盛の方が勝ッて居る。

「高が知れたとな？」と秀方は口を箝にした。「ほゝう偉い事を流石は/\。高が知れたと言はれるが、いくら知れた高にもせよ、毎夜々々物凄く南殿の此邊に立ち回られた日には殿中は氣を失ふても足らぬ。しかし、勇ましい和殿ぢやわ。われ/\甚だ賴もしい」といよ/\出て愈意氣地無い公卿氣質を恥かしいと思ふ樣子も無く、遺憾無く發揮する。

己れよりも相手が弱いと、却ッて或ひは己れの方が心强く爲ッて來る。

「女のやうな公卿どもめ！　さらば何の變化か知らぬが、蟇目の威力に眩暈させて一手柄己が現はして肝を冷やさせて遣らうかな」とやうやく乘り地に爲ッて來る。

「殿上の自由を今夜だけはお許し賜はるでござらうの？」

「苦しうない/\。自由に何所でも步きめされ。」

「さらば此邊までお許しを、な。」

階段をしと〳〵〳〵、中段までやゝ昇れば、
「もッと〳〵上までゝも。」
「宜しうござるか。」
「苦しうない。」
然らばと又しと〳〵〳〵、上段まで昇り着く。
「身の傍へ來られよ。」
「はい」と共言はれる儘、清盛は身を進めて些し秀方へと近づく。
「もッと〳〵身近くへ。」
言ひながら秀方も寄ッて來る。清盛の方からも寄る。殆どやがて密接する。
「斯うなると、左衛門佐殿、武家は心强いわな。」
「はい。なるほど。」
「何故と言ふて御覽ぜい。」
「はい。」
「弓矢といふ魔除け持つからな。」
「はい。なるほど。」
「弦音を聞かせた丈でも妖魔は退散するとか言ふ。」
「はい。なるほど。」
「弓矢は偉いものぢやよな。公卿は、それを、其偉い弓矢といふ物をまづは持てぬものぢやものを。」
隣りの妻は美くしいで、常は何とも思はなからうが、いざといふ時となると、己れに不足だけの他の長所を急に羨む氣にもなる。
「女のやうな公卿ぢやわい」と清盛は腹で冷笑した。卽ち又さう冷笑する餘裕が有る丈に相手を揑ね回し、手遊物にする氣にも爲ッて、又おのづから一切度胸も据わッて來るやうな事になる。どう行ッても旨く行く。運が向いた小口である。
「殿は今夜がお宿直で？」
「うんざりする宿直ぢや。一日か二日遲れて、和殿ならば和殿が化性を退治して仕舞ふた後の宿直ならば宜しいが、選りに選ッて毎もより烈しい音立てる今夜といふ今夜宿直の番に當たッたのぢやもの」と聲にも怯えが見え

て居る。
腹の中を見て取ッて「然らば何と遊ばすか？」
「何とゝは？」
「お宿直を窃とお退き遊ばしたら？」
「退け？」と嬉しげな聲である。「と言ふと何うなのぢや。今夜は宿直した事にして何所か其邊へでも潛ッて居れと、斯うなのかな。」
聲を潛めて、「御意にござる。何の〳〵、妖怪の變化のといふ物に藤原家の公卿のお方が端無くお宿直まで遊ばすといふのは甚だ以て勿體無い……」
「うむ、甚だ以て勿體無い？　なるほど、如何にもな。」
「其邊は武辨の者の係りで……」
「うむ、其邊は武辨の者の係りで？　なるほど、如何にもな。」
「藤原の殿上人は武士を役ッて事を爲せる其役目の貴い御身ぢや。」
「うむ、藤原の殿上人は武士を役ッて事を爲せる其役目の貴い身？　なアるほど〳〵、如何にもな。」
「で、ござろ？」
「全くぢや。」
「されば、某にお任せで、そッと上部だけをお繕ひで、何れへなりとも御意次第に……」
「なるほど、夫も一案ぢや。然う願ふと致さうか。」
言葉までが丁寧に「願ふと致さうか」とは恐ろしい。尸位素餐ずくめの世の中に、何も此人のみが珍らしくはないものゝ、まだ〳〵其頃の、まだ世に醋くも擦れぬ清盛などの身から見ると、只疎ましく淺ましい。
而も淺ましいと思ふ下から、にッたりとなる凄い笑顔が清盛にも催した。
「公卿どもは大抵役ぢや。是に付けても膽の世ぢや。膽で天下を呑んで見ろ！　公卿も君も有るものか。」
他日の野心が又も芽ぐむ。喜んで宛も嬉しさに堪へぬとの樣子で、捨て臺詞も其所々々に頓て立ち去ッて行く秀方の後影を薄朧の中に見送ッて、又扱くやうな舌打ち

した。得意らしい舌打ちなのである。

「是に附けても吾々武家はまだ仕合はせなものぢやかな。藤原は最う盈ち切ッた、虧けるより外は無い。武家は是まで虧け切ッた。是からは盈ちるのぢや。秀方のみが如彼でない。一切の公卿共めは悉くあの秀方なのぢやもの。可し、妖怪ならば妖怪で――目に物見せう――現れよ。胴に卷いた威怒明王、髻の中に祕め籠めた妙音天、此二柱が清盛護る。面白いぞ」と目は据わる。

人事も總べて妙である。迷信の時代には迷信がまた信を確かめて何かの確信と得せしめる。妖魔變化を信ずる時代には妖魔變化以上の理想の神佛が信念の保護者としておのづから心に働いた。

天井のその物音を勿論清盛は變化か妖怪かとは信じた。但し、それを然う信ずる丈卽ち夫を然るべく畏怖するだけ、おのづからの手段として胴卷きには威怒明王、及び髻の中には妙音天、此二體の影像を念持の物として祕めて居た。

妖怪も最う怖くは無い。

「ましてや蟇目の弓も持つ」と、我持つ其弓にさへ特別の靈を認めて居る。

「蟇目の弓の弦音で惡魔の逃げた例も有る。蟇目一つでさへ夫程ぢや。ましてや大威怒明王も在す。妙音陀天も在すわい。大威怒の莊嚴と妙音の微妙とを清盛は身に負ふて立つ。惡魔も外道も何う爲らう！」

意氣はそも〳〵是で定まる。階段の眞上に腰打ち掛けて、弓と矢とをむんずと握つて天上を睨まへた。

風も末期の息絶えて、空にも星の目瞬き無く、萬象が虛無の闇に沈んで、靜寂が墨より濃い。

お廊下の何れにも振鈴の音も絶えた。

突如、すはや音である。

天井の隅が鳴ると共に音は宛がら轉げる如く、天井中を鳴り回る。

「叱！」と一聲、清盛は我にもあらず大喝した。

怪しや、音は聲と共にまづぴたりと靜まッた。

靜ッた位何でも無い。但し、わが發した丈の一喝が其怪物にそれ丈利いて、音をさへ鎭めさせたかと、まづ斯う思ふ丈の心の滿足は夫を共時の信念に作用させて、卽ち己れが腹に懷き頭に頂くそれら大聖威怒王や妙音陀天の加護の力が淸盛たる凡夫身に働らいて、凡夫身から出した一喝も天籟の如くその妖怪に感應したかと、斯う思ふ。

もはや恐怖も何も無い。弓取り伸べると殆ど同時、天井を上へ突き上げれば音は又もや大きく鳴る。右へ鳴る。右を突く。左へ鳴る。左を突く。前を突く。後を突く。やがて突き、突き、突き回す。音はがら／＼鳴り回ッて忽ちばたりと消えると共に、此度はさら／＼さッと梁(うつばり)からして音が辷ッて、すはや！　黑い影が閃めく。

弓で一打ちしたゝか打つ。

打たれて影はぎゆッと唸ッて、平床に落ちると共に淸盛の膝から飛び上がッて所も有らうに袖の中！

〆めたぞと袖を上から全力の双手で押さへ附けて、中の何かを落し潰した。

二十　迷信の變體を自我　自信の勇氣と言ふ

迷信と言ふと馬鹿げて居る。しかし信念とすると怖ろしい。而も飛び出して淸盛の袖の中へ入ッた以上、而もまた其物が何であるか分からぬ以上、その物も怪物には違ひ無い。

その怪物を壓し潰した。信念が怪物を握り緊めて壓し殺した。苦痛に呻く妙な聲が袖の中から細く響いて、それなり中はぐにやりとなる。

〆めたぞと思ふと共に、殆ど刹那の作用ながら、すぐ最う手柄を立てたと思ふ。それと又共に、旣に手柄とする以上、早く／＼一刻も早く人にそれを見せたく思ふ。又而も手柄を立てたと思ふと共に、或ひは些少の手の緩みでもあッて、折角の獲物を逃がしても爲らぬと思ふ。又而も獲物を逃がしても爲らぬと思ふと共に、人々を呼

び立てゝ、我手柄を示すと共に萬一その逃げさうに爲りでも爲たならば、夫を他人數の力に由ッて押さへ付けて仕舞へるであらうと思ふ。

要するに、迷信からまづ僥倖を博し得た。

更に僥倖から名譽心を鼓動させた。

そして又其名譽心から欲念を振興させた。

迷信からの名譽心、名譽心からの欲念、凡そ是等が一定の順序にそれから夫と簇出ッた。而も時間は刹那である。

「變化は押さへ申したわッ！」

一聲高く呼ばゝれば、おッと言ふ諸聲が殿上の何所からか鳴り亙る。宿直に候ふ六七人が秀方を眞先にばらばらと駈け出した。

「變化を、偉いぞ、左衞門佐殿は？」

「はてな、何所にぢや？」

「どんな變化ぢや？」

叫きかゝッて、清盛を包圍して、それながらまづ變化をときよろ／＼其邊を見回した。

「變化は何所でござるのぢや？」と秀方は最う「ござる」で言ふ。

「捕へてござる。」

「どれ何所に？」と不審の聲が太くなる。

變化妖怪といふ以上、誰でも「大」を聯想する。捕へたといふからには少なくも足の下に位に踏み附けてゞもあるかと思ふ。袖の中でぎゆッと死ッて仕舞ッた、そんな變挺な變化とは如何な秀方でも思ひ附かぬ。

「これ、此所に！　これ、此通り袖の中に」と袖引ッ摑んだ手は弛めず「變化は此所へ飛び込んだのを、清盛も何うする法も無く、我を忘れて只上から此通りぎゆッと引ッ摑んで、そして此通りぎゆッ／＼と……」

緊め附けると共變化も又も苦惱の音を洩らして、同じ調子にぎゆッ／＼言ふ。

可笑しいやうな、變なやうな、秀方はじめ眉を上下。

「畜生めが何ぢや、これ。ぎゆッ／＼と言へばぎゆッ

ぎゆッと言ふ……」

「まだ〳〵生きて居るのかな」と清盛が又締めれば更に一聲仄かにぎゆッ！ それ丈で後は無い。

「死んだわい」と稍取り出す。

一同はづッと退く。

清盛はじめ何かは知らぬ。袖を擴げて裏から振へば、ぐたりと爲ッて床へと落ちる。すはやと一同只諸聲、而も一人も寄り付かぬ。

一人が燈火差し出した。清盛がまづ透かして見て、

「鼠ぢやッ！」と叫び出す。

「鼠？ 鼠とは？」鼠と聞いて鼠が分からぬ。

「鼠は鼠ぢや、嫁が君ぢや。」

「嫁が君とな？」

「やれ、それで鼠とな？」

やう〳〵一同の眼にも床に落ちて居る其形の其大きさが見えて來て、そのまた思ひの外の大きさなのに、再び重ねて驚いた。

全く大きな鼠である。

長さ大凡八寸有る。毛は銀光りに逆竪ッて片目は眼窩から飛び出して、碎け歪んだ口元から鋭い齒が露き出されて、鼻から血潮が吹いて居る。

「ても鼠ぢや。ても大きい。」

「ほルれ、如何さま大きいな。まづ以て犬ぐらゐ！」

「あはッ、仰山過ぎるぞい！ 眞逆々々犬ほども……

…」

「何さ、犬の兒。」

「巫山戯るな。」

一同は只がや〳〵、寄ッて集ッて、もう斯うなると、腕よりは口の方が偉い。評判の方が騷ぎである。

今の時世ならば鼠ぐらゐ、假令七八寸のが一尺のでも、何も然う騷ぎもせぬ。しかし、當時の事である。佛法で然るべく〳〵迷信を鼓吹された一方では、屈指の博士共からさへ山海經を講釋され酉陽雜俎を教訓された時代である。一疋の鼠で殿上が煮え返る。大山が鳴動して鼠一

疋飛び出したと云ふのを反對に、鼠一疋飛び出して大廈深殿が震動する。それ博士召して吉凶を問へといふ騒ぎで、即時急使が陰陽博士の許へと飛んで、その博士すら夢想もせぬ火急のお召しとあッて博士は夢を破られた。

　絮說するのも可笑しいが、博士即ち參殿して、謹しんで然つめらしく事の吉凶を占ッた。曰く、此怪物を清盛が捕へたといふ事は眞に國家の慶事である、今後少なくも十餘年は五風十雨の時候も調和し、萬民も快樂を得るのである、但し、怪物の亡骸は竹の節の中に切り籠めて、清水寺の山懐に宜しく埋めるべきであると、何さま大した話しである。

　天井の鳴る音にさへ耳を抱ひ骨を偷む公卿共が極樂世界の樞機を執る。はア然樣かなと感心する。それ竹を切ッて來い、それ亡骸を中に籠めろと前代未聞の沙汰になる。結局鼠は筒の中に籠められて清水の山に埋められた。

　安藝守たるべき旨の恩命が忽ち清盛の上に降ッた。

　清盛夢の心地が爲た。

つく／＼思ふと安藝國には齋島（嚴島）といふ靈地が有る。國も有らうに狙ひ定めて射て落としたかの如く、その安藝守に任ぜられたと言ふ事、偖も偶然ではなさゝうである。

「驚いた、恐れ入ッた。はアて、清盛、是からは立身するのぢやぞ」と胸がどき／＼轟いた。

「安藝國といふ國は豫ねてから夢現に焦がれて居た。なぜ？　尊くも畏くもその國に齋島がござられる。祭神は何の方ぢや？　市杵島姫神、田心姫神、湍織津姫神と申し奉る。但し、猶委しく傳へる所によれば、推古の帝の御宇とか、內舍人佐伯鞍職が安藝の、その恩賀島で三美人を載せて來た紅帆の船を迎へて始めて堂宇を建立したが抑も今の齋島の社の本であッたと言ふ。三美人即ち三仙女を、されば叉天竺の妙音陀天と見奉ッて、後世勸請し奉るのが即ちまた辨財天なのぢや。忝や有り難や、清盛の一生の大願は其辨財天を命とする。それが何うぢや所も有らうに、その而も／＼齋島のある其國の守に、

求めもせずに、爲されたと言ふ是が御加護でなくて何ぢやろか。ても嬉しい、ても忝い。うんむ、清盛の額から是からは白毫も晃めくぞ。加護ぢや！　冥助！　人間界の事ではない。嵐に吹かれ霜に惱んだ何年の間かの蝶の紋所が雲井に名をも揚げ羽となる、嗚呼是が初めぢやぞ。」

迷信であるかも知れぬ。空想であるかも知れぬ。而も信は何所までも信、その信や狂熱殆ど白光を射るばかりの極に達して、舍利をも燒かんず程度になる、偶然に來た運命が偶また清盛その人の身に取ッては中々偶然でない事となる。神佛が已れの身に乘り憑ッたかの氣持ちもする。自尊の意氣も硬ばり立つ。人間が五十年の短生涯しか持てぬ咄嗟間に敢爲邁進の大事業を殆ど無我夢中に決行しやうといふ丈のそれ丈の勇氣が吹き上げる。運命は到底偶然にその然るべき人に回り當たッて、その人を彈き上げたのである。

さらでも多感の人である。涙はら／＼只溢れる。肉が疼いて骨が鳴る。嗚呼回想の此所數年、不動を念じ陀羅尼を誦し、酒肉を斷ち女人を遠ざけ、やがて心機が一轉して其樣な生精進は俗威しにしか過ぎぬと觀じて、酒を煽り肉を食い女を舐り、筋肉と心靈とに出來る限りの滿足させて、人間の目的を快樂の一方にのみ向け定めて、生まれ變はッた放逸自由の身に爲ッた今、この現在の極に至ッて、罰ならば中たりもすべき所を、中たる所か、そのわが心の神と念じ切ッた辨財天女妙音天の垂跡の御靈地に此清盛といふ一形骸がおのづから定められたと云ふ事、返す／＼も冥助とより外思はれぬ事と思ふと、むら／＼として又藤原退治の大任を天か神か佛かゞ平の總領我この清盛に御委托遊ばして下さッた事と心に屹と斷じ切る。

腕を捻ッて「うむ、藤原！　清盛安藝へ參る以上、嚴島をば只置き申さぬ。造營奉り修築し奉り、神慮を迎へ奉ッて、然る後は此腕ぢや。藤原は捻ぢ切るわ。橘は壓し折るわ。源は搔き濁すわ。藥も服めずに亡せられた父君の御靈をも清盛が一天下手に摑んだ曉にお慰申さうわ。

水は自然に流れて轉げて、運命は斯う轉げるものぢやよと、清盛に教へて呉れたわよ。雲は無心に動いて轉げて運命は斯う循環するものぢやよと、是また清盛に教へて呉れたわよ。」

妄想が神に入る。妄で、其所に眞如が有る。獨斷が極に屆く。徧で、其所に無我が有る。悟りから悟りは出ぬ。今の清盛は只迷ッて、そして其迷ひの極點は妄想を獨斷で心に槌打して、やはり信念固め附けた。變な悟りに悟ッて來た。

夜は深け行く。

眠られぬ。

辨天の像を閨に飾ッて、祕藏の香を薰ずれば、心の鎔ける感じが爲て、像の天女は浮いて出る。香の烟は立ち迷ふ。天女は烟の中に立つ。

「南無温柔の大解脫！」と清盛は合掌して、この所只一個の艶な／＼狂者である。

二十一

恩めかす恩を慈悲
めかす無慈悲と言ふ

「愛でたかッたの、平太清盛！　この乃公平馬助までが俄に鼻が高う爲ッた。さりとては出來したな。」

書院の上座に四角張ッて、張り肱するばかりの身構へで、溶けるが如き笑顏と共に清盛に喜悅（よろこび）を述べる人は是卽ち清盛には叔父、保元の亂の武將の一人として後に源爲義と共に其名を傳へらるるに至ッた平忠正なのである。右馬助といふのを通稱にして、それを便宜で短くして平の姓と一つにして、平馬助と呼び做した。同じ傳で清盛をも、その忠盛の長子であるといふ所から平の太郎といふ意味で常からも口癖に平太清盛と呼び慣らした。それ丈又双方が双方とも全く打ち解けた間柄なのでもある。

席には白河殿も坐ッて居る。

清盛とても我身の上の愛でたい事、我知らず笑みさへ

溢れるほどなのを、況して叔父からさへ親しげに言はれて見ると、悪い心持ちが爲るでもない。

されば悪い心持ちが爲るでもないのである。好い心持ちが爲ると言ふ程の心持ちではない。もと／＼清盛から見ると、蟲の好かぬ叔父である。平素から口を利き合ふとしても、十言を要する所を五言で、濟ますといふ樣な間柄なのである。

それが今斯う喜びを言ッて呉れる。決して嬉しくなくはない。但し氣に入ッた人が言ッて呉れる丈夫の喜びが若しも百貫文の値の物とすれば、叔父のは同じ量は有るにしても清盛には五十貫か三十貫大方其邊(そこら)にしか思へぬ。

にたりと清盛は笑ッた儘で何と答辭をするでもない。

白河殿が氣の毒げに、「叔父上がわざ／＼今日は喜びにと來て賜(たも)ッて、それで是非また和郎に會ふて、色々話して聞かせる事も有るとのお言葉でな……」

忌々しげに母を見て、「ふゝむ」と鼻で只あしらふ。

「清盛、偉い出世ぢやな」とやうやく忠正が口切ッた。

「武士として立派な出世ぢや。目に見え手に捕へられる猛者(もさ)暴者(あらもの)ならば、其高の見究めが附く丈捕るも殺すも出來やうわさ。捕へてこそ鼠とも知れたろが、何が何やら分かりもせぬ妖怪を其知れぬ前に於てさりとては／＼よく／＼押さへ付けたよな。膽ぢやよ、まッたく凄い膽ぢやわよ。」

はてな、珍らしい程のお世辭である。毎も何うして何うして此樣な愛嬌の口利く叔父殿か。清盛は肚の中で氣味悪いやうにさへ思ふ。

しかし、嬉しくなくもない。されば、前よりは段々其嬉しさが増して來る。

にたりが今度は莞爾となッた。

心から嬉しげな顔になッて、「忝う存知申す。お褒めでは痛み入る。膽とは仰せられるもの〻、全くは無茶苦茶でぢや。」

「その無茶苦茶が尊いわ。」

驚いた！　お世辭は數の知れぬものである。無茶苦茶

をさへ膽といふ。

清盛殆どぎよッとなる。

「眞實ぢや、無茶苦茶が膽なのぢや。膽が有ればこそ無我夢中に無茶苦茶に事を爲る。戰場の切り合ひとても其理ぢやろ。」

いよ〳〵聞いて、惡くない。

いよ〳〵更に莞爾々々と、「全く怪我の功名で……」

「謙遜ぢや。さて氣高い。實は其事で此平馬助も參ッたぢや。母御前には一寸もうお話しゝたのぢやが……」

と白河殿と顏見合はせて又にッこり微笑する。

白河殿も進み出て、「叔父君の目に見えぬ陰に回つて和郎のためにお心盡くして賜るのでな……此母も今承ッたのぢや。」

「待ち召され。已が言ふ。これ平太清盛、安藝守に立身した其本はそもそも誰からの肝煎りぢやと思ふかな。」

「誰からとな？」と些し困ッて、「されば誰からと仰やられても、格別まだ清盛には其邊たしかな見當も……」

「うむ、尤もぢや、附かんとな？」

「附き申さぬ。」

「さうぢやらう〳〵。されば、夫を知らせうと思ふてな。知らせるのも和郎の身のため、其心得で是からの世に立たば、決して惡い事は無いからな。」

何うやら變な口吻である。推察は本來中々鋭く早く回る方の清盛とて、其口吻から早くも氣取ッて、はゝあ又しても叔父殿は藤原の提灯持つ氣ではないか知らと、只何となく考へる。

「言ふて聞かそ」と改まる。「肝煎ッた恩人は他のお方ではないのぢや。それ和郎が怪物捕へた時宿直してござッた、あの藤侍從の殿なのぢや。」

清盛の耳はぐわんとした。

偖こそな、すはや肝煎ッた恩人は藤原であると言ふのかな！

すぐ顏色が變はッて來る。

その顏色の變はるのを見る平馬助は又思ひ當たる事も

有る。藤原と一寸聞く丈でさへ此樣な顏をすると言ふ、其狹い心得違ひを叔父たる乃公が直してやらうと思へばこそ態々斯うして來もしたと、同じ理窟を言ふとしても一際力が入れたくなる。火に宛がふ慾ひの水、沸騰は避けられぬ數である。

「清盛、訝しな顏を爲るではないか。」

「誰がでござる。」言葉附きが最う暴い。

平馬助も勃然となる。

「うむ、聞こえた。清盛、和郎また毎もの病ひで、藤原は蟲が好かぬ／＼と言ふ、其了簡が腹に有るので、それで只一寸己の言葉を聞いた丈でも、そのやうな顏をするのぢやな。」

「惡うござるか！」

「驚いた。和郎は直もう喧嘩腰か？」と忠正の語も浪立ッた。

白河殿が挿まッて、「これ平太、これ清盛、和郎とした事が稜々しい。惡うござるかとは夫や何ぢや。」

白河殿は息を切る。清盛は火と熱る。

「何ぢやとは又しても藤原臭い母御前が！　母御前と叔父君と一つ所に顏さへ合へば、やァれ藤原そゥれ藤原……清盛聞きたうござらぬわい！」

二人は暫時氣を呑まれた。

「清盛！」と忠正が搖ぎ出す。「己や噓は言はぬわよ。藤原家が肝煎ッて賜ッた故、肝煎ッて賜ッたと和郎に知らせに來たのぢやい。己に何の怨みが有る。」

せゝら笑ッて「失禮ながら叔父君もよく／＼お人が好うござる。藤原がッ……」と故意とらしく力を入れて扱くが如く言ひなぐッて、而も呼び捨てにさへして「肝煎ッて賜ッたと、嗚呼、お知らせ下さッたか。藤原のため走り使ひの役まで爲さらば、御本望でござらうよ。」

「何ぢやとな？」と赫となる。

白河殿は聲甲走らせて「何うしたら、これ、清盛！和郎には魔でも憑いたか知らっ　折角わざ／＼御親切にお知らせにまで來て賜ッた叔父上にさりとは餘りと言へば

……」

舌打ちと共に妨げて「どうせ母御前は藤原ぢや。さりながら母御前よく聞こし召せ。母御前の殿、即ち此清盛の父君は清盛と同じやうに常日頃藤原め／＼と藤原を憎み疎んで此世を去られたお方ぢやといふ事を、夫婦妹使の間中ならば、些しはお考へもあるべきに……」

情が激して堪へられぬ。清盛末は泣き出した。

忠正は呆れ顔。

「おウやおや、こりや事ぢや。こりや清盛と藤原家とは仇敵の末でがなあらう、是ほど口惜しいものか知ら。な、な、白河殿、平馬助も最う此上は清盛に向かツて、藤原のふも言ふまい。馬鹿々々しい！　利益を思ツて惡く思はれて、このやうな詰まらぬ事は無い。其代はりにぢや白河殿、和女だけには申し置くが……」

忠正も業が煮えた。二度繰り返さずともの事である位は承知してゐなくもないものゝ、清盛への面當半分、わざと又々白河殿へ改まツて述べ立てる。

「白河殿、和女だけには申して置く。藤原家の方々は平太清盛が斯程まで藤原家を憎むとは知ろし召さず、な、お痛はしくも御存知無く、清盛の功を彰はさうとの、その廣い御心から宜しくそれ／＼御評議で安藝守授けられたのぢや。さればよ相手は泣くほど不快にならうとも御存知はござらぬのぢや。と言ふた所で、既に綸言とも爲ツた。一旦畏い邊から手續きをそれぞれ經て下し賜はツた任命ぢや。今更取り消しも叶ふまい。されば先々與へ損、まづ勿體無い事ぢや。忠正も最うお暇申す。深切で參ツた氣ぢや。今何と言ふても斯と言ふても然う思はれなければ是非も無い。清盛勝手に爲されよぢや。暇申す」

とぷいと立つ。

「清盛、何をか言はぬかな。叔父君はお歸り爲されると……」

「御勝手に遊ばすぢや。己や愛憎では申さぬわ。藤原仇敵と思ふ故ぢや。」

「と言ふたとて現在々々安藝守に和郎の身をお取り立

て遊ばした、それ丈のお世話の恩を思ふたら……」

「そりや此清盛に夫だけの大きな手柄がござるからぢや。」

直と呆れて、「ても酷い。」

「また然うではござらぬか。叔父君とした事が今日斯うしてお出でになッた、それは御深切に違ひ無い。それ丈は感謝する。恩がましく、やれ藤原、お慈悲めかして、やれ藤原と、是故に腹は立つ。清盛いつ迄平太でござろ。」

あはよくば一天四海を五寸の此手に握るか知れぬ。藤蔓に傳はらず、平は平で平らな道をぺたり／＼と登る氣ぢや。強ひて安藝守賜はッたのが恩ならば己や安藝守を返却する」と熱涙は迸る。

二十二

わがために性を矯めるのを眞善、他に對して性を矯めるのを僞善と言ふ

忠正も手が附らけれぬ。

嗟嘆して、「敵同士ぢや、どうしても。叔父甥の間柄、さりとて己もまだ／＼然うかと言ふては濟まされぬ。試みにまづ源氏を見い！ 源氏は藤原家と何のやうに掛かり合ひ附けて居るか、和郎とても存知ぢやろ。存知せぬかな、それとも又。勿論存知せぬか知れぬ。存知したらば誰とても負けまいとの心起こさずにも居られまい。己とても意地は有る。」

意地とは何う言ふ意地か知ら、叔父殿の意地と言ふのは藤原へ諛ふといふ丈の、その意地にしか過ぎまいと清盛は腹で冷笑する。

「意地がござると仰やるのは？」と、つひ冷かすやうな口吻で。

「己とても平家ぢやい。源氏には負けたうない。さればこそ／＼源氏は如何やうに爲て居るかと言ふ事を今和郎にも言ふのぢやい。源氏はな、あの六條判官（源爲義）を見い！ 全でもう温和しく藤原に跟き從ふて、それがために名望もさ／＼高く廣いのぢや。六條判官といふ人、勿論大人しい生まれ附きぢや。それ故何事に附けて

も素直で藤原にも従ふのぢやらうが、さりながら又その然う藤原に従ふといふお陰で、あの通り名望が段々盛んになるのを見ては、平家とても實は／＼手を袖にしては居られぬ理ぢや。此平馬助とても犬畜生の生まれぢやない。只諛ふのをば好まぬ。さりながら今の時節、藤原を敵にしては何うしても我身の損、つまり我家の損、卽ち又我一族の損、と思ふ故にこそ、己とても負けぬ氣で六條判官と同じやうに藤原へと從がふ氣ぢや。」

なるほど夫にも一理は有らう。否一理は有らうどころか、全く／＼道理であると、白河殿は勿論思ふ。

「清盛、全く叔父上の仰せられるのが道理ぢやろ。と言ふて何も決して決して此妾が藤原の出ぢやからとて片贔負するのではない。何を言ふても藤原家が攝關の鍵を握る、この日の本の國柄ぢやろ。」

「と仰せられるなら論議も爲たい」と又清盛は冷笑した。「藤原が攝關の鍵を握る國柄ぢやと、あはゝ、神佛が仰せられたかな。」

忽ち急に烈火となる母及び叔父の顔を見比べて、

「藤原にそれ丈の株が有るものならば、同じく帝の血筋を引く宇多源氏、清和源氏、村上源氏、乃至葛原親王以後の此平家にも其株は有る譯ぢや。」

「理窟でばかり押されぬのが世の中ではないか清盛」と忠正はまだ／＼まだ怒りを我と我身で抑へて、「それもぢや、今の藤原家に愚物のみならば何うでも宜い。今の宇治左大臣は倩何うぢや。」

宇治左大臣とは他でもない、後世からは失敗の野心家として一から十まで惡人のやうに思はれて、而も其時代がまたその人を忌むあまり惡左府とさへ言ひ做しても居た共「惡」といふ語の惡稱に由ッて、千秋の末までも猛烈なる惡人とのみ思惟された、すなはち頼長その人である。

「何うぢやとは？　偉いお方ぢやと仰やるのか？」

「うむ、然うぢや。」

冷然として「どうでござるか清盛はまだよく存知申さぬわ。」

「噂には聞いたろが。」
「噂には聞き申した。」
「さらば何の樣に聞いた？」
「無類の賢者と聞き申した。」
忠正は只呆れた。
「賢者と聞いた？　賢者と、これ、和郎は左大臣殿を聞いたとの？　何うぢやろ、和郎の人の惡い。年取ッた此叔父を手遊物(おもちや)にする。既に左大臣殿を然う賢者と聞いたならば、假令是までからの藤原家、乃至今許多の藤原家は惡くても、此左大臣殿のみは同じ藤原家ながらも、賴り縋ッて差し支への無い程の賢者ぢやと……」
　半で抑さへて「いや〳〵。よくお聽き取り下され、叔父上。左大臣殿を清盛は賢者と聞いたとは申した。左大臣殿を清盛が賢者ぢやと思ふと、此清盛は申さぬわ。」
「何ぢやとな？」
「噂では左大臣殿は賢者でござる。但し噂は噂でござる、噂といふものは影法師より正味の無いもの、世の是非や褒貶は決して其人の眞の値を言ひ盡くしたものぢやござらぬわ。」
と語氣もそろ〳〵暴くなる。
清盛の語氣の暴くなるだけ、忠正の語氣も暴くなる。
「噂は嘘ぢやと和郎は言ふのか？」
「清盛は然う申す。」
「和郎は然らば左大臣殿を……」
「詐り者ぢやと言ひ切り申す。王莽流の人と申す。」
「王莽とは？」
忠正といふ叔父よりも青表紙を讀んだ點に於ては清盛といふ甥が勝ッて居る。
「漢時代の詐り者でござる。」
「ふむ、どの樣な詐り者ぢや。」
忠正は今何も必らずしも王莽といふ詐り者の人物を其知識を要求する點から、聞きたいと思ふのでもなかッた。只一圖その王莽が如何やうの詐り者であるかと言ふ事を清盛に言はせた所で、それと左大臣殿とは違ふとの趣き

を論破しやうと肚で思ふ、到底その支度としてまづ相手から言はせる丈を言はせやうとする外にならぬ。

清盛は委細管はぬ。

「似たも似た、よく〳〵似合ふたと清盛は思ふのでござる。王莽といふ人、初めから漢の天位を狙ふだけの野心が有ッて、あらかじめ人心を攬るために恭倹を裝ふたものか、それとも其まだ時を得ぬ間は眞實そのやうな恭倹な人であつたものか、其邊は實は分かり申さぬ。人間として生きて居る以上、氣の變はるといふ事は隨分有る。今日の惡人必らずしも明日の惡人と限られぬのと同じ事で、昨日までの王莽が必らずしも惡人であッたとは勿論言ひ得も致せまい。さり乍ら何は兎もあれ、以前は恭倹謙愼で、後日不逞の惡徒となり、遂に天子を弑し奉ッて、御位を已れが奪ひ申したわ。」

忠正は舌打ち鋭い。

「それぢやと左大臣殿を和郎は同じに見申すか？」

「お聞きなされ。左大臣殿は詩歌から文章から堪能にましますぢやろ。」

「うむ、それで？」

「典禮にも通ぜられて、博士も舌を捲くでござろ。」

「うむ、それで？」

「辯舌の上に於ても獨歩の御能がお有りでござろ。」

「うむ、それで？」

「文字をよくお書きでござろ。」

「うむ、それで？」

「政務にもお達しでござろ。」

「うむ、それで？」

「夫で〳〵〳〵」と殊更清盛力を入れた。「些しも〳〵其御能を御自分は誇り遊ばされぬのでござろ。」

「これさ清盛何を申す？　和郎は左大臣殿を、それでも惡く申すのか？　そりや褒め言葉ではないか、やい。」

「褒め言葉ではござる。」

「何所て惡く言ふ氣ぢやい？」

「是から惡く言ふのでござる。」

「何ぢやとな？」と目を屡叩いて眉締め寄せて、呼吸をもよくは吐き敢ぬ。

「よく〳〵出來て自慢をせぬと言ふのが一つの虛僞でござるのぢや。」

「何ぢやとな？」

「天眞がござらぬのぢや。性を矯めてござるのぢや。人間の禮法とか儀禮とか言ふ、外部飾りの虛僞瞞着を周時代に定めた亂暴者を孔夫子とは申すのぢや。」

「呆れたわい」と反るばかり、忠正は舌を吊り上げる。

「あゝ然りとては變はるも變はる。なるほど何所から何所迄も和郎清盛は以前とは變はッたな。大精進大潔齋した頃は蟲も殺さず大人しかッたが、如何にも白河殿の言ふ通り、惡魔に近うなッたよな。」

愚痴めいて言ふ只それ丈が與し易い叔父ではあると、見て取らぬ程の清盛ではない。呑んで仕舞への意氣である。

「左大臣殿が自慢を爲さらぬ、是が御自負の一つでござる。俗の眼を眩ますのぢや。政務にもお達しぢやと言ふ、是が御自負の二つでござる。文字をもよくお書きぢやと言ふ、是が御自負の三つでござる。辯舌にもお長けぢやと言ふ、是が御自負の四つでござる。典禮にも通ぜられると言ふ、是が御自負の五つでござる。詩歌から文章に堪能に在すと言ふ、是が御自負の六つでござる。人間としては出來過ぎた。出來過ぎたお人ほどお過ちが多過ぎる。偉い人は種を蒔く、實は食はぬ。偉くない奴は後を耕す。やはり是も實は食はぬ。中位の平凡がその實を偷む。そこで其中位の平凡が飯を食ふ。是が浮き世で候ふぞと清盛は觀じ申すわい。」

忠正には最う返事が出來ぬ。白河殿の方を見れば俯向いての忍び泣き。

忠正は太息した。

「白河殿、もう駄目ぢや。忠正も弓弦切ッたわよ。賢いのぢやか愚かなのぢやか、此清盛は己には分からぬ。口は達者で只べら〳〵、己の扱ひには參らぬ。よし、戰

場へ參ッても饒舌ッて軍をするぢやろ。罷り歸る！」と突と立つ。

「叔父上、暫らく！　これ、淸盛」と白河殿が身悶えするのを、淸盛は只横目で見て、强い咳只一つ。天井向いて口の中、

「讀めたわい、叔父の奴！　左大臣に欺されて、火の中へも飛び込むわ！」

やがて來る運命を只何と無く髣髴と淸盛は感得した。

二十三

其人以上の力の有るのを
其人死後の遺書と言ふ

そろ〳〵保元の亂が孕む。

白河北御所での合戰は七月十一日であッたが、その只實に八日前、卽ち七月三日には既に最う新院(崇德天皇)が宇治左大臣に擁せられて亂をお企てに爲ッたとの旨が朝廷に知れて仕舞ッた。勿論祕密にも知られた事とて、淸盛はじめ些しも知らぬ。只それを知らぬばかりか夫からの祕密の評定が內裏で開かれたの事さへ至で〳〵夢にも知らぬ。

運はやうやく淸盛に笑顏を見せて來たと見えて、思ひも掛けぬ方面から突然として淸盛は事の巨細を告げられた、それが七月六日の夜で。

蒸し暑い夕方で、風些し吹かうとするでもない。例の通りの勤行とて持佛堂へ暫時籠もッて、淸盛は陀羅尼を念じて、やう〳〵前栽へと出ると、晴れ亙ッた西の空に六日の夕月が掛かッて居る。

謹しんで月に禮拜した。

身も心も澄み透る氣持である。

「嗚呼、いつも〳〵打ち仰ぐ月は全く氷の精、霜の鏡、雪の花、身も淨まッて凍るわよ。淸盛も最う安藝守、やがて任地へ赴いたら、改めて島の浪の餘沫に吹かれて、おのづからの垢離を得て、身もいよ〳〵塵界俗界を離れて雲居の人と爲らうかな。」

一寸しても「身」といふ語と「雲居」といふ語との二つは

念頭に出沒する。功名に渴する其咽喉の乾きを月のその冰の精とかは流石に癒やして哭れぬと見える。

袖垣の横間から不圖人影が現れ出る。

「殿！」と一聲、その聲は甚だ低いが押し附けたやうに韻は強い。

「はてな」と、きッと透かし眺めて「誰ぢや。おッ、和郎は、やッ、筑後左衞門か？」

「御意にござる」と進み出る。

なるほど筑後左衞門か！　さて意外！　些ばかりの不始末が有ッて、暫く清盛の面前を遠ざけられて居た筑後左衞門家貞を今斯う突然に、而も忍びの出合ひもどきに、前栽の中などで見やうとは夢にも思ひ掛けなかッた。

「殿、お變はりもあらせられず。大慶に存知申す。あのやうな始末で御勘氣蒙ッて居ッた某、盜人か何かのやうに斯う忍びなどしてお驚かし進らせるはいよ／＼大罪い至りでござるが、さりとて一大事を眼前に扣へての事たとひ如何やうなお怒りを蒙ればとて、申し上げやうと志す丈の赤心は申し盡くさでは濟まされず、お怒りはお怒りとして頂いて、只一言、只々實に一つの大事をお聞き取り願ひたい。一大事でござるわい」と、じり／＼と寄り近づく。

平家譜代の郎黨として智慧第一たる人物とは豫ねてから清盛も認めて居る、その筑後左衞門家貞なのでもある。不都合が有ッて一時は放逐したものゝ、それでも怨む樣子も無く、斯う急に何事かの一大事を知らせに忍び入ッて來たかと思ふと、素より前から惡く思ッて居ぬ丈に、甚だ懷かしい氣持ちもする。

それでも多少苦い顏、

「一大事を知らせるとな？　突然の歸參に體裁を飾る氣か知らぬが、清盛はその手は食はぬ。」

と、是は每もの傳であると、疾くに最う主人の癖を飲み込んで居る機轉者の家貞がそれを遮らす筈は無い。

「何と仰せられても返し奉る言葉はござらぬ。さりながら家貞が如何に何でも突然の斯うした御目通りを無禮

ぐらゐには存知してござる。只その無禮呼ばはりに代へられぬ一大事ゆゑ、お叱りはお叱りで受け奉る事と覺悟定めて、もとより日陰者の身のこと、表立ッても參られず盜人のやうな眞似して、斯くの通りなのでござる。兎に角手早く申し上げる。殿、一大事でござるわい。宇治左大臣殿が新院に勸め奉ッて御謀反を企てられ、それが早くも內裏へ知れて、內裏の中の紛雜は譬へ樣もござらぬのぢや」と息も吐かず述べ立てる。

寢耳に水とは此事である。

否、よく考へると全で寢耳に水でもあるまい。宇治左大臣の臭いぐらゐは旣に分かッて居た樣でもある。さりながら斯う急に謀反沙汰に爲らうとはまだ／＼思ひも附かなかッた。

家貞がもう淸盛の目から見ると、後光の射すほど偉くなる。

「本當か？」と聲揣む。

頸を叩いて、「噓であッたら是を召せ。」

「驚いた。」

「お驚きでござるかな？」と宛もこそと言はぬばかり、「但し／＼殿！」と口上手が語を刻んで故意と感じを抉り込む。「まだお驚きの事がござる。」

「ほむ？」と眼も頰も圓くなる。

「そこで內裏で御評定でござる。白河北殿討手の武士を召し集められるとの御評定で、まづ旣に調べ舉げた御謀反方の武士の名を諸卿が篤と閱見された。」

ぎよッとして「ほむ！　誰ぢや？」

懷中から家貞は小さな横笛取り出した。

横笛を何うするのかと見ると、やがて縱にして上から叩いて、中から紙切れを飛び出させ、取り上げて卷き返し繰り擴げて、

「これ御覽ぜや」と指で指す／＼「公卿では左京大夫敎長卿など此通り、武士では六條判官はじめ、これ御覽ぜや、このお方も……」

このお方もと指す其名は、吁、叔父平馬助忠正で！

清盛は最う息を呑む。
「叔父君が御加擔とは嘸かしお驚きでござらうの？」
「うむ」と重く只うなづく。
「六條判官も此通り………」
「察しの通りぢや。但し、今………今思ひ當たる。叔父君がつひ此程己と爭論した、その口吻の深い譯も………」
家貞それを耳にも入れぬ。
「但し〳〵〳〵」と又しても語を刻んで「それよりも猶々殿のお驚きになる事が………」
「まだ有る？」
「內裏御守護の武士として召し集められる人々は先下野守義朝に………」
「うむ、筆頭は源氏かの？」の目の色が稍變はる。
「殆ど源氏なのでござる。義朝に、義康に、賴政に、季實に、重成に、維繁に、實俊に、資經に、信兼に、光信に………」
「待て！」と最う〳〵聞いて居られぬ。「この清盛にお召しは？」
「一議論がござッたぢや。」
「一議論とは、あの、これ家貞、此清盛をば召すなとでも？」
「御意にござる」と屹として「一議論がござッたぢや。」
「うむ」とばかり身を乘り出して、その例の氣象だけ涙をさへ浮かめて居る。
流石家貞落ち着いた。
「落ち着いて聞こし召せ。安藝守清盛は門地勿論卑しからず、一門の數も多い次第、まして源氏の義朝は又爲義と分離するといふ樣な、餘り好もしからぬ事譯でもあり、この度の合戰にて眞先に清盛を內裏へは召される方が順の道でござらうと、是が諸卿のお言葉でな。」
「うむ」と頷く。
直抑へて、「然るに異論が沸き申した。」

「待て！　異論？」

「されば意外の異論でござる。清盛勿論宜しい丈の一族の數を持ッては居るが、何と言ふても一宮殿とは乳兄弟の間柄、どの樣な腹が有るか知れず、まづ心は許せぬと、斯う異論が出申した。」

なるほど聞けば一理も有る。一宮殿即ち新院（崇德天皇）御嫡子の宮（重仁親王）と自分清盛とは同じ乳母子即ち乳兄弟である。今更乳兄弟が怨めしい。

「そして、何うした、異論の末は？」

聞かずとも異論のその末を、何うせ言はずには濟むまい。それでも、しかし、只急き急く。

「異論が一時勝ち申した。」

一時と言ふのに脈は有ると、清盛は其「一時」の語を抉り出したやうに耳底に留めて、

「一時勝ッたと？」

「はい、一時！　思ひも設けぬ女院の君から又の御異論なのでござる。」

「異論に對する御異論か？」

「御意にござる。異論に對する御異論なので。即ち、清盛召す事然るべからずと言ふ御一同の異論に對する又の御異論として、そりや違ふとのお言葉で？」

「女院の君が？」と目は張り切る。

「御一同は承服せぬ。先帝の御遺誡に豫じめ今日の事の有るのを思し召してあらせられとやら、萬一の場合ひには是々の武士を内裏へ召し集めよと連名をお記し遊ばされてあッたと言ふ、その御遺書を女院の君へ突き附けて、御覽候らへ是には清盛の名はござらぬ、と斯う難じ奉ッたところ、女院の君は狼狽たまはず、その手蹟を誰のと見る、妾が加筆ではないか、その時に清盛のだけは故意と書き落とせとの旨、先帝のお言葉でござッた故、其儘を只心に含んで、わざ〳〵清盛の名をのみは即ち省いて置いたのぢや、と、斯う仰せられてござる。爭へぬのは如何さま〳〵お手筋が女院の君のでござる。お書き遊ばした其お身のお言葉には違背し奉るべくもござらぬ。

一同さらばと承はる。即ちやがて殿もまたお召しになるとの事でござる。」

聞く／＼只々驚くばかり、今更女院のお志しの、身に取ッての忝さが腹の底まで浸み通る。聞くのは只聞く丈でも、末になると只もう嬉しく忝く嬉し涙を制め切れぬ。禁裏の方へ向き直ッて、清盛はもう只の無言で謹しんで平伏した。

後日を知らぬ人から見れば、忠實温良この上も無い、一の可憐の男子である。

二十四

使役(つかはしめ)顔して稲荷を操る
稲荷以上の稲荷を狐と言ふ

「筑後左衛門、筑後左衛門、己や只忝いと言ふ丈ぢや。雲深い禁裏の奥の事をよくも探り知ッて吳れたよ。而も捨てられたやうな此清盛に對しては怨みもせず、身を忍ばせて追馳せ歸ッて、己悦ばせて賜るとは、嗚呼々々清盛何とも言へぬ。是までの勘氣なんどゝ、その樣な事は取り消して、改めて己から詫び言ふわ。忝いぞ忝い。」

全くの事忝い。又而も女院の君が然程までに此清盛にお目掛けて賜はるかと思へば、其れも夢の心地である。

「さらば家貞、お召しも頓て降らうな。一族の呼び集め抔、是また和殿に一任する。但し己の智慧袋たる和殿ぢや。手早くまた和殿と此所で一相談をも爲て置きたい。禁裏からのお召しは忝い。但し、一期の踏み初めぢや。大丈夫、禁裏へ御加擔申して、後悔は無からうな。」

中々他には相談せず、大抵は獨斷で事を爲(す)る性質のわが殿が斯う碎けるとは忝い。その氣を讀み得ぬ家貞か！

にこり笑ッて、「御運の開き始めでござる。」

「運が全く開くかな？」

「と確かに家貞はお祝ひ申し奉る。叔父君平馬助殿が藤原と合體する思し召しで大骨折らせらるる事にお爲り遊ばした、その裏を行くとすれば、何うでも天下分け目でござる。禁裏が負けたらば知らぬ事、若し白河北御所が負けたとすると、何うでも宇治左大臣殿も叔父君もお

頸はござるまい。」

「うむ、なるほど。」

「さう爲ッて負けた曉には十の物が九つまでは戰死など遊ばすべき叔父君ではござるまい。」

「降參するか？」

「御意にござる。その時宜しく申し立てゝ叔父君を申し受けて、すばりとお頸を刎ねられる………」

「誰が？　己がか？」

「無論でござる。それで藤原の勢ひは些し蹴騙されるのでござる。ところで又其所が不思議に面白く爲り申す。殿が叔父君をお斬り遊ばした以上、假に六條判官も降參でも爲た場合ひ、どうしても／＼下野守（義朝）が判官斬らでは相濟まぬ。」

「全くぢや。」

「斬る味は同じ事で、斬る値打ちは違ひ申す。殿は斬ッても叔父上、義朝は斬れば父、叔父斬ッたと言ふのと父斬ッたといふのと、上向きの貫目は同じ事で、人受けは全で違ふでござる。叔父斬ッたのは人が容赦もする。父斬つたのは容赦いたすまい。卽ち、何と何うでござる、同じ丈の手柄をして義朝は一割りも二割も損な所を踏むのでござる。其所で其上何うぢやと言へば藤原と親しかッた六條判官斬ッたといふ丈、義朝は藤原からの憎みを人一倍受けるのでござる。損な役ではござらぬか。」と宛も快げににこりにこりと、而も片手を差し伸べて、清盛の膝びしやりと打つ。

「味方が勝ちさへした以上、御運は殿のものでござると、それ故、家貞が申すのぢや」と又も清盛の膝びしやり。

ぞく／＼する程嬉しくて、なるほど毎もの智慧袋が又も口を解いたかと、清盛躍り立つばかり。

「分かッた／＼、よく分かッた。さすれば御所攻めの合戰には己は成るたけ油賣ッて、義朝に働らかせるのぢやな。」

「それ／＼！　それに限り申す。」

「叔父君が降参したら、一も二も無く申し受けて、己が頸を斬るのぢやな。」
「それ／＼！　それに限り申す。」
「すると義朝は何うしても我父を殺すとなる。」
「すると、義朝は憎まれる。」
「巧い！　分かッた。承知した。」
「しかし、夫からが猶大切！　斯うでござる、もしもし殿！」
聲を潛めて前後を見て、一段更に躪り寄ッて、
「殿がそれからお化けなさる。」
「何ぢやと？　己が化けるとな？」
「藤原方に電光石火、上部をお化け遊ばすのぢや。」
「己が藤原方になるのか？」
「藤原方に爲ッたやうに故意とお化け遊ばすのぢや。お聞きあれ。人は隨分逆を好む。常日頃あまり藤原とは打ち解けぬ殿が戰爭にも勝ち、叔父君をも斬り、天晴手柄すくめとお爲り遊ばした所で、もう藤原にも然う／＼は頭をもお低げにならぬか知らと思はれる時に及んで、がらりと樣子を打ッて變はらせ、藤原の下へ屬くといふ工合ひに萬事をお見せ遊ばすのぢや。」
「なるほど、それが化けるのか？　化けて、何さま、然うすると化け甲斐も有る譯ぢやな。勝てば誰も心服る。手柄すれば他を眼下に見る。淸盛如き身貧な者などは猶の事、手柄をでも爲たとなると、威張り覆らうと人は必ず思ふところで、其所を己が然う爲ずに、殊に／＼是までが昔から双方で嫉視反目する藤原へ平家の己が下から出て從ふ態を見せて呉れると、斯うなのぢやな。」
「それ／＼、それに限り申す。」
「智慧ぢや。忠告忝い。宗貞、今まだ事は成らぬ前ぢやが、前祝ひに禮申す。是と言ふのも勿體無い、日頃念ずる陀天のお加護ぢや。己の不興を蒙ッて出て仕舞ふたと言ふ和殿までが立ち歸ッて來て、思ひの外の事を早く知らせて呉れて、思ひの外の智慧をまで亦授けて呉れると言ふ、是が人間業であらうか。あゝよく戻ッて賜ッ

たぞ。」

　勘當されて勝手に戻ッて、そしてよく戻ッたと褒められる。お土産の價は偖偉い。但し、お土産の價とも言ひながら、しかし、捌ける時にはよし捌けて、古い事をくど〳〵言ひなどせず、勘當したのも何も斯も全で痕も無い腹の、その只實に他愛無い、いはゆる光風霽月なのが如何ほどまた家貞をも滿足に思はせたかも知れぬ。智者には間拔けが丁度合ふ。

「あいや、さらば、殿！」と今更らしい世辭見たやうな言葉を聞くどころの今ではないと言はぬばかりの顏付きで「恐れながら餘談は御禁止！　さらば家貞に一族郎黨勢揃への事一切を任ぜる旨の御文書賜はッて、それを頭に頂戴して、家貞は是から早馬で主なる所を巡るでござろ。」

「今直！」

「時刻は最早移せ申せぬ。遲くも明日の朝までには禁裏からお使ひがござる。それからでは餘人より早いといふ事にて參り申さぬ。今夜すぐ手筈、明朝お使ひが參るか參らぬに打ち揃へて軍支度で禁裏へ參るといふ、この工合ひに……」

「大丈夫か？」

「御安心遊ばせや。」

「馬を和殿は持ッて居るか？」

「馬はござらぬ。」

「馬も無くて早馬とは？　乘り慣れたわが手心の馬でなければ早馬には骨が折れたぢやろ。」

「あはゝ、御心配遊ばすな。お廐のを拜借して。」

「そんな名馬が居るといふ事を和殿は知ッてござるのか？」

「此程お買ひ入れたのをよく〳〵承知して居り申す。」

やれ〳〵盜人見たやうなと、今更らしく舌を卷いて、

「どうも〳〵驚いたぞ。驚いたが、しかし、夫は夫で可いとしてもぢや、あの馬はまだ名も附けず……」

「家貞が恐れながら勝手に旣に命け申した。額の渦を

御承知か。琵琶に些し似て居り申す。」

なるほど夫に違ひ無い。さて／＼是も驚いた。

「額の渦まで、おッ、和殿が？　どうしてぢや。何處でか既に見たのぢやな。それで何ぢやとな、名を命けたと？」

「今ゆゑ委細申し述べる」と、頸差し出して又にッこり「お邸へ牽いて來る途中、あゝ良い馬ぢやとつひ家貞が見惚れ申して、牽いて來たその男に宜しく頼んで、試みに一鞍騎ッて鞍味をさへ見申したわ。それで聞いてお邸へ牽いて參る御料の馬ぢやと知り申した。」

「すると、その時和殿は其邊此最寄りに居ッたのか？」

「京洛の風雲迫ッたのを勿論大方察し申して、疾うから彷徨して居ッて……。」

「驚いた／＼。それで己への馬と知ッてその馬へ途中で乘ッて、鞍心をさへ見たと言ふか。」

「御意にござる。」

「どうも／＼和殿は、な、あゝ夫こそ眞に／＼生き馬の目抜いたのぢや。それで、額の渦まで見た？」

「それで獨で名を命け申した。」

清盛も聞けば聞くほど殆ど可笑しくなッても來る。名まで命けたと言はれて見ると、やはり名も聞きたくなる。聞いて、そして言はれる其名が何う己れを喜ばせるかを、まだ聞く迄は夢にも知らぬ。

「いよ／＼益驚くわ。名まで命けたとは何たる手早さ。そして、何う言ふ名を命けたぞ？」

「渦の毛並みが下に廣くて上に細い、さながら琵琶でござらうが。」

「さう言へば何さま然うぢや。」

「その琵琶で、それ故に……。」

「なるほど、其所で何うなのぢや。」

「艶なのが好うござらう。そこで、艶なのに命けて、辨天栗毛と致したわ。」

辨天とは嗚呼何うも！

感に咽せた。

お加護いよ〳〵疑ひ無い。

二十五

極端の無邪氣を多くは
誤認しての邪氣と言ふ

筑後左衛門家貞は氣の利いた惡戯者で、さもなければ猶々正直でありさうな清盛を何うにか斯うにか傍から意地を附け絲を操ッて、段々狡い者にと仕立てゝ行く。

而も清盛にもまた下地が有る。藤原に壓迫された悲觀から多少の厭世觀に轉じたところで、成功は正面よりは裏面からと考へ、自力よりは他力と考へ、正直よりは權謀と考へた心持ちが丁度家貞と相合ッて、また而も其家貞といふ男が目から鼻へ拔ける程の敏捷な性質である丈に、家貞を無二の者と信じ〳〵切ッて來る。

家貞の獻策は、それ故、一も二も無くよく聽いた。

是からを姑らく搔い摘まめば、如何にも家貞の言ッた通り、翌日御所からの召集が清盛へと到着した。なるほど家貞の言ッた通りぞと家貞がいよ〳〵神のやうになる。

そこで又つく〴〵思ふと、家貞が縱令其邊をうろ〳〵して居たにもせよ、清盛たる己れの邸へ牽いて來る馬を捉まへて鞍味まで見て仕舞ッたといふ、その思ひも附かれぬ早業が是また神かと思はれる。

そこで、猶その上考へると、その馬に名をさへ命けて而もまた名が選りに選ッて家貞は知らぬ己れ清盛の心中に祈る辨財天を其儘用ゐたといふ、是も神事かと思はれる。

それに引き續いて又その上考へると、其時は何の氣も附かず廐に繫いだその馬に何さま額の渦の毛が琵琶のやうな象して現れて居もすると言ふ、是も何う虛心に考へても豫ねてから信心する辨財天が或ひは憑附ッてゞもあらせられるとしか思へぬ。何も斯も神づくし、神事づくめ、いよ〳〵己の運は向いたぞと迷信が凝り固まる。

迷信にせよ凝り固まれば、その信は堅い信念なのである。自力よりは他力を信ずる丈の、その實は心の強い性質の人に取ッて見ると、然うして神や佛を種にして凝り

固まらせた信念は筋金を心に入れた薙刀よりまだ〳〵確かに丈夫である。

そこで愈白河北御所討伐となる。

白河北御所の合戰は敢て絮說する迄も無く、保元の亂として誰も知る。兎に角攻擊から陷落までが一切皆下野守義朝の獨舞臺で、七月十一日寅の刻に戰爭が始まッて、そして辰時には最う結局が附いて仕舞ッたと言ふ、今で言ふと午前四時に合戰が始まッて午前八時には最う白河北御所が陷ちて仕舞ッた、只それ丈の事であッた。

全く合戰はそれ丈であッた。しかし、安藝守淸盛を未來の平相國まで押し上げる、その槓杆の動かし初めの合戰であッたとすると、意味は甚だ重大なその保元の亂である。

合戰は僅終ッたところで、禁裏は煮え返る騷ぎである。七月の炎暑中の戰爭と言ふだけあッてか人氣の熱も非常である。武士共に戰はせて高見で見物して居た公卿衆は殿上に息の詰まるほど寄り集ッて、早速の勸賞をとの取り調べで、筆を執る人、名を讀み上げる人、數の計算をする人、それこそ混雜極めて居る。其日の働きの御褒美をその日の中に出して仕舞はうと言ふ、さりとては輕便な手ばしこいお料らひ、何れかと言ふと重大な意味有るそれ程の合戰の後の騷ぎは運動會の競技の結果で賞品の決定を相談するやうなものであッたし否、むしろ夫より簡略なるものであッた。論功行賞の發表には中々の日子を要するものである抔と考へる後世からは夢想されぬほどの簡略なものであッた。

庭上に武士が咽せ返る。

淸盛と義朝とがぴたりと顏を相合はせた。何ぞ知らんや、ぴたりと、互に相見た事、その事も甚だ小さかッたやうで、その實源平二家の運命を、實は定めたといふ程の不思議な對面なのである。御所の合戰も事は小さくて結果は大きく、淸盛と義朝との對面も事は小さくて結果は大きかッた、是が兩々相對して一の奇妙な現象ぞとは、偖その時の誰にもせよ、まだ夢にも知らなかッた。

「おッ、下野守殿か」と清盛がまづ聲掛けた。「まづ勝ち軍でお互ひにお愛でたう存知する。と言ひながらも實に／＼今日の此勝ち軍は眞に和殿唯一人のお力ぢや。何と言ふても和殿の正面して向かはれた大炊御門河原には鎭西八郎殿が居られたのでな、いやどうも怖ろしいあの御弓勢、清盛舌を卷き申した。偉い／＼流石は此兄上であの弟君、驚き入ッてござるわ」と如何にも眞心からで言ふ。

下野守義朝は既に大分醉ッて居る。吹く息も甚だ臭いのを、もう既に人も無氣に清盛へ眞向からげえッふッと吹ッ掛けて、

「あはゝ、手強うござッたわ。安藝守殿、和殿には一寸あの矢面へ立ち向かはれたやうぢやッたが……」

そして退却したのだらうと言はぬばかりの樣子にか、それなりでにやりとして、そして話頭を改めて、

「しかし、和殿が八郎の矢面に立ち現はれ遊ばさうとは此義朝も存知せなんだ。もと／＼戰爭の始まる前、和殿を遙かに見奉れば、和殿は某の後ろから二の手に爲ッて、二條通りを東へとお進みやッた樣ぢやッたが……」

「如何にも御意ぢや、仰せの通りぢや。和殿勿論一の御手、清盛二陣を承ッたゆゑ、即ち和殿の後からして……」

「さればよ」と稍反ッて「ところが、然うかと見て居る內、いつの間にか和殿の御隊は某の後を離れて、三條へと下られたな？」

「如何にも御意ぢや。」

「奇怪ぢやな？」と忽ち語中に針が有る。清盛は返事するでもない。

義朝は溜まッて居たと言ふ工合ひに又げえッふと噯氣（おくび）を一つ、口なめずりして、

「な、な、安藝殿、奇怪といふのは戲れでござる。さりながら何として三條通りへ回られたか、某にはつやつや解せぬ。」

「いや、些思はくがござるので。」

「はッ、如何さま。」

それ丈で猶問はれなかッたものならば、敢て子細を言ふでもない。生憎、相手は生酔ひである。根掘り葉掘り聞きたがる。

「如何さま、思はくがござッたか。然うでござろ〳〵思はくがござらんで、誰が何を爲るもので。すると、どの樣な思はくかな？」

隱せば可いのを正直に「あはゝ聊かの思はくで。」

「しかし、どのやうな思はくかな？」

「方位の吉凶を我知らず考へる氣に爲り申して、實はそれで彼の次第。」

迷信を迷信と思ふならば、誰も迷信は爲も爲まい。迷信を迷信と思はぬ丈、いよ〳〵迷信に凝り固まる。而も又然う迷信に凝り固まるだけ、それを他に聞かれても、必らずしも笑はれやうとも思はぬ。

それだけ愈正直に、

「清盛の年周から言ふて、今日この七月十一日は身に取ッて東の方が全で塞がりなのでござる。」

「如何さま、な」と、然し、冷笑しては居る。「安藝殿は學問がお有りゆゑ、一寸合戰を爲ればと言ふても、直もう其樣な年周とか、星周りとか言ふ事をお考へになられるのぢやな。學問の無い吾々如きは盲蛇物に怯ぢすして、一向もう何が何やら只無茶苦茶、いや、お話しには爲らぬわい。」

と橫の方を見て、其所にぴたりと扈從する、鎌田兵衛と顏見合はせて、鮮かに莞爾とする。

清盛もやゝ不快である。しかし相手にも爲らぬ。

「癖でござる。つひ癖になッたのでな。」

「ふうむ？」と相手欲しやに目を据ゑて「癖とは甚だ面白い。そこでお言葉ゆゑ伺ふがな、さうすると今日此七月十一日は和殿のお身に取ッて見ると、東がお塞がりで、それ故東に向かッて事をば爲されぬと言ふのかな？二條を東へ向かふのを、それ故三條へ變へられたと言ふのかな？」

立て續けに攻め掛かられても、一向繕ふ心も無い。

「如何にも仰せの通りでござる。東が塞がりの上、曉方の合戰でもあり、東に向かひ朝日に向かッて弓引かん事恐れ多く、それ故道を變へてござる。」

「如何さま、其所で八郎の矢面に向かはれた。其所で今度は八郎が東に爲ッたか朝日に爲ッたか知らぬが、また然う八郎に向かはれたのを横へと逸れて、お退きになッたのぢやな。あはッ」と肩を搖がせる。

鎌田をはじめ其附近で聞く一同は一齊に吹き出した。

清盛は只器量を下げた。と言ッたところで、義朝に言はれた通り、それは嘘でもないのである。默るより外仕方無い。が、しかし手の裏を返さぬ内にやがて破裂する兵治の亂も實は只此時の清盛の隱忍の無言の内に既に胚胎したのであると、義朝はじめ思ひも附かぬ。

鈴の高音が鳴り渡る。

庭上の喧々囂々も水打ッたやうに直治まる。いよ／＼勸賞が始まるぞと一同は居住まひから俄かに屹と改める。

筆頭は誰であらう。

勿論義朝なのである。

が、妙な所に妙な意地が絡まッた事に爲ッた。勳功は如何にも有るには相違無いが、滿庭の武士共の眞中で酒氣に乘じて清盛を漫罵痛撃した義朝の一擧一動が急に甚しく殿上人の不快を招いたのでもある。

清盛のみを最負にする氣ではないものゝ、義朝に一鼻開けさせてやれと、殿上人も意地になる。

筆頭に義朝の名の有るのをわざと一段次ぎへと逐ッて清盛を前にした。

安藝守平清盛の名を眞先に呼び上げて、即ち其所で改めて播磨守に榮進の旨聲高らかに言ひ渡す。

義朝は呆氣に取られた。

二十六

鷲摑みにした果實を
旨い液の無い味と言ふ

播磨守に任ずる旨を言ひ渡された清盛は只恭しく頭を低げて、はッと言ふ聲ばかり、其儘でやゝ姑らくは低げた頭を上げもせぬ。

公卿共は一同が一同とも心窃かに清盛の、此恭しさに感じ入ッて、さても武士には似合はしからぬ禮儀の有る男ぞと思ふ。

無慚や義朝は逆を行く。

第二の番で呼ばれたのは如何さま義朝なのである。

腹、しかし、既に不快である。義朝と聲掛けられて、はッと頭を低げるのではなくて、きッとばかり反り身になる。そして我知らず忌々しさに眼をきらりと横へ移して、つひ清盛を睨め付けた。

風雲既に險である。

「下野守義朝」と從來の官名を其儘呼んで、そして一段聲高らかに、「莫大の勳功により、左馬權頭に任ぜられる！」と嚴重に言ひ渡す。

「左馬」といふ語だけは一寸快く義朝の耳に入ッた。

「權」の一語が次ぎに響いて、其響きは俄然として、大不快に燃える怒火を義朝の心頭に晃めかせ騰らせた。

返事が出來ぬ。

任命を宣言されて、お受けする聲の無いのは此上も無い不祥である。堂上は胸を轟かせた。

「下野守義朝！」と改めて呼び掛ける。

「あいや、姑らく。」義朝は妨げた。「義朝を――何と仰やる――左馬の、その、權頭にとな？」

「念押すな！」

「あゝら、奇怪な！　左馬の、その、權頭にとな？」

「是は爲たり、念押すか！　不敬な事を……念押すか？」

舌打ち鋭く聳然と立つ。

「念押す譯がござる故、殊に念押し申すのでござる。人を白痴、莫大な勳功に、左馬權頭にとな？　莫大の勳功に？　莫大の？」と末の最う「莫大」は破裂音になッて居る。

堂上の面色は何れも／＼朱を濺ぐ。

義朝のも朱を濺ぐ。

聲も顫へて「心得ぬ！　白河北御所は誰の力で陷ちたと思す！　いや／＼、それをば問ひ申すまい。今日の勸賞の初めからして心得ぬ。勸賞の筆頭は勳功の多い者たるべき旨は昔からの定めでござろ。義朝をば何う遊ばされた。筆頭に遊ばしたか？　誰が白河北御所の正面へ向かひ申したか？　誰が强弓無双の八郎に兜の星を射削られ申したか？　誰が白河北御所に火攻を掛けまゐらせたか？　まづ夫を伺ひたい。」

形勢いよ／＼安からぬ。而も義朝の言葉にも全で道理は無くもない。堂上も庭上も片唾を飮んで默し切る。

義朝いよ／＼怒りに耐へぬ。

「駄目ぢや、口を叩いても。その代はり義朝は謹しんで權頭を拜領せぬと致し申す」と破鐘聲で言ひ放つ。

堂上すべて騷立ッた。

辯者の名の有る少納言入道信西が身を搖り立てゝ前に出る。

勢ひは暴々しい。さて口を利くとなると、是はまた名にし聞こえた才物だけあッて、妙に粘る口である。

「哮りばかり遊ばすな。權頭がお不好とな？　左馬權頭がお不好とな？　此所は戰場ではござらぬ。もすこし委しう言ひ召されよ。」

「うむ、少納言入道殿、あはゝゝ、此所は戰場でござらぬか？　義朝始めて承知した。功も無功も無茶苦茶であらせられるので、はてな亂脈な戰場は此御所内にもあるのかと、無骨者は考へた。はゝァ戰場でござらぬかな。」

「しッ、姑らく！　權頭がお不好なのか、それとも左馬の……」

「積もッてもお分かりぢやらうがな。但し、無骨者の義朝が常日頃仰慕する少納言入道殿のお言葉ぢや。甘えて申すと致さうか。權頭では不好でござる。」

「なぜ、お不好ぢや？　他家の吾々が申す迄もござるまいが、御先祖の多田滿仲殿とて既に其官に……」

「あいや、それは承知してござる。さりながら満仲は満仲、義朝は義朝、縦令、満仲が何うであッたにもせよ、また満仲が義朝の先代であッたにもせよ、悉く一から十までを義朝は先代のに倣ふとの氣はござらぬ。と申せばとて義朝は必らずしも功に矜るのではござらぬ、又酒興で熱を吹くのではござらぬ。酒は飲んでも生地の無骨が功は有りの儘、心もまた有りの儘、それを申すのでござる。」

「有りの儘とは？」

「義朝が居らなんだら、三日經ッても白河北御所は陷ちるものではござらぬわ」と天突き透す虹の意氣。

「ましてや父爲義とは生き別かれして、父に背く不孝の子といふ汚名を實に／＼大君のため身に買ひ取ッた次第でござる」と其儘たちまち憮然となッて、聲も顫へを帶びて來た。

「父に背いて君に盡くす、是褒めて可い事か、そもそも貶めて否い事か、堂上の方々は經典にもお達しぢや、何と御批判遊ばすかな。」

「すると、何うぢやと仰やるのか？」

「榮華が欲しい故でござる。笑はれるか？　疎まれるか？　源氏など、名こそは清和の帝から出たと言ふ。今は武士たる丈の身分ぢや。武士と言はゞ聞こえが可い。縉紳のお方々のお指し圖の下に只働くだけの、全くは番犬ぢや、狩り犬ぢや。」

満座は寒い氣持ちがした。

「ぢやものを現世の快樂榮華を只貪るといたしたい。命を賭けて立ち向かッて、それ故ぢや、左馬權頭ぐらゐでは燒け腹が癒え申さぬ」と末の言句に涙が有る。

「すると、何うぢやと言はれるか？」

「よく聞きたがるお方ぢやな。言ふたら承知して賜るか？」

「權頭が不好の点に、左馬頭にでも爲りたいと斯うとでも言はれるか？」

「言ふたら承知して賜るか？」

「されば な……」と語が詰まる。
「そゥれ、大抵其邊が落着ぢや。」
「あいや、まだ左馬頭は闕官ではないのでな……」
「誰が闕官ぢやと申した。おゝ、それ／＼安藝殿。」
義朝は平氣な顏で淸盛を見返ッて「和殿が身を寄せて在らせられた、あの中御門中納言家成卿の御子息ぢや、ありや何とか言はれたな？」
淸盛は目を見張る。
「高季殿か」と信西が。
「さうぢや／＼、高季殿ぢや。その方が左馬頭でござろ。」
「然うぢや。」
「高季殿など彼樣な長袖、左馬頭は相應せぬ。義朝の勸賞なら、その左馬頭へ義朝をぢや。」
「と言はれたればとて現在高季殿が居るものを……」
「罷めさせ召され」と平氣な顏。
「罷めさせいとな？」
「何を又々呆れられる！ 抛り出して置いて後釜へ義朝を据ゑる位、何の事でもござるまい。」
「それぢやと言ふて……」
「うむ、可し／＼。馬も碌々扱へぬ高季殿が左馬頭で候ふといふ、見ともない事が面白うて、抛り出すのが出來ぬと言ふ……」
「あいや、愚痴ばし宣ふな。しかし然う仰やるからには左馬頭にさへ爲らば、和殿は本望ぢやと言ふか。」
「それは男ぢや、誓言する。」
「屹度ぢやな。」
「あはゝゝ、御念か？ 屹度でござる。」
「よし、然らば是非も無い。一評定を爲直さう。」
と、一段落は附いたものゝ、是では堂上の威嚴といふ物が何うやら怪しくなッて來る。信西入道の顏付きは常ならず苦り切る。
一官を宛がッたのを更にそれを直すと言ふ事一大事には相違無い。しかし一大事とは言ひながら、何事も戰時

の特別といふ變法の逃げ路が有る。義朝を捨て置くか？何と言ッても斯と言ッても、白河北御所を陷した丈の眞の手柄も有るものを、除外する譯には行かぬ。かと言ッて、義朝から決めて仕舞はぬ以上、後にまだ〱何千人何百人、何れもそれ〲の勸賞に預かるべき武士共が聞へて〱居るのである。下手に氣合ひを損じた以上、血に渴して居る輩が默ッてゐる法も無い。

變法で行かうかなと先信西が考へた。俄かに其所で合議となる。堂上方が一塊りに固まッて、何う爲やうかと相談する。競賣りの札の上げ下げに道具屋がこそ〱話しでもする樣な。

斯う爲ると最う先は見える。我が通るには決まッて居る。果然義朝の意地は立ッて、そんなら望み通り左馬頭をと、俄かに廉目を賣るとなる。一座は殊ど興覺めた。

堂上方も工合ひが惡いか、それからは最う一足飛びにどし〱人々の名を呼び立てゝ勸賞を授け出す。すはや最う又然うなると、夫迄片唾吞むばかりにひッそりして居た一同が又がや〱と言ひだす中を、今は最う只々得意で、大樣に押し分け〱、義朝は其時もう遙か彼方に立ち離れて居る清盛へと尋ね當て〱及び附く。

肩を叩いて、「これ安藝殿！　いゝや、今最う播磨殿ぢや。和殿は何うも大人しい。義朝を御覽あれ。搖れば何れ實の落ちる殿上の枝弱い大木ぢや。和殿も何うか爲るらぬかな」と只無論捨て臺詞、溜飲のやう〱下るといふ樣な嬉しさうな顔である。

二十七

害が自ら利になるのを
おのづからの運と言ふ

「家貞、又も和殿の智慧を一つ働かせて貰ひたい。清盛は何う爲たら、斯う事每に後手組むかな。」と言うた所で何も必らずしも、和殿の策が惡いといふでもない。清盛が下手といふでもない。運命がまだ〱〱此清盛に來ぬのぢやな。」

「すると大和路まで殿には？」

「うむ、思はず深入りしたのぢやて。」

清盛は斯う話して聞かせながら、どうも〳〵家貞への手前にさへ恥かしいやうな體である。

「何しろ、家貞和殿が己の許に居らず、己一人で料らッた丈が脫落ぢやッた。兇徒の中の主なる兇徒六條判官爲義をば清盛其樣が捕へよとの朝命が降ッたといふ事、異族同士の間柄、片贔負の無いやうにとの、朝廷の思し召しなのぢやろ？」

「御意にござる」と家貞は膝を進めて乘り出した。「その上に猶一つ大きな譯がござるのぢや。殿上の方々達、此程の源左馬頭殿の傍若無人の勢ひに最う〳〵源左馬頭殿をば蛇蝎の如く忌み嫌はれて、一人として義朝殿を好く言ふ者もござらぬのぢや。それで萬一六條判官捕へよと源左馬頭殿へ朝命が有ッたとしても義朝殿がおいそれと承りは爲まいとの先を見越してのお考へで、それより は寧その事、播磨守殿へ仰せよと、斯うお定まりとの事でござる。」

「和殿も然うと思やるか？」

「勿論でござるとも。されば又それと反對で義朝とは似ても似付かぬ播磨守清盛殿の御謙讓と、それは〳〵殿上人が如何ほど殿のお人柄に感じ入り遊ばされた事か、それは〳〵知れ申さぬ。酒氣に乘じた義朝の漫言をもよく清盛殿は忍ばれたと皆お褒めなのでござるわい。家貞是は諛ひではござらぬ。全く殿はお大人しい。それだけ今は藤原までが殿を〳〵と言ふのでござる。」

と更に一際聲を潛めて「殿の御運は向き申した、是からの一天下は殿が御謙讓に遊ばされると言ふ只それ丈でお手許へ轉げ込むのでござる。」

苦笑ひして「愛でたいな。和殿の言ふならば確かぢやろ。」

「殿冗談をば申さぬ。しかし、六條判官逮捕のため大和路へまでお出向き遊ばした、その本末は如何やうで？」

「概略で宜しいか。委しくは最う不好ぢや。勅命ならば是非も無いが、この場合ひ六條判官といふ源氏の長を

平家の己が捕へるのは人氣に煩る障るのでな。」
家貞は手を拍ッて、「全くそれでござるわい。」
「其所で實は澁々で三井寺邊を搜索した。居ッたか知らぬが見付からぬ。」
「妙！　殿も中々味を遊ばす。居ッたか知らぬが見付からぬとは、是は〳〵面白いお言葉ぢや。」
「その内大和路に爲義は潛むと、忠義ぶッて告げて吳れる人が有る。餘計な事を言ひをるわいと思うたが、その心は見せられぬ。そこで大和路へと入ッた。」
「變妙な討手の大將軍が、嗚呼、世の中にはござるわい。捉まらぬやうにと搜して步く、捉まりさうな所は不好ぢやと言ふ、神代このかたござらぬな。」
「すると、己も茫然ぢやわ、無動寺の領內にうッかり迷ひ込んだのおぢや。大衆め、すはや、承知せぬ。寺域を汚す生武士めと薙刀持ち出す騷動ぢや。」
「はッは、嘸かしお驚き。」
「管はぬ。己は直逃げた。」
「はッは、いよ〳〵妙々々！　寺僧の數は！。」
「百人足らずぢや。」
「殿のお手勢は？」
「三百騎！」
「三百騎の甲胄が、さらば百人の數珠錫杖に？」
「うむ、負けたと言ふものぢや。」
「あッあ、流石は〳〵、吁、お强い。」
「負けて强いか？」
「然う行かねば爲らぬ所でござる。」
「神威に對して勿體無いと、斯う己は言ひ立てゝ引けや兵共逃げよやと三百騎一目散に、それなり逃げた譯なのぢや。」
「妙至極、文珠の智慧！　面白い〳〵。殿巧く遊ばした。負けたのもお宜しい、逃げたのも至極結構、藤原を油斷させ、源氏に心傲らせる最上のお仕打ぢや。心で天下をぐたりと爲せて、仕業で天下の目を迷はす、不動は威怒の相を示して內心は慈悲の淚含む、是で世間も濟ま

ねば、信徒も渇仰いたすのぢや。あゝ巧く遊ばした。」

「盛んに其様に褒められると、宛も冷かされるかの思ひが爲る。實を言ふと、矢張り／＼捕へよと仰せ附かッた當の相手をば捕へ得ずに素手で歸ッて來た譯ぢや。此埋め合はせ爲にや爲るまい。」

「勿論でござるとも」と言葉が妙に冴えて居る。

はてな、よく遊ばしたの巧く遊ばしたのと言ふ口の下から、勿論でござるとは些釣り合はぬ言葉である。しかし智慧者の言葉でもある。意味無くもなさゝうな。

「すると、何う爲ば可からうの？」

「然う逃げて仕舞ッた以上、迚も／＼判官殿は殿のお手には入り申すまい。」

「義朝に捕へられるかな？」

「但し、義朝は叔父君平馬助殿を捕へよとの朝命を旣に拜して居る次第、多分は平馬助殿を今日明日は捕へる事でござろ。そして、平馬助殿を捕へて仕舞ッた上に於いて、更に何とかして何れ／＼判官捕へる事でござろ。ではござるまいか知ら。」

見る／＼無念な顔色が清盛に現れる。

「すると、何うぢやろ、此己は？」

「虻蜂取らずでござるわ、な」と手嚴しくぴしりと言ふ。

涙浮かめて「うむ、虻蜂？　はてな、夫では此清盛が重ね／″＼の蹴たり踏んだり、いよ／＼義朝には乘り越されて……」

「お浮かび遊ばす瀬もござらぬ。」

何所までも煽動するだけ焚き附けるだけ只煽動し、只焚き附けて飽くまで胸をいら／＼させて、其所に思はくの有る家貞は寧ろ怖いやうな男である。

「家貞そこで九死一生一期の工夫を附け申した。」

と只それ丈でぎよッとする程、清盛胸を轟かせた。板子の尊きは難船の人に取ッてこそ。最後に至ッての工夫と言はれて、只もう何やら忝い。

「むッ？」と只一聲、息の詰まるやうな挨拶が重大な

る意味凝らした反問の語なのである。

顔と顔とを密接させて「それ故、殿、六條判官は捨て置き召され。」

「そして、何うする？」

「叔父君捕へ遊ばせや。」

餘りの以外に意を解しかねて、清盛は只目を見張る。

にツこりとして「叔父君のお居所を實は家貞突き留め申した。」

「やツ、和殿が！」

「そして家貞親しう御面會まで致してな、宜しく圓めて參ツたぢや。」

驚いても驚き足らぬ、嗚呼、又しても智慧袋！　嘘見たやうな夢のやうな。

「圓めてとは叔父君を？」

「されば叔父君忠正殿は逃げて僧とお僞り遊ばして、お頭をお圓め遊ばした。家貞は搜り及んで、口前で又その叔父君を宜しく巧く圓め申した」と、落ち着いたもので、洒落まで言ツて、莞爾〳〵は恐ろしい。

「何所に然らば叔父君は？」

「淨土谷にお潛みで。」

「お一人でか？」

「否々。御血族の男子と御一所で。されば大體を申すとなると、斯うでござる。御嫡子新院藏人長盛殿な………」

「うむ、なるほど。」

「それから御次男皇后宮の忠綱殿、な、御三男左大臣匂當正綱殿、な、それから御四男平九郎通正殿、な。」

「それでは子が皆殘らずぢや。」

「但し、其外の方々は某が其所へ行く前に、途で既に悉く捕へられたといふ事で……」

「それも義朝の手で皆か？」

「御意にござる〳〵。某が參ツても一寸は事が難かしく、漸やくの事で辯に任せて、充分說き附け參らせた。六條判官は義朝殿のお手の方へ既に降參遊ばされたと斯

う申し上げたところ、始めて其所でお心が變はッたらしく爲り遊ばされた。」

「すると、叔父君も清盛へ早く降參遊ばせとでも？」

「御意にござる。叔父甥のお間柄決して惡うは致さぬ、と、斯う某が保證して……」

「保證した？」と目を見張れば、

手を伏せ〳〵て舌を吐いて「欺す當座の口でござる。そして、御承知遊ばされた。と言ふて萬一またお逃げにでも爲ッては爲らぬと考へ、飽くまでも威し申す丈は威し申して置いてござる。山の隅から隅まで皆官軍で埋まッたと、まづ叔父君の御肝をぞ拔き取ッて置き申した。」

「やれ〳〵何うも驚いた」と嗟嘆と共に何が何やら夢を見るかの心持ち、込み入ッた子細をも立ち入ッて問ふも問はぬも其樣な力も無い。

家貞一人で只飮み込む。

「殿の自然の御出世は是でそろ〳〵芽ぐみ申した。それには憎い叔父君でござろ。好い機に亡き者にして藤原との蔓掛かりをもお斷ち切り遊ばして、そして一方またそれ、義朝をば爲義斬らねば爲らぬやうに押し詰て、人心を離れさせると爲る、天運でござるわい」と、斯うなると不敵なものである。

二十八　運の小口の開けるのを　魔道の口の開くと言ふ

それから清盛は段々智慧を家貞から授けられて、宜しく心に飮み込んで、中納言入道信西の許へと出た。

旣に忠正等は欺かれて、清盛方へ來ては居る。しかし清盛は會はぬ。會ふほど圖々しくもない。家貞に其邊の事をば宜しく任せ切りにして、己れ一人が信西へと一切の報告に行ッたので。

信西もまづ大要を聞き取ッた。

「播磨守殿も流石は〳〵お手柄を爲されたな」と口吻からして忝い。「兎に角此信西もいづれ會ふ事とするが、御家人の家貞とやらが偉い男でござるよな。そこで今も

承ッたがな、平馬助殿等五人の人々が和殿の許まで既に來られて、何う言ふ思し召しでござるのぢや。命乞ひを只願ふと、只是だけでござるのか？」

命乞ひを只望むと、それ丈には違ひ無いが、それを然う言ふ丈でも、叔父甥の間と思ふと、體裁も惡い氣持ちもする。

「でござるらしうござる。」

「らしうとは？」

「あいや、ござるので、只、只、只！　只今も申し上げた通り、既に／＼忠正は頭をも圓くして出家姿になッた次第………」

せゝら笑ッて挿まッて、「頭を圓くした丈で謀反の罪が消えるものならば、世に苦勞はござらぬな。」

「全くで。」

「そして和殿の考へは？」

急に來られて冷りとした。

「清盛の考へなどゝ申して、清盛は只朝命を承ッて、その通りに致す丈………」

「叔父ゆゑ助けたいぢやろが？」

「何と仰やる？」

「助けたく思はれう？　されば、助けたいと思ふのが當然の道ぢやろが。」

偖こそ家貞にも注意されたが、少納言入道が圏套を清盛に掛けるぞと、大抵高を括ッて居る。

「助けたからうと正面から、只叔父たり甥たる間柄を本としてお尋ねに預かるとなると、勿論助けたうはござる。但し、それは人倫の道に由ッてといふ丈で………王事はそれより重うござる。」

「大義親を滅すといふ本文にお由りでか？」と信西は莞爾となる。

「大抵其邊でござらうかな。さりながら又其所には私情の不和もござるのぢや。」

「私情の不和と申されると？」

「叔父甥の間柄ながら、叔父と清盛とは常から交情が

悪うござる。申さば叔父と言ふ丈で、清盛の身から見申すと、道傍の他人より快くない相手でござる。」

と言ふ夫は詐り無い。と聞く夫を、さりながら、信西はまだ信用せぬ。

「全くか？」調子が急に鋭くなる。

「何とて嘘を申さうか。」

「嘘言はぬと言ふ人は嘘言はぬと嘘言ふ人なのぢや。全く嘘を言はぬ人は嘘言はぬ丈の事柄を現の證據に示すがな。」

故意と激させて本心を見やうとする、試みの口かとも思ふが、さりとて不快な言葉である。

我慢の爲所と觀念して、それながら顔色の熱るのをば禁じ得ぬ。

「現の證據を見せられぬ口上を清盛は眞逆男として申すやうな事は致さぬが…………」

猶冷笑か、にこりとして、

「全くお誓ひ遊ばすか？」

「大小神祇……」

「可し／＼／＼！神祇が出れば世話は無い。但し解せぬ事が有る。常から交情の悪い甥の許へ何として叔父上が……」

「歎いたればでござるので。」

「そして何うでも助けてたか？」

「世捨て人に爲ッたとばかりで……」

「和殿は屹度叔父上を首にして持て參るか。」

「御念は愁ひ怨みでござる。」

言ひ切ッて思ひ出した事が有る。家貞が忠告して吳れた事が、なるほどまだ一つ殘ッて居る。何と口前丈は立派に言ッても、まだ／＼夫を言はぬ以上、目から鼻へ拔ける信西が內心承知せぬと見える。あゝ家貞は流石ぢやぞと今更の如く思ひ立つ。

何ぞ知らんや、信西の莫逆の友に花山院中納言忠雅といふのが有る。

その忠雅が文字こそ違ふが、讀み聲に至ッては忠正と

同じである。

　思ひ出せば家貞がその事にさへ早く心付いて忠告をして哭れた。曰く鼬のやうな狐のやうな信西入道を瞞めるには敵の内懐へまで潛り込む氣でなければ爲らぬ。曰く信西入道の入魂の友に忠雅といふのが有る、それと刑人の忠正と同音の名であらしめるのは甚だ穩かな事でない。曰く信西に會ッたなら、是から叔父忠正を斬るとすれば、忠雅殿と名が似て居てはなはだ無禮に當たる故、忠正をば改名させて置かなければ爲らぬと思ッて、實は早手回し過ぎたやうではあるが、既に忠正の名は捨てさせて忠貞と新たに命じてあると、斯う巧く仰やらなければ爲らぬ。

　と、數へられた凡そ夫等が其時は何うだか位に思ッて居たものゝ、今といふ今になッて見ると、全く大事な事であッたと、總毛立つやうな感じが爲る。

　嗚呼、家貞は神である！

　「御念は怨みでござるわ」と清盛は繰り返した。意氣既に勇み立つ。

　「實は仇敵の叔父の名が忠正と申すのを易からぬ事に思ひ申してな、いづれ最う今日か明日かに首にして仕舞ふ骸と思へば、清盛が勝手ながら、既に變名させ申した。」

　夫者の入道信西ながら是には如何にも驚いた。

　「こりや、なる程」と聲躍る。「なる程和殿に言はれて見ると、始めてそれと思ひ附く。平馬助忠正殿と花山院忠雅とは讀み聲同じの名でござるな。嗚呼その儀ならば何を隱さう、あの忠雅は信西の入魂どころか、人に知らせぬ肉縁ぢや。」

　運が何うして斯う向くか！

　「御肉縁とは夫は〳〵。それ程とはまだ存知せず……」

　笑ひ出して「嘘言ふものではござらぬよ。御承知であればこそ、信西のため不祥の事無かれかしと、夫まで御苦心陽ッたのぢや。何しろ聞こえた家貞殿が和殿の手許にござられる。何事にも行き屆き。信西は隱す氣でも、和殿達には知られたのぢや」と乘り地になるのも妙である。

いよ／＼清盛夢を見る。夢でも、しかし忝い。運が一つ立て直れば、泥までが黄金になると聞いた事は聞いても居たが、嗚呼是ほどゝも知らなかッた。藤原家への追從沙汰が叔父の名一つ取り換へた只それ丈で、手強く利くとは不思議である。

陀天の利益と涙が出る。

勇みに勇みが加はッて、「お褒め言葉を伺はうとて只今參ッたのではござらぬ。兎に角お届け丈は爲た。然る上は何時でも、お指し圖に從ッて、忠…忠員等五人の者を……………」

「宜しい。萬事お任せ爲た。今日早晝を過ぎて居る。今日で宜しい。早いが可い。」

「畏ッた。さらば、今日。」

「早いが宜しい。今でも可い。」

今といふ其時刻は叔父甥の肉縁を榮利のため權謀のため毒刄で切斷する時刻である。然り、今が其眞に／＼其言ひ盡くされぬ無慚至極のその刹那かと考へると、叔父百年の生命は、吾清盛がその足を信西の館の門外に只運び出す迄の、それ丈の際疾い間に差し迫ッたかと思はれる。

不思議なもので涙が出た。

一寸前には陀天の利益とわが好運に涙が出て、些し過ぎた現の今には其利益の好運から藤原をうまく欺し、そして血縁の叔父を殺すのかと又妙に涙が出た。前のは運を喜ぶ涙に、後は運を悲しむ涙、奇怪な二樣の涙である。

一圖者だけ殆ど夢中で中納言家を辭し去ッて、邸へと急ぐ横合ひから、「是は爲たり艶な姿が卒然として現れる。

「やッ、夢姬か？」

「伊勢の小殿！」

誰あらう其夢姬は吁、忠正の娘である。妾腹の秀れた美人で、年はまだ十九歳、而もまた清盛たる己れが久しい間戀ひ慕ッて、幾度か袖褄引いて、素氣無く跳ね附けられて居た、その恨み有る姬である。

清盛の身に纏り着く。

「あゝ悲しい。あゝ嬉しい。父捕はれたと聞き申して和殿に命乞ひをとばかり、さゝ、日外の無禮をば何うぞ〳〵お宥し爲されて下さいませ。お願ひでございます。」

縋り着かれた我身には肌柔かい床しい暖味がぢいわりと浸み透る。はて艶な！ 吁辨天を其儘な！

天女の惠みで好運を得て、更に其天女を活かして示したわが從妹の夢姫に夢現のやうに絡まれる。

そのわが戀ひする姫の父をば今日我此手が斬るのである。そのわが戀ひする姫を見れば、戀ひは又々冴え返ッて、迚もその姫捨てられぬ。姫を捨てぬか？ 忠正をば殺せぬ。忠正を殺すか？ 姫をわが物とは出來ぬ。姫を捨てずに忠正斬らずば、榮華を諦めなければ爲らぬ。

天女は床しい、姫は欲しい。姫の父は殺したい。そして榮華を全で攫んで、姫をわが物としたい。

揚州の鶴の情懷、多情の本相有りの儘に、卽ち運がやうやく開いて、やうやく魔道に入らうとする。僞りも構はず言へ！

「姫清盛の情人になるならば叔父君は助けるが……」

姫は俯向く。頰緋らむ。

二十九

誘惑に勝たれる切所を辛く
蹈み留まるのを良心と言ふ

縋り着いた其時は只夢中のやうであッたものゝ、情人になるならば叔父君の命は助けるがと言ふ其一言を聞くと齊しく、胸の中は烈しい動悸で、立ッて居る足の座も無い。

はッと思ッて氣が附くと、清盛も清盛一人身といふのでもなく、伴人さへ跟いて居る。夢姫は惱亂した。

頰の緋味で見て取ッて、必らずしも今と爲ッては夢姫が決して〳〵素氣無くする氣であるのでないと、推察も流石早い。

「姫どうぢや。父御を助けたくはないか。いつ迄も清盛に强面いか。清盛に强面いのは父御に强面い譯ぢやらうが……」

と言ふ其口からの言葉とは又實に全で違ッて居る他の心が腹の中では動いて居る。

忠正が何で助けられやうか！　明日待たぬ今日の是からの程無い間に身首その所を異にして仕舞ふものと既に〳〵決ッて居る、其所を何うして動かせる？

と思ッて居る夫を其身清盛は素より承知で、それで口では出來ぬと知ッて助命の事を夢姫には匂はせたい。

なぜ然う匂はせたいのであらう？

只夢姫を靡かせたい。

萬貫の錢も腰にして、秀麗なる鶴にも騎ッて、楊州の美人も並びたい。恩賞も取るだけ取ッて、功績も出來るだけ擧げて、肉欲も飽くまで〳〵不好になるほど滿足させたい。

それには嘘も厭ッて居られぬ。

夢姫の手をぢいわり執ッて、一緊め強く緊め付ければ振り拂ッてべたりと地に座ッて、涙の顏で屹と見上げた。

「父に會はせて賜はるか？」

「はて父御にか？」

「それ、お言葉もお淀みで！」

「うむ、會はせ進らせう。」

「さらば、只今是から直。」

「是からとな？　今直とな？」

「直では惡うございますか。」

「されば直と言ふて今直には………」

「無念〳〵、伊勢の小殿！　嗚呼、殿は此期に及んで孱弱い女子の姿風情をまだ〳〵嘘で玩んで、眞の情愛お掛け爲さらぬ。夕方までには父の首をお斬り遊ばさうとのお心をお舌の劍に磨ぎ代へて、むざ〳〵此妻をも、嗚呼、お欺し遊ばすか。」

袴の裾に縋ッた手に急に力を入れると均しく、夢姫は聳然と立ッて、清盛の顏睨まへて、清盛の右の手確と執る。

睨まへる其顏に只の〳〵一刻前の淡桃の色は無い。睨まへる其顏は血の氣も絕えて蒼ざめた。清盛の手を今攔

む其纖手は刻一刻の實に前は媚めいた情の脈搏を清盛の手の髓へも浸み込ませた夫である。

清盛殆ど肝を消す。

「父助けては賜らぬか？」夢姫は詰め寄ッた。

「助けぬとしたならば？」

「否、助けては賜らぬか？」

「否、もし助命は迚も／＼叶はぬと言ふたらば？」

「否、否、助けては賜らぬか？」

切迫となると女は强い。自我の外には何も無い。わが言ふ丈を言ひ通す。

結局男が受け身になる。

「さらば、助ける事として、然うと事が決まッたら、和女(おこと)は今日直清盛に………」

「靡けと、殿は仰やるか？」

「然うでござる」と改まれば、

「さらばお助け下さッた、其上の事に願ひましよ。」

「そりや叶はぬ。」

「叶はぬとは？」

「助けぬとの朝命ぢや。さりながら訓と歌とは其所ぢや。歌が有れば訓が有る。和女(おこと)が誠を示したならば、己とても和女可愛い身の、和女の父御は舅になる。助けいで置かうか。必らず／＼助けるわ。」

「そりや御本心で仰やるか？」

「本心ならぬ事は申さぬ。」

せゝら笑ッて、「あゝ可笑しい。舅になる故お助け爲さッて、舅にならぬ其前は叔父故お助け爲さらぬか。叔父と舅と姻親の重さ輕さがござらうか。」

隙を見る／＼懷中は何やらむく／＼蠢めいた。

流石清盛眼は早かッた。

怪しいぞと見る刹那、夢姫の懷中から一晃きの鋭い光り、逆手に持ッた短刀が、すは、清盛の胸元へ！

飛び退る間は無い。

おッと一聲只叫んで、清盛は力任せに嬢の鳩尾づきりと突く。

憎くはない。しかし、脊に腹は代へられぬ。
　さらば可愛くはないのか。否、可愛い。可愛いが、しかし、殺して仕舞ふ位別段何とも思はれぬやうな、只それ丈の味ひの其可愛さなのである。玩び物に爲たく思ふ時だけ、手放し得ぬと思はれる丈の可愛さで、玩んで不好に爲ッた曉には犬が啣へて行かうとも、敢て何とも思はれぬやうな、其位の其可愛さなのである。祇王を玩んでやがて捨て、佛を玩んでやがて捨て、常磐を玩んでやがて捨て、殿閣を建てゝやがて捨て、福原を建てゝ京都を捨てた、その一生を通しての熱し易く冷め易い、只それと同じ理窟の、その可愛さなのである。
「ほルれ、氣絶し居ッたか。美い奴、しかし、脆いわい。しかし、死に切りも爲まいがな。」
　にたりとした。色白の美男子が頬は見る／＼潮紅した。不圖心付いて振り返ると、伴の侍が呆氣に取られて、只顏色を變へて居る。
「那木丸！　何うぢや、見い！　氣絶し居ッた。勿體無い。」
「勿體無い？」と解し兼ねる。
「勿體無い／＼。是なりで殺し切るのは勿體無い。さりとて高が絶息ぢや。息吐き返らせるのも譯は無い。那木丸、是を脊に負ふて、何所か其處へ舁ぎ込め！」
「はッ！　舁ぎ込んで……」
「舁ぎ込んで——丁度可い。寢かさうが起さうが此死人ぢや。」
　那木丸は目を見張る。
　ぐたりと爲ッた夢姫を清盛は柔く抱き起こして、那木丸の脊へ舁ぎ載せて、不圖見る道の横の方に、嗚呼、丁度可い辻堂が！」
「彼へぢや。さ、さ、さ、さ已に跟け！」
　辻堂へ行く、閂外す。軋り合ひ合ふ戸を蹴放す。煩惱に急く鬼となる。堂內の石の地藏は膚撓まず目動かぬ。
　舁き据ゑた那木丸はがた／＼震へて只顫いて、齒の根もまるで合ッて居ぬ。

「怖くば外へ出て待ち居れ！」

追ひ退けて、偖料理である。つく〲見ると、嗚呼、艶な！　宮方から人橋架けて屢所望されたと言ふ、それ丈の正味の、見れば見る程何さま有り餘るほどの美色である。

「いざ清盛が年來の望みを遂げて、然る後忠正をば是また料理して呉れやう。面白い。是もまた辨天女のお授けか。天女が天女を授けて呉れて、清盛が雲に昇るその門出の祝ひを宜しく遊ばして賜はるか。」

　煎じた此所が切所である。さらば今一目御顏をと、やをら差し覗くとなると同時、ぶる〳〵と身が震へた。

「さりながら無慚ぢやな」と心の〳〵何所かの奥から何の靈かゞ囁いた。

「無慚ぢやな〳〵。何も知らぬ半死の身を辱めるのは無慚ぢやな。」

　無慚を二三度繰り回すと、其「無慚」が繰り回す度毎に畏い〳〵惑動を心の何所へか打ち寄せる。

「痩せ馬には鞭が當てられぬ。雛鳥は摑み殺せまい。さもなくても是から此姫の父たる人を己が首にするのぢやを——その父を首たらしめて、其子に死に恥搔かせるといふ、是も勿體無いか知ら。」

　勿體無いといふ語の意味が些し前とはまた違ふ。前は美色をやみ〳〵と玩ばずに仕舞ふといふのが勿體無いやうに思はれて、今は半死の美婦人の、その麗しい操をば其無心の内に恥かしめるのが空怖ろしく勿體無い。

「諦める！」と屹とした。

「那木丸、姫を活かさうわ。療治せい。水持て來い。」

「はッ？」と外では猶解せぬ。

「姫をぢや、姫を此儘には……其邊の水を持ッて來い。」

「息吹き返させるのでござるか。はルれ、色々面妖な！　息吹き返させて仕舞ふたら、姫がぢたばた爲さらうが。」

「ぢたばたは爲ぬ。言ひ聞かせる。一旦は殺したが、

お心根が不憫さに、息を吹き返させ申した、父御にも會はせ參らせる、と。」

「さりながら〳〵」と那木丸はいッかな肯かぬ。「息吹き返させ申したら、又危くはござらぬか。もと〳〵瘦せ腕まで揮ッて、殿に刄向かふ心底なのを……」

「可いわ。己に思案が有る。生かして又もぢたばたしたら、夫はまた其時ぢや。手後れになると詮無いわ。水をよ早く、水を〳〵。」

そんなら殺さなければ可いと那木丸は肚で呟く〳〵、水などやがて持ッて來て、暫時は主從手を掛けたが、生憎藥の用意の有るでもなし、中々息は吹き返さぬ。

姫は此世の人でない。然らば、その父忠正はと言ふと、是も最う命の際に迫り迫ッた身なのである。斬首の時刻は申の刻、その申の刻にもう近い。

姫の蘇生を待つとするか？　申の刻が過ぎて仕舞ふ。申の刻を過ぐさずに、忠正を斬ッて仕舞ふたとするか？　姫は、よしんば、蘇生しても父の臨終にも會へまい。清盛は只悶えた。

三十　惱みながらも濺ぐ淚
至情の極の淚と言ふ

六條磧に幔幕打たせた一區域、薙刀を儼然として突き立てた腹巻姿の見るから暴々しい雜兵に警衞されて、その磧に荒薦敷いた上に押し据ゑられたのは忠正等父子五人の者である。

家貞が奉行した。

「筑後殿！」と忠正が。「甚いお世話でござッたぞ。運拙くて破滅となッた上は愚痴申したところが始まらぬが、斯う爲る事と知ッたなら、生まじひ〳〵未練がましく此頭には爲らなかッた。是が只々忌々しい。」

剃り痕のまだ生々した頭を宛も口惜しげに右左へ震はせ〳〵振り立てゝ、睨め殺すとでも言ふべき眼付きでぢッと家貞睨まへた。

そして續けて、「全く和殿に欺かれた。よく忠正を瞞し

たな。清盛も和殿の如き瞞し上手を家人に持ッて、大きに／＼仕合はせぢやな。その代はり何日何時また瞞し上手に瞞されて、辛い目に遇ふぢやろか、其所までは分からぬの。」

いくら何と言ッた所が勿論動かされる家貞ではない。顔も歪めず目も動かさず、只泰然と社に構へる。

後の方にいつの間にか清盛が來て聴いて居るとは纏附きの身の自由が利かず、忠正も些しも夫ぞと氣の附かぬのも哀れである。

「とても清盛と此己とは食ひ合ッて殺すか死ぬか爲ねば納まらぬ中なのぢや。彼奴の稚兒立ちから四十近くなッた今日に至るまで、事毎に彼奴と己とは雪と墨と相合はぬぢや。無念を言ふた所が始まらぬ。こゝに男の子どもを打ち揃へて一刀に斬られるのも、前世の約束ぢやらうわよ。但し男の子は是非も無い。女の子は何うしたろ。忠正には一粒種のあの夢姫は何うしたろ。」

清盛の胸は鼓動した。

家貞は何所までも落ち着いた。大抵の者ならば清盛と顔ぐらゐ見合はせさうな所である。しかし、今はそれどころか！　相變はらずの端然で社に構へて口結ぶ。

「筑後殿には御存知有らう。忠正の一期の願ひぢや。夢姫の何うしたかとの消息だけでも切めては聞かせて賜らぬか。あッ、筑後殿、筑後殿！」

「存知申さぬ。」

「嚴しい和殿の返答ぢやな。全く存知遊ばさぬか。」

一度言ッたのを二度は言はぬと、それを無言が言ふ安排、家貞は默るも默る只冷やかなものである。

耐へ／＼て居たのでもあらう、茲に至ッて只強面さに只々思ひ迫ッたか、忠正はつひ我を忘れ、端無いをも包み切れず、見る／＼涙含んで來る。

「無慈悲ぢやな／＼。敵同士とは言ひながら些しは慈悲も有るものぢや。男の子供は殺されても、何さま夫は後難を無いやうにとの世に有り勝ちの事とも見る。纖弱い女一人位を生かしたとて何であろ。存知せぬと言はれ

るのは最う殺したのでござらうが……」

「端無い事宜ふな」と家貞の語は冴えて居る。「殺したか殺さぬか、存知したらば然う申す。存知せぬは何所までも存知せぬと申す丈ぢや。」

「いや／＼、お口前の好いあまりに然るべく只言はれるのは、そりや罪ぢや、筑後殿。夢姫は確かに／＼和殿の許か清盛の許かへこの忠正のいのちごひするとて尋ねて參ッた譯なのぢや。違ふか？ これは違ふまい。さ、さ、行ッたら行ッたで可い。一目末期ぢや、會はせて賜。さりとて和殿の許へ行ッたところが、高の知れぬ女のこと、よもや和殿にせよ清盛にせよ、一刀に斫ッても捨てやるまい。隱したまふな、筑後殿！ 二度會へる己れではない。賴む。理窟では言はぬ。忠正が末期ののぞみ、否願ひぢや。賴む。賴む／＼／＼賴む。」

腹の底には涙も有るが、此場合ひ家貞も如何とも爲らぬ。末期に會はせると言ッたところで、夢姫は早夢の命の灰かに消えた亡骸としか爲ッて居ぬ。流石の智者も思慮に困ッて全く返事どころでない。

忠正の身の後で清盛はまた悶えた。

何うして可いか分別出來ぬ。

夢姫は實は／＼呼吸吹き返させるべく手を掛けたが、當て身の力が强かッた上、既に手後れとなッたと見えて、其儘ふたゝび蘇生せぬ、その死骸になシたのを現在見て來た己れの身がいま皆迷ひにたゞ迷ッて、會はせてと强請むその父に向かッて、是々と打ち明けると言ふことは何うも／＼忍び得ぬ。

忍び得たならば無情である。忍び得たならば冷血の哀れ知らぬ野獸である。人の末期臨終に思ひ諦らめさせて可い場合ひも、また思ひ諦らめさせて惡い場合ひもそれ／＼異なッて存在する。生きて夢姫見せるならば死ぬ人の末期のための快い餞別には爲らうか知れぬが、既に死んだといふことを、そのまだ死んだとは信ぜぬ願に告げ知らせるには忍び得ぬ。

忠正の後で清盛は涙浮かめて合掌した。

合掌した其手先をやがて屹と振り解いて、左の手をば目の涙へ、右の手をば上へと抗げて、斬ッて仕舞へと指し圖する。

家貞それと心得た、つと起ち上がッて改めて低く床几へ腰掛ける。

忠正の目は家貞の一擧一動をその度毎に逐ッて居る。起ち上がる家貞に忠正の目は上を向く。腰掛ける家貞に忠正の目は下を向く。

目が下を向いた其刹那が忠正の頸筋の伸び低れた而も刹那で、而も此世に於ける忠正の命が斷絕する刹那である。

清盛の橫、忠正の後に立つ武士が「やッ」と掛けた一聲は、吁、忠正の此世の別かれなのである。

* * * * *

清盛は泣いて居る!!

* * * * *

その泣いて居る清盛の、その肩を叩いて家貞が是も涙含んで來た。主家來のやうな間柄が然りとては如何に打ち解けた中と言ッても友達か何ぞのやうに、家來の身が主の身の肩をまで叩くといふ事、是も亦妙である。妙、しかし、それ程までに一身一體のやうな心持ちで常から相盡くしたといふ、其眞の〳〵情愛の溢れる餘りが眼中に主も家來も殆ど無いやうに爲ッたといふ、其只妙な「妙」なのである。武士道の裏地に爲ッて居る、不可說の情の極である。

「どう遊ばした、殿! 殿! 殿! 嗚呼、御眞心々々! 斬るは公のための太刀、擊つは反の合はぬ故の太刀、泣くは血筋の雫の涙、嗚呼何よりの御回向ぢや。さ、さ、御回向ぢやとした所で、斬るはお一人だけでは濟まぬ。御子達も此所に此通り、此御子達をも是からは是非斬ると遊ばすぢやろ。斬ると遊ばすと爲ッて、まだまだお泣き遊ばすか。あいや、御泣き遊ばしても宜しい。御涙で折角の意地が溶けては仕舞ひ申さぬか。」

冷笑の語氣である。涙成らずしもその目に無くも無いその人の口からして共出す言葉は何うかと言ふと、涙の如きもの僭どのやうな物だか味はツた事も見た事も無い獸性の人間が言ふとしか思はれぬ樣な、無情の限りの語氣である。武士道も横から見れば、或る意味に於ての人情を犧牲にしての――少なくも人情を度外に置いて仕舞ツて掛かるといふ丈の――殘忍な色合ひを一刷毛は淡すり帶びて居る。更に一歩を進めて言へば、武士道といふ物は或る程度の所までは人情を度外に見て、冷血に爲り切らなければ貫かれぬ物といふ事に歸着する。親が死んでも構ひはせぬ、子が殺されても頓着せぬ、然り、腹では泣いてゐながら、意地とか言ふ偏執的な物に煽られて何所までも強く〳〵無情になる。そして遂には寢覺めが惡い。結局迷信を便りにして、心を辛うじて慰めると爲る事に到着して、則ちまた自然の順序として、宗教、殊に佛教に噛り附くやうになる。武士道が盛である丈、佛教も共に盛に、佛教も衰へるに從ツて武士道も自然に微力に爲ツて行くのも當然の順序である。

「家貞、意地が溶けるとな？」

言はれての、それに對しての家貞は最う語氣だけに冷笑を示すに止まらず、有りの儘に包みもせず、公然冷笑して見せた。

「えツへ、御情愛の厚いお心、斯うなると遺る御子達をお助けに爲りたくお爲り遊ばそがな。」

「己が乎？」と手遊物(おもちゃ)に爲る。

「お心根はお麗はしい。お麗はしいのが、然りながら、御立身の邪魔でもござる。人情が有り義理が有ツて、天下が何うして取れ申そ。殿の危い所は此所々々々々！涙に兎角お溶け遊ばす。平馬助殿のお子達をも、見そなはせや、此所にまだ四人、一思ひに遊ばさぬか。」

素より聲は潛め切ツた。殆ど耳へ口をで言ふ。清盛は目點頭く。且、しかし、目を拭ふ。

「宜しいわ。よく分かツた。甥達の命をば一切和殿に任せたわ。」

「と仰やるのは？」

「和殿斬れ！」

「殿は？」

「己は此儘立ち歸る」と、末の「歸る」の一言は苦しげに稍蜿蜒（うね）る。

改まる氣でもないが改まツて、其倒れた儘の忠正の死骸に立ち寄れば、餘脈猶仄かに打つ躍りと共に頸の其切り口から血はまだぼたり／＼と滴りのやうに浸潤み出す。

死骸は頸の無い儘で、手が伸びたり縮んだり、さうかと思ふと足もびく／＼、河原の石を蹴てなど居る。

「嗚呼、此手足も父君のと一つ血か」と、又清盛は呟いた。

夕立の來る樣子、東山も黒雲に包まれて、狂風が殺到する。

威し附けるかの如き雷鳴が劈ける。

世の終り人情の終りである。

（終）

史外史傳 親鸞聖人

一　不幸なる若君としての十八公麻呂

人皇第八十代、高倉天皇の承安三年、この明治四十二年から七百三十六年前、釋尊入滅後の二千一百二十二年目、天はその四月朔日、やがて垂天の翅を張つて、一天下を其法翼の、柔軟なる膩毛に包むに至つたその未來の靈鳥たる鸞、その親鸞聖人をして始めて頻伽の産聲を上げさせた。

聖人俗姓は藤原氏、身は直系で大織冠鎌足の血を引いた。

鎌足は天兒屋根尊第二十一世の末裔で、その鎌足の玄孫が近衛大將右大臣從一位内麻呂(贈太政大臣)として世に知られ、更に夫から眞夏、濱雄、家宗、弘蔭、繁時、輔道、有國、資業、實綱、有信、經尹を經て、範綱及びその弟の宗業及び有範、この有範即ち官位は皇太皇后大進正五位下、この有範の子として出生したのが十八公麻呂と云ふ若君で、「十八公」即ち「松」の字を解しての稱へであつた。

母君は源氏の娘で即ち鎮守府將軍源義家の嫡子但馬守義親の息女として生まれ、名をば吉光女と稱へた。

之を約めて言ふとすれば、聖人の父の系統は藤原家、母の系統は淸和源氏で、後にやがて武人として時めいた右大將頼朝や伊豫守義經と聖人とは再從兄弟の間柄である。

吉光女が聖人をその腹に宿した時、珍らしい奇瑞が有つた抔との傳說は勿論昔から傳はつても居るが、今何も必らずしも吾々は其奇瑞の有無を說く事の決して聖人の

偉大を立證するために必要であるとも考へず、その奇瑞が有つたにもせよ無かつたにもせよ、聖人は聖人で殆ど只絕倫非凡の意志の人として既に充分推重される丈の大人物であつたと云ふ丈で、讃評に不足を感ぜぬと思ふまゝ、今は好んで之を書くと爲ぬ。

しかし、聖人が母君吉光女の胎内に在つた間は十二箇月に及んだとか、やがて承安三年四月朔日、呱々の聲を發したと言ふ丈で悲しい人生の運命は父有範卿の身を掩ふた。安元二年五月の上旬から有範卿の心持ちは引き立たぬ。彼是云ふ中、月中と爲る。病氣は次第に重くなる、昨日まで咽喉に通つた藥餌も最う通らず、今朝まで痩せなかつた頰の肉もやがては細く落ちて仕舞ふ。醫師も殆ど匙を投げる。五月その十八日、その眼は終に閉ぢられた。聖人この時まだ四歲、弟君淺麿呂は漸くの二歲である。

假令それは名門貴族の若君として、聖人等兄弟とて、父親に死に別かれたとした所が、今日明日の活計に困ると言ふやうな、物質的の苦痛をこそは感ぜまい。しかし、心細さ淋しさは素より最う餘所の兩親の揃つて居る貴兒にも劣つて居る。さらば、亡父に代はつては吾々が若達の面倒を見やうぞと第一に父有範卿の兄君從三位若狹守範綱卿、第二に同じく父有範卿の二の兄君從四位宗業卿が引き受けて、それぞれの道を教授した。範綱卿は當代屈指の歌人である。宗業卿は同じく書道の泰斗である。聖人の他日に於ける文藝の才、及び臨池の能は要するに早既に其手解きの初めから俊秀の師を得た丈の好運に本づいた。天は聖人をして早く父に別かれさせる丈の不滿足を下しながら、其缺陷の補償としては優に千金の師を與へて、大達の基を成さしめた。

安元もやがて改元して治承となつた、その三年、十八公麿呂は七歲で、歌才やうやく仄めき來り、翌四年八歲なるに及んで改めて南家の儒生日野民部忠經に就き、孝經を手始めとして漢籍を學び出した所で、又も悲しい運命に翻弄される事と爲つた。

母君に死なれた事是である。

時恰かもその年の五月、母君の吉光女は假り初めの病氣が本で、長煩ひと言ふのでも無く、僅か十數日床に就いたと言ふ丈でその月の廿一日また敢無く爲つて仕舞はれた。

其れ八歳の孤兒である。伯父君達も當惑した。此上は最う是非に及ばぬとの決定から、遂にいよ／＼その翌年、即ち十八公麿の九歳の時、篤く十八公麿の志しをも聞き定め確かめた上、當代の天台宗の高德別に歌人としても有名な慈鎭和尚の許に十八公麿を托す事とした。抑も實に是からが宗教の偉人としての聖人その人が教界にその靈翼を振ふべき、目覺ましい時代なのである。

二　仇櫻にも世を悲觀としての若君

慈鎭和尚は法性寺關白太政大臣忠道の子で當代の大政治家月輪禪定殿下兼實の兄に當たり、若年で高德の名が高く、山門の第六十二代の座主として、通常は前大僧正慈鎭道快と稱へたが、此治承五年即ち十八公麿が始めてその弟子と爲るべく見參した時は僧齡正に二十七歳、鳥羽院第七の宮覺快法親王の弟子として粟田口の青蓮院に居り、即ち十八公麿の伯父君範綱卿は十八公麿を伴なつて、青蓮院に此座主を訪問したのである。

「偖は此若君が甥君でござるかな」と座主は音聲から言葉工合ひまで殆ど婦人のやうに柔かい。「むゝ、御見受け申した所御氣高い御相ぢやな。何、九歳であらせられるとな。申しては失禮ながら、十歳以下の御若年としては引き締まつた御顏附きでござる。御悼しいのは御兩親ぢや。斯ばかりの骨柄有る若君を遺して、此世を敢無く爲られたか。時に三位殿が斯うして若君を具されての御入來は何か若君を出家得道させ申す事に就いてぢやとやら、御使ひの御口上もござつたが、全く然うなのでござるかな。」

「その事でござるので」と範綱も慇懃に、「いろ／＼評

議をも盡くし申した。しかし、本人が進まねば勿論何うにも爲り申さぬが如何にも此若が心から矢張り出家したいと申すので、さらば愁ひに俗の吾々が妨げるでもあるまいと斯う考へ申してな、それには當代の大德として大和尚の御名をも仰ぐ次第、終に一切を御願ひ申す事と爲つたのでござる」、流石夫ながらも胸迫る思ひが爲て、言ひ終つて十八公麿呂を一寸振り返るその眼には至情の露が浮いて居る。

「何さま」と座主の眼も潤む。

「御心中察し入る。委細心得申した。さりながら當方の宗門には自からの制規が有る。大要を申すとすると、當方の宗門は輕卒なる出家を聽さぬのぢや。兎角近頃輕卒なる出家が多くて困るのでござる。やれ、親が死んだそれ出家する。やれ妻が物故つたそれ出家する、その甚しいのに至つては緣者血肉者で無い者が死んでも、やれ出家それ出家と騒めくのが甚だ多いのぢや。試みに思ふても御覽ぜい。火熱千煉の汗搾つてこそ鐵壁を斫る劍は成る。溫火微溫湯に觸れ又は潛り杯した丈で、只外相の砥石で銹を落した位では紙位は切れるか知らぬがな、板一枚滿足にすら／＼と切れるやうな刄前が何うして出來るものでござろ。況んや、右言ふ通り此頃頻りに佛門に入る輩は實に一向專念で煩惱を捨て菩提を求め、少なくも己れからまづ實の／＼佛徒と爲つて、然る後一切衆生を教化誘導して、切めては此世の中に一善なり半善なり乃至四半善なりを起し、造り、遺し傳へやうと云ふ、さう言ふのではござらぬのぢや、つまりは佛門を足掛かりで、體好く外相で世を欺き、私利を掇き取り、私腹を肥やさうと云ふ、只それのみが多いのぢや。」

動もすれば世を慨き時を嫉へる慈鎭和尚の、その燃えるが如き意氣の炎は戀く相手の有るのを幸として、只熾んに燃え立つて既に最う斯う意氣が昂ぶるとなると、眼中に王侯も無ければ爵位も無く、平素のしとやかに只優しげなる其樣子までが別人かのやうに變つて來る。到底和尚は火の人である。

範綱卿はぢつと謹んで聞き取つたとは言ふものゝ、何うやら掛念なのである。何のために慈鎭和尙が滔々として今更の如く世の中を痛罵する、それだけの大議論をば只少年を出家させる爲めにとて來た己れその範綱に向かつて述べ立てるのであるかと、是が寧ろ奇怪で爲らぬ。卽ちまた和尙の言葉が一寸切れたが、つい返辭を出し敢へぬ。むしろ和尙の眞意の在る所を何う判斷したものかと頗る思ひ迷ひながら、偖しかし十八公麿は如何やうに和尙の言葉を聞いて居るかと何氣なく若の方を打ち見遣れば、是はまた如何な事若は脣を一文字に引き結んで、幼顏のその眼の色ながら怪しくその眼は燃めいた。

それを和尙も目に注める。

にこりとして、「これ、若君、今のこの道快の言ふたのを興有る事に若君は御聞き取り遊ばしたか」と、試みると云ふ程でも無く、さりとて試みぬと云ふ程でも無く、中位の所で只問へば、見る／＼顏に血を上げて、「はい」と恭しく一禮する。

どうも其恭しい一禮に言ふに言はれぬ目方が有る。勿論說明の限りで無い。只不思議に威が有つて、目に見えぬ特殊の感應が和尙の胸に浸みて來る。

「なるほど、はいと言はれたか。はて爽やかなるはいぢや。興ある事に聞き取つたと氣の進んでのはいぢや。若たる此己も其位の事は疾うから心付いて居ると云ふ意味でのはいぢや。寒流に影を洗ひ晒して明鏡となる月のはいぢや。あゝ偖もよく御分りに爲られたぞ」と、その儘で孔の明く程更にぢつと若君の顏見詰めて、「見上げ申す」と聲銳い。

範綱卿は何やら夢のやうな心地である。己れたる身の存在が認められぬやうな工合である。和尙と若君とを等分に見比べる。

「それ故ぢや」と和尙は直ぐと語を進めて、

「若君に折角の御一心が御座つたらば、御出家を必ずしも差制めは致さぬが、只身外からの壓迫で佛門にでも

入れて見やう宜しい入つて見やう位の、そのでもで持ち切るならば、一も二も無い御斷り申すのぢや」

屹と爲る十八公麻呂は見る〳〵涙含んで來る、

「いや、然し」と範綱も肩を搖がせて、

「その儀ならば範綱が一分に掛けても保證申すがな……

…」

「宜しうござる、仰やらずとも」と和尚は早差し止める。「本人以外の御保證は何の甲斐もござらぬわい。」

「何と仰やる。」

「いやさ、總じて保證といふ物は當人に限るのぢや。他人が他人の保證をすると言ふ事は本々虚僞でござるわい。甲のために乙が保證をするとか言ふ、それは俗人の爲る事ぢや。佛門では當人をして當人を保證させるのぢや。身外の他が何に爲る。」と冷笑ふやうな語氣である。

範綱も顔赧らむ

十八公麻呂は涙拭く。

「そこで、さらば若君」と改めて際立つて和尚は若を呼び掛ける。

若は無言で手を下げた。

「只今の一切は御身からか。うむ、宜しい。そこで若君は決して〳〵でもで無くて佛門へ御一身を投げ込まうと仰やるか。」

若は又もや無言のまゝ、恭しく頭を低げた。

「さらば別段話がござる。前既に一寸申した通り、當方の宗門には夫々の法規がござるのぢや。法規卽ち何かと言へば、すべて出家を望む者には先きの願ひ丈は聞許して置て、決して髮だけは剃させぬと言ふ、是が抑々の一義である。」

心得難い面を上げて、若は和尚をきつと見る。

「卽ち有髮の儘で置く。つまり俗體の儘で置く、その間が甚だ長い。要するに九年でござる。この九年の間といふものは勉學を爲せるのぢや。いよ〳〵やがて九年が經つ。其所で試問を行なひ申す。容赦無く手嚴しく其の試問當てたところで、神妙なる應答の出來た者だけを淘

汰抜いて拾ひ上げ、卽ち始めて官に申し上げ、いはゆる度牒の下附を受けて、そこで始めて薙髮させる。卽ち得度と申すのぢや。如何、九年の年月は長いではござらぬか。」

「如何にもな」と、範綱は頭捻る。

「若君、長くはござらぬか」と、和尙は殊に若君へと。

「はい」と不滿の顏である。

語氣で和尙はその意を見て取つて、

「不滿足でござるよな。」

「はい」と身體は寧ろ反る。

「と云ふ譯は？」

偖、しかし改まつて譯はと問はれると爲ると、何を云つていゝか最う分らぬ。何か言ひたい樣である。が、その何かが何であるかは只分らぬ。

和尙は些笑みを含む。

「はいと云ふた丈で、その譯を申されぬか。なるほど其所が天眞ぢや。何と云ふた所で御若年、さぞ思ふ通がおひそれと其口に云へるものならば、その口に云へた言葉と言ふのは天眞で無くて僞りぢや。宜しい。御答への無いと言ふのが卽ち立派な御答ぢや。無聲の聲が卽ち是ぢや。道快には能く分つた。」

一息吐いて改めて、「三位殿も若君もさらば又改めてとつくりと御聞き有れ。只今道快が縷々申して若君の御答へをもおのづから聞き申したら。然ばこの御聞き申したのが突然の試問でござるわい。」

偖はと計り膽抜かれて、範綱は色をさへ變へる。

十八公麿はと言へば、宛から不動如山の體、面を上げて正面から只々和尙を見詰めて居る。

「勿論御年も幼いおぢや」と和尙は言葉を改めた。「九年間の御學問は夫は勿論ござるまい。但し學問された丈の御器量は旣に有る。

何がそれぞと御尋ねならば、道快は心から眞面目で申すがな、實に此若君が天眞のまゝで在らせられる、そこが卽ち無上境ぢや。卽ち試問は濟み申した。」

呆れた樣にも思はれるが、しかし、意外に嬉しくもある。範綱は只おど／＼。膝に力を籠めるばかりに、「偖は御試問は只今ので。」

「されば／＼濟み申した。」

「是は／＼何とした當人の仕合はせか、附いて參いつた範綱までが面目の有る次第柄只忝くござるわい。然る上は只今の御言葉に由れば既に試問も濟んだ以上もう九年の末とも待たず、そのいはゆる得度とかな、卽ち剃髮をも直に御許し下さるか。」

「勿論でござるとも。」

「はて偖何たる忝い。然らば、それは何時でござる。」

「何の明日でも苦うござらぬ。」

「明日でも？」と又も／＼驚喜交々といふ樣子である。若君を見返つて、

「何と十八公麿には御分りか。何たる忝い、和尚の御言葉か。九年の所を格別に縮めるも縮める、一年と云ふのでも無く一月と言ふのでも無し、只の一日の間に繰り縮めて明日もう得度させて賜はると斯う仰せられるのぢや。範綱も面目有る。麿にもよく／＼肝に銘じて、忝く思はれい。」

一言か二言で足りる口上ながら、つい心の嬉しさに範綱も殆ど我を忘れて口上をさへ諄くする諄してながらも、また己れが夫ほどに思ふだけ、若君も嘸案外と思ふ計りに悦び勇む事でもあらうと、卽ちまた其若君からの嬉しい返辭を待ち兼ねる氣味合で其諄く／＼言つた言葉の末々にまで一々力を加へ加へして斯くて、いざや返答を待つのである。

座主も同じ思ひである。

しかし、是は又何とした事か。若君には夫が感じたか感ぜぬか、更に無言の寂寞に立ち戻つて、只下を向いたなりで正に是れ枯木寒巖、口の筋一つ歪むでも無い。

範綱はやゝ興覺めた。況んや和尚への手前も有る。子供とは思ひながらも、大きに／＼焦燥たい。

「これ麿、何とこれ若」と、言ひ出しから慌てゝ居

る。

　慌てるとは言ながら、何所までも肉縁の情は有る。此所が大切の試問の場と思ふまゝ、折角今和尚に褒められた許りの所で更にてきぱきとした返答を要する場合ひ、何として龍頭蛇尾見たやうに爲るのかと、實は氣が氣で無い、慌てながらも言葉を角立たせて一々際立たせて、まづは早氣が附くやうにと思ふ。

　しかし、それどころの若では無い。

　若はその上を行つて居る。範綱といふ年を取つた子供より十八公麿と云ふ年を取らぬ大人が只落ち着き拂つて居る。後ろの方、疊四枚ばかり隔だてた隅の方に畏まつて居る侍僧を見て、

「どうぞ料紙硯箱を」

「はい」と侍僧は會釋して、「あの持參致すので？」

「一つ書く事がございます。」

　心得て侍僧は引き下がる。はてなと又も意外に爲つて、座主もやゝ訝かり出せば、範綱もまた不思議に思ふ。と言つて座主にもせよ範綱にもせよ、敢て何故と問ふでも無い。侍僧はやがて言附け通り料紙硯箱を持つて來る。

　持つて來ていざと十八公麿の前に差出すまゝもう十八公麿はその書く事柄に就いてでもあらう、深く思案に暮れた體で、可愛らしい眉の本も寄せ、細やかな頸の根をも傾け、何やら口吟んで居るのである。

　と見る間、筆執つた。

　考へながらではあつたが、そろ／＼書き下す筆の運びは早くも無い。さりとて遊ると言ふ程でもない。遲からずまた速からず、急がぬが休みもせぬ、平凡で老熟で、ほとんど洋々たる大江の水が慌てても爲ねば騷ぎもせず、さりとて一寸の間も休むので無ければ一刻の程も停滞するので無い樣な、其筆の行き方なのである。範綱は何か知らぬが、座主のみは殊に早くも若君のその樣子に着目して是れ如何にも容易ならぬ稚兒であると、窃に舌を捲いて居る。

　やがて何か書き上げた。「伯父上」と、にこりとして、

その聲は只低い「一寸御覽下さいませ」
範綱は受けて讀む書いてあるのは歌である。

『明日有りと思ふ心の仇櫻
　夜半に嵐の吹かぬ物かは』

讀む範綱はぞつとした。調べも佳い。意味が何より鮮やかである。而も氣高い趣意である、大禹が寸陰を惜んだのと同一の心持ちなのである。

感實に極はまつた。九歳の少年の心から是だけの意氣が然りとては何うして燃え立つたのであらうかと、つひ不思議にも思はれて、我知らず孔の明くほど十八公麿呂を只見詰める。座主も樣子を見て取つた。

「何か、偉い事をでも御書きなのでござるかな。」

「はい……いゝえ。」

はいは偉い事にと言つて、いゝえは急に謙遜して打ち消しにと言つて、それなりで後の語は續かず、早恰かもまだすつと差出して來られた座主の手へ渡すも無く渡さぬでも無し、うつかりと紙を渡して仕舞ふ。

座主は一目に讀み下す。讀み下す樣子をさへ、宛も珍らしいかの工合ひに範綱はぢつと見る。

「はて、巧く咏まれたわ。なるほど心の仇櫻か。如何にも夜半に嵐は吹く。さうぢや〳〵、誠に然うぢや。今日で無くても宜しい、明日があると、空漠に明日をのみ想望して居るやうな輩は、明日待たぬその夜半の程に嵐を受けて散るのが果てぢや。全くぢや、明日の未來は恃まれぬ。一善を思ひ附いたから、手に炭火が跳ねた時その手を引くのと同じ早さで實行するのを忘れるなぢや。苦痛を避ける時の敏捷さで善業をも施せぢや。さうすると若君はな、もう佛門に入ると決まつた以上、明日などと言ふ事にせず、即決で今日今直得度したいと言はれるのか」

十八公麿呂は頭を低げる。

「はて、いよ〳〵見上げ申したわい。承れば承るほど少年の御器量ではござらぬわい。いや、何うも若君さへ斯う言はれるのを、年壯んな此道快までが夜半の嵐の事

は思はず空望の明日を恃む仇櫻の心になつて、御得度を明日と爲う抔とは今更恥づかしい次第ぢや。三位殿嗚呼何と御聞きかな。恐れ入つた若君ではござらぬか。無二非凡とも申すべき甥君を持たせられた和殿も嚴い果報よな。若君、道快が侘び入つた。」

きつちりと和尚に言はれて見ると、もう平氣で居る若でも無い。俄かに一座引き下がる。そして改めて一禮する。師の侘び言に對しての、相應の辭儀である。

「いや、舊の座に直られい。さゝさゝ直られい／＼。」

手を執らぬ計りにして促がし立てゝやうやく舊の座に直して、

「三位殿、御覽の如く侘び入つた。侘び入つた以上、改悛も亦早急で無ければ爲らぬ。若君の望ませられる通り、さらば是から道場を開いて、御得度申させる事と致す。幸ひの御血肉、宜しく御列座遊ばせよ。」

事は見る／＼落着した。九年といふのが僅か半日、否程一時か二時で、更に明日がその日である。記憶すべき時も時、この時こそ治承五年で、卽ちその實は旣に改元も爲つて居た。養和元年で、月は正に春彌生の三月、日は正にその十五日、花ならば盛りといふ頃、すなはち又散る支度に取り掛かつたと言ふ頃である。日は旣に暮れ近い。旣に紫ばんで來た山の根際から春に似氣無く珍らしく拭き上げた夕照の金色が照り輝いて、或ひは早旣にほろほろと散り掛かる早咲きの花瓣も入り相の鐘と默契して、經文の中の無常の意を現在の事實で活動させて居る。

暗くなつたがなと、猶幾分か座主も躊躇した。が、直ちに又思へば猶いよ／＼善業須らく電火たるべしである。

破天荒の式として、紙燭が廣間に點ぜられた。當役の僧も皆集まる。權智房阿闍梨が剃刀を執つて、利刄その光りの一閃きと共に俗縁を繋いで居た頭髮はぷつつりと斷ち切られたのである。

三　一人を保證するためには
一人の身を捧げるとの道快

足（そく）で飛び越す勢ひで旣に十八公麿呂は剃髮の素懷を遂げた所で、もう俗人でも無い事とて、法名を範宴、假名を小納言の君と命ぜられ、その僧靑蓮院の禪坊に起き臥し爲て、學問を修める事と爲る。

一伍一什はいつか傳つて月輪殿下の耳にも入る。やがての未來、その最愛の娘御にその時の小納言の君の配偶となる運命が旣に定まつて居る事とも、神ならぬ身の夢にも知らぬ。況んやまだその小納言の君を親しくも見た事も無い。九歲で得度したとも聞く奇怪な事に只思ふ。而もさう得度させた人はと言へば、兄君たる座主の道快その人である。いでや何故かその委しい所を面談で親しく聞かうものをと、安からぬ事に思つて居る所へ折好くも日孝す兄君たる座主が音づれて來られたのである。

「兄君に御目に掛かつたら、伺はうと考へて居つたのでござるがな、人傳に承れば、十八公麿呂を此程得度遊ばさせたとやら眞實（まこと）なのでござるかな。」稍硬々しい口振りで。

座主は相變はらず柔かい。硬い口をも微笑で受けて、

「珍らしい事でござつたわ。珍らしい事ゆえに道快も珍らしい事を行なふた。九歲で得度、先例の無い事ぢや」

と、一向平氣なものである。

「なるほど」と、制せられた機先に稍度を失つて、「珍らしい事でござるよな。」

「全く珍らしい事ぢや。」

「先例もござるまい？」

「先例はまづ無いな。」

餘り要領を得ぬ返辭に、殿下も些し急いて來る。

「まづとは如何やうの意味でござる。實は其の事に就いて、篤と伺はうと思ふて居りました。宗門の中の事に俗人が口出す法はござらぬが、何と言ふても漸くまだ十歲にも爲らぬ少年に、如何に利發な器量が見えたとした所がそれ丈の道を踏ませずに一躍して得度と迄進められたのは近頃驚いた事でござる。」返辭如何と待つて見る。

座主は微笑で只點頭く。

「宜しいのでござるかな。」

「大分御心配遊ばすな。」

「御宗門の威光に差障る事はござらぬか。勿論直な道を直な箭が逆風にも出で遇はずに直に行くと言ふ譯で、その十八公麻呂がぢや、横道へも逸れられず大悟徹底の所に到り得るものならば、一も二もござらぬぢや。但し、そこは何にも申せまい。如何に利發かは存知せぬが、そこがまだ紅にも靑にも染まるべき白糸の水々しい年配の、その十八公麻呂ではござらぬか。萬一の過ちでもあつた日には御宗門の名折となるのは無論の事、御一人の上から言ふても、御身兄上の高德の妨げと爲るか知れ申すまい。是は如何やうの思し召しか。」

關白として比類少ない程の傑出した名聲の有つた丈、月輪殿下の平素の態度は寧ろ峻嚴に過ぎた方で、卽ち又態度の點に於いては現在の兄君たる道快座主の宛がら面吹いて寒からぬ楊柳の風とも言ふべき、溫で雅優で美であると言ふのとは程ど同胞の間柄とは思惟されぬほど兩極端に違つて居た。

卽ちまた夫だけに現在の兄君に向かつて、言ふのさへ敬意をば勿論含んで居ると言ふ丈、むしろ又何うかと言へば詰問めいて居るのである。

微笑も座主の面上から漸く〳〵消えて來る。端麗實に比類無い。

「如何やうの思し召しかと問はれては御答へにも一寸迷ふのぢや。御答へを致すとなると、不遜の口上にも爲るのでな。」

「結構でござるとも。某は弟の身分、兄君たる御方から多少の御不遜有らやられたとした所が……」

「然う碎けて賜はるか。さらば碎けて申すがな、道快の見た所で、あの御兒は只非凡ぢや。」

「只非凡とは怪しからぬ。」

「非凡すなはち人以上ぢや。」

「人以上とは是は容易な御斷しではござらぬな。どう人以上でござるかな。」

「されば、平凡ぢや。」

「何でござる？」とひたと呆れて、

「非凡と仰せられて置いて、それで平平凡凡とは？」

「その平平凡凡がすなはち極致に至つて居る。平凡の極致は什麼何か。是すなはち非凡ぢやろ。海の水、その一町や二町の所は平凡ぢや。極致すなはち何十里も何百里と一面に列なつた所に爲つて、非凡莊嚴の姿となる。あの御兒も只是ぢや。道快の面前へ出た所で何の容色を見せるのでも無い、何の禮意を盡すのでも無い、而も意に立たぬ所は何所までも跳ね返す意氣を持つ、明日得度も爲ると言ふ。即決をもと頑となる。筆を執つても怯騷がぬ。大低の者があのやうな場合ひ、息までが揣んで來て阿呍の釣り合ひが訝しくなる。ところが平々凡々ぢや。彼の兒は急ぐといふ事を爲ぬ。急がぬが、しかし、休むといふ事を爲ぬ。天下何が怖ろしいと言ふて、此「急がず休まず」と平々凡々で實行して、何所までも厭きぬと言ふ、是より外怖しい物が又と二つござらうか。どのやうな大業もこの只平々凡々の『急がず休まず』で成就する。如何に然うではござらぬか。此極致を彼(あれ)は自得で居るのぢや。入門後九年の天台の修行を彼の兒は出胎後九年の九歳で既に修め盡して居る。彼は母胎を出ると均しく淨水の産湯に既に塵俗の垢を洗ふて、九年の行を積んだのぢや。非凡即ち破格の人ぢや。道快も、それ故、また破格で扱ふた。道快の此眼は違ふか違はぬか、あの兒の生來で希くは御覽せい」と、是も意氣は稍昂ぶる。

殿下も暫時は返辭が爲らぬ。決斷を淘汰(よなげ)分ける心中の大煩悶、眉は寄り、眼は釣つた。

儼として、「いやよく分かり申したわ。さらば改めて御尋ねする。吾々は俗人ぢや。俗人ゆえ念までも押し申すが、其通り兒君が受け合はれた、彼の兒が若し御言葉の通りに行かず、過ちでもあつた時は、兒君は何と遊ばすか」と、裏に手強い意味がある。

「面白い御尋ねぢや。その時は不肖ながら此道快が此一身を賭け申す。」

「座主の、その尊い御身をか。」
「言ふ迄もござらぬ。」
「はて、一人の少年のため千金の御身をまで？」
につこりとして、「人の目方は子供でも大人でも、乃至乞食でも王族でも皆同一でござるのぢや。一人のための保證に一人を捧げなければ爲らぬ。」と、大悲の露か、眼は潤む。
「如何にも聖たる御方の御言葉はまた格別でござるわい。然迄にして一人を御引き受け遊ばさうと仰やるからには、兼實も此上は何事も申し得ぬ。宜しうござる。充分會得致した。」
「御會得とな？　忝い。さらば更に道快から御約束を申さうぞ。」
「御約束とは何をでござる。」
「あの兒を引受けた將來に就いての身の責をぢや。確かに誓ひ申すがな、もし萬一、道快の此眼が腐つて居て、あの兒に過失でも有つたなら、その時は道快が責めを引ひて、念珠の紐を切り申す。」
「念珠の紐を御切りとは？」
「佛菩薩に謝罪して法門を捨て申す」と拳をぐつと握り結めて響きを爲せて床を打つ。

四
太子の六句の偈
山中の怪美人

月輪殿下さへ十八公麿の、その破格の得度には異議を稱へた程である。さらでも權勢に渇し形式の死文虚禮に拘泥して居た當時多數の佛法の面々は悉く皆此破格の得度を聞いて、安からぬ事と騷ぎ出して、頻々皆座主に向つて抗議するのを座主は一々說破して、いよ〳〵壽永元年、範宴が十歳に爲ると共にその正月から四教義を修めさせ、更に小止觀三大部、漢籍としては白氏文集など順々に教授した。
　その以後の範宴の、その學事に於ける進歩の速力は敢て絮說する迄も無い。十五歳から蜜灌を學ぶ程の勢いで、

師も毎々舌を捲く。建久二年には十九歳で、豫ねてからの心願とて、何とぞ法隆寺へ參詣したいとの旨に、座主も快く承知して、やがて目的のとほり大和國へ赴かせた所で、更に範宴の未來の大活動の端緒がやうやく現れて來たのである。

有りの儘に傳説を摘要すれば、斯してその年の九月十二日、範宴は河内國石川郡東條磯長の里なる聖德太子廟へ參詣し、十三日から十五日迄三日間參籠し、いよ／＼十四日の夜、丑の刻となつた頃、夢とも無く現とも無い間に、太子が廟內から立ち現れて、六句の御告げを範宴に授けた。曰く

我三尊化塵沙界。日域大乘相應地
諦聽諦聽我教令。汝命根應十餘歲
命終速入清淨土。善信善信眞菩薩

但し此六句の意義は眞祕である。敢て解釋すべくも無い。さうながら此六句を告げられたと範宴がみづから宣傳したとも言ふ、只それ丈の事實で見ても、今やその巨大なる翅で撃たうとする。範宴のその意氣の昂ぶりが漸く催して來たと言ふ丈は何と無く只仄めく。

斯くて建久九年となる。

範宴俗齡二十六歲、師の和尚の推薦で旣に少僧頭に任ぜられたのが、いよ／＼今年の初春を期して、叡山へ登る事となる。叡山へ僧として登ると言ふ事は公卿として殿上へ昇るやうなものである。何も其所に不思議は無い。但し他から見て不思議の無かつたと言ふ事が如何にもその實不思議を包藏して居たか、それだけは範宴の胸である。

初春の事とて山はまだ寒い。南受けの山懷の僅かばかりの蒸すやうな所だけに梅の南枝も稍綻びては居るが、北沿ひの岨路などと言つては霜柱高く針を抽いて、猶下の積もつた儘の雪に對して、凄い光りを見せて居る。

やう／＼登つて來る儘に、汗も些しは潤んで來る。吹き暴れると言ふ程でも無いが老樹を搖る山風の、その地を擦る力の餘勢を食つて、汗も忽ち冷えて來て、熱いと

思ふ間も無く身が震へる。見ると、一つの祠が有る。扁額でそれと知れる、偖は是が赤山明神かと漸く範宴も近づいて、恭しく一拜して更に階前の石上に安座して、靜かに念誦し始めれば、身はいつか何者か大威靈有る物に、來て胴揚げに爲れるやうな心持ちがして、而して又その默想の瞑目した眼のその皮裏には蒼天が出現して、更にまたその蒼天の表面が池の氷のひゞ割れるが如くびりびり裂けて、裂け目から五彩美くしい天女が翩々として舞つて居るのが手に取るばかり見える樣である。

はつとして、無我の境である。何者かの足の音がする。

見回せば是は如何、瑞籬の陰の方から怪しくも一美婦人が現れた。

柳裏の五衣を襲ねて着、練り貫の二枚を引き被いて、地を曳くかと思はれるほどの黑髮を幾分か風に嬲らせながら、蓮步如何にも粘るが如く、やがて範宴の身の傍へぴたつと近づいて、につこりと微笑すると共に、しとやかに會釋する。見た所、どうでも大內の御方である。偖もしかし是程の上﨟が何として寥々しく只一人御供人をも召し俱されず、斯くの如き山の中に、斯の如き餘寒の頃、斯くの如くして在らせられるのかと恍惚としてつくづく又眺めれば、只實に是れ柳の眉、花の唇、犯すべからざる端麗の品致を備へて、その姿のやゝ動く度每、身の背の邊から金華銀光の宛も眼を射るやうである。

範宴は只無言で丁寧に答禮する。

「卒爾ながら」と、上﨟はまづ口を開いた。「物問ひ申す。和僧は何れから此所へござつて、更に何れへ御越しかな？」と、語調は凄く只氣高い。

暫時範宴は默つて居る。

「もし、何れから何れへ御越しかな」と更に凄味を足して來る。

辛うじて氣が付いて、

「京から參つて登山致すのでござる。」

「やはり登山遊さすのか」と懷かしげに身を入り込ま

せて、「まあ嬉しい。此身も實は京都から參つて登山する積もりではあるもの丶些し心に思ふ事が有つて案内の人をも召し連れず、いよ／＼斯く山路へ踩み入つた所で、誠に淋うて爲らぬのぢや。丁度好い道連れと見參らす。一樹の蔭も他生の緣、針の山劍の山も同行が有れば膩毛(にこげ)の氈席(むしろ)、何とぞよ御情に御連れ立ちを願ひたい」と、俯向きになる艷色は見る人を銷けさせずには已まぬ。

然り、美くしく艷な中にも何所と無く其の言葉工合ひには猶何所までも／＼昵れ近づく可くもあらぬやうな、凛とした所が有る。如何にも上﨟ではあらう。しかし、上﨟とした所で、何ゆゑ端無く御一人で登山遊ばされたのであるか、疑ふとなると只實に疑がはしく、最前から其美色艷容に殆ど撲たれる計りに爲つた丈、猶次第に次第に考へれば、氣味惡く興覺めて來る。

「何さま、然樣でござつたか。それは夫は嘸かしの御難儀で――御察し申す事は御察し申す。さり乍ら此山は女人禁制の掟甚だ嚴重に、すべて女性といふ女性は此邊どころか麓近い所から最う此方へは一歩を蹈み入れるのをさへ固く差制められてござるのぢや。大内の雲深い中に在らせられて地下下界塵垢(ぢんく)の中の事を御承知も遊ばされぬゆゑ、折角此所までも御登りではござらうが、右の如き次第ゆゑ、只何か無し是れから御登山は思ひ止まり遊ばされた方が御身の御爲でござらうが。」

「是は爲たり情無い事を承る。さう言ふ掟がござるのか。」

「ござる。」

「何人がその掟立てられた？」

「傳教大師の御時から。」

「何ゆゑ女人を忌まれるか。」

言葉を交へれば交へるほど上﨟とは殆ど思へぬまで、否その優しい姿容に似氣無いと思はれるまで、また凄味の有る言葉である。

範宴もやゝ躊躇した。理屈を言つた所が始るまい。しかし、又理屈を言はぬ以上許しさうも無い上﨟の樣子で

ある。

「何ゆえと仰せられた所で、拙僧はまだ人に向かつて說法を爲し得るほどの劫積んだ身でもござらぬ。自我の意見も多少はござるが、今それを言ふ時でもござらぬ。只御經に言はれた丈、また先輩の定められた丈を取り次ぐと言ふ丈で……」

「聞き事ぢや、面白い。御經とは何の御經に、どのやうに御說きでな？」

一散に衝いて來られると爲ると、假令受け太刀にした所が揮る位いの事も爲ねばならぬ。勿論揮ると言つた所で、他を斫るのが本意でも無い。要は揮り回して、血路を開く丈の事である。然らばその受け太刀として揮る太刀も鞘を拂ふにも及ばぬ――否鞘を拂ふどころか、忍辱の袋入りにしてある、その袋の中から鞘口にもせよ見せるに及ばぬ。只此所に此太刀が有るぞよと、袋のまゝ見せる丈の事である。

「御經でござるか。法華經にぢや。」

「何と言ふてか？」

「曰く、女人は垢穢にして佛法の器に非ず、と、斯う。」

上﨟はやゝ涙含む。

「然らば、その御文句を本として、即ちまた傳教大師が此山を結界の域と定め、女人禁制と遊ばしたか。」

「如何にも。」

舌打ち鋭く、「無學なる法師かな。」

「はて、是は傳教大師を無學なる法師とまで和御前は仰せ遊すか。」

「大師の然まで賤しむ女人の此身などの方がまだ／＼佛理を承知する。」

「はて、偖」と、ぎよつとして、瞬きもせず顏詰める。

上﨟の頰、その薄紅いのが見る／＼朱色に爲つて來る。沸えるやうな熱涙が眼中に湧き返る。只實に是れ美も美、强烈なる凄味有る美、すなはち是を譬へれば、金粉を噴き燦めかす烈火猛火の美なのである。小氣味好く他を燃し盡し焦がし盡くさずんば止まぬと言ふ、その飽諦さの

極致に至つて絞り出されたやうな美なのである。

「改めて尋ねまゐらせる」と、上臈は詰め寄つて

「傳教大師は僧中の智者とやら凡俗は崇め申すとな？」

凡俗とは又凄い。

「凡俗か何か存知せぬが、世の押し並べてが大師の德をば仰望して、一齊に大師をば智者とも申せば……」

「凡俗の押し並べては衆愚の全盲ではあるまいか。」

「はい」と、是非無く釣り出される。

「大師が全能の智者ならば、經文の表のみを見ず、裏をも見ねば爲るまいが、女人を垢穢とした經も有ろ。『一切衆生、悉有佛性』、斯う說かれた經も有ろ。女人がもし垢穢のものならば、何ゆゑ釋尊は一切衆生が悉く佛性を有つと仰せたろ。和僧は是を何と說く？」

詰め寄つた所で範宴からは何の返答とても無い。

一息吐いて、「佛菩薩が女人にのみ偏頗な憎嫉を打ち下して、男子をのみ尊いとして、女人を塵土と見るものならば、その意を承け傳へる佛法は女人の敵たる邪教でがな。敵が何として女人濟度の大慈悲を行なひ得る。要するに此頃の賣僧共が衆愚の渇仰を吸ひ着けうとの野心ばかりに、故意とらしく女人を疎んじ、慈悲圓滿たるべき教理を汚して、大不平等を世々布き行なつて、有德の高僧のと申される。女人有るゆゑ男子は迷ふか。然うでは無い。妄念が有るので男子は迷ふ。迷ひの本は妄念ぢや。妄念が無かつた以上、女人の肉陣に取り圍まれても男子その血は冷やかに、その骨は玉か氷に、八面玲瓏として在るべきぢや。和僧は何と思し召す？」と、いよいよ肉迫して來る。

外廓の一劃ぐらゐは既に範宴も奪はれた。內廓もやゝ危い。と言つて突貫も試みぬ。防禦はと言へば、是とても思ひ附かぬ哀れなる孤城を只敵の儘に任せてゞ。

上臈は陣を立て直す。

「さらば改めて別の事を問ひ進らす。男女雌雄牝牡と言ふ以上、その陰と陽との區別に於ても、佛法では獨り

人間にのみ男女を喧ましく言ひ立てゝ人間外の畜生には雌雄牝牡を言はぬのか。」

「御意にござる。」

「重ねて念を押し申すが男女云々の大差別を、さらば、何ゆえ人間にのみ重く言ふて、畜類には言はれぬのか。佛說では別に斯う申すでは無いか、有情はすべて自他平等と。既に自他平等ならば、人間にのみ喧ましく言ふて、畜生には喧しく言はぬと云ふのが間違ひでは無からうか。實證を擧げて申さうか。此山に女人を禁制するも可いと爲る。畜生には手が附けられまい、傳教大師は掟を立てゝ、此山に女人を禁制しながら、更に同じ掟を立て、此山に雌の鳥、牝の鹿を禁制せぬは是れ如何。佛說で言ふ圓頓の教へとやらにも、斷じて女人を斥けるとした上は、眞實の圓頓には爲るまいが是れ如何。止觀も男子のみの物言ふならば、十界皆成は出來まいが是れ如何。思ふに世尊の本願では必らずしも然う說いたのでもあるまい。若し又世尊がその御心の眞髓から女人といふ女人、女性を一切賤しめたものならば、その賤しめた口で、何ゆえ八歲の龍女の成佛したと言ふ旨を法華經では說かれたか。如何に和僧の返答は？」

範宴は只茫となる。

莊嚴極はまる面色に多少の笑顏を仄めかして、更に上﨟は步を進めて、

「明きらかに認められる佛教のその所說の撞着は正に然るべく改めて、新らしい筋の釋解を與へて、絕え掛かるその法脈に血を殖やして、更に一切衆生の藥餌たらしめるのが、是からの佛徒の務めでもござらうが、和僧は如何に思し召す。」

言葉附こそ手嚴しい。

和僧はそれを引き受ける丈の器量が有るぞと宛も言はぬ計りの言葉と聞けば、夢か現か、感極はまる。今早殆ど仰ぎも得ず、頸筋から抑へ付けられるかの心持ちがして、我知らず俯向く範宴の、その手を上﨟はむつと執る。はつと爲る面前へ差し出した、何か知らぬが白絹に圓い

形の物を包んだ物、それを手許へ擦り寄せて、

「實の事を申さうなら、この山へ登るにも大きに心願の次第が有り、大智識の高僧に見參して、此名玉を奉らうと志した所で不憶も今玆で和僧に遇ひ奉つて、今は最う餘所外を尋ね回るにも及ばぬ。此玉を差上げる。」

硬くのみ爲つて敢て開きも得爲ぬ範宴の手を殆ど無理に開かせる。笋の指しなやかに、それで力をば入れてある、その感じと言うたらば、目に見えぬ藥力か何かゞ皮肉の間を分け潜つて、ぢり／＼と滲み通るかの工合ひで、さしも握り詰めた五本のも痲痺させられたかの樣に、おのづから開いた所で玉の包みは其掌中へと押し附けられて、更にまた五本の指は上﨟の指に押し握られて、否も應も無く玉の包みをぢいわりと取り籠める。

上﨟は嫣となる。

「名玉を授け奉つたに就いては一通り其の玉の功力をも申す。是は天日の光りを取る玉で、玉すなはち天日を小さな形に縮めたのぢや。玉そも／＼何物か。土石のやゝ立ち優つた物に過ぎぬ。日そも／＼何物か。宇宙無上の尊靈ぢや。さりながら尊靈のその光明も、その酷熱も唯獨りでは下界に下つて燈明と爲る事も無ければ、篝火となる事も叶はぬ。しかし土石のやゝ立優つた此玉といふ物を翳されれば、分散した大熱も一點に凝り寄つて、金鐵から火花も立たせ得る。佛法の理は高く遠い。天日その儘ぢや。八荒を照らすか知れぬ。しかし、只その儘では大熱も只分散する。況んや大聖世尊の滅後何千年、天も幾らかは色褪めれば地も何程か擦れ減つた。佛法の爛たる光明も、八荒に散つた丈で、所に由つては雲霧にも支へられ、所に由つては山谷に隔てられる。それを寄せ集め、凝り固まらせ、卽ち散つた大熱大光明を大手腕の掌中に把持した靈玉に由つて纒め集めて、更に改めて新鮮なる光明たらしめて坤輿億萬由旬を照らすのが、是からの佛徒の大任ぢや。不世出の和僧でこそ此玉と日とを調和して、やゝ曇つた佛教の鏡の面に冴え返る光り有らしめる事も成る。此上の神祕はもう言へぬ固く申すが、

やがて／＼此玉と日との事に就いて、和僧が偖こそと思ひ合はされる事が有る。會得されたか。嗚呼、應會得されたろよの。さらば是を別かれとする。ゆめ／＼疑ひ惑ふ事無く只一向只專念、この一向專念を本義として、衝き進む果の果まで必ず共に至られよ。」

涼やかなる聲で滔々として告げ終つて、今は是までと思つたかその儘で身を飜して木の陰に立ち入ると共に、その姿は見えずなる。

見えずなつたと言ふ所で、始めて心付いた樣になつて、只何が無し湧き返る心の中の有想無想を瞑目と共に壓伏して、やゝ姑らくして範宴も目を開く。

暮れ掛かつた天の色はその天突き刺すかの勢ひで直立する杉の梢の邊から磨ぎ上げたほど金色の隈を晃めかして、高低の音宜しく蜿蜒らせる山風はそれら杉の何の枝かと相揉んで笙の高音を響かせる。此一刹、實に範宴を中心とした一區域は、今只無上菩提の域、骨からも光りが出るやうな、只靈的の所である。

五

悲觀の極點辛く認めた一道の光明

太子の御告げを受けた事、神女の上﨟に遇つた事、勿論双ながら神祕的の傳說で、是を科學的に言ふとすれば、荒誕の沙汰にしか過ぎぬ。さりながら飜つて又思へば、此二つの荒誕が實に未來の眞宗の親鸞聖人の命である――否、命の根本である。荒誕でもあれ、無稽でもあれ、只是感情の人であつた、天才たる狂熱者の、その何物かに向かつて滿身の血を搾り全身の脂を湧かせる場合ひの一圖からは、荒誕も無稽も悉く皆その感動の極致である。

何か知らぬが只何と無く範宴は身の無常をのみ思つた「夜半に嵐」を常に思つた。今斯うして生きて居る此己れが明日死ぬか知れぬと只思つた。「汝命根十餘歲」、即ち十九歲の時から計算してやうやく二十九歲位を身の終りと只思つた。遮莫、そのいはゆる身の終りは肉體の終りでは無いか知れぬ。しかし、三十歲になる迄の間に然る

べき歩調が定まり、然るべき抱負が立ち然るべき決心が附かぬ以上は假令肉體は活きて居ても、精神は死んだのと些しも異ならぬものと考へた。卽ち、やゝ下品なる語で之を言へばその實は成功をと一圖に志した。成功と言つた所で、肉に飽き、絹に埋り、色に圍まれ、花に包まれるのを目的とするその意味の成功なのでは無い。人生の安心決定を求めるべき、その方法の見當たらぬ情無さに、卽ちそれを發見しようとする、その成功をと只急いだ。言ふ迄も無い、大事業は只急いでのみも成らぬ。しかし、怠つてのみも素より成らぬ。急げば是非休まなければ爲らぬ。休む、それが些でも永くなると、最早休むのでは無くて怠るとなる。卽ち急がずに急ぐ、是で無ければ事は成らぬ。卽ち一日の安も無い、その一日の安も無いと言ふのが已れで已れが已れを鞭撻するのである。範宴卽ち是を爲た。命根を廿九歳までと、實に／＼仰ぐべく又尊ぶべき其克己力で、已れが已れに或る意味に於ての死刑の期日を宣告して、これで一日一刻も修養に向ふ事を怠り休まぬと言ふ事にしたのである。

さり乍ら、然う心に一刻の安も無いと爲ると、心の苦痛と言ふ物は夫は／＼一通りの沙汰で無い。煩悶せぬ氣でも煩悶する。煩悶も自分で煩悶と氣の附く内は、まだまだ大した煩悶でも無い。やがて高波のやうに嵩まり立つ。さう爲るとまた實に高波に飜弄される小船見たやうに、其高波の如何ほどの高さであるかと言ふ事も、其高波の如何ほどの幅であるかと言ふ事も、又其の高波の如何ほどの蜿蜒を打つて如何ほどの距離に於いて更に如何ほどの他の高波と衝突するかと言ふ事も、小船たる身に爲つては只些しも何も分からぬ。煩悶が倍加となる。何うでも爲れで瞑目する。そこで辛うじて只落着く。大苦痛の大試驗の場に身は叩き込まれたのである。

然らば又範宴は何を發見しようとして、卽ち何の發見がそのいはゆる成功と思ふ物であると思つたか。

神女に遇つたとの寓言が實に夫を說明する。

佛敎の多岐に困つて居る。華嚴と言ひ、天台と言ひ、

律と言ひ、法相と言ひ、乃至真言と言ひ、何と言ひ、皆群盲が象を評して居る。その群盲の雑評を排斥して、それから夫々の長所を取るのが、即ち八宗に分散して仕舞つた天日の光明をば更に一念の靈玉で焦點に寄せ集めると言ふ譯である。

人間の生涯の短小を悲しみ、救世の抱負の厖大を觀ずるに付け、人の目にも立つ程實に／＼範宴は活きながらの死人のやうに爲つた。叡山へ登つたのは春の事で、偖山から歸つて來ては只物思ひにのみ封ぜられて、食欲も殆ど減退し血肉もやうやく衰へ來つて、秋九月の頃と爲つては、或ひは自殺でも爲は爲ぬかと師の目にも見えるやうにさへ爲つた。師も苦勞に爲る。しかし、素より俗人同士でも無い。敢て正面から仔細をと言つて問ひもせぬ。それと無く只探る。但し、その探られる範宴はと言へば、全で探られるも何も知らぬ。溪流は只混々として盡きぬ懷疑の源泉に夫から夫と流れ、狂ひ、渦巻き、碎けて、岸頭に何者かゞ立つて、具さに視察して居るも居ぬも、まるで頓着するでも無い。十月朔日からと言ふものは東塔無動寺の大乘院から中堂の本尊藥師如來に毎夜參詣し、無言不動の靜座それからして早既に此世の人でも無いとしか見えぬ位、終に三七日の沈思を勤めたが何の得る所も無い。

十二月の上旬となると、今度は無動寺の大乘院に籠もつた。而も密行とあつては人にも逢はず人をも寄せぬ。給仕として遙かに附いて居る正全坊侍從が餘りの訝かしさにそつと物陰から伺ふと、果然範宴は潸然と泣いて居るのである。

年は變つて正治その三年となり、改元も有つて正治は建仁となり、いよ／＼範宴は二十九歲を迎へた。胸の悶々は猶進む。正月から更に無動寺の大乘院に籠ると共に、猛然として心を引き立てゝ、六角堂の如意輪觀世音に一百日の參籠を行なはうと決意した。

此場合ひでも一鎖事にすら猶迷ふ。參籠して不動の態度を執らうかと考へて、又そのやうな卑屈な念では爲ら

ぬ、足の試し五體の試し筋肉の試し乃至勿論心魂の試しに假令此所叡山から六角堂まで三里餘り四里足らずの道であつても、其所をその出來難いのを耐へ忍んで通ひ詰める丈の決心で無ければと、又更に思ひ直す。思ひ直したその自我は思ひ返さぬ迄の自我よりは一段の進境が有つたやうで、勇氣もそこで倍加する。到底は此所が偉人である。我が我を叱咤する。そして我が我を奬勵する我は己がための師でもあれば弟子でもある。

正月、名は春であるが雪も降る。まして西坂の霜柱を踏み、赤山越の氷を碎いて、山を越え川を渡つての夜々の通ひを爲るのである。

只屈せぬ。

四月中旬、九十九夜、やがて滿願といふ夜に爲つて、悲しやまだ何の得る所も無い。

衆生濟度の方便は？　分からぬ。それどころか自我の將來、それ丈すらまだ分からぬ。何も斯も不可解である。嗚呼是までの苦辛も水の泡か、まだ／＼修行が足りぬのか、乃至この下根の身に迚も一道の光明を見當てる見込みは無いのかと、今更の如く殆ど落膽して仕舞つて、身は只空を浮くかの思ひで、朝六角堂を立ち出でた。

夏のやうやく催した朝の事とて、新樹見る目も鮮かに、徐かに／＼歩む身の前に當たつて、その葉末から落ちる朝露にも玉の滴りの、何かの意味有るが如き是も不可解の音が爲る。

此玉何か語るのかと茫然として佇んだ。

玉は依然猶滴る。

滴るが、しかし、その音の聞こえる時には――否、その音の耳にも聞こえて、己が眼が其玉の落ちた所へ行つた時には――もう玉の形は無い。

「玉は何かを人に教へて、嗚呼その身を碎けるのか」と我知らず獨言に言つて、はや涙は差し含んだ。

又最う立ち去りも得ぬ。又落ち來る玉を待ちたいやうな心持ちがして、其邊その前の玉の落ちた邊に定まつて定まらぬやうな目を注ぐ。

「是は〳〵御門跡」と後から突然誰かゞ呼び掛ける。はつとして見返れば、何さま知らぬ人でも無い、その人と言ふのは聖覺法印とて、安居院の僧である。

「是は〳〵御門跡」と聖覺は更に重ねてつく〴〵範宴の顔見詰めて

「はて、如何遊ばされたかな」ときりりと眉根緊め寄せる。

偖は思ひが穂にも出たかと我ながら淺ましい。人間と言ふものは何うして斯う柔弱なものかなと、刹那ではあるが、考へる。

「どうか、常ならず見え申すか。」

「されば、失禮ながら御顔に雲がござる。」

「恐れ入つた。」

「何事でござるかな。」考へて見れば法印は先輩である。而も豫ねてから畏敬する人である。

「外ならぬ貴僧ゆゑ、恥かしながら申しても見るが、實は此頃範宴は死ぬやうな心持ちなのぢや。」

「如何にもな」と、又も〳〵凝視して、「何さま死ぬやうなでもござろ。しかし、まだ死ぬとまでは御決まりも無い樣な。」

竦然として「いよ〳〵是は恐れ入る。頭圓めても範宴は只の凡夫ぢや。どうしても分別が附き申さぬ。貴僧は豫ねてから範宴が仰慕する御方、定めし無二の御指示もござらう。此所で御目に掛かつたのは幸ひ、凡夫出離の直路と言ふもの、これを御示し願ひたい。」と思ひ入つた樣子である。

「是はまた拙僧の方が恐れ入る。その御答へは出來難い。」

「出來難いとは？」

「拙僧には荷が勝ち申す。」

「御謙遜も物に由る。さう言はれずに願はくば……」

「あいや、仰やるな〳〵。迷ふたと只言ふて來られた人に何の方針が示し得られ申さうか。陸を見失つて迷ふたとも言ふ舟人にならば、その陸の所在の指示致そ。色

に迷ふたと言ふ若者にならば、その色ならぬ色を黜じて反照の教へを垂れ申す。門跡は只迷はれる。只烟に迷はれる、否烟どころか只の空といふ物に迷はれる。その空を此聖覺が空で無くて色ぢやと言へば、門跡は其色が卽ち空ぢやと仰やるぢやろ。その上を說き破る舌の利劍はまだ聖覺が持つて居らぬ。」

「附き穗も無い事言はれるな。しかし、御言葉は尤もぢや。さて御言葉を尤もぢやとして、然る上は此範宴は如何致したらば可からうか。日を重ねた參籠も水の泡、盲龜の浮き木とした貴僧からも空吹く風、依然として只迷想の闇に伏し轉ぶ範宴を見殺しに遊ばすか。」

「折角の御言葉ゆゑ、さらば、存知寄りを申すとすれば、此御方ならば門跡が御尋ねに爲つて、その御所說を聽聞遊ばされて、夫だけの甲斐が有つたと御合點遊ばすかと思はれる聖が只一人ござると思ふ。」

「忝い。何れのぢや。」

「御名は御聞き及びもござらうよ。東山の吉水の、あの法然房でござる。」

「如何にも源空師でござるか。」

「さればその源空師でござる。實は此聖覺も近頃その尊容に接して大分敎化をも賜はつた次第、今日も是から參るのでござる。」

「はて偖」と胸躍る。「好い事を承つた。源空師の御德をば豫ね〴〵仰いでも居つたが、いざと思ひ立つ迄にはまだ現の此今までも爲り得なんだと言ふ、それが思へば此範宴がまだ〳〵迷信を出航し得ぬ譯でぢやな。忝い。御敎示に從ひ申す。」

「吉水へ御出であるか。」

「參る」と冴えた聲である。「さすれば六角堂への納めの祈願も今日は籠めたし、改めて見參する事とならば、法門の式も履まねば爲らず、明日參る事と致さうか。」「何れとも御隨意ぢやが、然らばそのやうに遊ばされい。」

「忝い〳〵。」と雨降つて地固まるやうな心持ち、やがて聖覺と袂を分かつて、又も範宴は六角堂へと引き返し

た。

六

源空と範宴と同軌道で
二明星の始めての邂逅

勇猛力大決心、範宴もう己を全然空しうして道を源空に問ふ氣である。孔子(くし)も五十餘歳の年齡で、道を問はうと渴する儘、遙々老聃をさへ尋ねた。いでや遙かの隔りでも無い目と鼻との洛東に權化を尋ね參らせる事に爲つたかと氣も揣むほど勇み勇む。

門跡と呼ばれるのも今日限りと思ひ斷つ。行く迄は門跡の身でもある。吉水に足一歩を踏み入れて、空師の前に跪くと爲ると共に最早門跡たる身は無い。

法門の作法も有る。雪白の法衣淸らかにいよ／＼車で吉水へと向かふ、その供揃ひは勿論立派なものである。それと源空の方でも聞き知る儘、範宴參つたと聞くと均しく、直と範宴を前へと許す。

想見て双方まづ厚く禮を行なつた。圖にしても見たい稀有の壯觀、上座たる源空師は後のいはゆる淨土宗の開祖で、下座たる範宴その人は後のいはゆる眞宗の開祖である。彼は年既に古稀に只一年を缺く六十九歳是は而立に亦一年を缺く二十九歳、恰も親子と言ふ年配の、その二明星が相對したのである。一は眞如の影飽くまで淸く既に磨き上げた鋒鋩から燦然たる光り闇を透す趣き、一は煥發の晃めき漸く仄めいて是から猶と言ふ所である。

斯くて問答が兩師の間に交はされた。問答の子細はと言ふと、其實は一切祕密なのである。後からは色々解釋し、推測し或ひは寧ろ附會する。但し其當否是非を今こゝで言ふ必要も無い。所で只是だけの事は、此時の問答の結果として範宴が得悟したのであると言ふ丈は、朧氣ながらも斷じ得る。曰く、源空の所說を聞いて、他力攝生の深い旨を確かに範宴が知覺した、と。

その實、範宴といふ人は後世から漫に只貴族の子として見るやうな幸福な人で無い。前既に言ふ如く早く親に別かれる苦しみを味はつて、幼心にまづ世を悉く悲觀し

て、即ちまた得脱を／＼と急ぐまゝ從つて又人生の老い易く消え易く恃み難いのを情無く思ふまゝ誰に何う縋つて確たる安心を得て宜しいか分からなく爲つたまゝ、即ち壓迫されて多少は窮鼠の勇も出るに及んで少年には似合はぬやうな一寸非凡に見える所も有るに及んで、斯かる種類の變はり種が當然經るべき徑路として、まづ世界の何事でも自力で只成し遂げ得べく、即ちいはゆる「自力難行」、一向の專念で自力の限りを盡くしたなら、安心も得られ成功も見られるであらうと思ひ至るに及んだ所で、又さうなると種々の空想も理想のやうに勃動する所で、即ちまた山で神女に遇つたやうな現實の覺めての夢を見るに及んで、根の深い悲觀と、不自然なる樂觀と胸中に只衝突しながら一齊に湧き起こつて、みづから如何とも爲し得べからぬに至つた所で、自殺も何さま爲かねまじき煩悶から不憶も源空の所へ來た所で、終に空師からの教諭として「他力易行」を注射されたのである。

範宴の持ち出した意見と源空の示した意見とは、それ故、氷炭まるで相違した。しかし、その味の極端に變はり過ぎたのが、何ぞ知らんや、同化するための便宜であつた。みづから製して自から嘗めてその苦さに堪へられなくなつた範宴が、一朝源空が製して嘗めさせて呉れた極端なる甘さに舌鼓を打つた。極端の敵は却つて極端の親友と爲り易い。身體から心から極端に相違する異類同士たる男と女とが即ちまた極端に親密になつて骨も血も一所に溶かし交ぜて仕舞ふ夫婦といふ物になる。源空は範宴を諭して、「他力易行」を只教つた。渺たる人間に何が出來る、自我の靈長を誇るのは蛙の頬冠りたる自惚れである、斯かる自惚れは我慢となり我利となる、須らく標準を立て、信念をそれへと繫げ、即ちその標準とは佛菩薩である、阿彌陀である、その標準に合掌し注目し、即ちそこで唯我を捨て、自力を捨て、飽くまでも夫で一向專念に他力即ちその標準佛の力を縋りの綱として「易行」即ち「行なひ易い」のに就いて、悠々として迫らず徐ろに天地と行動を偕にせよと、斯う示した。

斯る事を架說する紙も此所に無い。只約めて之を言ふとすれば、源空の此他力の說明には洞然として範宴は頓悟した。

如何にもと深く〳〵頷いた。灼鐵を水へ衝き入れたのは灼かぬ鐵を衝き入れたのより其水の狂ひ立ち沸き返る丈見榮えが有る。狂ひ鬪え切つて居た「自力」主義の獨斷家が、大手を廣げてむんずりと押さへ掛かつた「他力」主義の包容者に遇つたのは、要するにその灼鐵が水を沸騰させて、その辯水は負けず灼鐵は負けて、灼鐵は水と同溫度になつて仕舞つたのと同じである。

頓悟したのが開悟した。髓からの熱淚を搔い拭ひ、搔い拂ふ。

「御會得遊ばされたよな」と、空師は樣子を見て執つて。

「會得致してござる」と丁寧に頭を低げた範宴はその儘暫時咽せ入つた。

「人は此苦しみを語つても努々眞實とは思ひ申すまい。醉狂で、苦しますとも可いのに世を果敢無み、泣かずとも可いのに淚を搾ると、嗤人は言ふでござらうが、全くの事、浮き世の萬人億萬人が其已れながら自から知らずに愚衲が苦しむやうな苦しみに煩悶して此世を泣き、怨み罵しり呪つて居るかと思へば、只實に悲しいのでござる。」

「それ故、そこを救ふのが釋門の徒の任でござろ」と、空師その聲冴えて居る。

「恐れ入つてござる。そのためにこそ他力易行……」

「すなはち何事も宜しいか、一向專念で參るのぢや。」

「一向專念、無二無三に？」

「岩が有らば蹈み摧けぢや。棘が有らば蹈み摧けぢや。」「忝い。會得してござる。」

「唐土西河の道綽禪師が正に恰かも御身のやうでござつたな。曇鸞大師の碑前に立つてその銘を一讀して、開悟して、涅槃宗の念珠を捨て、他力の道に向かはれたと言ふ事ぢや。御身は第二の道綽か。御煩悶の飽くまでも

毒々しいのが、又開悟の明朗さながら鏡を拭ふたやうなのに却つて立ち至るべき因縁ぢや。綽の字を一字取り、源空も空の字を一字取り、二字會はせて綽空としてそれを改めて進らせる。」

範宴流石驚いた。

「是は又しても案外な、勿體無い御名字を二つまでも相添つて賜はると仰やる事、身に過ぎた事と存ずるが……」

「過ぎは爲ぬ。相應でござるわ。源空も此上は法門のため末代へ佛教の弘通のため、御身を老後の杖とする。宜しく此意を含まれて、是からは此所にござれ。」

「直御傍御許し下さるか。」

「言ふ迄も無い事でござる。」斯う、しかし、容易く許されやうとも實は期しても居ぬ事とて、少なからず驚きもしたものゝ、倩思へば又嬉しい。蘇るやうな心地である。

さらば暫らくの御暇をと宜しく空師へ挨拶して、やがて端近へ退いて、つく／＼最う考へれば、早既に一衣一鉢の乞食の身なのである。いよ／＼門跡の稱號も今日限りに爲つたぞと白の法衣を脫ぎ捨てゝ、布の衣に爲り變はつて、倩隨從の供人に向かつて、是見よや斯くの如く、昨日まで一山の門主として錦の裀に座つた身が今日は乞食と爲つたと計り言葉優しく言ひ聞かせ、懇に暇を與へれば、一同は殆ど呆れて、果は涙をさへ流す。もう主は居ぬ空車の、その力無氣なる轍の音を浮くが如くに只響かせて、悄然として歸る姿を姑らくは共布の衣の人も茫然として見送つた。

七　救世菩薩の女犯の偈

範宴では無く最う名を改めての綽空、又の稱號としての善蓮はその以後三年は全く源空師に隨從して專修念佛門に入り、一心に法理を究めたが、實はその間人知れず胸に包藏するその一代の大抱負は着々として實行の緒に就いた。曰く、女人の神聖を法門で認めやうとの一大事！

是れ實に破天荒とも言ふべき、大膽なる主張である。しかし、綽空の當時の一念は全く是に注がれた。譯經の文句の種々勝手なる解釋や何かから、既に前回神女と會つたとか言ふ時のその回答でも見えた如く、女人といふ女人は殆ど大慈大悲の佛教から仇敵視されたやうな形勢と爲つたのを、その實は綽空は憤慨して居たのである。どうぞして男子と同じ待遇にして女人をも法門に於て男子と對等たらしめやうと、是が其大膽なる主張である。今の明治に至つて漸く言はれる男女の同等をば實に綽空その人は今からの七百年前既に認めやうと志したのである。而も然う女人を法門に許さうとの第二の大目的は何か。佛徒が男女の愛情を解せぬ以上、人間としての眞實の同情や博愛は迚も有し得べきもので無い、卽ち佛徒をして全くの清淨潔白で女人の愛を斷たしめるのは却つて佛徒をして殘忍刻薄なる猛烈過ぎた心性たらしめる丈の事で、佛教に其段に至つて、却つて自殺して仕舞ふので、卽ちさう爲つた以上、衆生濟度も何も有つたもので無い、と、實に斯う綽空は心に信じて居たのである。

卽ちそれを躬行する心である。空論より實行の心である。大野心は漸く蒸す。當代の北辰と目差される月輪殿下兼實の息女を手に入れて妻女として一代を震駭させ、佛徒妻帶の範を示して、それから愈一天下を己が法衣の袖に包んで法力すなはち權力を掌握し、その權力を振り翳したその下で萬民を濟度しやうと考へた。

そこで六角堂へと籠もつた。やがて發表する我大膽なる主張に箔を附ける下拵へとして、又しても六角堂での女人に於ける救世菩薩の御告げが有つた旨を作り設ける支度である。既に前日來から山の神女の口を籍りて佛法で女人を忌む事の不道理を鳴らしもした。すぐ又矢繼早に六角堂を持ち出した。人生を悲觀のみした、つひ兩三日前までもの變り者は煩悶に壓迫されて、稀有の姦雄兒となつた。燃えやうか消えやうかと迷つて居た炭素が端無くも酷熱に壓迫されて案外な方に變形して結晶して、夜光燦たり爛たる金剛石と爲つた。

時は建仁三年四月五日の夜、所は吉水の禪房で、夢は六角堂を見た。もう曉に近い五更で、「善信」といふ妙音が不圖その善信の耳に入る。枕から頭を上げて何心無く前を見れば殘燈の光り淡い邊に救世菩薩が現れて居る。全相の具備した端麗なる形相に、銀さながら光りを射るばかりの白衣を引き纏つて、觸れたらば手も凍るかと思はれる白色の大蓮華の上に端座して、再び「善信」と名を呼んだ。

「偈を授ける。謹んで承れ。」

はつと爲つて振り仰いで、直また善信は頭を低げる。

菩薩は妙音朗かに、

「行者宿報設女犯。我成玉女身被犯。
一生之間能莊嚴。臨終引導生極樂。」

「四句の此偈は會得したか。會得したならば夫で可し、右の偈の意を己が本願と心得て、よく／＼衆生を濟度せよ。」

斯う告げられたかと思ふと均しく、ふつと目が覺めて氣が付けば、即ちそれは夢である。

と、此夢物語りが何ぞ知らんや、後に妻帶を公然として行なふと言ふ、その支度にしか外ならぬ。而も又よく考へて見れば、是までに虛構にもせよ何にもせよ方便を造り設けて言はなければ、まづ度し難い當時であつた、その中に只一人超然として俗流から傑出し、一代を指呼の間に呑吐して、大膽に方便を揮り回して、而もまた當時の思想から見れば十戒の一たる邪婬戒を犯すかと言つて攻擊されるやうな妻帶說をまづ主張し始めたと言ふ、天晴この聖人の膽の大さ、稀に見る英雄の資である。

事の噂はいつの間にか月輪殿下の耳にも入る。偖はと心を動かした。何さま今にして考へれば、善信と言ふあの僧容易ならぬ器宇である。道快座主が前例の無いのにも拘はらず、わが地位を賭ける迄にして早くその善信の當時いはゆる範宴を得度させたと言ふのさへ、今になつて又よく思へば如何にも道理は有るとばかり、人物を見る明と爲つては敢て人後に回るやうな、その月輪殿下兼

實では無いのである。

深く思慮を回らした末、何氣無い樣子で月輪殿下は吉水に源空師を訪問した。

源空師の高德には月輪殿下も深く平素から歸依して居た事とて、近頃また師に就いて剃髮し、圓照禪定といふ法名をさへ受けて、月輪の禪閤と稱へて居る。

「御邪魔して又一つ凡俗の迷想に就いて御教化に預からうと思ふのでござる。豫ねてから考へては考へ、而もその末をば決し得ず、五里霧中に彷徨して居るやうな次第、我ながら凡夫と言ふものは偖も哀れなものぢやと計り、いや、御恥かしいのでござる。外でもござらぬが、吾々俗人の念佛でござるがな、堅忍持戒の身の念佛と吾々不持戒の輩の念佛とは功力に於て格別の相違がござらうが。この身この圓照など、名は然るべく法門に入り、頭も此通り圓くして、既に世の塵にも遠ざかり、念佛して後世を願ふと言ふ事に爲り乍ら、さてつくづく自ら思へば、示された金科玉條の五戒を保ち守るのでも無し、また美色麗容を遠ざけて妻妾を近づけぬと言ふのでも無し、己が手を下してこそ殺生は爲ぬものゝ、しかし、人が現在殺生した末のその獲物たる鳥獸魚の肉をも口にすれば、葷酒をも亦用ゐる始末、そのやうな口で言ふ念佛と一方の禁戒嚴重なる法門の御方々の念佛とは何うでも其功力に於て夫だけの相違が無ければ爲らぬかと存ずる。如何ほどの相違かな」と、正面から甚だ改まつた禪閤の言葉なのである。

さり乍ら斯くの如き問ひに對して、源空の方から見れば、何も必らずしも多辯を要する程の事でも無い。

「仰せらるゝ夫は聖道自力門で言ふのぢや。さればこそ吾々は淨土他力門を說く。凡衆と佛徒とは生活の道に於て初めから相違の有るものを、凡衆をして悉く佛徒の通り爲せぬ以上、それ丈の功は無いと言ふたならば、それは難きを凡衆一般に責めるので、迚も行なはれるものでは無い。要するに程度と身柄とに因る論ぢや。佛徒千遍の念佛も、その行ない難い所で行なつた物たる凡夫一

遍の念佛には寧ろ負ければと言ふて勝ちはせぬ。武人は人を殺す。已むを得ぬ。但しその一向專念の本心からの念佛一遍は千僧徹夜の讀經にも優る。只是だけでござるのぢや。」

今更ながら力を得て、「何さま是は忝い。實は只今も申す如く、其邊に就いて迷つて居つた。天晴の御開示で、迷ひもやうやく晴れたに就いて、また心も勇み立ち申す。忝い」と繰り返して、更に膝進めて、稍乘り出す。

「偖さう承つて見ると爲ると、之を裏返にして言ふとして、若し佛門の徒の御方で、假りに肉食をもし妻帶をもして、而もその一切衆生を救はうその大悲願は牢として金輪際から生えた大磐石のやうであると言ふやうな御人がおやな、若し有るとしたものならば、師はそれを何と御見遊ばされるかな。」

思ひの外躊らも無く源空は即答で

「それこそは兼ねてから源空も善信からその持論として承つて、同意して居る筋でござる。」

流石禪閤顏色變る。

「善信が何でござるとな。」

「善信がその意見なのでござる。肉食も爲う妻帶も爲う、そして身を養ひ心を和らげ、恩愛を味はつて恩愛を施す迄と爲り、心身を堅固ならしめて大善業を遂げうと、斯う言ふ彼の說でござる。」

偖は矢張り然うなのかと禪閤は勇み立つ所も有る。その何か言はうとする、其所を源空は妨げた。

「仰やるな。源空には禪閤の斯うして御出でに爲つた御心中を恐察し得た樣に實は思はれ申すがな——善信の樣子を聞き正して、若し御心に協つたものならば、彼をして未曾有の活動有らしめるやう遊ばされやうとの、此御心でござらうが」と、如何にも天眼通である。

「全くおや。御推察の通りぢやと圓照も隱し申すまい。實は斯うして參つたのも其事に就いてゞござる。一應は師の御說をも承つて、もし御異存もござらぬと言ふ筋ならば、善信に圓照の娘をば配偶として上げたいのぢや。

實では無いのである。

深く思慮を回らした末、何氣無い様子で月輪殿下は吉水に源空師を訪問した。

源空師の高德には月輪殿下も深く平素から歸依して居た事とて、近頃また師に就いて剃髮し、圓照禪定といふ法名をさへ受けて、月輪の禪閤と稱へて居る。

「御邪魔して又一つ凡俗の迷想に就いて御敎化に預からうと思ふのでござる。豫ねてから考へては考へ、而もその末をば決し得ず、五里霧中に彷徨して居るやうな次第、我ながら凡夫と言ふものは偖も哀れなものぢやと計り、いや、御恥かしいのでござる。外でもござらぬが、吾々俗人の念佛でござるがな、堅忍持戒の身の念佛と吾々不持戒の輩の念佛とは功力に於て格別の相違がござらうが。この身この圓照など、名は然るべく法門に入り、頭も此通り圓くして、旣に世の塵にも遠ざかり、念佛して後世を願ふと言ふ事に爲り乍ら、さてつく〴〵自ら思へば、示された金科玉條の五戒を保ち守るのでも無し、また美色麗容を遠ざけて妻妾を近づけぬと言ふのでも無し、己が手を下してこそ殺生は爲ぬものゝ、しかし、人が現在殺生した末のその獲物たる鳥獸魚の肉をも口にすれば、葷酒をも亦用ゐる始末、そのやうな口で言ふ念佛と一方の禁戒嚴重なる法門の御方々の念佛とは何うでも其功力に於て夫だけの相違が無ければ爲らぬかと存ずる。如何ほどの相違かな」と、正面から甚だ改まつた禪閤の言葉なのである。

さり乍ら斯くの如き問ひに對して、源空の方から見れば、何も必らずしも多辯を要する程の事でも無い。

「仰せられる夫は聖道自力門で言ふのぢや。さればこそ吾々は淨土他力門を說く。凡衆と佛徒とは生活の道に於て初めから相違の有るものを、凡衆をして悉く佛徒の通り爲せぬ以上、それ丈の功は無いと言ふたならば、それは難きを凡衆一般に責めるので、迚も行なはれるものでは無い。要するに程度と身柄とに因る論ぢや。佛徒千遍の念佛も、その行ない難い所で行なつた物たる凡夫一

遍の念佛には寧ろ負ければと言ふて勝ちはせぬ。武人は人を殺す。已むを得ぬ。但しその一向專念の本心からの念佛一遍は千倍徹夜の讀經にも優る。只是だけでござるのぢや。」

今更ながら力を得て、「何さま是は忝い。實は只今も申す如く、其邊に就いて迷つて居つた。天晴の御開示で、迷ひもやうやく晴れたに就いて、また心も勇み立ち申す。忝い」と繰り返して、更に膝進めて、稍乘り出す。

「偖さう承つて見ると爲ると、之を裏返にして言ふとして、若し佛門の徒の御方で、假りに肉食をもし妻帶をもして、而もその一切衆生を救はうその大悲願は牢として金輪際から生えた大𦬇行のやうであると言ふやうな御人がおやな、若し有るとしたものならば、師はそれを何と御見遊ばされるかな。」

思ひの外譯も無く源空は卽答で

「それこそは豫ねてから源空も善信からその持論として來つて、同意して居る筋でござる。」

流石禪閣顏色變る。

「善信が何でござるとな。」

「善信がその意見なのでござる。肉食も爲う妻帶も爲う、そして身を養ひ心を和らげ、恩愛を味はつて恩愛を施す迄と爲り、心身を堅固ならしめて大善業を遂げうと、斯う言ふ彼の說でござる。」

偖は矢張り然うなのかと禪閣は勇み立つ所も有る。その何か言はうとする、其所を源空は妨げた。

「仰やるな。源空には禪閣の斯うして御出でに爲つた御心中を恐察し得た樣に實は思はれ申すがな――善信の樣子を聞き正して、若し御心に協つたものならば、彼をして未曾有の活動有らしめるやう遊ばされやうとの、此御心でござらうが」と、如何にも天眼通である。

「全くぢや。御推察の通りぢやと圓照も隱し申すまい。實は斯うして參つたのも其事に就いてゞござる。一應は師の御說をも承つて、もし御異存もござらぬと言ふ筋ならば、善信に圓照の娘をば配偶として上げたいのぢや。」

と、只是だけでは餘りまた故さら奇を好んだらしい、輕卒なやうにも思し召されうが、其所には譯もござるのぢや。」

と更に是から禪閤はその以前兄君道快座主が先例を破つて十八公麻呂を得度させた時、己れが異論を挾んだ旨を有りの儘に物語つて、

「非を飾つて申すとすれば、あの時には未來の十八公麻呂の身の爲めを思ふとか何とかの深意が有りでもして、座主に異議を申した樣に此圓照も申すのぢや。但し、非も何も今は飾らぬ。全くあの時は未來の十八公麻呂の成り出でが心許無く思はれたのぢや。而も此眼は終に違つて、果たして却つて座主の眼が利いて、今のあのやうな非凡な僧に、あの善信は爲つたのぢや。但し善信を非凡とした所で、その非凡を助けてやつて然るべく手引きする者が無ければ、折角の非凡も物には爲らず、却つて詰まらぬ物事に利用でも爲れて仕舞ふのぢや。圓照もまだ故意と正面から善信の所說をば聞かぬ。而も夫と無く人を派して、その所說をば聞き取つた。違ふか違はぬか念のため一々それを申して見る。御教示を願ひたい」と身構へからして改める。

空師もほと〳〵感じ入る。

「失禮ながら承れば承るほど見上げ申す御言葉でござる。非を飾るどころか、前日は何うであつたとしても、後は後で羽振りの好い方、風向きの宜しい方に理窟有げに言ひ倣すのが十の九までゞござるものを、然りとては禪閤殿下は、嗚呼、流石でござるわい。そこで御問ひ遊ばされやうと言ふ事は？」

「第一善信は女人といふ女人を決して垢穢の物と見ず、佛性の有る物と見て、又決して〳〵それ故女人をば賤しめて見ぬと言ふ、是なのでござるかな。」

「御意にござる。女人をば賤しめる所で無く、女人も男子も同樣ぢやと、到底男女は双ながら列び立つべき物ぢやと言ふ、是が善信の所說でござる。」

「第二、佛門の徒が前例に殆ど背反してそのやうに女

人を崇めると爲ると、さも無くても兎もすれば起こりたがる、緇衣者流內の亂行邪婬の大罪が猶多く起こりは爲ぬかと思惟される、其所を如何やうに觀ずると言ふ善信の意見でござらうか。」

「邪婬は其人に由る、法理には由り申さぬ。裸形の美人に肉迫され、脂粉を眼鼻に突き附けられて、それに心を奪はれると言ふのは心を奪はれる丈の豫めの心の迷ひが其人に有つた故でござる。」

「如何にも」と考へて、「それ丈は會得した。然らば何うしても、何所までも假令骨が舍利になるとても、奈落金輪際に落ちるとしても、それ丈の勇猛精進力で打ち當たつて身が摧ける迄猛然(まうねん)として進まると言ふ眞實の善信の魂でござるかな。」

「一言で御答へを盡し申す。その魂でござるわい。正面は他力易行、何事も一向專念と教へ、側面は慈悲忍辱、弱者たる女人を引き上げ、そのためには死を期して、衆謗を振り被つても肉食と妻帶とを躬みづから行なはうとの善信の魂なのでござる。偖是は岐路(きろ)に走るやうな言葉ながら、未來に就いて申さうならば、佛教の是からの何千年後、闇も有る晝も有る、此まだ何百年の間と言ふものは佛徒が外見(げけん)の修飾にのみ忙がしくて、表向きは妻帶もせず肉食もせず却つて陰で罪を犯し、また夫だけの片意地だけ、博愛の心乏しくて、つまりは獅子身中の蟲と爲つて、却つて佛法の仇となる時代ぢや。善信の祖述する天晴意見もまだ容易には透るまい。しかし、透るその日は有る……而も數百年後に於いて。寺を世襲の制度として寺領を十分蓄へさせ、護國の萬一の資に供すると言ふ、天晴の時代は數百年後必らず來る。寺を世襲の制度とする故に、僧も親子兄弟倫理の愛情をも味はひ知つて、却つて同情博愛有る僧侶といふものが自ら出て來るに至ると言ふ、天晴の時代は數百年後必らず來る。即ちまた然う世襲するためには自からの順序として女人を寺に許さなければ爲らず、從つて叡山に於いても女人禁制の標榜を拔き去つて仕舞ふと言ふ、天晴の時代は數百年後必

らず來る。その率先者先驅者と爲り、或ひは身を犧牲にするかの意氣で、是から肉食もし妻帶も爲やうと言ふ、是が彼の善信の心でござる。右の路左の路、この源空のと善信のと執る所に於ては些し違ふが、目的に到着しやうと言ふ方針に於ては相違はぬ。一も二も申されな。息女たるあの玉日の前を善信に下されい。」

「されば其所ぢや」と禪閤も眼に異樣の光りが有る。「其所を只今も此身からも一寸申したが、それに御異存ござらぬか。勿論御異存ござるならば、今の御言葉は無い譯ぢやが……」と、源空の挨拶の、その寧ろ意外なのに少なからず驚かされる氣味でもあつて、幾分か躊躇する。

「御意にござるとも／＼」と力を入れて確かめて、「どの道思ひ切つて爲る仕事なのでござる。思ひ切つて爲やうと言ふ綽空で無ければ出來ぬ事、また思ひ切つて遊ばされやうと言ふ殿下でも無ければ叶はぬ事、又而も最愛の御息女をば言ひ樣に由つては捨てるとでも言ひ得べき境遇に或ひは御落とし遊ばさうと言ふ御大膽で無ければ、迚も出來ぬ事でござるのぢや善信を此所へ呼び申す。」

「今直か。願はくば。」

一大事とも言ふべき筋が只卒然降つて湧いたやうな工合ひである。善信は召し呼ばれる。直來て其所の座に列なる。

云々とまづ源空から禪閤の申し出を手短かに物語る。後を更に引き受けて禪閤は禪閤で、息女配嫁の事を說明する。別に怪しむにも及ばぬが、源空は法門の見地を旨として妻帶の理から論じて來て漸く配嫁の事に移るところで、禪閤は配嫁の事から論じて來て、更に法門の見地に移つて述べると言ふ、丁度その述べ方が二人が二人おの／＼其見る所の目方の相違に由つて、前後の順が變はつて居る。

しかし、歸着は一つである。

其所で善信はと言へば、必らずしも驚きもせぬのである。禪閤の膽氣は豫ねて知る。假令禪閤の方から配嫁云

々の事を云ひ出さずとも、いつか其内には折を見て善信その己れの方から息女を妻にと要請しやうとさへ思つて居た程の腹である。

いはゆる機智や頓才は平素の間斷無い修養が其の時機に應じ臨んでの咄嗟間の發現にしか過ぎぬ。機智や頓才は天與では無い、只修養の結果である。卽ちまた善信の身に爲つても、旣に禪閤の息女をと腹で期して居る丈あつて、返答に考慮を費す必要も無ければ、また卽答を敢てし得ぬ程でも無い。

「巽細承知してござる。」

返事と言ふのは只是だけ、如何にも簡なものである。

源空も禪閤も、流石是だけでは物足らぬ。しばらくは默つて見る。しかし、何とも後の言葉が善信の口から出ぬと爲つた所で、つい我知らず双方が双方とも言ひ合はせたかの樣に互ひに目と目を見合せる。

「承知したと言はれるか？」と、禪閤の語氣は急いで居る。

「別段の意見もござらぬか？」と源空が後を足す。

「何として意見どころでござらうか。身に過ぎたとも何とも申し樣も無い大任を斯くの如き粟粒か罌粟粒かに御宛がひ下されたと言ふ丈で、異存申す餘地がござらうか。なまじひの空辭儀は斯かる場合ひ何人でも言ひ易くて、また何人でも行なひ易い詐欺兩舌でござるものを」と、末に至つて、はたと蹴る。

「なるほど、是は一言も無い。偖こそな、凄まじい御度胸ぢや。禪閤が娘を捧げて、俗體で言はゞまづ婿殿かな、その婿殿とした所で、むしろ舅恥かしい程な、それこそ人に見られても面目有る立派な〳〵婿君ぢや、さらば、御異存がござらぬならば、何事も卽決ぢや、此儘今日すぐ禪閤と車を同にして、姫の許まで來られたい。」

是ならば些しは驚くかと與の手を出した積もりで言ふ、その禪閤をきつと見上げて、嚴かに會釋して

「師の御許しさへござるならば」と、その目を源空へと向ける。

「許しが有るも無いもござらぬ」と源空も亦聲揣む。

「可し。さらば早速ながら御暇を申すとして、善信御房も此儘すぐ。」

何のやうな大事でも起りは實に刹那である。破天荒の結婚の相談が此實に建仁三年その十月五日、斯う譯も無く落着した。車は禪閤と善信とを乘せて、五日その夕方京都五條西洞院の本邸へと轅り行く。

時事·世話小說集(一)

美妙の時事・世話小說に就いて

鹽田良平

近世の最も優れた批評家兼作者たる馬琴の「勸懲論」は彼自身の作者的地位を、世俗の作者の幇間的地位から引上げた事は事實であるが、一方創作力乃至構想力の不足な群小作家に好個の遁辭を與へた事も否まれない。儒教道に支配されたる「勸懲論」は是を特に高唱した馬琴に至つて最も勢力的となり、遂に後世の小說は此觀念に引摺られて一種の定型を生ずるに至つた。

そして、勸懲主義が當路者を欺く美名となり、實際は、好色頹廢の時代趣味が小說に浸潤し、勸懲は空虛なる觀念と化し、その形を構想上にのみ殘すに至つたのが、明治初期までの小說壇であつた。

「書生氣質」も「むら竹」も、その點からいへば、手法も構想も草双紙常套的であり、其作者は、作家として新時代の創造的姿を見せないが、硯友社の人々は其點新しかつた。彼等は、遠慮なく過去の小說に反逆してゐる。

彼等は先づ、戲作につきものゝ勸懲的プロットを破壞した。よし彼等の人情に、江戶末期的な感情の殘留が存在するともせよ、その小說の樣式が如何に衒氣に滿ちたものであるにせよ、彼等の行つた文學運動は、江戶文學から明治文學に移渡する歷史過程に於いて、幾多の飛躍を示して新文學の基點となり、且幾多の暗示を後世文學に投げかけてゐるのである。

美妙齋は紅葉山人と共にその中の最も有力な作家であつた。「國民之友」（七十二號）鷗外「舞姬」評中に次の如き言葉がある。依田學海先生批して曰く「舞姬」は殘刻に終り「拈華微笑」は失望に終り「波魔弓」は流血に終り「醉沈香」（韻文・筆者註）は嘆息に終る、嗚呼近世の小說は總て悲哀を以て終らざるべからざるかと。（廿三年二月氣取半之丞）

右にいはれてゐる此悲哀小說は、戲作類、政治小說等と著しい對照をして新興文學の一大主潮を形成するが、是等の先驅的地位を占めるものが、「武藏野」「籠の俘囚」「蝴蝶」「いちご姬」であつた。

此の中で「籠の俘囚」が外國種である外は、すべて題材背景を中世にとり、所謂歷史小說の素をなしてゐる。

女學雜誌は廿一年九月號で、「妹と背鏡」「捨小舟」「浮雲」は好著なれども「夏木立」は尙比類なしと賞め、又內田不知庵も小說界のルーテル、文壇の新駒屋と叫び、「リットン、サカレーを馬廻りとなし、ミルトン、スコットを謀士となし（ヤァ〳〵遠からんものはいらつめを讀め近くは寄つて筆先を見よ）と文學界の戰場に鳴渡る計りの御勢……」（女學雜誌二十一年十月）と嘆賞してゐる。

とにかく「武藏野」にかぎらず、「夏木立」中の諸作が異常な刺戟を與へたのは事實であるが、其理由は前節の修辭的技巧及び作者の新情感及びそれに附隨する新構想が當時の讀者をかく驚倒させたのであつた。

さて、以上の作には、不知庵のいふ情致、卽ち抒情的分子が、かなり色濃く認められる。そこには生活も習慣も教養も全然異なつた幾十代か以前の祖先の世にうちかへされた姿がある。作者は、それ等の人々と、我々との、感情の共鳴を唯一の賴りとして提携しようとしてゐる。そして、「かく悲運なる者ありき」と語らうとしてゐる。從つてかゝる感情的態度は作品をして抒情的性質を帶びさせて來る事は疑を容れない。例へば「蝴蝶」を見よ。二郎春風はわが夫であり、又わが仇敵である。平家の侍女蝴蝶の抱く此內面的葛藤に對して運命は馬耳東風であつた。彼女の強い個人

的決斷によつても運命は一更變改されようとはしない。主上の崩御、蜘蛛の山林流浪。作者は此悲劇的結末によつて人生に何を暗示しようとしてゐるのだらうか。又夫の跡を追ふ「武藏野」の忍藻は、野獸の猛襲に逢つて非業の最後を遂げる。しかし、この戰場のいたましい習ひも矢張り人生なのだと作者は語らうとしてゐる。又、いちご姬は淫婦でもあらう。しかし、我々は初戀の幻を失つてやがてうつし心なく狂ひ行く彼女に、可憐なるオフイリヤを求める作者の傷心を忘れてはならない。

　卽ち斯の如く人生から悲しみをぬく主觀的傾向は紅葉の「二人比丘尼」などにも存在する青年らしい浪漫的偏倚性であつた。そして、是等藝術的哀話が、當時の淸新な形式に擁護されて悲哀小說の流行を生んだのであつた。そして以上の悲劇的構想を裏づける美妙の人生觀こそやがて彼の後の作を貫く一大基調となるのである。

　しかし、殘念ではあるが、美妙齋の小說は筆者が抽出した程彼の意圖が圓滿具足に表現されたものではなかつた。そこには數々の破綻が見えてゐた。その第一の破綻は、「女學雜誌」(廿一年九月)の指摘した如く花片を一枚一枚はぎとるが如くあまりに解剖的で總合大觀の美がないといふ事である。その第二は、不知庵のいふ「小說の主眼は情致なれば、波瀾照應脚色なかるべからず。著作は單にきれいのみで實なきは惡し。殊に「玉屋の塵」「仇を恩」の如きは小說に非ず說話なり。」といふ構想不備に關する點である。是は「武藏野」「いちご姬」等の時代に限らず、現代物にも共通する弊であるが、美妙齋は結末を突如として悲慘にすることによつて、悲劇的效果を狙はうとする態度が見えるのである。筋としてのまとまりをつけてゐない。つまり筋の變化はあるが統一がない。やがて悲劇に導かるべき動因も豫想も作の上に提示されてゐない。クライマックスさへ忘れられ勝なことがある。況や漸層的な構成(プロット)は全然見られないといつてよい位である。

故に、後年の作なる、「四郎高綱」「小宰相」「平重衡」等に至る歷史小說になると、題材が史實に近く、殊に「平重衡」(四十三年)の如きは、源平盛衰記をその儘襲つて合理化したものだけに讀者としては事件が豫想され、歷史物語として別な價値が見出されてゐるので、比較的右の缺點から救はれてゐる。

今、悲劇論を事新しく述べる要はないが、斯の如く、小說作法上から見た悲劇の認識不足から生ずる構想の不備によつて、美妙齋の先驅的な意圖すら正當に發現されず、筋を慘酷に終らしめて、當時の評家から、やがて、美妙は冷刻の作家也、同情心なき作家也と批評されるやうな原因を造つたことは疑はれない。

以上は、題材を過去にとつた初期作品の內重要性を帶びたものであるが、右の傾向は、現在に取材をとつたものにも看取される。もつとも、極く初期の作は試作時代で、所謂低調な戯作氣分が薇つてゐる。筋などより無駄口が多く、「風琴調一節」(未完)「情詩人」(未完)等にもその弊が認められる、が「さすがに雙紙」などにも「まだ出來たての若紳士。まだ出來たてですから餡が出るかも知れません。是は蒸菓子の話ですが」云々と落語家にも流行りさうもない饒舌を弄してゐる。と同時に、人物が、男なら文學者乃至詩人、學生、女なら女學校生徒といつた風に型が決つてゐた。それには、婦人雜誌「以良都女」を編輯してゐて、美妙齋の作には婦人の愛讀者が多いなどといふ評判があつたので、從つて題材などにも右の樣に特殊な階級を好んで扱つてゐたのではないかと考へられる。

飜案乃至コント風のものを除いて、とにかく彼の最初の世話小說といふべきものは、「都の花」初號から連載された「花車」であつた。

來間力造といふ、人力車を挽き乍ら苦學してゐる學生が已れの通學する東洋法律學校の敎師杉田の妹阿梅を或機會から知る。阿梅には三浪美佐雄といふ親の許した男がゐる。しかし、美佐雄はどうしてか阿梅の氣に入らず、力造が

やがて杉田家へ書生に來るやうになる。だが、扨阿梅と力造ともやつぱり緣なき衆生で終るだらうか。しかし、阿梅の親が此頃は力造を氣に入るやうになつた。と作者は結んでゐる。

彼の初期の作中、多少光明的な結末で終つてゐるのは此一篇のみである。「都の花」創刊號から卷頭を飾つて第九號まで連續した。筋に變化は尠いが、運びは穩當で、淡々たるものである。例によつて作者の說明辭がつきまとつて筋の流れを阻害してゐたり、作者最初の意氣込みが失せて、多少龍頭蛇尾の感がないではないが、美妙の作としては比較的無難で、といふことは一方、平凡な、調子の低いことをも意味してゐる。

「花車」はどちらかと云へば、一般世間に對するお目見得作であり、其點多少甘さをも加味し、彼の得意とする新描寫法を見せたといふに過ぎないが、美妙獨特の構想が世話物――現代物――に及んで來たのは、「花車」以後であつた。

「ぬれごろも」といふ作がある。玉潟圓夫婦は孤子阿露を救つて養女にしてゐたが、淸といふ實子が小學校の歸途支那人にさらはれて行方不明になつてから特に此の阿露を寵愛するやうになる。その內、圓は失職する。一方、淸は支那廣東で奴隷に賣られる。その賣られた主人といふのが强欲な男である。といふ筋で未完物であるが、此作で作者は所謂性格悲劇を意圖してゐるのではないかとも見られる。例へば、

畢竟阿露の性質は後に何うなりましやう、又阿露に此性質が有る爲に何樣な利害がありましやう。實に此性質が此小說の眼目です。(ぬれ衣三六頁)

等といつてゐる點に、本編の發展の契機があるのではないかと思ふ。

描寫としては、此編が美妙調の最高標準に達してゐて、美妙張りの名描寫が隨所に散見する。と同時に此後から多少筆が澁つて來てゐる。「都の花」には「花車」以後「金扣鈕」(未完)「此の子」(未完)をかいた。「國民之友」の後者の評に、

> 心理小說ではあるが、文章も以前より劣るといはれ、しかし、
> 雙の伸びんと欲するや先づ曲る、著者の筆硯澁滯支離の氣味ありて流暢の風趣を缺くは或は粗より密に化し、華美より澁きに移る途中なるやも計り難し。（國民の友五十二號）

云々と、好意的に批評され、成長性も期待されてゐた。かくして現れたのが、

新作十二番中「教師三昧」である。猿狹志保子といふ學校教師が同僚の女教師に誘惑されて次第に邪道に陷る。やがて清華女學校といふのに轉勤するが、全校擧げての淫風の爲に學校は閉鎖され、明日の職を得るのに途方にくれた志保子は、遂に演說會の講演者、實は賣女となつた。その結果、多額の收入で、親の眼をくらまし、又喜ばしもしたが、もとの學校の小使で自分と關係のあつた忠二といふのに、偶然尋ねられて、兩親や近處に包んでゐた化の皮がはがれ、手も足も出なくなり、やがて廿歲も餘程すぎた二十四の秋の頃、芝仲門前の學校小使の花嫁となり下つた。

「殆んど書き倦きた束髮のふしだら、旣に言文一致の小說には是が付き物のやうに言はれる處を、猶も迷執が殘つて浮かみ切れず、遂にこれを當世むすめ專門の作には絕筆ともする氣で、兎角は名殘りの墨を磨り止めました。」云々と卷末に辭つてある通り、此編には諷刺的暴露的意圖と寫實的手法とが混合してゐる。又、束髮を扱つたものではないが、「大恥辱」は、漁夫の娘阿浪が貧窮の爲、横濱のチャブ屋に賣られ一夜の客をとるやうになる。そして、外國人どつぴんの爪牙にかゝらうとするが、幸にして毒牙を逃れて大木といふ客に身を任すが、それとも飽氣なく別れる。未完物で、右までゞ中絕してゐる。

以上、二作は作家としての美妙齋の短處長處を極端に具顯したもので、どちらかと云へば非難が多かつた。

尚、時代小說に對する彼の小說觀と同じものが、此現代小說にも適用されると思ふ。即ち彼は悲劇に關心を持ちす

ぎたのである。と同時に悲惨なる事夫自身が悲劇的事件だといふ錯誤を冒してゐる事が多い。彼としては悲惨なる事實の方に、より大なる人生の眞實を求めたのである。もとより彼は作中の人物に同情、洞察力が皆無だつたのではない。後藤宙外の美妙論は優れた評論ではあるが、

（中略）美妙に至りては論じ罵り嘲るのみ。眞の涙もなく眞の笑顔もなし。（美妙紅葉露伴を評す）（風雲集）

と斷じてゐるのは、美妙の作の創作過程と歴史過程とを無視した論である。美妙は嘲罵するどころかかへつてその人物に、次第に道義的理想主義を奉ぜしめ、涙を帶びさせて來てゐるのである。

美妙は紅葉よりもつと人情の敗北を嘆く江戸つ子である。にも拘らず、その作が反對的性質を帶びるやうに見えたのは前述の悲劇の認識不足性によると共に彼も時代の子であつたからである。即ち描寫論で前述した如く彼の作法は、著しく寫實主義的手法であり、換言すれば、「小說神髓」の所謂描寫態度を完全に襲踏してゐるのに、夫は外形模寫であり、のみならず、彼の腦細胞は此模寫態度には頗る不適當に、箸一本の上げ下しにも理窟をつけずにはゐられない學者的乃至概念的緻密さをもつてゐるのである。

彼は、志保子も阿浪も其他も、救ふべからざる窮地に陥れてゐる。彼は、それを巧みに說明してゐる。解釋してゐる。そして最後に、「皆さん。世の中といふのはこんなものです」と說いてきかせようとしてゐる。然るに、彼は、その最後の切札を見せる前に、自らの說明、解釋に醉つてしまふのだ。可憐なる薄命の女性は、其一擧動毎に、作者の分析力の爲に寸斷されて仕舞ふ。從つて、讀者は描寫の推移に感動する前に、作者の煩瑣な說明に引張り廻されて、感動が途切れる。

再び宙外の言葉を借りる。

之を要するに美妙は細なれども描く能はずして論ずるの傾あり（美妙紅葉露伴を評す）

其點、彼は寫實的手法を學び乍ら、遂に描寫術を會得しなかつた不幸な作家であつた。そして此缺點は、後日の作にまで大なり小なり混入して、作の價値を低下せしめたのである。

此他、右の系統を引く構想に「みゝずばれ」「くされ緣」等がある。「みゝずばれ」の如きは、或財産家の母子が人にだまされて遂に生活にも困り擧句は醜い親子喧嘩でみゝずばれを作るといつた筋で、趣向としても可成り不愉快な運び方であり、「くされ緣」は仇同志の男女が同棲しようとしたが、其惡因緣が暴露した爲に女が自殺するといふ筋であるが、肝心のクライマックスが例によつて蛇尾に終り、讀者は拍子拔けがしてゐる。此の二作などは寫實的手法を知つて小說の構成術を考へない場合の齎す重大な缺點を示したものである。

故に前言の如く、人生の悲劇的解釋なり批評なりに、新人生觀を暗示するやうな、或は哲學的考察の加へられたる如き、主觀的基調が存在してゐたならば、――かの浪漫主義作家の如く――そこに又新文學が樹立されたであらうかも知れぬが、それは、江戸文學を基礎的教養におく彼には求めるよしもなかつたのである。そして、是等の悲慘小說は正當に理解せられずして、文壇的には廣津柳浪の所謂深刻小說程の名聲をもかち得なかつた。

だが、と同時に、我々としても、是迄の作の檢討によつて、美妙齋の有する作家的領域に或制限を附する必要を感じられるであらう。そして、此當時、彼が國文學者、例へば佐々木信綱氏、佐藤球氏等と往來し、且辭典編纂、考證其他學問事業に興味を持ち出したといふ事實も納得出來るであらう。

しかし、といつて彼は小說を捨てたのではない。否、更に一段の進展性を見せようとしてゐたのだ。

それは、美妙が、悲劇を事件中心から性格中心に移さうとした試みであつた。もつとも、同一性格内に起る二元的

葛藤を描き分けようとした試みは、「蝴蝶」や「ぬれごろも」等にも見られたが、概念的で、意圖だけは辿れるが成功したものとはいへなかつた。この葛藤を二性格に賦與して對立的效果を擧げ、特に一性格を強い線で描出したものが、「白玉蘭」(壯士) である。少壯政治家黑江徹は、北條の一葦樓で下婢阿島に心ひかれる。阿島の兄は、關源介といふ、さつぱりした氣性でしかも敎養の淺くない博徒である。徹は或朝不慮の災難で溺死しようとする處を此源介に救はれて舊知の如くなり、博徒らしくない兄の態度は、徹をして阿島に對する思慕を益〻熱烈ならしめる。二人は遂に戀仲となり、源介に許しを乞ふ。源介にして見れば、その戀は五分五分である。身分の懸隔は問題ではない。況やとがむべきではなかつたのだ。

やがて、徹、阿島は上京したが、それについて源介も東京に移る。そして壯士となる。且代議士選擧に奔走して徹を當選させる。が、彼の努力は空しい。徹は豹變して政府黨となり、政友を賣つて數千圓を得る。泣いて不條理を叫ぶ源介の氣持は彼に容れられずして源介は徹の下を去つた。翌朝徹は往來で暴漢の爲に危禍を負ひ、豫後捗々しからずして世を去つた。彼に正義の制裁を加へた暴漢とは源介である。しかし一方では恩義を思ひ、人情にせめられた彼は、その儘鐵路に我身を横たへた。そして阿島だけが人生の愁嘆を擔へと許り獨り此の世に殘されたのである。

此作によつて「社會小說」といふ言葉が始めて評壇で云はれた。(云ふまでもないが、社會小說に理論的解釋を與へたのは、此翌年「文學一班」であり、それが作品行動化したのは三十年以後である。但し、社會主義小說とは異なる) まづ題材の範圍が著しく擴張された。そして彼のものとしては描寫に廻り道の尠い佳作であつた。嘗て流行つた政治小說からぬき出てゐる點は、此作には或信念を有する人間が出て來てゐる事である。主人公は、露伴氏の人物の如き氣魄を有してゐないとしても、そして一方餘りに人間的な弱みを有してゐる爲に、最後は埋れ果てゝしまふ男であると

しても、ある理想を以て生きようと努力する男であつた。主人公源介は、徹の當選祝賀の宴に、如何に正義の尊きかを絶叫する熱情家であり、徹の非理を知つて、わが不明を泣いて恥ぢる殉情の徒である。その後に彼のとつた不法行爲は、止むに止まれずして生じた聰明な行動ではなく、無思慮なものではあつたが、とにかくその死がそれを償つてゐる。又もとより、此作の悲劇的構成は、今迄述べて來た諸作のそれより一歩の進歩をも見せてゐない事も事實ではあるが、しかし、美妙齋が、或道義觀を主人公に與へた。然るにその道義が現實の世間に於ては崩れ行かずにゐない。その悲劇の根本性質を捕へた處に、在來の樣な單なる悲慘事實へとのみプロットを運んだものとは、雲泥の差が生じゐるのである。

此の道義觀を愛する故に、友への然諾を重んじて頼朝に一矢酬ひようとする「小杉直茂」の武士氣質を描き、此道義を求むる故に、今や正義觀の地を拂つて失せたる上層社會に眼を背け、世俗の指彈する下層社會、暗黑社會に題材をとらへるやうになつたのである。

「しゞみうり」といひ「閻魔地藏」「惡の善」「馬丁仙吉」といひ、すべてがさつな社會の人ながら、その根本に人情に泣き義侠に勇む人間が行方を失つた眞實を求めようとしてゐるのである。

但し、以上述べた道義觀なるものが、如何なる程度のものであるかを考へると、それは甚しく保守的たるを免れない。江戸時代に作り上げられた道德意識乃至侠客氣質を一歩も出ない道義觀で、勿論新時代の先驅的意見とは考へられない。

美妙が文壇的に復活したのは、しかし、「白玉蘭」からではなかつた。二十八年諸雜誌發刊の盛運に際して、文藝倶樂部四月に載せた

「阿千代」からである。特に「國民之友」は彼を賞めた。

「美妙齋蘇れり」と是久しく文界に沈默したりし美妙齋の新作「阿千代」をよみしものの均しく唱言する所。由來美妙齋は作家林中の美術家なりき。血なき涙なき人物を描き來つて之を冷罵すること宛も手を舉げて傀儡を撃つの觀なくんばあらざりき。（中略）獨り新作「阿千代」に至つては作者の同情往々にして美術を超脱し、人物をして躍如たらしむ。蓋し反情は常に人を殺して亦自らを殺し、同情は常に人を活かして亦自らを生かす。美妙齋の嚮に死するや、其反情に死するなり。その今蘇るや同情に蘇るなり云々。（卅八年六月八面樓）

と潮處子は妙處をあげ極力讃嘆してゐるが、これは別に美妙の創作態度に進展變化を見せた作とは思はれぬ。たゞ、題材が花柳を背景としてゐるのと、不幸な孤子が次第に榮達して行くといふ構想が、彼の今迄より新奇でもあり、又同情的に扱つてゐるともとれたのであらう。

かくして、かゝる世話人情的構想の作、「鰻旦那」「しゞみうり」「里見元勝」（時代物）「可憐狂」が好評を博しつゝ續けられたが、

「可憐狂」に至つて毀譽相半ばし出した。作波令三の妾阿今は藝者時代からの情人市助といふ役者と深い仲なることが露顯し、實家に歸されたが、市助に諫められ、令三の許に歸らうとするが許されぬ。阿今の父は遂に發狂する。しかし、市助の誠心天に屆いて阿今は許され父は快癒するといふ筋だが、之が先づ「おぢさん草」の槍玉に上つた。

留つたおぢいさん。何でエ、此作者は。イヤ閻魔地藏で候の、孫右衛門で候の、イヤ可憐狂だの、かりん糖だのッて、題は幾ら違へても、皆ンな己ッちの言つた事をまんべんなく書いて居るばかりぢやねエか。是れでも作者か。ンだ、ちッ、ベツ、ぷッ（下略）（雲中語）

最後の三四語は、美妙の會話に絶えず出て來る感投詞をそのまゝ襲用したもので、此他に、俳優尾上某、懷疑家、結構人、識者等の合評があつて、作中の人物及び修辭上の非難が發せられてゐる。又、「國民之友」の浩々歌客は、筆力あつて性靈なき結果、讀者をして情感を冷殺せしめんとする傾向ありといひ、「孫右衛門」評に於て要するに美妙は擧止を觀察するのみで自家の性情と連結する性靈がない。「惜むべし、作者年來の閲歷は其性靈の泉を乾涸して唯空しく當年の筆力を爛熟の境に運ぶのみ」と、かなり致命的な斷定をさへ下してゐる。「青年文」は好意的な評ではあるが、それでも、彼が眞義俠を內に抱かずして強ひて筆端にのみ勁烈を衒ふ。又、文章を耳できくものと誤解し、いとふべき音符、而も不自然ともいふべき文字多くして讀者の感興を破る事を指摘した。獨り、藻辭を惜まなかつたのは「帝國文學」の桂月で、人間を寫した小說としては、柳浪と相並んで成功し、悔悟を具體的に說明せるのみにても、美妙齋が「可憐狂」は世界の文壇に持出しても決して恥しからぬ傑作也と、稍々脫線的に賞めたててゐる。しかし、此處に至つて、美妙の作家的才能は決定され、且、文壇を背景とする文學史的存在は殆んど終末に近づいたといつても過言ではない。

だが、彼は其筋をめでたし／＼に代へた以外に何等の成長をなしてゐないのであらうか。

筆者は、決定論を信ずるが故に、そこに如何なる飛躍が行はれようとも、凡人が天才に變化したり、彼が背負つてゐる弱點が突然消滅しようとは考へられない。故にこそ、美妙の既往作品の製作過程に、現在の藝術意識の下では容認し難い點あるを知つて、批評に或重大な制限を附したのである。美妙復活せりと歡喜した諸家は、にも拘らずその缺點を忘れたるが故に、失望した。而も作家として不幸なる美妙は、その作家的意圖が、常に不純であるらしく考へられてさへ仕舞つたのである。

だが、阿今は、よしそれが情痴であらうとも、戀愛の前には我を忘れて跪く女である。わが戀が、不義であらうとは信じないが、しかし、もし罪ならばその鞭をうけようと覺悟を忘れない女であつた。

これに對立する市助は、世間の常識を一歩も出ない男であるが、阿今の父の悲しみを助けたい許りにわが戀を諦める。又、女に諦めよともいふ。もつとも葛藤は、阿今の意地から、バラリと解ける。しかし、旦那である令三の心の解けない爲に空しく家に引込んでゐる阿今親子に對する友誼を斷たずして、市助は甲斐々々しく面倒を見る。しかし二人は既に以前の戀人ではない。それとなく二人を許さうとする父に向つて、こんな役者にも意地があります。市助は淋しく云放つ。かくして新しき悲しみが一家を蔽つて父は發狂する。

此作は、桂月のいふやうな「後悔」が主要部分ではない。その中心は愛欲と義理との對立が父の發狂を齎すといふ點である。

但し、本作は、構想の上から見ると、前の四五作に引摺られて、殊更に蛇足をつけて大團圓とした傾きがあつて、失敗してゐる。

一年許り前ではあるが稻舟合作と傳へらるゝ(實は殆んど美妙の作)**「峯の殘月」**も同巧異曲であつて、敵同志の子女が戀愛に陷る。娘の悲戀を見るに見兼ねて、しかしどうともする事の出來ぬ父は、娘を見殺しにしつゝ發狂するといふ筋で、今樣ロミオジュリエットといふ評を「めざまし草」あたりからも得た佳作の一であるが、此作も「後の殘月」を連續せしめるに至つて、プロットを全然破壞して徒らに大甘物にこね上げてしまつて世評芳しくなかつた。

これ等によつて見ると、美妙には甘物は不適當らしく見える。そして悲劇作家としての手腕を備へてゐることは疑

はれない。

又、事實此後二三作を除いて、殆んど最後まで、新しく生れた特殊傾向を除く外は、すべて悲劇的題材に終始したのである。

卅一年以降は卅五六年までは、美妙は主として題材をその興味を有する事局談にとつてゐる。「嗚呼廣丙號」「帝國海軍」「女裝の探偵」「桃色絹」「あざなるど」「漁隊の遠征」等、そこには、自由獨立を叫ぶフイリッピン志士、國家を熱愛する愛國の志士の行動が記錄されてゐるが、例によつての說明癖が復活して益〻强くなつて事件そのものゝ發展が非常に障害されてゐる。但し「嗚呼廣丙號」「女裝の探偵」「桃色絹」は文壇の問題にはならなかつたが優れた時事小說であつた。所謂實話文學の體をなしてゐる。

「嗚呼廣丙號」　は、はしがきにもあるやうに、作者の又ぎきの話であるが、文章も簡潔で美妙の作品中では小さいものながらも佳品と稱せられてゐる。發表當時も評判がよかつた。

「女裝の探偵」　は毒殺されたとかしないとか當時新聞紙上で問題になつた阿部某を中心とした作で、矢部道任が女裝して朝鮮に入り、或は煙草賣となつて戰線に潜入して敵狀を偵察し、幾度か死生を潜る波瀾重疊の一生を、今迄になく簡潔な筆で息もつがせず讀ませる。前後二冊で、主人公の愛國的熱情に思想的背景を伴はぬ怨みがあり、多少講談的な缺點はあるとしても、作者としてこれだけ型を崩せば、又說話文學なり大衆文學なりへの進出が豫想出來るものを、是以外の作は、再び美妙の所謂藝術意識、實をいへば分析意識に墮してしまつてゐる。

「桃色絹」　はフイリッピン獨立陰謀の志士グレゴリオ・ピラアルと當の敵たるスペイン官吏レムウダの娘ドロレスとの哀話が經となり、それに附隨した戰亂の經過が緯となり、最後にピラアルの奮戰、その致命的銃創の個所を少女

ドロレスの與へたる桃色の手吊で縊へて死んだ。その事が、新聞紙上に報道された時、今は故國スペインに戰塵を避れてゐるドロレスが人知れず泣きふしたといふ結末になつてゐる。前半ピラアルとドロレスとの對話は、くどく、且說明的で冗漫であるが、後半に至つて筆力がしまり、殊にピラアルの最後を蔭にしたことは、此作の悲劇的效果に多大の貢獻をなしてゐる。尚、美妙には、

「吁工女・吁薄命」（「阿修羅道」改題）といふ注目すべき作がある。「人民新聞」三十六年三月から五月まで及び六月から七月まで前後篇に亙つてゐる。阿絹といふ處女が紡織工場の女工となり、悲慘な待遇に苦しめられてゐる許りではなく、社長の慾情の犧牲にならうとする處を、その息に救はれて、現在の境遇を語るといふ筋である。創作の動機はその「はしがき」にあるやうなことである。美妙が王子に轉居してから、女工生活を眼のあたりに知つて筆をとつたらしい。此當時の美妙は古風な封建思想の持主ではあつたけれど、その範圍内に於いては正義觀に對しては甚だ潔癖であつたらしい。日露戰爭當時トルストイの非戰論が平民新聞に載つた。その平民新聞の切拔きを大切に保存したり、かうした資本家に對して憎惡を向けたり、とにかく一つの氣慨を示してゐる。

此小說は未完であるらしい。本集に採錄した本文は美妙自身が新聞の切拔を保存してゐたので、その切拔帳に據つたのである。部分的に朱筆で訂正加筆された個所があるが、それは改めた方を採つた。「はしがき」は發表當時になかつた。後に美妙が綴ぢる際（恐らく刊行する意志があつたのであらう）、その表紙に毛筆でかきつけたのである。從つて、題名も美妙の意志を尊重して「阿修羅道」をやめて「吁工女吁薄命」と改めた。

美妙はあらゆる點に不滿を感じ、その缺點を指摘し得た才人であつた故に、そのどの不滿をも滿足せしめ得なかつた不幸者であつたが、その一例に此作品を舉げ得るであらう。こゝに倣らうとした美妙の意圖は明白に前述の平民新

聞の主張と近似性を有してゐるが、遂に平民新聞の理論と感情とへは發展しなかつた。彼が思ひつきやと謂はれても仕方がないのも、此不徹底さにもよるのである。

これ等の力作以後、美妙の作は歴史小說と滑稽小說との二方面に分れた事は、かつて述べたが、後期の歴史小說は、前期の時代小說と異なつてかなり史實に準據し、出典、有職故實等の穿鑿が行き屆いてゐる。是等は大抵短篇で殆んど「美妙叢書」中に收められた。佐々木一家の末路、小宰相局等があるが、これに就ては柳田泉氏が既に述べられてゐるから省略する。

美妙の最後の傑作は、「平重衡」及び「平清盛」であつた。是は歴史小說解題に讓るが、是等二作に於て、始めて完成されたる悲劇的歴史小說の典型を見るのである。それは「いちご姫」「誠に憂世」「佐々木經高」等に現れた、構想の不統一、暗示力を有せざる悲慘なる破滅（カタストロフィ）の缺點から脫した、小說技巧の圓熟を語る記念塔であつた。よし、此作が當時の文壇現象とは何等の交涉のないものであつたとしても、此作故に明治歴史小說は、かなり高い水準に迄上つたらうと思ふ。

尙、美妙齋には未だ此他に、「ばけぐすり」「妙な術」「妙な依賴」等、滑稽小說がある。所謂ユウモア文學の一種で意圖としては面白いものであるが、殘念乍ら美妙齋からヒユマアを求めることは出來なかつた。滑稽に最も禁物な理窟が入る。例へば「妙な夫婦」の畦墻（うねくね）ねぢ子、芋蟲ころ子などといふ名前だけは可笑しいが、內容は惡巫山戲を一步も出ない要するに理に落ちた高等落語にすぎなかつた。

以上、大體美妙齋の小說の長短功罪を論じて來た。最後に、彼の晩年の作と文壇現象との關係に就いて一言して置

きたい。

「平重衡」「平清盛」が佳作なるに拘らず、文壇的に顧慮せられなかつたといふ事實は、作者自身の文壇的失脚や發行書肆の關係等が預つて力あつたかも知れぬ。が、それ以外にその小說自身に、既に時代から取殘された古い形を有してゐた事が大きい理由である。

人間の感情、そして心の中に芽ぐみゆく人生の認識方向は、その人間の環境によつて決定される、といふ立論は一方多分の不滿を有するが、美妙齋の小說創作過程について論ずる場合に、その妥當性を認められるのである。その一例に文學的教養を數へる事が出來る。

明治元年は美妙齋を此世に送り出すと共に、浪漫主義者北村透谷をも出してゐる。同時代の人にして此著しき對比をなす所以は、單に生活條件による差、或は、一方は消極的他は戰鬪的性格である故に生ずる差異によつてのみではない。

そこには教養の差、影響作家の差が重要な因子となるであらう。一方は馬琴、三馬、一九に心醉した時代を通り、他は戲作者をば遊戲文學者と罵る心境を通つてきてゐる。

美妙齋は馬琴のプロットを破壞した。その間だけ彼の進步があつた。しかし、その理想主義が、馬琴のそれの踏襲の結果であり、それを垢ぬけさせたものに過ぎなくなると、彼は次第に後退するやうになつた。その人情主義的人生觀は、所謂男女間の情、世俗的な道德意識に一步新解釋を與へた程度のものであつた。加ふるに、彼はその將來を最も決定し易い青春時代に、文學的影響を外國文學から受けたとはいへ、それは多く準古典ともいふべき傳奇的作品であつた。そこに二葉亭や、文學界一派の人々と違つた文學的教養を見出すのである。

そして、彼は江戸文學の精神と外國文學の形式とを調和せしめた殊勳者ではあるが、よし、捲土重來の意氣を以て文壇に歸つた處で、そして彼としては完成せる作を發表したとしても、既に夫等は新興文壇にとつてはもはや遙かなる過去に屬する古い觀念のものに過ぎなかつた。

これは美妙のみに限らなかつた。紅葉にせよ、眉山にせよ、硯友社派卽ち人情派の人々は、卅年近くになると、現實認識の差異から生じた作品上の思想的缺陷を自ら認めながら、如何ともする能はざる苦慮を感じるやうになつて來てゐる。その點早く死んだ紅葉は最も幸福であり、殘つた眉山、美妙は最も不幸であつた。

しかし、美妙の明治初期小說界に於ける、構想及び文章上の革新運動を忘れて明治文學史を語ることは出來ない。又、彼の個性と結びつく事によつて多少の偏倚は生じたとしても、その人情哲學は在來の人情觀の最終決算となつて現れてゐる。そして、その人情を歷史小說に與へて主人公に二元的葛藤を賦與し、そこに稍々近代性を暗示した點が歷史小說の新使命となつたことも忘れる事が出來ぬ。

そして、美妙個人としての文學的業績を辿る時、吾人は彼の一生を聯想して最もふさはしく感じられるのは、悲劇小說作家としての美妙であらう。

まことに、美妙は最後まで悲劇小說の開拓に努力した。そしてその悲劇は前述の如く次第に個人的偏見から普遍的實在へと成長した。最大の悲劇作家といへないまでも、明治に於ける最も純粹な悲劇作家といふ事は出來ようと思ふ。

嫁入り支度に　教師三昧

第一　親の慈悲

どの人の腹にやどつてどの國の民となるのも元偶然、醜美どちらかに面形が固まり着くのも好き好んで籤を引いたわけでも無し、それも亦偶然です。好みに任せて籤を引かせ、注文どほりにして呉れる事新聞でよく見る傳授廣告のやうならば人界はまるで小町、業平、くれおばとら、たつその巣となつて、はてはたまに不思議な籤をとりどつた無鹽や滿祐が却つて時を得て寫眞の種板いくたび燒かせるか知れず、つまりは無いものねだりの人心、世にまれな獅子鼻、柘榴口、乃至籔にらみ、三口に至るまでを逆さまに珍重して美艷だと言ひかねぬわけ、世界もかうなれば面白いものです。面白いが、さう行かぬ、行かぬところで美も有れば醜もあり、强ひて言へば人三化七かならずしも一人の造作に限らず、十人の中九人は醜人、思へば偶然と言ふのも些と變です。元偶然が命なら醜人の珍らしがられた時代も有つた譯、が、しかし歷史はそれを取り落として、美貌は兎角に少ない、そも〱これは何たる因果、佛說もすなはち生きます。それも男ならまだ兎に角、なまじひに平均かけられて人間の花とか言はれる女と生まれていかゞな面形、蝦蟇の背よりも玉蟲の羽を持てはやす世の中につひ疎まれるとは無情ないたり、可愛さうに纖弱きはまる腕をふるッて顏の缺點つぐなふ手柄を爲なければ夫らしい夫も持てず、よし破れ鍋に閉ぢ蓋、切ッて押しつけたやうな夫婦が出來て、取り膳の一つ丼に對の箸を入れる睦ましさが出來たにしろ、やゝともすれば女の頭は兎角重くて持ち上らず、一朝氣まづく爲れば何より先にまづ言はれるのは顏の造作、

人の力で仕方の無いものを攻撃の種にしてやれ香物鉢とか、おこぜとか、亭主一人が聖人同樣とはさて〳〵片手落としの至りです。世間にその例の有るのを見るにつけ、あはれわが娘はどうかしてやりたいが親々の慈悲心、出來る事なら、產む時どんな曲でもしてやッた物を、それが叶はぬ事とて娘の志保子にことし十八歲の妙齡を學校の寄宿舍で過ごさせました。

志保子といふのは猿狹なにがしの娘、一人子の常とて兩親は千金にも易へられぬ思ひ、舐めぬばかりにして育てました。慾目が九分どほりは手傳ふもの〻、それながら如何なる因果か、娘はすこぶる付きの醜婦、親がつひ頑固できせなかッた疱瘡の痕がこの子死ぬまでの商標にこびり付いて、そして旨いものばかり食はせる所爲か、身長は橫に伸びました。甲高の人形足、赤大根見たやうな手、餘處なら知らず、まづ日本では賣れのわるい方、あ〻この子が碌なものを亭主に持てぬかと思ふと親の身は骨身が寸々にむしられました。まづ不具では無い。と言ふだけ、哀れな辯護を思ひやりの種として、いとゞ可愛さも增して、それでも出來るだけと化粧品の買ひ集めには親父が寢酒の代をも擲ついきほひでした。不思議に何處にか平均は有るもので親の目からは餘程見あげる娘の怜悧しさ、學問も好きといふ處から成る程と夫婦は相談して七つの頃から學校に入れました。よくおぼえる、褒美を取る、試驗成績表がまはッて來るたびに親は食が咽喉につかへるやうな心持ち、これを發達させて女教師にし、押しも押されもせぬやうにしたいが念願で、わが娘のため親が飛んだ俄の活眼となり、古說を持ち出して冷笑ふ親類を時勢不通の明きめくらと罵しり飛ばして高等の女學校をやうやく卒業させました。

家は有りあまる方でも無く、月二十五圓か三十圓が精一杯の收入、ぐづ〳〵すれば所得稅も出なくなる身分、志保子が女教師に拜命したときの騷ぎはまるで年代記物でした。さすがに學業に至ッては親が自慢するとほりと見えて、卒業以後二月とた〻ぬ間に十五圓支給の辭令書

が降ッて來て、まだ金は取らぬもの丶十五圓に親のかせぎの三十圓、あはせて四十五圓のあッぱれ收入！神か、佛か、夢では無いか？　穴の明くほど娘を見ればやはりわが產み出したに違ひの無い人間、人間で、女で——あゝ子は持つべきもの！錢を掛けたのは忘れて、よく覺えてくれたと悅ぶのが親ごゝろ、金を受け取らぬ先から早前いはひと無理に望みを言はせて髮かざり、着物の數々、買ひとゝのへに奔走する心もちはそれ玄の又玄、夢のまた夢。

辭令書を受け取ッた夜は祝びに近所の料理屋から肴二三種まで取り寄せて水入らずの親子三人、洋燈まですりみがいてわらひさゞめく其たのしさ、娘を其處へ置いて二親がかはるがはる未來の望みを言ひ聞かせました。

「これだッても御前も最う十八、相應な相手さへ有れば緣を組んでも早くは無いが、ついではかねても言ふとほり、男は兎角女を邪見にしたがるもので、ことさら御前なんぞ、まア腕に藝があるからまづまごつか無い方だけれど……」、親子の間がらながら言ひかねぬ處はやはり心勞、あとを母が受け取るやいなや訓示の條々はたてつゞけでした。つまるところは家に是ぞと言ッて志保子の肩身をひろくさせる程の資產も無いこと、御前がよく稼いで金を溜め、それを資本に婿を呼ぶか、嫁に行けとの事でした。あッぱれ親として子のために計る點から言へば有りがた淚もこぼれる訓戒、たゞ敎員となる目的が金をためるにあるといふ段は生徒に取ッてさても有りがた過ぎた言葉。

いざ今日から學校へ出るとなる、その朝は平生寐坊の母親が四時の薄くらがりにさへ目を覺ました程の勢、心に掛けて買ッて置いた里芋の煮ころがし、志保子が嫌ひとは知りながら親芋で賞でたいから一つでも御食べとばかり、何かにつけての氣苦勞心痛、三世相を取り出して、又志保子に攻擊されるのも厭はず、西が明きの方だから其方から踏み出して行けとまで。わるく强情でも無いたちとて志保子も笑ッて立ち出る姿、見送る母の目は淚で

一杯。

母が下女になッて走りづかひして呼んで來た人力車に乘ッて威勢よく志保子は學校に行きました。校長に逢ッて宜しくたのみ、教師のこらずに紹介されて顏から火が出るこゝろもち、教場へ出るとかねて思ひさだめたものゝどッきりと胸は搏ちました。居ながれた生徒はいづれも十四五から十六七の女の子、何かにや／＼笑ッてひそひそ囁いて居ました。

まづどうかかうか其日を過ぐしてそれから毎日通勤をおこたらず、身をつゝしんで下から出ることゝて一同に可愛がられ、生徒にも慕はれるやうなれば、楚囚の思ひであッた學校もむしろ故郷のやうに爲り、一月二月とたつうちには課業が終ッても間々教員室に居殘ッて四方山のはなしを爲て舌を研ぐ稽古をさへ爲るやうに爲ッた、これがそも／＼身の落ちるはじめでした。

鬼も十七、其年頃となれば其年頃の心とも爲るもの、さすがに志保子も世の人情の味ひも斯うあゝと想像し始めました。つら／＼考へれば月給は十五圓、殘らず溜めたところが一年わづかに百八十圓、その百八十圓すら溜める迄には――溜めて婿を取るまでには――少なくも一年は掛る譯、一年たてば年は十九、それすら直にいゝ相手が見付かるか何うか分からぬ話し、さても待遠しいと始めて邪道に足一足。仲間の男教師の風采も目にうかぶ、松井さんは色がくろい、冬田さんは齒がきたない、やれ誰はあゝ、彼は斯うとそれでも流石に人形食ひ、取捨撰擇に心をけがし、はづかしめて常住坐臥その物思ひばかり、そも／＼聞いた道學の講義は腦の何處にかくれた事か？　いつか母の目にとまる迄に言葉つきまで色ふかく、二本か三本の帶を取ッかへ引きかへ、果ては御坊ちやん我儘が增長して二月食はずに居なければ爲らぬ繻珍の帶地の三十圓、それでごり／＼腰をしめたいと言い出す、爲らぬと止められると水出しの河豚のやうに脹れて、「ようムいます、そんなら仕方が無いから丸帶の小柳を半分に引ッ裂いて在切れを買ッて二本にしましやうよ、」と

の難題、つまるところは大小言でした。却ッて自分が稼ぐと思ふ所爲か只の親がゝりの時よりは家內がもめる、何ぞと言ふと生きるの死ぬのと親をおどしてぺろりと舌を出す始末、誰に教はッた癖かと言へば女教師仲間の羽田富江が唯一の先生でした。

　生徒が歸ッたところで老年の教員どもは早く直に家へ急ぐものゝ、外の若教師の氣榮ものは何れも其儘教員室に居殘ッて男女打ちまじッての天下無し。たゞでは面白く無いと阿彌陀で間食の料をこしらへ、いつも小使こきつかッてやゝもすれば夕方ごろまで。中で志保子と相口になッたのは前に言ッた富江でした。この富江と云ふのは九州なまりの有る婦人、人に話しをする時いつも否に目をねむる、それが志保子の氣に入りました。教科書の下調べは忘れるともつひぞ携帶を忘れなかッた懷中鏡、雲隱へ入るとか、人が居ないとかの折には手早く出して顏をうつして目をねむッて見れば如何さま意氣、習練經驗相待ッて天晴れ眞似も仕上がりました。一ついゝと思ふと外の事もよく見えて、こッてりと白粉をつける富江の眞似もして見たく、中本通の富江の眞似もして見たく、新聞の廣告ほかに見るところは無く、只あさるのは化粧品の新製、または親にかくすことゝてそッと新道の貸本屋へもぐり込み、恐ろしく高い見料をはらッて、その癖何の子細か其本を家へ持ッても歸らず、其場で寫し取ることも度々でした。いよ〱修業が積んでくると往來あるくにも理髮所の姿見が何より戀しくなり、大本を見るふりして其蔭に小さな本を忍ばせる術が次第に熟し、したがッて眠りについても夜寐られぬなどゝいふ事が多くなりました。罪の無い母は只心配、死なれたら何うしやうが先に立ッて、ひそかに葭簀張の蔭で算木をくらせて娘の運をうらなはせる程、やがて兎角の內に半年も立ちました。

　富江も尋ねて來てあそぶ、可愛い娘の朋輩と思へば親は目面をつかんで何しろ若いものゝ食辛抱、食傷させるほど馳走して、さて猫をかぶッて例のとほり目をねむる

鷹揚のところにだまされて娘の無二の朋友と見上げもしました。可なり家庭は厳しいものゝ、富江からの手紙とあれば親も開封せずまた手紙の子細も問はぬ、その内に不思議や毎日學校で顔を見合ふくせに富江から手紙が度々來るやうになりました。

　あやしいと思ッて志保子が居ぬとき、其手紙を開封して見ると何だかわからぬ横文字で書いて有りました。その内に志保子も歸ッて來る……

「富江さんから手紙が來たよ、」と母が。

「おや左樣」と言ッたまゝ直に見もせずに自分の机に志保子は持ッて行きかけました。

「横文字だねェ、」にやりと笑ッて、「何だッてへの？」

「何？　これ？」

「あゝ、用は。」

「用？　うゝ是の？　あたしや又何かと思ッたわ。すわんぼくせん　ぶりひ　ら　ぶらんぬの作ッたばらふすきいといふもの」（空おそろしい出鱈目を）。

「ちッとも分かりや爲ない。何？　も、一遍。」

「ほゝゝ否だわおッかさん、」竪板に水の早言で、「すわんぼ　きるん　ぶッちやア　ぶッちやア。」

出任せゆゑ前は忘れて再度の出鱈目、無殘、母にはやッぱり分からず。

「飜譯？」

「あゝ飜譯。」すました樣は貫目千斤。

「をかしいぢや無いか、毎日學校で逢ふものを家へ手紙でよこすなんて。」

「そりやアいゝぢや無いか、おッかさん、」たちまち居丈高になり、「どうしたッて。」

「どうしたッていゝが、迚も學校で逢ふものなら。」

「だッて急の事だもの。」

「なぜ急なの？」

志保子は火のやうに燃え立ちました。泣き聲になッて、

「うッとしいぢや無いか、まア。いゝぢや無いか、富江さ

んから來た手紙なら。」
　氣が付いて手早く郵便の消印の處を引ッ裂いて口で嚙んで仕舞ひました。
　母はよほど不審と思ッたと見えて、
「その狀袋を御見せ。おや御前裂いちまッたね、消印を。消印には市ヶ谷とあッたよ、たしか。富江さんは本鄕ぢや無いか。」
「本鄕さ。」
「市ヶ谷ッてへのは。」
「なァに本鄕さ。」
「いゝえ市ヶ谷。」
「本鄕。」
　けれど水掛け論、母は溜め息をつきました。
「そりやァ何方でもいゝが、ね、これ大きな聲では見ッとも無いが、御前も嫁入り前だらう……」
「さう…さ。」ふとい聲。
「何でも親は氣をつけて、爲を思ふからやかましく言ふんだが……」
「…………」しぢくり、まぢくり。
「嫁入り前は大事だよ。」
　ぎろりと見上げて、
「そりや分かッてらァね、言はれずとも。だけれど、何だッて今あらたまッてそンなことを言ふんだらう。人、變でなりやしない。」
「だッて御前のためを思ッて。」
「爲を思ッたッて何だッて、無教育のあたしぢやあるまいし…それに第一親だッて何だッて人の信書權を害するッてへことが有るもんか。そんなに可笑しく思ふなら明日ッからあたしや學校へ出やしない。」
「またそんな馬鹿言ふさ。子供見たやうな。」
「どうせ子供見たやうだよ。」
　氣はよくても流石に人間、母もほとんど忌々しく.
「ぢやァいゝよそれで。もう何とも言やァしない。」
　つと立ッて母は臺所へ行き、これもふくれ返ッて拵ら

へ掛けた茄子の皮を剝きはじめました。跡に志保子は手持ち無沙汰、意地であやまるのも否、二疊ばかりの書齋へはいるや否や、裂けるかと思ふほど顏をしかめ、肱突きを取るより早くいやと言ふほど疊へたゝきつけて

「ちエッ！死んでしまふぞ！」

こちらではまた母がひとり言、

「見やがれ恩知らず！」

第二　清華へ宙乘り

骨肉の間の我儘喧嘩は正に酸氣の多い葡萄、舌ざはりは一寸するどいものゝさすがに旨く無くも無い其味はまた格別のものとか。休戚相因る間から何の揉む處も無い、そこで唯心安だてが村氣を起して言ひ過ぎたり、爲過ぎたり、さていざとなる段になッては口と心とは更に似ず、爲はじめは脫兎で直り口は處女、それこそ最初は、親は入れ齒を噛み折ッても、子はまた未來を擲ッてもと息まき荒く取りかゝッて、まづ御互にだんまりむッつり、間(たま)に言葉がぶつかれば火の出るやうな突樫貪、まづは勇ましい仕打に於て一點も申し分は無いものゝ、さて御互に口を利かなければ淋しく、いくらか後悔の心も起れば、世間ばなしが機會(しほ)でたちまちの和議親睦、跡は雨降ッて地もかたまり、前にもまして親しみ深く、愛情の和氣がそれから蒸しに蒸します。

志保子と母との間がらも同じく此とほりでした。兎角一日二日たつ内に無言の辛抱も飽きて來て、父が勸めに出た留守となれば淋しさはます／＼加はる、さすがに母は母の氣ぐらゐとてわるく下から出て口を切り出すのは否、子は子の意地とて世慣れぬ身が惡くはにかむ、まづは言葉のかはしぞめは獨言のみでした。「あゝいゝ天氣だ」と一人が言ふ、すこし程經て「雲も無い」と一人が言ふ、「風が出た」と一人が言ふ、「葉が落ちた」と一人が言ふ、一人は問ふやうな、問はぬやうな、又一人は答へるやうな、こたへぬやうな、やがて言葉と言葉と近よらぬやうにしていつか近寄る、應答や挨拶がやがていつし

か成り立ちました。既に斯うなれば早占めたもの、昨日「死んでしまふ」と言ッた人は別人となッて何處を風、相變はらず學校へ出掛けました。

不思議なことには母と志保子とかう喧嘩してからこのかた富江孃からの手紙がぱッたり止りました。今までに隔日ぐらゐに來た手紙が堰をふさいだやうに爲ッた、さりとは奇怪きはまるはなし。しかし志保子の神色はいつも平等。たゞ學校の居殘りと夜おそくなッて歸ることゝは相變はらず、何で學校に居殘るかと聞けば下しらべのためとの事でした。

ある日志保子はいつもに似げなく、午後三時ごろ早くも學校から歸ッて來て母に向ふより早くさも苦勞といふ體で、朋輩の富江が突然に免職されたと話しました。

「どうしてねエ、あんな善さゝうな人が、」母も思ひかねた體でした。

「なに子細が有るンだとさ、人は見掛けによらないのねエ、富江さんは、阿母さん、不品行なんだッて。」

「不品行？男でもこしらへたの？」

「さうだッて、あんな一寸人好きのする顔だもんだから、相手と言ふのは分からないけど、何でもいゝ人ぢや無いンだらう。校長がたしかに突き止めたもんで、それから直——と、まア表向きはさうなんだが、ね、實は、斯うなンだッてさ校長が富江さんを引ッ張ッて彈かれたンだッて。」

「ぢやア富江さんに不品行は？」

「本當は無いのだッて。あの學校にはよくあンな事が有ッて、先に何とかいふ裁縫の女教師もあの校長さんと變だとか何とかで何だか免職になッたとか言ふのよ。本當、うそぢや無くッて。あたしや否ンなッちまッたわ、そんな不品行な學校、あたしや辭職しやうかと思ふわ。」

「辭職したッて行く先きが有るまい、」母は先〇の苦勞。

「いゝえ、ね、實は些し前からあたしも心掛けて居たの。清華女學校と言ふのが橋の處にあるのねエ、あすこ、

あすこの校長は大宮靜子と言ッて有名な人なの。こなひだ一寸行ッて見たら姿をやとひたいッて、月給十八圓出すッてさ。女校長なら不道德の心配も無いのねェ、それに三圓だッて取り得だわ。」

何やらうまく說き付けました。母も心はやゝ動く、父も歸ッて來て聞いてこれも同じく、其間こゝぞと力を籠め拔いて且辯護、かつ煽動する、その利口なわが子の意見に果は親も全く同じました。辭表を出すまでには間髮を容れず、あくる日すぐ出す、すると一兩日過ぎて直に聞きとゞけの指令が下りました。

大變に薄情なものだと親は學校をうらむばかり、志保子は威勢よくそれから淸華女學校へ行く事となりました。すると此頃からして忽焉と不思議がちらほら見えました。今までは學校から志保子は月給十五圓もらッて直に家へ出して小づかひとても碌に無かッた身、ところが學校をかへてからはかならず二圓ぐらゐは紙入にかくしてありました、而も月給十八圓のと同じ札で。それを見付けて母は不審し、やがて志保子が入湯する間に翌日そッとまた改めるともう一圓の影は無く、どうしたのか、つかッたのかと思ひめぐらすに何も買ッた體は無い、たゞ/\不審はやはり昨夜下しらべとて十時過に學校から歸ッて來たこと、もし使ッたら其時に使ッた譯でした。

けれど迂濶に言ふと反目して怒られる、それが否さに母は容易に之を責めず、兎角一二ヶ月を送るうちまた氣のついた事と言ふは志保子が晝間湯に行きたがらなく爲ッた事です。何と言ッても晝間は行かず、下しらべが急がしいと言ひ張ッていッかな聞かず、こそ/\として夜行くもの、兎角母と別別に行きたがりました。「流して上げやうぢや無いか。」「なァに番頭さんが居らァね。」つひ去年頃までは番頭なんぞ節くれだッた男の手に肌をいぢられるはふる/\否だと言ッたくせに。

どうも娘の樣子が只では無い、困ッたと親たちが娘の留守には額を病ますやうに爲ると、中々居ても立ッても居られぬ心もち、世の中に子を持つ程の苦勞は無い、中

にも娘を持つのが心配、瑕物になりたがる、なれば一生日陰者、それをさう爲せまいと思ふだけ猶――あゝ教師は廢めさせやうか。廢めさせても直には片付けぬ、今取ればやくざ聟。痛し痒しで藥罐に蛸、學校へ行ッて聞いて見ると、志保子も如才無く居殘ッたことが有ッたと見えて、校長も居殘りが嘘でも無いとこたへる、まづは泣き寐入りになるばかり。

　宇宙は祕密を人のさぐるに任せる、人間も祕密を包みさへしなければ卽ち一身まるで淸淨、なさけ無いことには人間でそれなのは聖人と子供ばかり、今は志保子も十九歲、人につゝむところを持つだけ淸淨に遠ざかり／＼ました。其胸にはどれ程の祕密が有るか、知るのは志保子たゞ一人、しかしながら有る證據は人物が大抵すまして來たことです。

　つくり聲をするやうに爲ッたのが第一それ、子供の時――むしろ一年前――とは打ッて變はッて、例のとほり目をねむり、口をすぼめ、笑ひ聲さへ咽喉でころしてわづかに泄らせば自然あはゝかおほゝゝに變はりました。たゞそれならいゝ、しかしだらうゐんも背を脫ぐ退化が志保子にあらはれました。摺子木同樣志保子の外見は跡もとり、月を經るにしたがッて無性にあどけ無く／＼なり下る樣子、年齡を逆さに取るのだと占者なら言ひさうでした。子供の時には可なり氣も利いた、それが反對に爲ッて物ぐさく、一寸臺所へ行ッて座るにも首さしのべての拔き衣紋、髱も無い束髮で何のため襟を大事がるのか、たゞ一人靜座して人が居なければまるで氣ちがひ、芝居で見た女形のはづかしい仕打、その演習には時ををします、やがて母がつと入ッて來ればあはてゝ其處ら片付ける眞似。つまりは誰に見られても若く見られたいが卽ち一念、鉢植の梅栗、小さなくせに年ッ食ひだと昔ものは見て評しかねぬ、まことに年を逆に撚りもどしたのです。藝より技より顏をほめられ、年をわかく見られるのが何より嬉しく、手帳をつくるゆゑ何かと思へば、世辯追蹤にしろ何にしろ自分を襃めた人の名と共ほめてく

れた月日とを一々したゝめるとは扨も綿密、時にくりかへして見て樂しむのは其手帳でした。常の心掛けがまづこれ程、若く〱とつくるのも無理の無いはなし、母もあやしむばかり、去年頃まではこましやくれて更けて見せたがり、絞り放しも水色で無くッちやァと蛇つかひの姉さん宜しくと云ふつくりも爲たがッた、その子が可愛さうに二十にならぬ本卦がへり、大形やら紅染めやら、天のめぐみの固まりついて伸びぬ身長、それにまた束髮も引ッつめ結ひ、これでは若く見える筈。母はいつも束髮排斥家、御前のやうに身長が無ければ猶更頭で引ッ立たさなければと爲を思ッて權衡をはかると、蝦ぢやあるまいしと卽座の反駁。「その高慢なら夜だッて自分でよくするがいゝ。亭主でも持ッたらどうするだらう」と流石にまけぬ母の言葉、何のことかとよく聞けば、寐樣がわるいといふ艶消し。

　裏が見えぬで持ッた世の中とは言ひながら、その貴い子をまかせる敎師さま、その人の家庭はこれ、藥屋でしみた白粉はよく往來でも鼻につくとか、これらの我儘氣儘氣隨氣樂がちらほら學校で見えぬとは限らず、それが大切な子にうつるかと思へば、さても欲しいものは人間の防腐劑！

第三　ひきづり込み

　志保子の管ッて居るのはおもに十四五の年若の女生徒、毒にも藥にもなる相手でした。人間一生の踏みはじめ、物ごゝろ稍かたまる十四五歳、大事といふもおろかな年輩、その敎師が志保子でした。需要が供給に足らぬ今日、仕方は無いと言ふものゝ、敎師人撰の說はいつも空理で、おほくの敎師もたゞ錢まうけ、まして子孫の經驗も無い一つの器械でした。志保子一身について言へばたゞ〱嫁入り支度がしたいばかり、間食がしたい計り、道樂がしたいばかりの敎師三昧、青春まだ十八、人の親俄に親めき、氣に入らなければ叱り飛ばす愛憎の亂用、果

はくるしさに減相も無いこと！生徒も阿諛を最上と考へ出すとは！たゞ字を教へて講釋するだけ、えぢそんに頼めば其くらゐの教授器械は朝食前(あさめし)にこしらへさうな。教師の能をこれで終らせ、おほん教師さまとは便利な話し。

清華女學校の校門かよわい鉦の音を相圖に午前六時頃生徒の智慧よりはよづうまく開き、八時から授業時間となツた處で、その跡の時間に首尾よく缺席せずに來る馬鹿律義な教師生徒はほんの珠數の數とり、校内多數の美術家はその頃まで宿で鏡の前。九時からぽつ／＼集ツて十五分の休みは過ぎ去ツても、教師が出ぬゆゑ友さへづり、意地わるいもので見習ひは得て實修よりも手に入るもの、教師におしやれを見習ツて堂内がまことに四季の花づくし、其脂粉のかをりは机(つくゑ)について後に道具屋に賣却しても三年は匂ひが殘りさう。その内やうやくのこと、やゝ十時には三十分ほどしか無いといふ頃に爲ツて志保子孃も出て來ました。

入り口の隅に座を定めて居たのは十二三の富有の娘、卽ち志保子の第一氣に入り、一同に禮を爲もせずにまづ早その傍へ立ち寄ツて、

「おやいゝ御召だこと。」

言ツて其子の着物をいぢれば一同の目もすぐに其處、いぢられた子はうれしさに顏も紅くなりました。

「あなた大層御めし御持なのねエ、每日のやうに變はツてね。西陣でしやう、これは？　おや、まア否だ、知らないの。これは、ね、西陣てへのよ、はア京都の、西陣の御召しですわ。」

「先生、」とやさしい聲が坐の向ふから聞えました。

「はい、どなた？」

「あたくし、」名唱(なの)り出したのは十六ばかりの唇のうすい、目の大きい、せい／＼言ツて口を利く性質(たち)の生徒、

「あの先生、こら。」

顏をそむけて頭の後を教師に見せた、卽ち髮を見ろとの意でした。

「こら、あたくし今朝結(い)ひましたの？」

「さう。あの『まアがれッと』でも無いのねエ、新形なの？」

一方は大得意、

「校長さんの御手許のはアぱアすにありました新形なの。その眞似して結ひましたの。」

「どうして結ふの？　さし込みは何う爲ますの？」

空前絶後、教員が生徒から束髪法の指南を受けるとは！それがぺすたろッちの主義か知らん。

兎角するうち時間も空しく其儘にして過ぎて仕舞ッてほンの眞似事に一枚ばかり輪讀したのが關の山、この體で晝となり、さて二時三時と爲ッて一同退散、志保子はまた居のこりました。居殘ッて教員室に――はて不思議、志保子の外に今一人、校長は所用が有るとて、手車も有りながら一人で出て仕舞ひました。

志保子と對座して寂寞とした一間の中で物語るのを誰かと言へば矢張り女、しかも別人で無い富江でした。二人の間の卓子には袋のまゝのビスケット、しかも口を開けるのが面倒とて脇腹からやぶいての自由自在、幸ひにして玻璃は緞子張り、外からは誰にも見えませんでした。食べながらにちや〳〵いふ口の利き方、志保子がしきりと語りつゞけました。

「校長もなか〳〵粹なのねエ、もう妾たちにや隱さないンだけれど、中々根がいゝと思ふわ。」

「今出て行ッたのも例の家？」

「素より、また十二時頃かへッて來るンだわ。妾、昨日そ言ッたの、あゝやッて毎晩こちらから通ふのは面倒だから公然とハズバ（ハズバンドの略、亭主といふ英語）にしたらようムいましやうッて。」

「そりやア無駄だわ。」

「あゝ無駄なの。なに校長はたゞあの人を當座の相手にしてるだけよ。」

「何つッて？　いやだと言つて？」

「たゞ、なに、笑ッて。勿論いゝわ、産科は御存じだから懷妊避妊自在だから。」

「ほゝゝ、本の名見たやうだ。それはさうと、もう來さうなもンだのに。」

「ノットそんなに待つべからず。あゝ思ひ出したが、ね、あたしこなひだ吃驚したわ、一月ばかり前、ね、急に梅ぼしが食べたくなッて、それから仕くじッたかと胸がどき／＼して一時はいろ／＼考へても見たの。さうしたらさうでも無くッてよ。どんなに驚いたか知れやしない、大抵そんな爲くぢるやうな覺えは無いと思ッてるのにねエ。」

「へゝ、どうだか。」

「人、自分の方が。」

こひねがはくはこの應答、生徒の父兄にも聞かせたい事、たゞそれで內密、つゝむならさてまだしも、いよいよ語り進むを聞けば――あゝ忘れても／＼學校教員の人物は箕でふるッても撰みに撰みたいです。

「御金さへ取れば用は無いのよ、」富江がきざ／＼と、

「だれが唯なら教員なんぞうッとしいことを爲るものか。覺えやうが、覺えまいが、こッちは持參金さへ出來ればそれでもうもうたアくさん。」

「おや、」笑ッて志保子が、「そんならよく御金ばかりを御ためなさい、ほゝゝ、C、Fさんと料理屋なんかに行かないで。」

「さやうさ、御互ひさまに、ねエ、おほゝゝゝ。あなたも忠二(舊の學校の小遣の名)さんと浩然の氣なぞやしなはないで。」

折から窓をたゝく音、志保子はさとく聞きつけて、

「だれ？」

そとでは極めてかすかな聲

「忠二です。」

「あゝさう、いゝよ、御入り、こゝから。」

果して引き入れたのは誰あらう、舊の學校のはした小遣、あゝ情無い、これがこの……

「御たのしみ、大層御はやく。」

富江に言はれて得意な顏色、

「富江さん、それぢや御さきへ。よく早く來られたのねエ。」

「御ゆッくりと、」富江はビスケットを引き寄せてひとりにや〳〵。投げるやうな聲で、「燒けるウわ、あたし。」

× × × ×

醜に買はれる小づかひ、また下輩にしたしむ教師、いづれ志しはわかり切ッたこと、二人ながらもとより當坐をたのしむばかり更に永遠の望みも無い、人界の烏けもの、むしろ遊女賣色よりも陋劣はきはまッた雌雄の幾疋、淺ましくも清華女學校は只の名ばかり、之にをしへさせて悟らぬ親たちは知らぬとは言ひながら大白痴！

第四　大まごつき

祕密の下には露顯が孕んで、知れぬ〳〵と思ッた清華女學校の內情たちまちぱッとして新聞の探訪者もこゝに目を離さず、記者は艶種製造畠とその方に向ッて神酒をあげぬ計りの姿、はては小新聞の第三頁は無殘！清華と藝妓とで持ち切りました。校長をはじめとして一味徒黨の醜聲は形無しに筆誅されて、ことには人の口うるさく、おしなべたやうな種まで製造して、道に束髮あたまにさへ逢へばあれもさうだと言ひ噺すいきほひに、さすが正誤を新聞に出させても儀式だけで氣の利いた生徒の足は止まり付かず、汚名にしなびて門をしめる事に爲りました。門をしめた處でさし當ッて當惑の胸をすはこそと志保子は母親にどこづかれました。まづは修業のつんだ辨舌こゝぞと猫かぶりの鞘を拂ッてわたし一人は泥中の蓮、ほかの者は蓮根の泥と事も無げに言ひ張ッて兎角其場は押しとほしたもの、實は學校に艸を生させたのも自分が張本の一人、其名は仲間の間に美事鳴りわたッて御挨拶は何處でも言ひ合はせたやうな爪はじきに例の十八圓どころか大地をかきむしッても鐚一文の嫁ぎもならす、父母には雇はれ口を見付けるとて辨當持參で出掛けるもの、その實目的の有るでは無し、まごついて喪家の狗同樣、顏をさらして阿容々々飛んだ茶番の飛脚屋を

はじめる仕儀でした。わるかッた、先の學校をよさなければよかッた。まして男なんぞこしらへなかッたら宜かッた。後悔は爲るだけで後悔の報酬もなく、わざと隙をつぶして友だちの家などへしけ込んで、また長居してすれからしの駒下駄にあッつい御灸、浮かむ瀬は無くなりはてました。もう／＼ふる／＼不品行は――やゝ氣が付いて飜然として熟考すれば父母をあざむく罪はどれほど――涙！今朝の出掛けに母は切り火を打ッてくれた！大方は胡麻化し得られたらしい父母、發矢！その人のいゝだけが――多少懺悔が胸を突く！

かへッて何と言ッたら宜からう。もはや口を見付けはじめてこゝに半月、腰辨當の風呂敷にも手垢が時日の過ぎたをしるして、まだ見付からぬかやいッと嘲けりがほな。かへッてやがて敷居をまたいで――思へば出掛けに母は魚屋から鰺の干物を買ッて妾といふこの不孝な娘に見せて、御前の好きなの晩に食べさせるよと仰ッた、その干物を燒いて待ッてくれるわが宿の高い敷居に、まア足をふみかけた時――そのふんと來る慈愛のかをり嗅いだ心もちは？ いつはりがさてどうして言へやう。言へぬ！しかし明かせば五體は刎木にかゝッてすは見ろと油はじり／＼しめ取られる。

まことに懺悔したものなら、油の取られるのは厭はぬ譯。この子、思へばまだ／＼俗物。

わるいとは心付く、それで勇氣決心はその過ちを改める方は助けず、惡性にも辯護の方を贔屓しました。どうか爲るだらう其うちには。やッぱりいゝ加減に胡麻化して置け！

ぼく／＼と蝙蝠片手に神樂坂を下りかけると丁度この日は毘沙門の緣日、例の通りに賑やかで、そしていつしか日は暮れて、ともしつらねた商人の火の光りが一町の晝をなして居ました。はて緣日か、にぎやかなと流石に妾は行る身ながら思はず足も遲くなッて、行き逢ふ書生に顏しけ／＼と眺められるのを樂しみにやゝ下りはてたところで何か其はづれに人のかたまり、近よッてさしの

ぞけば聲をかしげな阿房陀羅經でした。

御人がらゆゑ阿房陀羅經はもとより好物、うしろの方へ立ッたはいゝがよく聞えぬ、前へもぐり出せば燈光に照られる、鼹鼠見たやうに光りを怯れるのもいくらか廉恥の有るしるしか、よく聞えてそして暗い都合のいゝところと錢が出ぬゆゑの贅澤三昧、どうか場所を見付けました。次第に聞いて居るうちに思はず知らずげら〳〵笑ふ、笑ふたびに心のけがれは段々に色上げが積む、また浮氣になりました。自分のすぐ傍、肉のぬくみもつい通ふばかりの隣りのところにすッくりと立ッて同じく聞いて居たのは流行の柿色に白縞をまき付けた年若の男、察するに二十三四、絽の羽織を着て居ました。男を見れば何やらん例になッて胸はどきつく、ぼッとして其顔を見上げれば、さても男は譯の無いもの、あかりに向ッて平氣安心、聞き惚れて面をさらす容貌は、さて如何なこと堀り出しもの！にがみばしッた好男子！

むら〳〵と湧く煩惱に家のことも忘れ果てました。

いゝ男だ、食ひ出のある！同じくこれも「蚊帳のせまさかな」なら隨分はなしに篤りさうな。見受けるところ口髯のやはらかさ、年でかんがへてまづ令閨も無ささうな。あゝ思へば自分も早く相手を見付けて行きたい。

だらりと垂れ下げた向ふの手、それとわが手との間は一分に足らぬ、一分、そのたッた一分が電氣絕緣の一大切處、不意のふりして障ッて見やうか？　運は何處に潛むか知らず、桑を取る無鹽の其日、露が其葉に王妃の二文字をあらはした譯でも無し、機會はつかまへどころで出來る、こゝろみて面倒なら、御免なさいで事は濟まう。見受けたところさして襟元のわるさうでも無し、うまく行けば掛け合ひやうで妻君となれぬとも言へず、まづはゆッくり掛かッて見やう。

氣を付けると男もこちらに氣を付ける、氣のせゐか、もぢもぢ此方へよッて來るやう、うまい！占めたらしい！思ひ切れどばかりに覺悟をさだめてやがて向ふへ動かす其手、胸はどきり！はたして温い相手の感觸、とばか

りの内——さて夢か——むんづり握りかへされた天恩圓滿！氣もとほく爲ッたやう、其處らの光りには綿めいた後光がぼんやり。すぐに男は動き出してこちらへとばかり樣子で見せて無言のまゝに袖を引く謂。以心傳心おなじく頷いて前後を見返るのもさも慌たゞしく、後につけば男は心得がほすた／＼と横町の暗がりに入りました。

さては悟ッたり、感心な、粹とはそも／＼こんなものか？　大通りとは打ッて變はッた人の少なさ、もはや時刻と心はいそ／＼又やゝ怖く、男の傍へ、やゝ遠くから近寄れば相手も委細呑み込み顏、もッとこッちへ…列んで歩かうと言ッたばかり、さぐりあてた手をじッと一〆骨もくだけるほど。

第五　演説加盟

慧が志保子の爲るやうに團子を丸めるより早く出來るものならば當分のところ發心までは毛の生えぬ人間の皮も身體に取ッて無用の沙汰、不名譽といふ損料の崇むのがとゞのつまり、かきむしッて其處らの牛豚のを時借りして多く子をはらんで多く乳汁を出し、飼主を喜ばせるのがまだ／＼上分別、親は是程の見下げはてたものを好きの可愛いのといふか、さて／＼因果な。業でおそいやくざ娘の歸りを人並にそれでも案じて居ること、たゞし知らぬのか知らん、見ても知れ！買ッて置いた其鯵の干物にさへバクテリアはつねに湧いて居るものを。と、樣子知ッたる大概がまづ言ひさう。たゞし言ふ當人が得て百歩と百歩——中々五十歩百歩で無く——嘗てかきこませた油箪掛の長持ちもことによッたら野合のあつらへかも知れず、まづは滔々として菖蒲杜若と似たり寄たりと萬國一色、せめて情に色どりだけでもありさうなもの。

あついのに袖から袖と雌雄ふたつが毛をつらねて、やがてまた其手をぐッと差しこんで、あらくすぐッたい！

男は志保子の胸一撫で、

「大さうな動悸だね。」

「御よしないよ、往來で。」

「わかるもんか、眞暗で。いや是は冗談だが、本當に斯う一人々々歩いて計り居ちやアつまらない。一體御前は流行物か？　意氣な商賣だなア、やはらかいこんな…」

「あらッ！くすぐ…」、きはめて小聲で、「はやりものなンかッてそんな物ぢやア——本當にどッかへ行きましやうよウ。」

「…ほんとにやはらかいゝ肌だ。」

「まア澄ましてよ、よウどッか。」

「唐の横町か？」

「人ッ、いやアな！あなた、流行物なら宿がありますわ。」

口眞似して

「ありますわ！新工夫かも知れやしない。」

無殘、これらの應答がそも〳〵教師の口でしやうか？ぶら〳〵と歩くうち、見當ッた薄ぐらい牛肉屋、質物の下足がわづか二三足、いゝ家だこれ究竟と先に入る男につき従ッて二階へ上ッて陰にひそまり、鍋か何かを注文させて垂汁も入らぬべたつき方、いざと男も容色を始めて拜めば、さても思ひも付かぬ南瓜に目鼻、女にはちがひ無いが飛んでも無い、美ですごいなら上々吉、醜でこはらしいといふ類と眞似なし、

「御前一體何なんだ。」

とは情無い、鏡に向ッてほぢり出せば何處かにわれながら理も付くものを。

「はやり物か、本當に？　それにしても何たる、まア…いゝや、いくつだえ、それに名は？」

いはれも無い男にこの出放題、平生(つね)いふ見識はそもそも何處、屈辱もこゝまで來れば絕頂です。卑劣きはまる大怪物と言ふもやゝ氣の毒ながら錦の裏は既に過ぎて裏表ともあらはした荒布(あらめ)の道行き、あゝ今までの教科書を引きむしッて大地にたゝきつけたいやう。榮辱の外聞いとふ志が有ればまた正路の脈は切れぬもの、其處一轉すれば現世の地獄で娼婦遊女と同じくなるに、さて其一轉がとかくに爲やすく、城東の桃李に身をたとへた果て

は終に記憶に殘される恥をまうけるばかり、あたら敎育もサルチン酸とは爲らず、却ッて身の腐れぐすりと爲り果てゝ終りは田夫野人の死水を泣きの涙で取るが關です。とても此位ならまだ／＼深窓の牢屋にこもらせ、女大學の反古張りの障子の蔭で蒸しころすがせめての慈悲と、くやしいが、入れ齒連にさへ言はれる仕儀！

　希望も無く、愛も無し、たゞ何が無しに客のまた客、一二杯引きかけた、飲み訓れぬ酒に志保子は目を重くして、呼吸やゝせはしく、われとわが脈搏の烈しさを感じて居るところさても畫龍に睛を點ぜぬ——男は手を拍ッて女を呼び、附けを取り寄せて金二十六錢八厘。

「あら、もう御歸んなさるの？」失望滿々として。

「歸るさ。」

　儼然とにはかにあらたまッた男の氣色、今までの生ぬるさはや何處へやら。

「逃げかくれするンぢや無いぞ、婬賣め！」

　はッと見上げる志保子を覗めて、

「くらひ込んだ大馬鹿め、この己は探偵だいッ！」

　探偵?!　地獄がりの——はじめは呆れて一句も無い、それ見たかと言はぬばかり、男は立ちかけて手をまた拍つ、給仕の女がすぐ出て來る。

「おい酒をもう一つ。」

　不思議千萬、正氣か、亂氣か、何ものか？　まんだりとして志保子はたゞ見つめるのみでした。やがて女が運ぶ銚子に一猪口つがせてぐッと飲み干し、つと男は志保子の側へ——大變、今はどう爲れるか！

　案外に男は手も出さず、たゞ聲を潜めました。

「吃驚しましたらう、探偵と言はれて。はゝゝ、ありや只冗談ですよ。失敬、はなはだ吃驚いたさせました。それに一つ御はなしが——あなた女學生ですか？」

　よく見た、まさかに地獄ぢや無いさ！

「女學生なら御相談が有るんです。失禮ながら今夜の御樣子で見ても何か御不自由なやうですが、なに御心配なさるな錢は直きうかりまさ。どうです、われ／＼の方

に近ごろ些共もよほしが有ッて二三人は人が有るんです、外でも無い演說會です。」
なる程これは耳よりな、ちと心もうごくやうな。
「なに婦人雜誌の古いのから論說を切りぬいていゝ加減にしやべればそれでいゝです、すでに行ッた女史等も御存じでしやうが、有りまさ、あのとほり儲かりますよ。しかしあれらの儲けはあれッきり、傍聽料だけでしやうが、吾々の方はまだ〳〵外に――聽衆の中から望まれたら一人で一圓も取ッて賣るがいゝでさ。少くも月四十圓位は取れますぜ。」
聞くまゝに上氣して胸はわく〳〵
「ほゝゝ、御はなしでは旨さうなのね。だッても貴方一圓は…」
「出しますよ、壯士といふ中には束髮好きがよほど有りますもの。」
「ほゝゝ、否よ、まア。」
「どうです、否ですか？　否で無きや御入んなさいな。ことによるといゝ相手も見付かッて靑雲になるか知れませんや。面白いですよ、本當に。」
唾を吐きかけてやッても宜い獄道男に情無くも金がをしさにとう〳〵欺されました。祕密々々と誓ひをかためて――「あゝやう〳〵取り口にありついた！親の前が胡麻化せる。」

第六　大墮落

もはや家へ歸る足は地につかず、先きの儲けを早こゝろあてに無け無しの巾着の底をふるひ、辻ぐるまに飛び乘ッて驅らせる其愉快、蒸しに蒸し出す空想の呼吸を吞吐して、すれちがふ人は其毒氣にも感じさう、わが家の門によこづけにして母親を呼びながらとばくさと駈け込みました。物すまぬ面色の兩親をば大黃もちあつかふ藪醫者同樣、さても通じのわるいと冷笑して、高くなッたらうと鼻の影を動もすれば障子にうつして見る程、まことと噓とをつきまぜて、天保度の舌加減をはかる物巧者、さ

も上手に說き示しました。實は歸りの遲なはッたのも全くそのため、學校なんぞ定木で人間を測量するやうな束縛きはまる處に居るのは時世を知らぬ阿房といふもの、どんぐり眼の活眼(まなこ)を開いて生き作りの活料理を御手の裡にまろめ込むのが當世の才女といふもの、證據は月四十…なにさ、三十五圓づゝちやんと儲けて來るのを見て知れと、〇のきらひで無い親を知ッて好みから跟け入る孝行むすめ、孝經の極意は全く飮み込んで居ました。噓とも思へぬ娘の威張り方、やゝ信じて來れば、親も口の利き方が、さはやかになる、もう占めた此圖を拔かすなと更に立てつゞけにして演說のありがたい事を喋々して、序には西洋の何とか孃が、不思議なこと、議會で三時間辯舌をふるッたといふ話しまでしました。

あくる日はもう朝立ちで、男と約束した變な家へ行くと早其處には男をはじめ四人ばかりの女史が集まつて居ました。一人々々に紹介された、これが有名の安倍川きな子、これがあどけない小簾割(をすわり)えん子、これが額野(ぬかの)おで子、これが石垣龜乃子といづれも差し出す名刺を見れば、洒落れた奴、鳥の子の石版ずり、自分のゝ臺紙活版ずりも氣が利かず、つひ名刺を持ッてまゐりませんでと當座をのがれて、やがて加盟約定の證書と引更へに男から十圓金を受け取ッた、そのうれしさ。やがて只では面白くないと割り前でいくらか持ち寄ッて酒肴などあつらへて、其間たちまち演說の相談かと思へば浮氣きはまる口から出任せ、さすがの志保子もおどろく程、たゞ〱それが承知のことゆゑ淺ましいとも思ひ做さず、つり込まれ、釣り込まれて段々口を多く出すやうになれば、どうやらなか〱面白く、はては一同とも〱に杯盤をそこへ散らしたまゝ寐そべッて、有らうことか、足相撲を取りはじめてきやア〱、すう〱。

「賴む、」と音なひの聲。

びッくりして、一同步兵操練稽古の見得、びら〱と飛び起きて、つんとすまして、「どォれ、」と言ッて跡は齒で嚙みつぶしながら、くす〱〱〱。

「石垣さん、あなたの番だわ。」

「うゝん、君よ、額野さん―あら、待ッてますよッ。」

仕方無く額野が出て受け付ける、その應答を中では聞き耳すまして、そして一人は障子の穴からのぞいて見て、後ろの皆々に耳打ちをして、「いやな醜男よ。丁度鼻が」、そこらに散ッて居る凸形の落雁を指さして、「丁度これ凸こんなの」あとは顏を眞紅にして、いづれもくすくす。

障子一重の外では生れかはッた、鹿爪らしい應答、

「安倍川は只今外出の留守でムいますが、何か御用でも。」

「いや只御はなしを承はりに參りましたンですが、御留守ならまた重ねて」、名刺を出して、「これでムいます。」

立ちかへる姿を障子でぴッしやり閉め切ッて、部屋へかへるを一同は見るより早く、

「何？」

「しッ、忍び巡者だわ、さぐりに來たの。昨夜も來たわ。」

「だッて」、一人は名刺を取ッて見て、「この名はそれだッても…」

「僞名だァね。」

×　×　×　×　×

花々しく新聞へ廣告して世間の獸男を呼び集め、傍聽料をえッふえる塔より高くむさぼり、浴びせかけられる嘲笑罵詈をまともに引ッかぶつてびくとも爲ず、氣の有りさうな馬鹿にをかしな目を向けて後をたのしみに交代して其日を終るとさすがに播いた種は生へるもの、五人の美人が五人ながらどうか片はつくもので、其處此處の安料理屋抔から口もかゝッて、なる程立ち前は取れました。臍の緒切ッてから志保子には始めてのうまい商賣、思へば以前自腹を切ッて小使ひなどを手遊物にしたのも馬鹿ないたり、女ひでりのする世の變物の手遊物になると知らぬ情無さ、天晴れ美人になりすました氣、天運まさに循環してこの頃はこんな顏がはやるのだらうと自分々々に味噌をぬり、世の德義といふ竹槍に脇腹を突きぬ

かれて、油蒸しの田樂あぶりになるとも思はず、金を懐中にしてあくる朝、これ見ろと言はぬばかり、家へ飛ばし着け、牝鷄羽に十五金をずらりと列べて、「たッた一度でかうだもの。」

親はたまらず近所合壁に娘のはたらきを吹聽する、それも思へばわが子の不品行の披露、だまかされ〳〵拔いた揚句はいつか親の心も輕薄な瓦斯を學んで高く舞ひあがり、娘の缺點は全くわすれて、少なくもこれの亭主には奏任四等ぐらゐで無くてはとさへ、さて何處から出た音？　櫃に籠めて決してかくさず、覆面もかなぐり捨てさせて、いざ賣らんかなと呼びあるくばかりにして居たそのところへある日御免なさいと羽織など着て改まッて來たこす〳〵した顔の若い男、何御用と聞けば、外でも無い、約束どほり阿志保を女房にもらひ受けたいと、さて何の縁あッてか、名さへ呼び捨てにしての藪から棒でした。縁も無いのにぶしつけなと跳ね付ければせゝら笑ッて、なる程親御は知るまいが、わたしも舊は阿志保の出て居た學校の小づかひで忠二といふもの、證據は兎角言はずと阿志保に逢へばすぐ見えるとの音羽屋もどき、奏任四等と見込んだ親が弱身を取られて一句も出ず、手切れ金の内濟がつまりは最後となりました。最後となッた、それならまだしも、惡事は忽ち千里を駛ッていつか新聞の食ひ物となり果てる、爾來かたづくところも無く荒神棚の御備へを空食ひにすることばかり、見知りごしの朋友がいゝところへ乘り込むのを見るにつけ、つらつら世の中のみが怨めしく、やがて年も廿歳の上をいくつか越して、で無くともの色香はいよ〳〵凋落して、この子二十四歳の秋の頃は志保といふ名の山の神が芝仲門前の學校小使の家に何處からか嫁に來ました。

×　×　×　×

殆ど書き倦きた束髪のふしだら、既に言文一致の小說には是が付き物のやうに言はれる處を、猶も迷執が殘ッて浮かみ切れず、終にこれを當世むすめ事問の作には絕筆ともする氣で、兎角は名殘りの墨を磨

り止めました。
あはれ貞淑婉美、やがて文明の母たる全國の束髪さがた、今までに方々の有ること、無いこと書き飛ばした大罪、どうしても地獄の御さだまり、其段はにげも隱れもせず、もはや今後は前言ふとほり方々を相手に取ッて手痛くは穴をも掘らぬ氣、これを惡口の言ひをさめとして折角御ゆるし願ひます。懺悔すれば一字書いて涙、二字書いて血の涙、三字四字となれば大方骨肉の涙、たゞし骨肉の涙と言ッて決して決して學校で御習ひになッた牛骨汁の種類でないこと、無駄ながら一言御ことはりして置きます。

白　玉　蘭（別名さうし）

第　一

　蛇や蛙は夏動いて冬睡る、それに比べるのは殘酷なから、扨之に似たのは温泉場に海水浴、夏三月で一年の暮らしを殘らず稼いで冬籠りの用意するからには是等三月を喋ぎ迎へて、しかもはづみ上る下婢の給料、それにも中々糸目を附けず、言ひ盡くにすれば捩ぢ切れるほど腕に撚りを強く掛けて目をまはすのも無理は無し、今日も朝早くから拭き掃除を濟ませ、都出の渡り鳥の結構な鴨いざや來て宿れと共名も一葉樓といふ、房州の海水浴場。普請の新らしいので然るべき人の目にはまだ白ッぽくれたと嫌はれるもの、世間の多數は却ッて褒めて土地で屈指の大繁昌。門前に布き詰めた濱砂利に田舎車の輪を轢らせて二輛そろッて今乘り着けた客の姿は忽ち帳場の番頭に彈機をくれて跳ね上がらせ、入らッしやいましの紋切形を家のそこ〻に湧かせました。

　前の車に乘ッたのは主人と見えて薄セルの流行縞に縮緬の些地薄な兵兒帶、前面の處で蛇が蛙を飮んだ工合に脹れ上ッた瘤の底に時計の金色がほのめきました。跡に引き續いたのは伴の書生で、年頃は十八九、御下り頂戴と名唱り顏の睡さうな色のネルの單衣、いづれも窶し形でした。

　迎へるや否や少くも番頭の安頭も五六度は下ッた樣子、ふりかへッて家内を見て、番は誰だと言ふ下から妾と名唱り出た一人の下婢に手眞似と身振りで注意を示し、「それあの特等の」と言ひ掛けて、重ねて又「特等」へ力を入れ、「……の二番へ御案内！」と言ひも訖らず「御蒲團もあの上等を」と聞えよがしの商賣上手、無言で客は女

に従ひ、導かれて一室の中に入れば何さま特等でも有りさうな室でした。

唐木づくめの床まはりに唐木づくめの盆や火鉢、添への間も附屬なるからには眞逆に一圍立て投げの吝くさい茶代は出せず、でも居心はよし、海を見晴らす窓の横に二人は旅づかれの身をどツかり据ゑて、やがて浴衣を宿の女に擴げられて稍着け換へて、途端に女をよく見れば、扨愛らしい美人でした。

容は姓を黒江と言ツて東京住ひのものでした。都にも稀な美人だと俄に心も撲ち惱まされて、兎角は起居にも氣を附ければ、それと心付いたか一方は羞を含んで上をば見ず、氣にする黒江の眼中には只襟さきの奇麗なところを俯向いて見せました。

やがて茶を運び菓子をもたらして來て勸める姿をつら〱見れば見るほどいつくさは加はりました。おづ〱と兎角手の及ばぬのを恐れる風情、茶碗の埃りを撿める手つきも細かくいよ〱下を向き勝ちで、その擺脫ぎ捨てた黒江の單衣を疊むこなしは急々しました。書生でゐた時からこの方女性については嘗てまだ是ぞと言ツて夢寐の物思ひを養ツた事も無かツた黒江がしかも今日に限ツては唯何がなしに愉快でした。すると又氣もとがめる、同作の書生の手前、そろ〱はした無く阿嬌の顏を眺めるのも笑はれはせぬかと胸先づ躍ツて、あはれ話しかける無默話し、それも話しかける當座一刻、その一刻の一目のちらりが辛くも求める折ばかり、氣を勵まして此度こそはと心張弓と狙ひを定めてやゝ旨く行くかと思へば、殘念敵はまた俯向く。

御風呂といはれて氣が付いた體、もはや夜、まさかに海へも這入られず、温浴の方へ案内されれば、また踵いて來た例の阿嬌に着物の世話をされました。こゝには伴の書生も居ず、品位一等を下げて冗談を言ツたとて風呂の羽目板が開く位なもの、これほどの無類の美色をしたしくもせず眺めるのはそれ何とやらいふ洋行がへりが言ツた通り、海外を漫遊して地獄を尋ねぬのと同じことゝ、

さても何の罪咎が有ッて美色は人間をかくまで魔性にするものか、俗人の目に神女は無い、それらと黒江はまだまだ流石になりはてもせぬのが命脈、今のおづ／＼した愛らしさは猶一種の威靈に見え、其かよわさうな丈に泣き出しはせぬかと案じもされて、言ひかけた冗談口も兎角は一寸ひかへました。

そも／＼此黒江といふ男の素性を何かと尋ねるに、やがてはひッと、うゐぶすたると肩を並らべる意氣込みのものでした。子供の時の志望とは是で全くかはッてゐたので、勿論子供の時はおしなべて辯慶や犬塚信乃、乃至信玄、義經の亞流を望むが常で、この黒江徹も三文繪本で見馴の牛若に面會し、或は三枚五錢の錦繪で屋の棟の信乃と知己にも爲り、其當座男の子の當り前の戰爭ごッこも爲たもの丶、性は境遇によッて移り、軍ばなしのあるので外史が面白く、（外史氏曰）は跳ね飛ばして千早城(ちはやじやう)の段を暗誦して小半年も過すうち、はからず漢文の味が分かり、忽ちの内に洒落氣も出、小使錢をせびり取ッて、安仕立の幼學便覽鬼の首でも取ッた氣で古本屋から買求め、平々仄々(ひやうひやうそくそく)と口に諷へて紋切形の絕句を編み、大得意に爲ッた、それも亦夢の間で、熟するに從ッていくらか詩の味も出て來るにつけ、どうしたはづみか「賀覽山」や「髑髏悉く是れ」口調が無上に氣に入り、之をヒーロイック、ポエムと尊崇してまた何と無く活氣が塞り、人の奔走するのが他日で面白くも見えて來て、遂に政治と目的を變へ、之より大學に其の氣で飛び込み、試驗の都度の急支度(クラミング)、兎に角いつもうまく行ッて、卒業の證書一本、わが年齡の若かさに一寸とひねッて（若いに似ぬ實着といはれたさ！）保守とやらの黨派に加盟し、國粹の揚げ潮に經營慘憺の帆を張ッて、兎も角も世の中に知られるやうにはなりました。

但し學問に素は無くも無し、交際がさして下手でもなし、野暮に女に目を細くする風でもなし、何處へ出ても押し籠められず、いよ／＼行末も面白くなッて、僞手からして新聞社へも潛り込み、新聞と演說との兩刀に故鄉

の舊友も顔色無く、やがては議會へも出る積りで、今年からして其用意とて些足らぬ年齡を役場の落度と云ひなして、一年二三ヶ月ばかり殖やし、同じく資格だけの地所を買ッて來る年の用意も出來、心いそ／＼として目には見えぬ四斗樽ほどの尻尾を振り、わざと御忍の人少なにこの一葦樓へは來たのでした。

第二

黒江徹の性質は最上の出來でも有りませんでした。素より下根の方でも無し、と言つて上根神妙とはまた以て決して言へず、要するに普通の人間、拾へば疵は有りました。果斷と敏捷とは其長處でした。酷く評すれば處世上手の當世才子、人の目顔を悟る事は待合や船宿の苦勞人も及ばず、一つはそれが出身の大原因とも爲つたので、むしろ人に恐れられるより可愛がられる方でした。が、瑕と云ふは物事を兎角に包みかくす事で、洒々落々城府を設けぬと云ふ淡泊の分子は微塵一點も求め得られず、一方からして此深沈が人物の威嚴を多少加へぬで無いもの丶、さて亦これがために衆人の心を攬る段に於て少なからぬ害をも受けて、もしも此男に包みかくす一種の癖さへ無かつたならば、猶更の人望が得られるものであらうとは贔負連の知人が皆一致した說でした。

物を包むといふ性質は得て其人を怯懦にも見せて卽ち贔負目で見れば溫和、溫順――皮相からして惚れ込むものは多く此溫和や溫順、それらに取つて掛る事です。こ丶に至つて考へれば宿の女のおづおづしたこと、そもそも其子細の所以、それも亦聞き物でした。

湯を了つて座敷へ戻れば、既に杯盤もならんで居て、有り難や其給仕は卽ち例の女でした。いくらか味もわかる酒、すゝめられる儘に一二杯かたむけて、目蓋がすこしぼォッとなれば、さすが又今までに抑へて居た心の駒も哮り立つて來るかのやう、玉山なかば頽れかけて、陪食の書生に皮切りして、猪口の手で女を指さし「佐田君(書生の名)どうだ、美人ぢや無いか」と、それを機會に

此時こそとじつと眸を女にすゑれば、「御冗談を」と言ふ聲も有るか無いかに消え入りました。「可愛いらしいぢやないか、あそこが。おい、是誰に教はつた」といよ〳〵崩れて攻め掛れば、さも驚いた體で目を見張り、一睨み睨む思ひ入れで銚子を取ると紛らせて片袖をくはへてうつむく初心さ、今一吹き吹き掛ければ涙の雨にもなるかの體。

「ま、冗談は廢しとして、姉さん、御前どこのものか? この近所か?」

聞かれてそれと返辭もせず、うつむいて點頭くありさま、如何にも以て由緒ありさう。

「この近所とは? やつぱり此北條か? なに、さうだと。成る程、なァ。」

「不仕合がつゞきまして、こんな事に爲りました。兄もムいますが、どうも些……」

わづか一言二言の應答に早くも兄の事まで言つて而も「些……」とは曰くありさう、黒江も聞きたく爲りました。それと尋ねる、尋ねても扨容易にぺらつきもせず、さても奥床しいとは黒江徹が自分の癖に引きくらべて大に氣に入つた胸中でした。

それながら段々聞いて哀れにもなりました。女は名を阿島とて以前は可なりの魚問屋の娘、北條の根生でした。降り坂の身上に生れて一通りの女となる術もなく、一旦家が敗滅して即ち流寓轗軻つらい奉公をする身となりました。處のならひとて博奕はほとんど公行し、今の京城の花札のやうな間だるこい眞似はせず、家一軒に盆筵一枚、大きく言へば竈よりも家ごとに賽の目が必要の道具で、刈り盡せぬ故警察でもほと〳〵呆れ果てるばかり、つまりは阿島の家の零落も主として之にもとづきました。阿島の兄は源介とて氣負肌の男でした。子供の内には後來に望み有さうにも見た位、學問が好物で隣里に知れる博識となり、東京留學と思ひ立て二年間ばかり出京し、法律を修てまだ成らぬ間に有來りの花柳の風に多も有ぬ囊中を物の美事に吹き飛ばし、而も脚氣をわづらッて阿

容々と歸鄕した頃は早一家零落のはじめでした。どうした表裏の手ちがひか、熟練の親父が負けとほし、今一番で立て直さうとの追ひ目に掛かつて行だけにいよ〳〵深味へはまりました。そも〳〵こゝで只源介が一家注目の燒點で、それの手際一つで以て身代の恢復も出來ると思へば、無殘、これも歸るや否や好む道とて袁玄道の仲間へは加はりました。苦勞するのは血の道持ちの母親とかよわい阿島との二人ばかり。親父は源介を天晴鬼子でないと褒めてなまじひに源介がやつた法律が賭場の兄貴と立てさせてくれるに付け、いよ〳〵惡道へは踏み込んで、果は源介も一種奇體な壯士とか云ふ肌になりました。源介の性として賴まれゝば承知すると云ふ昔風、ことには生かじりの法律が政談演說を聞く耳を持たせ、やがて何ともつかぬ、まづ子分らしいものも出來て來れば、終に間千葉土浦あたりから賴まれて演說場の加勢にも行き、得々と澄まし始めて來ました。それ故に家は名ばかりの形無し、今日入つた金が役に立たず、妹につらい奉公させて振り返つても見たこと無く、鬼か蛇かと母親は夫や吾子を責めつゞけにして、歸する處は落命しました。

さすがそれ迄に心をけがしたものゝ、元より其實源介の天質が邪心奸曲でも無いだけ、妹も何かの食物にするとの慾心は萠しもしませんでした。妹は一寸とした美人、都の紳士が入り込んで來る處へ置いたらどうか其內に身のふり方を付ける事であらう位に極めて冷淡に考へたばかり、それを餌にどうしやうとの志しは實際無かつたものゝ、他目ではさすがに又いろ〳〵な評も有りました。

阿島が黑江に話した處は是だけに委しくは無く、さすが同胞の恥になるところは成るだけ勉めて隱したものゝ、意味は馬鹿でも無い黑江に大抵はわかりました。さすが聞いて胸わるく無くも無い一類、よしや性質はとうにしろ、其者は無殘な博徒と云へば交際して面白くも無い話と幾分か厭ふ心も湧かなくも有りませんでした。

が、困る。見れば阿島は誠に以て可憐な少女、毒も何も無ささうな人間で——まこと、比べれば是も薔薇、花

は好いが、縁につながる凄味の刺もついて居るとは……あはれ此子は見捨てられず、それで素生を尋ねれば、忌しい一味が有るとは――聞いたまゝ、暫はしんみりと爲りまさつて、何の、酒も何もさめました。

第　三

さまざまな懊惱に封ぜられて黑江は早くも三日ばかりを一葦樓で過ぐしました。且はしたしみ行くに從ひ、いよいよ阿島を捨てがたく、むらむらと起る煩惱心、それも亦その都度々々源介を思ひ出して引きとゞめられもしました。美さうな肉が皿一杯で、さて食へば打擲される怖ろしさに、目をねぶつて空しく目戍る猫の物思ひと正に同じく、蜂の巣の蜜、蜂がこはさに手も出しかねて、思へば保養に來たでは無く、艶な、やさしい勞苦の味をしたしく嘗めに此邊までわざわざ出掛けて來たのでした。行李に携へた都の菓子など取り出してやれば悦ぶ阿島の姿を見るだけ毒――毒と知りつゝ知りながら扨また喜ばせてもやりたくて。

第四日目の朝早く、日がまだ上つたばかりの頃、次の間に同伴の佐田を寐こかして、心いゝまゝ黑江一人裏口から寐衣のまゝで磯へ出てながめれば、曾て學んで味も知る其詩と同じ景色でした。暫時たてば潮ぐもりする空もまだ黃金色に根を磨かせて千里一瞬の風が浪を蹴立て、とろけて流れる日の影を微塵になれと揉みほごして、耳をかすめて過ぎながら飛ぶ鳥の羽音もひゞかず、壯んなものだと思はず見惚れ、亂杭に散て居る岩角を拾ひ拾つて二町ばかりを辿りました。前後を振返つても人は無く、漁師か何か人影めいた物が自分の來た方の遙の後に黑ずんで只一つ見えるばかり、誠に閑靜な、しかも壯な無人の天地に唯一人胸懷を開く心よさ。寐衣のまゝに袖もかろく、吹きとほる風に身も浮き立ち、はきにくい强み鼻緒の下駄をもいとはず岩角傳ひに思はず知らず進みました。

不圖見れば目前に當つて峙つて居る一つの大岩、比べ

れば猛獸のやうな形をして襲ひかゝる暴浪を物ともせず粉微塵に碎きかへす姿のいさましさ。見るまゝに氣にも入る。濡れて辷る足元をおぼつか無く踏みしめ〱風にさからつて登り付き、獸なら鼻と云ふ尖へ段々と足を進め、聳然と立つてまた遠近をながめて居る而も其の時、無殘、氣は付きませんでした、それからはほんの一瞬間、その中に不測の禍が早もよほした事とは些しも。

吹く風は荒し、足は辷る、直立した岩は水面から大抵一丈、高さはさしたる事でも無いものゝ、怒號する下を見ればまた毛髮も森立しました。氣のせゐか、打つ浪に岩は震動するかのやう、ともすれば折り〱打工合で水玉は足へも屆く、さて凄い心もしました。

いゝ加減にして歸らうとやゝ辿り掛けるその途端、思ひ立つたやうに力を加へた風一吹、たまらず身體も稍ふらつく――ふらつく足を折りも折りとて寄せて來た浪がすくひました。

唯あつと言つたばかり、朧くも身體は浪の中。物の用捨も無く暴浪はさわだつた中に徹の身を胴揚げにして二度三度したゝか岩底へたゝきつけました。もがく――もがいて手近の岩に取り付く――但し力は優る浪――つよく取り付けば銜き放されて擦れてひり〱皮は剝ける――あはや今の一刻で身體は全く沖のもの沖へ持ち出される許りのところ、扨も天かまた運か、礒にあたつて大きな掛け聲。

「助けてやる……今。」

重ねて同じ言葉をくりかへしながら岩角を飛び越え飛び越え馳け付いた一人の若者、あはや沖へ吹き出されさうに爲つた徹の姿に武者ぶるひして着物を脫ぐ〱、惡ぶとりせぬうるはしい身體、一散に駈け寄つて、猿臂を伸ばして、さても生憎……

境わづか一二寸の差ひで腕は徹に及ばず、徹は忽ち電光石火、浪に乘つて三間ばかり――暫時あらはれた小砂利の底で！球のやうに轉がされて、あつと又々立てた聲、むなしく此方で聞く本意なさ。今にもあれ、寄せかへす

浪、それに又引かれたらばいよ／＼大變、助けると一旦思ひ立つたからには、また況して今こゝで一骨折ッたならまつたく望み無くも無さそう！遣れ！遣れ！人一人を助けることだ！

再び若者は氣を勵まし、早寄せて歸ッた浪の中へ水烟を立てゝ飛び込んで、齒ぎりしながら勵ます掛け聲、

「もし……こッちへ……早く貴下……」

徹は最早つかれたらしく、身體も綿となッた樣、何が無し、もう大抵は浪のまゝ、倒にされて水面にあらはした片足を若者もこゝぞと一生懸命辛くも引き留めて力まかせ、腰に手をやッて抱き上げて稍立ち上がる處をかまはず、寄せるのか、歸るのか、したゝかに鞭く浪の疼さ。

たゞ／＼此處を關と思へば勇氣一層火も燃えて一歩歸ッて二歩卻けられ、五歩あるいて六歩さがり、擦剝も何も何の／＼、取り付いた岩をば只失はぬのが關の山、浪の退いた隙を見る／＼辛くも辿ッて歸る一心、そも／＼見ず知らずの人間を、さて若いにも似合はぬ殊勝さ。一念のそゝぐところやうやくにして浪の寄せぬ磯の邊まで歸ッて來て、やれ安心と思ふと同時、身體は全く萎えたかのやう、しびれるやうな心持ち。ことには徹をかき抱いた左の腕も拔けるばかり、兎に角磯ゆゑと心も安まり、下へ置いて見やうとすれば、氣絕こそはせぬものゝ、徹は口も身體も利かず、大變と途胸を突くところへ通りかゝッた濱のものゝ二三人、究竟と若者は招き寄せ、

「今この人が危なく死ぬところを――已も助けて弱ッちやッた。何處の客だか知らないが、何でもいゝから一葦樓まで御前たちこれ連れてッてくれ。それに又着物だ、おれの。着物はあッちへ脫いだまゝだ、それも持つて來て屆けてくれ。早くだ。」

濱の者も承知して言ふまゝに徹を脊負ひ、一葦樓まで辿り着いて入り口に來る姿、見るや否や帳場はにはかに沸湯と煮え立ちました。

聞かずとも譯はわかる姿、さては今家中たづねてもからくれ見えなかつた客の黑江がいつか海へ行たことか、

それにしても何たる珍事。驚忽な聲で帳場を立つて主人が「島！島！」と呼ぶさわぎに、何事かと二階の階子段をすべるやうにして駈け下りて來た例の阿島、出て來て黒江を見て仰天、また若ものを見て吃驚、

「おや、ま、旦那が！」

たゞ一句。飛び付いて、そして丸裸の若ものをはや最うさしぐむ涙の目で見て、

「兄さん、お前がどうして、まア。」

第　四

緣と運命とは不思議にからまり合つて其癖思へば好くも彼是もつれぬ物、何か知れぬ一種の威靈がそもそも其綱を引くとは云ひながら未來が人智で分からぬ丈に是等緣と運命とのからまり方は有無どちらとも付かぬと考へられて、時に突然として——其實は前から仕度のありあり有ッた——運命に遭遇して喜んだり、悲しんだり。

それにはそれで慾が手傳ひ、嬉し涙一升は口惜し涙百石程にも思はず商人がよく云ふに、ことしは不景氣、是では食へぬと眞面目な顏して述べ立てながら、扨また年一年と過ぎた押しつまりに豫言通り不景氣が美事嵩じて腮が干上るといふ悲劇も見えず、つまりは勝手極まる人間、人の疼さは成る程三年、自分が逐ひ出される時には保安條例も怨めしくて、歸ッて暴力を食ふ口になつては何なら體裁のいゝ保安條例を警視總監も出して吳れさうなものだと、さ、まづ兎に角同じ理窟で言ひさうな譯。

そも〳〵是が人情ゆゑ好くもわるくも決して無いとは言ふものゝ、偶然らしい假面をかぶッた運命といふものは其偶然らしいだけ善惡ともに人間を散々に實は翫弄物にするもの——黒江も同じく其流でした。

土臺死んでも仕方の無い、誰を怨みやうも無い場合に第一命を助けて貰ッたといふのが何より妙、それで又よく聞けば其助けてくれた恩人は誰あらう自分が豫ねて氣にして居た、そも〳〵薔薇に附き物の刺とした——そも〳〵蜜を護る蜂とした——その、その、而も阿嬌阿島の

兄源介であつたと云ふのも亦妙の妙でした。元より一時は徹も人事不省で、其苦んばしつた顔、其顔の方が第一まづ恥しいと云ひさうな囈言譫言さへ言ひ出して看病の阿島をさへ幾度も求めずに笑はせたものゝ、さり乍ら一月ばかり過ぎて熱も退き、心も正氣に立ちかへつて、仔細を聞いてはさすが仰天、枕頭にうづくまる大兵の若者、それが即ち恩人の源介、これが兄でムいますと羞かしさうに差しうつむく阿島の紹介に今更徹は改まるやうな、また改まらぬやうな心持ちでした。燭を消されて不義の罪を免かれたり、麥を窃んで立て替へられたり、それら非常の大恩には人情終に命にも水引きを掛け、熨斗を付け、いさぎよく捨てゝも顧みぬ世——それ、況して又事もあらうに何よりも今大事な生命を救はれた恩の程度、まことに是程な大恩が此人界別に有りさうにもせぬ其日に、今過つて、そして手を下げて禮を言はうとすれば、何と其人は博奕うち——薔薇の刺、蜜の蜂。

思ふに、それながら、幾分か最早贔負目、その目でつら〳〵男を見れば年はまだ廿二三、中肉中長で髯の痕が濃く、中高な顔が海風に染まり付いて凛々しさを添へ、割り合ひに細い目、むしろ眠るかと見える處は略をたくはへてゐるかの鹽梅、新參の料理人が持て餘して抜き殘した反毛鷄のやうにぱらついた髪の毛でぶッ〳〵立つた——むしろ鮫肌——其咽喉の皮を押し展ばして咽喉會厭が突き出て居ました。何さま荒くれた博徒とは、さう思ふせゐか、兎に角見える、見えるものゝ流石またそれでも學問をした甲斐——學問、一部分は花柳の學をも修めた甲斐に口も上手で、思ふに優つて見えました。

救はれた禮を懇に述べれば、其應答に動じもせず、甚しく頭も下げず、かと言つてまた傲りもせず、鋭い音吐を低く掠めて程よく挨拶をして居ました。

「是も何も時の運ですお助け申したいからと云ッて旨く許り行くもんぢや有りません。斯う言ふと御助け申した時の樣子を何だか自慢らしく云やうですが、御尋ねならば申しもしましよう。」

側の妹を指さして「あの朝あゝ早くこゝらへ私が參つたとはこれもさつぱり存ぜんのでした。前夜その實は些夜ふかし爲まして、な、些飲み過ぎましたもンで夜風に吹かれてぼつ／＼歩きまして、久しぶりで妹に逢つて安否でも聞きませうと思ひまして、其途でした、先生が丁度御落ちなすつたのを認めました。」

さても「旦那」と云はずに「先生」、「見付ける」と言はずに「認め」た、嗚呼其口も利けながらそれで情無い博徒風情に成り下つて悟らぬものかと思へば不愍もいくらか催し、また愛らしい處も有り、

「失禮ながら薄々は姉さんからも御噂聞きましたがな、此邊に今は御出でだそうですが――如何ですこの邊の景況は？」

抑へて幾度も躊躇した果、さて迷ひは恐ろしいもの、口走つてさざ／＼と吾は政事家と言はぬ許りに打ち解けかゝれば、素より一方は開いた口、微笑して扨またしほらしく、

「いけません、駄目です／＼。先生方のやうな御身分は到底私どもにも望めん事と存じますから實は只一念だけ天晴立派な壯士になりと爲つて見やうと心掛けをる許りですが、御恥かしい土地の流行物に先生引き込まれて今更仕樣がございません。御存じか知りませんがな、此邊の博徒の中へ落魄して居る者の中にそりや一寸した人物も有りますがな、悲しいが直腐敗します。腐敗します、節操を無くなしましてな、左樣、破落戸に爲り下るです。先生なンどの御名は豫ねて私もな京地に居つた時から伺つて居りまして、今でも實は敬慕しとりますが、唯これです、先生……」失禮ながらと腕をまくり、

「此腕です。見た處はこんな細い腕ですが、どうぞして京地へ出で此腕を一生涯な、先生、こりや赤心です、どうぞ正義のために奮ひたいです。學問も何も出來ません、私は。出來んが、德義は何ういふ物か位はこりや、先生、人間天賦の良心といふものが有りますからな――黨派も何もそんな事を私は……出來にくい事でしやうが

正直の道を行つて些しくも臭い樣な怪獸はどうぞして骨微塵にやつゝけて遣らうと存じます。實に〳〵他地方や京地の樣子を聞くに付けても最う〳〵肉が動いてたまりませんです。こりや先生實に實です。源介が敢て公言するのですが、ただただ情無いは只今の私の身分です。博徒の不道理は知つとります——知つとります——決して〳〵知らなくは無い、それで斯う、まだ、先生……」

とばかり忽ち催す涙、溢れ切ッて膝へ落ちた一雫、見ては流石に黑江も驚く。疲れをも忘れ果て、總身血氣に微顫くやう。いづれ有りさうな仔細と根深く質す氣にも爲り、更に目を轉じて阿島を見れば、これも泣くか、俯向いたまゝ次の間へ辷り出ました。

ひとたび涙に沈むと見る間源介はまた何を思ひ附いたか矍然と心した風體、やみ雲に拳で兩眼を擦り拭つて、思ひ掛けなくも叩頭しました。不思議だと身を入り込ませる徹の聲よりさきに突と摺り寄つて來て手を支へ

「先生、御免……わるうムいました、私が。も、も遂思ひ詰めると毎も是で——えゝ惡い事を爲ました、御病中だと言ふのに涙なぞ。」

まとまつて確に黑江に分かつたのは唯是だけ、跡は手を合はせて叩頭して居る、見れば思へば氣違ひじみた風でもあり、それ乍ら徹に於ては梅雨天に一點雲が切れて星影を見た心にも爲る、而も此一刻前までは毒と思ひ、刺と考へ、蜂とも、何とも浮かぶだけの不快な理想を以て源介の人品を想像して、神妙世の中の大博徒、恥も見得も知らぬ卑屈壯士と思ひ來つた目的が外れて——何の病後も何厭はうか。言ふ所に一種の生氣が有る、世の卑屈を冷罵して、殆んどまた眼中一人の胡散臭い紳士も無い、それや是や、扨々博徒と一口には言へぬものと今更のやうに思ひ做せば、卽時に又救はれた大恩といふ事が共贔負目を助けるとて胸中に勃動しました。

熱心のあまり言ひ過ぎたか、氣が附いて誤まるか、いづれにして可愛い人間、言句をも成さず詫び入る處はそも〳〵亦大した無邪氣な物と今は扨厭ふどころか、いよ

〲最負目が手傳へば、不思議なもので今迄より一層の人品が相手に加はつて見えて來る——疲れに萎へた身も活きかへる——病蓐の上に鉢卷をした病人がほと〲呼吸もはづみました。

「病氣に障るだらうと言ふのか、君？」

言へば唯うなづいて一切無言、同時ふりかへつて後の障子を指さして「呉々も吩附けられましたに」と何か樣子の知れぬ返答でした。

不審の深くなりまさる徹の目、する〲と明く障子の方へ忽ちに引き附けられて、見れば入つて來たものは阿島でした。泣きに出て泣きに歸る、さてさて東西涙もろい人ばかり、兄の後へべつたり座つて「兄さん」と一句するどく窘なめる鹽梅、涙一杯の目で黒江を見上げて

「唯何でムいます、兄の申し樣が大變妙で——あの唯御病中ゆゑ毎も御株の氣遣ひを始めるンぢや無いと實はわたくしが今朝もくれぐれ……」

……くれ〲吩附けたとは扨情の深い！それ迄に此黒江を——嗚呼質朴な田舍氣質。聞きとがめて流石に伴ふのは微笑、

「御株とは？　不斷今の樣な慷慨を兄さんが好きなのか？」

たゞし二人ながら答へもせず、跋のわるさにまた心も附き、もう御藥の時分でと立ち上つて藥をついで阿島は穴をふさげたつもり、右ひだり何れを見ても扨人摺れぬ、あどけない一種の可愛らしい相手ばかり——發矢、藥劑よりは此方がいつそ疲れた身體を治す。

同伴の佐田もとつおいつして病狀を東京へも知らせやうかと二度三度尋ねたものゝ、毎も無用と斥けられました。唯身體がつかれた丈、擦り剝きや骨を摧いた位ゐは海水浴に有りがちだと中々に強く爲つて勢ひ鋭く、それからして又大抵一週間、引きとゞめて今は源介をも歸さず、引きとゞめられゝば何處かに又意氣が投合したとも見えて一方も亦歸りたくも無く、馳走を受ける賠償には阿島お前がよく氣を利かせて先生のお世話をしてくれろ

とさへ吩附けて徹に佐田に自分たち二人、夜はいつも四人一組の掛物無しの勝負事に無殘や徹の心もとろけて、あはれ成らう事ならば是からして一生涯この一葦樓に居たいとばかり、極端は其くらゐに思ひ沈んでも來ました。

雜談の間、いろ／＼試みて見るところ、兎に角源介は何う踏みたふしても役には立つ人物でした。何か書かせて筆蹟を見れば四角張つた釘の折ながら「哲」と「晳」とを間違へもせず、快辯と言ふ程では無いもの丶心氣を一心突き込んで所信の外に念も無いゆゑ雄辯は聞く人に浸みました。瑕と言ふは涙もろく。情感に迫られると動もすれば濟然となる、それながら、其瑕が卽ち儲け物、熱心に何か言ふ時には涙が感動の手助けしてたしかに五分通りの力を添へました。

それに亦意中を聞けば、座ろに情實も有り、源介の赤心決して博徒をいゝ者とは考へず、實は破產した身代を萬一賽の目で恢復する事が出來るかの空想に驅られたばかり借財もそれから夫と重なつていよ／＼身動きする事もならず、さうかとて又不義理をして其金を踏み斃し、後足に砂を掛けて去る事は骨が砂利でも出來ぬ一徹、大穴は場技で埋まらず、手つ取り早くと急るだけいとゞ追ひ目／＼と掛かつて身拔けが出來ぬとの言葉でした。聞けば徹も心に感ずる、それ程の境遇に陷つてよくも妹を金にしやうとそも／＼流俗の普通にかぶれなかつたもの。前後照らし合はせれば、何さま正直、潔白が正に源介の特有とも見えて來るに從ひ、救はれた大恩、それをかへしてもやりたいと且思ひ込んで來るにつけ、さて其手段はと自身內心われと吾心ろに問ひ質せば、不思議、冷笑の聲もする。

一葦樓に來てからこのかた艷な想像は度々徹の胸にも湧いて、其都度毒を思ひ、刺を思ひ、兎に角大抵成り立つた其艷な空中樓臺を遠慮の鐵槌に幾度も碎き來つた揚句の果、言はずとも知れわかる事です、助けてくれた恩人は曾て床しく思つた人の兄、のみか篤く見れば其兄も毒でも無ければ刺でも無し、況んや又つらつら見れば毒ど

ころか、刺どころか、見處の有る好人物でもあり、それに又重ね〲究迫に陥つて目的は付きながら身は拔けぬといふ哀れさ。恩がへし爲るにしろ爲ないにしろ、一つの安心は既に付く、「薔薇を折つても怪我は無い。」

薔薇を折ッても怪我は無い。野心か、正當の道か、其邊は皆無分からぬもの〻、とても恩をかへすなら兼ねて利を取ッてやれと何さま政事家。薔薇を手活の花として、其緣で引き立て〻岳父の塵を掃はせてやッたらば卽ち恩は返せるもの、思へば好機會と思ふばかり、自身それと氣はつかぬもの〻、其實煩惱が妙智力の假面をかぶつて前後縦横に働らき出しました。が、しかし困ること。薔薇を手活には爲たい、爲たいが、無殘、定まつた妻は既に家にも殘してあり——かと言ッて薔薇は捨てられず、手段は今までの妻を捨てるか、薔薇を妾にするかの二つ。妻は去り難い緣から來たもの、世の信用も大事な、後來望みある身に取つては之を捨てる事も容易で無し、やゝ安全な手段といふは妾として其人を納れる丈の事。で、妾——とすると言ッて、掛念、目のあたり分かッて居る潔白な源介が直に承知を爲さうも無し、さァどうしたらよからうか。

第五

つく〲徹も靡ッて吾と吾身を顧みるに品行方正は幾分か自分が賣り出した原でもあり、流石情慾に醉ッても白黒の標準全く無い色盲に無ッた譯でも無し、妻を所以無く離別する事の出來ぬといふ事も知り、と言ッて局外ながら宗教家の群に入ッて一時は廢娼論も唱へた身で妾三昧聞かされた物でも無し、それ是に氣が附くだけ活けみ殺しみ煩惱は道理に首筋を押へられていとゞ死物狂ひに蹶きもしました。譯は無し。只々其思ひの種、其阿嶋をぷッつり思ひ切りさへすれば何の苦勞も糸瓜も無い、其糸瓜が扨有りました。思ひ切られぬ。どうかしたい。旨く、巧みに望みを遂げたい。出來ぬと知ッて出來したがる——哀れ一國樞要の局に未來は當らうといふ政事家

が御坊ちやん大駄々でした。

けれど心は心を叱る、男兒一人はかない鈍色に道理を忘れて折角の名を恥かしめるかと此際腐れ果てた腸の中に孤城猶瘦肱をぐッと張ッて叱ッてくれる心も有り、で、叱られゝば叱られたで直にまた辯護も設ける――「恩返しだもの、仕方が無い。」外に恩がへしの手段が扨必らず無いかとは素より以て避けて考へぬ處でした。

「島ちやん、僕の方が上手だ」と戯れ半分阿島が持ッて來た珈琲道具をもぎ放すやうに奪ひ取ッて、徹はそれが源介への世辭、自分覺束無い手付きで而も携へて來た壺をも開き、粉こぼして阿島を笑ひこけさせ、手のろく漸く日向水位に冷ました頃辛くして煎じ出し、「此ぬるい處が價値だ」とは扨々口に税の出ぬ世、いよ〳〵笑ひこける阿島の姿、元より一刻も多くは見て居たいものゝ、さすが幾分か極りも惡く、用を言ひ附けて座を立たせ、それと無く源介の氣を遠まはしに素引いて見ました。

「君も赤心博徒を望まないなら何うかして東京へ出たらば宜からう、壮士なら壮士であッてもいゝから。それに又あの娘だねエ。」

あの娘の事が素より眼目、すこし急き込む呼吸をじッと押へ、

「斯うやッて何時までとも限らず客商賣の奉公なンぞ爲せて置くのは本人のためにも爲るまいさね。ありや、ま、どう爲る積りなのかねエ。」

どうする積り？　別に打ち殺す事でも無し、をかしな事をと思ッたものゝ扨此方も何氣なく、

「どうも御存知の通りの一家の始末でそれゆゑ只今是と云ふ工夫もありませんが、何れもう年頃ですから永くはあゝ遣ッテも置けませんし……」

其事々々さう來なければ。

「さうさ、いくつだ、十七だッけか？」

「實は十八なんでムいます。子供じみて居ますから彼の通りで。」

「そんなら又猶の事、客商賣はよく無いからね。」

「はい、無論。」

「はい無論で消して仕舞ふとは粹にも似ぬ、悟れさうな物だと且はぢれッたく――いや〳〵寧そ思ひ切れ。思ひ切れだが、たゞ併し前置きは矢張要る、

「褒めるンぢや無いが、さう惡い容貌でも無いからね、賣れ口は有らうと思ふが。」

但し一方は底の知れぬ、言はゞ薄氣味わるい微笑を含み、悟らぬか無殘冷淡きはまる挨拶、

「容貌ですが茶屋女風情――よしやそれで賣れましたにしろ、詰まる所が妾でさア。」

聞けば胸どツきりしました。妾でさア――果して妾をば擯斥して居る？　妾でさア――無殘、こちらの坪では無い。なぜと問ひ返すことは勿論出來ず、さうかと云ッて此儘やみやみ――暗々と思ひを摧いて仕舞へるものか、仕舞へぬものか？　思はず穴の明く程源介を見て、いゝ面の皮寧ろ心無しと睨める方、それ限り暫時は言葉も出ず、程立ッて「成る程な」とばかり緩い調子で塞ぎを入れて、やがてまた見得ばかりの珈琲いぢり、「君、どうだ、もう一杯。」

×　×　×　×　×

×　×　×　×　×

煩惱は募るばかり、良心の影も薄く、素より病氣といふ程でも無し、久しぶりでと酒を些ばかり用ゐれば常より一入早く利き、一葦樓へ來てこのかた始めての醉ひ方で、毎に引き更へ、放言して何とも思はれぬ、見違へる計りの徹が出來ました。宗敎家めかす非宗敎家ほど節操の堅く無いものは無し、外觀は磊落を粧ふにしろ、謹直を飾るにしろ、動もすれば無理に鬱閉されて居た血氣活氣が邪熱に炎々と燃え立つて、謹直も磊落も同じ谷河の水、淺ましくも直そこで德義の罪人。佐田も珍らしがる程驚いて末には席を避けて相手にならず、丁度この夜源介は翌朝歸るとの口約で夕方から出て行ッて殘ッたのは阿島一人ばかり、性根を奪はれて外郭を取り外し、聞き苦しい事まで放言して、其癖また何處やら愛嬌の有る徹

の面前に畏まつて莞爾して居る阿嬌の笑靨を見れば見るだけ氣も惡くなる。

「畜生共笑靨がわるいンだ」差し寄ッて指で頰を銜けば首を縮めたばかり逃げもせず、醉眼にそれと見える紅葉を颯と顔に散らして「いけませんよ」と泣くかの聲。

佐田が見て居たツけと氣が付いて高笑ひと共に徹が身を退けば、扨もそれだから氣も揉める、頰を銜かれるのを嬉しがるかの樣子、徹が身を退いたので體裁ばかり突と立ッて廊下へ駈け出しました。

又調戯たくも爲り、追ッて徹も廊下へ出れば音ばかり高らかにして早くは逃げず「便所へ行くンだ、一所にお出で」と引ッ張れば聲を殺して笑ッて堅く爲つて動かず、ふり捨てゝ一人すた〳〵便所の方へ向へば、初心、眞面目になッて、「あの本當で?」

便所から出て不圖見れば、手洗ひの湯を快備へて阿島は跪いて待ッて居る、「御寒うムいま……」と忍び聲して、それでも洒落を言ふか、命奪りッ。差し出す手巾、それと共に引ッ摑む柔い手の下、かすかに洩れる聲を聞けば、「あら疼うムいますよ。」

第　六

眞理や宇宙、そんな秘密が何になるもの、すれ〳〵擦れ違つた男女間にいつか導線が無形に出來て、知らぬ間に成り上る親密ほど奇妙、不思議、變幻、秘密のものは無し、流れ河で口を洗つたやう、さつぱりし拔いて居た徹も此秘密製造者の一人とさて終に成り果てました。煩惱と良心との論戰場、いざと決る最後の場合ひに無殘煩惱の多數決で、名譽を思ふ智慧も薄曇りし、自身吾身を責める境遇には立ちいたりました。

あくる日は源介も歸つて來ました。駭いたのは阿島の立ち振舞、昨夜一夜でがらりと變はつた徹の世話の爲ぶりも特別、こまやかに氣を付けるかと思へば、思ひ切つても打ち解ける、扨はと流石に苦勞人、早くも悟り拔いたもの〻……

ひるがへつて脩考へれば、最負目も手傳ひました。徹の氣象のさつぱりしたには源介自身も頃日事實は惚れ込んだで無くも無し、かねて妻が有ると聞けば、此上阿島は妾となるより他に方策は無いながら、さて其妾、それをば無心になつて云へば、いやしむべき者と思ふものゝ、憎くも無い黒江徹と馴れ親んだものかと思へば、脆くも甚しい厭氣も生じませんでした。

よしや身あがりして誰かに見込まれ、容色を持參にして阿島が其人の正妻となり課せたにしろ、宿屋出身との肩書は一生の間つきまはツて磨ツて消え盡きるものでも無いとはそも〳〵こゝで源介の胸――最負目の胸――に浮んだ辯護でした。

それでもと亦考へ直し、人の無い處へ行き、阿島の胸を割(わ)ツて見れば、笑止！その戀は五分と五分、金で敲き付けられた戀でも無ければ、賂で上皮を作つた戀でも無し、徹が五分の戀を運べば、阿島も五分の戀でむかへる、所謂相對平等でした。と思へば天地たゞ一人の可愛い妹、昨日まで小兒(ねんねこ)と見えたものが、扨も婦人一人前かと且はくすぐられるやうと幾らか嬉しく、そして憎くも無い相手、慕ひ合ふ生木割くにも敢へてまた忍びられず、それには夫で源介も又凡夫の一人、こツそりと胸中に疊んで出て來る慾といふ白痴(しれもの)も有り、儘よ笠やどりには大木の下、是も何かの縁だらうと出雲の神に運を被せ、見て見ぬふり、分からぬやうな分かツたやうな、にえ切れぬ體にして居る內に、徹に於ても亦同樣、濡れては最早露をいとはず、いつか言葉のぶつかツた拍子、懺悔がてら其明不明漠として居た秘密を開いて――即ち歸する處は身あがりさせ阿島を妾にする事に篤りました。

で、一寸金が入る、望みに奬(すゝ)まされて徹も今は勉強家となりすまし、書き掛けの律書の原稿早起晩寐で取りまとめ、金に更へて直とまた其金に羽を生やさせ、見る間飛ばしてやる放生會もどき、さすがの源介の借金も色を附け、進んで事をすれば纏まりも早く、わづか旬日(すこし)の內に一切の片も附き、更にまた今度は徹自身が窃かに金さ

へ餘所から借り、阿島の老父から源介迄之に阿島を加へて前後三人、それを東京へ呼び迎へ、芝の櫻田に家を求め、月々雜費を仕送りする事と爲りました。何處まで鈍ろくなつたものかと吾ながら徹も呆れる程、但し妾を置いたなどとは素より秘密中の大秘密ゆゑわづかに掛念の有る佐田をば金で口を緘ッて闕をふさぎ、兎角して一二ヶ月、素より源介も役に立つ人間、徹が片手間に加はつて居る織物會社の役員に推擧して月廿圓の所得を宛ひ、さうなれば源介も氣負肌で、阿島一人の雜用より外は徹がわたしても受取らず、三方四方まるく治つて、巧にそれで世の人の視聽とも免れました。

が氣負肌の癖、いくらも立たぬ内源介は優柔な織物會社員に飽き果てゝ、丁度また其時議員選擧も始まつた矢先、汗馬血に咽喉を乾かして土芥のやうに職を捨て、眞實眞底惚れ込んだ、即ち徹のために盡力して怪我もしたり、口もすぼめたり、まことに一生懸命はたらきました。働いたのも其實借金を濟して貰ひ、妹を世話される位のところで盡力したでも無いのでした。阿島に迷つた其事がもしも徹の瑕瑾と言へるなら瑕瑾、その瑕瑾を拔き去れば正直、公明、潔白の君子たるに於て一分も透かぬ、まことと不世出の人であるとはそも／＼其評の當否は兎にも角にも、源介が赤心から徹を見た鑑定でした。

一種の癖で源介も癇がつよく、從つて物に感ずる處も深くまた、決斷する處も早し、一時身を泥中に引き込んだ博奕をば如何にも奇麗さつぱり斷然思ひ切つた上、まづは先ある自分の身に於て公明清淨で無い處は無いと考へれば、いとゞしく前々から空中の樓臺であつた「眞正の壯士」と云ふ理想は凛然手もつけられぬ許りに氷結しました。滿腔の熱心、百錬の鐵もとろけろと、例の雄辯で血氣の壯年を鼓舞すれば鼓舞するに從つて味方も有り、一派の隊をも象れば押されて首領と言はれて面白くもなり、呑牛の英氣はいよ／＼勃動する許り、即ち信ずる處のまゝに徹のために東奔西走、美事それらの盡力で黒江徹も當選して、榮譽を荷ふ事には爲りました。

さりながら局外から言へば、源介にも一本入れる槍は有り、巾幗の綠から出身して、しかも世を恐れて其事だけは秘し匿して居る事、それだけが明るい廣原にある一點薄暗い穴で、自分もそれと知るものゝどうか、夫だけはと諦らめました。嗚呼大義大德には猶これ程でも達せぬものか、心よわい動物の人間とは云ひながら！

第　七

前回言つた通り美事選擧に黑江徹も、一つは源介の盡力にも因り、當選した其夜、兎に角心ばかりと急支度のこき交ぜの料理を料理屋から取り寄せ、火事見舞の人足に振舞ふかのやうな無禮講で前に奔走して與れた連中に飲食も爲せ、今か〳〵と待つて居る內當席の珍客の隨一人、即ち源介も四五人の配下とも〴〵やつて來て、見れば既に酒氣を帶びて勢鋭く怒鳴り込みました。

短刀生豚を啖ふと云ふ見幕、ばた〳〵と足音高く飛び込んで「諸君御苦勞」と只一聲、それに御辭儀を兼體させて睨めまはす目前には快杯の雨あられ——「闊君か（源介の姓）、御待ち申した」——「いや誠に此度の樊噲將軍、御盡力の甲斐が有りましたぞ」と口々に稱贊されて見れば坐心うれしく、飛び込んだ血氣もさて靜まつて稍すわり掛ける處へ誰とも知らず肩を引ッ摑む人、ふりかへれば當の主人黑江徹でした。

「ほッ先生、いや何處に御出でゞ——今見廻したが見えませせなんだ。」

餘程醉ッたことゝ見え、肩を摑まれた徹の手を其無手と握ッてぐッと引き付け、二度三度呼吸を吹いてしだらなく、飄矜に大きな聲をして

「先生、萬歲！御愛でと！萬歲！あゝあゝ實に有りがたい、正義の士が當選されたッ！諸君！正義の士が當選されました。諸君！正義の士が——蠻見得して思想士芥よりも汚らはしい滔々たる社會千百の紳士……また……また……顏色無しだッ〳〵！諸君！」

何かわが思ふ事だけを四道路に言ッて、曖氣一つ三つ、

どしんと音を爲せて坐ッて、右の手を展ばして何かぐづ／＼。

「はゝゝ、大分御機嫌だな、祝ひ酒か、」徹がやゝ取られた手を離しながら、「そして何だ、君、其手は何だ？」

言はれゝば目をすゑて、

「何だ？　正義の士は察しがわるいな。ぷッ、太白一盞、先生、願はくば君の御手から。」

「まだ飲むのか？　はゝゝゝ。」

「呑まないでまた！今夕は是れ如何なる宵ぞ？　國家のため太白を浮べて、先生、どうだ滿座の諸君、祝つても惡かアあるまい。先生、はゝゝゝ、もう代議士で、品格つくッて默つてゐるわ。先生、な、諸君、國家のための一大慶事……」

「いゝよ。分かつた。よオく分かつた。何しろ今度は君の盡力が與つて大に力有りだ。」

（なだめるやうに徹は云ふ、生醉と思へば程よくするそれを――よく／＼飲んだもの――親しくは耳に入れず、一人でわめき立てました。

「酒席にこンな馬鹿言ふのは、僕も惡事したゞけに先生はじめ諸君たちの不機嫌を買ふことゝは知つて居る、知つて居る――先生、こッ、知つてますぞ。知ッてるが、嗚呼、ま、何たる、今夜は喜ばしい晩だらうか、諸君！つッ……つき合ひたまへ、うんにや僕とつき合ひたまへ、この吸物椀の盞を直に祝杯として。飲めない？　これ位の酒量が無い？　ぷッ、馬鹿ッ！大弱むし！何を笑ふ？何がをかしいか！舊は關東第一の風流才子、な、好しか、今は日本一の忠憤壯士、關……關……源介が祝ひ酒に醉ひどれてぐづ／＼言ふがをかしいか？　だがよ、君、諸君、僕は諸君が僕を笑ふにも拘はらず、僕は諸君に奉呈するに滿腔の感謝を以てせんとすッ！何だ、ひや／＼だ？　よし、諸君、これは實だ、源介の醉中の言では無い。諸君も志しは源介と同じで、同じく徹先生のために奔走に東西して――糞ッ、笑ふなッ！どッちでもいゝわ、東西に奔走して、そこらの其金ばかい引ッ攫んで世を知ら

ない選擧人どもをも感化して終に今夜のやうな一大慶事を見るに至つたのだ。さうだ、諸君も共に語るに足るだ、えらい、僕——謝す——叩頭して——深く諸君に。諸君も徹先生の先生たる處を知ッたればこそ先生の爲にも盡力した……」

　もとより亂れかゝッた酒席のこと、流石鳴り出す拍手の響きに源介は喜悅滿面、罪も毒も無く高笑ひして徹に吸物椀の蓋をつき付け、無理やりに白身銚子を取ッて右左にこぼしながら酒をつぎ、それながら又以前の辯、

「野郎の酌ぢや、先生——ふゝん、それでも旨うムンすか？　有りがたい、斯う行かないぢやア、なア。時に先生、醉人(たはれびと)の一言でも聞いて下さるか？　げエッ、ぷッ、失禮。聞いて下さるか？　そんならば言ひますぞ。先生、負ふた子に淺瀨だ、よく聞いて下さい。先生、廣言だが、日本廣しといへど、關源介ほどの人物はあるまいな？」

　笑ひ出す一同をとろけながら扨凄まじい目で見回して、

「いや、もう滿座みな婦人だ、つまらぬ事にげエらげら、げら〳〵。先生、どうですな？」

「はゝ、成る程なア。」

「有ますまいな、源介ほどの人物は？　但し人物と一口に言ッても豪傑でも何でもない、一意自分が思ふ事を唯枉げられないと言ふ人物だ。日外(いつぞや)も先生に言ひましたな、源介は苟しくも非理に向ッて此鐵拳をふるふ所存だと。それだ、それですぞ。先生。決して——よしどんな世話を先生から受けたにしろ——私は容易にそのためには動かない、色々先生から源介も御世話をば受けた、但しそのために今度源介が働いた、卽ち恩がへしに爲たのだと思はれちや甚だ以て心外だ、殘念だ、忌々しい。諸君、聞きたまへ、さうですぞ。諸君はどうか僕はしらない、が僕は僕の信ずる處で先生を頭にいたゞいたのだ。何を信じたかと云ふと、外でも無い、先生の氣象に惚れたのだ。惚れた、首ッお惚れた？　世間滔々たる腐れ紳士が耻ぢて舌ア食ひ切つて死にたい程先生は潔白な君子

である、その氣象に源介惚れた。面白い、源介これ醉ッて居るが正氣だぞ、諸君。今に見ろ、先生が獨立獨行、清明潔白無垢正直の模範を日本國の代議として示す、滔々たる――又出たと？ いゝさ――滔々たる醜陋紳士の泥の中へつッ立ッて、それ思ふと飲まずにや居られないさ嬉しくッて。先生、こりや赤心です私の。私は姻戚――いゝや御世話によし成ッたからとて、先生が不潔な人であるならば目に當り次第この拳を先生にふるふから。よしか、さうですぞ、先生。」

傍若無人の放言快語、素より酒の上とは言ひながら聞けばさて一理は有る言葉、始めは冷笑したもの〻一座しんとして聞いて居ましたが、それも亦暫時、寂寞をやぶッて源介はまた轟かす霹靂一聲、――「醉ッた／＼、源介一生の大醉だ。」

第八

「阿島、今歸ッたよ」と言ひながら、取次の小女を後に置き去りにし、ずつと茶の間へ通ッて來た源介の妻、見て阿島もおやとばかり、疊んで居た郡內の胡衣を下へ置いたまゝ立ッて迎へました。

「誰かと思ッたら、まア兄さん、大層御ゆッくりでしたのねエ。」

指を折ッて見てにッこり笑ッて、「あの今日で十二日ですよ。」

すこし鏽は有るもの〻、それだけに無邪氣に聞えて兄から考へても可愛らしく、婉しく思はれる妹の聲にいとゞ心は滿足した樣子。長火鉢の前へ坐りながら側の座布團を足で引き寄せました。

「あらまた兄さん始まッた、例のやりッ放しが、ねエ、まア又。旦那に見られるといけませんよ。」

愛らしく窘めて卽座にまた改まり、

「それより何より旦那はまア御愛でたうムいましたさうですね。何より先結構で御父さんも大喜び。その事で兄さんも急がしくッて家へも御歸りなさらないンだとは

思ッてましたが旦那は入らッしやらず、兄さんは居ず、おとッさんと妾と兼(下女)と三人ぎりで夜なンざどんなに淋しうムいましたらう。」

喜びを分かたれては分かたれたる方でも心は勇む、苦味走ッた顔にさも嬉しさうな色を見せ

「本當だ〳〵、本當に御愛でたかッたよ。もういゝさ、願ッたり叶ッたりだ。だがね、阿父さんは？」

「今、なに、一寸買ひものに。」

「さうか、旦那が當選したのを阿父さんは何と言ッて居た？」

既に喜んだと聞いた、聞いてそれで猶聞きたさ、女々しいやうながら情が迫れば幾度も知れ切ッたことも聞きたくて、おや今言ッたに何うかして居ると怪しまれるのをさへも厭はず、阿島は何だか抜けた調子で、

「阿父さん？　ですから、大喜びだと言ひますことです。」

「阿父さんもか？　さう！左樣、來なくつちや。何しろ宜かッたよ。御前なんぞに委しく言ッても政治の事は分るまいが、そりや大變なものなのさ。だけれど骨折甲斐が有ッて宜かッた。本當に粉ゝ爲ッちやッた。粉ゝ爲ッちやッたが、願ひが叶ッたからそれで善い。」

眞實うれしさうな樣子、何と思ッてか阿島は穴の明くほどしげしげと視結めて居て、何か言はうとしてさて幾度も躊躇する體、が、果は思ひ切りました。

「兄さん、付かぬ事を聞くやうですが、ねエ、兄さんは本當に旦那の今度の御結構を嬉しいと御思ひなさるの？」

なる程付かぬことを言へば言ふもの、何か目的無しに人のため奔走を爲るだらう、分かつたことをと流石に源介も心中少しむッとも爲ました。

「何を言ふンだ、嬉しく無いかと？　何をとぼけ出したンだ？」

「いゝえ決してとぼけません。」

屹として居直ッて前後を見かへり、忽ちに聲をひそめ

ました、が、幾分か震へ聲、——

「兄さん、今別に人も居ず、また阿父さんに聞かれゝば猶面倒ですが、居ませんから丁度ようムいますがねエ、兄さん、妾の言ふこと能オく聞いて下さいよ。」

如何にも以て意味有りさう、何ごとを思ひ付いたのかと源介も殆んど亦薄氣味わるく、頗るの剛膽特に相手は婦人ながら扱据わッて掛られゝば默然としてまじ〳〵しました。

「兄さんは喜ぶと仰やいますが、ね、妾やそれが本當かどうか……」

はやくも目には差し含む涙「本當に嬉しいと御思ひなさるの？」

「どうしたんだ馬鹿々々しい。本當も嘘も入つた物ぢやァ……」

「いえ、そンなら夫で宜うムいますが、ね——ぢや妾の思はく悉皆言ひましやうか。よく御聞き爲さいましよ。」

暫時は唯默然、やうやくに頭をもたげて言ふのを聞けば、ちッ！意外の事を！

「兄さん、そんなら何故兄さんは處も有らうに幾人も人樣の居る前で……居る前で旦那に向つて醉ッて無茶苦茶を御言ひなすッた？」

おや何うしてと呆れる源介の言葉を抑へ、

「どうしてぢや有りません、ちやんと人から聞きました。そりや成る程旦那の爲に兄さんも大骨折りでしたらうが、何ぼ何だッて、いくら御酒に醉ッたからッて——兄さん、生醉本性たがはずと云ふぢや有りませんか、えッ？　上げたり、下げたり、出放題、大恩の有る旦那樣を滿座の中で冷かして……」

「冷かしや爲ない」と只一句、たゞし直に潰されました。

「何しろあンな事を言やァ旦那が安くあるぢや有りませんか、あたしや〳〵現在妾の兄さんが——人も有らうに兄さんが——醉つて苛い事を言ッて——それで旦那の目方を輕くしたかと思へば〳〵、妾や、兄さん、腹が立

ッて――兄さん、さア妾の言ふ事が無理ですか?」――下を叩いて泣き沈まれて――あゝ人は人の心を知らぬか? 併しながら可愛らしい胸、あゝ一意其人を贔負して、常に殆ど似ぬ非常な意氣込み、兄を批難して一分も假さぬ、さて／＼情には厚い婦人。批難されて見ても扨愛らしい、ことには阿島の言葉が無理でもない、何と挨拶しやうかと胸中は潮の上下。默然として下を向けば、阿島はいよ／＼口惜しい様子、つめ寄ッて、

「兄さん!」

きッと爲ッて猗さし寄り、「私の云ふ事が無理で無けりや今度妾の見て居る處で屹度旦那に御詫を、兄さん。マア、さうだらうと思ひます。」

嗚呼割ッても見せたい胸。いかに醉ッても本性を亡くなす源介でも無し、思ふ所のあればこそ酒に託して放言した、それを人は知らぬか、蛆虫!婦人氣に妹は只怒る、素より夫も無理でない、たゞし謝まれとは何たる慘酷。謝まッて仕舞へば、實も蓋も無し鐵頭になッて罵しり飛ばした計畫も水の泡、と、さて思ひ切ッて明かさうか? 只迷ふ。目を瞑ッてじッと觀念すれば、阿島は憎らしいといふかの聲、

「人ッ、だまッてるよ。」

わが子と思へばこそ叱る、愛し且敬すればこそ苦言をも言ふ、其内心を叩けば源介が徹を思ふ情は正に親が子を思ふと同じでした。徹の人品には敬服する、あはれ之をして流俗の瓦礫の中に一點晃々たる光を發する連城の璧と爲り通させたいと思ふ一念は其實酒を借りて溢り出て、思ひ切ッて放言したのでした。糟糠の妻はやがて飽きる世の中、昔の氣象は境遇によッて變りたがる世の中、むかし肥馬輕裘を人生事業の大毒藥と爪はじきしてやがて出身すれば髯をかまへ、觀世紙捻に羽織の紐結んだのは己ではないと云ふかの顏付き、何なら御立派な官宅へもぐり込みも爲たいなどと熱を吹きたがる世の中――油斷のならぬ世の中に且揉まれ、且磨られ、角が無くなるのか、節が減るのか、案外に折角の氣象を徹がもし無く

なすやうな事でもあればと實はそれを考へ出せば、苦勞性とは言ひながら源介も氣は揉めて、卽ち酒を口實に皮肉な警戒を吹き出した譯。

滿座、しかも緣の極めて濃い滿座の中で警めたら他日むら〳〵と惡念煩惱が徹の胸中へ湧いた時にも、良心！いくらか抑へる處も有らうし、また列座の面々を證人に其時諫言を入れ易い都合も有り、かた〴〵時は失へぬと志しての上の狂言でした。

凡夫！妹はそれらを知らず、たゞ生醉が放言して、酒席の不興を招いたと思ふ、それもとより無理でも無い疑ひ、たゞしそれがため徹に詫びろと？　それは又無殘きはまる！

徹はそも〳〵酒の上の狂言放語とのみ見て取ッて心に掛けぬか知らず、たゞし全くそうとのみ見られるのも骨折り甲斐の有つた嘶しでも無し、よしや憎まれてもよし、醉人の讒言ながら取る處は有ると切めて一點思ひ付いてくれゝばそれが本望。むしろ醉興と見られずとも、生醉本性たがはずと思はれた方が望ましい、——何の、跡になつて詫び入れの？　詫び入るのも難くは無い。王侯貴人の前に下げぬ手も「正直公明潔白」と言ふ物の雛形黑江徹の面前では夫はもとより下げてもいゝ。が、しかし前夜の言葉は亂言だ、放言だ、酒の上、根も葉もない狂言だと言ッてあやまる事は出來ぬ、いや、あやまるに忍びない。關源介といふ一匹夫、匹夫ながら道理は述べた——源介は酒を飲んでつまらぬ肉欲に耽るゆゑ貴くない、但し其ことは道理、それだけが面白い、源介をばいやしむ、源介の口の道理をば敬する——と、斯う思ッてくれる位の量が（もしも徹が君子なら）徹に於て無くてはならぬ。あやまるの、詫び入るの、そンな糸瓜があるものか？　快刀こゝに亂麻を斷ッてさッぱりと心は決まッた、それながら扱人よりも情には深い源介、一意惡意無く徹を思ふ妹の心術それ思へばまた氣休めも言ッてやりたし——思ひ入ッて前後二三實情に迫られゝば自然に首は低れました。

詫びるのが否だと言ふらしい顔付きは誠意一點張りの阿島の癖にも障る、忌々しさに且はあふれてとまらぬ涙、それを酌み知らぬのが本當の男子か？　つめ寄ツて、

「兄さん！」手を出して衝かぬ許り、「妾や御酒の上ばかりで唯兄さんがそんな事言ツたとばかり今が今迄思ツて居ましたが、ね、そンなら兄さんは初めから覺悟して、心して、さう口任せを言ッたンですね？」

「……」

「あら默ツてるよ、人。兄さん、ま、何たる淺ましい――旦那の御恩も忘れて仕舞ツて――あの本當にいよいよそンなら御詫を爲さいませんね？」

一歩々々切り込んで期を押してもいつかな答へぬ無情な相手に、腹立たしさは骨身を熬る、熬る、それをつらつら見れば偺口には言へぬものゝ、誠心の限りの愛らしさ。脆いが涙も出さうに爲る、意中を打ち明けたいは山々、たゞたゞ爲を思ふための意地――そもそも婦人は口が早し、實意をこゝで打ち明ければやがて徹に言ふのは必定、有りの儘に言はれては他日又諫めを言ふ場合ひにも貫目は自然かろくなる譯、よしんば妹に惡まられやうが、金輪際々々々、こゝで何う有ツても打ち明かされぬ。

形死灰の如しと言ふ有り樣、火箸を取ツて灰いぢり吾を忘れて灰の中にうかうかと書いた字を見れば「正」の字、「義」の字、「公」の字、「道」の字！無駄に聞き澄ます鐵瓶の沸く音の松風、人を思ふ胸と共に紅熱して折々は感慨の火花も飛ぶ櫻炭。氣が付いて見れば嗚呼二人が二人とも――火鉢の前に座ツたまゝ、さして火の戀しくも無い時候に、言葉だゝかひ終に一分も身を退かず、今さら物珍らしいかのやうに阿島は源介のうつむいた顔をしげしげ眺めて、もはや斬り込んで掛る言葉も無く、その言葉だけの溜息をわざと又音たてさせて漏らすばかり、がらりと開く格子の音に吃驚する途端、早く取り次ぎに轉り出した横ぶとりの下女が「御歸ンなさいまし。」父親が歸ツて來ました。

兄弟喧嘩もぱッたり止んで物澄まぬ顔色が二人の容貌にわづかにこびり付いて居るばかり、父親も變だと思ッたものゝ聞きもせず、にこ／＼して「源介、とうとう旦那は御結構だッたな」と言へばうなづいて勢なく「はい」と答へる跋のわるさ、阿島はつッと立ッて次の間へ出て行きました。

其次の日忍んで徹が阿島の處へ尋ねて來ました。見れば流石苦勞にやつれた樣子、親子揃ッて誠實の喜びを述べれば扨やつれたながら浮々した色にもなる——酒を置いて其夜は宴で更かしました。

阿島に取つては生憎殘念源介が居らぬゆゑ、哀れ首筋を抑さへ付けても詫びさせることも爲らず、人靜に夜更けた上のさし向ひ、兄になりかはッて千言萬語くれ／＼も曩の夜の兄の非禮を詫びれば、さても大氣な！ありがたい！深くは氣にもせぬ樣子「なアに酒の上だもの。根も葉も有ッた事ぢや無い。」

聞いて一安心して嬉しがる阿島の婦人氣、そもそも徹の此言葉が赤心ならば、無殘、源介の誠意は水の泡と爲ッたものでした。

とう／＼手も下げず、誤りも詫びもせずに源介は過して仕舞ふ。

詫ずに通されて當座は阿島も兄ながら源介を剛情のかたまり、我慢の親玉と憎んだものゝ、素より骨肉の間の反目仇視、五本の指は切ッても切れず、經つ日數に冷まされて忘れるとも無く忘れゝば、再びそこに一家團欒、和合も春も回ッて來て、今は將來の徹の出世、名譽、好運、それらを願ひ望むばかりまた他事も無く揃ひも揃ッて、思へば篤實な一家が唯その方にのみ心を傾けました。

傾けてそれから二三ヶ月、既に當選の名譽の花を徹も凱陣の帽子に簪し、黨中で用ゐられる羽振りもよく、今日はこゝ、明日は其處と會合相談に日を送れば、近頃の日々の新聞紙上雜報に黑江徹の名の乘らぬ日も無く、黑江氏々々と頻々書き立てられるに付けて阿島も阿島の父親も夢か現の心もち。覺束ない目で雜報の中から阿島

も黒江徹とある處だけを穿り出して、「阿父さんけふもまた、是御覧なさい」と披露すれば曾て一度も新聞紙の第一面第二面等堅種づくめの處は覗き込みもしなかつた父親までが目鏡をさがし出しての大喜び、しかも徹が來た時には可愛らしい御坊ちやん、阿島ぼッちやんが新聞取り出し、あのこゝにも出て居ますのねと能く覺えてちやんと場所を指し示して見せる實情、さすが言はれる方も、笑ひにそれをば搔き消すもの、よく氣を付けるものだと感心すれば且は心うれしさに胸はどき〳〵。

一身の傾向を婦人の爲に付るといふ程でもなし、が、併し阿島に喜ばれ、喜びを頒たれては其喜びを引き續けたいとも思ひ、いよいよ奮發の念慮も榮えて、したがつて源介の肩身も濶く、ます〳〵將來が賴もしく成つて行きました。

が、平和は終に久しくなく、得てまた魔に破られたがるもの、忽焉として仄に傳はり出した一つの流言、聞き耳を引き立てれば、そも〳〵何ごと！正に徹の身の上でした。流言も流言、聞くも忌はしい不潔な事實、眞僞如何を言ふまでも無いものながら何しろ聞けば源介の胸にさはりました。

正に徹を以て公明、潔白の君子、卽ち泥中の蓮と源介も尊崇して、酒席でも狂言したとほり、一つは唯その一ケ條からして是を唯一の人とも崇め選んだといふものを——不快！今聞けば大反對な意味の流言！

民間の黨派に向つては體裁のいゝ假面をかぶり、そして徹は政府部内のある筋と不思議な氣脈を通ずるとの事、卽ちこれが流言でした。その證據にはさしたる金の生る樹も無くて徹の革鞄はいつも大束の大黑で充ちて居、折り〳〵は不思議な變名を以て政府部内の顯官に書狀の往復をすることもあり、または手車を持つても居ながら往々夜更けて微行して何處か行く先のわからぬ處へ行く、ことも有るなど、劉が傳へ、張が應じ、天晴事實らしく聞えても來る、それを聞けば正直一途の源介の身に執つて見て其不快、眞か、僞か、さア何うして正さうかとの

懊惱は胸一杯になりました。

なる程考へて見れば徹の身に於て思ひあたる處もあるかのやうでした。嘗て徹の家の紙屑籠を撰り分けて、屑屋に賣る前あらかじめ調べたとき、徹の自筆である筋の顯官へ向け宛名をし、一種わからぬ差出人の名を記した、書き損じの狀袋を現在たしかに見たことも有りました。

金の有無、それらはどうか分らぬものゝ、如何にも往々徹が忍びあるきするのは亦たしかな事實でした。時にその傳で阿島の家へ來ることも有る、それや是やの說では無いか、と思ひ消して仕舞へばそれ限りながら思ひ消し切れぬところが凡夫でした。また打ち壞す考へも出る、たゞし其外へまはるか知れず、どんな秘密の穴の中へもぐり込むか亦知れず、それには夫で又思へば、さて意の迎へる所に因るか、何處と無く徹の擧動に間々臭い處も有るかの樣子、疑惑はます〳〵濃く爲りました。

念のため徹の許を尋ねてそれと無く樣子を探る、探つても其甲斐は更に無く活けみ殺しみ、影も有るやうで、また無いやうで、果は無茶苦茶に胸中が混亂して頭が病めて來るばかり、事實も何も得られぬ果は只こぢれ出すのみでした。こぢれて懊惱は晴すに由無く、また安々と家へも歸れず交際する仲間の壯士と携へ合つて一つは風聞の出所をたしかめかた〴〵處さだめず押してあるけば、歩くに從つて氣になる事ばかり、風聞や、浮說もとより取り止めも無ささうながら徹の身の上怪しいとは大抵が言ひ傳へて居る聽梅、正直一三昧、むしろ判斷の乏しい方の源介は只々くるしみに苦しんで、せめてもの鬱晴らしと深夜往來を歩いて居る間の出來心とてとある道端の料理屋へある夜颯然たゞ一人で上つて見ました。

第九

料理屋でも怪しみました、客とは云へ、源介の風體が如何にも以て奇怪な有り樣、深靴に糸織の着流し、縮緬の兵兒帶に胴中を灰俵とくごッて、八口の身の裂けた、それに紐無しの一種異形の羽織を引掛け、凄ましい面色(かほいろ)

してづか〳〵と上り込みました。出來合ひの茶漬料理屋で無いだけに一方も變だと思ふ、探偵か暴人か、强迫か、錢もらひかと且は氣を許さず、而も運わるく帳場に目利の居なかつたため座敷が無いと斷りもあへず、早く上へ上り込ませて女中どもは互に目と目、順番も特別に狂はせて氣轉の利いた大年增が一手に引き受け、とある片隅のいい加減な座敷に案內しました。

案內されて座敷を見れば、人を馬鹿！見くびり下げたか、名ばかりの根岸の兀げた床が形のみ付いたつまらぬ座敷に扨心は面白くも無し、「座敷はたツたこれだけか」といとゞ目を凄くすれば、すは來たと云ふ風體、「はい」と澄ました馬耳東風。

一ひねり捻ツた早速の鼻ぐすり、わざと又音の立つやう茶盆の隅へ戛然と中てゝ投げ出せば、重量は引かずとも素より馴れた目正味もわかる、是は感心、姿に似ぬと內心ふたゝび吃驚してさすが又外らさず挨拶。

「御氣の毒さまでムいますが、どうも奥が只今ふさがりまして」その跡は祝儀の御かげ、「少々御待ち下さいますれば差し繰りをいたします。」

さうかと點頭いて物やはらかく二三品を吩附ける處を見れば滿更の生でもなし、見掛けに似ぬ輕口さへ折り折りは挾む樣子、見れば恐ろしい顏ながら一種の笑顏も間々見えて捨てた客でも無ささうでした。

臺處と帳場とは此類無しの奇妙な客の浮評で持ち切ツて猶鑑定は是ぞと附かず、ことによると誰樣かの忍び步きか知れやしないが終に儲け物の駄評でした。誂へを持ち運ばせ形どほり飮みはじめる祝儀の光で糊り付いて御酌々々と追從する女中、それに酌をさせたのも當座の內、七八盞あふりつけて稍耳のあたりが熱して來るに從つて留め切れぬ感慨が時を得たといふ體で燃え立ツて來る、麁末な掛額、「氣象萬千」と只いはれ無く掛けてあるのも胸に砭して、名は知れぬ床の一軸、似非牧溪の猿猴水月も迷ひ易い人間に似た體と肝にこたへて、蠟燭のきらきら、せめて一風消えてもくれろ、熱涙もいつかほとばし

ツて生稽紛らかす山葵（わさび）も最（も）う無い。

些し獨りで靜かに飲むから御前こゝに居ずともいゝ用があればまた呼ぶと女を立たせて唯一人蕭然として腕こまねき、考へ入つた間も無い內、ばた〳〵と横廊下を通るやさしい足音、二人づれと思はれる樣子、やさしい聲の應答が沈思の耳にも入りました、——

「姉さん、何の御相談なンだらうねエ、今夜の御三人とも醉はないでさ。」

「どうせ妾たちを拔にしたんだもの、込み入ッた事には決つてるわね。だけれど今夜の黑江さんが大持てに持てゝるよ。」

黑江さんの一言は源介の耳に鳴りわたりました。はッと思ッて立ッた中腰、透かさず跡の聲を聞き送る、

「黑江さんが何か御前に賴まれてるンだッさ。」

「何を？」

「何だかそりやァ——けれど御上のこッたッて。此樓（ここ）の旦那がさう言ッたもの。」

聲の足音と共に消え失せる、消え失せぬのは黑江の一言、しばらくの間は腦中に幾度も其聲が復活しました。黑江と言ッては少ない姓、そも〳〵別人でも無ささうと思ふ、思へば矢も楯も無くなつて來る、きッと一思案、手をたゝいて女中を呼びました。呼んで紙入を搜り出し、

「姉さん、腹ッこをしやるンだが、廊下のぶらつきけないかえ。」

「いゝえ、どういたしまして」

「庭へ出ても？」

「はい、も、御自由に。」

「そンなら紙入を預けて置くよ、食ひ逃げをしない證據よ。」

あら否ですよとの表向（うはべ）ばかりの言葉を聞き捨て、羽を展したやうな心もち、まづ便所へ行ッてからぶら〳〵彼所此所あるきまはる、其目的は黑江の座敷をさがし出さうと一點ばかり、奥の隅の御神樂の中二階にさし掛ッて上らうとする處、奇怪！女中は追ッて來ました。

「もしそちらは塞がツて居りますから。」
飲み込んだ振して早速の謀略、
「知ツてる、黒江さんが居るンだらう？」
おや不思議な、よく知ツて居ると思ツたものゝ、氣を挫かれて匿すことも出來ず
「御存知で居らツしや……」
但しこちらは充分聞かず、
「己は黒江の親友だ。今夜こゝへ來るとの約束が實は前に有ツて、それで己も來て、一寸とぼけて一人で飲んで見たンだ。」
言ひ放してすた〳〵階子を上り掛け、遠ざける爲の苦しい手段、
「上等のまにら卷を一本持ツて來てくれ今すぐさア。」
六かしい場合、一氣呵成と堰いてかへして、あはたゞしく、そして音を立てず階子をのぼれば、横に屈竟な三尺四方の行燈部屋、旨いと舌うち、そツと其中へもぐり込んで耳をすませば、果して座敷には間ちがひの無い黒江の聲、
「おや女中か知らん、足音がした。」
呼吸を殺して黒暗の中に目をねむり、聞き耳を引ッ立てると知るか知らぬか中では深く掛念する體、聞き咎めたと思ふ間もなく南無三寶！障子をがらり、黒江が廊下どツしり蹈んで、聲からで聞けば小首を傾けたかの樣子、
「何でもこゝで音がした。」一際聲を張りあげて、「誰か來たのか？　女中——女中でも來たのか？」
言ふ聲は沈と響いて聲の絕えるや否や引きつゞいて中々に寂寞が耳に立つ計り、寂寞といふ一種の聲がさし代ツて響く簾梅、鼠一疋の足音もせぬ體、さすがの黒江も迷つて居ました。
一座の相手と思はれる人物、誰か聞き馴れぬ聲ながら黒江の外には猶二人ばかりの聲がして、それも又同じ樣に切りと人の來るのを氣にする恰好、たゞ〳〵其處だけ聞いても分かる、何か秘密の相談とは。それにしても此

茶亭に黒江が潛ッて居やうとは遂ぞ知らず、よし兎に角、伴待の人力車の影さへ見えなかッた扨はよく／＼の秘密とあッて近處の四角で乘り捨てたか？　としてさて何の爲あれ程に躊躇して額をあつめて相談するのか、或は言ふ評判どほりの事實でも有ることか？　まんじりとして闇の中、見えぬと知りつゝ動もすれば目を見開き、また考へて急に閉ぢ、つくづくと亦思へば、あゝ下手な忍びを吾ながら行ッたもの。一本口さぐられても逃げる事もならず、のみか手際が案外下手で終に早く黒江たちに怪しいと心附かせ、彼是と立ち騷がせて見れば最う此上しづまッて探り得られる望みも無い。

　その失望にかてゝ加へて胸一杯になる苦勞、何の相談かと分からぬだけいとゞ苦勞も量を增して、察られるかの物思ひ、それにしろ、見付けられていゝか、わるいか。むしろ懺悔後悔して名唱ッて出やうか。それとも何處までも隱れて見やうか。とつおいつの胸その胸に、無情！打ち込まれる五寸釘、畜生、來ずともいゝに女め早く烟草をとゝのへて來て、階子段の下まで來て、しきりと前後みかへる處を早く黒江に認められる。

「御前、おい、これ、今がたこゝらへ來たか？」

むづかしさうな屹とした問ひ、かねて立ち寄ることを禁ぜられた覺えの有る身とてぎよッとも爲る。おどおどした返答で、

「どちらへで……ムいます？」

「こゝらへよッ！」きはめて鋭く。

「いゝえ、御階子の上へは一寸もあたくしは……あの此烟草を持ッてまゐりましたので。」

「烟草、どうしたンだ？」

「御客さまの仰りつけで唯今この烟草をとゝのへて持つて參りましたのでムいます？」

さア大變、いよ／＼黒江は詰り寄る、

「御客さま？　客がこの近くに居るのか？」

「居らッしやるでもムいませんが……」

「何を今そこで尋ねて居たンだ？」

「それは彼の……御客さまで——斯うなンでムいます。烟草を仰り付けの御客さまが只今までこゝらに居らッしやいましたから。」

「それで其客が何處かへ消えたのか？　うン、成る程、そしてどんな客だ？　それに又、先刻あれ程言ひつけといたに、なぜ客をこの邊に立ち入らせた？　何だ、客は、何ものだ？」

いよ〳〵詰められて匿すこともならず、一伍一什を殘らず語ッて決して立ち入るのを許しはせぬ、差しとめた處が烟草を持ッて來いと急がせられ、餘儀なくうッかり其用事を果して實は影を無くなされて仕舞ひましたと別段にいつはりとも見えぬ陳述、聞くその氣味わるさ。客の名を聞いても女はそれは知らず、人體を聞いた處では、

「そも〳〵犬では無いか知らん。」

と思ふと總毛立つ、今の客は幾組と言へば、貴君方と其消えて無くなッた御客との二組ばかりと答へる、いよ〳〵其奴あやしい曲者正さずには置けぬとばかり、直にまた一思案、黒江は仲間と相談し、聞くことが色々有るからこゝへ來いと恐れる女を急き立ッて座敷へ歸ッて障子をぴッしやり、忽ち押へたやうな聲になッて何か問ひ正しはじめました。

天か、運か、幸か、不幸か、あはや行燈部屋の開きの把手に今や黒江の手がかゝるかと思ッた處を、意外、座敷へ立ちもどッて——あゝ〳〵逃げろといふ辻うらか？　但し逃げれば跡が開けぬ。

逃げまいか？　とすれば運が有るかも知れぬ。逃げやうか。逃げまいか。逃げたくも有り、殘りをしくもあり、あゝ〳〵一人で一人の片がつかぬ。

第十

座敷の中は最早細語と一變して行燈部屋あたりからは公冶長でも聞き取れず、其癖人ぢらしの咳などがなまじひに折り〳〵聞える始末、とかく思ひ煩ッても扨煩ひばえの爲ぬ始儀に漸く胸も定めました。無駄だ最う甲斐は

無い。逃げ損へば却ッてまづい、今が本當に天の與へかも知れず、思ひ切れと許り、さて今迄は念じて〳〵押へつけた戸尻を此度はまま片手で支へて、弓矢八幡、音してくれるな！開き戸の常とてうッかり手を許せば鳴る、下から支へて切齒して、それこそ涙も出るばかり、辛く脫け出せば扨また苦勞は層一層。今！この切處！今もし障子を開かれたら！それこそ全くの一つ呼吸！今更のやう、風邪のなほり揚句の鼻のぐず〳〵が引ン發ッてやりたい程に憎く、きしむ床板、何なら手を合はせて拜んでゞも暫時音をさせたく無い。紅樓に眠ッた事も有る身、錦筵の上に座つた事も有る身、但し窃盜になッた味はまだ知らなかッた身、その身が始めて窃盜の氣持ちを經驗しました。豫ねては据わつて居ると自惚れた胸が、何の！譯も付も無く躍りをおどつて、正に以て五尺人並の男手の身體が尺寸の鑄型の中へ押しつめられるかの樣でした。臆病！これで壯士が勉まるかッ！吾と吾を叱る、叱るそれも、しかし言ひ譯だけ、直にその「勉まるかッ！」がぐつと縮んで足だけが忍んで急く——どうか斯うか見附けられずに下廊下、下り立つた時の胸の輕さ。

　素より何も破れかぶれ、活きるか死ぬかの場合ひならば却ッて是程の心痛は無いもの丶、まだ〳〵望みを絕やし果さず、見付けられて暴力をふるふ抔の念晴らしの處の無いだけにいとゞ心を痛めました。下り立つた時の胸の輕さ、千鈞の包みを背中から下した工合ひ、殘りおしいもの丶扨あられず一目二階を睨み上げて、流石また博徒でも爲ただけの分別、前の自分の座敷へ直には歸らず、庭下駄を忍んで穿いて庭の緣味へ足を運び、それからして立ち戾つて前の座敷へ歸つて來ました。

　預けた紙入、それがこゝに大苦勞の源でした。中には二三の書付も有る、人に見られては名を知られる、料理屋に知られる丈ならまだ構はず、無殘、この紙入は黑江徹が見知つた品、そも〳〵女中が問ひ正され、何かの言葉の次手から其紙入を——思へば大變——其紙入をもし萬一徹に見せたらそれこそ直……

と氣が付けば思案に及ばす、また氣は急く、慌しく叩く手を聞き附けて暫時して顔を出したのは前のと變はつた女でした。

空とぼけ、「おやお前か？　さツきの女はどうかしたか？」

「へい、只今一寸見えませんので妾が……」

「どうした、何處へ行つた？　先刻煙草を言ひ附けたに持ツても來ず、それに又紙入、さツき紙入れをわたして置いたに——おい、こら、己は勘定して歸るンだ。紙入れ、貴さま知つてるか？」

「おや左樣でムいましたか？　御懐中物はたしかに帳場で御預り申してゞムいます。」

取りに立つ姿を見送つてまづは〳〵一安心。但し氣は同じく急く、紙入れを取つて來る間も待ちどほしい。不圖また忙がしさうに手をやつて頭をいぢればばらツと音して引ツ掛かツて居た木の葉が落ちる、それを見て獨りにツこり、落ちた葉を、何事？　頭へふたたび載せ、ひとり言——

「うまい、庭をくゞツて來た證據になるツ。」

二階の秘密な處にあツた今の椿事は帳場で些しも分らぬ樣子、紙入を勘定と共に携へて其女も持ツて來ました。奪ひ取るやう、勘定と合はせて勘定をそこへ並べる——立たうとする女中を呼び止め、

「すぐ歸る。釣は入らない。」

あまりの性急かつは女中も呆れたものゝ、さて歸るといふもの引き止められもせず、左樣ですかと答へる途端、源介が頭をかけば果して再び木の葉は落ちる。おやと不審がる女中をみかへり、笑ツて、

「何さ今庭を散歩して來たものだから。」

それから冗談二つ三つ、彼とこれ廊下へふりまいて步きながら早くも出口に差し掛りました。穿物を穿く。となるとまた殘りをしゝ、送ツて出る主人に向ツて何氣なく澄ました顏、

「黑江さんは大分長居だね。實は己も呼ばれたンだが

あンまり寂寞(ひつそり)して居るから入りにくい。」

黑江の相手を聞き出す了簡、但し此位で本音を吹いて料理屋の主人が出來たもので無し、聞えたやうな聞えぬやうな呉越いづれとも附かぬ挨拶をして、それにしろ、怪しい客と思ふかの體、取つて掛かれぬえへゝ笑ひで送り出して、「御機嫌宜しう。どうぞ又お近い内に……」

外へ出て一安心。安心と思ふに付けても、煩惱！殘り惜しさも殘り惜しく、さア立ち離れるに忍びがたく一歩行きかけて二歩引き下がり、又往來の人に怪まれやうかと何氣無く無駄路を歩いて再び元の處へかへり、兎角は黑江等一組が立ち出て來るのを待ち受けました。

待ち受けて居る間も無く、不思議な人物が二三人つれ立ツて茶亭をきツと覗き込んで行き過ぎました。なかしいゝ見送る間、直にまた立ち戻り、怪しいのは三人が何の用事かたちまちに別れ／＼と爲り、そこらを彷徨(うろつき)出しました。無論こちらも身を忍ぶもの、顏を背けて帽子を深くし、面體をば成るたけ包む、包んで忍び／＼相手の樣子を見れば、何か同じく待つ有さま、さては黑江たちの居るのを知つて附け狙ツて居るかと思へば、さすが心配、いよ／＼立ちれなく爲りました。茶亭の向側にあツた屈竟の銘酒屋、是れ幸とつツと入り、飲みたくも無い麥酒を言附け、手近の新聞を繰り廣げ、見るは附けたり、絕えず休まず、目を茶亭の方へ向けて黑江等の出て來るのを待ち受けました。彼是する内一時間、それでも黑江たちは猶出て來ず、前の三人の妙な男共は猶立ち去らずうろついて居ました。

第十一

目的(あて)も無く銘酒屋に腰を掛けとほし、一時間もやがて立つ、經てはもはや十一時、夜店もそろ／＼片附き掛かる、いざ歸れとは云はぬものゝ銘酒屋でも不審を凝(こら)して薄氣味わるいと思ふ心はおのづから顏にも現はれて源介もほとんど氣は氣で無し、どうしたらと分別が中有にさまよふ内、これは如何、さア何時の間に歸ツたことか、

茶亭では表の門をがらめかしてぴッたり〆めて仕舞ひました。

此體は源介にも意外でした。おやと仰天、吾を忘れて立ち上り、念のためと銘酒屋の入り口の硝子戸を開け、顔をさし出すそれと同時猶立ち去らず彷徨ッて居た例の三人と顔見合せれば、向ふは早くもこちらを認める、一人がつか／＼駈け寄つて、

「關君！」

聞いた聲だと胸はどツきり。但し今更包みもならずどなたですと問ひかへせば、差し寄ッて向ふは帽子を取る、取る共顔をよく見れば、何の！さて／＼風聲鶴唳、同じく仲間で運動する是も卽ち壯士の一人猿橋一道といふものでした。

「貴君でしたか、さッぱり左樣とは……ぢや何ですな矢張り彼處の……」

茶亭を指さし、「ことを御存じでしたか？」

「はア先刻聞きました。」

「誰から？」

誰からと素早く言はれて返辭も無い、それに何の氣も附かず源介は猶一歩進め、

「御同伴が二人か有るやうでは厶いませんか？　誰々です、あれらの方は？　それに又貴君、そこの密會と云ふ事を知ッて何に御出でゞあッたのです？」

何心無く聞く、それに滿足な答へを相手は爲ず、只何でも無いとは不思議な至り。をかしいとは心も付く、猶深く問ふ氣に爲るまゝ重ねて何か言はうとする其口を忽ち向ふは押へました。

「黒江さんが、併し、裏口から歸られたでしやうよ唯何と無し待ッて居ましたが、歸ッて仕舞はれて望み斷絕です。僕はこれで歸りますが、貴君は？」

兎角逃げ支度、それにつけ何やら心得がたい樣子といよ／＼正しくなり行く物の、さて又人の勝手、押し切ッて足を引き駐めてつべこべ言へた物でも無し、氣には掛りながらも諦らめました。ことには何さま黒江も歸ッた樣

子、この上立ち明かす詮もないことゝ思ひ決めて、そンならと別れの挨拶を行へば、濟むや否や猿橋は逃るやうに別れて行く體、ます〳〵心得がたく爲りました。兎も角もと銘酒屋に釣も取らず錢を抛り出し、引きつゞいて見えかくれ猿橋の後を追ひ掛けて二三町、不運、其甲斐は終に無く、闇に三人の姿を見失ッて仕舞ひました。

どうしても今夜の種々の事は神で無ければ分からぬやうな事でした。つら〳〵とこゝに世間の噂――黒江に就ての――を思ひ出しぶら〳〵と歩く路すがら首を低れて考へれば、一憂が一憂押し合ひ急き合ひ競ひ立ちました。世間の噂では斯うも云ふ――黒江は民間黨の假面をかぶッて親友を賣るとの事で、成る程今夜で、誰か相手は分からぬものゝ、奇怪な密會を開いたのも所以有りさうにも思はれました。常に黨中の密會いつも徹は腹心の源介にそれを知らせぬ事は無い、今夜それだのに知らせぬのが第一の不審でした。其不審に附け加へて又も一つの奇怪な事實、猿橋の素振が妙でした。二人も壯士を同伴して終に其人を紹介せず、それのみか問ひ正す言葉に明亮な答へも與へず、何か思慮有りさうにして立ち去ッた事どうしても不思議でした。之を思ひ彼を思へば前後目的を得るに迷ふだけ氣の揉め方も一入で、卽ち黒江のためを憶ふ一念考へれば可哀さうな程でした。

實際どういふ事が有るか、そも〳〵黒江が世評のとほりであるか何うかは知れぬものゝ、勢ひ最う斯う迫ッて來れば兎も角も世評の通りを今一應黒江に陳述して何分の答へを聞かなければ爲らず、聞いてそして萬一其處に怪しいと思はれる箇條が有ッたなら身を粉にしても矯めなければならぬ、と胸もさだまりました。初夜過ぎるだけ大に屈竟、密話には甚だ面白いとそれからして足は直に黒江の家に向ひました。行き着いて見れば門はメてあり、嬉しい主人は必歸ッた。案內を言ひ入れゝば豫ねて知り合ひの取り次ぎが出て來て夜更だのにと不審な顏つき。

「なアに泊りに來たンです。先生は？」

「今お歸りになりました。まだお休みなさらんやうです。」

そンならと裡へ入り、わるいと知りながら故意とづかづか黑江の居間へ念にとほる——通ッた其人、一目見て黑江は駭いた體、何か身のまはりに取り散らした書類をさッと一まとめにして机の下、やゝ慌てた聲で、

「源介か？」

ずッと坐ッて、「はァ泊りに來ました。」

傍目もふらず一心に黑江の手許を熟視すれば安からぬ體は明らかでした。頻りと机の下に氣も付ける、兎に角源介が邪魔にする體、

「さうか、今すこし用がある。茶の間へ行ッてゝくれないか？　みンな起きてるぜまだ。」

さてはいよ〳〵怪しい、追ひやる氣か？

「けれど」つッと身をのらせて側へ寄り、「泊るといふのは表向きで、實は妙なことを聞きましたから早く實は御聞き申したい事が有るンです。何ぢやありませんか、先生今夜あすこの茶屋へ御出でゝしたらう？」

この時こそじッとばかり黑江の顏を見つめれば果して横を向いて目の色を容易に悟らせまいとする樣子、有無のこたへも先出さずに、

「それで？」

「ですが先生御出でゝしたらうな？」

「まづ、ま、どうしたと言ふンだ？」

强情な、まだ〳〵匿すか？　未練！胡散くさい處を見す〳〵見せるか！その儀なら此方も其氣、

「御出でに爲ッたのは確かですな？　奥二階でいろいろ御相談も有ッたさうで……」

發矢！やゝ變はる黑江の面色、口の端がぴり〳〵震動して、忽ち思ひついた體、

「ぢや君だッたな、あの變な客は？」

「ぢや君だッたな」と言はれて此方もどきりとしたものゝ覺悟しただけに中々みだれず、知らぬ顏して、君とはと問ひかへせば

「とぼけちやいけない、それですツかり分かツた。君だ、君があの邊をうろついて居たンだな。女中から其客の人品を聞いた處が……」

じツと源介の身形を見つめて、

「それ／＼、もう露したツて——女中が言ツた通りの君の身形だ。」

星をさゝれては最も駄目、隱すのも未練な話し、かまはぬ、只々當つて碎けろ。さりながら山を掛けてもやらう。

「さう分かれば平ツたい噺になりますよ、先生。いかにも、はゝゝ、私でした。但し、御密話の仔細はことごとく聞きました。」

「何？」

「聞きました、委細殘らず。聞いて實は駭き入りました。そも／＼先生があゝいふ事とは今日まで更に私は存じませんで……」

「しツ！」とにはかに差し止めて黒江は前後を見かへりました。

「本當に聞いたのか？　そして何處に……何處に居た、隱れて？　僕が氣を附け出した時は？」

「その時も忍んで隱れて委細聞きました。廊下の隅の行燈部屋で。」

「行燈部屋？」

驚ろいて目を見張ツて呼吸もせはしく姑らくは言句も出ず、無念と失望と後悔とが交々立ツて胸を抉れば、俯向いたまゝ肩を八の字。殘念、壁に耳在る世と知りつゝ知りながら斯う爲ツた。巧にも欺かれる、一概に聞かれたと速く信じて其驚きに胸も迷ツて、見事、術中に陷りました。「先生があゝいふ事とは」ちツ！徹頭徹尾聞いたと見える。聞かれるのを恐れたればこそ、秘密の秘密を願ツたればこそ、車をも乘り捨てゝ身を忍ばせ、注意に注意を加へた揚句——無念、水の泡の苦勞をしたと思へば、中々の沈着の人物ながら心中は千緒萬條。

それにしろ、まだ仕合せ、まだ／＼味方の分子ともい

ふべき源介に聞かれただけがまだ幸運。斯う爲ッては最う仕方無し、やゝ烟ッたい源介ながら、併し味方にせずには居られぬ。ましてや姻戚、聞かれた上は隱すも無駄、委細打ち明けて此方方（こちらがた）にしてとばかり脆く山に掛けられて平ッたく打ち解けました。

「どうも聞かれたとは思はなかッた。併し君だけにまだ安心だ。ぢや最う隱すまい。萬事君が聞いた通り、が、しかし源介、僕もあゝいふ風な約定するのは大に不德義の至りかと一時實は心も安くなかッたが、さて又說かれて考へれば何も政事家が必しも道德の活字引となると限ッた物でも無し、これもそれも權略、一國といふ大きな物を眼中に扣へれば私の交際上の事は言ッて居られたもので無し、それ是であンな約定もしたのさ。」

辯護がましく言ふ顏つく〴〵見れば口惜しくもなる——實際こちらは洩れて聞かず、併し、罸—圈套（わな）にかゝッて白狀する語氣、その語氣を思へばどうしても不正不德義の辯護そツくり。何かたゞ腹も立つ。今しばらくとじッと思案、まづそれと無く探りました。

「いつから彼の御約定どほり實行なさる御所存ですか？」

「秘中の秘だよ。」

「承知しました。」

「もう明日からでも折さへよければ。實は今迄に民間の假面をかぶつてどの位內情を密告したかも知れやしない。それらの甲斐が有つて先刻の通り三千圓の利得にありついたのだ。」

畜生—おのれ、やれ扨は黑江—世評は終に無根で無く——假面—密告—三千圓—む……む……胸もむかつく醜陋。

罸あたり、おめ〳〵此方の圈套（わな）に落ちて、われと吾口から明して——源介—呻るぞ、この鐵拳—

無殘、それとは知らなかつた。夢にも現にも知らなかつた。買ひかぶッたか、心外、殘念—畜生め、奸賊黑江徹—

あゝ因果、因果、悪因縁——涙！これ程の白無垢でッが、公徳の賊其賊の妾と——妾と現在の妹が爲つた。涙、これ程の白無垢でッか、公徳の賊その賊の世話に——世話に現在のこの源介が爲ッた！

假面をかぶッて人を賣る？ 道徳堅固の衣を着けて半風澤山の肌着を着る？ 密告した？ 三千圓もらッた？ 折がよければ明日からでも？ 嗚呼天魔！どうしたら左樣天魔に？

ほとんど逆上すれば眼中もいつか熱涙にうるむ、情無いと黒江を睨めつけても相手は中々すましたもの、濡れてからは露もいとはぬ風體、

「源介。」

返辭もせずに居る源介を二度三度呼びつゞけ、あゝ腐敗！御ためごかし、

「源介、もう斯う君だからこそ打ち明けた。決して洩しちやいけないぜ。夫ばかりぢや無い。むしろ頼む、此上は矢張り是迄同樣の誠實で君も此方の味方になつて働いてくれ。配當はいづれ有るさ。何の今日の世の中不利益な道を行くのは損だよ。」

情無い、どこから其音！不利益の道を行くのは損だ？ それでこそ／＼假面、密告、犬、また三千圓！人、人を見くびッたか醜陋紳士。配當も有らうとは何の譫言、そ……そ……そンな不徳義で動く源介と思ふか、怪物！

「何だ、何を考へてる？ 源介、どうかね君の意見は？」

意見も糸瓜も、有るものか。希くは此兩眼、五尺の男子の兩眼にさしぐむ此涙も見てくれ。答へといふのは此涙。政府の鼻息伺ふ程の粹人、涙の意味も知れさうなもの。忘れたか、老耄たか、とぼけるか、澄ますか、冷笑するか、當選の賀筵で源介がもしやと思つたが放言、その聲は耳底に殘らぬか？ 黄金の響きを聞くばかりの木耳の耳か？ 黄金の光りを見るばかりの節穴の目か？ 毒！虫！七重の膝が八重に折れても誰が味方にならうかい！

第十二

「どうした、源介、何が不同意か、君は？」

徹は半ば冷笑の語氣を以て譯も無く源介をあやつりました。源介の氣象は徹も知る、今仕方無しに打ち明けた秘事について源介が不服を抱くであらうと思はなくも無い、それながら略、今は中々下手から出て籠絡は得られる場合で無いと思へば、故さらに強く出ました。出た胸中、無論源介を飲みに飲んだ處も有りました。鯁直潔白の君子の僞皮を被ッたそれを知らず、皮相から判斷して惚れ込んだ位の男だもの高は知れて居ると呑み切ッても居る、それだけに中々平氣でした。雨降ッて地も固まッたといふ體、打ち明けたからは澄ましたもの、半ば冷笑を以て源介の言葉を釣り出さうとする、其犧牲にされる身の口惜しさ。いよ／＼こゝに買ひ被ッた自身の不明を思ひ知ッて胸は亂舞狂沸する、凄じい目をしてしばらく徹を睨みつめました。

言はうか、言ふまいか、どうしやう。諫めやうか喧嘩しやうか、どうしやう。そも／＼以前からしての僞君子か、乃至金錢の魔力に眩んで爲ッた罪人か？　吾身の不明は悟ッた氣でも悟り切れず、或は金錢の魔力に眩んだ事かとも思へば思ふ存分諫めを入れて見る氣にもなる、きッと爲ッて聲を潛めました。熱心は精一杯、顫動を帶びた聲。

「先生。」

とは云ッたものゝ舌が硬る、畜生、こんな弱い事では！硬ばりくさるなら食ひ切るぞ、舌！

「せ……先生！」思はず知らず下を叩いて、「えゝ情無い事ですなア。」

とばかり暫らくは睨めたまゝ幾度も口唇をうるほしうるほし、

「意外、あんまりな意外……先生。私は物も言へッ……まッ、御心底が分かりません。」

つッと膝を突きつけました。

「先生、よもや〳〵世評の通り、そんな事であらうとは實今夜と云ふ今夜まで私は更に些しも……先生、烹え……烹え……烹えくりかへります、胸が。どうしたらそんな心に……先生とも思はれません。」

何か言ひさうになッた徹を抑へ付け、

「御待ちなさい、言ふだけ言はせて。先生、私は——御忘れも爲さりますまい、口外御當選の祝賀の時醉に乘じて亂言を私が言ひましたな。あの亂言がどうぞ〳〵無效になッてくれろ、どうぞ境遇に因ッて先生の節が變はらずにあッてくれろと、さ、共無效なのを、先生、私は望んで居ましたぞ。」

涙一杯になッて睨み付け、

「先生、あれを御忘れですか？ その前後の境遇を御忘れですか？ 無效であれと望んだのが、今豫言を爲したとは情無い。情無い、私は……私は……眞實斯う……熱涙がこぼれます。」

われとわが胸元を引ッ掴み、

「源介は、先生、一意たゞ是ですぞ。源介の胸中は此熱涙より外ありません。先生、よく思ッて御覽なさい。先生の今言はれた事が君子の所爲と言へますか？ 何とおッしやッた、先生、始め私が先生に御目に掛ッた頃。天晴非義不德のためには心骨を粉にするとも正義の旗を取ッて立つと——源介も實はそれで先生に服したです。先生、それが今豹變して——情無いといふが無……無理ですかよッ、先生！不正はするなと言ッて源介の博奕をも制した貴君が今目くされ金に目を縫はれて——さア何とでも返答なさい。」

いつか聲高にも爲る、徹は聞きさして顏を皺める氣色ばんで口先するどく、

「分かッた、靜かに出來ンか。何だ、大聲して——見下げ果てた……」

胸ぎッくり、「何ですと？」

「大聲して囂々しい。」

「いや、見下げはてたとは何です、先生？」

聞き捨てならぬと詰め寄れば、徹もそれ者、思ひ直して直にすりぬけ、

「はゝ、君が餘り——何さ、度量が無いぢや無いかな？急かずとよく考へるさ。」

「度量が？ 左樣、不德を行ふ度量は有りません、たゞし正……正義のためには……」

目も殆んど血走りました。

「先生は私の言葉を冷笑なさるか？ いゝや冷笑なさるです。で無いなら又なぜ……」

「よし、分かッた、分かッたッてば、冷笑は爲ない、ちやンと聞いた。聞いたが、併し、よく考へて見たまへ、さう何も君が言ふ程拙者（わし）が不正を行ふでも無い。」

口を鋭く源介を發矢とさしとめ、

「そりや君は正直だから之をも不正と見るか知れない。が、國家のためだよ。」

「なンで、また？」

「まアさ、平ッたく言ッた處が左樣ぢや無いか？ 君は境遇によッて志操を變へるのを一概に不德とのみ言ふけれど、はゝゝそれも條件つきだぜ。山へ登らなけりや天の高いは知れないよ。野に在ッて——と言ッたッて今朝に在るでも無いが——星を勘定する目と丘へ昇ッて一段高い點から天を見る目とは大きに違ふものだぜ。人間の能力といふものは自分の極々近い水平線以內だけッきや悟り得ない。境遇によッて志操の變化するのが强ち咎められたものでも無い。」

それ位のこと、何だ、言はずとも。人を馬鹿にといよ〳〵急き立つ、

「そりや左樣です。但し不正は何處へ行ッても不正です、先生。境遇がよしんば變化したッて不正を許すと云ふ理がありますか？」

「いけないよ、それだから。不正不正と言ふけれど其處が君はまだ半分しか聞かないで。見たまへ、人を殺すのは無論罪惡だよ。但し罪囚を刑するなら罪惡ぢや有るまい。些し類は違ふが……」

たゞし一方は半分聞かず、「分かりました、個人よりは國家と仰やるンでしやう。大の虫のために小の虫を殺すと仰やるンでしやう。場合によッちや夫もいゝでしやう。けれど其論法は得てよく罪惡の辯護となるもンですよ、先生、私はそれだから情無くなるンです。虚心に爲ッて御覽なさい、親友を賣ると云ふ事は容易ならぬ事なンでしやうが、いくら略でも權謀でも。」

いく度か徹も氣色ばむ、さすが口惜しさに氣色ばむか、さてさもしい。夫程さもしい根性はと無念は源介の臟腑をえぐッて、最早切り出したからには一歩も退かず、あはれ志を飜させぬ内はよし疊が腐らうが、乾干しにならうが。怒る、憤激する、氣色ばむ、それだけ人間普通の情が猶有るからには道理を思ふ氣もありさうなものゝ、此熱涙も見えさうなもの、

「どう有ても先生は左樣魔道に陷られる御所存ですか、そんなら?」

引き毟るやうに言ッても返辭は無い。

「是程に私が言ふのも御用ゐなく?」

噛み附くやうに答へを急けば、妖魔、づッしりと固まッて一歩も動かず、

「論は無いさ。」

へゝんと鼻であしらッて、

「男兒一言金鐵だ。また君、君の潔白過ぎるにも弱る。辯を好むぢやないが、氣の毒だから。これ君と拙者(わし)とは外ならぬ關係も有るでは無いか?今斯う何も顏を赤め合ッて口角沫を飛ばすにも及ぶまいぢや無いか。君は潔白だ。拙者(わし)の今度の決心、そりや爪彈もするだらう。但しこれを君が二千三百許りの端金に僕が目をくれたと思ふやうぢや――あンまり今迄の好誼甲斐が無いぜ。拙者(わし)の心も知らないとは、それこそ此方こそ情無いと言ひたいンだ。只金に目が暮れて朋友を賣るとばかり君が思ふから困る。目くされ金がどうなるもンか!唯々拙者(わし)が政府へ通じたといふ譯は中々机上の空論で世の中は行けるもンで無い、また政府の身ンなれば夫だけ苦しい處が有る、

聞き捨てならぬと詰め寄れば、徹もそれ者、思ひ直して直にすりぬけ、

「はゝ、君が餘り——何さ、度量が無いぢや無いかな？急かずとよく考へるさ。」

「度量が？　左樣、不德を行ふ度量は有りません、たゞし正……正義のためには……」

目も殆んど血走りました。

「先生は私の言葉を冷笑なさるか？　いゝや冷笑なさるです。で無いなら又なぜ……」

「よし、分かッた、分かッたッてば、冷笑は爲ない、ちやンと聞いた。聞いたが、併し、よく考へて見たまへ、さう何も君が言ふ程拙者が不正を行ふでも無い。」

口を噤く源介を發矢とさしとめ、

「そりや君は正直だから之をも不正と見るか知れない。が、國家のためだよ。」

「なンで、また？」

「まアさ、平ッたく言ッた處が左樣ぢや無いか？　君は境遇によッて志操を變へるのを一概に不德とのみ言ふけれど、はゝゝそれも條件つきだぜ。山へ登らなけりや天の高いは知れないよ。野に在ッて——と言ッたッて今朝に在るでも無いが——星を觀定する目と丘へ昇ッて一段高い點から天を見る目とは大きに違ふものだぜ。人間の能力といふものは自分の極々近い水平線以內だけッきや悟り得ない。境遇によッて志操の變化するのが強ち咎められたものでも無い。」

それ位のこと、何だ、言はずとも。人を馬鹿にといよ／＼急き立つ、

「そりや左樣です。但し不正は何處へ行ッても不正です、先生。境遇がよしんば變化したッて不正を許すと云ふ理がありますか？」

「いけないよ、それだから。不正不正と言ふけれど其處が君はまだ半分しか聞かないで。見たまへ、人を殺すのは無論罪惡だよ。但し罪囚を刑するなら罪惡ぢや有るまい。些し類は違ふが……」

たゞし一方は半分聞かず、「分かりました、個人よりは國家と仰やるンでしやう。大の虫のために小の虫を殺すと仰やるンでしやう。場合によッちや夫もいゝでしやう。けれど其論法は得てよく罪惡の辯護となるもンですよ、先生、私はそれだから情無くなるンです。虚心に爲ッて御覽なさい、親友を賣ると云ふ事は容易ならぬ事なンでしやうが、いくら略でも權謀でも。」

いく度か徹も氣色ばむ、さすが口惜しさに氣色ばむか、さてさもしい。夫程さもしい根性はと無念は源介の臓腑をえぐッて、最早切り出したからには一歩も退かず、あはれ志を飜させぬ内はよし骨が腐らうが、乾干しにならうが。怒る、憤激する、氣色ばむ、それだけ人間普通の情が猶有るからには道理を思ふ氣もありさうなものゝ、此熱涙も見えさうなもの、

「どう有ても先生は左樣魔道に陷られる御所存ですか、そんなら？」

引き宅るやうに言ッても返辭は無い。

「是程に私が言ふのも御用ゐなく？」

噛み附くやうに答へを急げば、妖魔、づッしりと固まッて一歩も動かず、

「論は無いさ。」

へゝんと鼻であしらッて、

「男兒一言金鐵だ。また君、君の潔白過ぎるにも弱る。辯を好むぢやないが、氣の毒だから。これ君と拙者とは外ならぬ關係も有るでは無いか？今斯う何も顔を赤め合ッて口角沫を飛ばすにも及ぶまいぢや無いか。君は潔白だ。拙者の今度の決心、そりや爪彈もするだらう。但しこれを君が二千三千許りの端金に僕が目をくれたと思ふやうぢや——あンまり今迄の好誼甲斐が無いぜ。拙者の心も知らないとは、それこそ此方こそ情無いと言ひたいンだ。只金に目が暮れて朋友を賣るとばかり君が思ふから困る。目くされ金がどうなるもンか！唯々拙者が政府へ通じたといふ譯は中々机上の空論で世の中は行けるもンで無い、また政府の身ンなれば夫だけ苦しい處が有る、

それをさとり得たため許りさ。均しく國家を思ふ段に於ては何で前日に讓るものか。それとも君は何が無し只朋友間の情誼を主とし、拙者(わし)をむしろ政事家より交際家となれといふ所存か？　さうさ、左樣ぢや有るまい。無い。處でよく考へて――多少それは世間でも斯だあゝだと冷評も加へるだらうが此方に內心一點の病しい處も無い上は――ね、さうぢや無いか？」

變幻無双、忽ちの天氣變り、今鳴ッた雷が見る間物やはらかな慈雨と變ッて、濃やかにまた說き付けました。

姻戚の何の――はて尻口で物を言ふ。朋友をも捨てる程情實にからまぬと言ふ下から聞きたくも無い御爲ごかしの姻戚三昧――見損ッたか源介を。長舌、さりとは驚き入る、畫工と學者は白い物も黑くするといふものの、藥毒用ゐどころを換へられて世間に正理が立つものか。今までは買ひかぶッた、欺された、信じ過ぐした。是からは最う山が崩れやうが、何のその位な長舌に源介はゞかり乍ら眩まされない。

情實の魔力は鐵石も鎔かす、思へば妹は他人で無い間柄、言はれずとも其處の情實は針となり、錐となり鋸となり、銛となり胸の骨を寸分に刻む、刻まれて九腸惱亂、千差萬別の感情其精を拔いて滴々と溢れ出熱淚――たしかに此間一刻の萬感に天命の半分は縮まッたこと。

もとより姻戚と思へばこそ、餘所事と思はなければこそ、天晴泥中の蓮と仰ぎ奉りたければこそ、また天晴濁世のサルチル酸、腐敗世界のオゾーンと其人を崇めたければこそ――其人のためを思へばこそ――天下國家のためを思へばこそ――源介自分一身の利達を思はなければこそ――むしろ自分の榮華は塵芥と見做たればこそ――唾を吐かぬばかり、喰ひ付かぬ許り、面を犯し、膝を銜き、炎を吐き、血を噀せ、火水汗水に爲ッて思ふ存分、胸中の洗ひ滌ひ(ざらひ)を摑み出して、赤心斯うだと泣いても見た！

それ程にして泣いて泣き甲斐も無いとは嗚呼天か、命か、命の究まるところか？　見下げ果てた限り、黑江徹

とも言ふものがいつか巧言令色を見覺え聞き覺えてこの源介に迄向ツての籠絡手段網羅策。

　涙！妹からの緣つゞき、其情實の爲には啼く。但し國家正義のためにも啼く。天下唯一、關源介といふ多涙の人間、其場合に於ては一升二升惜しまぬ涙も、情實と正義二つながら襲ひかゝツて來た場合に於ては、むしろ、否、素より進んで——我慢辛抱——堰く！情實の涙は堰かずに居られぬ、無論正義のために泣かずには居られぬ。

　正義のために泣く、卽ち情實を斷つばかり。引き立てゝ貰ツた恩は有る、恩の有るだけに此方も決して恩人の害をば爲まい、但し痩せても枯れても壯士、醜陋の指揮の下には立たぬ。

　つら／＼と聞き果たして姑らくは頭を低れ、幾度か目を押し拭ツて、この處さながら處女。屹となツて再びまた徹を見た兩眼は擦り紅められて全く血でした。

　「先生、いや最う仰る事は分かりました。最う私も抗論は致しません。先生が辯護をされば爲さる程私は唯悲しく感ずるのみです。」

　言ツて叩頭したいぢらしさ、冷淡な徹も胸ぎツくり返辭も無しに默ツて居ました。

　「先生！」力無さ／＼と呼び掛けました、「これ……これ迄の——いや、愚痴では有りませんが、只言ひます、是までは私も先生を信用して及ぶだけは蔭になり日向になり先生の配下と爲ツて居りましたが、それも何も、實に何も御緣です、集散離合はまことに以て仕方の無いものです。」

　語氣によツて徹もさすがに察する、さては此奴離反して秘密を漏らす所存かと倏忽に胸もざわ立つ、それを辛くも忍びに忍んで、わからぬ振り、「なる程それで？」と問ひかへせば、

　「頑愚に生れたのが源介の不運です。機變に乏しいのが源介の不幸です。天晴いやしくも壯士と名唱ツたからには其本分を骨が砂利でも盡くしたい、それで……それで、折角ではありますが、先生……」

呼び掛けて一層きッとなり

「先生の配下に在るのも私は今日只今限りです。」

「何？　只今かぎり？」

「是非に及びません。が併し、私も海山の御恩は曾て先生からもいたゞきました。それだけの心得は是でも有ります。只ならば先生に今は此……」

涙ばら／＼腕を撫し、「……只は先生を置きません。が、恩の枷で動けません。此儘に歸ります。誓ッて又、歸ッた上でも、先生の秘密などは決して／＼漏らしません。是が私の寸志です。先生、くど／＼最う重ねては言ひませんが、源介は斷じて以て一旦口外したことを反古には爲ませんぞ。涙を垂れて固く誓ッた、此涙が保證です。御安心なさいまし。」

やゝ支度しながら、さても優しい――千萬の思ひを一句に封じて、思ひ切れぬ心を一言かたみと許り、

「妹は、しかし、どうぞ憎んで下さるな。」

第十三

飜雲覆雨、世の中の定め難さ。事の偶然と不偶然とを問はず、變化代謝する世を厭世の目で視れば其變化代謝が定めがたいものと名を變へてどれ程に嫌はれ惡まられるものか。腕の血を啜らぬ許り、骨が無ければ一所と許り、影と形と相提携した中も茶碗に茶碗ぶつかり合ッて氣まづくなれば馬首東西、何の貴様になんの己れが、齊魯昨日の訂盟も胡越今日は千里離れて、姻戚も何も物數とならず、蠻氏觸氏いたづらに角でも無い角を角目立たせて浮かむ瀬もなくなるとは。集散離合も時の數、求めて得ると限らぬものゝ、其求めずに得る場合には運を末と觀じ、身を終りと嘆く、それも是も心弱い沙汰の限りと嘲けり飛ばすなら知らぬ事、さう出來ぬ二人、黑江徹と關源介、意地づくに因ッて駐まり得ずまた駐め得ず、一對の花瓶空しく碎けて心は互に憐れむばかり、終にどうする事も出來なく爲りました。

袂をはらッて立ち去る際にさすが妹の上も苦勞にされて、發矢と徹の胸にも浸みる、意地で送れもせず、これを不和のそも〳〵發端の別離と思へば餘りに快くも無い、其不快を聞いたまゝで味ひました。聞けば襖の外へ源介が立ち出る、立ち歸りかける妾に怪しんで彼是應答する書生の聲もする、――「おや御泊りなさらず？」「はア何一寸急用で。」急用と譯も無く云ふ胸懷そも〳〵どれ程の意味が有ることかと此方でなまじひに想像するだけ且は氣の毒なやうでも有り、また殘りをしいやうでもあり。

ぼんと鳴る時計の響きが一つ。十二時半か、一時か、一時半か？　其方を見れば置洋燈の笠の影に時計の面は匿れて針の在處はよくも知れず、さり乍らいづれ三つの内。氣がついたやうに屹となり、更けたなと呟く途端、襖を辷らして來た妻の佳節子（かよこ）、心得ぬといふ面色で、

「あの源介さんが――御存じ、歸りましたよ？」

胸ぐるしい事を聞けば聞くもの、女は口出しせぬがいゝ。義理だけの返答、

「あゝ。」

「ですがね」、さし寄ッて來ました、「何か腹でも立ッたンですか、」

「腹？　なに、源介が？　何もそンな……」

「けども可笑しうムいましたよ。」

目をするゑる夫をじッと見詰め「わたくしの處へも參ッて、歸ると挨拶しまして、ね、更けたからと止めましたけれど一向辭退ばかりしまして、ね、一寸、あなた、訝しな事を言ふぢやありませんか、どうなるも時の運ですッて。貴君付穗の無い言葉でしやう。どうなるも爲らないも、そンな變なこと――妙ぢやムいませんかねエ。さうしてさも萎々として歸ッて行きましたよ、まア。何でしやうね？」

何心なく一方は言ふ、聞く身になれば一々胸。悟られまいと色をも粧ひ、いつでも思ひ掛けぬ事を言ひたがる男の事ゆゑ別段の事も有るまいと何氣無く胡魔化したものゝ、中々一方は紛らはし課せられず、ですけれど言ふ

事に事を缺いてどうなるも時の運とは餘りをかしな言ひ方ですと流石思慮こまかく執ッて動かず、あはれ夫等の口を持ち込まれて徹の胸も散々にかき亂されも爲ました。大事件を經た揚句は人と其事を語るより何より先其事件について追想し、想像し、懇ろに考へたくなるのが人情、源介と顏を赤め合ッて澄だばかりの處、大風の吹き過ぎたばかりの處で吹き立ッた砂も落ち付かず、たゞちに邪魔ものに入られてやれどうだ、やれ如斯(あゝ)だと――ちッ、忌々しい！婦人は口うるさい。一意良人のためを思ふ妻女の誠心も出どころが惡くて好くは取られず、詰めかゝられて徹の胸はごつちやごちや、こぢれて扱いま〳〵しく爲る、ぢれッたくなる、火熨斗の代理ぐらゐに面が炎る、肝積の蟲が込み上げて叱り飛ばして追ひ遣らうとされる、相手こそいゝ迷惑。たゞし察して強ひては云はず、左樣ならばとは言ッたものゝ、時計を見れば一時過、これで寢ぬとは且は不審

「ぢや未だ御休みなさいませんか？」

「ちッ、また。用が有るッてへば。先へ寢るがいゝや、睡いなら。」

取り付く處も無く其儘に佳節子(かよこ)は立ッて部屋を出ました。出たとなれば寂寞は冴へ返ッたやう耳について、時計の刻々がいとゞ烈しく、伴れてまた同じやうに胸中も動搖しました。

どうも氣に爲る、苦勞に爲る。あり〳〵と其源介が涙にかきくれた姿が目にも殘る。熱心――その熱心が畫餅となッて――あゝ最早東西敵味方。敵となれば最う世の常、口では膠漆を煮固めたやうに天晴かたく言ッて退けても、それが決して當にはならず。さて當に爲らぬとした處で、何が其後起ると言へば、多分おそろしい其機密漏れ――畜生、只歸すでは無かッたッけ――折角の機密、漏れたらもう百年目。黑江徹といふ人間が無殘醜辱、汚穢、失望の奴隸と成り果てるか、それとも榮達するかといふ關所の際、踏みはじめる一歩がこゝに千里の相違を起す。

苦勞——胸は湧き立つ。今更思慮らしい思慮も無し諦らめて大悟めかして運に放任するより仕方も無い。匹夫强盜を行ッて刑戮に就き、英雄切り取りをして寶冠をいたゞく自由自在な世、醜辱や失敗は立身の初步に於てこそ非常の妨害ともなれ、利達した上には何の魔力も無い、只そこ迄の行く途だけ、卽ち機密漏れを實は恐れる。が、もう仕方無し。仕方無しとした處で、入れ代つて顏を出す辯護も有る。鬼をも挫ぎさうな源介、但し骨肉の情には篤し、妹をば賴むと言ふくらゐ、また〳〵一點その間に可愛い處も有からには眞逆口外した言葉を食んで恩を仇にする事も有るまい。

「口外した言葉を食んで恩を仇にする事も有まい」さても黑江からよくも良心に恥ぢず言へたもの。吾を責めあへぬ道理で直ちに人をば決め付けたがる——あゝ凡夫とは其すぐ下から自身わが身の敗德を冷笑した言葉でした。「これが政事家だ者、仕方は無い」。やぶれかぶれ近くなれば肝もすわる、毒を喰ッて皿まで舐りたく、運は天とあきらめました。

それにしても考へれば、笑止！源介の小度量。何の、德義の引火奴（つけぎ）と燃へ立ッてぱちぱち空騷ぎして遂には矢張一吹の名利の風には消える始末。思ひ思ッてひとり胸も透いた樣子、はッとなッて拳で机を一拍々ッて「壯士……あゝ譯の無い器械だなア！」

第十四

心に萬感がわだかまれば夜更けに路を拾ひながら人力車を傭ふ勇氣も無く、辻々の交番所の前、曲者かと燈火をさし付けられたのも幾度か、それも是も目には入らず、たゞとぼ〳〵と辿りました。

何が何やら、何を先へ考へていゝやら、夢我夢中まるで現でした。一つ出る思案が足元ゆるく直に他の物に奪はれて其興亡も宛然果てしなく、概して言へば遺恨、無念、後悔の水車を輾らせました。

つら〳〵世の中の料りがたいのが頭腦に浸みる、智か、

愚か、そも／＼自分がそれを知らなかッたのは。涙の種と思ひ出す以前の一華楼での過去の事實、その時に云ッた徹の凛とした言葉を追想すれば、我ながら今日此様な事が有らうとは扨知れなかつた？ 無理では無いやう、その時の様子では何うしても稀に見る潔白正明の君子でした。どうしても潔白正明の君子、忽ちに豹變して黄白の奴隷となつたこと、情無いとは言はうか淺ましいと言はうか、形容の言葉にも殆んど困しむ程の仕儀ながら、扨々それに相對して、無念！無念きはまる事といふのは自分源介の薄弱であッたこと！

よしや黒江は黄白に眩んで平生の節を變へたにしろ土臺源介わが身ながら吾身自身が天地唯一類も比も無い太白痴、大馬鹿であッた。いやしくも節が變り易い人、その人を其末に至る迄信じて居て、一旦結果の忌しい處を見てそこで始めて左様かと悟るとは吾ながら扨何の不明、何の魯鈍！思へば今日の先刻まで買ひかぶッて居た此眼、考へれば憎さも憎し、ほとんど抉り取ッてやりたい。

遺恨、殘念、萬斛の泉源底も知れぬ此うらみそも何うしたら晴らせやう。「排佛却嘲身似佛」その古壯士の落膽の胸懐、何の小度量と冷笑ッた昨日がそも／＼今日は羨まれる。

壯士！壯士と言へば愉快な名、壯士と聞けば血も躁ぐ。心は光風、胸は霽月。道のために死ね！流す血の色は鮮。道のために斃れろ！暴露する俠骨も身後に芳ばしい。何と、其思ッただけでも偉んな物。印度、太平、茫漠とした太洋が塵の手を洗ふ手水鉢、富士、喜馬剌亞、屹立した泰山が朽ちぬ骨骸をうずめる天與の墳墓。破邪顯正、世界を家に惡逆を踏みにじる足を養ひ、自他無差別、平等の光りを注ぐ月を操行の模範として、火にも燃けず、水にも溺れず、「俠」の一字を生涯不變の護符として、正理の宿る處蚊の脛も練鐵となり、殆んど言はゞ世の中の防腐劑。

と、以前は希望と快樂とに想像を縦横に荒れまはらせ

て、苟しくも節を枉げまいとの發心、よしやくれおばとらが艶色、富貴、顯榮、名譽、種々の贈物をもたらしてもあんとにいに爲るはおろか、むしろ毒蛇と爲ッても早く其氷肌に喰ひ付き、邪惡の根を一つでも斷たうとの考へ、その目を以てつく〴〵と世間の壯士を見亙せば、何の壯士どころか、それらは何れも揃ひも揃ッた蛆蟲づくし。同じく黄白に目は射られる烏目壯士、同じく教唆に燃え立つ焚付壯士、木槌壯士、同じく節を豹變して恥とせぬ七面壯士、同じく世の中を洋挺一木でわたるステッキ壯士、腰は無い蒟蒻壯士、腹腸は無い乾物壯士、何壯士蠻壯士、たま〳〵眞正の壯士壟塚の鶴はあつても郡臭に掩はれて世に知れぬ、そも〳〵それが此世の遺憾、あはれ此闇源介が都會に出た上は美ン事鐵中たちまち錚々の音を鳴りひゞかせて蛆蟲壯士を慚殺させ、壯士卽ち俠客の本分本性はこんなものだと見せやうと――さ、思つて居たそれも何も皆空想、今になつて考へれば、傍目でこそ何の角のと云ふ、壯士それら自身が焚付と言はれ烏目と呼ばれる、それにもそれで事情は有り、或は國のため、或は人のため、恩の有る國のため、恩の有る人のため、十人十色さま〲の奇觀を呈するのも源介自身今になッて思ひ知ると同時、それだからこそ又心外殘念、さう爲るまいと、造次顚沛思ひに思ッて居た身でありながら又さうなるまいと寄ると觸ると公言をさへ吐いてゐた身でありながら、今は矢張りいつか〳〵知らぬ間に左樣爲ッてしまッた。天晴勇氣宇宙を突きとほして、怒る時には髮の毛の針に鐵冠も貫けと期した希望は遂に空しくなつた。肉を啖つて佩劍に一油塗る事も出來ずなつた。股をゑぐり取ッて汗馬を養ひ、其紫の蹄を風に鳴らせて妖雲を蹴らし得られなかつた、腐れ壯士となりはてた。音壯士となりはてた。現在、その惡魔の前後に近づいて居て假面か面か見破りも得ず、また況して魔道におちいる其帶を引き止めて救ひ得ることも叶はず、袖をはらッて義絕したくらゐが精一杯とは、嗚呼源介、われながら源介も見下げ果てた人物！道義の砂に磨き上げて闇の妖魔を

睨め殺す目の玉はむざ〳〵外道の黒い呼吸に吹き迷はされて仕舞ッた。何のため鍛えた鐵拳、何のために養つた土足？畜生、人に話しも出來ぬ。吾と吾ながら愛想が盡きた。今更思へば壯士むしろ暴士と冷評する局外の世間も同感の無い偏頗であッた。何の〳〵世間の壯士、まさかに〳〵此の源介ほど心弱いもの丶みでもあるまい、むしろ源介よりは嗚呼立ちまさッてゐるらしい――あ丶今が今思ひ付いた、冷笑をしたのは謬りであつた、何と言はうが、源介ほど馬鹿極まる壯士は一人も無い、このこの源介、闕源介、此奴ほどの白痴は又と無い――意氣込みと反對な境遇に(悟らず〳〵)陷ッて、やうやくに目が覺めたとは！

一徹、正直、肝癪持ち、それに負けず嫌ひ、此の四つが源介の身體の成分で、如何さま飜へッて一方から見れば小度量といふ處も多少有る、それだけに使ひい丶人物でした。充分美事徹を買ひかぶッて土俵際で投げ出され、考へれば考へる丈け馬鹿らしく、くやしく忌々しく、果は、身をいやしめ、世を怨んで、滿腔の熱血も狂ひ立つ胸ぐるしさ、双で丶も劈きたいやう、生きても居られぬばかりでした。心を失つたやうでも流石に正氣は殘ると見えて、別段に目的定めぬ足ながらいつか知らず〳〵妹の宿の門口まで來て、飄然として心付き、お丶こ丶だつけと足もとまる、ぴッたり閉め切ッてもう休んでゐる體を見れば、肉身の家ながら氣が尤めて一寸開けさせにく丶もあり、彳んで躊躇する內に又物思ひは沸きました。

妹の阿島は天地の間、徹ほど貴いと思ふものを知らず、徹ほど可愛いと思ふものを知らず、徹に引きくらべて自身の命も猶かるいと言ふばかりの親しみ方、その中は源介も常から知る、知ッて、それで今妹に逢ッて云々と共殆んど生木を裂くやうな事を言ッて聞かせたなら扨何と言はれる事かと流石情脆くも思ひ至れば胸中の錯雜はまた一層を加へました。

何それは徹と源介が不和になつただけ、徹と阿島は何でもない。しほらしくもこンな口を利て隅の方から賺し

に出て來る思慮も有る、——で、しかし駄目でした、賺し榮もしませんでした。思ひ出せば娘氣、いつぞやも源介が酒に乗じて徹に亂言を言ッた時、阿島は恐ろしく苦勞して、腹をも立てゝ、柳眉を常に似ず相好の變るほど逆立てゝ源介に競し掛ッて食ッてかゝッた事も有ッた、それ程の熱心、それ程の情愛、其當人に向ッて、何のこと、今源介は徹と義絶して來た、徹、御前が唯一と崇める其人と絶交して來たと言はれたものか、言はれぬものか！成るほど言へる、が言ひ得られぬ。言ひ得られもしやう、相手の失望を見るに忍べぬ。

　しかしながら折々は源介自身にも邪心と認めの付く念が出た、水を差さうと小ざかしくも手を出す樣な。何の坊主が憎ければ袈裟までも、卑劣きはまる大怪物に一刻も妹を任せて置きたくない、一飯もそれら怪物の手から貰ッて妹に食はせたくない、これらが折り折りに出た邪念でした。時には其力が中々手硬く、あはれ凝滯せる良心の本城も掠められるかに見える場合も有りました。

　が仕合せにそこ迄は意地もさすが惡こぢれせず、打ち遣ッて置くとした處で、何うしても阿容々々と野面で妹に逢ふには忍びず、逢ッてこれ〳〵と話しは出來ず、今や戸を叩かうかとあはや握りかためた拳、それも先々と抑へとめられて、恩愛は盡きぬが意地づく「阿島、このまゝ別れるぞ」とじッと目をねぶッて腹で誓言。

　思ひ切りました。つら〳〵思ふ、今日有ッて明日を知らぬ自分の身の上、恩を受けたゞけ呻る鐵拳の力も鈍つてその儘ことも無く、徹とは分れたものゝ、今後またどう云ふ事があるかも知れず、其時は一切無差別、正義の腕をふるはうと思ふ矢先、なまじひ妹に逢ッてぐづついていよ〳〵物思ひの種を播くのも無益な話、忍んで此の儘に去れとばかり、終に思ひ切ッてむざ〳〵音信れませず行き過ぎました。嗚呼內にはそれと神ならぬ身の知らずに熟眠してゐる妹も居る——戸一重の堰に何も角も只の夢と見てゐるとは。

　もはや何處の宿屋でも固く戸を閉ぢて人を許さず、ま

ゝよ慊ふものかと諦らめて、只足の向ふまゝ愛宕山へと登りました。月は無い黒暗々とした夜、ことには時刻も丑を過ぎて星の光が一層するどく、さすが塵寰らしくも無い寒氣が折り〳〵は風に乘ッて肌着の間へくゞり込み、粟粒をも立てさせました。愛宕神社の白壁が闇にもそれとうッすり見える、それを見るのも亦物思ひ、せめて人間の心情があの位にでも見え透いたものならと。どんより黒ずんで空か木かは星影の有無でわづかに判定し得る木空の間に何か名も知れぬ鳥の薄眠さうな、引きずるやうな、それこそ是から地獄の洞穴へでも入ると云ふやうな、物あはれな鳴き聲がほのかに聞えて、風かまた活物か、ともすれば、忍んでのやうにざわつく音もしました。今や天地自然は極めて平和な靜寂の境に入ッて、區々營々した晝間の疲れをこゝに休めて、宛然一つの樂しむ處が有るかの鹽梅、それ見れば又、身につまされてそゞろ情け無くもなりました。紅紫錦繡、それいゝ、美しいのと云ふも只々目の見える晝間だけ、夜は天が被せて見せる黑幕。黑幕の蔭になれば萬象色もなければ香ひもなく、貴賤一樣に歸着する姿、そも〳〵世の中の貪亂や敗德家は之を見る目も持たぬのか。平和に休息してゐる天地、羨やましいと思ふにつけ、省れば自分源介、紅紫錦繡その方だけは如何さま物の數らしくも見ぬものゝ、さて其平和に休息するといふ段に爲ッては今が今到底思ひも付かず、望みも得ず、種々雜多の思思ひに胸中を撹亂させて、それと知りつゝさて迷ッてゐる仕儀。

幾度もくりかへし〳〵女々しい限りであるものゝ、觀じ切れぬのは身の不明で、一つ考へが休まれば口惜しい、無念が只斬り込む。恩を受けなかッたら宜かッた。恩を──妹は兎に角──自分源介が微塵一點も徹から受けなかッたものならば、豫ねて志した正義の腕、それを揮ふ事も出來たものを。只其恩に束縛されて、遂に宿昔の志を躓かせて、一人で無念を背負ッて立ッて──そも〳〵人に向ッて噺しにもなッたものでは無い。わづかに心を賺すには今後をと云ふ賴みでした。公明も幾分か恩とい

ふ悪魔に食ひ取られて此度は心ならず無念を呑むものゝ、そも〳〵徹から受けた恩もこれで一かへし返せた譯、この後は最早垢の他人、よしや何程妖獸が立身出世したにしろ、一旦別の奸悪が源介の目に掛つたが最後、世のためまた道理のため、其時は鍛へに鍛へた此鐵拳を振る舞ツてくれるに於て障りは無いと、わづかに是があきらめでした。が、諦らめは餘儀無い場合のほんの逃路、みるから吾身の不明を責め、今牛か馬のやう栅の下に呻吟して手も足も出せぬ恥かしい始末の處を思へば、逆上する迄の懊惱でした。果は感じ極まるわれを忘れ、夜深を忘れ、きり〳〵と齒をかみ鳴らして、一聲「逆賊め！」と罵しツて、はツと心注いて直に手を口ぼンやりとイむ向ふに方ツて突とあらはれた人のけはひ、砂利の無い赤土の大地をふむ靴の音がぼく〳〵聞えて、おやとすかして見れば和服の人物、忍び巡査か探偵か、まんじりとしてゐる處へ、案外、向ふからは聲を掛けて「猿橋！まつて居たぜ」とは扨も扨も面妖至極。

第十五

猿橋の一言は突然ながら源介の耳にぐわんと云ふ程響きました。紛れて一寸忘れて居た例の猿橋一道の事も思ひ出す、はツと思へば返辭も出ず、だまツて其儘立ツて居れば向ふは近寄ツてすかし眺めて、

「はゝゝとぼけるぜ、大丈夫だよ。早く來い、待ツてたンだ。」

言ひ捨てたまゝ踵をかへして先へ立ツて行く不思議さ、心得ぬばかりでは有るものゝ、好奇の心も亦もよほす、思へば氣に掛ることもあり、忘れもせぬ宵の頃茶亭の前での猿橋のをかしな素振、そのまゝになつて居た矢先、今またこゝに何か其後談らしい事に遇ツて見ればどうしても見す〳〵聞かずに返されず、かう間違へられたのも亦好運、或はそれで無くて元々猿橋一味の祕密會でゞも有るものなら又面白い處も有ると心が決まれば無言の儘承知もして其男の後からついて行けば、さア當惑、

茶店體の家へ其男は入るありさま、源介もぐッと胸に來ました。

　顔を見られるのは甚だまづいし、もしも其處の一座の者が此方の知人でないなら知らず、或はそうでない上は化の皮は現はれる。阿豚は食ひたし命は惜しゝ、又しばらくは躊躇もする、その果は一工夫。兎角に忍びが好きな性分、また例の行燈部屋の二の舞を爲る氣になる、前の男をやり過ぐしつ屹と見回す身の傍に葉蘭と何かの下草が雜生して半ば埋まッた垣根が有る體、上等とうなづいて忽ち其中に潛まッたと內では扱氣が付かず、暫時待ちくたびれて不審の聲柄、猿橋かと言ッた男が此方へ出で來て、「をかしい、今方こゝまでたしかに來たに」。

　果は堪へ切れず聲をも立てゝ何と呼ぶかと思へば、奇怪!「逆賊!」成程符牒だなと源介も悟ッて見れば可笑しくも有り、偶然に自分が叫んだ「逆賊」がそれ故に向ふを引き出したと始めて知れていよ〳〵不審、ます〳〵呼吸を殺しに殺して聞いて居ると知らぬが佛、一方は一切合點せぬ風、家の中に會して居るものは前後七八人とも思はれる工合、ごや〳〵と何か忍んで語るうち折々漏れて聞える聲は、さていよ〳〵!「黑江」と云ふ體。

　前の男はまたふたゝび外へさへ立ち出でて二度三度逆賊と呼びました。が聲はいたづらに木精にひゞく、何の音も返辭も無し、また其人の影も形も無し、且は苦勞と云ふ體で二度ばかり家の周圍をぐる〳〵回つて尋ねている內後からまた二三人がこれも心配に爲ッたか出て來ました。

「本當に猿橋なンだッたのか? 間違やしなかッたか?」

「本當さ又、逆賊といふ符號を知ッていたぢや無いか? 何でもこゝ迄はたしかに來たンだ。己が入ると何處かへ消えちやッた。」

　無理も無し、分からぬ應答、「變ぢやないか」と言へば「變ぢや」と答へ、「分からンな」と言へば「分からんな」といふ、鸚鵡返しに取りやりして、聞く身のをかしさ、向

ふは思ひかねた體、

「たしかに猿橋だつたな？」

と一人が念を押せば、諄いと云ふ語氣で、

「符號を知ッて居るぢや無いかさ。是は思ふに、何か共邊を歩きまわると見える。こゝが會所とは最う分ッても居るから最些し待たうさ、今に來るから。」

にぢやぐぢやに爲ッて一同果は連れ立ッて中へ立ちもどろ、をかしさ堪へて聞き送ると同時、耳に入ッた不思議の聲、それら二三人の口吻として、

「猿橋だッて肝心の當人ぢやものな、約束は違へまいな。斯うして深夜會合までして那奴に約束かへられて黒江どやす事が出來なく爲らアほンに詰らンからなア」。

先はうッかり言ッた言葉、但し源介には耳よりな聞き事。黒江どやす？　黒江をなぐる？　扨こそ聞き事、あゝ好い所。

併しながら聞えたのは只是だけでした。大きに左様だと云ふ相槌は均しく辛く聞えたものゝ、其餘は一切まるで雲か山、茫漠として當は付かず、繁味を這ひ出したいも山々ながら、又さう決する勇氣は無し、まぢ／＼として蹲つて氣の好い蜘蛛に耳の穴を節穴と間違へられたり何かしてゐる内に、さて何もの、又も又ぼく／＼と靴の音がかすかに聞へると思ふ間も無く、音は此方に近寄ると同時、ああ此度こそ本當の猿橋、「逆賊」と合圖の一聲。

合圖がするや否や此方の家では俄にまたごたつき出す、閉て切つた戸、中の光に透く節穴も暗くなッたり明るく爲ッたり、正に起ッたり居たりする體、また前の男が戸外へ出て見て、呼び掛けました。

「猿橋。」

正物ゆゑ譯も無く、「うん。」

「何處を歩いて居た、君は？」

「今來たばかりだ。」

「馬鹿！　さッき來たぢや無いか、さッき此處まで來たぢや無いか？　左様、君が——さうさ、元より。」

「あれ？　そりや違ふ、今來たばかりだ。變だぜ、おい、氣を附けろ。僕がさつき來たと誰――なに、君が見た――見た、たしかに？　逆賊の相圖までしたと？　何と言つた、其男が――君に猿橋と呼ばれて？」

「そりや何とも言はなかッた。首肯て居た。」

「何とも言はなかッた丈で――大早計ぢや無いか、君、そりや容易ならんぜ。土臺が寄會だ。それ故にこそ合圖まで――どんな犬が來たのか知れんぢや無いか？　もしも君、其犬が黒江方のでも有ッたら何うする、おい？　尋ねた？　よく尋ねたか、此邊を？　安心ならんぜ、それだッて。」ぢれッたさうな聲に爲ッて、「ちッ脫落るぢやないかなアあンまり。皆が居るなら一途に爲ッて、も一度この邊たづねるさ。」

大變、繁味に居る源介、隱れ課せるかどうか怪しい限りに爲りました。中の一同もどやどや出て來る、口々に罵ッて、手を分けてそこら探し始ました。

最早絶體絶命、手をわけて探し始められて源介は縮んだ儘むんづりとも身動きは爲らず、見付かッたらば百年目と元より覺悟は決めるもの丶、流石どきつく胸また免がれたさの山々、天晴この大地もへこんで呉れろ、此場合ひ堀ッて潛れる鼹鼠とも爲りたし、かうああと氣を揉んだ甲斐が、情無い、無いとは扨扨。一人の聲「この植込みを見やうぢや無いか。」

ち……ち……畜生！　發矢、ざらりともぐッて來る手、夢、現、前後左右悉皆茫漠。その手がさはッたか何うかよく早く先方の聲に胸共口耳を貫かれました。

「居た！　居た！　居た！　人が……ぐにやりと！。」

さうかと言ひさまむら／＼／＼、走りよッた前後六七人、中に一際するどく聞える頭分の猿橋の聲、

「それ、見……何ぢや何者ぢやッ！」

立ち掛かられて最う早駄目。是も天、卑怯未練な眞似は爲ぬ。

大浪をうつ胸、その感じも扨殆んど無し「己だ」と一聲繁味を出る、其「己だ」には一同がさすが幾らかぎよッと

も爲る、
「だ……だれだ？」と是も慌てゝ。
早く一人が心得て持ッて來た、無殘、提灯の火影に最う惡びれずぬッと差し出した顔、一目見て此度は猿橋の方がはッと許り、あまりの意外に目もしばたゝいて、しばらくの間は只まじ／＼。
「これは猿橋君、いや飛んでも無い處で。」
太々しくもう落ち付きはらふ憎くい曲者、
「關君か！」と言ッたのが關の山。
すつかり露顯で、もはや肝も坐りました「大閉口さ。君たちが此處で密會するとも知らなかつたが――いや何も時の運だよ。諸君、失禮、大きに御手を煩らはしました。」
こらへかねて猿橋は突と寄り、目をすゑて、
「君、何でこゝらへ潛伏したンですか？　人の密會を窃聞して――さア何の故で？」
半分言はせず冷笑して、
「さう言ひたまふな、仕方が無い。土臺が君達の方が大ぬかりだ。合圖の間違などは下さらんさ。強ひて僕が好き好んでこゝへ來た譯でも無い、逆賊と一聲偶然に叫んだら――はゝゝゝ小說見たやうぢやないかなア。それから面白くなッて潛りましたさ。それッきり、別條も何も有りませんや。猿橋君、君も舊から僕と同臭味同主義の人でしやうが。」じッと眺めて、「あゝ？　黒江派でしやうが？　同じ派の僕がよしんば窃聞したとて道理上別に何も……」
「御待ちなさい」と一人が横合ひから出て差しとめました「關さんとやら一寸しばらく。しかし、猿橋君、斯戸外へ立ッて居ッては……」
手眞似で意中をそれと告げれば猿橋も點頭きました。どうでもいゝ、そんならそれで委しい處を話す、其話したい處も有る故是非とも立ち寄ッてと說き迫られて流石こちらも其意を悟る、悟ッたものゝ又別に思ふ處の無くも無し、氣の付かぬふりでそんならと其儘言葉に從ひまし

た。

前後びし〳〵と圍まれた儘茶亭へ護ッて送り込まれきッと座敷を見回せば、何の事は無い全くの書生室、時流紳士の氣節と共に名殘りなく空に爲ッた一升樽二三本が形も無く其邊に轉がり、食ひ殘しの牛肉竹の皮のまゝ赤く見えて、火鉢にはいつの間にか煮附いて仕舞ッた小深い鐵鍋、箸を免がれた玉子の白味が茶色に變はッて焦げ附いて一種の匂ひを立てゝ居ました。坐蒲團も何も無し、初めは正しくも布かれた赤毛氈、それも何時の間にか揉みくちや〳〵、其皺を伸しながら猿橋と對ひ合ッて源介も坐る、坐れば外の連中は堅く入口の鎖しを固めて源介の左右へどッかり坐ッて各ッ仕込杖やら洋杖やらがらめかして其處邊へ叩き付けて中には焦げ付いた鍋などを片付けるのも有りました。

「關君」、猿橋が沈思熟考の後さも重々しく、「どうもな貴君が潛伏して居られた仔細が分かりませんからな、成る程貴君と吾々とは同臭味でもありましやうが、其中にも人々には互にまた秘密の有る物です。そりや貴君も御承知でせう。甚だ吾々は不快を感ずるです、卑怯、潛伏なんどして。併し、理屈は先そんなものでは有るが、折り入ッて最う斯う貴君も來合はすてふ緣が有るについて御願ひ申したい事が有るです。は、御聞濟み願ひたい事が有るです。

潛伏したの、爲んの、そんな理屈を言ひますまい最う。只此御賴ン申す事聞いて下さりたいですがな。」

「はァ何ですか？」と譯も無く。

「聞き濟んで下さるか？」

「伺ッた上ですなそれは。」

同時猿橋は冷笑して座中をじろりと見廻しました。見れば座中の壯士共いづれも用意注意する體、何事を言ひ出すつもりか。重ねてまた

「伺ッた上です。伺ひましやう。」

さて相手は躊躇もなる、「今」と言ッてふりかへッて再び又一同を見て、何の意味、

「諸君」と一句。己れ何か強談仕掛けるつもりか、聞かなければ壯士で恐嚇すといふ所存か、兒戲、藪蚊ども！ 何の藪蚊の五匹や六匹！ 胸をすゑれば流石に亂れず、それながら自分には氣が附かぬものゝ目はいつか怒ッて來る、唇はおのづと乾く、どッかりと坐ッて――用意――火鉢を手元へ引きつける手先、見れば猿橋も亦察する。つッと其火鉢へこれも寄ッて、

「では言ひます。大低聞いて下さるでしやうな。が、甚だ是は實以て貴君に打ち出して言ひにくい事ですからな――けれど貴君が正義のためには一歩も動かんといふ人である故……」

女々しい言ひ草――肝の無いとたまらず此方は吹き出しました。

「いや、も、はゝゝ此頃の社說のやうな長冒頭は、まづ、どうでもいゝさ、まア。肝要の點といふのを伺ひましやうさ。」

もはや猿橋の方が絕體絕命、さて掛念、苦勞極まるものゝ、思ひ切ッて言ッて見ろ、當ッて砕けろ！

「外でも無いです。あの黑江徹ですな。」

が、猿橋の聲もやゝ變はる、源介の胸も亦動めく、列座の一同は全で手に汗

「あの黑江が――閣君、おどろきなさるな――左樣君も御贔負の黑江徹は古今無類、死して餓狗もその肉をあへて喰はぬ、而も筒井順慶派の不義不德の怪物ですぞ。」

第十六

不義不德の怪物ですと猿橋は言葉を重ね、其間しけしけ源介の顏こゝを先途と視詰めれば、驚くと思ひの外の何の隈も現れぬに宛然また刄を研いて賊を見失ッたやうでも有り、擬勢もいくらか拔け氣味でした。

「それで、な、貴君、」また切ッて入ッて、「貴君はどう御考へなさるか知れませんが、な、驚くべき奸物であの黑江が有ると言ふ事が實は知れましたので、實は先刻の宵のうち、那處にも逢ひましたな、あの時ッけ狐ッて

殴ッてやるつもりであッたんです。處を運がよくて氣取ッたか、いつの間にか裏口から逃げ去りをッて折角の計も水泡に歸して仕舞ひましたがあの時もあゝ貴君が警護して居られる事と云ひ、それ故に吾々は甚だしく貴君に不快を抱くです。伺ひたいです、何の故を以て貴君は黒江を崇拜されるのですか？　此頃の世評醜聞の頻々たるは貴君の耳に入りませんか？」

思はず言ひ過ごしてはッと氣が付き「いや何其處邊は何うでもですが、な、御承知のとほり吾々は均しく今といふ今迄は黒江を頭にいたゞいたです。が、もう志をひるがへしたです。飜へした曉はよしや山が引ッ裂けやうが、飽くまで敵と爲ッてくれる所存で御たのみと言ふは卽ち是れです。成る程貴方も一方ならず黒江を尊崇しては居られるでせう。が、黒江が大奸の大奸たるといふ證左は御需めならば幾らも言ひます。貴君、正義より外眼中一物無いと常からも言はれるからには不正不義極まる怪物に戀々として路の犬と爲る法も無いでせうが。」

立てつゞけに言ひ捲くる言葉を一言半句の邪魔も入れず謹んで案外をとなしく聞き入ッて、姑らくは木像そッくり。水鳥の足に隙無い胸中、あらはすまいと思ふだけが強面し、嗚呼々々情無い黒江徹天晴な人物とも見えた男が唯一つの志しの卑劣から既に斯う最う幾人もの身のまはりに愛想をつかされて、何と、曾て自分を戍ッた洋杖もふりかはッて今は吾頭に降り注ぐものとも爲りはてた事、何たる仕儀かとこゝに再び以前の懊惱がめぐり返れば、宛然として魔神の手に荷はれ身は中有を馳るかの心持ち、情の方が潮のやうに急き上げて何と返辭の仕様も無い體、さては果して察しのとほり不承知だと先入の考へからして猿橋も疑ふ、疑へばさて憎し、だめ！そのまゝに置くものか！不承知であらうとは大抵推した。聞かれた故に絶體絶命、切迫つまッた苦肉の一計、理が非でも何でも角でも否應無しに強迫して味方とする所存であればこそ空とぼけて室內に誘ひ入れて――何の今更不承知を言はせるものか。まち／＼としてまだ默ッて下ば

かり向きくさる。何……何と――ちッ！返辭を促がせ！目くばせして居並んだ壯士共に心得させれば一同また膝をずるりずるり、少しづゝ前へ〳〵と進んで來て、半はまた面白半分、事あれかしと待ち望む。あはや源介の運命はこの一呼吸！

鬼をもとりひしぐ益良雄の一座に似合はず、何れも呼吸を吞むこととて、一室に物の音は全く盡きて、寂の寂、幽のまた幽。洋燈でなくて蠟燭、閉ぢ切ッた室內、表面は平和で風も吹かず、蠟燭の火炎も直線に一定規律の付いた浪を伸縮させて、蚰蟲のやうにそろそろ縮まり下る糸心の運動も亦悠然。火箸は有る、手遊物にする物も無し、活火おこりかへッて蠟燭を後にした者の表は眞紅折り〳〵は焦燥れるか、手ばしこくと勸めるか、櫻炭の金花がぱちりと飛んだ跡、青ざめた炎がぺら〳〵魔王の舌をも吐いて黑紅立ちまじる谷間には灰も亦紅熱し、おのづから燃え落ちてやがて碎ける火に煽られては再び金花が飛ぶ壯觀。

いつ迄立ッても無い返辭に猿橋も今は堪へ切れず、一か八かの即ち瀬戸際、亂拳が是から飛ぶか、飛ばぬかの是が切處、身を固めて、

「關……關君。」

びくりともせぬ相手をいよ〳〵憎さうに睨め下し、「御意見、さア、どうです、貴君の？ 黑江を大奸と――いや御不承知ですか？ えゝ？ 吾々の言ッたのに御不同意で？」

絕間無い指に衝かれて一分二分釣鐘も果は動き出して來ました。屹と見上げた凄じい顏、すはと此方も片唾を吞めば、

「無論！同意――同意です！」

「同意？ あの同意？」

思ひ掛けなさ、また驚（きよッ）となッた猿橋、またも土俵場で背負投げされて心は恍惚、腹の內で、只併し、

「狸！あやしいぞ。」

第十七

猜忌で煉り上げ、固めつけ俗世界、これを旨く用ゐたのが俗のいふ智者、用ゐ損ツたのが俗のいふ大愚物とか、それだけ之に縛られるのも人情無理も無いものゝ、凡眼なか／＼天眼鏡には及ばず、桝掛けの筋すら善悪二道の理屈が扱付ければ付かぬでも無し、思ひ迷ふといふのがどう有ツても俗の俗人の普通でした。猩、そらとぼけるかと猿橋は源介を買ひ被る、うたがへば碌な返事を出さぬ猿橋の姿に又源介が猜忌でむかへる、或は人の氣を引くつもりかと。盲滅法界闇中に手さぐりして紛れあたりに敵を捕つ活劇のだんまり場、心がらとて天の靈光の共處こゝから注ぎ來るのも全く識らず、探ツたり、障ツたり、追ツたり、逃げたり、やきもき、でたくさ、やツさもツさ。高を言ツた處が黒江といふ何だか知得れぬ毛獸をなぐるかなぐらぬとか夫ツ限り、が、さう諦らめぬで持ツたものゝ、睨み切るほど二人共に目をすゑて呼吸をはかる眞劍勝負。

猿橋は急き込んで「御同意ですか、黒江がわるいと？」楔子のやうに問ひかけて其下から直「本當に？」とは、己れ！身分にも似ぬ未練な男。今は源介の方が冷笑の氣味、くすぶツて居た生麁朶が風向きによツ勢よく、肝ふと／＼しくせゝら笑ツて、

「何が嘘か！嘘を言ツて此場合ひ、」じろりと一座を見回して、「洋杖頂戴をのがれるやうな、憚りながら闘でも無いです。」

ひやりと胸に應へたらうとさも／＼言はぬ計の體、傲然とまたせゝら笑ツて、

「ね、猿橋君、恐迫は御よしなさい、はゝゝ、御免だ、恐迫は。洋杖が恐けりや誰が馬鹿ツこゝへ入ツて來るものか、君たちにどやされるやうな罪はまだ作らんから安閑と斯うして入ツて來たさ。な、諸君。」

苦笑ひで一同は只無言、是も一種の氣狂ひだと見詰める體に又冷笑。

もとより養ッた鐵拳、久しく柔弱にして居て唸るやうな、それ用ゐるのは誠に容易い、但し世の中の義理といふもの今それを拵へた處で無し、なぜだと言ふだらうが是はこの胸、打ち明けられぬ處が卽ち人情。

「それだけは御免かうぶる。」

「とは又何故？」

「明日の事だけです。其後は決していつでも御免かうぶるとは言ひません。」

意味有り〳〵とした挨拶、道理、猿橋も疑ひ出す――わかッた愈やッぱり犬だ、狸だ、假面かぶりだ。正義々々と言ふ口で、また況んや黒江を見切ッたといふ口で――

「御免かうぶるとは分からんです。それなら夫で其子細を――子細を言はず只御免かうぶるでは吾々も何うしても疑はずには居られませんぞ。」

つめ寄るのも無理は無い、が、打ち明けられぬ義理仕方は無い、恩に爲ッたと下手に言へば蟻の塔から堤が頽れて、黒江の妾三昧までも知れる、知れる、それは構はぬものゝ、苟しくも知らせぬと盟ッた前日、其前日の約をやぶるのは男子の爲るべき處で無し、切迫は詰まるが只觀念。まして況んや絶交して立去る時の高言に今だけは恩義に免じて鐵拳を振る舞はぬと此……此舌で現在言ッて、骨が砂利、其舌のしづくも乾かぬ間、何の不信がそも〳〵出來やう。疑ふなら疑へ、毛頭怨まぬ洋杖――

「頂戴してもいゝ！」

是が肝をすゑるための地ならし思ふ儘大言を吐き飛ばして、例の略！驟雨たちまちぱッと歇んで、青天に風も無く、また雲もなく、

「いゝや諸君、失禮しました。」

「何ですと？」

抑揚に氣色ばんで來る猿橋、それと見て取ッて源介はいよ〳〵答重くるしく、

「いゝや何つひ言ひ過ぎました。」

巧に話しの針路を轉じて「肝心のその話しです、猿橋君、御疑ひでしやう御尤千萬、拙者が平生黒江黨であり

ましたからな。けれど實は今夜全く愛想吐かしたです。義絕して來ちまツたです。其子細は言ふに忍びぬ事情が有るゆゑ言ひますまい。が弓矢八幡、これは實です、今貴君方から聞く迄も無い、黑江の不德は知ツて居ます。」

赤心を顏にあらはして改まツて陳述されて見れば猿橋を初めとして一同の疑ひも漸くに晴れて來る／＼、後は話しも打ち解けて、可惜力瘤の入れ損したのも有り、打ち解けた處でよく聞けば黑江を毆つとの計畫を全く催した事でした。

黑江の隱謀は今更言はず、隱謀が有るといよ／＼知れたので猿橋をはじめ七八人がこの夜の翌朝を以て事を擧げると決まツたのです。

百日紅の皮、皮と見えぬのも剝いて見れば皮、皮の下にまた皮の有る世の中猿橋は眞實今まで黑江方の皮をかぶツて其實反對の側から差しまはされた犬なのでした。自餘の壯士はほンの器械、たゞ日當でつかはれる丈のもの、之が軍配を取ツて巧言で說きくろめて率き出し、翌朝この愛宕山に黑江の來るのを待ち受けて痛めつけようとの計畫でした。

旣に源介も黑江に背いた、それに分ツて有り體を充分洩無く打ち明けました。打ち明けた後は決ッたもの、同じく一味の者と爲ツて一臂の力を貸せと云ふ、さアそれだけが困りました。

第十八

疼いの、悲しいので萬劫泣かぬ此源介も義理の柵、人情の枷、おいそれと言へぬだけ涙とも爲る、打たれやうが、叩かれやうが、灸られやうが、熬られやうが未練を吐く處で無い。疑ふならば何うでもしろ、一分一厘も退きはせぬ。身を据ゑてじッと瞑目し「黑江を見切ッたのは眞だ。虛實分からぬなら思ふ存分、君達勝手にするが好い。どんな痛苦にも中ろう。身を縮めて志の有る處を見せやう。」

こいつ出來ない相談を言ツて場面を巧みに胡魔化す氣

かと愈一方も思ひ入る、思ひ入るに從ッて廣言する其口吻踏ん裂いても遺りたし――何の其位な哀れな臺詞でおいそれと早く動かされて謀計に陷るものか。

「どうも一圓合點が行かない。そんなら貴君、えゝ關君、吾々は何うしても君を以て二心有ると――いやさ又是非も無いです、口許り何と言ッても實際の事が無ければ證は有りますまい。かと言ッて今こゝで貴君を試るとか何とかのためよしや貴君を打ッて見やうが叩いて見やうが、それは何の益も無い――只それ貴君が忍んでさへ居れば――それで心中は現はれませんて。關君、敢て暴言を以て吾々は決して貴君を此上恐嚇はしません。が、志を示すといふ事が御否なら斯うでもいゝです、吾々を助ける積りでゞも。況んやまた此事たる、そも／＼破廉恥、不德義な所業を行ふでも無く、而も公明正大な義擧を爲るのですもの、な、左樣でしやう。頼み上げるです吾々からむしろ。はァ、どうぞな。」

折れて出て柔かく纒はれて暴いのよりも却ッてこまる、無理と云ふ程の無理は相手の言葉に無し、で、それに從はうか、義理の二字は付いても回る。右左りの義理、裏長屋の溷板一方蹈めば一方上ッて中有に兩足の平均なのも怨めしく、身體一つを持ち扱ッて掻きむしらうか、劈かうか、思ひ立ッた豫ねての企望から言へば、奸物退治に腕もぴくつく、なまじひに夫等が煩惱、躊躇立ち迷はせる種と爲ッて、精をつめる處油汗を玉ぎり出して、はて右にしやうか左にしやうか。それ是する內曉も近し下町の鷄も一つ二つ早啼き初め、朝開の風肅々として、征馬鈴の音を響かせ出す刻限、黑江はやがて午前七時に來るとも言ふ事、人ッ女々しい、さりとは未練な――まだ付かぬか決斷――時機ひとたび空しく失へば盆の窪の兀は捉む手に空辷りして去るといふ世に、

「どうです關君！」

急かれる強面さ。まゝよ、儘よ、もう何う爲るものか――退引ならぬ此場合ひ。何も角も運次第だ。例の運の主義が冴えかへる、ぶら／＼と立ち迷ッた考へ、定まら

ぬ處を無理に定めて――嗚呼天地神祇、日月星辰、
「承知した、なぐります！」

×　×　×　×　×　×

×　×　×　×　×

朝酒に銘々勇氣を付けて腕をさすつて待つ一刻、其移る丈が源介に取ッて居所に近づく心持ち、今更未練は言はぬとして、其言はぬ間に未練は殘る、亂拳の花の忽ち飛んで修羅の街が出現すれば百事一切片付くもの丶、それ迄の間の辛氣。まざ／＼と目に殘る昨夜の黑江の顏色、まざ／＼と心に殘る昨夜の淚流した始末、其人が、其黑江が何心なくこゝへ出て來て、大奸の天罰思ひ知ると同時、思ひ知らせた者の中に而も言葉を食んだ妖獸、此闘源介の居るのを見たなら！

事情も有るなら面を包んで打ッて掛かれとの忠告を猿橋も與へた物の、意地で中々諾とは言へず、何の構はぬと排斥して其下また無駄な想像をもする、畜生！埒の無いものだと吾と吾を譴責して。

七時の時計がかすかに聞えて、最早と一同は手を分けて其處此處へ散りました。黑江君御一所にと流石まだ拔け目無い猿橋の言葉、承知して茶亭を立ち出で五歩六歩移す內――もう來た――打ッて掛ッた味方の一群！

それと言ひさま一同馳け寄る。車の上には正しく黑江、それ逃がすな、ぶッちめろ！逆賊！」「犬！」「黑江！」「黑犬め！」流石防ぐ黑江の護衛の兩三人、生意氣なと疊み掛ける間を潛ッて、早く黑江に近づいたのは誰？源介。

「先生！源介の大罪人？」

振りかざした洋杖やッと一聲下すと同時にふら／＼と目は眩む。たゞし確かに打ッた手答へ、さッと目を見開いて見ると同時、梶棒を突いた車夫、主もたまらずよろめいて蹌踉として大地に下り立つ、下り立ちながら吾を打ッた當の敵を一目見て、ふッと言ッて流石仰天、

「源！源介か！」

怨みで張ッた兩眼――夜叉と見紛ふ顏色。武者ぶるひに身は震へて已れ、源介！無――無念な。言葉を食んだ

人非人め！昨夜の舌の唾も乾かず！無念に骨身は烹えくり返る。其洋杖をと一生懸命、源介目掛けて飛び掛かるを寄せつけまいと――あゝ敵した！――横なぐりに打ッ拂へば、無殘、時ならぬに咲く血の花、雲も無いに降る血の雨、徹の頭の皮もやぶれて――

「出來した、闘君！」と快くも認めて味方を奬ます猿橋の聲。氣は揺ッても急所の打ち傷、目も眩んで五體も利かず、やみ――徹は大地にベッたり――身をふるはせて地團太踏んで、怨みの一句、覺えて居れッ

嘸や繪に爲たい程此源介を憎くも有らう。言葉を食んだ人非人、ぶるたすよりも劣ッた人物、無念はどれ程、それは察する、此辯解は何れ後、許してとばかり肚の中、心で詫び入るその切なさ。斯う窘めたら思ひは殘らぬ、早く逃げろと促す猿橋、面々何れも顔は包んだ、「しッそれ巡査の來ぬ內に。」さア逃げやうか、逃げまいかと思へば身體一つが引ッ切りたし、未練で逃げたと思はれるのも、とは言へおめ／＼繩にかゝるのも。ぐず／＼すれば時を移る、「よし言ひわけは後で爲よう。」唸る黑江をきッと見切ッて、手早く忽ち身をつくろひ、今夜上野へ落ち合ふと猿橋と約束したのも吐嗟の間、愛宕山の裏の絕壁、心で黑江へは暇乞、寒竹の繁味を穿ッて一散に逃げました。

第十九

好くても有り難く無し、さりながら先運よく鵜の目鷹の目の警官の咎めそれも免れて裏山から源介も逃げ延びました。逃げ延びたものゝ此上今更どうと云ッて思案も付かず、男兒一生百年の志望も義理の柵に微塵と爲ッて無念ながらおめ／＼と爲る其本意無さ。あり／＼と目に浮ぶ黑江の顔色、また其打たれて苦しんだ顔、苦しんではッたと睨んだ目、それや是や今が今眼前に差し迫ッて活動するやうな心地、ゑぐられるやうな苦しみでした。

幾度も思ひ出すやうながら現在の現在涙まで出して盟ッた言葉、今後は兎に角この度は恩に免じて腕をふるは

ぬとまざ〳〵番へて時も經ずふたゝび義理に迫られて、世間は何と云ふか知らず、しかし自分一已の神聖なる良心といふ鏡に照して言句の分疏も無い始末とは！吾ながら身で身が分からず、分からぬだけの懊惱痛恨。生きて居る詮は無くなりました。

　まだ今は搦められたくなり、行跡は兎も角もあれ志しだけは全く奥底の處まで腐れ切らぬに、搦められて玉石混淆、世の中の平凡芥壯士と同列に吟味を受けることは生前の遺憾此の上無し、兎も角も逃げろとばかり、卑怯と笑ふならば笑へ、辻々の交番所の前いくたびか動悸を人知れず、うたせて足にまかせて南の方、いつか金杉橋をもわたッて不圖匂ふ磯のかをりに心付き、定まらぬ内にさだめた目的、左へ折れて一散に海水浴へと飛び込みました。

　一風呂はいッて氣を落ち付け、流しへは出たものゝ洗ひもせず、心こゝに無ければ番頭にひよッと障られて始めて驚いて見かへる始末、流しましようと世辭を言はれてさへ鬱陶しさにいらだつばかり、叱るやうにして立ち去らせて徒らに湯を遣ッて考へ込めば、緣が有るか海水浴、その潮と湧いて來る種々の考へ。聞聲といふ事、湯屋といふもの、それ二つ結び合はせれば坐ろに歷史をも憶ひ出す——義朝の長田の家、範賴の伊豆の修善寺——あゝ長田の後に斬られ、覇業は遂に永く續かず、引きつゞいて思ふ、むかしも今も扨變はらぬ者は人の慾、艱難汝を玉にするなら利慾は汝を毒に育てる——毒、その毒にも正と美は有り、毒に對するに毒を以てして後の毒の毒性は消滅し得られる物で無し、黑江といふ大毒物に食言の源介といふ大毒物、あゝ源介、われながら罪を犯した、いよ〳〵腐れ壯士となッた。

　幾度か洗ひ流した淚、垢よりは淚を多く洗ッて、果てしも無い故屹となッて奧まッた一室へ立ち歸り、何が爲し今日一日を忍ぶ工夫。多く祝儀をはづめば女どもの腰も低し、待遇も糸瓜も構はぬような身ながらも流石また居心地よく、それにしても怪しまれ、いと前後に氣をく

ばる辛氣苦勞、時々は冗談も言ッて女を笑はせ包みあまる胸中を强ひて包んで、人を笑はせて腹では泣く――泣く、しかも此の世の義理のために。場合ひを見て人を遠ざけ、横になつて休みたいと座蒲團を三つばかり續けて布いて御定まりどほりの烟草盆の出來合ひ枕、仰向になツて天井の木目を勘定する內、見るみる共木目は黑江の目になる、おやと思ッて見直せば忽ちの內また變ッて阿鳥の怒ッた目付きにもなる、嗚呼嫌や怨むであらう、嫌や憎むであらうとまた思ひもどる――肉も骨も血も皮も一切が沈思の巢でした。

正午も過ぎる。いゝ加減な胡麻化しを言ッて、又一人でつくねんとして居れば、俗は俗の心で人を俗にし、當て込みが有ッての待ち合はせかと夫となく來て女が口裏を引く。且はをかしさに漠然とあやなせばいよ／＼思ひかねた風情、果は御馴染の御神燈に口でも掛けませうかと切り出す。水鳥の足に隙無いところを、あゝ知らぬとは氣樂なもの。その人の氣樂も羨まれる、いとゞまた自身がはかなし、賴むやうにして女を去らせて又も又も沈吟三昧。

どう思ひ直しても、どんなに心を賺して見ても、さて生きて居られぬ身でした。

生きて居られぬとは匹夫匹婦のやうな口上、さり乍ら實情でした。食言の、賄賂の、やれ何だ、やれ角だと口幅廣く人をも責めやうと言ふ自身が噺しにもならぬ不節操、よしや赤心はどうにしろ、よしや秋水は今打粉で拭ッた計りにしろ隔てられては光も見えず、義理から出た不義理、不義理に揮ッた洋杖の罪よしや天は見許すとも、自身腦中に一點猶あり／＼と光りの殘る良心に照らして見ておめ／＼として何で居られやう。理を知らずに匹夫匹婦は死ぬ。理を知つて自分源介は死ぬ。逮捕されたとて高が毆打犯、囚獄に居るのはわづか、但しわづかの囚獄で徒らに良心の叱責を聞くよりも早く一命を潔く捨て、早く良心の馬前に下ッて思ひ殘すところがなくなりたい。懊惱の究まるところは一種の狂、鍛鐵鋒先の鋭いだ

けに折れ方もまた脆いことでした。

第二十

どうなるも命、天の配劑、仕方が無いと諦めました。

蠶兒その生れて糸を吐く時、或は綸綿となッて大手腕の筆に會ひ、或は縮緬と爲ッて楊柳の腰をまとふ他日の境遇を知らないで持ッたもの、源介が今日と云ふ今日うら恥しい仕儀良心に罵られて寂滅すると今迄に知らずに居てこそ世の中、決して未練は出すまいと一念を固めました。笑ふ奴は笑へ、小度量と思ふ奴は思へ、小度量か知らぬが食言の大罪、人は赦してくれても心で許せぬ。足腰の無い腰拔壯士と爲り下らめことこの場合一死に因るより外に手段も無し、何の死ぬのが悲しからうか！

手をたゝいて當り函を取り寄せ、巻紙を展べて認める書き置き、さすが殘念ながら筆もつまづく、千萬無量の胸中、それを五寸か一尺の紙に籠めて、書き了ッて更に默讀して見れば、――女々しいが書いた身さへも幾らか涙、まして寢耳に水の妹はさぞ、またまして年寄ッた親父さまはさぞ！

「さきだつ不孝の罪申譯これなく候へ共進退こゝに谷まり一命を相捨申し候大略の狀況は一兩日の新聞にも掲載に相成儀と存候へ共豚兒一生の御別れの言葉として概要記し付候

事の起りは私の不肖それ故に候日外(いつぞや)一華樓にて黑江に始めて面會仕り天晴なる人物と認め候ひし事今より思へば夢に候人は見掛によらぬと云へど斯程とは思ひ掛けず昨日といふ昨日迄御承知の如く私も黑江のために相働き申候この後の事は言ふに忍びず御諦察願上候黑江が思ひの外なる人物なる事昨夜始めて承知仕り平生の私の意氣にも對し辛き目に合せ呉れんと腕も顫へ候ひしが情無きは是迄同人より受けたる恩義之がために制せられ手出も相成らず涙を呑んで罷り歸り申候然る處歸路愛宕山にて何某（仔細有之名字相包候）と云ふ者に逢ひ色々事情もこれあり

辭退仕り難く板ばさみと爲り實は今朝愛宕山へ參る處を要撃致し右黑江を散々に打据申候尤も一命關する事とは存ぜず候へ共前後此邊一つとして私自己の良心に背かざる所業は一もこれ無く天地神明の理知らず〳〵蔑如致せし段も恥しく如何に思案仕候ふとも今後生きて自ら自身の良心に面をも合はせ難く決意して今夜相果申候

先立つ不孝幾重にも御容赦被下度又是等の事聞候ては嘸かし阿島も驚くならんと存じ其心底如何にも愍然に候へ共自然の運命致方無く世界唯一の大愚物の兄源介蔭ながら阿島にも手を合はせて詫入り居候取り込みて文脈も明かならず折角御酌量下されたく御父上樣日外御讓下され候着物は着用し過日阿島が買求め候帶は其儘相〆めそれを死期の裝束と致し申し候此餘は新聞にて御覽下されたく右用事御暇乞のみ如此に候阿島へは別に手紙差立てず宜しく御父上樣より以傳聲希上候不宜

繰り返し讀み了つて、狀袋の封蠟それも恩愛の涙でうるほす、封じ切ッて「〆」を書いた氣持ち、寸斷か九腸か、九腸か寸斷か、血は一時に頭腦へ突き上ッて、姑らくは物の色も見えず……

長いやうな、また短いやうな其日、すなはち生命。二時となり、三時となり、出窓の半面に血ばしッて來る夕日の色を心がらか無常を示して、常は何とも無い井戸繩にしめられる轆轤の音も絶叫して泣くかのあり樣。四時五時六時、今殘すところは二三時間、夕陽も西山の墳墓に入ッて、天地やがて黑闇の喪服に包まれて來たが最期、それが即ち此身の最後——最期、二三時間の生命。生命、それ惜いとは口腐れ言へず、が、併し何となく胸安くも無い、あゝ婦女子の情！良心の叱責に美ン事腑甲斐無い身を思ひ捨てれば、むしろ心は光風霽月とこそなれ、思ひ殘すところが有らうか。無いと云ふそこ丈は何處やら滿足、たゞし其下懲りずまに人間の劣情といふものも亦萌す。端坐して目瞑り、懐手して吾と吾身の肌を撫でれ

ば、まだ嘗て知らなかッた心もち、この肌の體温、それも翌日は快く冷めるか、此胸の脈搏、それもやがての内に絶えるか、疵一ケ所も無く親かも産み付けて貰ッた身體を不明不才の汚點で穢して——あゝ肉親もそこは許してくれ！

夕暮が近づいた事とて來客も込む樣子、默想もいくたびか其方に奪はれ掛ッて、おれゝば又依怙地に人聲が耳にも入る。嬌喉玉をころがすやうな美人と應答して國訛りできやッ／＼と笑ふ時流紳士の聲なども畜生め！廊下へ隔てた座敷にもひゞいて、羨むでは無いものゝ、癪にもさはる。とばくさと馳け込んで來た女に御夕飯はと聞かれて、何と言はうか？　窓には薄明りが有ッてまだ暮れ切らず、食ひたくは無いがさて死ぬには早し、あつさりと吩附けて逐ひかへし、忘れて居た手紙をふッと思ひ出して、呼び止めて、これを出してと渡す手の内、執着恩愛を握りつめて吾知らず顫き掛る——あゝ未練！

碌に咽喉へはとほらぬ晩餐、好き酒それも只一銚子、飲んだか飲まぬか醉も發せず、やがて燈光を持ち運ばれて、すはや決心！紙入を探れば五圓ばかりは有る、勘定の代にとのこらず抛り出し、釣は入らぬ、どうせ又來ると大きく出掛けて、やがてぐッと計りに引掛けた茶、その茶がこの世での飲みをさめ。どうぞ又御近い内にと送り出されて夢かまた現、もはや大抵魂も中有を飛ぶ。充分には日も暮れ切らず、西の空に糊り付く斷雲は法隆寺切れの錦でも貼けたかのやう——錦、錦着て歸れぬ身、それを是から何うして捨てるか！淵川か、それでも無し、松の枝か、それでも無し、刄物三昧か、それでもまた無し、すなはち一おもひに小氣味のいゝ線路に臥しての鐵道往生！

新聞紙などで折り／＼人事に聞いた鐵道往生、その味は甘いか辛いか、味ふと同時に生命は無し、味はッたと云ふのを土産として閻王の前で咄せばとて幽冥の聲は娑婆へ聞えず、いづれ凄からうとは思ふものゝ、衝ッて見なければそれも知らず、どうせ死ぬ！共死といふ事は唯

一つ、煎じつめれば呼吸が絶えると云ふ丈のことゝすれば迚も一生の思ひ出に小氣味好く遣ッて退けるのも面白し、昔しかさふばは牢獄にあッて半月あまり絶食し、精を枯して自殺しながら、終に死ぬまで分厘も精神を紊さず、日々の苦痛を日記にして殘したとは何たる我慢づよい人物か、てきぱきと爲ッて日記三昧は鐵道往生で思ひもよらぬ仕儀ながら、迚も死ぬと覺悟したら一思ひに片附きの早いのが妙かも知らず、ことには持ッて來いといふ此邊、線路も既に支度はとゝのふ、時を隔てずに汽車は通る、思ひ切ッて此で遣れ。

あやにくに明日の晴天、夕紅はまだ根づよく時間のわりには暗くならず、その邊を散歩して又も時を移す心持ちは快か不快かさッぱり分からず、時間の一刻移るといふのが即ち生命の一分が延びること、たゞし伸びても伸び甲斐無し、さうかとて流石に人情、まだ生きて居ると思へば何處やらに未練も殘る、有か無か、何だか滅茶でした。

さすが時間は構はずに立つ、兎角する間にとッぷり暮れる、もはや忍び込んでも大事なし、老人の齒のやうな形ばかりの埒を潛ッて線路の側まで寄り近付き屹と爲ッて見わたせば、闇ながら近所二三間は透いても見える線路三四本、星あかりに氣の所爲か、薄白く所在を見せて、引きれたした有様は怪蟲が髯でも寢かしたかの體、髯、この髯の上に臥して、一つがらりと遣られゝば最早色も無し、聲も無し、くだらぬ物だ人間はと今はさすがに思ひ付く、情無くもなりました、心細くもなりました。頓死すれば臆病者も大豪傑の心で死ね、死を待てば大聖人も時として臆病者で死ぬ、之を待ち眺めるといふのがむしろ實際より甚しく感情を躁すもの、いざと爲ッて線路に立ッた、只それ計りで此考へ、まして凄じい音がして車がきしッて來た時には！

立ッて茫然として汽車を待てば又其來ぬのも待ち遠しゝ、信號の棒振は絶頂に血色の光りを點じて魔魂の目の玉を懸けた鹽梅、こゝからして最う地獄世界。磯を吹い

て來た風も腥し、かすかに聞える漁歌の聲も細し、聞きさだめれば千百の情波が起きかへり、倒れかへり、岸を拍ッて咽ぶ音！

「何だ、これッ！」と突然人に聲を掛けられて肝もつぶれる、もはや半死の源介、ぎよッと篤ッて見かへれば、身動きもまだせぬ間、向ふは側へ突とよッて、しげ〳〵透して眺めながら「何でこゝらへ立ッて居る？　夜、夜中――おい、無分別ぢやないか？」

とがめられたと言ふさへ意外、まだ其上の大意外、この言葉を聞くと等しく源介の身體はびり〳〵と痺れきたッた。それも其筈、其咎めた人は誰有らう、夜で姿は見えぬものゝ、聲でたしかに覺えも有る――あゝ因果！親父でした。

どうして此處に親父が居たか？　知子(わがこ)と知らずに咎めた驚悔、但し「無分別」とは胸をゑぐる。血筋の緣には闇も無し、答へをすれば直悟られる！世の中の親心、まして無分別と見て取ッて人の命を救はうと云ふ慈悲深い親その親に現在咎められて一言半句の返辭も篤らぬ、あゝ何といふ因緣か。親は知らず差し寄ッて、曾て自分が産んだ身體、其手とも知らず手を取れば、取る身よりは取られる身の苦しさ、慈愛の温味も骨にとほッて、もう早たまらず瀧の涙。ふりもぎらうにもどうして強面(つれな)く！ちッ、全身は五分だめし！顫いてたまらず洩す泣き聲、聞きつけては向ふも一心

「何か仔細は何れ有らうが……無分別だ……死ぬなんぞは。危ねエ、こンな處に居て。こッ、私と一所に來なせエよオ。」

蟲が知らせてか精神籠めて抱きすくめて動かせず、抱きすくめられて振りほどく猛惡な力もなし、我慢！恩愛！義理！人情！どうしたらば身の立つ瀨。源介だと言はうかと口までは衝いて來る。言ッて仕舞へばさア良心、良心の睨みを又食ふ。

勿體ない、情無い、不孝、不德、罪惡千萬！御赦し下さいと腹の中。御歎きは嘸かし、但しとても成り立たぬ

身。無殘、源介は鬼となります。罰あたりの不孝者、鬼か、夜叉かの源介！折角の御とめ立てながら――ちッ！目を瞑れ、思ひ切れ！

萎える身、鬼になつて力をふるッて――えゝ勿體ない現在の親を突き飛ばして――無言――跣足になッて奔電急潮。親は老體、突き飛ばされてさすがにたぢ／＼、踏みとゞまッて立ち上れば、無殘、向ふから快來た汽車！

毒烟赤黒く火花を散らして霹靂の聲は天地にとゞろく。無分別は其方へと――ちッ！馳けて行ッて挽かれるかッ！聲かぎりに絶叫大呼、人一人、迚も助けるなら何處までも。助けを呼んで起きたり寢たり蟲が知らせた親子の情、辛くも追ひすがり掛けた途端、馬鹿！馬鹿！あゝら無分別！一足さきに線路へばッたり！風を切ッて唸ッて來た黒山！たふれた源介の帶際つかまへ損ッた親父、はたと機關車へ横から當ッてうんと云はず二三間さきへ。

線路血に濡れて風いよ／＼腥く、走り過ぎた汽車の後影は黒山を次第にちゞめて行きました。

其次の日からの新聞紙は黒江や源介の記事で大半を埋めました。あゝ免れぬ惡因縁、黒江は源介の一撃が原で誰も意外、遂に命を失ひました。源介の身は千切れ／＼、親父は腦が碎けてこれも即死、あとに殘ッた阿島は無殘や重ね／＼の愁歎を一人に背負ッて立ちました。猿橋はさすがに巧者、源介に死なれたのが儲け者の、どうか巧くみに後難を免れて、それを出身の糸口にしてめッきり仲間の賣れが好くなッたとは！

（をはり）

阿千代

一

天に口無く地に聲無し、情の風は餘所に吹いて惠みの露は身に掛からず、嗚呼嗚呼產みの實の親御樣、おなつかしいが怨めしい。斯うして娘に泣き死ねとか。呉れる所に所を缺いて地獄の苦患に銜らせるとは――嗚呼草葉の蔭で御存知か。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

年の頃は十四か五、年よりも大柄とは樣子の婀娜氣無いので知れた。鏽をかぶッた璞ながら磨けば光りも出る顏立ち、その光りが身の仇で養ひ親が欲に化けた。家藏は早飮みつぶして借金の山を目前に築き、心氣次第に惱亂していよ／＼酒に威勢を借り出す、咽喉は非道の欲にごろついて舌なめづりからして人食ひ鬼の相も出た。口說き立てられ切迫つまッて泣くより外に言句も無く、今は是までと子心にも覺悟を定め、上部を僞ッて氣を綏ませれば、手の裏を返さぬ內に機嫌も好く、晩の御茶は何が好い、口取りか王子燒きか、もう阿父さんの處で寢るのもちッとの間だ、何でもねだッて食ッて行けと――言はれる世辭は命を刻む。

幸ひに夜は闇なり。天が死ねとの便にか。程近い所の柳橋が十四の今年の今日今夜最期の場所と爲らうとは昨日が日までも知らなかッた。岸の柳を見るにつけ、幽靈と名の付くものと思へば薄氣味わるく又なつかしく、右に左に風に任せて他の自由に爲るかと思へば、身につまされていぢらしい。

胸は絕えず動悸を打ッて、我身ながら足許は土を踏むか宙を行くか、津々と湧く冷汗に無限の怨みを絞り出さ

せて、思へば是が世の見をさめ。

怨めしいが、今の養ひ親にも幾らかは名殘り惜しく、今つべこべと言はれた文句もあり〳〵と耳の底に響くやうで、無慚やすこしは可愛がられた事も憶ひ出す——死ぬ決心もすこしは迷ふ。

いいや死ぬ、迷ふまい、吾ながら斯う爲ッて迷ふとは弱い心。見ろ！死んで見せるから。

まだ宵で人足多く、欲張りの鍋燒き饂飩め、荷を下して行きやあがらないッ！犬め、寄ッて人を嗅ぐ。早くあの人が行けば好い、今夜にかぎッて依怙地に通る、と言ッてイんでも居られず、向かふから來る女の姿に、怪しまれまいと歩き出して、摺れちがふ所で透かして見られた。「おや、ちいちやん」との一聲でさらでもの胸がゑぐられた。

「あら、ちいちやん……ぢやないの。うん、その癖に——ちいちやんてばッ」

差し寄ッて袖を押さへた。

「どうしたの默ッて逃げ出して……」と是までは耐へ耐へたが、もはや胸は張り裂けた。姉樣事やら追ひ羽子やら、年こそ先方は八つも上なれ、今までも喧嘩した事も無く仲よしに暮した其人の此の懷かしい聲を聞いて、涙の方が承知せず……もう足も利かず……

「あら何うしたの、大層泣いて、そして獨身でこんな所に……誰かと喧嘩でも爲たの？」「……」

「泣いてちや些とも知れないやね。よう、御言ひな、御咄しよう。一所に歸らう、さ、ちいちやん。よう歸らうッてば何うしたの、堅くなッちまッて……歸るのが否なの？　え、歸るの？　否？　どうしたのさあ！」とすこしじれた。

言へるものなら言ひもする。が、舌こはばッて口が利けぬ。

「ほんとに何時も斯うぢや無いが——いつも私の言ふ事は直素直に聞く子だのに——よう、ちいちやんてば何故否なの？　よく御聞きよ、どんな强面い事が有るか知

らないが私が見つけて此儘一人で歸れたものぢや無いよ。何でも大變な心配事が有りさうに見えるのを見つゝ知りつゝ構はずには行かれない。それに又御前と私とは……」言ひかけて聲をうるませた。

「眞の姉妹同様に――よう、ちいちやん、何故御前私にまで隱しだてを爲てくれるの？」

言ふもつらし言はぬも強面し、ぴたりと柔い頰を差し寄せて柔く脊中を撫でられた時の心もちは枯れ木の春に逢ふかの鹽梅、總身の血潮が逆流した。

「姉さん……私……私……私はね…………」

一所懸命だが後が苦しい。阿高は後を待ちかねて、

「で、どうなの？」と詰め寄る口吻。

「私こゝで姉さんに逢へば、死……死んで仕舞ッても……」「え、何だッて？」

死ぬと云ふのが餘り思ひの外なので阿高は自身わが身の耳をも疑ッた。

「死ぬッて？」と投げるやうに言ッたが、さも掛念といふ様子で同時に暴々しく袖を取り絞る。

「大變な事を言ふぢやないか、本氣か何だか知らないけれど、何も……さ、どういふ譯？ え？ 死ぬの何のと詰らない事をして姉妹同様の私を泣かせて呉れないでも宜いぢやないかねえ。打明けて御くれよ。人が見る、見ッとも無いから兎も角家へ。」

「どうぞ姉さんそれだけは――私どうしても……ちッ、御免なさいましよ。死んだ先の阿母さんや阿父さんに會ひたくッて會ひたくッて…………」

「分からない事を御言ひでない。そりや先の阿父さんや阿母さんは戀ひしからう。戀ひしいのが無理ぢやないが、死んだからッて冴えるものぢやなし、何でつらいか知らないけれど、今夜は私の言ふ事も聞いて御くれ。眞實私や御前のためを思ッて言ふ。どういふものか御前とは他人だけれど中が好く……そんな事言はれると私まで斯う泣……泣……泣かすには――え、ちいちやん、分かッたの？」

「さ、そツと家、あたしン所までそつと御出でよ、また事譯も聞かうから、よ、よ、分かツたかえ？」

臟腑に浸みわたる親切には張りつめた氣も弛んで義理にも一旦は阿高の顏。

俄かに重くなツた足を運んで阿高と一所に立ち戾り、子供氣には半ば懷かしいやうな我家を橫に見て足場のわるい路次を傳はり、阿高の家の裏口から導かれて、奧座敷なら宜しいが、兼寢間、兼食堂といふ一間の長火鉢の前に坐らせられた。

顏色を見て不思議がる阿高の母親に見られるのさへ恥かしく、わざと洋燈の影を片明りに浴びてもぢもぢする。

「何だかちいちやん、どうかしたの？」

「どうの斯うのツて阿母さん大變なんだわ。譯はゆツくり話すけれども、私はじめ氣が急いてならない。ちいちやん早く御聞かせな。御前が言はなくツても實は私も思ひあたツても居るよ。圖星それだと思ふけれど、ねえ阿母さん、さツき言つた話し。」

「御金の一件かえ？　本當に可愛さうだね、此子も。あんな飮み拔けの氣違ひ見たやうな阿父さんを持ツたんで何んなに苦勞するか知れやしない。」

「で、御前、阿母さんや、此子が今夜といふ今夜思ひつめてさ。」「何をさ？」「何をぢやない。わからないね、思ひつめたのさ。」

「劍つく吳れないでも好いやね。思ひつめて何うしたの？」

「思ひつめてのは思ひつめたのだね。ぢれツたい、どうも爲やうないが、死ぬんだとさツ！　あら又ちいちやん、泣くんぢやないよ。」

「阿高、御前だツて泣いてるくせに。」「あたしやつひ……好いぢやないか、泣いたツて。」

「だけれど、ちいちやんはあの一件で思ひつめたのか知ら。」

「さうだともさ阿母さん、それに違ひ有るものか。ねえ、ちいちやん、御隱しでないよ。御前の阿父さんが例

のとほり御前を食ひ物に爲やうとせがむのが根なのでそれから思ひ詰めたのだらうが、其處がよく考へ所だよ、今犬死して御前どうなるえ。若い身そらでさ。」「そりやちいちやん阿高の言ふ通りだよ。是ぎり埋れ木になるも爲らないも皆御前の心一つだよ。惡い事を勸めるんぢやないが、御前があの阿父さんの手許に居たッて一生有達のあがる瀬は有りやしない。それよりは體よくして、御前だッてその氣ンなッて、あの家をさへ出て仕舞へば、正直の首に神宿るで、決して惡るい事は無い。分別の爲時だよ。泣いてないでよく御考へ。」

「だけれども阿母さん、憎いねえ、あの爺、こんな大人しい子を罰あたりだわ、畜生め、ほんとに。不運な子さねえ。」

母親も亦涙に暮れる。深切に言はれるだけ悲しさはいとど混み上げて身一つの置き所に全く迷ふ。いぢらしく手を合はせて拜みたふれた。

「あたい……あたいの樣な不運なもの。何だッて生まれて來たかと思ふと……あゝいッそ一思ひに……」「そこを我慢御爲と言ふに。」「……はい。」「ちッ、可愛さうぢやないか斯う素直なものを。」

「今迄私不孝した事は無く——何も女郎なぞに爲ないでも……御酒を飮めば見さかひ無く暴れて人にも見放され、揚げ句の果ては私にまで。」

「やれ育てられた恩を忘れたのか、やれ碌で無しだの不孝者だのッて……どんなに苦しくッても堅氣の奉公ならと言ふと、堅氣の奉公で旨い酒が呑めるもんかッて。ほんとに何の因果であんな所へ呉れられたかと思ふと、此末こんな不運でどんなにつらい事に爲るか知れず、ほんとに私死にたいの。」

「尤もだよ尤もだよ。其處の我慢が本當の我慢さ。わるい後には好い事と言ふから何でも氣をば廣く御持ち。又よく御前の所へも取り做しは爲てあげるから。」

孤兒の慣らひとて、すこし親切に言はれても其人を力にする氣が出るのに、まして是までの情に逢ッては唯泣

くばかりの有り難さ。其深切に對しても死ぬに死なれず思ひとゞまり、其夜は阿高の家に泊り込んだ。心得て阿高の母親が親許へ行き、今夜是々の譯で泊めたから安心しろと程好く取り做し、火のやうに爲ッて居る相手をやうやく取り鎭め、更に緊めつ弛めつ道理を説いて、必ず女郎に賣らずとも切めては藝妓にでもと勸め込んで漸の事で納得させた。

　栃木縣下宇都宮で遊女屋と藝妓屋とを持ッて居る女將軍阿定に素より相談を掛けてあッた事とて別段に藝妓屋の抱へ主を探すにも及ばず、翌日の朝本人を阿定の所へ連れて行つて相談をしようとの落着。

　それを土産にして阿高の母親は歸ッて來た。が、矢張り慰めながら泣く。

　まづは藝妓と言ふだけ幾らか心も休まッた。翌日その阿定とか言ふのに逢ッて相談が附けば、住み馴れた家や懐かしい友だちと別かれるのも兎角の間、今夜阿高の家に泊るのも或ひは今夜ぎりかも知れぬ。

「阿母さん、今夜私はちいちやんと一所に寢るのよ。」

「さう御爲とも。寒いといけない、私の方の蒲團を一枚別に掛けな。」「寒かない、重いわそんなに。」

　一言が一言胸にしみわたる深切。堪へる氣でもほろほろ涙。あゝ此恩は何所で返さう。

　他人ながら命をさへとめて呉れた懐かしい人と肌を合はせて寢る嬉しさに付けて、思ひやる行く末の浮き世の辛苦、果ては我身の不運を怨むが落ちで、まじりとも眠られぬ。

　時々に阿高も目を覺まして、まだ寢ないのと聞く、それ氣の毒さに果ては寢たふりをして、迭るとも無しに一夜を過して、朝鏡に向かへば目も腫れて居た。

　阿高の母親の親切から、ちいちやんの好きな物とてよく知ッて居て、金團に二色玉子を朝飯の膳に附けて呉れた。それで又泣かせられる。

　十一の年餘所ではじめて窃かに自分の實親の弟といふ、卽ち自分には叔父にあたる人に會ッた時御前の阿母

さんは是が好きであッたとて食べさせて呉れたのが忘れもせぬ金鍔に二色玉子。

其の後は何と無く此二品が好ましかつた。それを夢にも知らぬ他人が唯好きとばかり心得て深切に附けて呉れやうとは！　懐かしや、其人に死んだ母親が乗りうつりでも、爲さッたか。

その懐かしさに二品だけは塞がッた咽喉（のど）にも好く通ると、先方も心から嬉しがる。あゝいッそ此家の子に爲りたい。

二

前回で話しの筋路は大概分かつたが、今改めて要を摘めば、ちいちやんといふのは本名を阿千代とて其今の養ひ親小林平助に藁の上から貰はれた。

實の父は小網町邊の回船問屋（くわいせんどんや）で、阿千代の産まれる前までは出入りの者に革羽織（かはばおり）の仕着せも出した身代、豫測されぬ難船に運つたなく持ち船を残らず失ひ、そのため終に産を破ッて、それが根で氣病みで死に、阿千代ばかりが母の腹に紀念（かたみ）に残つて、やう／＼産まれたと云うだけで、日立ちが悪く母も逝ッた。孤兒も孤兒、憐れといふ憐れを一身に背負（しょ）つて立ッた身體が、それでも思へばよく死なずに居たもので、今の平助に貰ひ取られて育てられた。

その頃平助は亂暴でもなかッた。柔順でよく信義を守り、人の信用も厚かッたが、不圖酒といふ天魔に魅入られて性質はがらりと變はッた。

舐めて居たのが啜るやうになり、啜ッて居たのが飲むやうになり、飲んで居たのが浴びるやうになり、果ては家藏までもどろ／＼に鎔かして、晝夜を分かずぐん／＼浴びる。家業は爲ず唯飲むばかり、歸する所は運まかせの奇利を頼んで、花に入り、賭博に陥ちはじめると、從前の友人は跡を拂ッて、入り代はッて新らしい友が殖えた。

見馴れ聞き馴れ、氣も暴くなる所へ、酒が又影からや

い〳〵煽動てるので、とても押さへ切れるものでない。天地に恐ろしいものは一つも無いとの氣組みに爲ッた、醉へば親子の見さかひが無くなり出す……果ては醉はずにも見さかひが無くなッた。

妻は夫を諫めかねて身を退いて離縁となり、いとゞ阿千代の頼る所も無い、その上に搗てゝ加へて食ひ物にしようと言はれた結果は卽ち前回に述べたとほりであッた。

阿高の家で朝飯を了ッて今はどうでも敷き居の高い我家へ一旦歸り行くつらさ。賴む所は一所に行ッてくれる阿高の母親ばかり。歸ッて何と言はれるか、いつもの亂暴をされるかと夫ばかりが苦勞で苦勞で爲らぬ。我家ほど懷かしい所は無いといふのが世の常なのを、その我家ほどつらい所は無いといふ身の上。家に向かふのか、首斬り場へ行くのか。

門口へ行ッた途端に近所の遊び友だちが稽古に行くとて本を抱へて、ぱたりと出過ッて常に變はらぬ挨拶をして行き過ぎた、それ見たばかりで胸は一杯に爲る。

全で夢のやうで恐ろしい父親の前に据ゑられた。見れば朝から最う始めて、眼も些しとろんこになり、ふッふッと呼吸を吹いて、時々舌なめずりしながら、其所に坐ッた阿千代を見て一句も吐かず、そのとろんこ眼で睨みつめたばかり。

「平助さん、昨夜御咄した通りの譯で嘸御腹立ちでしようが、私に免じてちいちやんに何にも言はずにねえ。」

阿高の母親が取り倣したが猶無言で居た。さも腹が立つといふ顏色、額の青筋を張り出させて、見る間見る間に眼光も凄く、又茶碗で一二杯引ッかけて又睨みつめた。

「ちび、そ……そばへ來いッ！」

後で聞いたが阿高の母親も此時實にひやりとしたと云ふ事で、その聲の凄み、見脈の恐ろしさ。

身をすくめて阿千代も戰へ出すのを屹と見て、其處が生醉ひで、埒も無く、耳も拔けさうに笑ひ出した。

「あッはゝゝゝ、阿魔め戰へてやがらア。生かして置

かねんだが、御神さんが口を利くから、げえッぷ、己！　い……いのちが有らいッ！　さあ、こじけ！　宇都宮が待ッてる。すッ……すぐだ。」

「平助さん、今すぐとですか？」

「直ともさ。やい、ちび！　失せろ一所に。」

雀が鷹にむんずり遣られたやうなもので、元より覺悟の前ながら今更怖ろしさは加はッた。平助は絞めつゆるめつ。「ちび、何ぐづ〳〵——怖いか？　うはゝ怖いかも知れねえ。十五年育てられた飯の代だ、御神さん、そ……そでしよう、げッぷ。」「さうですとも」と仕方無く言ふ。

「うはゝゝ、ちびめ出世しやがる。藝者に爲ッて見ろ、祝儀もらッてよ、玉が付いてよ、好いか赤いものをびらくら着飾ッてよ、うめえ物が食……食へてよ——さうだ、手前の好きな彼のそれ何だッけな、金團に、それ五色玉子よ。何だ、御神さん何笑ふ？」「二色玉子でしよう、ほゝゝ。」

「うん二色か、三色足りねえか、どッちでも好いやな、くだらねえッ。その好きなものが食へて氣に入ッた男を抱き寢して——ちよッ（首をすぼめて、にやりと笑ッて）いけ酒落てけつかる。「それで親も左り團扇、こんな旨え事あ無えといふのに馬鹿な奴が分かりやがらねんだ。うはゝゝ藝……藝者か、これでも此ちびが。はゝゝあいッ！　わあいわあいだ。御神さん！」「はあ？」「うめえものを貰ッといたね、何でも是だから貰ふなら雌に限るよ。又是から二三羽貰はうか知らん。笑ひなさんな、げッぷ、何だ、鳥ぢやあるめえしと？　鳥だな、金とりといふ鳥だあな、はゝゝ。ちび、やい雛兒！　ぴいぴい泣くんぢやねえぞ。羽ばたきをして鳥仲間の月給鳥でも啣へろ！　よしか借金鳥は御免だぞ。うまからう御神さん酒落が。」「本當ですねえ。」「滿更捨てたもんぢやあるめえ、是でも。ちび、さ一所に目見えだ。」「平助さん私も迚もの事に御一所に。」「御神さんもか、氣の毒だな。好いや。」「いゝえ、それでも。」「さうか、それでも好いか

知れねえ。何の糞、着の身着の儘で結構だ。」

是から三人連れ立ッて直二三町さきの大城屋といふ旅宿に居る宇都宮の阿定の許を尋ねると、先方も共氣で待ッて居た。言ふも管、阿千代の心持ちは毒蛇の穴に入る工合ひ。

阿定の居る座敷へ通されて驚いた、その贅澤さ加減言へなかッた。その席には新に抱へた藝妓の玉が二人に女郎の玉が三人、意外過ぎて目も覺めるばかり、而も一樣に揃ッて此方を見られて身は疊の中へめり込むかに思はれた。

驚いたのは阿定の樣子で、野暮な目から見ても其好みの凄さ何とも言へぬ。髮はぐたぐたとした根のゆるい達磨がへしで、鬢から髱へのわたりが如何にも色ッぽく、素より下品ではあつたが、毛の好いのでいとゞ引ッ立つた顔には薄痘痕が有るが勿論目には立たず、一切白粉氣抜きで口紅だけ割り合ひに濃く差した。頭にはと言ふと是また淡泊極はまッたもので、五十圓はたしかにする班の鬢を横ざしにして、重量四十匁ほどの燒きの金の棒を一寸暴にねぢッて簪にさしたばかりであッたが、實以ッて共圖抜けた氣取り方には阿高の母親までが膽を冷やしたとの事。着物は京ちりの藍辨慶を馬鹿に奥身下がりに仕立てゝ、同じ樣なのを一枚重ね、幾度湯とほしを爲たか知れぬほどに艶氣を無くなしてその辨昆布の革のやうに見えるほど性の好い唐繻子を引ッかけに結んだ所は何う見たふしても天晴檜舞臺の切られ阿富の手本にしたい。

一同が着座するのを見て輕く會釋し、阿千代をば一寸見たばかりで、此方が思ッたほどしけじけともせず、また大層馴れ馴れしかつた。

「一寸好い子だね。親方、この子なんですね。」と些し嗄れたやうな聲がら。

平助は家に居たとは打つて變はッた謹直に、金の目方で頻りと頭が臼を搗いた。

「へい、へい、へい、こんな阿魔で、誠に早どうも。」

「好いやね結構だね。子職を仕入れるには何より鼻筋を見るのが一番だよ。此子は鼻筋が好い。」「へえ、鼻筋だけ好くて？」「さやうさ、面がはりがいくら爲ても鼻筋さへ立ッて居れば目や口は御つくり次第で、御客商賣は押しとほせるもんだよ。」「へえ、左樣ですかね。奇體ですな、さうですかね。ぢや、何でも鼻を一所懸命に見て貰ひ兒するのだな、是からも。」

是で滿座みな噴き出した。

「親方はよッぽど面白い人だね。それから何とか言ッたッけね、ちいちやんか、さあちいちやん、ちよつと躍ッて御見せな、何さ足ぶみだけでも好いから。」

手づから三味線引き寄せて、爪彈きで迫られた。

「潮來、好いだらう――ほんの一寸でいゝから。」

是非無く顫へる足踏みゝめて、氣味わるさうに舞ひはじめる、その間も有るか無いかすぐ止めた。

「澤山、わかッた、あい御苦勞。」

誰も彼も呆氣に取られた。

あの足ぶみなら確だ。三枚着の裾さばきにまでつくやうな不器用も有るまいから好しと――そこで一寸手を御見せな。上等！　此子のは鳴り手だ。」「何ですか鳴り手ッて？」と平助目を圓くした。

「音締めの冴える性質の手で、斯ういふ指もとの緊ッた手でないと、どんなに器用でもよく仕込んでも本當の音〆めが出ないのよ。是ばッかりは仕方が無い。」

それほどの好い手かと阿千代も腹の中ではじめて驚いた。平助は猶驚いて、猶まごまご。

「へえ、どう、どう」とあわてゝ阿千代の手を見て、「何所が何うメまつてるんです」「あはゝ、何を云ふんだね。此所の、こら、肉合ひが斯ういふ手ざはり。」「この肉が、ううむ、斯ういふ手ざはり、成るほど斯ういふ手ざはりか。」「痛いよ御父さん、抓つちや。」「ほい、痛かッたか、あはゝゝッ。又是は何でも貰ひ兒するのは鼻と指とが肝心だ、それに足だ、足も見るんだ、鼻だけなら譯は無いが、足と手は些恐れべだな。」

一座いよいよ笑ひつゞけた。且は嬉しいので餘計な事をべら〳〵饒舌(しやべ)る。

「其所に居る姉さんたちも例の傳で仕入れたんでしようが、右から三番目の方はすこし鼻が――あれでも今に育ちますかな。」

無邪氣な問に阿定も腹は立てなかつた。

「はは、好いぢやないか要らざる心配。それより是から何でも鼻の好いのを見付けて來るさ、いつでも買ふよ」と輕く冷かす。

「高くさへありや好いんですな。」

阿定は此無駄口をも耳にも入れず。

「ところで親方、この子を仕入れても好いが、斯うして周旋人も無く直だから大きに御互ひの都合も好い。一切私の方で是から賄ツて三年季七十圓なら咄しに爲よう。」

「それツきり？」と呆れ氣味。

「相場だね、それでも上等なんだよ。もツと欲しいのかえ。」「その倍より最ちツと。」「それや無鐵砲だ。藝妓の價はみんな斯うさ。それも一人一本で是から手付かず御座敷へ出られるとした所が、それでも猶仕込む所は仕込まなけりや爲らず……」「女郎ですと、もうちツと。」「女郎は御よし、此子に損だ。藝妓出來の身體だから今その金で我慢すればきツと今に好い事が有る。それは私がたしかに受け合ふ。あたしや愚圖愚圖してるのは否だから、綺麗に私も廿五圓買ひ上げて九十五圓にする、それで好ければ好し、否なら止すと、二つ一つさ。

風雨迅雷、實にきツぱりしたもので、平助なるほど考へた。をかしな所を「男」を持ち出して、

「わツちも男だ、さうしましよう。」

一つは阿定の見脈(けんまく)で早く相談が纒まツたので、同伴の阿高の母親も辛く僅に胸を休めたが、扨斯ういよ〳〵決まりが付いて見ると、平助その鬼のやうな氣ながらも幾らか我子に對して氣の毒にも爲る。

無茶苦茶に證文して無茶苦茶に印をぺた〳〵捺し、九

十五圓の金をぼかりと投げ出されて心は風船玉になッて宙を浮いた。

「検めて御らんな。」「何、大丈夫」と大束を極めた。

「えへへ、わるくない奴さ。」

札を掻き寄せて譯も無く目方など引いて見て、情無くも阿千代に言葉ががらりと變ッた。「ちい、見な此御金。」見れば胸はや塞がる金の顔、何やら凄いやうにも見える。

「御前の身體が此札になつたんだ。それでも善く言ふ事を聞いた。行ッたらよく勤めろ。」

阿高の母親はたまりかねて袖を顔に當てる姿を見て、いとど阿千代もたまりかねた、

あの他人でさへあの深切。それだのに親とも言ふものがげらげら笑ひで空世辭を言ふ、

娘が奴隷半分のものに身を落として得た大事の金を扱も此後は何に遣ふかと思ひ遣れば情無さ、あちき無さ。

「おとッさん！ その御金は是から一體何につかふの？」「何に？ いや最も實にこたへたよ。」「だから何に？」「大事につかふ。」「唯大事につかふと云ふ丈ちや――あのね、どうぞ私の御願ひだから其御金は……」

「うん此金を……又泣くか、泣いちや分からねえ、此の金をどうするッて？」「どうするんぢやないが、どうぞ御酒に遣はずに借金の方をいくらか附けて――ちッ、おとッさん、拜み……拜むからッ！ 是ぽッかりが私の願み……」「泣いちや困る、わかッたよ。」

實情に攻められて流石の心も大いに鈍る。

「御前にそんなに泣かれると、折角己だッて安心できす……氣の毒になッて來るからもう、ちい。」

それでも聲がうるんで來た。

「そんなら私も有りが……有りがたいわ――ちッ、きッと！」「泣くなッてば分からねえ。あゝ己が悪かッた。酒は廢す、是から廢める。御前に然樣泣かれて見ると。實は好い面して此金も取れねえが、ちいや共所が共所だからな、よし今日ぎり不動さまへ禁酒として、忘れても

此金は悪く遣ふめえよ、うんにや本當によ。御前に藝者商賣させる氣でもなかつたが、だから酒がわるいんだ。是までに育てゝやつたのは恩だけれど、又これから強面い人中へ出るんだからなあ。ちい。」

世辭か本音か兎に角嬉しい。どうぞ賴むと言ふだけが精一杯、折れて出られると可愛さうにも思はれて、其儘其所に袂を分かッた。なまじ住み馴れた家に未練らしく立ちかへるまいと堅く心を決して移らず、無量の有り難さをば涙に言はせて阿高の母親とも又放ちにくい手を放つた。

酸いも甘いも嚙み分けた人だけあつて、樣子の些し荒々しいのに似ず抱へ主の阿定は心からよく優しくして、而も同じ抱へられた朋輩までが實に深切にしてくれるのでまだ／＼泣いてばかりも居られぬ。

思ひ出せば實に悲しく、殆ど死にたい。是からの前途は氣に入らぬ人の前にも出て、商賣に免じて無理も道理も聞かなければ爲らぬか？

その夜は阿定の厚意で一同も一所に寄席へ行つたが、是ぎり東京の寄席も姑らくは聞かれぬと、先何よりは其事ばかりが胸にはびこつて幾度か洋燈も全で曇つて仕舞ふ。

いよ／＼翌日の朝二番汽車で上野を立つ故いろ／＼の用意のため中途で一同寄席を出、宿へ歸つて何くれと無く支度などして居る内に阿定は派手な八反の書生羽織を出して來て阿千代に着せて見た。

「丁度いゝ、寸法が。あたしのだが、さつき寄席へ行く前に下へさう言つて詰めさせて――是なら翌日汽車で着られる。」

たゞ有り難くて、たゞ米つきばつたのやうに御辭儀して感心して、腹で「藝妓は德なものだな」などと仄に思ふ。やはりその夜もまぢ／＼として空に明かした。十時、十一時、十二時、一時、世界靜まつて殘燈暗く、風の聲もほのかに唸つて、さま／＼の物思ひが此處を究竟と競ひ立つた。あゝ明日の晩の今頃は何處で何う寐るものか。

是ぎり東京の見をさめになる事か。

朝起きて顔を洗ひ、死んだ兩親を心に呼び出してひとり合掌して暇乞ひする手のさきに又涙さへ傳りもする、時間の進むのさへ憎く、着いた上野停車場さへ打ちこはしたく、待つて居る汽車さへ止めて仕舞ひたく、大地震でも搖つて世界を全で引つくりかへしも爲たい！

生まれて始めての中等室。へえ、綺麗なもの。一人殖え二人殖え、自分と一所に行く朋輩(ほうばい)どもの親やら兄弟やらは皆見送りに遣つて來て、窓越しに手を把つて何うの角のと濃やかに語らふのに自分だけは家から一人も送つて來てくれぬ。

肩身が狹くてならぬ所へ、あゝ有り難い！　後ればせに駈け付けて呉れたのは阿高。

「おゝ、ちいちやん」と縋り寄られて、

「姉さんかえ、どうも……」だけで唯拜んだ。

阿高も胸は一杯で思ふ萬分の一も言へず、

「達者でね……早くね……行つたら直と手紙をね……それから身體大事にして……達者でね……早くね……ね、身體大事にして……行つたら手紙をすぐ出してね。是は汽車で御食べつて阿母さんが……例の二色玉子と金團(きんとん)よ……」「汽車が出ますあぶない、後へ。」

と急に驛夫に隔てられて、びつくりして、又口の中で、

「うん、畜生！」「ぢや、ね、ちいちやん……」

「はあ、姉さんもどうぞ達者で……」

これが別かれで汽車は出た。依怙地(えこぢ)に何だか早く駛る！

三

宇都宮へ着いた景況は諄くも說かず、阿定の家は何樣その贅澤に相應して居た。家號は虎屋とて新奇の抱へを加へて藝妓の總數すべて八人、娼妓は同じ所有に係る遊女屋の方へまはして阿定は双方の女將軍と爲つて、そして常は虎屋に居た。

着いた其日土地の人の小宴會が有つて、東京から今來

たばかりの藝妓が有ると聞いて所望され、すぐに阿千代も出ろとの騒ぎ。着物は差しあたり朋輩ので間に合つたが、さあ湯に入る、髪を結ふ、御つくりをする、座付きを復習ふ。ほんの來たばかりとの口實で故意と羽織り姿で失禮ながらと出て却つて大いに悦ばれた。

一座は六人ばかり土地の商人の一群れで、いづれも身形から何からちやんとして居たが、中で一人五十二三のでつぷりした紳士は最も顔の好い方と見えて一同のそれに對する工合も頗る丁寧であつた。

よく噛み分けの有る深切な人で、他の男が座附きをと所望したのを遮つて、草臥れて居やうから夫だけを見合はせにしろとさへ言つてくれた。

名を聞かれて、まだ付けぬ故すこぶる弱つた。「名なんかまだ。」「名無し藝妓か？　變はつて妙だ。本名は？」「へえ？」「否なんですよ。」「笑つてないで言ふさ。どう否なんだ。阿態でもあるまいし、阿虎でもあるまいしと……何てんだ？」「ほゝゝゝ。」「ほゝゝゝつてへのか？　面白い名も有るなあ。」

「あら否なそぢや無いんですわ。だつて可笑しいんだもの。」

やたらに客に本名など明かすもので無いと聞いて居る故隠したが、流石にまだ商賣馴れず、終に隠し切れなくつて、小聲で、「……千代」と辛く答へると、先もやさしくにつこりした。

「千代？　阿千代？　いゝや、好い名だ、何わるいもんか。其儘でも好いくらゐだが、若いから派手にしても。己が付けて遣る。」

紙に書いて出したのを見れば、あゝ好い綺麗な名……

「千代香。」

嬉しいと思ふ目さきに祝儀を出す、御座敷で無いからと辭退すると、押し返へして名刺印刷代だと強ひ付けられ、また同時さぞ疲れても居やうから今夜は一先早く歸れと暇を出れて、渡る世間に鬼は無とつく〴〵心から嬉しかつた。何ぞ圖らん此人こそ土地の豪商青山利吉とい

ふ紳士で、末永く色戀ひの中でなく贔屓にされた、何しろ目の眩るやうに忙がしい。日に四座敷きは平均してこなすので、抱へ主お定も笑坪に入つて、ちいちやんちいちやんと言ひ續け、まるで我娘のやうにして自分と同じ部屋に寢かす。ある夜つく〴〵將來の事を噺して斯う言はれた時には實に〳〵嬉し涙が出た。

「聞けば御前の阿父さんは大變に亂暴ださうだから、こゝで何んな好い御客が付いたにしろ、好い景氣だと聞くと唯ぢや居まい。すれば自然と御前の身の爲にも爲らないから、何うしても家は餘り好いやうに見せないのに限るのさ。私も此商賣して幾人と無く抱へたが、御前のやうに素直な子には出逢つた事も無く眞實可愛さうだと思ふにつけ、どうか當り前の藝者のやうに地獄同樣の眞似も爲せたくない。堅いと名が通れば却つて爲になる御客も出來るし、其時は私だつてよく〳〵御前の末の好いやうに見立てゝも上げやうから忘れても放縱な眞似は爲ない方が好いよ。堅くさへして居りや些とも恥かしい事無く何んな好い所へだつて乘り込めるからね。」

此深切には實に泣いた。

「御深切は實にどうも……忘れませんよ、本當死んでも。此商賣に爲つたら何んなに苦しいかと思つてましたけれども、今ぢや實に家に居るより。」「そりや御前だけが左樣なんだわ。早い噺しが家に居る妓達だつて、そりや並一通りの苦しみぢや無い。私だつて實を言へば此商賣して人の生き血を啜るんだもの、隨分評判ものゝ大鬼さ。氣に食はなけりや何處までも小つぴどく扱き遣ふ性質で隨分むごい方ぢや一と言つて二と下がらない方だけれど、それだつて又相手次第さ。素直にして道樂も爲ず、御祝儀の足駄も穿かず、家のためを考へて吳れられて見ると、妙な氣性でまた何所までも世話を爲るね。自慢ぢや無いが、是が病まひで……御前の可愛さうな身の上を聞くにつけ、その氣立ての可愛らしいのも見るにつけ、どうも人の子とは思れず……」と些し涙ぐんだ。

「御前が堅くさへして務めて吳れりや、私だつて些し

や目鼻も明けてやる、ちやんと恥かしく無いだけの支度をさせて堅氣の所へ遣るからね。此家業して言ふと何だか變だけれど、くれ〴〵も堅氣に爲る氣に御成り……さうすりや私も樂しみだもの。」

是までの情かと今は堪らず、思はず聲を出して泣いた。

「眞實御前が嬉しいと思つてくれりや私も嬉しい。」共に泣く。

「親とも姉とも御思へよ。」「よう姉さん、もう……」「え、何。」「もう廢して……私……私……私どうも……そんな御親切に言はれると嬉し……悲しくつて……泣かずには……」後はもう言ひ切れぬ。

「だからさうなら私も嬉しい。いゝかえ、其氣で御出でよ。」

虎屋の女將軍阿定と言つては人に知られた凄い腕で、抱へは皆泣くといふ噂さへ有る中で、此深切はいとど深く身に答へ、むしろ不思議と思はれる程であつたが、何しろ有り難い意見故決しておろそかには聞き做さず、いよ〳〵能く務めて居た。朋輩は皆羨ましがる。動もすれば意地わるく憎みかけたが、夫と知つては下から出るので、柳の枝に雪折れ無かつた。

が、忘られぬものは故郷で、針の筵のやうに思はれた東京の家の事は間がな隙がな胸に浮かんで、時としては思ひつめて人知れず袖を絞つた、朝早くなど起きて裏田圃に朝霧などの深く立ち籠めた所をうつとりと爲つて見て、あゝ東京はあの方角か知らん抔と考へ出した日には實に堪らず、心が心に甘たれるやうな工合で、いつそ死んでゞもと思ふ事も度々であつた。

阿高さんは何うしたか、嘸や苦勞にして居る事であらう、家では何うしたか、あの金をどうして仕舞つたか、旨く資本にでも爲てくれたか、それとも飲んで仕舞つたか、と一つを思ひ出せば後から珠數つなぎになつて夫から夫と際限無い。生憎なもので東京への上り汽車の笛などが折りわるく聞こえる所で、實、その汽車も怨めしく、どんな人が乘つて居るのかと翼の無い身がいとど苦し

い。

「ちいちやん」と家から急に呼ばれてびつくりして慌てゝ歸れば東京から手紙がと阿定が出した。何にしろ懐かしい。丁度二通揃つて、一通は家からと今一通は阿高から……取る手遲しと封を切つて、先家からのを讀み下せば、扨こそびし〳〵と胸にとほる無情の文言。

今まで世話になつた人に禮などし、御馳走などし、それに些しは借金方へも回したので金は皆手ばたきに爲り、どうする事も出來ぬ故差しあたり十圓ばかり借り足して送れとの次第、つまり御馳走といふ一言に飲んで仕舞つたとの意味は籠もつた。

「案のとほり是だもの……困るねえ」と阿定が舌うちをした、何と阿千代が切り出すかと其言葉を待つ體で。何と扨切り出せたもの！　情無さに我知らずほろりと爲ると、さすがに阿定も氣の毒で、

「くよ〳〵御爲でないよ、そんなにいづれ何うにか爲るだらう。始めての事だから素氣無くも爲れまい。全つきり遣るのもまづいから刻み金にして七圓ばかり私の方から、出して置かうが、考へて見るとその七圓もやつぱり酒だね。樽で遣つた方が手數が無いくらゐだ。」

出して貰ふだけ猶つらい。が、出して呉れる情を思へば、つらいだけに忝く、阿定が神さまのやうに思はれる。

「そのもう一つの手紙は」と心付けられて封を切つて面前で一所に讀めば、是は又前のとは打つて變はつて優しい文言、しかも深切を充分含ませて、又酒呑みの樣子さへ細々と知らせてくれた。

察しのとほり九十五圓の金は大抵酒に化けさせ、飲みつゞけて果ては人と大喧嘩し、その仲直りに又飲んで、家へ歸つてから八つあたりに、一人で狂つて家財調度をあらかた毀したとの凄い知らせ。

「大變な騷ぎだねえ。不動さまの罰なんだ。よく夫でも大怪我しなかつた。仕樣が無いぢや無いかねえ。」

「是ですからほんとに困るんでムいますよ。ま、どんな騷ぎたつたかと思ふと……私やもう、是から御金を遣

るのも。と云つて遣らなければ、怒る、遣らない譯には行かず、遣れば又はじめる、どうしたら好いかと思ふと本當に……」「いゝやね泣かないだつて。それでも離れてるだけ仕合はせさ。傍であつて御覽、三日に揚げずだ。」「あたしや今度よく書いて遣りますよ。どうぞ質實に爲つてくれるやうにと。」「成るべく言つて遣るが好いけれども……まづ十が九まで……死なゝきや駄目だと、」と獨言のやうに言ふ。

「どうぞ早く眞面目になつて安心させてくれると宜いのですけれども……」「あの癖ばかりは難物なものさ。手紙なら今すぐ御書きな、どうせ遣るものなら始めだから早い方が好い。大骨でこさへた金だと勿體付けて遣るさ。」「有りがたう存じます。それから何と思ひますか、此地で御座敷着で寫した私の寫眞を一枚やらうかと思ふんですが。」「おとつさんにかえ？　好からうよ、こんな姿になつて毎日苦しんで居つても。」「はあ。」「遣るさ。」すぐ手紙に取り掛かつた。一字一句が實に血を絞つて、同らぬ筆ながら細々と意見の文句、書いては消し、消しては書き、書きなほしたり、筆を取り替へたり、同じ事が二度三度になつたり、書いて居る内に文言がいつか前に戻つて仕舞つたり、一尋もある程書きつらねて卷き紙をも荒方盡した。

金は爲替にして寫眞と共に封じ込め、阿高への手紙と共に出して、先は安心ならぬやうな安心。

彈かれたやうに飛び起つて、流し元で口を嗽ぎ、持佛と賴む不動尊の前に手を合はせた。祈りたてまつる胸中の半分でも、せめて親が又不動尊の四半分でも察してやつて呉れゝば好いが。

四

女三人すでに姦しいとさへ言ふに、況して八人も藝妓が揃つて居る上に、乳母といふ者までが交つて居る虎屋の家の賑やかなのは可笑しいほどで、御茶を碾いて火鉢の前に寄り集つてしやべり出した日には、座敷き中が噪

漱濡ので曇つて仕舞ふ。

昨夜酒が過て醉が戻り、現で俯伏になつて居る小鈴といふのを小今といふのが調戯半分、「さあよ、すうちやんてばよ、起きないかよ。なぼ好い人が來ないからつて、そんなに鬱ぐもんぢやないわ。どうしたんだらう、よく寢てるよ。よう、よつたらよう。うんとこしよう。」「えんさかほい、ほつへんほい」と花助といふのが拍手に乘つた。

「冗談ぢやない、ほんとによう。厄介な俵だねえ、中々坂は上がらないや。」

邪見にこづかれてやう〳〵起きた、その顔付きが妙だと言つて一同が譯も無く笑ひ出す。

「あゝ面白い夢を見た。」「氣樂だよ、うたゝねで？」「だつて姉さん面白いんだわ。」

小指を出して、

「居るかえ？」「御神、今一寸出てつた。」「御神が何處かへ行つてね、久しぶりで馬を食べて見たいと言ふと、共賴まれた人が大鈍素(おほどす)で、馬つてへのは役者だと知らないでね、生憎生なのはムいませんからつて、何と思つたか竹槍のさきへ鑵詰を付けて出したのよ。」「それから。」「それつきり。」「何だ、人つ！つまらない。」「そこで私がぢぐつたわ。」「何つッて？」「やつぱり役に緣が有るから、これを合はせて竹槍鑵詰め」「ぷつ、否(いや)だよ此人は。ほんとに寐てると思や餘計な事考へてだから昨夜なんぞも村井さんに早く歸られて、今日は是非四本の玉だなんかつて威張(えば)つて今のが大あてちがひさ。」「嘘よ、ありや千代ちやんが惡いんだ。否な奴だから御禁厭が利くか利かないか遣つて見やうつて、紙捻(こより)の犬をこさへて尻尾から燒いたんだわ。すると利いたの。」「へえ、をかしいね。」「いゝえ姉さん本當よ、私も一度遣つた事が有るの。それよりか一度をかしかつたつけ、氣取り屋が來た時さ、洗ひざらひ何でもムれで早く歸る御まじなひを爲たんだがね。まづ御座敷へ入る時に今晩はと言ひながら口の内で左樣ならを三遍稱へてそれから左の足からさきへ入つて

ね、それから(今宵ごんす)を謡つて、それから左の袂の襦袢のさきを小間結びにし、歸つたら解くと言つたの。」「歸つたかえ?」「ところがいけないの。それから紙入れの御まじなひね、あれを遣つたの。すると吃驚したわ、氣取り屋の奴その御まじなひを知つてゝね。」「おうやおや。」「早く歸る御まじなひかと素破拔いたわ。」「どうしたえ、それから?」「おや左樣いふもんですか、ぢや貴下に教はらう、ちつとも私や知らないのと白ばつくれたら、言ひ草が好いぢやないか、それや己だつて緣起棚の飯を食つた身分だつて。それから依怙地ん爲つて歸らないから御座敷へ貰ひを掛けて遣つてやう/\逃げ出した。だづ/\すると御祝儀を貰ひそくなふから、紙入れを引つたくつて私あした役者を買ふから小遣ひを下さいよツつて、構はないから五圓札一枚引つぱり出して懲りらかして遣つたが、それから又來たから御坊ちやんぢや無いか。」

嬉しいよ/\進んだ所、たちまち門口に「御免なさい」とおとなふ聲、村雀ぴたりと靜まつた。

「えゝ此家に千代香さんといふ方は……」

半ば聞いたばかりで千代香は飛び立つた。聞き馴れて聲に覺え有る。その人はよく東京の我家へ出入する子分同樣の五助といふ男で、其所の床山が本商賣……飛び出した出むかつて、おや五助さん。」「おゝ千代ちやん。」氣の好い人間で、さも嬉しくて堪らぬといふ顏付き。男のくせに何だかすこし涙ぐんで、おど/\して格子を明けた。

別の一間に案内して、一別以來の挨拶を述べたが、今まで燻りかへつて居たのとは打つて變はつて綺麗になつた體、堅人の目には御光が射すかのやうに思はれて、今までぞんざいに云ひ馴れて居た言葉を俄かに丁寧にする工合ひの變妙さ加減。

が、故郷の樣子が聞かれると思へば骨が溶けるほど嬉しい。

「どうしたえ家ぢやあ?」「その事、大變。」「大變つ

て？」思はず聲が太くなる。

「何、どうも妙でして……あゝも妙な事は無い、妙だ實に。千代ちやんほんとに妙ですぜ。」「一人で妙だ／＼とて……だから何うしたの？」「どうつて斯うつて……えい、まだ話さなかつたけ。廢めましたよ、おとつさんが、酒を、ぷつゝり……」「あら酷いよ、唾をひつかけて、そんなに力を入れないでも。」「ですがね、實に呆(あき)れちやつた。」「呆れる事があるかね。で、どうしてなの？」「だからよく御聞きなさいよ。」「聞いてるよ。」「御茶なんぞ注がないでも。」「うつとしいぢやないか。」「それでね……」「あれさ人の事言つて自分が煙草なんぞ吸ひながら、早く御言ひな。」「今。熱……それ御覽なさい、火皿を口におつゝけた。」「いやだよ此人は？　で、どうなの？」「どうつて斯うつて……」と又力を入れる。

「もうそれは分かつたよ。」と是も力を入れる。

「こなひだ御前さんが手紙で寫眞と金とを越しなすつたらう。あの時さ、例のとほり朝からのがぶ飲みで、へべの大へべ、神武以來無いへべさ。」「御よしよ、ちやりなんぞ」と少こし安心したゞけ笑ふ顏にもなつた。

「へべの揚げ句はどたんばたんで、どたんばたんの揚げ句はがら／＼ぴしやり、どしん、ちやりん。」

「何だいそれやあ。」「ちやりんは瀨戸物のこはれる音。」「いやだよ本當に。」「まあさ。是で無いと噺しが生きない。つまり鬪武六(つぶろく)と言ひたいが、鬪武百ぐらゐに爲つて、御前さんこんな目をして天地を睨み、柔術の手で家の道具を毀し出した。驚いたね、私も其所に居て。止めたが中々止まらない。打つちやつて毀させて置いた。毀させて打つちやつて置いた。毀したんでみんな毀れた。」「當り前だあね。」「しまひに毀すものが無くなつたね。疊へ武者ぶりついたつて手がかりが無いから丸で放し龜見たよに四つ這ひに爲つてびら／＼して居ましたよ。其所へ丁度巡査が來た。やれ嬉しやと私も威勢が付いて、その巡査と一所に放し龜を押さへたが、どうしても六尺も有る大きな龜の子で……ほんとだ、酒好きだから正覺坊(しやうがくばう)だ

……縛つちまふに骨が折れたの折れなかつたのつて……だけれどとう／＼縛つちやつた。すると御前さん正覺坊が、くやしい殺せやいつて吼えてね、其聲があの四角のさきまで聞こえたつて。騒ぎでしたぜ本當に。表は黑山、家の中は道具の山、其所へ正覺坊が、器用な正覺坊で跳ねくりかへる。可哀さうでしたよ巡査が、踏んづぶされた、帽子を情無さゝうに拾ひ上げてひねくつて居た。處へ千代ちやんからの手紙が屆いたんでさ。氣ちがひにやぶかれちやならないと思つたから手紙は渡さず是々だと言うたね、さ、其所が妙なんで。誰が聞いたつて妙でさ。御前さんだつて妙だと思ひましよう。」「また始まつた。」「だまつてらつしやい。」「はい／＼！」「あれだ。好いや煙草(たばこ)でも呑んで遣らあ。」「いけない。早くさ。それから。」「妙でさ。」「くすつ！」「あれ笑ふ。笑いつこ無し！するとね、正覺坊が眞面目になりましたよ。どれ見せろつてへから、やぶくと否だつてへと、そんな事は爲ねえと云ふんで、手紙を出すとね、じつと見つめて居たつけ、封を切つて寫眞を出してつく／＼と、御前さん、見たの見ないの目ばたきもしずに見つめて居たつけが……」

急に五助は泣き出した。

「ぼろおり／＼と泣き出した、だから阿父さんがさ。寫眞の上へ熱いやつをぼたり／＼落として、泣きながら、あゝ五助、己がみんな惡かつたよと言つた時や巡査も泣いたね。あゝ可哀さうに千代の奴、こんな綺麗に爲つて居るだけ、人中へ出て、親のために何んな苦しみを爲てるかと思ふと……かう言つたぎり又おい／＼と泣くだらうぢやねえかよう、千代ちやん。誰だつて堪るもんぢや無いやな。それから手紙を讀んで聞かせたので又大變だ。何だつて「千代や、勘忍してくれよう」と言つて泣くんだ。今日といふ今日目が覺めたと言つて泣くんだ。それから斯うさへ言つた、是にや己も聲出して泣いたね。尤もだ千代ちやんの泣くのも。己だつて此通りだもの。五十になる獸物(けだもの)老爺(おやぢ)が十五や其邊(そこら)の孝行娘に異見されて目が覺めて……もう是からは本當の禁酒だ。埋め合はせに

や己の命を不動樣に減らして貰つて、夫だけを千代に遣りたいつてよう。可哀さうぢやねえか、巡査も能く／＼見拔いたもんで、繩を解かせたが、どうも神妙なもんで巡査にもくれ／＼詫びて、千代ちやんの寫眞を拜んでるんだ。其晩は己も氣になるから泊つたが、翌る日からは生まれ變はつたやうに爲つて、五助や御前が芝居の用で宇都宮へ行くと行つたが、よく己が改心したつてへ事を千代に知らせて呉れろと云ふんで……それからおつと是だ。」

風呂敷き包みから折りを出し、「宇都宮にも有るだらうが、志しだからつて、おとつさんが是を寄越した。」

開けて見れば金團に二色玉子。

五

何よりも嬉しい親の改心、なまじ難澁めかして書いて遣つたのが却つて空恐ろしい心持ちもしたくらゐ、唯其上は禁酒が本當に長保ちして穩かな一家が成り立つて呉れるばかりが望みと爲つた。五助にも厚く歡待したのでほく／＼して悅び、どうせ此地に二月ぐらゐは居る故また上がつては色々御厄介になりますからと程好く切り上げ、藝者一同にも宜しく頼んで勇み立つて歸つて行つた。

阿定も歸つて來たので五助の事をくはしく話すと是も實にびつくりして「まあそれは」を言ひ連け、それと云ふのも全く御前の一心が不動さまへ通つたのだと一所になつて悅んだ。

噂の傳はるのは早いもので、いつか此始末が例の贔屓にしてくれる紳士青山利吉の耳に入つて、利吉よりは其細君の胸に答へ、どうぞ其藝者に逢つて見たいとの事で、夫にも斷つて、突然と千代香に口を掛けた。

妙な客よとは思つたが、直支度して呼ばれた茶屋へ行つて見ると細君たゞ一人で、輕く會釋して「さあこちらへ」と頗る丁寧であつた。年頃は三十一二、すこし瘦形ではあつたがきりゝとした顏立ちで、よく磨き拔いたらしい肌合ひ。

わるくびか〳〵した身装で無くて、そして取り合はせは實に好く、織り小紋の小袖の二枚着に唐繻子の丸帶、年齢にでも因んだか金の左り馬のばちんを、斜に掛けた。丸髷の恰好もわるく無く、金象眼の細い根掛けに黑の手臈、松葉脚四分の扁玉の簪、櫛と一對光齋の蒔繪の中ざしを挿し、一本絲の市樂編みの御殿形の烟草入れに延べの金銀張り分けの烟管を添へ、左りの無名指に十八ばかりの金性と見える紅玉石入りの指環、右の中指に純金四匁程の鎚目平打ちの指環を嵌めたが、難は此紅玉石の指環で、玉が大き過ぎるため中々目立つて年輩に合はせて些し派手に思はれた。

が、奥床しかつた。着物の着工合ひ、帶のこなし鹽梅、襟元の揃へ方、どうしても素人とは思はれず、何れ夫者の果てだらうとは流石に一目で睨みが付いた。

物を云ふ時に口をすこし曲げる癖が有る、その癖が又無上の愛嬌で、言ふに言はれぬ情が有つた。

まづは一通りの挨拶すると、先方も工合ひ好く答禮して「御話は良人からも度々聞きましたが、まだ御目に掛かつた事も無く、それに色々お噂を聞いて是非急に御目にかゝりたく爲つてだしぬけに御呼び申したんですが、あの今日は御座敷のつもりで無く、ほんの友だちと一所に御膳でも食べるのだといふつもりで居て下さいよ。」

女中が來た。

「御あつらへを持つて參りましようか。」「はあどうぞ。それから布團をも一つ。」「いえ何うぞ奥さん。」「よう厶んすよ。遠慮しずに。」「いえ決してもう御かまひ無く——却つて恐れ入りますよ。」「でも、さ、今日は本當の御友だちづきあひで。御敷きなさいよどうぞね。」

女中が彼是持ち運ぶ杯盤、見れば何れも二人前。細君大分酒も行けて、杯を持つ手附きからして素人で無い。

「東京に御出でゝ急に田舍へ來て、嘸妙でしようね。私が此地へ來たのは十年ばかり前でしたけれど、好い年をして居て夫で何だか淋しくつて堪りませんでしたよ。……

貴女なんぞ、況してまだ生若いのに嘸否でしようね。」「でも皆さまが御贔屓にして下さいますので、此頃は大きに馴れましたよ。」「それでも大變でさあね。商賣と思へばこそ我慢もする。唯で、ねえ、誰が。私だつて覺えが有るんですもの。御察し申しますよ。」

烟草を一呼吸に一吸ひ吸つて、吹き出した吹き殼を雁首で灰の中へ埋めながら。「實は今日あたしの身の上話しをして、それから一つ御相談したいと思ふので――何別に氣の揉める事では無いのですよ。是非あなたを落籍せようと思ひますので。」

胸がをどるほど吃驚して、我知らず細君の顏をうかゞと見つめた。

「だしぬけでは唯びつくり計り爲さいましやうが、是には深い譯が有りますのですよ……。

始めて逢つた人に身の上ばなしを爲るのも可笑な譯でけすけれど、是非是から長く親なり子なりに爲つたつもりで御つきあひしたいのですから夫で。隱したつて迚も。あたしも貴女と同じ商賣したんですよ。」

聞く方で些し氣の毒らしかつたが、默つても居られぬ故、「おやまあそれは、どちらで？東京――南河岸。」「おや鳥森？」「はあ。」「それから此方へ？。」「はあ。今の旦那に落籍されて來たんですよ。其御膳を食べて居ましたから憂いつらい味だけは其中にも能く知つてゝ、不圖可哀さうな貴女の事を聞いて餘所事ならず思はれ、旦那にもさう申しますと、宜からうから一つ先の腹を聞いて御覽との事で、それから斯うして何しましたの。本當の阿父さんはたしか回船問屋の御主人で澁江佐平さんと仰やいましたらう。」

實に又びつくりした。「どうしてそれを」といひ掛けるのを押しつぶして、「あなたの今の阿父さんは是々だと聞いてそれでわかりましたんですよ。何にも御知りでは有りますまいが、私だちは其の貴女の實の阿父さんには飛んだ御恩に成りましたよ。」「ま、どうしたのでムいます？」「どうの斯うのつて、その御咄しをする前の咄しが大

變なので、何だか痴囈見たようでをかしいんですが、笑はないで頂戴よ。今の旦那は根から此宇都宮の人でして、商用でよく東京へ來て御馴染みに爲つたのですが、其頃私は小露と云つてやう／＼十八で――小粒でしたので――半玉から一本に爲つた計り。處が私の抱へ主といふのが夫は／＼大變もので、いたはりも何も無く、骨限り稼ぐと云ふので、私に又別に二人の旦那を付けましたの。さう幾人も否には極つてるけれど、取らなきや怒られるので仕方無く、好いやうに綾なして居內に御腹が大きくなつたと御思ひなさい。抱へ主の奴いゝ金蔓だと腹で想ひ乍ら表向は惡々しく、孕むなんて意氣地の無いとこなしつけますの。」「へ、え恐ろしい方ですねえ。」「三人の旦那には銘々其人の胤だと言へと言ふんでしやう。表向きからは御神が旦那だちに掛け合つて御金を取つたのですが、夫を私にはいくら取つたとも言はず、丁度旦那は三人とも揃つて餘所へ出て仕舞つたので何の事も私には分かりませんわ。すると斯うなの、御神が一日私に斯う云ふんです。どの旦那も不斷は旦那顏して居て、斯うなると咄しの分かる奴は一人も無い。手當ても碌に呉れやらず、是から御座敷を休むとなれば家中乾ぼしに爲るばかり。是は迚も產ませる事は出來ないつて。ですから墮胎して仕舞へと云ふの。私や其時、どうしようと思ひましたわ。」「嘸まあね。ひどい事を云ふ人でムいますのねえ」「泣てあたしや否だと言つても聞かないで、ある所の子おろし屋の御婆さんの家へ行く事に爲り、一人でも遣れないと云ふので私が不斷から目を掛けて居る箱屋の粂といふのを連れて出掛けましたの。」「御幾月なのでした。」「七月目でしたの。どうも情無くつて情無くつていつそ迚もの事死んで仕舞はうか知らんとさへ思ひましたわ。子おろし屋の家は何處だか知りますまい。何でも箱屋の行くとほりに爲つて行きましたら一寸した格子戸作りの家で、それから中へ入つて見てびつくらしました、何だつて其家に居た御婆さんと云ふのは箱屋の阿母なのですよ。」「その方がおろす人で？」「ところが左樣で無い

から不思議なの。全く其箱屋の深切で、抱へ主の手前は墮胎と云ふ事にして出た、魂膽で自分の阿母にも相談の上、安心の成る所を見付け、其所へ御醫者を呼んでそつと産ませやうと云ふのでした。」「まあ何うも、深切な人ですねえ。又うまく氣が付いたので――嘸御うれしうムいましたらうねえ。」「そりや本當に嬉しうムいましたよ。」さも嬉しさうに力を入れた。

「何だか夢見たやうでねえ。」「ほんとですとも。」「嬉し泣きに泣きましたよ。」「それは最う」と千代香も目を拭つた。

女中が銚子の代はり目を持つて來たので噺しも一寸途切れたが、すぐに行つて仕舞ふのを見送つて、細君熱いのをきゆうと一呼吸に呑み盡くし、一杯と千代香にさした。

「どうも憚かりさま」と挨拶して酌をして貰つて、自分の膳に在つた杯を返杯と差し出せば、刺身に下りて居た箸をあはてゝ急に引いて受けて、「よく呑むでしやう」と輕く笑ふ。

「いゝえまだあなた。」「紅くなつたでしやう。」「ちつとも。」「飲むので、素性が知れると良人によく云はれますの。仕方が無いぢや有りませんか、是は舊の商賣が飲むので私が飲むのぢやムいませんと云ふと、口からして土臺わるいんだなぞと言ふんですもの。」醉ひが廻つて飛んだ痴嚢を聞かせる。

こちらは話しのつゞきが兎角氣になるので痴嚢など聞きたくも無い。打ち付けにも後はと聞かれぬので、「嘸御うれしうムいましたらうねえ」と無駄を言つて呼びを掛けた。

「ほんとでしたよ。それからね。」

有りがたい、呼びが利いた。

「御醫者と産婆と來て、よく診察して御腹はあんまり目に立たないけれど、充分七月になつてるから、産ませて育たない事は無いと、それから貴君藥を飲ませて介抱しながら、とう〳〵身二つにしましてねえ、豪氣なもん

だと其時は實にあたしも駭き入りましたよ。」

「豪義ですともねえ。その赤さんは？」「女の子で達者に育つぢやムいませんか？」「月足らずでも、へえ、よく何うも。」「月足らずだけに小粒でしたが、よく育ちますの。箱屋どころか、身に取つては神佛のやうに有り難く、どういふ譯でそれ丈の深切を盡くして呉れるのか、又どうして禮をしたものかと言ふと、別に込み入つた譯でも無く、唯それまでよく目を掛けてくれた恩がへしだけの事で別に禮などは望ましく無いとの事で、夫から其箱屋の言ふには自分が以前奉公した是々いふ所の回船問屋が微祿し、其子が是々いふ所へ呉れられ、酷い目に逢つて居る、それが恩がへしに救ひ出さうと思ふが、どうぞ御積でもと言ふ御心なら何分折を見て其事だけ遣つて見てくれろとの頼みでした。いよ／＼其綺麗な心根に私も感心して、きつと折りを見て其やうに爲やうといふ事に約束は爲たものゝ、どうもまだ抱への身分でつひ夫なりに爲つて、勿體爲いが紛れるとも爲しに紛れて仕舞つて居ました。」

深切の競べつこといふ物がたりに、是も親の恩のあまりと思へば、いとゞ親の上も忍ばれて、泣くまいとは思つても唯悲しい。

もう見得も何も無い。たゞ泣きながら、「その箱屋さんは何う爲さいました？」「それがさ、可愛さうに程無く阿母に死に別かれ、それを歎いたせゐか、自分も病氣になつて亡くなりましたよ。」

「まあ一度は御目に掛からうと思ひましたのに、それは――夫はそれから赤さんは？」「そつと宇都宮へ便りをして譯を咄し、今の良人の人が引き取りまして育て上げました――今家に居ります總領がそれなので、それも是も箱屋が命の親なので、其思ひして見れば斯うやつて貴女に御目に掛かるやうに爲つて落籍ことの御相談ぐらゐ爲たつて何でもムいませんともさ。今まで等閑にして居たやうな所はくれ／＼も惡く思はないで頂戴よ。」「あら何うして、勿體無い事を。私は何だか夢のやうでムいま

すよ。どうも亡くなつた親の緣引きから斯んな御咄しにならうとは咄しのやうでムいます。」「御尤もですとも。私たちはじめ此土地に尋ねる貴女が居やうとは夢にも知らず、段々噂で聞き出して實にびつくらしましたわ。それに良人でも大變に貴女を褒め、虎屋の御神さへ何うも氣立ての好い子だと言ひつゞけて居るくらゐで――それだから別に今だつてつらくもありますまいけれど、又商賣となつて見ればねえ――だけれども夫だけに又咄しが付き好いかと思ふのですよ。」「何と御禮を申して宜しいやら、死んでも御恩は忘れません。家でも有り難い事には御神さんが大變目を掛けて下さいまして何でも堅氣になる了簡で御出でと言つてくれましたほどでムいますから、それには又此方へ參つて直ぐ御贔屓になりまして……」「ですから何でも神さまの御引き合はせ、今から考へると、なまなか東京に御出でなら斯う名乘り合ふ事も出なかつたのですわねえ。御樣子からして品が好く、何處へ出したつて恥かしくも無く、それには此商賣だつて長く爲すつたのでも無く、いづれ明日にも良人からして改まつて虎屋の方へ御談を掛けますよ」「有がたうムいます。私からは何とも申さずに居りましやうか？」「さやうさねえ」とすこし小首を傾けて考へたが、急に又安心の樣子で「言つた方が好いかも知れませんよ。よく分かつた御神さんの事ですもの、なまじ突然で却つて心もちを惡るくさせるといけますまい。唯落籍も好いけれど、氣になるのは今の阿父さんですね。」

此一言は胸に釘で、まこと夫が苦勞でならぬ。

「私の方へ貰ひ切りにでも爲ないぢやあ」と首をひねりながら獨言に言つて、「それより外、ねえ」と千代香を差しのぞいた。

「ほんとに左樣いたせば私は……」後に嬉し淚で意中を言はせた。

しんみりとした此咄しだけで、たしかに二時間は費して、日影もやうやく傾き掛けたのを見て、細君は一旦歸る事となつたが、玉を付けない代はりにとて辭退するの

を無理やりに三圓包んで祝儀に呉れた。後影をば拜むばかり、此日の嬉しさ何と言つたら好いものか。

昨日まで怨めしく聞いた汽車の笛が現金なもので最う懐かしい、褄を取るのも最も僕だと思ふと、腹の中で肩身が無上に廣くなる。くだらぬ事にもをかしくて、我知らず、「藝者商賣さらりと廢めて」などゝ鼻歌に持つて來る。途中で逢ふ人が藝者だなどゝ囁けば、見ろ直に素人だぞと口の內で一人で威張る。足も輕し身も輕し、勢よく虎屋へ歸つて、すぐに御神さんはと聞くと一寸憚りへ行つたと云ふ。出て來るのを待つ間も長し、早く話して何と言ふか聞いても見たい、氣のせゐか、いつもよりは長いやうな。もどかしがつて又乳母に「伯母さん、御神さんはほんとに憚りなの？」「をかしく聞くね。嘘を誰が。」「長いね。ぢれつたい。今はゞかりへ行かなくつても好いに。」「否だよ此人は無理な事を。」「それも左様だが長いぢやないか。小用？　それとも大用？」「人！　誰がことわつて行くものかね。」

さうか云ふ內用場の戸の音。聞くより乳母は「出た、御神さんが。御神さん、大層長いつてちいちやん大待ちかね。」「否な子だねえ、明いたから早く御はいりな。」「ほゝゝ、入るんぢや無いんですよ。」「入るんぢやないの？」と乳母はけゞんな顏つき。後は一同吹き出した。

御神さん一寸と奧間へ一所に行つて、胸一杯の例の咄しをはづみ掛かつて述べ立てる、其顏付きのさも嬉しさうなのには聞く阿定も身を入り込ませた。

が、扨何と云ふか知らん。今までのは世辭で、俄に足許でも見込みは爲ぬか。それとも俠氣が本當で、見事一肌脫いでくれるか。返辭聞くまでが苦勞になる。

阿定は默つてすこし考へ入つたが、きつと思案した樣子で、まづ顏付きが大變好い。

「本にある樣な咄しさねえ。全く神佛の引き合はせとしか思はれない。青山さんがそれだけに事を分けて人一人を助けやうと云ふに、何ぼ私が女だつて虎屋といふ看板に對しても因劫な事は云はれないから、えゝと斯うし

やう、綺麗に證文卷いちまはうぢやないか。」「えつ？」と餘りの事に仰天した。

「どういふ緣か御前が私の氣に入つて、いつかも御前にあゝさへ言つたくらゐ、是から御前が注文だから堅氣になるといふ御愛でたい運が向いて來た矢さきへびりびり穢ならしい事を言ひたくないやね。是があたり前の御客樣からの身うけ沙汰なら四百や五百位に吹つ掛けも爲るが、咄しが咄しだし、それには是から長らく御前とも附き合ひたいから——九十五圓が百圓にしろ、嫁入りの支度だと思へば何でも無いよ。ちつと支度には少ないが、其所は御前にも負けて貰はうさ。さうすりや私も寢覺めが好い。金を取つて證文卷くなら誰でも卷く。取つて支度だと言つて其金出すより取らない方がいくら淸いか。さうすりや靑山さんだつて其金より澤山掛けて御前の身を引き立てるさ。」

何とも角とも言へぬ俠氣、たゞ伏し拜む。胸は千萬無量の感懷、今日といふ今日生まれて始めての大愉快。

其處へ御座敷が掛かつたので、阿定への義理ゆゑ一寸行つて來やうと言へば、さしとめて、「もう好いさ、行かないでも。」「でもまだ。あんまり……」「藝者が爲たいかえ」と笑ひながら冷かした。

「あら左樣ぢや無いんですけれど……」「なら好いやね。是からもう二度と二度褄なんか取る氣になると此阿母さんが聞きやしない。」と實に泣くほど嬉しい冗談。

「おほゝも無いもんだ、否だよ泣きながら笑つて。御覽な目の緣の白粉が剝げるわね。」「つひすこし。」「はゝゝ、つひすこしも無いものだ。何がつひすこしだ。ねんねえにも困るねえ。何處へ嫁に行くか、馳け出し好きぢや誤まるよ。亭主を尻に敷き過ぎちやいけないよ。あんまり頭を下げ過ぎるも惡いが、敷き過ぎてぴたんこになんぞ爲ると駄目だよ。御前の恰腹なら子供は直だが、何でもはじめは女が好いね。二番目が男で三番目が女……」「だつて御神さんそればかりは。」「けれど物の道理がさ。たのしみだね、早く赤ん坊を見たいつて事さ。連れて來

るさ、手遊買つとく。」「だつてまだ御神さん。」「だから出來たらさ。」「ほゝゝゝ。」「ほゝゝなんて、ぢき出來て大騷ぎするくせに、きつと胸孕みの性質だよ。」嬉しさのあまりに口數多く、その夜は早く寢かして呉れたが、今度は又嬉しくて寢られない。兎角酒吞みの親の事が氣にもなる。いよ〳〵青山からの相談は次ぎの日はじまつた、無論すでに纏まつた。阿定の氣性には青山賓に舌を捲いて天下第一の女將と崇めた。

青山の細君は其日からでも直自分の方へ來いと云ふ、阿定は二三日眺めたいからすこし待つて呉れろと云ふ、飛んでも無ひ引つ張り凧に爲つたが、先阿定の方に二三日居る事になると、すぐに呉服屋を呼んで着物を見立てさせる。

是が好いと派手過ぎたのに手を出すと頭からこなしつけて、「御前もう堅氣ぢや無いか。そんな派手過ぎる藝妓の着物見たやうなのが何に爲る？　被布を着せて見やうと思ふへ私は思つてる。」

呉服屋も笑ひ出した。

「是からは姉さんぢやムいませんな。」「御とぼけで無いよ番頭さん、私の娘は是から御孃さん。」

「へえ結構で。」「氣の無い御世辭だね。もつと旨くしつかり御言ひな。御孃さんと言つて御覽よ。」

「否だわ御神さん。」「この子もまた。はゝ、阿母さんとか、伯母さんとか御言ひな。番頭さん、本當だよ、家に居たつて最う堅氣だから、御覽此通り前掛けも幅の廣いのを爲てやつた。頭が前の儘で、前掛けが素人だからまづ御孃さまでも意氣な方さね。番頭さん。」「へえ。」

「御祝ひのつもりで廝く御爲。今日は素人に賣る直段だよ。」「それは最う。」「旨く言つてる正札を付け直してなんぞ來やしまい。付け直して來ても好いさ。番頭さんの男つぷりを買つて上げやうさ。」「どうも恐れ入ります。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

眞實に世話してくれたが、その指揮によりまだ東京へは御愛でたい一件を知らせて遣らず、三四日空に過ぎた

所へ突然東京から手紙が來た。

意外！　父親の平助は急に卒中症を發して亡くなつたとの知らせ。又夢を見たやうな鹽梅。

「また不動さまが利いたよ」と阿定が小をどりして手を拍つた。

五助も通知を得て馳け付けて來て、泣き男が又泣いた嬉しくてならぬとて。

許しを得て五助を連れ、阿千代は一寸東京へ行く事になり、來た時とは打つて變はつて嬉しい汽車に運ばれて東京の馴れた里。葬式萬端の始末を付けた。

例の阿高の家へ行つて又其所で嬉し涙に暮れた。例のとほり金團に二色玉子の御馳走。考へて見れば末長く附き合はうといふ阿母さんが此所にも一人有つたつけ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

青山と阿定との世話で其後一年ほど後に阿千代は然るべき紳士の所へ嫁いたが、早く何故子をこしらへぬかと三人の阿母さんから攻められて一々返辭に弱つて居た、その内一人……注文どほり……女の子が出來たが是また引つ張り凧になつた。

顏知らぬ恩人箱屋の兼の墓にも參つたが、亡父の顏が見えるやうで懷舊の涙に咽せた。いづれ男の子でも出來たら記念に「兼」とでも付けやうかとの考へといふ。

（をはり）

峰の殘月

一

主人明貞茶の間の長火鉢の前にベッたり坐り宣德の火箸を突き立てた上へ手を載せた儘、物おもひに沈んだ顏つき、時々は溜め息などを洩らす。置き時計の刻む音、鐵瓶の煮える響き、たゞそれだけが際立ッて聞こえて、更によく聞けば丸眞の洋燈に油を吸ふ音がほのかに催した。

たちまち横の襖をしづかに開いて入ッて來たのが妻の阿美年で、同じく長火鉢の一方に坐ッたが、是また言ふに言はれぬ悲慘の顏色、今にもあれ癪にでもなりそうな鹽梅式、しばらくは言葉もない。

「自由にならないものさ」、など明貞が下を向いた儘唯一言。阿美年は一向に挨拶しない。

「自由にならないものさな。是までの約束事といふのだらう。おれも最うあきらめた。」

あきらめたと言ふ下からやつぱり諦められない。

「いかに迷ひとは言ッてもあんなのも無いぢや無いか。敵同士見たやうな間がらを惚れるの引くのとは何たる因果だらうな。」

阿美年やうやく口を切り出す。

「敵同士見たやうなどころか、本當の敵同士ですわね。わが身內ながら妾までどんなに肩身がせまいか知れませんほどなのに、それをまた選りに選つて、その緣のつながるあの男で無ければとは本當に本當に…………」

阿美年は言いかけて堪まりかねて遂には咽び入る。

「斯く爲ると知ッたら金掛けて育てるンぢや無かッたつけな阿美年。親馬鹿かも知らないが、つい人にも褒め

られる娘だとか何とか言ふので、あんなに何かも仕込んだし……何の事は無い、唯あの阿照は家の無け無しの金を蝕いに出て來たのだ。敵同士と言ふなら、阿照とわれ〳〵二人ともやッぱり敵同士か知れないて。」言ひ終て明貞灰の中へしきりに敵の字を書く。

「なるほど阿照が惚れるだけあつて、あの小太郎も人品から辯舌から共處に申し分はムいませんわね。ですけれど、あの家と家との間がらは何うも此頃のやうに爲つたところで、どうか娘が大變でござぃますから御もらひ爲すつて下さいましと、何の顔下げて行かれるものですか。つもりにも積つて御覽なさいましな。分からないにもじッつに程が……どうしましやうね。」

またさめ〴〵と泣き沈んだ。明貞もたゞ溜め息。

「最早斯うなつては仕方が無い。」

「仕方が爲いと言へばそれまでゞムいます。」

「だッてどうせ御前橋本さん(醫者の名)も見切つてしまつたぢやないか。」

われ知らず明貞までもほろりと爲つた。

「あのとほり骨と皮ばかりに痩せちまつて、御まけに精神でも引つ立つ事でもあるなら格別、そんな事は吾々が主唱者としてもとより許さないンだもの、何で此上全快の見込みが、な、な、阿美年。おれだつて天にも地にも一人の娘だ。な……なんで惜いものかやいッ。娘がそれほど死ぬまでに思ひ込んだのを――死んでも好いから妨げるといふ、さぞ鬼か蛇かと人にも言はれやうけれど、ちッ、己はじめ……おれはじめ……おれはじめ、いつその事に死にたいやッ。

あゝ、因果な奴だなア。なぜ人泣かせに生まれて來たッ。ど……どんなにでも爲ッちまへ。」

「ですから妾なぞ女ですもの、思ひつめると本當に身も世も。今も橋本さんにはあのとほり仰やられる。さうしたら何が世にたのしみで……それぱかりかあなただッて、不斷から御弱いンですものを…………」

いぢらしいほど咽び入る。

「不斷から御弱いのが猶さうすると——ちッ、そのときや妾だつてッ——あなた、是が親子の別れだけか、それとも夫婦一家の別かれだかッ。

何を聞いてらシしやるか、御祖師さまも。」

聞きとがめて

「御祖師さま？」

「今ですから申しますが、實はあなたに內々でわたくし御祖師さまへ。」

「ふむ、御祖師さまへ、それから。これよ、泣いてちや分からない。」

「だッて、あなた。」

「だから御祖師さまへ、どうしたのだ。」

「掛けましたよ。」

「何を。命をか。」

よもやと聞けば案外うなづく。

「命を、何だッて。」

聞けば聞くほど泣き入ッて、

「たつた一粒種の子を何でむざ／＼取られましやう。子が有ッてこその命、要りや爲ま——どうぞ御祖師さま、わたくしの命をお取りに爲ッて、成らうならあの子に分けてと。」

「そりや無理だ。」

「人間に出來ないところを爲さるのが神さまです。」

「だつて何にも爲らないぢや無いか。無理を言ッたッて始まらない。」

「いえ、さうばかりも厶いませんよ」と阿美年は急にきッとなり「種田(たねだ)の御隱居の事あなた御存じでしやう。え、御存じで厶いましやう。もし、あなた、種田の。」

やうやく思ひ付いて、

「うむ、あの女隱居か。あれが何うした。」

「おわすれなさいましたの。おや否な、御祖師さまの御蔭で、御醫者さへ見放したあの病氣が治りましたでしやう。」

「ありやさうか知らん。」

「どうもあなたは何う爲すッたンでしやうね、まるッきりぼんやりして。」

「ぼんやりも爲やうぢやないか。人の咄しなぞどうでも可い。人が千萬人助からうともかまふもんか。さう願を掛けたら早く利きさうなものだ。」

「ですからまだ諦めてもしまはれません。御醫者が見放したッて――御醫者だッて神さまぢや無い。」

言ひ出したさ山々の事をばまだ腹に包んで居たが、今はどうでも押さへ切れなくなッてしきりに夫の氣色を引きながら、

「よしんば妾此處で生命を取られましたッて構やしませんよ。それも人間業で行かない事なら仕方が無いとしましても、こゝで何でも出來るだけ、それこそ手の續くだけ丹誠して工夫して見ないぢや、本當にむざ〳〵見ごろしに爲るのは親の法ではございますまい。」

「その法が盡きたと、醫者さへ見放したンだから。」

悟れないかとぢれッたく、顏色もすこし赫と爲つて、きッと夫の顏を見つめ、

「まだムいますあね。」

「有る？」

「ございますあね」と罵るやうに疊みかけて、「譯無いことでございます。」

やうやく悟ッて、「それか、そりやいけない。とても駄目だ。」

「何ですか御わかりですか。」

「分かつてる。」

素氣無く言ひ放ッたばかり、是非無い事といふ意味を穩にあらはし、横を向いて目をのみ瞬叩く。

「分かッてるッて本當に、ぢや何でございます。え、えあなた。」

「駄目だッてへば。分かつてるよ。頑固言はずに子に折れて、阿照の言ふとほり小太郎と緣を許せとの事だらう。そりや迚も、迚もいけない。」

「あもし、あなた、それでございます。ですが、あな

た……。」

「駄目だッ、とても。」

呆れて夫の顔を見つめた。さとほどばしる涙の玉、

「それではあなたは。」

しやくり上げ〳〵席を叩いて、

「そりやあんまり……御もつともでムいます。御尤もなのは知ッとります……」

「ちッ、破鐘聲、病人に聞こえるッ。」

「聞こえるのを、ちえ、それでも御止めなさいますか。それほど可愛く思しめして何故是ばかりは心づよくッ。兩家互ひに不和に爲ッたのも元とは言へば、そりや小太郎の親の方から招いたことで、それが又あたくしの緣につながる事かと思へば、あたくしは……あたくしは……いのちぐらゐッ。」

眼血ばしり、眉さかだッて、身を撞き出し「さ、あなた、あたくしが、一生の御ねがひでムいます。此身體をどうなと爲さッて、さ、どうでも御願ひ申します、どうぞ阿照の願ひだけ。」

明貞ぎり齒を嚙む音。

「きッちがひめッ。」

「はい、きッちがひでございますよ。どうせ妾は氣ちがひでッ。え丶何たる親子夫婦だか、世間に又とこんな事が。え丶あなたはな、あなたはな、そりや餘り親子の情が。えッ、十九の時を一期としてたッた一人の可愛い子が賽の河原へ――そりや夫が親の……親の道でございましやうッ。」

明貞胸も裂けるばかり、右ひだりの袂ばさみ、ぢり〳〵鍋で熬りつけられて、

「御前の言ふのは尤もだッ。」唯泣く。

「そんならばそのやうに。」

「さ、其處がよ」と齒ぎしりする。

「そんなら何かほかに譯でも、あなた。どうも只事とは、え、あなた。」

夫は無言でかすかにうなづく。

「小太郎の親が此方の家を押領して、それがくやしい〳〵で御隱居さまも御かくれに爲り、七生までも此怨みわすれるな、阿美年は氣立ての好い女ゆゑ離緣するのだが、その外の泥坊どもとは夢にも付き合はうと思ふな、饑ゑ死んでも松平の名を落とすなと御遺言遊ばした、その御遺言だけの事ならよもや是ほどまでにあなたが根づよく。こりや何か外に譯が。あなた、もし。」きう〳〵と詰め寄ッた。

「さう言はれると仕方が無い。いかにも外に譯が有る。」

「して、それは？」

「どうでも今は言いにくい。」

「それぢや何うでも阿照を見ごろしに？」

しのびきれぬ男泣き。

「わが子だもの、可愛いやツ。……くるしいものは世間の義理、おりや義理攻めで死ぬンだわイ。よし、もう言ッて聞かせるぞ。」

にはかに起ッて含嗽して佛壇に向かうて稍しばらく。阿美年は此末どうなる事かと一人身も世もあられぬ思ひ。

「下女も何も其所等に居ないな。」

「大丈夫でムいます」と思はず膝を押し進める。

小聲のためのたよりにか、煮えかへる鐵瓶を傍へおろして、

「斯ういふ譯だ。御本家の丹波さま、其あの御姫樣――知ッてるか。」

「闕子さまとか仰やる方……」

「それ、其闕子さま、あの方に賴まれた其義理づくだ。何處でどう御見初めに爲つたことか、小太郎を御見初めだ。」

怒濤の中へ花瓣一つ、案外咄しが生めいた。阿美年ほとんど呆氣に取られる。

「何でも小太郎を夫にしたいとの思しめしで、家令の寺崎も弱り切ッた。就いては御本家と當家とは外ならぬ

間がらなり、是非この周旋頼み申すと寺崎にせまられて實は是非無く承知した。」

「そりや又いつの事でムいます。」

「しかもつい此ほどのこと、しかもまだ阿照の病根の知れなかつた頃の事だ」さも殘念らしくしかもにひどく力を入れた。

「知ッてをれど、如何に御本家の御さしづでも是ばかりは、實にこればかりは己とてもわが子可愛いわい、よし膝を抱くにしろ、小太郎と緣組ませる、何となく言葉をかまへて御辭退申すだけの事だ。ところを運がわるいので、阿照の病根もとより知らず、うッかりと御受けして其儘に爲ッてしまッた。もう變がへは叶はない。

わが子可愛さに小太郎に遣はす時は御本家をあざむいた事に爲る。その時は先祖の御位牌の御手前。男が一旦約したことを今さら何とどうも爲らぬ、譯といふはつまり是だ。」

聞けば扨も、聞けば扨も。阿美年もはたと當惑する。娘を殺すか、本家と斷れるか。愛惜の念を絕つか、食言の誹りを買ふか。

「で、どうなさいます。」氣色を變へてつめ寄つた。

「いかに男の約束でムいましても、是ばつかりは無理も無理、あたくしは不道理かと思ひます。」

「無理ゆゑに約束だ。」

まだしぶといとか氣は半亂、

「そんならばあなたは何うあッても娘を御ころしなさいますか。きッと左樣でございますか。」これを最期に詰問した。

明貞心も狂ひ出したい。古風か知らぬが親からの肝、一言の誠を重んずる男子の身で、一婦人一女子の煩惱に釣られるか。

阿美年は此處を一大事と是もまたするどく切り込む。

「無理にも無理がとほりますれば、人二人の命でございます。きッとそれでございます。御先祖の御位牌の御手前、御本家と斷れるのが相濟まないと致しますれば、

當家の血筋はそれで絶える、御本家ばかりが御大事か、それとも御當家が御大事か、何といかゞで厶いましやう。」

きッぱり屹と言ひ切られて、かへすべき道理も無い。空に定規の義理立てすれば、たゞ食言が怖ろしくて更に一家の愛を思へば骨寸々に刻まれる。

きつて見ても何うしてもやはり可愛い子は可愛い。で無ければその子が死ぬ、で無ければ死ぬまいと云ふ行路難の峠路を、ちッゝ拔き足しても忍んで越せ。

「おりやすッかり肝を据ゑた。阿美年、御前の言葉を聞く。」

阿美年はわッと又つッふす。

「いかなこと。」

「うれし泣きでございます。」

二

大病人を抛り出して置いてのいさかひも目でたい局を結んだので、阿美年心は宙を浮いた。何處をあるいて行ッたことかいつか身は阿照の病室。見れど病人ねむッて居た。

たまらずに搖り起こして、

「阿照や」とばかり泣き出した。

たゞ驚いて居る阿照の手をおッと取り上げおッし撫でゝ

「こ……こんなに痩せちやッて。」

たちまち聲に力を入れて、

「もとの樣に最う爲るよ」と又握りしめて何を言ふやら。

「おッかさん何ですか」と一言言ふのも宛もくるしい。

「さうだッけ。あんまり心が取りのぼせて、あの御とうさまが御承知だよ。御承知だよ御とうさまが。いえさ、分からないね御承知だよ御とうさまが。」

「ですから何を。」

「まだ分からないのかねえ。大抵蟲が知らせも爲やうに。小太郎さんとの緣談をさ。」

えッと阿照が飛び起ッて、思はず洩らした笑顔と言ッたら、感きはまッて是も泣く。

「泣いちや毒だよ」と言いながら泣く。

「泣きは爲ませんよ」と言ひながら泣く。

明貞來て見て溜め息吐く。父を見るよりつッぷしたきり、阿照は顏をもたげ得ない。

「御ゆるしの趣きを知らせました」と輕く言へば、

「どうだ喜んだか」と慈愛ぽた／＼の一言。

恐ろしいもので阿照の元氣はまるで噓かと思はれるほど引き立ッて、つひぞ封じ込めきりであッた笑顏が瘦せくぼんで淋しい面にあらはれて、食さへも進み出したとの託宣。醫者さへ來て診て呆氣に取られた。

見るにつけても明貞の胸中は一とほりで無い。娘の本腹に趣くのは嬉しいに相違無いが、扨ていくら考へても考へても避けられぬ苦勞が二つ有ッた。第一小太郎方へ婚儀を言ひ込むこと、第二本家から何とか言はれること、此二つ實に蛇蝎よりも否である。けれど是非一度は出くはさなければならない。

今日は明日はといひ／＼否さに日を送ッた、此頃は好物の釣りにも出かけず、ぼんやりして居るところへ、無殘や、寺崎が面會を求めに來た。

今更のやうに胸も轟いて切迫此時よりつまッた事は又と無かッた。寒暖の挨拶一とほり濟めば、あとより其目的で來たことゝ直に本題へ切り込まれた。

「いかゞでムいましやうか、あちらの御挨拶は。實に御孃さまに於かれまして、今日か明日かと御返事を御待ちあそばすばかりでムいますから、御如才もござらん所へ御催促がましく申し上げて誠に相濟まんことでムいますが、一とほり承はりたうございまして。」

「なるほど御尤でございます。實は其件に關し、更に御はなし申したい筋もございました。外でもございません實は小太郎方へ手前よりまだ何とか申し込みませんが。」

寺崎すこぶる驚いた體で、

「はゝあ、それは何ういふ譯で。」

「御はなし致すも心恥かしい次第でございまするが、實は手前方と小太郎方とは只今義絶同樣の姿でムいます。」

「過日は何とも其邊の事をば仰やらんではムいませんか、それを今に相成ッて……」

「いや過日は申しおくれたです。他に數々の心配事のあッた所で御相談ゆゑ我ながら心も決まりませんでムいました。御本家の御命令ゆゑ、義絶は勿論、何決してまゐらんと申たのではムいませんが、さて此緣談は迚も迚も〳〵、寺崎さん何と思しめすか存じませんが、とても纏まらんと考へますな。」

「今更それは困りますな。またなぜでムいますな。」

「説明は出來ません。」

寺崎むッとして、

「そりや變でムいますな。」

「説明は致さずとも後はあれで分かります。たゞ手前があまり輕忽に事を引き受けたのを後悔いたします。」

言はゞ喧嘩買ひと言ふべき口上なのだ、寺崎も當惑した。何か入り込んだ子細が有らうと思ふのでわざと自分から落ち着いて、

「何とも私には分かりかねまするが、しかし小僧のつかひでも無し、いかに寺崎とて唯それだけを言ッて歸る譯には參りません。いづれ御事情の有る事でムいましやう。わたくしだけにても御打ち明け下さる譯には參りませんかな。その上で又何となり方便をかまへて歸ります。どうでも纏まらんことなら致し方ございません。」

「さう仰やるも却ッて恥ぢ入りますが、それまでの御親切に對しては又ひとり一存にのみ包んでも居られますまい。子細と言ふはかういふ次第で。」

つまり仕方無いから打ち明けると、寺崎案外思ひやりの有る男で、いかにも其事情では纏まるまいと其點だけは會得した。が、さうなッて事が壞れてしまへば、況んや小太郎と阿照と緣を組めば、明貞が前に言つたとほり

本家別家の平和も破れて、たがひに反目の境遇に陥るといふ、其結果だけは如何に寺崎思ひ遣りが好いにしろ、如何してする事叶はない。

捨て言葉か知らぬが、兎に角歸りかゝッて寺崎もどうか夫でも平和に納めるやう盡力するとの言葉を殘したが、明貞胸中の鬱憂は深山の雪で容易に解けない。

寺崎の歸るのを待ち着けて、どうでムいましたかと、是も心配ゆゑあはてゝ聞く阿美年さへもうッとしい。碌玉に咄して聞かせぬ、阿美年は分からぬ、くどくつまらぬ事を猶聞きかける、結局は劍つくであつた。

が、さうして居ても果てしの付くべきいはれは無い。すこし時間が經てば多少の分別も逭ひ出して、更に心決する所も有つた。本家の結果は何うでも爲れ、此上はわが子の奴隷と爲り下がッても、小太郎の方をまとめなくては。

こちらから機嫌直して阿美年に此決心を言ふた、もとより進んで賛成したゞが、絶交同様の敷き居の高い家、わざと人手をも省いて自身ぶッかりに往くその不愉快。尋ねて往けば取り次ぎの下女までが、顏見知らぬ事ゆゑ御名前はと聞く。松原明貞と口で二三回言ッて會得させ、しばらく待つて客間へ通された。あゝ立派な。

贋ではあるが、よく出來た文晁の幅、青磁の花器、誰の好みか古流で玉簪の花を生け、眞物の鍋島段通を敷きつめた。あゝ是も何も押領の餘得。

主人格之助すなはち小太郎の父親といふのが程無く立ち出で、一別以來の挨拶したが、すこぶる以て頭が高い。それをも我が子の可愛さから知つて知らぬふりに我慢して、言いにくい所を思ひ切ッた。

「突然なことではなはだ輕卒の至りでムいますが、どうか御聞き濟み願いたいと申すのは別條でございません、手前の不束な娘と小太郎さんとの婚儀をどうか結びたいと存じまして――實はその如何にも突然ではなはだ如何の譯ではございますが、何分娘の心底も可愛さうでムいますに就いて。何が無したゞ、小太郎さんの事ばか

り思ひつめまして何と申しても聞き入れず、その果ては命さへ旦夕に迫りかけました次第、どうかよろしく御賢察を願います。」

是も子のため子の故の我慢とぢッと蟲を殺して頼み込むと、扨も冷やかなのは人の心、一たまりも無く跳ねられた。

「折角の思しめしでございますが、是は御ことはり申します。」

「はゝあ」とすこし呆氣に取られた。

「御ことはりでムいますか。」

「はい」と冷やかに言ふ。

「あはあ」と又呆れて。

「それは何うもちと。實はその。……」

又事情述べかけるのをうつとふしさうにびたりと抑さへて。

「小太郎はある方と大方婚儀の約束がとゝのひましたから、それで御相談叶はんと申すのでございます。」

「なるほど。してそれは何方さまと、何時でございます。」と聲すこし顫へを帶びた。

「うす／＼御承知もございましやう。」

「いや一向に。」

格之助何の意味かにやりと笑ッて、

「御本家の阿姫さまとでございます。」

此一言明貞の耳には雷のやうに聞き做されて、思はず身體までがふるへた。はした無いのも忘れてしまッて

「いつ……いつでございます。」

「何がですか、結婚ですか。相談ですか。結婚の日取りは未定でございますが、相談は一昨日きまりました。」

「一昨日？　すると直接に言ひ込み居つたな」と佶と睨んで。

「寺崎がまゐりましたか知ら。」

「誰でもいゝではムいませんか。いづれにせよ、結婚の日は盛んに式を擧げますつもり、その節は御案内でもいたしますからどうぞ御出でを願ひます。」

さも自慢らしく吹聴(ふいちやう)されて、思ひつめたゞけ目も眩む心もち。立ちかへる勇氣も挫けてしまつたが、更にまた歸りをうながされるやうな事を言はれて、どうでも歸らなければならなくなつた。

歸宅して妻や娘に何と知らせて好いものか、あからさまに言ふたら又例の娘の一圖(いちづ)、また病氣の再發うたがひもない。

とつおいつする内に意地わるく毎もより道早く、いつの間にか我家と為つて扱蹈み込む足さへ力が無い。かならず好結果と此方だけが承知で、あはてゝ阿美年も出むかへて、どうでございましたかと急る一言。

「とても駄目だ」と苦り切ッて、眼中すこし露を持つ。どッかと坐して首を掉ッて、

「駄目だ。ひやかされに行て來た。馬鹿な面な、好い自慢の御披露(ごひろう)うけたまはりに行ッたやうなもの――ちッ殘念だ。阿美年、こら、酒。」

「御酒を……めしあがるのでございますか。」

「酒と言ふからにや飲むと知れさうなものを――馬鹿な。」

「御よし遊ばしませ。」

「何よせと。こらなぜ妨げるか。酒でも飲まずに居られるか。思ふさま恥辱(ちじよく)取ッたやい。」

くやしなみだはら／＼と、

「えゝ、子を持てばこそ此くるしみ、もう子は是で實に厭だ。」

「一とほりは御尤でございますが、しかし是だッて……」

「いんにや、いやだよ聞く耳持たぬ。生きるとも死ぬとも何うとも為れ。」

「あの阿照で厶いますか。」

阿美年仰天(ぎやうてん)して聞けば、目を眠ッてたゞ默然。しばらく經ッて、

「こら、酒だうした。」

「本當に御のみなさいますか。」

「ちよツ、何うそを言ふものか。さツさと付けろ。」
「でも御醉ひ遊ばすと。」
又かぶりを掉つて、
「醉はん決して。決して醉はん。こんな日に醉えるものか。」
にがり切ツて酒となる。阿美年如才(じよさい)無く機嫌取り〳〵成るたけ扣へ目にさせたが、中々急にはをさまらない果ては醉ふ。
「阿美年、何と思ふか知らないが、これで實に子と曰ふものは親いぢめのものだなア。かんげへて見ろ、生まれる時に母をくるしめ、育つ間は父母ともに苦しめ、年頃になつて又くるしめる。どうしてもやはり敵だよ、いやさ何の子も親には敵だよ。」
「だツてそりや餘りあなた。」
「決して〳〵さうで無い。」
「だツて御可愛いでしやう。」
「可愛いだけ猶毒だ。因果で可愛と思ふのだ。よければ可し、わるければ否しできツと親をくるしめるから。」
「あゝ、是につけても坊主が好いて。」
ひよろ〳〵と起ち上がツて何處へか行く。
「もし、あなた、どちらへ。」
言ふ内に早阿照の病室。とろんこの眼を埒無く据えて、阿照をぢツと深く見つめた。
「ちツ、敵め。」
「何ですね、あなたツ」と仰天して阿美年がさしとめた。
にこり笑ツて、
「わツ、因果同士が敵を却ツてかばふとは。わはゝ、私は最う悟れた。阿美年なぞまだ迷いの淵だ。」
「阿照、よく聞け……」
「今よろしうムいますよツ。わたくしから申しますからさ。」
「わたくしが言ツてはわるいか。」
「いけません。」

「父親の言ふのがわるいか。」

「何でもよろしうムいますから、まア御休みなさいましよッ」

無理に手を執らぬばかりにして、別の一間へ伴ッて、手はやく共處へ寐かして了ふと、譯無くすぐに眠りついた。

阿美年その儘立ッたきり、たゞしばらくは潸々と泣く。たゞちに娘の居間へ行けば、親の泣き顏目ざとく見つけて、

「一體何でムいますの。」

「何でも無い。阿照、きッと言ひ聞かせる事が有る。」

ぢッと言はれて薄氣味わるく、

「ですが、何でございます。」

「阿照、御前も武士の娘だらう。よも狗死には爲まいと思ふが、それとも何うでも下司の子と同じやうに、つまらぬ終焉を見せる氣かえ。」

阿照何だか合點が行かない。

「どうもまだあたくしには仰やることが……」

「そりや分からないかも知れない。小太郎は何うあッても。御本家と緣を組むとの事、さ、さぞびッくりは爲るだらう」と聲を放ッて泣き出した。

「御父さまは殘念がる。さ、こゝが御前の思案一つ。どうでも思ひ切れないかッ。」

ぢッと言へば、ぢッと思案、さしぐむものは涙ばかり。

「さ、どうでも思ひ切れないから、許す、一おもひに死んで御見せ、いやさ狗死にして御見せ。」

現在の子に死をすゝめる、何の因果な母子かと腹では詫びて、面で叱る、心氣ほとんど惱亂した。

言はれるものも思ひは一つで、叱られて猶親の上が且戀ひしく、且いたはしく、唯はなれともない。涙の中からかぶりをふッて、

「ききッと思ひ切りました。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

酒もさめて明貞やがて起き出でたが、どうも埒の無い

事を言ふ。然るべき醫者に見せると、いかな事、大變な病氣。

（をはり）

可憐狂

第一

「うツぷ、ああ好い心もちに醉ツた。あツあ千兩萬兩一萬兩、金で此心もちが買へるもンか。是といふのも娘の御かげ、やツぱりそれが旦那の御かげ、ありがてエ、ほんとに有りがてエ、ね阿定。」

笑みかたまり、醉ひとろけて居る六十ばかりの老人、そろ／＼焦げ付く鳥鍋をおろしながら腹の中をば思ふ存分。

鍋で指を熱くして、あわてゝ耳へ遣りながら、「あツつ、うぷ、好い心もちだ。どうだ、阿定もう一度見てくんなよ、なツ、この寫眞をよ、よツ乃公の娘のこの寫眞をよツ。」

阿定と云はれたのは五十ばかりの老女で、老父には妹に當ツた。にやりにやりと笑ひながら、

「見たよ、もう澤山。」

「ちツ、薄情な事を言ふンねエツ。折角言ふのを、義理ぢやねエか、さうかてツて見てくれたツて可いぢやねエかよ。見ねエ、なツ、こりや阿今が十八の時の寫眞だ、花ざかりの時御庭の中でうつしたンだ。」

「ふふふ、知ツてるよ、聞いてるよ、ぷツ、くどいねエ。」

「何ィ、くどいツ？」と目を据へて、舌で淡髭を舐めながら、

「だから御めへは素氣ねエといふンだ。燈心の寒ざらしぢやあるめエし、寒ざらし婆といふンだ。人ツ、これでも女人か知ら。」

「きまりだ、醉ふといつでも。へツ、それぢや拜見い

たしましやう、御むすめごさまの御寫眞さまを。」

「寫眞へ樣を付ける奴が有るけッ。」

「うれしがるだらうと思ツてさ。」

「そのくれゑなら御むすめごさまの方へ二つ付けろイ。」

「拔け齒で舌がまはらないよ。」

「あんまり親の脛をかぢつたからだ。」

「ちよッ、御きげん取ツたり、わるく云はれたりしてこんな埋らない噺しは無い。」

「死んだら墓へ埋めてやらア。」

「御禮からさきへ申しますよ。」

老父(おやぢ)太右衞門すこしくしよげた。にこりにこりと頽(くづ)れるほどに笑ひながら、

「だけれどもな、阿定、親身ツてへものは好いものさなア。己だつてもう嬶(かゝあ)は無くなる、頼みにするのは御前(おめへ)と阿今の二人きりだ。それでもな、あの阿今がな、仕合(しあ)はせとあのとほり好い旦那をふんづかめへたので、このとほり己だつて、此烟草屋まで出してもらひ、暑くなく寒くなく左團扇で氣樂に今日を送ツて行けるンだ。ありがてエぢやねエか、おい。」

「そりやまつたくさうだとも。何しろあの娘(こ)も感心さね。よく若いのに見とめを付けて堅氣になる氣になつたものさ。兎角あんな商賣したものは尻が落ち着かないものでね。」

「と言ひなさんな、おい阿定。」

「え、何。」

「何ぢやねエ、そりやあんまり情(なさけ)ねエ言ひ草だ。」

「へエ、なぜね。」

「そりやわが子で褒めるンぢやねエけれども、あれに限ツちやそんな浮ついた心はねエンだ。」

「だからさア。」

「ヘン、いやにごまかしやがるッ」と笑ふ。

「ごまかすンぢやないやね、前からさう言ツてるンだてね。だけれどもね、御前、それがあの子ばかり良いン

だと思ふとまちがいだよ。あの子もはたらき者で怜悧さ、けれど又旦那も旦那だからね。」

力を入れて「そりや己だッて知ッてらァな」と卒然として涙ぐむ。

阿定ただ何となくびりびりと感に撲たれて、挨拶も一寸出ない。

「そりや知ッてらァな」と太右衛門たゝみかけた。「そりよ忘れたら人間ぢやねエ。そりや阿今を氣に入つてればこそ己までを斯うまで僞てくれるンださ。だが、それが氣象に因るンだからな。かまアねエからッて仕方ねエやうなもンだ。そりよ有りがてエと思はなかッた日にや畜生だ。何忘れる、忘れるもンかッ。是だッて年は取つたッて飯も六杯づゝ食ふ己だ。わるい事を願ふンぢやねエが、今にも旦那が病氣で腰でも抜けたら、すぐ駈け付けて差し向き己が泄脫の世話アするからなッ。」

「きたない事をたのしみに御しでないよ、人ッ面白くもない。」

「それから不動さまへ願かけらァ水垢離取ッて。うれしいな。」

「うれしいも無いもンだ。」

「だけれどもよ、さうして恩でも返さなけりや恩けへす事アあるもンか。煩ッてくれるのも可いや、くるしなく。」

「ぷッ。」

「それで素性よくはやく治ッて。」

「いやだよ、本當に、くッだらない事を。それよりか煩ふところも煩はないやうに願ふのが本筋ぢやないか。」

「それも願ッてるンだいッ」と忽ちにしてしんみりとして「御前だけに言ふ、己、己、實は其な。」

「どうしたの。」

「どうッで事もねエンだけれど、己、己、はやく死ぬンだよ。」

譯聞かぬさきから阿定もさすが悲しくなッて、

「なン、なッぜ。」

「わらッてくれるなよッ、ちッ、己、生命を定命の內から十年だけ不動さまへ獻げたンだ。」

「そりや又なぜさ。」

涙さすがに催ほして、「だッてもそれが切めてもの御恩げへしと云ふもンだッ。ちッ、有りがてエ旦那、只ぢや己にや恩がけへせねエや。だから己の定命の內から十年だけを取ッて、それだけを旦那と、うふム。」

「泣いちや身體に障るのにさ。」

「障らねエやうに泣かいッ。」

「その壽命をどうだッて。」

「旦那と阿今とに遣りてエので。」

阿定もたまらず袖を顏。

「十年ばかりの命、二人で別けて幾何にもなるめエやさ。だけれども、己だッてもう五十四、ちッ、いくら殘餘が有るもンか。それにや零餘をすこし殘して、ちッたア己だッて安樂に娑婆に居てエやさッ」と一句每に聲を呑む。

それほど惜しい生命を割愛しても恩人へ遣りたいのかと阿定全身總毛起つ。

「信心もそりや無理、無理なッ、生命なンぞ縮めないからッてさ。」

儼然として、「でねエッて事よ。まだまだ己が吝嗇なンだ。十年が十年全つきり旦那へ獻げるのが順當ださ。だけれどもよ、よッ、それぢや阿今に何にも行かず、己が餓鬼だッ、かはいやさ」と又さめざめと泣き入つた。

「氣ちがひじみた事を御言ひで無いよ」と阿定やがて改まッた。「それほどに思ふのはそりや結構さ。旦那はじめ阿今が聞いたら嘸まア嬉し……」

「言ふンぢやねエぞ」と目を睜る。

「いいえ、言やしないが、まアさ。嬉しがるだらうと言ふのさ。」

つくねんと太右衛門下を向いて、ぼろりぼろりと點つて泣く。阿定もほとんど身を斫られる。

「だがさ、御前そりや無理な信心だよ。不動さまだッて

そんな無理云はれて——第一人の壽命をつめるなンて。」
「馬鹿言ひねエ、暴神さまだ。」
「よしんば暴神さまにしたところがさ、人の壽命をつめるのが神さまの本意ぢやない。それほど御前が旦那のためを思ふなら、その思ひ一つだけで旦那の身の上に歹い事は無くなるからね、信心も物に因る、そりや御前あンまり勿體無いといふもンだ。わるい事は言はないからさ、ほんとにそんな信心は廢しに御爲、ね、御前だッて身寄りが無いと云ふンだらう。して見りや私だッて親身の兄ッてへのはお前ばかりぢやないか。見す見す壽命をちぢめるのをああ可いわと云ッて居られるか居られないか、ねツたアつもツても御覽なねエ」と至情の涙の袖を絞れば、

猶無言でぼろぼろと泣く。

「凝り性で正直過ぎるから困るよほんとに。不正直よりや可いけれども、さうまで深く思ひつめりや、やツぱり身體の毒ぢやないか。つまらなく凝り過ぎて、あたしたちまでを、泣かせてくれないでも。」

咽び入れば、手をあはせて、

「うム、わかつたよ、わるかつた。つひ唯思ひつめたもンで。よツ、わるかッた、わるかッたよ。」

途端戸外にがらがらと云ふ人力車の音がする、と思ふ間、ぴたりと止まッた。おや自家か知ら。

「ちよいと、おとッさん」と云ふ聲は意外わが子の阿今で。

太右衛門飛び出した。

「ふム、阿今か」と云つたばかり、不圖見ると是は又妙、人力車は合ひ乘りが二臺に一人のりが一臺で、その一人のりに阿今が乘つて、他のには荷が積んである。

一目見て何と無くぞッとした。

「どうしたんだッ」と思はず怒鳴ると、同時に阿定も飛び出て來て、是も荷を見て怪訝顏。

「今ちやん、これは何うしたの。」

「なに今ゆッくり咄すからね、はばかりさま、どうぞ

取つて頂戴よ」と云ふ顏の色が平常で無い。
酒代の御利益だけの御辭儀をして人力車夫は歸ツて行く、阿今の眼に見る間涙がさしぐんだ。
聞かぬうちから太右衛門胸を衝かれて、
「早、早く云ひねエな。どうしたンだ、喧嘩でもして來たのか。おいツ、これツ、だまツてちや解からねエ。よツ、どうしたンだ。」
「あたしやくやしいツ」と泣き出されて、思はず一所に泣き出したい。
「しツ、何がよツ。」
すこし離れて居た阿定も我を忘れてするするツと火鉢の傍へ擦り寄ツて、
「氣ンなるねまア。どうしたのツ。」
「聞いとくれよ、おとツさんも、伯母さんも。ちツきしやう、人をツ、人をツ、厭きちまやがツて、とうとう終尾にこんな目にツ。」
「旦那が御前を厭きたのかツ。」
「そ、さうだよ。」
「なぜ又厭きられたンだ。えツ、なぜよ。又御前何かわりい事でも。」
「そんな事が有るもンかね」と涙一杯の目で睨みつけた。
「ほいツ、さうでもねエのか。で、どうだツてヘンだ。よツ早くよ。」
「聞いとくれよ。」
「聞いてるよ。」
「くやしいぢやないか、ほんとに。」
「ほム、くやしいかなツ。」
「旦那の畜生、此頃女をこさへたもンでね、何でも人に批難をくツつけて逐ン出さうと思ツて、ああくやしい。」
「女をツ、ひツ、ひツでエな。」
「藝者だよ。」
「どこの。」
「葭町の。その女にすツかり熱くなツてね、有る甲斐

無しにあたしを爲るの。さうでもない、一人の親まで過されて居るンだからすこしぐらゐの苦しみは辛抱してと思つてね、蔭で泣いちや外面であやまツてね。」

阿定だまツて泣き出すと、太右衛門切齒をはじめ出した。

「するとその女の入れ智慧だらう、とうとう妾に難癖つけたの。」

「何だツて。」

「ちツ、くやしい。」

「言ひねエやさツさと。分からねエ。難癖の次第ェに因ツちや己にも了簡が有らア。どうだツて。」

「あたしがねエ、生眞面目で居りや手の付けやうも無いもンでね、とうとう御前、あたしがねエ、旦那の目を忍んで役者かひをしたと言ひ出してね。」

「役者、誰ツ。」

「誰ツて御前咄しになりや爲ない。まるツきり根も葉もない事なんだもの。ほんとに濡れ衣とも何とも言ひやうの無い事ちやないか。それだのに、さうだツて、いツくら別譯しても聞き入れず、片時も家へ置くのは否だから身のまはりだけ持ツて出て行きやがれツて、ぐづぐづしてりや夫こそ怪我でも爲かねやしないンだもの。」

「熱ツ」と太右衛門仰山に叫び出す。さすがに一同びツくりすると、

「五德へつかみついたやいツ。」

「火傷したかえ」と阿定があわてれば、

「かまアねエ、何でもねエ。それどころか肝心の咄しだいツ。」

火傷の涙と口惜しなみだと一所の涙を溢れさせて、

「何ぼ何でもそりや旦那が無理だとも大無理だ、なツ、さうぢやねエか」と阿定を見やツて、「否なら否で可いや、何も難癖付けるにや當たらね、是だツて人一人の娘だツ。ンでツ畜生、ふんとにツ、馬、馬鹿にするも大概にしやがれツ、けだものめエ。」

「いはれを聞いて見りや」と阿定が割り込んだ。「小腹

の立つ咄しさ全く。」

「小腹どころか大ばらッだッ。」

「だが、おとッさん、又よく考へて見なけりやならないよ。」

「何、何をッ。」

「この子の前で言ふのは變だけれども、偏言ばかり聞いて哮り立つのも揣まり過ぎる事ちやないか。」

「そりや伯母さん」と阿今きつとなる。「うらみだわ夫や。なんぼ私が浮氣な家業をしてたからつて。譃言を吐いたつて今更はじまりや爲ない。有り體の事を有り體に言ふのに、さう言はれちや猶くッやしいッ」と泣く。

太右衛門だまッて、火傷の指を吹いて居たが、阿定の注意はたしかに胸に浸みて居た。

「だが阿今、ちッ、又癇を起してふるへてやがら。そりや阿定の言ふ事だッてまんざら歹くばかりは聞かれねエや。」

「可いよッ、もう御前までもッ。」

「でねエさ。あの家業で居る内に役者かひで新聞に出された事も無かァ無かつた。だもの、全つきり形無しとばかりや一寸思へねエや。」

阿今さながら狂氣の如く、

「くやしいわ、どッ、どうしやうッ。親にまでこんな事言はれて、ちえッ何たるまア口惜しいッ。何ぞと言ふと一口まぜにあの家業して居たンて、誰のためにその家業したンだいッ。」

氣の毒さうに、「そりやさうさ。」

「何がそりやそうだいッ」と罵り飛ばす。太右衛門阿定だまッて顏を見合はせた。

「堅氣ンなりや堅氣だ。いつまで商賣してた時の氣を有つもンか。人の氣も知らないで、ふんとに、あン、あンま……」

「按摩、何」と眞顏で聞く。

「あンまりだつてンだよッ」と金きり聲。

「可いよもう咄さないよ、言はないよ。力ァ付けてく

れやうとも爲ないで、人ッ、どつちの贔屓するンだか分からない者に咄したつてどうなるもんか。」

「これさ、今ちやんさうのぼせないでもさ」と阿定も今更よわり切る。

「知らないよ、知りませんよ。」

「だが今ちやんやッ。」

「どうせ浮氣ものですよ。」

「あれさ、さうぶんぶんしたッて可けないやね。何もあたしだッて惡氣で言ッたンぢやなしさ。」

「ようござゐますよ何でも。」口のうちで、「死、死んぢまはいッ。」

あはれや親はぎよッとした。

「阿今、阿今」

「可いよッ。」

「わかッたよ。わかッたよ。どうかと思ッて試して、見、た、よ、な、ものだ。」

「御ふざけでないよ、人ッ。可いよ、どうせあたしは昔の心が失せない浮……」

「でねエッて事よ。失せたよ、わかッたよ、試したのでわかッたよ、だから駄駄を捏ねねエでなッ。また阿定も阿定だ、おもてむきに行り出す奴も無エもンだッ。」

飛んだ迸散にむッとして、

「あれさ、人の所爲にさ。あたしが何てッたッて御前がそうでないてや夫ッきりになるンぢやないか、馬鹿馬鹿しい。わるい事ッてへと何でも人ンところへ持ッて來るンだ。」

「いやさうぢやねエッて事よ」と順順にあやまり廻る。

「また御前がそんなに一圖になッてよ、何のこッた年甲斐もねエ。」

「どッちがッ。」

「まアよ、一口言ッたッてさう腹ァ立つにや及ばねエ。何だッて己ンとこの一連は斯むかッぱらが立ちてエンだらうなッ。」

「御前とおんなじ事たよ」と阿定も今は吹き出した。

「ンでいッ。」

「可いやね、もうごたごたは」と阿今が機嫌をなほし出した。

「ほム、可いかな。」

ただおどおどするいぢらしさ。一意ただ夢中で居る。

「まッたくね阿父さん、ね、伯母さんも聞いとくれよ、濡れ衣を着せられたのでね、ほんとに形迹も無い事なンでね」と更に阿今が繰りかへせば、

「じッつにねエ」と阿定前に懲り懲りしてさも力を籠めてぢッと云ふ。

「だけれども爭つたッてやッぱり損だし、何御前さきの心がさう腐つてるのに、こつちばかりいくら心中立てをしたからつても始まらない事たし、何の人、あの人ばかりが男ぢやなしさねエ。」

「さうだともさ」と阿定粉烟草を烟管で掬ふ。

「つながつてるの、御あがりな」と阿今自分の烟草入れを差し出して、「家にや無い烟草よ。思ひ入れ取つて來てやつた。」

更に話しを前につなげて、「それだからねエ、おとッさん。」

「おい。」

「びッくりも爲たらうが、平氣で御いでよ、仕方無い、是までの緣づくだわ。ね、さうぢやないか、ね、おとッさん、あれさ社にかまへて何を考へ込んでるの。」

涙に目ぬりさせて塞いだ目をおもむろに見開いて、

「業が沸へてたまらねエもの。」

「さう云ッて仕方が無い。」

「仕方は無からうが、つまらねエ。これ、阿今、あらためて聞くンだがな。」言ふ聲はふるへて居た。

「もう一度念押すンだがな。」

「あいよ。」

「きつと身に暗エ事は無エンだな。」利刀ふりかざしたほど鋭い。

「わからないの、まだッ。」

「よし、しかと然うだなッ。ふム、それでこそ已の餓鬼だ。」

しばらくぢつと考へ込んで、

「まだ籍にこそ入らねエにしろ、全で阿三どん出すやうな出し方だ。已、承知ができねエンだ。錢金にやころばねエ。濡れ衣は何で干す。ふざけやがらッ。」

つッと起つて戸外口、二人は何の氣も注かない。が、程經ても戻ッて來ぬ。

「旦那どうしたえ」と店番の小女に聞けば、

「ただ今どちらかへか入らッしやいました」と平氣で居る。

「あらまツ、をばさん」と驚忽な叫び聲。

「だまつて何處かへ行ッたとさッ。着物も着かへず、まさか旦那ンとこぢやあるまい。」

「さうさねエ」と阿定も出て來て、店中ぎろぎろ見まはしてゐる。

「どッちへ行ッたかえ。」

「あちらへ」小女は右の手を掉ッた。

「あらッ、ぢや旦那ンとこか知ら」と阿今與覺めがほに伯母と顔を見あはせた。

「そうかねエ、何だッて默つてことわり無しに、例の短氣がはじまツたのかねエ。」

「ちよッ、困ッちまふぢやないかねエ、人力車で行つたか知ら」と馳け出して門口から頸を出す。

「今見たッて見えるもンかね。」

「だけれどもつひ。ちよッ、困ッたねエ。上戸一人の酒ぢやあるまいし、一人でばッかり飲み込んでさ、行くなら行くと何とか相談するが可いぢやないか。あゝ氣が付かなかッたッけなあ」と案外阿今よわりきる。

「だけれども、かまはないぢやないか、いッそ。」阿定は落ち着く。

「ええ」と阿今の生返辭。

「さきがさきなンだもの、是非だまツちや居られまい、すりや何れ阿父さんが談判に行くのは御さだまりだね、

さうぢやないか。くやしくッて堪らないから行ッたンだろさ、可いやね、うッちやッて御置きな。」

「そりやまあさうだけれども。」

「行ッちや惡いのかえ。」

「わるいッてへ事も無いけれども——あんな短氣だからねエ」と不思議に當惑きはまる樣子。

第　二

二人の推察どほりで、太右衞門一目散に人力車を走らせて、旦那と云ふ湯島新花町の作波令三の家をおとづれた。

くやしくッてくやしくッて堪らない。いつも內玄關から入るのが今日に限ッてえらい勢ひで表玄關からおとなふと、取り次ぎの下女もびッくりした。

「まゐりましたよ、旦那さま、奧さまの御とッさまが恐しい顏して。」

「何ッ、おそろしい顏して」と小づかひ帳しらべかけて居た令三ふりかへッた。

「どうも大變眞紅な、それこそ取ッて飲みさうな顏しましてね、表玄關から。」

「表玄關からッ、へッ、ふざけやがら」とせせらわらッた。

「六疊へ通すさ。」

「かしこまりました。」

そのとほり通す。いつもは下女にまで丁寧に挨拶する太右衞門が今日に限ッて疾風土砂を捲く見脈。

「ちッ、耄碌爺の禿洋燈。」下女一人で口小言。

待つ間程無く令三その座敷きへ出て見ると、何さま太右衞門すさまじい顏で居る。あたりまへの挨拶だけは濟む。

しばらく双方無言で居る。

「ええ、時におとッさん、來なすッた用むきも大抵分かッてるが、さぞ今日はだしぬけでびッくりしなすッたらうてさ。どうか是までの事と思ッてね。」

言ふ内に太右衛門涙一杯になつた。

身をふるはせて、「だン、旦那ア。いやはや飛んでもねエ事になりやした。どうせ貴方アはたらき者で御出でなさるから致し方は有りやせんけれど、またあたくしに取りましちやアあれも一人の娘でごぜエす」思ふ存分は言ひ了れない。

「一人むすめだから何うだッてヘンだい。」うらめしげに睨みつけて、

「ようごぜエす、たんと御とぼけなせエ。もし旦那」とにじり出して、「あなたはなア、あなたはなアどうせあんな奴めでごぜエす、否ンなッた否でようごぜエさ、それで暇をくれたからッて可いぢやごぜエせんかい。」

「たッて否ンなりや爲ないさ、さきから己に愛想づかしのやうな事を爲るから我慢できかねたのぢやないか。」

「うそ言ひなさるなッ」と睨みつけた。

令三もまたむッとした。

「何が謊言だい。言へといふなら此方に思ふさまの理窟が有る。言はないのが花、第一己だッて醜辱だと思ふンで、いさくさ無しに奇麗さッぱり出してやッたンだ、難くせもつけないで。」

「いンや、御待ちなせエ」と肩怒らした。

「難くせをつけなさらねエとえッ。もし、難癖を付けなさらねエとえッ。」

「さうともよ。」

「ちえッ、口てへものは重寶なもンでッ。旦那、そりや可け、可けやせん。難くせを付けねエもよく出來た、あれほどの難くせが有るもンか。」

「こりやをかしいね」と令三膝を立て直せば、

太右衛門又もにじり出て、火を噴くばかりのふるへ聲。

「あれほどの難くせが有りやすかい。尋常の事なら兎も角もさ、ね、素堅氣なものに役者買ひしたなんてへ難癖付けてさ、もし、うンにや、まア御待ちなせエ、そりや旦那は働きもンさ、女の一人や二人御こしれなすッたッて男のはたらきだ、可うござさ。何もその女に煽られ

て罪もねエものに難くせつけて、形もねエ事を言ひがかりしなさるにも及びやすめエ。」

「おい、おい、おいッ。」

「何、何でござす。」

「何を言ッてるンだ、おい。」

「ちッ、馬鹿な、顏洗ッて來な。」

「理窟言ッてるンでさ。」

「顏……顏は今朝洗ひやしたッ。」

「ふざけなさんな。老人(としより)だと思つてやはらかく言ッてりや、なアんだ一人で好いやうな事を言ッてらァ、阿今(おいま)にそのとほり聞いたのか。」

「さうでッさ。」

「不愍なもンだ。好い氣ンなッて、子の言ふ事ばかり一圖に本當として、要でもない耻を掻きに來たのかい。どうでも然う突ッ張るなら氣の毒だが手に足握らせてやるからな。」

「へエ、手に足をッ。」

「さうよ。」

太右衛門(たゑもん)すこしく面くらッた。

「うそだッてへンですかい。」

「これを見な。」

投げ出した一かたまりの手紙と十五六枚の寫眞、取り上げて見てびッくりした。「阿今(おいま)さまへ、市助より」したたるばかりの艶書の山。のみならず寫眞も寫眞、にやけた男と阿今(おいま)とが手を取り合ッてさへ寫して居た。

「ひえッ」と呆れたぎり。

「どうだ、文句が有るか、それで」とあざわらッて令三ぢッと目を据ゑた。

さア穴へも入りたい。おのれや畜生阿魔、まじまじと白を切ッて、とうとう一人の親にまで熱湯を呑ませやがッた。

だからこそ念押した。それでも平氣で嘘で固めやがッて、ちッ、ちッ、どうしてくれやうかまア。

男泣きに泣き出した。

猶しばらくは令三ぢッと相手を見つめて居た。

「どうだ、おとッさん」と云ふ聲は今更太右衞門の耳に霹靂その儘で。「さツ、何とか言はないか。何よりの證據だ、口で言ふより痛いか痛くないか、やふやく思ひしみたらうが。樣ツ。搔かずともの耻を搔くンだ、べらぼうな。」

罵られても返す言葉は無い。咽び入ッて泣き入ッて、たちまち其所へつッぷした。

「旦、何ともはや、どうも唯、ちッ、畜生めでござす。さうとも知らず、全くの親馬鹿で、自己が餓鬼の云ふ事を眞個だと一圖に思ひ込みやして、ちえツ、面、面目がござエま……しツ、死んでもツ」と切齒した。

「しッかりと好くわかツたか。」

「分、分かりやしたよツ。分かツて見りやこの始末、旦那さま、かうでござツす、自己が好い兒のやう、旦那さまが無理のやう、口巧者にこせへやしてツ、さうでもねエ、元があんな商賣してた奴だから、いくら形も有る事から思はなくもありやせんや、あン畜生の伯母ともども萬一さうかと聞きやすとね、あン畜生め白も白、白ばツくれた大白で、泣き出してまでさうぢやねエとツ、ちツ、あン時にだツ、だましやがツたツ。」ふるへる唇嚙み緊めた。

身をもがいて、「ちえツ、だまされたのかなツ。ど、どうしてくれよ、まツ。旦那さま、あン畜生も惡いンでござす、だまされた奴めも呆なのでツ。御めんなすッて下さエやし。」

「分かッたのならそれで可いさ。だけれどもよ、呆面で一體來られた譯ぢやあるまいがな」と一分一分と刻み込む。

「そツ、ですとも。思へば思へば氣の毒な。何てッてあやまッて可いか。たッた一人の年とッた親をこんな所へ好い氣ンなッて越しやがッてツ、畜生、手に足にぎらせる、不、不孝者が又と二人有るかやいッ。可哀さうだたア思はねエかやいッ。罰あたりの獄道めがッ」と吾と

吾髪の毛をかきむしる。

令三さすがにいぢらしく、

「可いやもう。そこでそんな大きな聲出されちや迷惑だ。怒るなら怒るで、自宅へ帰ッて何うでもするが可い。よウ、おい。御前の正直なのは分かッたから。」

一句に又もや胸を刺されて、聲呑みながら泣き伏した。

「爺めの正直なのが旦那に分……ちッ、ありがたうッ、死んでも忘れませんよ、もし。愚痴ぢやござせんが旦那さま、一とほり聞いて御くんなせッ、私は不断から御恩を思ひに思ひやしてッ、不動さまへ定命の十年だけを獻げやして、そりや旦那と畜生めとの二人へ遣りてエもンだと、祈ッてくれゐでッ。」

令三是には泣かされた。横を向いて眼を拭ふ。見る太右衛門猶たまらぬ。

「もう言ッちやひやす何でも。こりや譃言でござせエせんよ旦那さまや。その親の心も子は知らず、旦那にまでも耻を掻かせて、ちッ、にッくい、にッくい、にッくい奴ッ。見やがれ畜生、どうするか。土性骨叩きつぶしても、えゝ情ねエぢやねエか。」きゆッきゆッと込み上げて居る。

「誰だッて生命や惜しい。そりよ縮めても御恩けへしたく、又畜生めにも分けて遣りてエといふ老人の了簡すこしは些はッ。」

泣き聲するどく、

「今だッて子はにくくねエッ。口でこきおろしたッて。誰がぶちてエッ。」

令三ほろりとなる。

「見やがれ、旦那にあの涙アこぼさせて、はッあ、罰あたりの畜生め。好い目が出るもンけッ。と思ふと又自己が餓鬼、末の末が不愍でなッ。」

ひしげるほどに兩手をつかんで、

「おれが死んでよけりや死ぬッ。」

其心根を思ひやれば、もとより令三あはれでならない。

泣くも尤も、狂ふも道理、その子は憎いが、親は可愛い。

「さう泣かれると己だッて氣の毒にもなるよ。まづい所に御前も來たもンだ。なッ、もう可いから泣くのだけは廢して御くれ、よッ第一見ッともない。」

きッと言葉をあらためた。「御前の心底はよく分かッた。わるくは聞かない、ありがたい。」

「ひえッ、又ッ」と手を掉り、泣く。

「だから、よッ、よく御聞き。可いか、よく御聞き。子は憎む、親は憎まない。又泣くさ、よく御聞き。」

「聞いてやすッ」と座へつッぷす。

「あの女とは此後口も利かないが、御前とは交際ふよ。可いか、苦勞にするなッ。是までどほり烟草の荷も送ッてやる」と言ひかけて令三吾も吾知らず又ほろりと爲る。

「御前の實意買ッてやる、一生は食はせて遣る。ふりかへッても見るな、あんな女。」

太右衛門をいをいと泣く。

「いけないッてば、そんな大聲出して。泣かせるとて言ふンぢやない。」

「さうですとも」と切歯する。

「わかッたか、おい、分からないか。何わかつた。分かつたンなら夫で可い。見ッともない、もう泣くなさ。」

「泣くつもりごぜせんやッ」としやくりあげて、「何たるまあ旦那さまか、もし、いッそ旦那さまッ。」

「うム。」

「そのありがてエ事を聞いて此儘。」

「うム、なるほど。」

「死、死にてエッ」と拜み入る。

「つまらない事を言ふな。そのくらいなら管やしない。馬鹿な事言ふもンぢやない。」

「は、は、はいッ、ちッ、何とまア、子は憎む、親は憎まない——子は憎む、親は憎ない——ええッ子は、親は、憎、憎、憎ッ」と段々に泣き落とす。

「無、無理ぢやごせせん、子は憎む、親は憎まない——ただ慾にや、せめて親は憎まれても、子は憎まれたくねエのをッ。」

令三又も泣かされた。

「もッともだ、親の情あひ。己だッて是ほどの歎きを只で御前に掛けたくは些とも無いッ。改心するとか、あやまるとか、趣意が付いたらと思ッたに、あやまりも爲ないンだ、遂ン出さずにや居られまい。」

「ふッてエ奴めでござッする。だが旦那あんまりそりや厚かましい、蟲の好過ぎる事だと腹も立ちなさるだろけれど、私が後生一生の願ひでござす、どうか聞いちや下せエやせんか知ら」とさも思ひ切つた體で云ふ。

「ふム、どうするてへンだ。」

あらたまられると言ひにくい。

「勝手過ぎると嘸腹ア立ちなさろッけれど、旦那さま。」

「だから何だつてンだ。」

「どうも言ひにくいンでねエ。」言つて又しくしく泣き出した。

「いやだぜ又。何だい、まア。」

「勘忍してくだせエやし。實はその、旦那さま、今言はれた事が浸みやした。親は憎くねエ、そのかはり子は憎い、そりや無理ぢやござエせんや。ござせんが、是でも、ちッ、親一人、子一人でござエやさッ。子が憎まれるてへのを親が好い氣で居られやすけッ。どうぞ旦那さまや、御たのみでござせエさ、ね、阿魔め、もし心を入れ代へで爲やしたならどうかね、何うかね、ちッ言ひにくゝつて顏から火が出らッ。」力一杯の聲。「どうか助けて御くンなせッ」と後は言ひ切れず泣き沈む。

ややしばらく令三無言で居た。

「すると何かねエ、心を入れ代へたら今までどほり爲ろてへのか。」

「さッ、さやうで。もし、御たすけでござッすよ」と手を合はせる。

「ええ不愍なもンだなア。ちがへは違ふ、嗚呼あれが子でこれが親。腹も、さア立てねエて。」

令三きッとあらたまッた。

「折角だ、承知したッ。」
「えッ」と云つて顔しかめた。
「承、知えッ」とつづけたが、もう其他は言ひ得ない。
「御前の心が不惑でならない。にくいにや相違無いが、趣意が立つたら己も讒嫉を直さうわさ。」
太右衛門身骨挫げる感情。くツくツと堰き上げた。
「ちえッ、ひッ、畜生めッ。」
「何が、誰が畜生だッ。」
「ひッ、だれでもねエ畜生めッ。」狂したかとさへ思はれる。
「ちツきしやうめ、浮び上がツてけつかツたいツ。」擦れ滅るばかり掌を揉んで、且拜む、且咽ぶ。「且、且、且那さまツ、うひッ、この神さま。」
感謝の髓を凝らした一言、深く令三の胸をゑぐツて、
「ええ、もう己も氣の毒だツて。」
「かまふもンか氣の毒だツて。」
「のぼせるなよッ。」
「をがまずに居られるけッ。」
「可いッてばさ、もうもう、おい。そんなら其氣で早く何うでもするさ。氣ちがひじみてたッて仕方がない。」
「は、はいッ」と又拜む。
「ありがてエと言ひてエが」口を抓ッて「言ひきれねエッ、ちえッ、身の内が沸えくりかへる。そんなら且那さま。」
「おいよ。」
「老父は家へ歸ります。」
「あッ、そうだ、それが可い。歸ッて何とか本人によく言ッてね。」
「言ふどころかッ。」
「どうするッて。」
「どッ、どやしつけやッさ。土性骨なほさせて、それから御わびに上がります。」
令三いくらか笑みを含む。
「御前の子だ、どうにでも爲るさ。」

「そンならば歸へります。」
「ああ、そうしな。」
頷づいて起ち上がり、やをら襖に手を掛けて、又ひひッと咽び入る。

第　三

夢路を駛るやうに太右衛門わが家へ馳け着けて、一目阿今の顔を見ると、むらむらと眼が眩むやうに爲ッた。
「やいサ阿今。」
その見脈が非常なので、まだ歸りかねて居た阿定もつッと傍へ差し寄ッた。
「おとッさん、御前何處へ行ッたの」と澄まして言はれて、
猶急き上げて、「よッくも左樣澄、澄まし了ッてやがるッ。これ、やい、阿今、其口でさッき何てッた。」
「何がさ。」
「何がさも無ェもンだ。これ、旦那ンとこから何うして出されて來たと吐したけッ。まざまざとした嘘言を吐きやがッて、此親をな、この年よりをな、己はな、手に足にぎらせやがッたな。」
「旦那ンとこへ行ッたの」と阿定が横から質問した。
「行つたンだ。」
「そウら。」
「何がそウらだ。阿定、これ聞いてくれ。乃公御前に向かッても面目ねエ。どうだい、こン畜生のさッき吐かした事はみンな反對の謊言なンだ。」
「謊言ッ」と阿定目を睜ッて、吾知らず阿今を尻目に掛けた。
「うそッ、あべこべのえッ。」
「だからよウ、なさけねエぢやねエかよウ。馬鹿正直に此奴の言ふ事を本當にして、一談判つけて遣らうと、行ッたンだ。すると、どうだ、逆ねぢだわなッ。」
くやしなみだはらはらと、「人に熱湯呑ませやがッた。市助ッてへ白粉くせェ馬の足と。」

「そりや違ふ、馬の足ぢやないよ」と阿今俄に槍を入れる。

「馬の足で無くつて何だッ。」

「座頭だよ。」

平氣で惚けられて、太右衛門ふるへ出した。

「コン畜生めッ」と毆たうとする、阿定あわてゝ差し止めた。

「まアまア亂暴な事は。そりや腹の立つのも無理はない。今の此矢さきで、座頭だよも無いもンだ。そりや今ちやん、御前が悪い。それにしろ何にしろ、騒いだからつて分かりやしない、徐かに落ち着いて咄さないぢや、ね、そうだろ、小口だけ聞いただけぢやさッぱり何うも、ね、ね、落ち着いて。」

取り做されて辛くも癇の蟲を押さへたが、涙すこしも止まらない。

睨みつけて、「畜生阿魔、やぶれかぶれで落ち着きやがる。どうしたらまアこんな餓鬼をッ、ええ阿定察してくれ。」

「あいよ、あいよ、年よりに泣かせてまア。それで、どういふ咄しなの。」

「しッ舌も引ッ釣らア。旦那ンとこへ行ッてな、なぜ人の娘に難癖付けて出したと遣りかかると、どうだお前、藪蛇だろうぢやねエか。」

「藪蛇とは。」

「藪蛇？ 籔蛇、どうてへ事もねエ、藪の蛇だ。」

ぷすッと阿今吹き出す。太右衛門又も睨けつける。阿定ただ苦り切る。

「あわてないで落ち着いて御言ひよ。」

「あわてる氣ぢやねエンだけれど」と云ふ口氣からして定まらない。

「己だッてへどもども爲やうぢやねエか」と目を拭ッて、「その藪へびてへのは斯うなンだ。何とまア全く此奴が市助てへ馬の足とふざけやがッた證據てへのを手紙やら寫眞やらで見せられたンだ。」

「あら、まツ、呆れた。」

「ほんとによツ。威張ツて突ツかかツたのが何うでエ、まるツきりの腰折れだろぢやねエか。」

「一句も無くなツちまふわね。」

「それこそ穴へで入りてエやさ。此奴が始めツからあんな口幅ツてエ事を云はずによ、本當の事を吐かしやがりや何もあんな恥辱を搔くにも及ばねエぢやねエさ。おなじ行くにしても最初からあやまるなり何なり、其の行き方てへものが違はァな。そりよまァ何うだ、阿定、あれほどに念押しても空ツとぼけて居やがツてよ。づうづうしいとも太エとも、とも何とも本當に言ひ樣のねエ畜生ださ。」

阿定今更最前加へた自分の注意が的中しただけ猶氣の毒で、聞く事ごとに只呆きれて、それにしても化けがあらはれて、阿今はどんな體で居るかと絕へず其方をぢろぢろ見れば、案外に平氣である。

灰の中へ火箸で何やら字を書いて、身をば横くづしにして火鉢に凭れ、何處を風と澄まして居る。

「やい阿今ツ」と太右衛門今はたまりかねた。「どうしたら手前はさうづうづうしくツ、これ、今の事を何と聞いた、だまツてばかり居やがツて。」

「何と言ひやうも無いぢやないか」と直落ち着く。

「何と言ひやうもねエとえ。ふざけるないツ、親不孝。化けの皮、何と言ひ譯があるかやい。」

「知れたら知れたで仕方が無いさ。どうせ人間一生の内にはいろんな事が有らァね。何もさうぷん／＼怒らないだツて可いぢやないか、氣の小さい。」

阿定呆れてだまツて居る。

「氣が小せエ？ 一生の内にはいろん事が有る？ ふツてエ事をツ」と太右衛門應接に暇無くといふありさまで。

「又さうぢやないか、苦勞にして嘆いたからツて始まりやしない。あの人ばかりが男ぢや無し、こツちも馬鹿を爲たのは歹いンだけれど、いつまでそれを氣に病んでたツて何の益にも立ちやしないわね。それよりか先の事

を考へるのが當世だわ。又何だね、頼みンなる人を見付けてさ、御前にだツて旨い酒を飲ませて上げらァね。くよくよなンて御爲でないよ。」

太右衛門ほとんど呆れ果てた。呆氣に取られたと云ふ體で、しばらくは穴の明くほど阿今の顔を見つめて居た。それこそ力も抜けるばかり。

「どうも早」といふ同時にはらはらと又涙に爲る。

「手前は良い氣だてだなァ。呆れけツて物が言はれねエ。どうだいまァ阿定、こんな人間が有らうかまツ。」

「どうもねエ」と阿定までが挨拶當惑する。

「乃公もう精も根も盡きちやツた。親でねエ、子でねエだ。これやい阿今ツ。」

「どならずとも可いぢやないかね。」

「ンでいツ、畜生。どならずに居られるけツ。」眼するどく睨み付けて、「やい、手前はなア、手前はなア、どうしたらそんな了簡に、ちえツ、どうしたらさう不孝にツ。」

「いやだよ、まア。何も不孝にしやしないぢやないか、困らせずに好きな酒でも飲ませて置きや……」

「利いた風言ふないツ。」

「おや又なぜえ。」

「ふざけるないツ。」

「をかしいね、なぜさ。」

「ぷツ、否だよ、おとツさん。」

「うム、いやだらうわさ。邪魔だらうわさ。道理でをかしく衒りやがる。不孝しねエも無エもンだ。是ほどの不孝が有るけツ。なぜ親に手に足にぎらせるまでの恥辱を掻かせたよツ。」

「そりや御前があんまりそそツかしいからだァね。」

「何だツと。」

「又さうぢやないか。行くなら行くでさ、一應相談してからだツて可いぢやないか。御前がよもや突然に行きやしまいと思ツたから、あんな風にも言ツたンだね。行くと思や又ぎりぎり決着の所を言ツたのにさ。あたしが何も御前に恥辱をかかせたいもンかね。言はば御前がそ

そツかしくツて、一人で醉興に耻辱を搔きに行ッたンぢやないか。あたしの所爲にするのは夫りやひどいわ。」

太右衞門すこしく烟に捲かれた。

「ンでいッ烏龜王八ッ。」

やッと攻撃の種思ひ付いた。

「だッて何も謊言で固めなくツても可いや。親身同士の所へ來て謊言てへのは何ういふ譯だ。」

「心配するといけないからさ。」

「ンでいッ畜生。」太右衞門唯のぼせ切る。

「だがね今ちやん」と阿定が終に見るに見かねた。「そりや御前の方にも理窟は有るんだらうけれども、ね、このとほり律義一遍正直一途の御とッさんだろ、このとほり逆上せて居るのが可哀さうぢやないか。」

「何早く死ねてへンだ」と太右衞門横あひから愚痴る。

「まツ、御よしよ御前も愚痴は。ねエ今ちやん、さうぢやないかい。可愛さうでもあり、又逆上かすのもあンまり譽めた事ぢやあるまい、えッ。」

「そりやさうだともさ。」

「化けるないッ」と又太右衞門。

「まアだまッといでツてばねエ。だからね今ちやん、何ぼ一腹一生の間がらだッて、ちッとは優しくね、氣の休まるやう、つッかゝらないやうにね、それが御前やッぱり功德といふもンだよ。」

「そりや妾も思はなくは無いよ」と案外調子が大人しい。「だけれどもさ、あんまりだわ、がみがみ扱きおろして……」

「そッ、そりや爲方が無いぢやないか。正一遍の氣性なんだもの。心易だてが過ぎたにもしろ、あんまり御前の方から突慳貪に言ふのも見好い事ぢやないからね。」

更に調子をあらためた。

「もう濟んだ事を言ひ出して噪いだからッてつまらないから是からの相談するとしてねエ、今ちやん御前さアどうする了簡なの、それをまづ聞きたいね。」

太右衞門も耳引ッ立てる。

「どうするとは。」
「だからさ、此儘旦那の方へ楯を突いて、ふりかへッても見ない氣か、それとも謝るものならあやまッて是までどほりに爲らうとの氣か、その二つ一つをさ。」
「さア、そりや何うもねエ。」
太右衛門だまつて居られない。
「阿定、さツき言ひ脱したが、斯うなンだ。旦那はなア、不埒をした子は憎いが、何も知らねエ正直者の親は憎くねエから、よしんば阿今との手は切ッたにしろ、是までどほり己には荷をも送ッてくれると、何ともア何うだい。」
「それほど分る人なンだもの」と阿定思はず眼をうるませる。
「さばけた人ぢやねエかよッ。猶氣の毒でたまらねエや。だから己も散散あやまり閉口したンだ。此奴の前で言ふのも業はらだが、全くは斯う言ッたさ。にくゝッても親子の情合、見す見すわが子が憎まられ、自分一人が憎まられねエてへのを、親は好い氣でも居られねエと、さうぢやねエか。」
阿定今はさめざめと泣く。
「どうだい、今ちやん、親てへものは是ほどだよ。」
聲するどく楔子打ち込めば、阿今だまッてさしうつむく。
「分かッたかえ、分からないのかえ」とすこし焦燥こめば、
曖昧に「あいよ」といふ。
「けだものと口を利くな」と、太右衛門更に乘り出して
「で、旦那にやあやまッた。是から歸りやして、土性骨を叩き直し、御わびをするやうに致しやすから、どうか今度だけの所は勘辨して下せエやしと頼んだンだ。」
「大きにね、それから。」
「すると漸う承知してくれたらうぢやねエか。」
「勘辨するッてかえ。」
「だから承知したてへば。」

「あやまツたら歸すとね。」
「だからよウ。」言ツて阿今を尻目に掛けた。
「どうだい、今ちやん、すツかり聞いたらうね。」
だまツてうなづく。
「何と思ふね、まア御前。」旦那の大量を稱揚するよりはむしろ訓戒の方にのみ氣を奪られて、一途その方にのみ傾く。
猶阿今だまツて居る。
太右衛門ほとんど呼吸も吐けぬ。
「えツ、今ちやん、なぜ默ツてさ、何とか御前の腹の中を。ねツ、えツ、今ちやんや。」
まだ阿今だまり切る。
太右衛門くわツと急き込んだ。
「うぬツ、たんと默ツてやがれツ。」眼を怒らして睨みつけて、右の拳をにぎりかためた、いざと云はばの見脈。中で阿定ひとりで困る。
「よウ、どうしたのねエ、今ちやん。困ツちまふぢやないか、それぢや私まで。」
鳴かぬ烏鴉が只一聲「言へばすぐ怒らアね。」
「えツ。」
「言へばすぐに怒るもの。」
「ぢや歸るのが否だツてへのツ」と阿定は氣息逼迫した。
「ふつふつ爰いやだもの」と斷乎として言ひ放つ。
一同胸がひやりとした。
最前のいきほひ何所へやら、太右衛門此一言を聞くと均しく、たちまちに咽び入ツてしまツた。
言外の言、情外の情、その心中を察しやツては阿定とて身も世もあられない。
「伯母さん、あたしの我儘だとばかり思ツて御くれでないよ。そりや落籍されて世話になツたのは有りがたいさ、けれど否なものは否だからね、是ばツかりは。」
「いやな者になぜ引かされたんだいツ」と太右衛門泣き聲ふりしぼツた。

「罪な面な、金をつかはせてよ。いやな者なら否でとほして、金つかはせたり、泥塗ツたりするにや及ぶめエぢやねエか。」

せゝら笑ッて、「野暮な事言ッてるよ。」

「何で野暮だいッ。」

「野暮さ又。」

「又いがみあひだ、困るねエ」と阿定一人で呟いた。

「野暮だァね。だまされるのは御客の馬鹿、だますのは賣人のあたりまへ、否にしろ何にしろ、おだて込んで足でも洗ッて貰ふのが彼の商賣での腕てへもンだわ。未練ばかり出して居て何で氣の利いた事が出來るもンかね。はやく云や踏臺にされるのが馬鹿、そりや何うも仕方が無いわ。」

呆れて二人ただ默る。

「何もあたしがおとッさんに不孝する氣ぢや無いンだわ。どの人の世話になツたからツて、それはおとッさんの方で鬪ふ譯ぢや無い、あたしや唯自分の氣に入ツた人を相手にして、どうか斯うか阿父さんをも安樂にさせて行かうと思ふだけさ、何も咽喉口を乾させるてへのぢやなし。ね、をばさんさうぢやないか。」

「そりやそんなもンだけれど」と生返辭して太右衞門の方を見る。

太右衞門苦り、苦り切ッて、

「ああ、あんな商賣させたのが己の不覺だッ」と溜息太くほッと吐いて、「身で身を責めるよりほか仕方がねエ。」涙はらはらと膝の上。

一座しばらく沈とした。

「むかし氣質ばかり言ッたツて、おとッさん仕方が無いぢやないか。」

「何とでもぬかしやがれッ。」

「あッ、あれだものを、伯母さん。二言目には惡對だ。ンねッ、人ッ。」

「世の中にやな、これ、義理と冥利てへものが有るぞ。」

「有らァね。」

「知るめエ、手前。」
「知ッてるとも。」
「うそ吐けッ」と又睨めつける。
「それも所と場あひだわ。凡夫さかんに神祟り無しとさへ言ふぢやないか。」
「あべこべに異見しやがらア。」
「異見なもンかね、ただ咄しさ。まアね、是までの事は是までとして、一圖に野暮ばかり言はないでね。」
「どうせ野暮だいッ。」
「あれさ、まア。御前をわるいやうには爲ないから、好きな酒ぐらゐ飮ませてもあげるから。」
「否でいッ、そんな酒ッ。」
阿今美事に跳ね飛ばされて大きにしよげた。
「いやなら廢すが可い」と口の中で呟いたつもりが、聞こえた。
「いやなら廢せと吐かしたな。」
「可いやねまア」と阿定が中を入れかかると、かぶりを掉ッて「可かねエ。見えた、肚ン中まですッかり見えた。腐ッた酒は、飯も、何も此の口へ入れたくねエぞよ。」ぬッと口を突き出した。
「馬鹿だ、嗚呼噫親は馬鹿だ、馬鹿だ、馬鹿だ、大馬鹿だッ。」全身をふるはせて、
「さうでもねエ、冥利と云ふ事が有る、利益を思へばこそ、末の末までを思へばこそ、色色にも言ふ、ちッそれがみんな無駄だッ。あッ、子てへものは持ちたくねエ。」
咽喉一杯の力を籠めて「子てへものはにッくいもンだッ。」
聲しぼつて泣き出す。阿定も何と取り做しの法が付かない。もらひ泣きに亦ただ泣く。
「やいッ阿今、手前に物を言ふのも是ッきりだぞ、もう親でもねエ子でねエぞ。」
「何もそんなに怒ら……」
「ふざけるないッ。これ、よウく言ッておくぞ、可いか父子の生きわかれにッ」と言ッたただけで胸迫ッた。

「勝手に世をわたれ。一人の親をふりけへるな。手前の冥利を思ツた是までの意見だ、もうもう何も言はねエぞ。さツ、出て行、すぐ出て行。」

「そりやまアあんまり」と阿定が。「さう怒ツたかツて………」

半ば言はせず「うンにや爲らねエ。旦那に對して乃公が濟まねエ。」

「そりやさうだけれどもさ。」

「いツけねエてツば」と語氣正に烈火をあざむく。「我慢のできるところまでは我慢もするわ。堪忍袋の緒が切れた。誰が何てツたツてもう聞かねエ。」

涙さながら浴びるが如く、

「阿定、己ばかり頑固だと思ふなよ。誰だツて己が餓鬼は可愛いや。だけれども世間の義理も義理だ。あツきらめるばツかりだ。旦那と別かれた時の口上に對し、どうして御前人間の皮アかぶツて此儘で居られるけエ。あきらめた、すツぱりあきらめた、やい阿今、さツさと出て行かねエかいツ。」

阿定猶可いわとは言ツて居られない。

「御前の身ンなりやそれも至當だけれどもね、これ代用の無い父子ぢやないか。何もそんなに一概に………」

「いツけねエよツ」と叱りつけた。「わからねエぢやねエか御前まで。」

「だけれども、まアさ。」

「いツけねエよツ」と言ひ放つ。

阿定手も付けられなくなツた。

「やい阿今、手前の一人の親は世の中の義理のために、一人の子をば捨てるツぞ。それだけをよツく覺えて置け。」

今更阿今も當惑したが、意地であやまる事も爲らない。阿定が一人で氣を揉んでも、肝心の本人からあやまり口上が出ないので、偖如何とも爲しかねた。

「どうだね、阿今ちやん。」

「どうも仕方が無いのねエ」と素氣なく云ふ。

「かまふな阿定畜生に」と太右衞門一人で哮り立つ。

「困ッた事に爲ッちまッたねエ、今が今がたまで御酒飮んであんなに譏嫌の好かッたものをさァ」と愚痴ッぽく一人言のやうに云ッて、やがて又きッと思案した。

「そンなら今ちやん、云ふなり次第出て行くつもりなのかえ。」

「どうもおとッさんが怒り切ッてるンだもの。」

「何處へ行くつもりなの。」

「馬の足のとこへ行きやがれッ」と太右衞門が。

之を阿定は耳にも入らぬ躰で、

「ねエ、どこへ。」

「別に何處ッて心あたりも有りやしないわ。こんな事に爲らうとも思はないンだものを」と幾分しをしをとした樣子。

「兎も角も、そんなら自宅へ御出でないか。おとッさんだッて今かう火のやうに爲ッてる所だから――御前もまたとッくり落ち付いて考へて見るさ、ねエ、氣を拔きや又御たがひに勘辨も付いて來るものだからねエ。さう御爲よ。」

「ありがたう」と阿今うなづいた。

阿定一人が骨の折れた役で、中へ立ッて双方の間を取る、兎も角もと云ふので阿今をあづかッて、一先わが家へ立ち戻ッた。

一人殘ッた太右衞門の胸のむしやくしや。

第四

菊本と街燈出した小意氣な造作、誰の目にも待合と見える一かまへの中二階に、女中を相手に火鉢に向かッて居る一人の美人、卽ち例の阿今であッた。

女中といふのは卅四五、海山の功を積んだらしい相好で、目つきすこぶる凄まじい。

逐一に阿今は今日の始末を咄したらしく、

「だッてあんまり忌々しくなッちまッたンだもの。あんまり頑固にも程てへものが有りまさアねエ。」

「で逐ン出すと仰やるの。」

「だから逐ン出たんだわ。いくら云ッたッて分からないンだもの。好い畜生さ、伯母さんとこへ引き取られてね。」

「ほゝッ隨分御器量が。」

「ほんとにねエ。胸がむかついて來て仕方が無いので、御湯へ行くッて、こッちへ飛んで來ましたの。」

「入らしッて何うなさるの」と女中すこしく笑みて含めば、

睨む眞似して、「姉さんも根性がわるいのねッ。」

「根性の好い人はちがひますわね。」

「はばかりさま、市助と申します不調法ものでございまして、へい。」

「御馳走さま。手ばなしで澤山にどうも有りがたうございます。あのウ」わざと言葉に力を入れて、「旦那さまは大層御遲うございますことねエ。」

しかつめらしく改まッた。「どうもそのねエ、つひ門が多いンでございましてねエ。」

「おやおやまア。」

「あのとほり好男子過ぎますのでね。」

「毆ちますよ。」

他愛無くふざけて居る所へ、襖の外で男の聲、「姉さん此方？」言ふまでもなく市助で。

「あッ御はいンなさい、親方、ぢやアなかッた旦那さま。ねえ旦那、御おごんなさいましよ、何、何ッて眞面目で聞くから可愛らしい事ねエ。」

「だッてちッとも分かりやしませんや」と市助烟に捲かれて居る。

「わからない筈ですとも。」

「なぜ。」

「奧さまからして夢中ですもの」と言ッて女中くすくすッと笑ひ轉けた。

市助いよいよ分からない。分からないで、只にやりにやり、まじりまじり。

それがをかしいとて女中猶笑ふ。交際といふ格で、さすがの阿今も又笑ふ。

「何かでも付いてるンですか、私の顏に」といよいよ本氣に眞面目になられて、「付いてますともさ」と此女中中中食へない。

「何が、えッ、何が。もし何がです、奥さん」といよいよ又生眞面目に爲る。

「何でもないンですよ。阿良久さん(女中の名)がね、あんまり親方に惚れてるもンでね、ややともすると、紅の痕でも付いてやしないかと、氣の所爲でさわぐのよ。」

「おやどうも恐れ入りましたねエ。」

「へエ何が。」

「御自分の御こころもちを仰やッて下すッてね」と口早に言ひなぐッて、「居れば居るほど聞かされて、どれ參りましよ。」と言ひ捨てて出て行ッた。

杯を市助に差して阿今ほッと大息一つ。

「ねエ親方、暴露たのよとうとう、○に」と親指を出す。

「えッ、暴露、いつ、まアそりや。」

あわて込めば、落ち着いて、「どうせいつか一度は知れるに決まッてるンだわ。その氣だからびッくりしないンだけれど、それから逐ン出て、家へ歸ると、むかし氣質の爺樣が大おこりなの。」

是から委細の咄をした。

「ねエ、あたしだッて最うあやまッてあんな旦つくン處へ歸るは不好だアね。何人ッ、男の無い世界ぢやなし、どうにだッてなりまさね。だからその腹癒せに飛び出して遣つて來たの。」

市助妙に苦り切る。どうしたか此處に至ッても有無一言の返辭も無い。

「ねエ親方、さうぢやありませんか知ら」と更に返辭を促がすと、

目を瞑ッたまま下を向いて、「ああ私がわるうございました。」

阿今（おいま）すこしく意外に呆れた。
「妙ね、まア。何ですッて。」
「いえ私がわるいので。どうも三方四方の人さまへ御迷惑を掛けましたよ。」
沈む調子にますます呆れた。
「どうもどうも妙な事ね」としばらく男の顔を見つめて、「親方、そりや本氣で云ふの。」
「本氣ですともさ」と屹と言ふ。
「まアおどろいた」と全く驚いた。
「親方がわるいとは夫や變ぢやありませんかねエ。何も親方の方から賣り付けたてへ譯でも無し、全くあたしの方から道樂な眞似をはじめたのを………」
言葉なかばで首を掉ッて「いえ、それにしましてもね」と語氣思ひの外に鋭い。
「それにしろ何にしろ、嗚呼今の御はなしでつくづく胸に浸みましたよ。」
「まア何がッ。」
「親御さんの御氣の毒さ。」
「おやおや、まア」と又呆れた。
市助眼をさへ屢瞬（しばたゝ）く。
「あたくしにも御母（おふくろ）が一人有りますので、今の御はなしを伺ふと、人事とは思はれませんでねエ。そりや貴女は男まさりの御氣象ですから、親の言ふ事なンぞと一息に遣ッつけて御しまひに爲りましやうが、さッ其所が思案の爲どころです。」
「どうも驚いた事ねエ、親方に異見されに來たやうだ。」
「いえ、ま、御氣にさはるか知れませんが、よく御聞き下さいよ。正直一遍の親御さんの御心に爲ッて御覽なさい、そりや御立腹なさるも御無理ぢやございませんからね。こんな家業こそ爲て居ますが、一人の親の事は私のやうなものでも忘れませんでね、そりや馬鹿正直からでもありましやうけれども、まア一人の親には苦勞掛けたくないと始終その事だけは心に注めて居りますので

ね、そんならなぜ貴女がたと巫山戯た眞似なンぞ爲たのかとの御言葉でもありましやうけれど、それが心の迷ひでした。」重ねて又歎息した。

「どうも大變な事を言ひ出したのねェ親方、あたしだツて親に苦勞を掛けたいと思やしないわ。何も親に食へなくなるやうに爲やうてへンぢやなしさ。」

「いいえ、食へる食へないは又別です。よしんば食べて行かれるにしろ、どんな贅澤が出來たにしろ、物は何でも趣意一つですからね。その趣意が面白くなかッた日にや咽喉に刺が立ちますて。」

阿今ただ默し切る。

「一時の心の迷ひからつひ私も今までどうか手固いで通して居たのが、貴女さまと飛ンでもない事に爲りましたが、その先非はすッかり今後悔いたしました。どうして貴女、親御さん、そんな御年よりの御心もちを御察し申して、好い氣ンなッて居られましやう。ああわるうございました」と眼を拭ふ。

「それぢや親方、あたしに何うしろてへの」と阿今もすこし涙含む。

市助は無言で居る。

「親にも旦那にも捨てられるやうに爲ッた妾に今更どうしろてへの。見下げはてた奴だから最う鼻も引ッかけないてへの。」

「何の、そんな事てすか。ですから親御さんの御心も御察し申してと云ふンです。」

「だからさ、どうしろてへの。」

「言ッたらそのとほり爲さいますか」と言ふ聲は無量の重量を帶びて居る。

「そのとほりに？」とさすが答辭に躊躇した。

「さよでございます」と睨むばかりに見つめれば、ややしばらく考へて「聞かないうちは分からないわ。」

「それぢや仕方有りません。」

「それぢや又困ッちまふぢやないか、可いわ、言ッて頂戴よッ。」

「ですから、そのとほり爲さいますか。」
又しばらく考へたが、聞かぬ中は氣に爲るので、
「聞く、そのとほりにきッと爲る。」
「そりやきッとですか、まちがひなく。」
「きッとッ」と力を入れた。
「貴女さまの事ですから御言葉に間ちがひもありますまい。からして、それぢや申します。」
一段とあらたまッた。聞かぬ内からびくりとする。
「聞いて下さいませんと困りますよ」と又念押した。
「くッどいわね。」
「ぢや言ひます。さッ、どうか、是までの事は水に流して、親御さんの御心の安まるやう思ひなほして下さいまし。」
凛然と言ひ放たれて、さすがの阿今もぎよッとした。無言でうつむく事やや少焉、見る間涙の雨となる。市助〆め木にかゝる思ひ。やがてぢろりと見上げる阿今の眼にどれほどの怨恨の色が籠もるか、正面からは見て居られぬ。
「ようございますよ、分かりましたよ」と否にあらたまッて只一言。
市助もただ默す。ぞッとするほど沈閑として了ッた。
「そんな御返事を聞かうと云ッて、御念押したのぢやありませんがねエ。」怨みがましく言ひ出した。
「ですから分かりましたッてばッ。」癇氣非常といふ聲がら、あらあらしく兩眼拭ッて、手巾の端を前齒でくはへて、きゆッきゆッと手で引ッぱッて居る。
「ですから私念押したン……」
「分かりましたッてば」と跳ねつけた。
うつむいた儘、「よッく分かりましたとも。どうせ旦那に捨てられるやうな醉興な阿房ですもの、これから關係ッてると、親方の御迷惑になりますからねエ。わかりましたよ。」
「あれッ、それぢや困るンです。どうもさう捻くッちや……」

「どうせ捻鐵なンですもの。」

「そりやしかし貴女にも似合ひませんね、念押した時に何とおッしやいましたえッ。今ンなッて否味で怨みがましく言ふとは些どうもね。」

「馬鹿ですからね。」

「あれさ、どうもね。困りますね、それぢや本當に、何もあたしが惡意で云ッたンでもなし、もともと貴女を馬鹿にするのでも何でも無く、まッたく一人の親御さんに飛んでもない御苦勞掛けるのが御いたはしくッて御いたはしくッて。それには貴女だッて行く先の長い方で入らッしやる、眞面目で旦那ンとこに御出でなれば、何不自由も無くて行かれるのでしよ。どういふ思しめしか知りませんが、あたしどものやうな、こんな吹けば飛ぶよな者の所へ入らしッたッて、物の半年も御辛抱のできるもンぢやありませんからね。自分の耻を言ふやうですが、本當に外部ばかり好い、死にくるしみですからね。」

「手鍋提げてもッてへ唄が有りましやう」と下を向いたままで言ふ。

市助しばらくぴたりと默る。どうしたのかと見上げると、涙一杯湛めて居た。

「あッあ、ありがたうございます、本當にその御一言、どうしたッて忘れませッ、さッ、もし、あなた、こんな奴をそれほどに思ッてくださいますか、眞實に。」力を籠めれば、ぞッとした。

「だッから腹も立つんだわッ。」言ふか了らす、びりびりッと手巾引ッ裂いた。

市助水をうたれる感情、涙の儘で見つめて居る――止せとも云へず。

双方氣息も吐けぬ刹那。洋燈澄まして、ぢイぢイと油を吸ひ揚げる音。

「人の氣も知らないで、ほんとうに男子ッてへものは、あッあ、こッちが痴いから、ええもッ、ほんとに何ッしたら」と又裂きあまりを引ッ裂いた。

裂きあまりゆゑ前より譯無く裂けて、しかもぴゆうッ

と好い音がした。ただならば噴き出すところ、どうして今はそれ所か。

「ですが眞實それほどに」問ふでも無く、問はぬでもなく、「まッたく嬉し、ありがたうございます。さッ、それほどに思ッて下さるなら——いやさ、困らせては下さいますまい、いえ、いぢめては下さいますまい。ねッ。」顔のぞき込めばしくしく泣く。

此處が丈夫(をとこ)の我慢の爲どこと辛くも心を鬼にした。

「でしよ、えッ。さうまでに思ッてくださる、それだけの事をどうぞもし、御無理でもありましよが、どうぞ私に爲てくださいな。ねッ、これだけは何うぞ是非。」

妙な方からゑぐり込まれて、阿今(おいま)返事に當惑した。今さら無茶に否とも云へぬ。と云ッて、おいそれと云ふのも亦。

「どうぞこんな奴にでも切めていくらか好い心もちを爲せて下さい、ね。是まで一方ならない御贔負にあづかッて、今さら是ぎりになる事かと思ふと、身を斫られるやうですけれども、さッ、其處、其處なんで。世、世の中の義理ですッ」と聲までうるんで來た。

「親御さんにもよろこばせ、また旦那にも安心させ、その中にもあなたさまの一生が間ちがひ無くなると云ふ、其の方の樂しみと、今の今思ひ切らずにして了ふたのしみと、双方を目方に掛けて、さアどうでしよ。どうぞ、もし、御ねがひ、御たのみ、御慈悲、御なさけ、あたしにその好い思ひをどうぞ爲せてやッてくださいまし、えッ。いけませんか、えッ、もし、どうぞ。そのかはり是までの」意氣にはかに凄まじく、「御贔負は忘れません。又相變らず公然と御出入だけは爲せていただくやう、さッ、このとほりでございます。」涙を流れるままにして一坐すべッて平伏した。

阿今(おいま)骨身も粉韲(ふんさい)する。ありありと目前(めのまへ)に親父までが出て來たやうで、脈までがおどッての胴ぶるひ。有無は無くてせぐり上げる、見て市助五躰も竦む。

又あらためて差し寄ッた。

「ね、もし、どうぞ、ねッあなた。決してわるい事は申しません。また決して水くさい了簡かたで云ふのでも決して決して、それだけはどうぞわるく思しめさずねッ。御はなし聞いただけでも、一轍だけに御氣の小さい親御さん、もしか又さうでもない、あなたさまの事を苦に御病みで、それこそ旦那に對して濟まないとか何とかいふので、もしもの事でも有ッた日にや、でないにしろ、御わずらひにでも爲ッた日にや、そりや貴女寢ざめが好くはありませんよ。」

胸に浸みたか、阿今(おいま)涙の量(かさ)が増す。

「あたしだッて、皆さまへ御目にかかッて、男らしくきりりとあやまります。そりやもう却つて貴女さまの御迷惑になりませんやう、旦那ンとこへ御かへりに爲ッても肩身の狹くないやう……」

阿今(おいま)ひイッと泣き伏した。

「さッ、どうぞ、御ねがひでございます。あたしも御ためを思ふ、どうぞ貴女さまもあたしの……もし、どうぞ、ねッ貴女。」

至情は鐵を綿に變へた。今さら聞かぬと云ふのも耻かしく、美事に阿今(おいま)決意した。

「親方濟みませんでしたッ」と今やその涙實意の、實意の精である。

「あッあ、分かりましたよ、ほんとに。ちッ、夢が覺めッ、わるく思ふもンですか、もッ、言ふとほりに爲ますよッ。」

市助は猶たまらない。肚では攫み付きたいほど。

「ひよッ、ありがたうござッ、ちえッ、濟み、濟みませんわよウ」と是も浴びるばかりの涙。

「不斷負けぎらひの勝ち氣でばかり押ッとほして居たもンで、つひつひ怖い者なしになッちまッたンですよ。もうもう夢が覺めました。親方の庇蔭(おかげ)です。わすれませんよ。」

悟る時にはさすが斷乎としたものだと市助つらつら感じ入つて、且は惜しいやうな氣もする。

さうでないとまた吾とわが心を制して、
「こんな奴の言ふことをよく聞いてくださいました。あたしも夫は忘れません。それぢや御急き立て申しますやうでございますがね、もう夜も大方」時計を出して一寸と眺めて、「これもう九時です。なまじッか又今夜此所へ泊りなぞ爲ますと、かへッて利益になりませんから、で又さほど更けたてへのでもなし、此儘御かへりに爲りました方がね。」
阿今ただうなづいた。
「あたしも御一所に御供しますから。」
「親方、それだけは何うもねエ。何あたし一人でようございますよ、大丈夫。」
「御迷惑になりますか。」
「いいえ、さうぢやありませんけれども、かへつて夫ぢや親方に御迷惑ですもの。あたしの勝手でこんな事になッたので、何も親方が口をつぼめて、いやな思ひをしてあやまるにも當たりやしませんね。それぢやあんまり御氣の毒ですもの。どうか、ですからそれだけはね。」
「何そりや管やしませんや。又一つには此所であたしが御一所にあやまりに參れば、かへッて皆さんも御安心の爲るてッてすし、二つには夫からまた公然と御出入りも叶ふやうになりまさア。ですもの結局好いくらゐ、何のかまふ事が有るもンですか、その事なら御慮なさいますな。」
何さまそれもさうであると阿今強ひて辭みも爲りかねた。さらばとて市助の說にしたがひ、二人もそろッて行くのも變であるとの所から阿今は兎に角伯母の家へ戻り市助だけ太右衛門方へ行く事にした。
手を鳴らして女中を呼び、勘定を言ひつけると、意外ですこぶる勿怪の顏。しかも二人の顏色までがいつもとは違ふので、しばらくはぐづぐづする。
やうやくに急き立てて、然るべく拂ひをし、人力車も入らぬとことわッて、二人つれだッて門を出たのは彼是九時半にもなッた。

いつもとは違ふ妙な同件、妙な心もち、かうして歩くのも是ぎりかと阿今ただ一人の胸。

第五

太右衛門はやく門を鎖めたが、どうして何うして寝られない。ひとり火鉢の前に斜にかまへて、くよくよと物おもひして居る門の戸をとんとんと叩くものが有つた、云ふまでもなく市助で。

「烟草なら明日にしておくンなせエ」とあらあらしく遣りつける。

「いいえ烟草ぢやありません。ぜひ御目にかかりたいのでして。」

「どなたです」と猶動かぬ。

「御目にかかると分かります。夜も一寸更けましたからあンまり大聲では。どうか御開けなすつて下さいませ。」

「だから誰だツてへンです。このごろは物騒だ。」

「ちよツ仕様が無エなツ」と戸外では市助舌うちした。

「それぢや仕方有りません申します、阿今さんの事であがりましたので。」

阿今と聞いてぎよツとした。

すぐ吾を忘れて潜り戸の前、棧外す間ももどかしく、がらり開けると何よりさきに芬と來る香水の芳香、これは又、はてな。

「込み入ツてますから、失禮、御遠慮なく上がります」と會釋しながら座敷きに通ツて、「さて何やらいろいろ込み入りまして、申し上げにくうございますが、一刻もはやくと存じまして夜中をもかまはず伺ひました。ええ、あなたさまが阿今さんの親御さまでいらツしやいますか。」

素人にしてはをかしくにやけた男と太右衛門穴の明くほど眺めて居た。で、幾分か素氣無い。

「さうでごぜエす。」

「あツさやうでございますか。さて改まツて申し上げますのも誠に面目次第もございませんが、實はあのわた

くしは市助と申すものでムいまして。」
すこしあわてて、「何、市助ツ。むウ、わかツた、道理で。己ッ」と唇嚙み占めて、「ぢや御前さん、あの馬の——ンにやあの役者ッ？」
「さやうでムいます。」
聞くか了らず睨めつけた。
「ちツ、よツくもまア。いけづうづうしい、よく野面で。これ、御前のためにはな、阿今はな。」
「さツ、それですから上がりましたので。まアよく御聞きくださいまし。」
「ンでツ、聞くも聞かねエも無エや。手前の御かげでこの親がなツ。」
「いえ、そりや御もツともでムいます。ですから御わびに、このとほり假面をかぶりまして。」
「うそ付けツ、素顔ぢや無エかい。」
「さう言葉尻を御取りぢや當惑します。まア段段に申し上げますからとツくりとよく落ち着いて。」
「眞似しやがるない。どン畜生でもこン畜生でも人の面せへ見りや落ち着けてやがらア。ンでいツ、落ち着いてらいツ。」
「なら、どうかとツくり御聞きねがひます、ね、もし、どうか、あなた。それでムいませんと、ちツとも御はなしが片付きませんので、ことさら又阿今さんの御出での處について申し上げなければなりませんので。」
また太右衛門ぎよツとした。
「阿今がツ、あの伯母の宅には。」
「さア、そこを默ツて御出なさいましたので」と市助辯才すこぶる旨い。
今は惡口のみ言ツて居られず「出て、ど、どこへね。そりや又それで何時頃でツ。」言ひながら目は涙ぐむ。
「ですから段段に申します。」
「段段も階子段も、言ひねエ、ぢれツてエ早く。えい何處へ、何時。」
「そりや御心配御もツともでムいます。まづ斯樣でム

います。」

「ウムさうかね、なるほど。」

「御わかりですか。」

「いいえ。」

「困りますな、どうか御氣を御しづめなすツて。今さら申し上げにくうムいますが、つひ不圖した事から御むすめ御さまと御承知のやうな譯になりまして、この度のやうな御心配を御かけ申しました。何もかにもみンな私のわるいのでムいまして、決して御むすめ御さまの所爲ぢやムいません。」

親は正直、いくらか癇もしづまツて「また御前だツて男一匹のくせに何も主ある女をそのかすてへ法も無ェぢや無ェかい。なんぼ阿今(おいま)の方からやいやい言ツて行ツたからツて、おいそれと好い氣ンなツて、ほんとによ剛氣な好男子(いろをとこ)ぶツて、主あるものを浮氣にするにも及ぶめェぢやねェか。」

「さう仰やられても致し方はムいません。つひそれが若氣のいたりと申すごとく、大概人さまに御聞きくださいましても御わかりになりますが、私も商賣がらにも似合はず、手堅いとか言はれて押ツとほして居りましたので。」

「うまく言ツてらァ」と冷笑する。

「いえ、まツたく然やうなので。」

「で、なンで、あんな……」

「ですから迷ひでムいました。と申して今の旦那さまン所へ入らツしやツてから後にあんな關係になりましたのでもムいません。」

「すると藝者してた時からかい。」

「でムいます」との一言は大きに太右衞門(たゑもん)をしてしらげさせた。

「今さら惚話(のろけ)じみて御はなしにくうもムいますが、まツたく其頃の事でムいます。あたくしの方からつまらない、馬鹿な事を言ひかけましたので。」

であらうと思ツたと言はぬばかりの顏つきで、太右衞(たゑ)

門だまッて苦り切る。
「つひ深くなりまして、とうとういつか知らず知らず。堅氣に御なりの時、もう今度こそは思ひ切らうと幾度か心で心に異見しましたが、やッぱりそれであんな仕儀でございます。何も斯ももう御はなし申してしまいます。罪ほろぼしの一つとして。今晩かやうでムいます、御むすめ御さまがいきなり或る處からあたくしを御呼び出しでムいます。」
「ふウム、あいつが、へェ何處からね。」
「ま、御聞きくださいまし、御つかひでしたけれど、またいつもの通りだと思ひましたもンで、そのつもりで御目にかかりに參りました。」
「だから、そりや何處だね。」
「待ち合ひでムいます、菊本といふ。」
「へェ待ち合ひへも役者呼べるのかね、あの藝者ばかりでなく」と物々しさうに尋ねれば、
にこり笑ッて、「さうでムいますとも。そこで御目にかかりに上がりましたところ、あたくしもびッくりいたしました、御むすめ御さま、あたりまへで無い御顏色なンでムいます。」
「ほム、蒼く、えッ、紅く？」
「何しろ浮かない御顏色でムいます。それから何うした譯かと段段に伺ひましたところ、何しろ是々の譯で旦那さまはじめ一人の親御さんにも怒られ、どッちへ行ッても立て逐ひに逐ひまくられ、仕方無く伯母さんとか云ふ方の處へ、ね、さよでムいましよ。」
やや輕くうなづいて、「立て逐ひにするッて爲ねエッて、どうにもかうにも手が付けられねエンだもの。己が無理したンぢやありやしねエ、伯母てへのに聞いて見てもわからア。」
調子大きにやはらかくなる。〆めたと肚では安心して、
「いや、さよでムいましたかも知れません。」
「かもところか。」
「へエ。」

「ひとゝほりぢやねエンだ。」

この罪の無い挨拶はいとゞ市助の膽にもこたへた。

「ああ御もッともでムいます」何がもッともだか、市助自分にも分からない。

「それで、伯母さんのところへ一旦は御出でに爲りましたが、考へて見れば見るほど面目なくッてならず、のめのめと其伯母さんのところに御出でになるのもきまりがわるく、どうしても居たたまれず。」

「そりやすこし嘘らしいね。どうして彼奴そんな面目ねエどころか、面目のめの字だッて。」

「いえ、さよでムいません。次第に落ち着いて考へて見ると、一旦の意地で親御さんに突ッかかッたのが何うも勿躰無い事だと心で心が承知しませんでね。」

ことさら是だけでぷつりと切る。

「ほんとに左樣いふ氣が出たのか知ら。全く左樣ならまだまだ人間なンだけれど。」ほくほくとして涙ぐむ。

市助見るにもいぢらしい。これも齊しく涙を浮かめた、その涙の一滴で、無言ながら、何となく太右衛門の胸にも浸みた。最初とは打ッて變はッた心もち。

「それで、どうにも斯うにも居たたまれず、湯へ行くと言ッて胡麻化して、一散にあたくしに逢ひに御出でなすッたので。」

「何も御前に逢はねエだッて。」

「さ、それが大變なのでムいます。」

大變の一言はどれほど肚を抉ッたか、見る見る眼をさへ圓くして、

「え、どう何が大變で。」

「生命といふンでムいますもの。」

「生命ッ、生命がどうてへンで。」

「皆さんに面目無く、とうとうそれから思ひつめて。」

「ほム」と火鉢にしがみ付いた。

「とッてももう生きて居られないと。」

「ほム。」

「死ぬと思ひつめなすッて。」

「ひえッ」と太右衛門反りかへッた。
「ちやッ、ちやッ、ちやッ、そんな飛んでもッ、えッ、馬鹿が何も死、死なすとものッ、ちッ……ちやッたか、死ン。」眼するどく睨めつけた。
「いえ。」
「いえも無エもンだ。」
「いいえ、ま、しづかに。で、あたしへ暇ごひだとて逢ひに入らしッたのでして。」
「いえ、さうぢやム……」
「來てるぢやねエか、だッてもよ。」
「いえ、さうぢや、何しろまアしづかに。」
「死んだのけッ、生きたのけッ。」
「ですからそれが……」
「死んだのかよッ。」
「どうもさう御急きでは。死ぬだけはまづ。そりや御安心なさいまし。」
「死なねエとえッ。」
「へい、大丈夫。」
はりつめた氣ががッくり拔けた。ほッと一息。あはれや又念押す。
「死な、ねエン、だな。」
「ですとも、それは。」
「ンでいッ、人ッ、樣ア見ろッ。」同時にぼろぼろッと泣き出した。
「そこであたくしも實はびッくりいたしましたので、そりや御心得ちがひ、飛んでもない御了簡でございますと一生懸命止めました。」
「御め、御前がかい」とけろりとなる。
「さよで。」
「止めたとえッ。」
「さよで。」
「ふウム」といよいよけろりとなる。
「あたくしにも一人の母がムいまして、その母の身と比べて見まして、さぞまア貴公さまが御心配なさる事と、

實に人事とは思はれませんで」とさすが情迫ッて眼をぬぐへば、

いよいよ呆れたと云ふ躰で、ぽかんとして眼を睜る。

「これまでの御心配の上塗りして、一際の御なげきを御かけになるのは決して褒めたこッちやムいませんと散散御とめ申しまして。」

「ほエッ、御前がかえッ。」

「へい、何も存じませんけれど。」

「そッ、それで何かな、思ひとまッたのを思ひつめたのか。」

「へ、何でムいますッて。」

「ちよッ、思ひとまッたのを思ひつめッ……ぢや居ェ、思ひつめたのを思ひとまつたのかてへンだい、分からねエッ」と一人であわてる。

「まづ、さよで。何しろ元はと申せばあたくしがわるいので、死んで可いのならあたくしがそれこそ死んで宜しいくらゐでムいます。が、まア短氣は損氣でムいますからどうかそんな不了簡を御出しなさらず、皆さまが御安心なさいますやう、どうかあたくしの事は今日かぎりぷッつりと御あきらめ下さいまして、どうか……」

「へい、あたくしが。」

「待、待ちねエ、そりや御前が言ッたンだな。」

「はッて、これはな？」と頸を曲げた。

「で、あたくしの歹かッたところは貴女さまの御迷惑に爲りませんやうに、男らしくあたくしも謝りにまゐりますからどうぞつまらない御心は御出しなさらず、旦那さまへも亦親御さまへもよろしく御わびなさいまして、舊の鞘にをさまるやう、どうか御思ひなほしていただきたいものでムいますと、まアそんな風に御はなしいたしました。まッたく噓言でも何でもムいません、はじめは一圖に死ぬとばかり仰やッて御出でしたのが、段段心を落ち着けて、あたくしのやうな奴の言ふ事でもとッくりと篤く御聞きくださいましたところで、とうとうやうやく、もし御安心なさいまし、御納得になりまして、あ

たくしの言ふとほり舊のとほりにならうとの思しめしになりました。」
　太右衛門夢路に浮く感覺、今が今まで憎みぬいた市助が、はて扨神か佛樣か。ぢッと見つめて居る内に又も涙は露一杯、口を聞くにも呼吸さへ切れる。
「ふウむ、それぢや心からあの阿今が舊の鞘へもどるてへ氣に、あの、その、御前……」もはや疎末には言へない。「御前さんに異見されたンでッ。」
「さよ。」
「あの旦那にもあやまるッて。」
「さよ。」
「あの己にも苦勞させねエて。」
「さよ。」
「あの短氣も出さねエで。」一分づつ立てつづけ。
「ちえッ、うム、市、市助さんだッけ、ちえッ御前さんはなア。」二三度つづけて頭を低げて、「ども何とも、いやッ、わけエのに何うもはや。あやまるッ、わたしが惡かッた、ええ惡かッた、罪だッたッ。」しばらく其儘泣き入ッた。
「わるかッたよ、勘忍しねエ。實は、そのまッたくの所、今が今まで御前さんを仇敵だと思ひ込んで、どやしつけても呉れようかと、あッあ、歹、歹かッたッ。どうして何うして阿今のためにも生命の親、それどころか私のためにも生命の親、御前さんが異見してくれたばッかりで、も、も、何と言ッたら好いかまア。そりよ、片時でも一時間でも、怨んだなア、ちえッ罪だ。よ、よ、勘忍して御くんなせッ。」
　市助かへッて氣の毒に爲るくらゐ。その心根の不愍さには我慢する氣でもはふり落ちる涙を、しばしば抑しぬぐッて、
「いえ、それぢや却ッて痛み入りますよ。あたくしのダいところを、言はば御わびするだけで。わるい事はあやまるのが人間の道とか申して。」
「だから私だッてあやまるンで。ええも男だ、御前さ

んは。雨降ッて地かたまる、御前さんが有ッたばッかりで、うひひッ、私も肩身が廣くッ、わす、わすれやせんよ、御前さんやッ。で、阿魔の奴、どこに居ますかえ今。」

「その事つひ言ひ落として。伯母さんの御宅へ一旦御かへし申しました。」

「はッあ、やれやれそれは何うもまァ。ぢや伯母ン所に、ええ安心しやした。」

感に勘へぬといふ躰で、

「一人の親が有ンなさるッてね、よく夫で思ひやりの、ああ出、出來ねェ藝でがす。いくつでね、年はねエ。」

「あたくしですか」と微笑する。「いけません年ばかり取りまして。もう六でございます。」

「六ッ、へェ二十六？　十六ッて事も無からうから。」

「へい、二十六。」

「ひえエ、わッけエなア、ほんとだ、なるほど化け物だッ」と無邪氣に腹で思ふ儘を。「ああ二十六、二十六、それにしろ驚いた、感心なもんだなア。」ほれぼれとして眺め入る。

「御わかりになりまして何しろあたくしも本望でムいます。で、つひでに御むすめ御さまを御つれ申したいのでムいますが、段段に夜も更けましたし、まして伯母さんの所に御出でなンでムいますから御安心でムいましやう。いづれ又御つれ申す事は明朝の事といたした方がよろしからうと思ひますが……」

年よりは氣がみじかく、「何そりや今夜でも。ただ御前さんの御都合が。」

「何あたくしは何うせ。」

「ぢやア、どうか今夜ねエ」と一圖にそれと思ひ込む。

心を察して快く諾した。起つ、送る、太右衛門（たゑもん）ただまごまご。送り出しての獨言。

「良いものと野合（くつつ）きやがッたッ。」

第六

乗りかかつた船、市助いつそ序の事とすぐ太右衛門（たゑもん）方

から阿今の伯母の家へ飛ばせ、まだ寝ずに伯母と咄して居た阿今に逢ツて、太右衛門方の一伍一什を告げ知らせた。

傍で逐一に聞いてゐる阿定も阿今が一旦死を決したとのおもむきは今はじめて市助から聞いたので、また一入におどろいて、それにしても叉踏みとまツて、よくまア若いのに、しかも商賣がらに似合ず、殊勝な意見をしてくれたものだと心からして感心する。其所は肉身の情あひで、一ツには阿今が命びろひした事と、二つには太右衛門が嘸かしよろこぶであらうとの事と、それやこれやを考へ合はせて、かたじけなくて堪らない。

阿定市助に散散禮を述べたが、言ふ事は殆ど太右衛門のと變らない。

「御わかいにも似合はず、よくまア共咀嚼を御つけなすツてねエ、御かげさまであたしも安心、人幾人かの命びろひができましたよ。さぞまア此女の親父もさぞ。」

「まツたく御堅い御方でいらツしやいますからね、實に御いたはしうムいました。」

「そりや本當にむかし氣質の頑固一方なンでしてね、なるほど此阿今もわるくはムいますけれども、叉一方もあンまりがみがみ言ひ過ぎますもンでね、小さくツて濟む咄しがおツそろしく大きくもなりますので。だが、あたしどもはじめ一同あなたの御恩は忘れませんよ。」言ふところへ門口で人力車が止まツた。と思ふ間門の戸をどんどんどん。

「おい阿定、己だ、明けて」と云ふ聲は太右衛門で。

「あらまツ、おとツさんかえ」と阿定またびツくりした。

「分からねエかツ」と最うぢれる。

扨もと一同目を見合せた。阿定すぐ起ツて戸を開ける、待ちかねて太右衛門あわてふためいて飛び込むはずみに、こツつんと几頭を潜りで打ツたが、痛いとも云はない。

「もし旦那、どうか駄賃を」と後ろから車夫に聲かけ

られて、

目を圓くして、「おやッ、まだか。」

「へい、まだ」と車夫はにやにやする。

「ほい、しまッた。出して手にやこのとほり、わすれた、握ッてたッけ。」

「いやだよ又」と阿定その錢を取り次いでわたす間に太右衞門つかつかと座敷きに通ッた。

一目阿今を見るよりも平張るといふ樣にどッかり坐ッて、睨みつけて無言の儘たちまちに涙ぐむ。

そこへ阿定も立ちもどッた。

「どうしたのまア、追ッかけて來て、御前この、あの、市助さんに御挨拶も爲ないでまア。」

阿定に注意を加へられて、やうやくに心付く。

「そッ、そッだッけ。いや是は御前さんさきほどは。」

「さきほどは」と市助も答禮して、「夜ふけにまア御老躰で、どうなさいましたので」これも心配さうに聞く。

阿今うつむいたぎりぐッとも言はぬ。

阿定煙管に煙草を詰めたなりで、火を點けやうともせず、持ッた儘。

太右衞門何とも言へぬ顏色。眉間を蹙め、眉つりあげ、顏はさながら火の如く、いつものとほり涙もろく、急き上げ急き上げ、さめざめと泣く。

いよいよ一同氣が揉めて

「もう何も御前、市助さんの御はなしも聞いたらうにね、でもそれとも何うかしたの何か。」

かぶりをふッて、「駄目だもウ。」ややしばらくは齒を嚙んだ。

「今日が己の死ぬ日だよ。」

「なン、なッぜさ。」

「なぜところか。どうしたら斯うも物が齟齬に行くのかな。仕方がねエ、これだけの運なンだ。」

「だから何うしたてへンだよ。一人でばかり承知してたッて、根ッからちッとも分かりやしない。氣にならアね、御はなしな、つまんでも」と阿定までが急き込め

ば、

「ほんとに何ですか、どうか伺ひませんではね」と市助も心配顏。

「どうッて斯うッて、嗚呼この己も何ともはや。だッて御前、御前さん、旦那が今遣ッて來たンだ。」

「旦那がッ」と阿定鸚鵡がへしにした。さすがの阿今も此時だけはきッと面をあげて見た。

「旦那がッ」と阿定二聲ばかりつづけて「あの御前ンところへかい。」

「知れた事たな。どこへ、外へ來るけッ。わからずやッ。」

「御株だ又、一人で承知しておこッてらッ。來てどうしたの。」

「分からねエな、あン畜生も。」

「誰がさ。」

「旦那がよ。」

おやと一同また呆れた。風雨交代意外の口上、ただ譯が分からない。

「遣ッて來てな、斯ういふンだ。さッきは如彼も言ッたが、阿今を戻すのはすこし子細が有るからあらためて斷わるッて。」

「おやおやおやおや。」

「本當におやおやだ。御前だッておやおやだろ。己だッておやおやだ。ねエ、市助さん、御前さんだッておやおやでしよ。」

「なぜですね。」

「それが斯うなンで。何とか云ふその待ち合ひ、その今夜御前さんと阿今と話しをしたとこの。」

「なるほど菊本。」

「それそれ、その菊本、そこの家の前とかを今夜旦那が通ッたンだッて。」

一同耳をかたむけた。

阿定へ向かッての方がぞんざいな言葉でも管はないので喇し可いので、

「通ッてな阿定、その御前、その市助さんとよ、阿今とがな、つれだッて歩いてるのを見かけたとよ。」

「そりやさうだね、聞いたね、あたしも其とほり、此方からも今ちやんからも。それがどうだてへの。」

「だから分からねエぢやねエかおい。かういふンだ。時も時、今夜も今夜、遂ン出された其晩に、あの眞似たアおどろいた、御前が、てへのは己の事たよ、可いか、御前が異見するてへからさうかと思ッてた、よもや如此とは思やしねエ、それだのにあの様たアあンまり呆れて物が言へねエ。御前が異見するてへのも夫だから虚言にちげへねエッて。」

「と言ふの、旦那が」と阿定さらにたしかめた。

「だッからよウ。」

「ほんとだねエ。だが、しかしそりや是是だと有り躰に御前言へば可いよ。」

聲ふとくして、「言ッたァな。」

「市助さんの骨をりや何か一切をもかい、のこらずくはしく。」

「言つたァな。」

「でどうだてへの。」

「わからねエンだ。」

「どうだからッてへの。」

「ちッ、めんどくせエな」とむしやくしやする。

「察しねエ大抵。」

「わからないやね、それだけぢや。」

「ちよッ、わからずやぞろひだなァ。むしやくしやして己だつて言ふのもめんどくせエや。」

「そ言つてる内に御言ひな。言はなきや猶分かりやしない。」

「めんどくせエな。何しろ旦那の分からずやが聞かねエンだ。今までさんざん他の持ちものを玩弄にして居やがッた馬の足がなんで今さら然つめらしい異見を阿今に爲て、本心に立ちけへらせるてふ法が有るもンかッて。」

市助すこしむッとしたが、默して居る。

「そりやひどひや」と阿定が。「この方を見ないからそんな無茶をも言ふンだよ。」

「そ、そだともよ」と太右衛門力を入れて、何となく勇氣付く。「言ひてエ事ばかり言ふ、あんなに分からねエたア思はなかツた。錢金ばかりが惜しくつて言ふンぢやねエ、可哀さうにこんな、若エにめづらしい物の道理のよオく分かツた人をつかめへてよ、ただ馬の足だから何うだとか、猫の尻尾だからどうだとか、好きな熱吹くのは、そりや己や旦那だろが何だろが、大まちがひだと思ふンだな。」

「さうともさ。そりや先方がわからないてへもンだ。」

「そだらうえツ。それに第一が罪ぢやねエか、この上の罪は有りやしねエ、善人を惡人とするなンて。そりや人間、神さまでも無しさ、うたぐツたり分らなかツたりする時は又その時さ、さうぢやねエかおい、分かる時には奇麗さツぱり分からなくツて何うなるもンか。そりよ御前、わからずやめツ、何てツても分からねエ。」

吾をわすれて拳を握りかためて居る。市助實に心うれしい。それながら應待役は阿定に讓ツてすべてまづ默ツて居る。

「これまでの咄しむきぢや隨分分かるところは分かる人らしかツたがね、それとも何か譯が有るのか知ら。」

「で無エンだな。」

「ただうたぐるのかね。」

「だから只わからねエンだな。言はゞこの市助さんは生命の親だ、己たちの身に取ツて、な、そツだろ。」

「ましてよく異見までして、手まで切れやうとさへねエ。」

「そ、そこだツ」と、手をひろげて、「其處ンとこだ。可い事は可い、わるい事は歹いだ。前のわるかツた事を後悔して、それだけの恩を被けてくれたからにや、又其の恩わすれるのは人で無しだ。可愛さうに、そりよ何ぼ何だからツて、見さけえへも無く、わるくばかり言れちや、旦那だろが何だろが、己だまツちや居られねエンだ。」

この江戸ッ兒氣には市助もそゞろに感涙もよほした。

「ね、そッでしよ、市助さん。」

「どうも恐れ入りました。」

「わたしや御前さんに御べッか遣ッて言ふぢやねエ。な、阿定。」

「そりや物の道理だからね。」

「だろ、えッ。だからよ、分からずやが何てッても分からず、此人をもわるく云へば、阿今をもことわると云ふ、頑固一方強情一途に押ッとほして見ると、己だッて業が沸えらア。恩は恩、道理は道理だ。べらぼうめ、人を見そくなかッたか、目くされめ。貧乏してたッて腹ン中ア奇麗さッぱりしたもンだ。石は石、金は金で、何でも正直にやッてるのを分からねエかいッ、唐變木。」

「ま、そ言ッたのッ」とあわて込む。

「何、そんなにも言やしねエ。」

「すこしは言ッたの。」

「すこしは言ッた。」

「まッ、どうもね。何てッて。」

「だッて口惜、いめエましいぢやねエかあンまり。しめへには己だッて面倒くさくなッちやッたな。だから斯言ッてやッたンだ。そりや旦那、何ぼ何でもあんまりだ、己がこれまでに言ふ、己の生一本なのを知らねエのかッて。」

「すると。」

「かう吐かしやがる。正直だらうさッ、と乙力にせせらわらッて、そのかはり騙される性質だろとよ。つまり騙されて、さう思ッてるのか、でなけりや嘘言吐いてるンだてへ口ぶりなンだ。だものを、己だッてむッともするぢやねエか。」

「そのうへ又何か言ッたの。」

「言ッた。腹が立ッてたまらねエンだものを。」

「何てッて。」

「で、わからねエなら何うでもしろえ、御前さんあんまり分からずやてへもンだ、己だッて恩は知ッてる、何

で譃言を吐くもンか、そりよ何うでもうたぐるツてへのなら勝手にいくらでもうたぐるが可いやツ。と言ツて、取ツて置きを出した、つひ。」

「取ツて置きとはえ。」

「腹ン中の取ツて置きよ、藏ツて置いた文句をよ。」

「へェ何てへ……」

「唐變木の檑子木めツ。」

「あらツ」と半ば噴き出しかけて、「そ言ツたの、露出しに？」

「言ツた。」

「まア何うも。」

「言ふ氣も無かツたが、つひだツた。すると怒ツたな。」

「そりやさうさ又あんまりだもの。」

「だツて先方もあんまりだな。」

「だけれどもさ。怒ツてどうして。」

「眞紅ンなツてな。己もしまツたと思ツたが、口へ手やツたツてもういけねエ。でなくても猿公見たよな御面だろ、眞紅ンなツたからそツくりだ。」

「いやだよ人ツ。」

「ふるへ出してな。」

「あゝ。」

「おツそろしい眼をしてな。」

「あゝ。」

「何、唐變木の檑子木めと言ツたなてへンだ。もう己だツて仕方がねエや。言ツたがどうした、唐變木だから唐變木だてへンだいツと遣つたンだ。」

「大變だねエ、まアどうも。それから。」

「恩知らずの老爺めと言やがるから、ンでいツ恩知りの太右衛門さまだいツと遣ツたンだ。」

「こまるねエ、短氣にも。」

「短氣だツて狐だツて、だツて御前、それだツても。」

「もうかまアねエぞ」と言やがツた。

「かまアなくツても可いやツと。」

首をすぼめて小聲になツて、「うツかりと言ツちやツ

た。又口を押せへたツてもういけねエ。」

「ぷすツ、いやだよまア。」

「冗談ぢやねエ。」

「あれツ、人の言ふ事を言ツてるよ。ほんとにさ、冗談ぢやない。」

「ンでツ、眞似するないツ」と彈ばなし。

「すぐと御前、ぷんぷんとしてな、歸ツて行くンだ。傍に人でも居りや知らねエ事、己にや何うも止められねエや。餓鬼だし、寢てやがるだろ、波奈(下女)だツて止めに出ても來ねエ。その內に歸ツちやツた。」

一座ただ呆れはてた。

「己もうツかり口が辷ツちやツたンだ。だが、どうする事も爲らねエや。だからよ、もう、己と彼奴との緣もな、とうとう是で切れたンだ。」

言つて愁然として下を向く。市助腹では氣の毒である。また忝くもある。が、どうも策が無い。

「何しろ飛んでも無い事がまた一つ生きましたなア。やツぱり今度もあたくしが根なンでしてねエ、どうも困ツちまひましたなツ、どうしましよね」と市助策を阿定に問ふ。

「どうもね。やツぱり謝るンでしよね。御わびの鈴生り珠數つなぎだ。」

「あやまるツて」と太右衛門生きかへツたやうに言ふ。

「そぢやないか。」

「だれに。」

「きまツてらアね、旦那に。」

「己がか。おら否だ」と屹となる。

阿定舌うちしてだまツて了ツた。

社にかまへて市助腕を組む。阿今そろそろ辷り出した。

「おとツさん、分かつたろ、さう分かつた人でもあるまい。隨分の分からずやだと、いくら分からなかツた御前にだツて今夜はよく分かツたろ。」

阿今大得意で、分かツた分からないの勢ぞろへを始めた。

日をぱちくり。「分からねェ分からずやだと分かッたて。」

「わかッたろ。あたしが、だから隨分不斷つらいだろとも分かッたろ。分からずやに分からない事言はれるンだもの。」

「待ちねェ、分からなく爲つて來た。何がどう分かッて分からねエッて。」

「いえさ、あの分からずやン處に居るあたしも隨分相手があれだから、つらいだろと分かッたろてへ事さ。」

「ウム、わかッたよ」としほしほとなる。

「もう破れかぶれぢやないか、伯母さん。肝心の御とッさんの方から打ちこはしちまッたンだもの。」

「そりや御前、あやまり次第で。」

「いやだァね」と言ひ放ッた。

「ですが、そりやどうもね」と市助やッと口を開いた。

「あたくしは此伯母さんと同じ思慮でムいますね。」

「あやまれてへンですかいッ」と太右衛門冴へかへッた。

「いえ是非あやまれと御すすめ申すンでもムいませんがね。」腫れ物にさはるやう用心して口を利く。

「その方がをだやかかと思ひますね。」

「否、わたしは眞平だ。それよりは最う仕方が無エ、道道も私かんげへて來たンでさ、あらためて、その御前さん、市助さん、相談してェ事が有るンで。」

「何ですか、そりやもう及ばずながらも。」

「言ッちまを、みンなも其所でよッく聞いて居ねエ。」

「外でもねエ、わたしや此のとほりの氣性だから、思ふ存分ぶちまけて了へやすがね、何ともう此とてものやぶれ序に此阿今とね。」

言ッて阿今をぢろりと見ると、阿今これ亦意外に撲たれて、熱心に此方を見る。

「ね、どうか、その、ね」とさすがにはッきり言ひかねた。妙な顏して妙に笑ふ、はにかむといふ躰で。

「御むすめ御と何ういたすンでムいますね」と市助す

こしく待ちかねた。

「どうてへ事も無エンだけれど」と又きまりわるさうに微笑して、「あツ、だが肝心の當人から聞いて見ねエちや。それだ、ほんとにその事た。」一人でただ承知する。

「阿今、もう御前に小言も言はねエやさ。ところで一つ御前の腹ア聞いて見るンだけれど、どうだ御前、もうとツても分からずやの方へは歸らねエ氣だろな、えツ。で、結構だと思ふンだ。」

呆れるほどに打ツて變はツた。阿今つひぞ無い笑ひ顏。

「だともさ。」いきほひ好く返答して、同時に阿定と市助とを一目ぢろりと見比べた。

「で好いンだ、大よしだ。ところで御前、どういふ氣だ。」

「何がさ。」

「的よ」と顋で市助を指す。

覺束ない暗號なので、わからない。

「的ツて何。」

「とんちきだな、ぢれツてエ。」

「だツて分からないもの。」

「分からねエとえ。わからずやツ。」

「ふツ、きや(否)だよ。また唐變木の椙子木は御免かうむるよ。」

「生言ふないツ。取ツて置きだ、いくつも言ふもンかツ。」

ははツと市助笑ひ出したが、太右衞門にこりともせぬくらゐ、それだけに熱心きはまる。

「分からねエか、まだ。」

「だツてもさ。」

「ちよツ餓鬼だなア。仕方が無エ、言はう。うふツ、言ひにくいて、是でもな。」と額をつるつる撫でまはして、「的てへのは大將だな。」言ツて市助を指した。

まだ誰もわからない。

「それが何うなの。」

「し、仕樣が無エなツ。もう此上は大、大將ンとこへ

行く氣だろッてへンだい。」

言ふ内に汗が生際、兀げて居るので境界は分からぬが、まづ其邊へ滲み出した。

意外とも、意外とも、阿今の方がまごついた。阿定だまッて呆れて居る。

「おとッさん、まアそれが可いと思ふのかい。」千兩と言ふ笑ひ顏。

「ま、御前はよッ、うッす、でも夫でも言ひ難ッ、はづかしいかッ。」

「何さ、いやだよ。だが、御前の了簡はさア。」

「だが、やぶれかぶれぢやねエかッ。」

「そりや大きにさうだとも。」

「おや、やッぱり、ふすッ、己の眼はちがはねエな、やッぱり共、この、大將ンとこへ行きてエンだ。ウム、それも無理は無エ。べらぼうめエ、意地だ。己もう邪魔アしねエから、さうならさうとはッきり言ひねエ。己すぐ大將へ啣しを爲て見ら。すりや己も生きけへる。死、死ぬにも及ばねエ。」

何で阿今がかぶりを掉らうか。さすが耻かしさうに微笑して、「あたしやもう。」

「ふム、もう。」

「もう。」

「何だな、キッ。もう、何だ。」

「もうね、親方さへね。」

「ふム。」

「可いてッたらね、どうせもう。」

「可いンだなッ。」

別人ほどに景氣が好い。

「うッふ、親方、あのね、どう。」われと自身吹き出した。「いや、どうだのもうだのッて、牛馬の比べッこぢやあるめエしッ、まづね、親方。」

「へい。」

「分かンなすッたろ、今の事、二度言はねエでも。」

「わかりました。」

「メ、メめた。阿今、可いとよ。」

「あッ、もしあなた」と遮ッた。

「何……何。」不審顏。

「わかッたかと仰やるので、只わかッたと言ひましたので。」

「で可いぢやねエか。」

「御はなしを聞いて、其の筋は分かッたと言ッただけでムいます。」

「は、はツてね。」

「承知したとは申しません。」

きッと云はれて、びくりとした。

「ぢや早く承知したと言や可いのに。」

「いえ、それは何うもちと。」

「何だッて」と思はず聲が甲走る。

「一寸あたくしも卽答は。」

「そくたふッて。」

「卽坐の御返辭でムいます。」

「だからよ、爲たツて譯も無エ。」

「でムいませんのでして。」

「あの、いけねエッてッ。」意外にびツくり、眼を据ゑた。

「さッ、何だか申しにくうムいますが、すこウし思はくがムいますので、どうも。」

「いやだてへのッ、えッ、いけねエッてへのッ。」

あわてれば落ち付いて、「いやと申すのぢやムいません。が、どうも一寸その、これぱッかりは應それと。」

「へへへへエ、」と暫時茫然吹きながして「こりやどうも呆きれッたッ。」

阿定さもこそといふ顏つき。阿今ほとんど呼吸も吐けぬ。

第七

「なッ、なぜ可けねエのかね」と言ふ眼はよほど稜立ッた。

「こりや私や分からねエ。もともと御前さん否で阿今(おいま)とあんな中になツたンぢやあるめエ。ね、さうだろ。さらさら否ぢやねエンだが、旦那ンとこへ歸へしてエとの義理だてからまづ手を切らうと言ツたンだろ。」

「そりや、さうでムいますとも。」

「ところが今云ふとほりの咄しで旦那の分からずやとは破談になる、もう御前誰も義理だてもねエぢやねエか。それだのに、可けねエツて言ふ、私にやちツとも解せねエな。」

「そりや御前、この方にだツて思はくツてへものが」と阿定(おさだ)がすこし口を出すと、

「だまツてろいツ、うツとしい」と一呼吸に遣りつけた。

「己から見ると斯う思はれるね。やツぱり御前さん口のさきばツかりで、腹ン中は阿今を否なンだ。なに、さうさ、さうだとも。さうで無エ事があるもンか。で無エのなら誰だツて、天下晴れてだ、二つ返辭と來るとこぢやねエか。」

すこしく前へ乘り出した。

「さツ、否なら否で可いや、否だと言ひねエはツきりと。ぐづぐづは眞平だ。また否だらうわさ、のツぺりした御平の長芋か、すり剝けた瓢箪見たよな奴と野合(くつつい)たり何かしやがツて親にせへ恥を掻かせる間ぬけ阿魔だもの、どうせ御前のやうな、歷然(れつき)とした御役者さまの氣にや入るめエさ。へン役者もねエもンだツ、河原乞食の、男地獄の、白瓜めエ。」大氣焔また燃えあがる。

「惡口は御よしなね、おとツさん。」

阿今(おいま)が聞きかねて宥めると、食ひつきさうな顏して睨んで、

「のろけるないツ、二本棒。親の身ンなりやな、これ腹が立たいやいツ。」

「ね、おい、御役者さま、何とかはツきり言ひねエな。だんまりの幕ぢや無エからね。別(わ)かツたとも、別(わ)かツたとも、すツかり別(わ)かツたい。御かげさまで此年よりも路

頭に迷ひまさいッ。とッても最う、どうせもう無ェ生命だ、行き掛けの駄賃だ、さッ御役者さま、否と一言言ひ切りねエ。」

形勢まッたく凄くなる。ぢりぢりと太右衛門つめ寄せたが、市助一向動じない。

「しかた有りませんな」と唯一言。

「何が仕方無エンだい。」

「どうも仕方有りません。言ッちまひます。」

「うム、言ひねエ」ぐッと拳をにぎりかためた。

「あたくしが御娘御と此處で仰やるとほり一處ンなれば、殘念にもその旦那の言ッた事が中る事になりますがね。」力を入れて刻んで言ふ。

「どう中るッてッ。」ちと氣が拔けた。

「それ見た事か、戻さなくッて可かッた。

親父も親父だ、正直を看板に懸けて人を一杯食はせやうと思ッたンだ、その術に己が掛からなかッたので仕方なく奴等とうとう化けを出して了ッたと、さア、かう取られたら如何です。」

太右衛門ぐッと行きつまッた。

たたみかけて、市助「あたくしも實に殘念です、こんな家業してますから、さう思はれるのも致し方ムいませんけれども、言ひ草にも困りますて、馬の足が何でそれまで玩弄にしといて意見なぞ爲るもンかと旦那が貴郎さまに仰やッた御口上、その言ひ分を立てませんでは私も家業にさはります。」

太右衛門しよげて、しよげ返ッた。言はれて見れば一句も無い。またまた涙さしぐませた。

「そりや、其所ンとこも成るほどな。」言ッた切りで默り切る。

「いかがです、さうぢやムいませんか知ら。これや私だッてもともと是までの關係に御むすめ御さんと爲りましたくらゐですもの、實ンところ御ゆるしの出た上は夫こそ二つ返辭で有りがたいと言ひたいのは山山でございます。が、くるしいものは浮き世の義理、いやしい家業

こそしてますが、その浮き世の義理一つで、さ、どうぞ其所ンところを惡しからず御承知願ひます。決して、決して御むすめ御を否だの何のといふ、そんな水臭い了簡ぢや、そりやムいませんからね。」

阿定ほとほと感に堪へて、ひとしく共に涙ぐむ。

「どうもまア、眞個に筋道の立ッた御はなし、あッ實に感心しましたよ。御もッとも、御もッとも、實に仰やる事は一一もう御道理でムいます。あなただッて是から花の咲かうてへ身躰、ね、さうでさね。」と言ひかけて歎息した。

「ああ浮き世の義理かなア。ほんとにさ、こんな分かッた方、あたりまへならば頼んでも願ッても今ちやんと一所ンなッていただいて、大安心も爲たいのに。」

心もちは太右衛門亦變はらぬ。しほしほとして、「阿定、御前もさう思ふか。」

「思ふとも、ほんとにさ。」

「己だッてさう思はア。」堪へかねて眼を擦る。

「さう仰やられますと、また一入御氣の毒でたまりません。ただ何うぞあしからず、御つきあひだけは爲せていただきますやう。」

「さうですともさ」と阿定が返す。

太右衛門しくしく泣いて居た。

「おら、どうしよの、阿定。」

「何をどうさ。」

「旦那とも緣が切れ、此人にもことわられ、言はれて見りや夫も至當だし、分からねェ事は言へず、と云ッて何處へかぶり付く所も爲し、ど、どうしたら可からうな。」

しをれて如何にも哀れである。見るにもそぞろいぢらしい。

「だからさ、過刻も言ッたとほり旦那も一旦さう爲ッたッて、また謝辭の入れ次第で、其所ンところは何うにでも。」

つと遮ッて、きッとして、「そりや否だ。」

「あれ、ま、强情を、まだかえやッぱり。」

「それだけは死んでもだ。」

「どうもまアね、言ひ出すと是だから。それほどしッかり威張るなら何も泣くにや當たらない。」

「だッてもよ。ふるふる否ンなッたンだ。」

「誰がさ。」

「ちえッ、否ンなッたンだ。」

「だから何がさ。」

「世の中がよ。」

ぎろり見上げる眼の色は怪しく凄く變はッて來た。

「氣味のわるい目を御しでないよ」と氣味わるさうに阿定が言へば、

更に白眼を露出して、「ぢや斯うかッ」と睨めつけた。

阿定いくらかぞッとした。

「何の眞似するンだね、本當にさ、冗談じやない、馬鹿馬鹿しい。」

「馬鹿馬鹿しい奴が有るもンか、聞いて見な市助さんに、睨みは此人の商賣がらだッ。」その調子どうも普通でない。

阿定しばらく見つめて居て、更に阿今と顏見あはせた。

「今ちやん、何だか變だねエ。」

「さうさね、よッぽどね。」

「またいつかの病氣が始まッたンぢやないか知ら。」心配さうに首を曲げれば、眉根を寄せて、「さうかねエ。」

太右衛門その實發狂の質が有ッて、嘗て大きに發作して病院にまでも入れられた。その時の事を思ひ出すと、もしや又それでは無いかと身の毛が起つ。

太右衛門げらげら笑ひ出した。

「阿定、なアんの、心配するなよッ、どうぞ活物には定まる餌ありだ、何苦勞する事が有るもンか。神さまが憑いてら、な、神さまが。それぞれ御前の後ろにやな、照り燒きの神さまが憑いてら。好い芬香だぜ、あはははははは。」

にがり切りながらも涙ぐんで、「ほんとにしッかり御爲よ、どうしたンだねエ。のぼせちや行けないッてば。」ロ

の中で、「又はじまッたのか知ら、まア、ねエ。」
阿今もさすが涙ぐむ。
「伯母さん、どうだろね。」
「どうも、よッぽどね。いつでもだよ、しやアしやアしてるかと思ふと急に發作るンだもの。」
「をかしいのね、よッぽど。」
破裂したやうな大聲で、「宇治は茶どころ」とだしぬけに唄ひ出されて、又一同が仰天した。
「あれさ、まア、しづかに御爲なね」と阿定むしろ叱りつけた。「夜ふけだのに、まア、近所へ對してもさ。」
「いけねエのかッ」と眞面目になる。
「御ふざけでないよ、まア、ほんとによッく御前、心を取りしづめなけりや可けないよ、えッ。一概に苦勞して、身躰にさはらせたからッて詰まらないからね。可いかえ、あンまりのぼせるとね、身躰にさはるからね。」
まじまじとして、「身躰にさはる?だ、だれの。」
阿定たまらず又涙。
「御前のちやないかねエ。」
「己のか。」
「あいよ。」
「己の、此所、此所、此處かな。」言ッて頭や胴を撫でた。
舌うちをして、「ちッ、とうとう眞物だ。こまッちまふぢやないかねエ」と阿定は大方泣き聲である。
「己のなら管やしねエや」とすぐに又泣き出した。「己のなら何の糞ッ。ただ阿今のでせへ無へのなら。」
「ええもッ」と阿定袖を顏。
一座愁然として了ッた。
「何を泣くンだ、べらぼうな。よッ阿定、なッ阿定、泣くなンて、ば、ばッかなッ。をいをいと笑へやいッ。ね、市助さん、物の道理がさうでごしよ。でなけりや政府に御苦勞も絕へずさ、ねエ、分からずやも烟草の荷ィおくッてくれるンだ、うッははは。」
一同ほとんど返辭も出來ない。ただ顏を見あはせて居

る。

「うッす、唖の寄り合へだな。みんな默りこくッてよ。阿定(おさだ)、おいこれ阿定(おさだ)。」

「何だねエ。」

「御客さまが御出でだのに、手前も何と氣が利かねエな。」

「なぜさ。」

「えへッ、とぼけてらア。そんな根性ぢや出、出世できねエぞ。酒、御酒、御神酒(おみき)てへものを出さねエかい。」

「無いよ」と素氣なく云ふ。

「なに無エ？　きッと無エか」と眼を据ゑた。

「無いよ。その上、また夜更けだね、酒屋起さす事もできないやね。」

「何、できねエ事が有るもンか。叩き起こしや起きらア。それでも起きなかッたら火事だッて言へ。」

「そんな馬鹿な事が、どうして御前。」

「手前できねエ、なら己が行く」と起ちかける。

「まッ、御待ちよ、ほんとに。」

涙一杯の眼でつくづくと見て、「ね、どうか氣を御しづめよ。ね、御前のぼせてるンだからね、氣をしづめないと、それこそ又氣ちがひに爲るよ。わるい事は言はないから、もう寢る事に御爲。御酒は又あしたの朝、ね、あしたの朝、ね、さう御爲よ。」

あはれや他愛もなくとツくりと聞く。その姿のいぢらしさ、他人の市助すら正面(まとも)からは見て居られぬ。いはんや阿定(おさだ)、又さすがに阿今(おいま)身を斫られるほどつらい。

今といふ今の刹那、阿今(おいま)實情の涙である。口さきでは手あらくも云ふ、何にしても肉身を分けた父の事、まこと、まこと悲しくなッた。

今にして市助に云はれた事、不孝して親が萬一(もしも)の事でも有ッたなら其時はどれほど寢覺めがわるいかとの一言、その一言が肝にこたへて、しかも其市助が目の前に居る事とて、何も今は云はぬその人が猶わが身を無言で

睨むが如く、五躰冷熱の感が上下した。
太右衛門萎れ、萎れかへッて、「ぢや明日の朝きッとかい。」まるで小兒見た樣にあどけない言ふ。
「ああ明日の朝きッとだよ。きッとだからね、今夜は機嫌よく御寐よ。」
「うん」とうなづいたが、又何かすこし考へた。「ちイッとで可いから飮みてエンだがなア。飮、飮めねエのかなア」と泣き出した。
「こまるよウ、それぢや御とッさん」と阿今たまらず押し宥めると、
つくづくわが子の顔を見つめて居たが、「これ、阿今、なんで泣く。御前が泣、泣くとな、己もな、なさ、け、なく爲るぞ、やいッ」と埓もなく又をいをい。
「わるかッたよ、あッ、あたしが」と始めて懺悔の阿今の聲は大方うるみ切ッてしまッた。「よう、氣を御しづめよ、しッかりとして御出でよ。よウ御しづめよウ。」
「しづめるよ」と泣く。
「それぢや靜まらないからさ。」
「ぢやア御前しづめてくれよッ。」
ちッと言ッたまま阿今その場へ泣きたふれると、太右衛門びツくり摺り寄ッて、嗚呼見るさへ涙の種、阿今の脊中を撫で擦る。
「これ、おい、どうしたよッ。腹でも、あの痛エのか。」
阿定隅を向ひて只咽ぶ。市助は唯冷汗。
「腹が痛けれや萬金丹、可いかはやく治せよウ。うッ、うッ、御前がな、御前がな、わづらッてでも死んだ日にや、己氣ちげへになるぜ、おい。」
慘の極、酷のかぎり、氣ちげへになるとの一言を嗚呼誰が涙無くて聞く。
阿今九死萬死の悲歎、總毛起つ、ふるへあがる、果は聲を放ッて泣く、その背中をどしんと撲つのはおなじく兩眼泣き腫らした共なみだと伯母阿定で。
「御前からして何だねエ」と自分からしてやッぱり同じく。

「おいよ、おいよ、分かッたよ」と太右衛門見當ちがひをする。

それで皆また泣かされる。

いつか阿今のやはらかい手が親父の兩手を緊めつけて居た。

無殘や太右衛門ぞくぞくして、「うひッ、この手が己の娘の手で、この手が己てへ親の手で、えへッ、おもしれエな」とにこり笑ふ。

「おとッさんや、おとッさん。」

「ほ、ほ、何だいえッ。」

「いけないよウ、のぼせちや。」

「さうかなア、不思議だな。」

「あれさ、まア。大變になつたわねエ。あのね、おとッさん。」

「おい。」

「あたしの歹かッたのは勘忍御爲よ。」

「うん。」

「これからはね、あたしもね、可いかえ、よツく御聞きよ。」

「ふム。」

「一生懸命ンなッてね。」

「ほい。」

「それで……」

「待ちねエちよいと。何と何うだ素敵だろッ。」

「何がさ。」

「己の返辭がよッ。どうだ、はじめがおいだろ、その次がうんで、それからがふム、また其つぎが、ええと、ほいと來て、取ッ替へ引ッ替へ、素敵だろ。天子將軍さまが來たッて差しつかへる事ちやねエ、よく覺えときねエ、三味線にだッて無エからな。」

泣きながら素直に受けて「あいよ、分かッたよ。だがね、それだからね。」

「おッと來た、今度ア何を出さう。」

「ま、可いからよく御聞きよ。あたしもすッかり心を

入れ替へたからね。」
「へエ何と入れ替へたンだ。」
「ちよッ、いけないねエ。御前にねエ、もう此上は苦勞させないやうに爲るから、どうかね、くよくよ思はないでね。」
「ええ、子でなくッちや可けねエなア」と又泣かれて又も泣く。

此日晝飯時から其夜十二時頃に至るまで凡そ十二時間の波浪の翻轉、叙述すれば右のとほりであッた。
阿今今心から悔悟した。そもそも或ひは遲いか知れぬ。市助持論を執ッて動かぬ。無情か知らん、有情か知らん。
あくる日から病氣ますます募り行くので、是非なく瘋癲院へ送られる事になッた、その送られる道道は太右衛門得意の端唄をうたひつづけたとの事で。
阿定何さまへかの日參、阿今目を瞑つて舊の令三の方へ詫を入れ、市助舞臺で車輪になッて十日毎にはかならず太右衛門の見舞ひをした。
數人の一心終に通じて、およそ半年ほど經ッて、さしもの病氣も愛でたく治ッて、またも氣樂な隱居に戻る、言ふまでもなく市助の家は親類の交際になッた。終

昭和十年十月二十日印刷　　美妙選集（全二卷）
昭和十年十月二十五日發行　（上卷）定價金五圓

限定版　發行部數　三百五十部

內第　　號

著作權者　嗣子　山田武彦

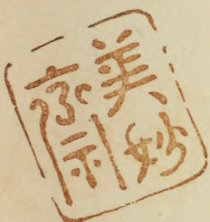
發行者　京都市上京區廣小路寺町東　立命館出版部　代表 竹上孝太郎

印刷者　京都市上京區廣小路寺町東　竹上孝太郎

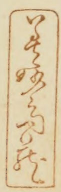
發行所　京都市上京區廣小路寺町東（振替大阪二六九四四番）
東京市京橋區銀座西二ノ一（振替東京七五三六二番）
立命館出版部

〔立命館出版部印刷〕



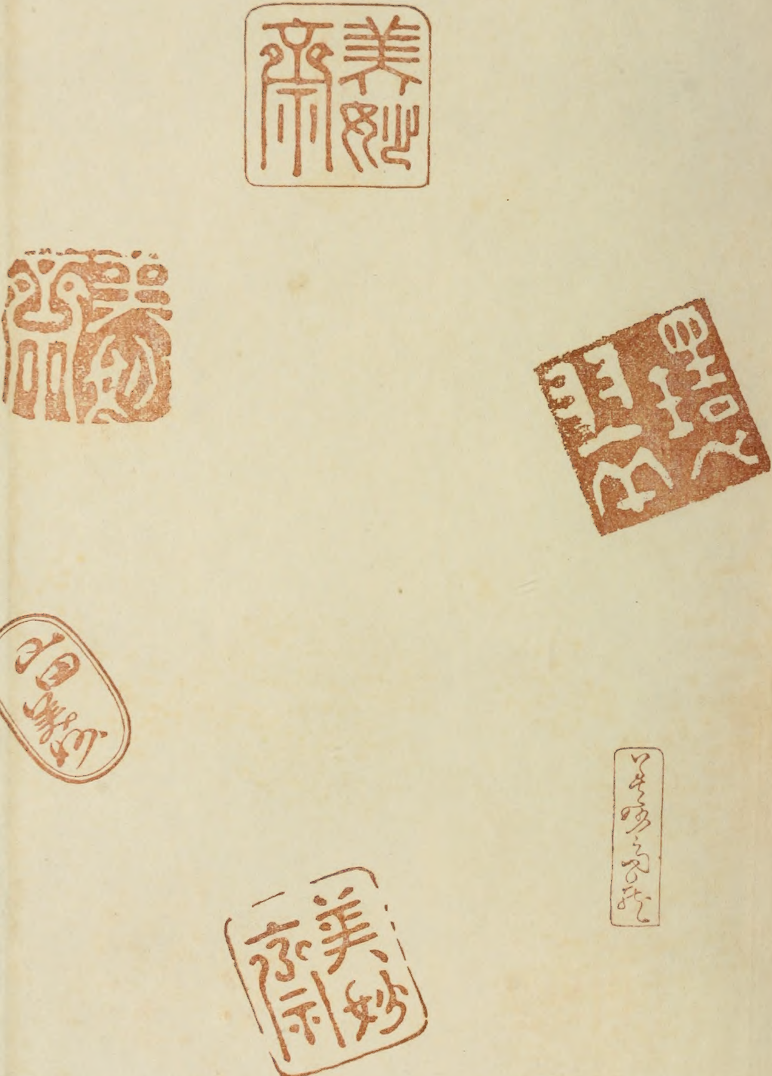











美妙斎
美妙斎